

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集

裾野市富沢・桃園の遺跡群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

裾野市-5

塚松遺跡（第二東名No.144地点）

入ノ洞B遺跡（第二東名No.144-2地点）

内野山V遺跡（第二東名No.144-3地点）

2008

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集

裾野市富沢・桃園の遺跡群

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

裾野市－5

塚松遺跡（第二東名No.144地点）

入ノ洞B遺跡（第二東名No.144-2地点）

内野山V遺跡（第二東名No.144-3地点）

2008

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所



塚松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡 全景



塚松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡 出土遺物

序

本書で報告する塚松遺跡、入ノ洞B遺跡、及び内野山V遺跡はいずれも静岡県東部の裾野市に所在し、愛鷹山東南麓に延びたなだらかな尾根上に位置している。それらは第二東名高速道路の建設事業に伴って調査が行われた遺跡であり、ここに各々の成果を報告させていただく運びとなった。

愛鷹山の南麓から東南麓一帯は旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く所在する地域として周知されているが、3遺跡もその例に遙わず、当時の人々の生活が垣間見られる遺構や遺物が少なからず見つかっている。

とりわけ塚松遺跡では、陥穴として造られたと考えられる26基もの旧石器時代の土坑群が検出された。旧石器時代の陥穴といえば三島市初音ヶ原遺跡のものがよく知られるが、塚松遺跡の土坑群は、これまでのところ同時期のものとしては静岡県内で最北の検出例となった。また、検出数においても特筆すべき規模となった。近年、愛鷹山麓では約2万7千年前の第Ⅲ黒色帯での土坑の検出例が続いており、同時期の箱根・愛鷹山麓一帯の様相を示す資料がまた一つ加わったといえよう。

入ノ洞B遺跡と内野山V遺跡は、ともに周囲を開拓された細尾根上にある。入ノ洞B遺跡では旧石器時代の局部磨製石斧や縄文時代早期の住居跡が見つかり、また内野山V遺跡では縄文時代早期の多様な種類の土器が出土した。特に、入ノ洞B遺跡は南北を深い谷に挟まれていることもあり、調査において作業員の方々には日々御不便や御苦労をおかけしたことと拝察する。

裾野市域における第二東名建設に伴う調査報告書は本書が5冊目となるが、既に報告された周辺遺跡のものと合わせて、後期旧石器時代から縄文時代にかけての当地域の資料が集まりつつある。今後の学術研究において、本書が一定の役割を果たしていただければ幸いである。

最後に、発掘調査及び報告書の作成にあたっては中日本高速道路株式会社をはじめ、静岡県教育委員会、裾野市教育委員会など関係諸機関各位に多大な御協力を賜った。心より御礼申し上げたい。また、調査に御理解をいただいた地元の皆様、猛暑や嚴寒の中も発掘作業に取り組んで下さった現地作業員の方々、及び綿密な資料整理を根気強く続けて下さった整理スタッフの方々に深く感謝する次第である。

平成20年9月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長 清水 哲

例　言

1. 本書は静岡県裾野市北野・桃園・富沢に所在する下記の各遺跡の発掘調査報告書である。

塚松遺跡（第二東名No144地点）：裾野市北野字富窪26-6他

入ノ洞B遺跡（第二東名No144-2地点）：裾野市桃園字入ノ洞32-10他

内野山V遺跡（第二東名No144-3地点）：裾野市富沢地先

なお、裾野地区（市）における埋蔵文化財発掘調査報告書は本書が5冊目の発行になるため、「第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 裾野市-5」とした。

2. 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として日本道路公団静岡建設局（現中日本高速道路株式会社東京支社）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、裾野市教育委員会の協力で（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。資料整理は同研究所長泉地区事務所で行った。

3. 各遺跡の調査と資料整理の期間、及び担当調査研究員は以下の通りである。なお、各年度の当研究所調査体制の詳細については第二東名No153地点棚返遺跡の発掘調査報告書を参照のこと。

塚松遺跡 確認調査その1：平成13年10月～平成13年11月 中村雅昭 前嶋秀張

確認調査その2：平成14年11月～平成15年3月 中村雅昭 前嶋秀張

本調査Ⅰ期： 平成15年4月～平成16年3月 永島宏一 高野穂多果 前嶋秀張

本調査Ⅱ期： 平成16年4月～平成17年3月 山下忠男 高野穂多果 野田正人

前嶋秀張

本調査Ⅲ期： 平成17年4月～平成17年8月 日吉高幸 高野穂多果 前嶋秀張

入ノ洞B遺跡 確認調査： 平成13年11月～平成13年12月 中村雅昭 前嶋秀張

本調査Ⅰ期： 平成14年1月～平成14年3月 中村雅昭 後藤正人 前嶋秀張

柴田 謙

本調査Ⅱ期： 平成14年4月～平成14年8月 中村雅昭 前嶋秀張

内野山V遺跡 本調査： 平成15年9月～平成16年3月 原田利志美 後藤正人

資料整理（塚松遺跡）： 平成18年4月～平成19年3月 山下忠男

資料整理・報告書編集： 平成19年4月～平成20年5月 薩科泰裕

4. 現地調査においては、掘削・測量業務を下記業者にそれぞれ委託して行った。

塚松遺跡 確認調査その1：掘削／渡辺建設株式会社

確認調査その2：掘削／渡辺工業株式会社 測量／株式会社シン技術コンサル

本調査Ⅰ期： 掘削／渡辺工業株式会社 測量／株式会社シン技術コンサル

本調査Ⅱ期： 掘削／渡辺工業株式会社 測量／株式会社シン技術コンサル

本調査Ⅲ期： 掘削／株式会社河西建設 測量／株式会社シン技術コンサル

入ノ洞B遺跡 確認調査その1：掘削／渡辺建設株式会社 測量／アジア航測株式会社

本調査Ⅰ期： 掘削／渡辺工業株式会社 測量／アジア航測株式会社

内野山V遺跡 本調査： 掘削／株式会社関建業 測量／株式会社バスコ

5. 本書に掲載したすべての土器と一部の石器の実測・トレースは、各年度の資料整理を担当した調査研究員の指導のもと当研究所職員が行ったが、作業の迅速化を図るために出土石器の一部について下記業者に実測・トレース及び観察表作成業務を委託した。

塚松遺跡：株式会社東京航測研究所（旧石器時代）、株式会社シン技術コンサル（縄文時代）

入ノ洞B遺跡：株式会社バスコ 内野山V遺跡：株式会社バスコ

6. 出土した黒曜石製石器の産地分析を平成18・19年度の2回に分けて、独立行政法人沼津工業高等専門学校教授 望月明彦氏に依頼して実施した。その分析結果は附編及び付属CDに収めた。
7. 入ノ洞B遺跡の堆積物のテフラ分析を、平成13年度に株式会社パレオ・ラボに委託して行った。また、内野山V遺跡における縄文時代土坑内出土の炭化物のC14年代測定及び種実同定を、平成19年度に株式会社加速器分析研究所に委託して行った。それらの分析結果は附編に収めた。
8. 石器の石材の分類及び礫の赤化の状態の判別は、当研究所技術員森嶋富士夫が行った。石材の分類にあたっては、(有)考古石材研究所の柴田徹氏と山本薰氏による石材標準資料を用いた。
9. 遺物写真は、平成19年度に当研究所本部で写真担当職員が撮影した。
10. 本書の執筆は当研究所調査研究員藁科泰裕、岡山下忠男、常勤嘱託員三好元樹、及び調査研究員の指導のもと技術員荻野正裕、技術作業員小林奈緒子、整理作業員佐藤里夏が分担して行った。具体的な分担は目次を参照のこと。なお、本書には現地調査を担当した当研究所技術員青島邦夫（当時）及び同技術員坂井端志郎（同）の所見に基づき執筆した箇所がある。
11. 調査と整理作業では下記の方々に御指導を賜った。厚く御礼申し上げる（五十音順・敬称略）。
池谷信之 加藤賢二 小崎 晋 渋谷昌彦 下島健弘 高尾好之 成田修一 望月明彦
12. 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
13. 発掘調査の資料はすべて静岡県教育委員会が保管している。

凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1. 報告する3遺跡の調査では、遺跡の中での位置を把握するため日本測地系（平面直角座標図系）の軸線を基準に方眼（10×10m）を用いて調査区全体にグリッドを設定した。方眼には、X軸方向（南から北へ）にはA、B、Cの順に、Y軸方向（西から東へ）には1、2、3の順に記号を付けてグリッドを表した。なお、各遺跡の(X, Y)=(A, 1)となる座標値は、第1章第1節-2に記載した。
2. 出土遺物には4桁の遺物番号を付け、石器=S、土器=P、礫=R、炭化物=Cの略号を付した。
3. 本文や観察表における土層や土器の色調に関する用語・記号は、新版「標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997年版）を用いた。
4. 石器の実測図の縮尺は、原則として剥片石器は4/5または1/2、礫石器は1/3とした。また、土器の実測図・拓本は原則として塚松遺跡では1/2、入ノ洞B遺跡と内野山V遺跡では1/3とした。遺物図面にはそれぞれスケールを付してある。なお、本文中のその他の押図の縮尺は各図に示した。
5. 石器実測は第三角投影図法に準拠し、計測値はmm、gを単位として、重さが0.01g～1,200gの石器は電子計りで、1,200g～2,000gのものは上皿計りで、2,000gを超えるものは体重計で計った。大きさは計測項目を次のように定義付けし、欠損部のある石器は残存部の値を括弧書きで記載した。

長さ：残存する部位の天地（綫）方向の最大長の値 幅：長さに直交する最大幅の値

厚さ：その遺物でもっとも厚い部分の計測値

6. 各遺跡の石器一覧表、旧石器時代の礫一覧表、黒曜石産地分析推定結果表等は付属CDに収めた。
7. 写真図版において各遺物に付記した数字は、遺物番号である。また、本文分布図の中で下記例のように記載した数字は、押図番号を表している。（例）26-21（第26図中の21の遺物）

なお、土器の分布図中における結合線は接合関係ではなく、同一個体であることを示している。

8. 本書では国土地理院発行の1:25,000地形図を複写、加工して用いている。
 9. 本文や挿図表における層名、黒曜石産地、石材等の略号は下記表の通りである。

造構・遺物

層 名					
AN	暗褐色土層	B B I	第I 黒色帯	S C III b 2	第IIIスコリア帯黒色帯 2
KU	栗色土層	N L a	ニセローム層	S C III s 3	第IIIスコリア帯スコリア 3
F B	富士墨土層	N L b	ニセローム層(AT多量)	S C III s 4	第IIIスコリア帯スコリア 4
Z N	漸移層	B B II	第II 黒色帯	S C III s 5	第IIIスコリア帯スコリア 5
Y L U	休場層上位	S C II	第IIスコリア層	B B IV	第IV 黒色帯
Y L M	休場層中位	B B III	第III 黒色帯	S C	スコリア層
Y L L	休場層下位	S C III s 1	第IIIスコリア帯スコリア 1	B B V	第V 黒色帯
B B O	休場層直下黑色帯	S C III b 1	第IIIスコリア帯黒色帯 1	B B VI	第VI 黒色帯
S C I	第Iスコリア層	S C III s 2	第IIIスコリア帯スコリア 2	B B VII	第VII 黒色帯
遺 物					
—	タタキ面	—	使用瓶		タタキの範囲
—	スリ面	—	スリの範囲	白抜き	発掘時の破損

注記(新版標準土色帖に準ずる)

含 有 量					
ごく少量含む	1~2%	少量含む	3~7%	含む	8~25%
粒	粒	粒	粒	粒	多量に含む
粒子	極小(径1mm以下)	粒	小、中(径2~5mm)	ブロック	大、極大(径5mm以上)

黒曜石産地

略記号	産地名	略記号	産地名	略記号	産地名
AGKT	天城柏崎群	T SHG	蓼科双子山群	WDTK	和田土屋橋北群
KZOB	神津島恩馳島群	H NHJ	箱根畠宿群	WDHY	和田芙蓉ライト群
SWHD	諏訪星ヶ台群	WDTY	和山鷹山群		
T STY	蓼科冷山群	WDTN	和田土屋橋西群		

石材

岩石名	岩石英名	略語	岩石名	岩石英名	略語
玄武岩	basalt	Ba	赤玉石	red jasper	RJa
多孔質玄武岩	vesicular basalt	VBa	軟玉	nephrite	Nep
ガラス質黒色安山岩	glassy black andesite	GAn	結晶片岩	crystalline schist	CSc
細粒安山岩	fine-grained andesite	FAn	緑色片岩	green schist	GS
輝石安山岩	pyroxene andesite	An(Py)	ホルンフェルス	hornfels	Hor
角閃石安山岩	hornbleed andesite	An(Ho)	ホルンフェルス	tuffaceous hornfels	Hor(Tu)
多孔質安山岩	vesicular andesite	VAn	(凝灰質)		
デイサイト	dacite	Da	凝灰岩(細粒)	fine grained tuff	FT
下呂石	gero stone	GRS	硬質細粒凝灰岩	hard fine-grained tuff	HFT
流紋岩	ryholite	Rhy	緑色凝灰岩	green tuff	GT
黒曜石	obsidian	Ob	頁岩	shale	Sh
アブライト	aplite	Ap	赤色頁岩	red shale	Sh(Re)
輝綠岩	diabase	Di	珪質頁岩	siliceous shale	SSh
ひん岩	porphyry	Po	硬質頁岩	hard shale	HS
閃綠岩	diorite	Di	粘板岩	slate	Si
ロディン岩	rodignite	Ro	珪質粘板岩	siliceous slate	SSI
カンラン岩	peridotite	Pc	砂岩	sandstone	SS
細粒斑レイ岩	fine-grained gabbro	fG	砂岩(細粒)	fine-grained sandstone	FSS
玉髓	chalcedony	Cha	砂岩(中粒)	medium-grained sandstone	MSS
水晶	rock crystal	RC	砂岩(粗粒)	coarse-grained sandstone	CSS
石英	quartz	Qt	片状矽岩	schistose sandstone	SSS
碧玉	jasper	Ja	チャート	chert	Ch
黄玉石	yellow jasper	YJa	チャート(赤色)	red chert	Ch(Re)

目 次

巻頭図版／序／例言／凡例

第1章 発掘調査と資料整理	(薦科) 1
第1節 調査の経緯と方法	1
1 調査の経緯	1
2 調査の方法	2
第2節 整理作業と報告書編集	3
第2章 遺跡の環境	(薦科) 5
第1節 地理的環境	5
1 3 遺跡の概観	5
2 各遺跡の位置と立地	5
3 爽鷹山麓の層序と堆積の特色	6
第2節 歴史的環境	7
1 旧石器時代	7
2 繩文時代	10
第3章 塚松遺跡	11
第1節 調査の概要	11
1 調査の経過	(薦科) 11
2 基本層序と土層の堆積状況	(荻野) 15
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	(三好・小林) 19
1 概要	19
2 第I文化層(BBⅢ～BBⅡ)の遺構と遺物	21
3 第II文化層(BBⅠ～BBⅠ)の遺構と遺物	75
4 第III文化層(YLL～YLU)の遺構と遺物	81
5 第IV文化層(YLU)の細石器類	127
6 第V文化層(YLU～繩文時代草創期)の尖頭器類	129
第3節 繩文時代の遺構と遺物	133
1 遺構と遺構内出土遺物	(山下・荻野) 133
2 遺構外出土の土器	(山下・小林) 175
3 遺構外出土の石器	(佐藤) 209
第4章 入ノ洞B遺跡	235
第1節 調査の概要	235
1 調査の経過	(薦科) 235
2 基本層序と土層の堆積状況	(荻野) 237

第2節 旧石器時代の遺構と遺物	(三好・小林) 243
1 概要	243
2 第Ⅰ文化層（B B IV）の遺物	244
3 第Ⅱ文化層（B B I）の遺物	245
4 第Ⅲ文化層（Y L L～Y L M）の遺構と遺物	245
5 第Ⅳ文化層（Y L U）の遺物	251
6 参考資料	254
第3節 繩文時代の遺構と遺物	255
1 遺構と遺構内出土遺物	(荻野) 255
2 遺構外出土の土器	(藁科・小林) 266
3 遺構外出土の石器	(佐藤・小林) 274
第5章 内野山V遺跡	281
第1節 調査の概要	281
1 調査の経過	(藁科) 281
2 基本層序と土層の堆積状況	(荻野) 283
第2節 旧石器時代の遺構と遺物	(三好・小林) 287
1 概要	287
2 第Ⅰ文化層（B B III）の遺物	288
3 第Ⅱ文化層（B B I～S C I）の遺構と遺物	289
4 第Ⅲ文化層（Y L L～Y L U）の遺構と遺物	292
第3節 繩文時代の遺構と遺物	298
1 遺構と遺構内出土遺物	(荻野・小林) 298
2 遺構外出土の土器	(小林・佐藤) 313
3 遺構外出土の石器	(佐藤) 328
第6章 総括	(藁科) 339
第1節 塚松遺跡のまとめと考察	339
第2節 入ノ洞B遺跡のまとめと考察	342
第3節 内野山V遺跡のまとめと考察	343
引用参考文献	344
附編 分析		
塚松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡 黒曜石产地分析	*推定結果表は付属CDに収録	
独立行政法人沼津工業高等専門学校 望月明彦	347
入ノ洞B遺跡 テフラ検出分析	株式会社パレオ・ラボ 黒澤一男 350
内野山V遺跡 出土炭化物放射性炭素年代測定（AMS測定）及び種実同定	株式会社加速器分析研究所 359

写真図版／抄録

挿図目次

第1章 発掘調査と資料整理	
第1図 3遺跡の位置	1
第2図 遺跡の位置と周辺の地形	1
第2章 遺跡の環境	
第3図 周辺の主な遺跡の分布	8
第3章 塚松遺跡	
第4図 グリッドと調査範囲	14
第5図 調査区と周辺地形	15
第6図 土層柱状図	16
第7図 基本土層図	18
第8図 第I文化層 遺物分布図	23
第9図 第I文化層 器種別分布図(1)	24
第10図 第I文化層 器種別分布図(2)	25
第11図 第I文化層 石材別分布A図	26
第12図 第I文化層 石材別分布B図	28
第13図 第I文化層 石材別分布C図	30
第14図 第I文化層 石材別分布D図	32
第15図 第I文化層 石材別分布E図	33
第16図 第I文化層 石材別分布F図	34
第17図 第I文化層 個体別資料分布図(1)	36
第18図 第I文化層 個体別資料分布図(2)	37
第19図 第I文化層 個体別資料分布図(3)	38
第20図 第I文化層 個体別資料分布図(4)	39
第21図 第I文化層 個体別資料分布図(5)	40
第22図 第I文化層 個体別資料分布図(6)	41
第23図 第I文化層 出土石器(1)	50
第24図 第I文化層 出土石器(2)	51
第25図 第I文化層 出土石器(3)	52
第26図 第I文化層 出土石器(4)	53
第27図 第I文化層 出土石器(5)	54
第28図 第I文化層 出土石器(6)	55
第29図 第I文化層 出土石器(7)	56
第30図 第I文化層 出土石器(8)	57
第31図 第I文化層 出土石器(9)	58
第32図 第I文化層 出土石器(10)	59
第33図 第I文化層 出土石器(11)	60
第34図 第I文化層 出土石器(12)	61
第35図 第I文化層 出土石器(13)	62
第36図 第I文化層 出土石器(14)	63
第37図 第I文化層 出土石器(15)	64
第38図 第I文化層 出土石器(16)	65
第39図 第I文化層 1号・2号土坑	66
第40図 第I文化層 土坑分布図	67
第41図 第I文化層 3号～5号土坑	68
第42図 第I文化層 6号～9号土坑	69
第43図 第I文化層 10号～13号土坑	70
第44図 第I文化層 14号～17号土坑	71
第45図 第I文化層 18号～21号土坑	72
第46図 第I文化層 22号～25号土坑	73
第47図 第I文化層 26号土坑	74
第48図 第II文化層 石材別分布図	75
第49図 第II文化層 6号～8号礫群	76
第50図 第II文化層 器種別分布図	78
第51図 第II文化層 出土石器(1)	79
第52図 第II文化層 出土石器(2)	80
第53図 第III文化層 遺物分布図	82
第54図 第III文化層 9号～11号礫群	84
第55図 第III文化層 12号～16号礫群	85
第56図 第III文化層 17号礫群	86
第57図 第III文化層 器種別分布図	87
第58図 第III文化層 石材別分布図	88
第59図 第III文化層 17号・18号 石器ブロック	90
第60図 第III文化層 19号石器ブロック	91
第61図 第III文化層 20号石器ブロック	92
第62図 第III文化層 21号石器ブロック 器種別	93
第63図 第III文化層 21号石器ブロック 石材別	93
第64図 第III文化層 22号石器ブロック	94
第65図 第III文化層 出土石器(1)	100
第66図 第III文化層 出土石器(2)	101
第67図 第III文化層 出土石器(3)	102
第68図 第III文化層 出土石器(4)	105
第69図 第III文化層 出土石器(5)	107
第70図 第III文化層 出土石器(6)	108
第71図 第III文化層 出土石器(7)	109
第72図 第III文化層 出土石器(8)	110

第 73 図	第III文化層	出土石器(9)	111	第117図	縄文12号～18号土坑	160
第 74 図	第III文化層	出土石器(10)	112	第118図	縄文19号～26号土坑	161
第 75 図	第III文化層	出土石器(11)	118	第119図	縄文27号～30号土坑	162
第 76 図	第III文化層	出土石器(12)	119	第120図	縄文31号～38号土坑	163
第 77 図	第III文化層	出土石器(13)	120	第121図	縄文39号～42号土坑	164
第 78 図	第III文化層	出土石器(14)	121	第122図	縄文43号～48号土坑	165
第 79 図	第III文化層	出土石器(15)	122	第123図	縄文49号～54号土坑	166
第 80 図	第III文化層	出土石器(16)	123	第124図	縄文55号～60号土坑	167
第 81 図	第III文化層	出土石器(17)	124	第125図	縄文時代 II群土坑分布図	169
第 82 図	第III文化層	出土石器(18)	125	第126図	縄文61号～63号土坑	170
第 83 図	第III文化層	出土石器(19)	126	第127図	縄文64号～67号土坑	171
第 84 図	第IV文化層	産地別分布図	127	第128図	縄文68号・69号土坑	172
第 85 図	第IV文化層	出土石器(1)	129	第129図	縄文70号～74号土坑	173
第 86 図	第V文化層	石材別分布図	130	第130図	縄文土器 群別分布図	185
第 87 図	第V文化層	出土石器(1)	132	第131図	縄文土器 I群分布図	186
第 88 図	縄文時代	遺構と遺物分布	133	第132図	縄文土器 II群分布図	187
第 89 図	縄文時代	遺構配置図	134	第133図	縄文土器 II群分布拡大図	188
第 90 図	縄文時代	遺構と土器分布	135	第134図	縄文土器 III群分布図	189
第 91 図	1号住居跡	と出土遺物(1)	136	第135図	縄文土器 III群分布拡大図	190
第 92 図	1号住居跡	遺物分布図	137	第136図	縄文土器 IV群分布図	191
第 93 図	1号住居跡	出土遺物(2)	137	第137図	縄文土器 V群分布図	192
第 94 図	2号住居跡	138	第138図	I群土器・II群土器(1)	193
第 95 図	2号住居跡	と出土遺物(1)	139	第139図	II群土器(2)	194
第 96 図	2号住居跡	出土遺物(2)	140	第140図	II群土器(3)	195
第 97 図	3号住居跡	と出土遺物	141	第141図	II群土器(4)	196
第 98 図	3号住居跡	と周辺土器 (早期後葉)分布 ..	142	第142図	II群土器(5)	197
第 99 図	1号竪穴状遺構	遺物分布図	143	第143図	II群土器(6)	198
第100図	1号竪穴状遺構	接合資料 土器分布図 ..	143	第144図	III群土器(1)	199
				第145図	III群土器(2)	200
第101図	1号竪穴状遺構	出土遺物	144	第146図	III群土器(3)	201
第102図	焼土跡(1)	145	第147図	III群土器(4)	202
第103図	焼土跡(2)	146	第148図	III群土器(5)	203
第104図	1号～5号集石	147	第149図	III群土器(6)	204
第105図	4号・5号集石	出土遺物	147	第150図	III群土器(7)・IV群土器(1) ..	205
第106図	6号～11号集石	148	第151図	IV群土器(2)	206
第107図	12号～18号集石	149	第152図	IV群土器(3)	207
第108図	19号～21号集石	150	第153図	V群土器	208
第109図	22号～29号集石	151	第154図	縄文石器 器種別分布図 ..	214
第110図	30号～33号集石	152	第155図	縄文石器 黒曜石產地別分布図 ..	215
第111図	34号・35号集石	153	第156図	縄文石器(1)(石鎌)	216
第112図	36号～40号集石	154	第157図	縄文石器(2)(石鎌)	217
第113図	縄文時代 I群土坑分布図	156	第158図	縄文石器(3)	218
第114図	縄文1号～3号土坑	157	第159図	縄文石器(4)	219
第115図	縄文4号・5号土坑	158	第160図	縄文石器(5)	220
第116図	縄文6号～11号土坑	159	第161図	縄文石器(6)	221
				第162図	縄文石器(7)	222

第163図	縄文石器(8)(楔形石器)	223	第205図	縄文土器 群別分布図	268
第164図	縄文石器(9)	224	第206図	縄文土器 I・II群及び III群分布図 ..	269
第165図	縄文石器(10)	225	第207図	第I群土器・第II群土器(1)	270
第166図	縄文石器(11)	226	第208図	第II群土器(2)	271
第167図	縄文石器(12)	227	第209図	第III群土器(1)	272
第168図	縄文石器(13)	228	第210図	第III群土器(2)	273
第169図	縄文石器(14)	229	第211図	縄文石器 器種別分布図	276
第170図	縄文石器(15)(磨石・敲石類)	230	第212図	縄文石器 石材別分布図	275
第171図	縄文石器(16)(磨石・敲石類)	231	第213図	縄文石器(1)	277
第172図	縄文石器(17)(磨石・敲石類)	232	第214図	縄文石器(2)	278
第173図	縄文石器(18)(磨石・敲石類と 石皿・台石類)	233	第215図	縄文石器(3)(磨石・敲石類)	279
第174図	縄文石器(19)	234	第216図	縄文石器(4)(磨石・敲石類と 石皿・台石類)	280

第4章 入ノ洞B遺跡

第175図	グリッドと調査範囲	236
第176図	調査区と周辺地形	237
第177図	遺物分布図	238
第178図	土層断面図	239
第179図	土層柱状図	240
第180図	基本土層図	242
第181図	第I文化層 遺物分布図	244
第182図	第I文化層 出土石器	244
第183図	第II文化層 遺物分布図	245
第184図	第II文化層 出土石器	245
第185図	第III文化層 遺物分布図	246
第186図	第III文化層 遺構配置図	246
第187図	第III文化層 1号疊群・ 1号～3号石器ブロック	248
第188図	第III文化層 出土石器(1)	249
第189図	第III文化層 1号土坑	250
第190図	第III文化層 出土石器(2)	251
第191図	第IV文化層 器種別分布図	252
第192図	第IV文化層 石材別分布図	252
第193図	第IV文化層 出土石器	253
第194図	遺構と土器分布図	255
第195図	縄文時代 遺構配置図	256
第196図	1号住居跡	257
第197図	1号住居跡 出土遺物	258
第198図	焼土跡	259
第199図	集石遺構と疊分布図	260
第200図	1号～4号集石	261
第201図	5号～7号集石	262
第202図	8号～12号集石	263
第203図	13号～18号集石	264
第204図	縄文1・2号土坑	265

第5章 内野山V遺跡

第217図	グリッドと調査範囲	282
第218図	調査区と周辺地形	283
第219図	土層柱状図	285
第220図	基本土層図	286
第221図	第I文化層 遺物分布図	288
第222図	第I文化層 出土石器	288
第223図	第II文化層 遺物分布図	289
第224図	第II文化層 1号・2号疊群	290
第225図	第II文化層 3号疊群と 1号石器ブロック	291
第226図	第II文化層 出土石器	291
第227図	第III文化層 遺物分布図	292
第228図	第III文化層 4号・5号疊群	294
第229図	第III文化層 6号・7号疊群	295
第230図	第III文化層 出土石器(1)	296
第231図	第III文化層 出土石器(2)	297
第232図	縄文時代 遺構配置図	298
第233図	縄文時代 遺物分布図	299
第234図	焼土跡	300
第235図	炉跡と出土遺物	300
第236図	配石と出土遺物	301
第237図	縄文石器集中と出土土器	302
第238図	縄文石器集中 出土石器	303
第239図	集石と疊分布図	304
第240図	1号～4号集石	306
第241図	5号～9号集石	307
第242図	10号～16号集石	308
第243図	17号～20号集石	309
第244図	縄文1号～5号土坑	312
第245図	縄文土器 群別分布図	315

第246図	縄文土器 I群分布図	316	第258図	縄文石器(1)	332
第247図	縄文土器 II群分布図	316	第259図	縄文石器(2)	333
第248図	縄文土器 III群分布図	317	第260図	縄文石器(3)	334
第249図	縄文土器 IV群分布図	317	第261図	縄文石器(4)	335
第250図	縄文土器 V群分布図	318	第262図	縄文石器(5)(砥石と磨石・敲石類)	336
第251図	縄文土器 VI群分布図	318	第263図	縄文石器(6)(磨石・敲石類)	337
第252図	I群土器・II群土器(1)	319	第264図	縄文石器(7)(磨石・敲石類と 石皿・台石類)	338
第253図	II群土器(2)	320			
第254図	II群土器(3)・III~IV群土器 V群土器(1)	321			
第255図	V群土器(2)	322			
第256図	V群土器(3)・VI群土器	323			
第257図	縄文石器 器種別分布図	329			

第6章 総括

第265図	塚松遺跡 旧石器時代 土坑配列図	339
-------	------------------	-----

挿表目次

第1章 調査に至る経緯

第1表	現地調査の工程表	2
-----	----------	---

第2章 遺跡の環境

第2表	周辺遺跡地名表	9
-----	---------	---

第3章 塚松遺跡

第3表	旧石器時代 文化層別石器組成表	20
第4表	第I文化層 石器組成表	21
第5表	第I文化層 碠群・配石組成表	22
第6表	1号～3号石器ブロック組成表	27
第7表	4号～7号石器ブロック組成表	29
第8表	8号～11号石器ブロック組成表	31
第9表	12号・13号石器ブロック組成表	32
第10表	14号石器ブロック組成表	33
第11表	15号・16号石器ブロック組成表	35
第12表	第I文化層 土坑計測表	74
第13表	第II文化層 碠群・配石組成表	76
第14表	第II文化層 石器組成表	77
第15表	第III文化層 石器組成表	81
第16表	第III文化層 碠群組成表	83
第17表	17号・18号石器ブロック組成表	90
第18表	19号石器ブロック組成表	91
第19表	20号・21号石器ブロック組成表	92
第20表	22号石器ブロック組成表	93
第21表	ナイフ形石器の分類と組成	95
第22表	尖頭器の分類と組成	103

第23表	石核の分類と組成	106
第24表	第IV文化層 石器組成表	128
第25表	第V文化層 石器組成表	129
第26表	1号住居跡 土器観察表	138
第27表	1号住居跡 石器計測表	138
第28表	2号住居跡 土器観察表	139
第29表	2号住居跡 石器計測表	139
第30表	3号住居跡 石器計測表	142
第31表	1号竪穴状遺構 土器観察表	144
第32表	住居跡・竪穴状遺構計測表	144
第33表	焼土跡計測表	146
第34表	4号・5号集石出土 石器計測表	147
第35表	15号・19号・20号集石出土 石器計測表	150
第36表	31号集石出土 土器観察表	153
第37表	32・34号集石出土 石器計測表	153
第38表	40号集石出土 石器計測表	154
第39表	集石計測表	155
第40表	4号土坑出土 石器計測表	158
第41表	42号土坑出土 石器計測表	166
第42表	I群土坑形態分類表	168
第43表	II群土坑形態分類表	174
第44表	土器観察表	182
第45表	縄文時代 石器組成表	210

第4章 入ノ洞B遺跡

第46表	旧石器時代 石器組成表	243
------	-------------	-----

第 47 表	第Ⅲ文化層 石器ブロック組成表	247	第 61 表	第Ⅲ文化層 磚組成表	292
第 48 表	1 号土坑出土 石器計測表	250	第 62 表	第Ⅲ文化層 磚群内石器組成表	293
第 49 表	第Ⅲ文化層 1 号土坑計測表	250	第 63 表	第Ⅲ文化層 遺構外出土石器組成表	
第 50 表	第Ⅳ文化層 石器組成表	251			297
第 51 表	1 号住居跡 土器観察表	257	第 64 表	焼土跡計測表	300
第 52 表	1 号住居跡 石器計測表	257	第 65 表	炉跡 土器観察表	300
第 53 表	焼土跡計測表	259	第 66 表	配石 石器計測表	301
第 54 表	集石出土 石器計測表	265	第 67 表	繩文石器集中 土器観察表	302
第 55 表	集石計測表	265	第 68 表	繩文石器集中 石器計測表	303
第 56 表	土坑計測表	265	第 69 表	4 号集石出土 石器計測表	306
第 57 表	土器観察表	273	第 70 表	集石計測表	310
第 58 表	縄文時代 石器組成表	274	第 71 表	4 号土坑出土 石器計測表	311
第 5 章 内野山 V 遺跡			第 72 表	土坑計測表	311
第 59 表	旧石器時代 石器組成表	287	第 73 表	土器観察表	324
第 60 表	第 II 文化層 遺物組成表	289	第 74 表	縄文時代 石器組成表	328

付属 CD 収録データ

塙松遺跡

第 75 表	塙松遺跡 石器一覧表
第 76 表	塙松遺跡 旧石器時代 磚一覧表
第 77 表	塙松遺跡 黒曜石産地分析 推定結果表*
第 78 表	塙松遺跡 ホルンフェルス 個体別分類表
第 79 表	塙松遺跡 ガラス質黒色安山岩 個体別分類表
第 80 表	塙松遺跡 碧玉 個体別分類表
第 81 表	塙松遺跡 黒曜石 個体別分類表
第 82 表	塙松遺跡 掘載土器一覧表

入ノ洞 B 遺跡

第 83 表	入ノ洞 B 遺跡 石器一覧表
第 84 表	入ノ洞 B 遺跡 旧石器時代 磚一覧表

第 85 表 入ノ洞 B 遺跡 黒曜石産地分析

推定結果表*

第 86 表 入ノ洞 B 遺跡 掘載土器一覧表

内野山 V 遺跡

第 87 表 内野山 V 遺跡 石器一覧表

第 88 表 内野山 V 遺跡 旧石器時代 磚一覧表

第 89 表 内野山 V 遺跡 黒曜石産地分析

推定結果表*

第 90 表 内野山 V 遺跡 掘載土器一覧表

* 沿津工業高等専門学校教授 望月明彦氏の分析による

(本文附録分析参照)

写真図版目次

巻頭図版

巻頭図版 1	塙松遺跡・入ノ洞 B 遺跡・ 内野山 V 遺跡 全景
巻頭図版 2	塙松遺跡・入ノ洞 B 遺跡・ 内野山 V 遺跡 出土遺物

写真図版

塙松遺跡	図版 1 第 I 文化層 土坑全景 (空撮・合成)
	図版 2 第 I 文化層 土坑検出状況

図版3	第Ⅰ文化層	5号土坑半截・完掘状況 6号・9号・10号・20号・ 22号・23号土坑完掘状況	図版26	第Ⅲ群土器(3)	第Ⅳ群土器(1)
図版4	第Ⅰ文化層	3号縄群 検出状況 第Ⅰ文化層 15号・16号石器ブロック 検出状況	図版27	第Ⅳ群土器(2)	第Ⅳ群土器(3)・ 第Ⅴ群土器
図版5	第Ⅰ文化層	11号・20号石器ブロック・ 9号配石検出状況 第Ⅱ文化層 6号縄群検出状況 第Ⅲ文化層 18号・22号・17号 石器ブロック検出状況	図版28	土層堆積状況	
図版6	縄文時代	土坑全景〈空撮・合成〉	図版29	テストピット・トレンチ完掘状況	
図版7	縄文時代	2号・6号・7号・29号・ 39号・40号・46号・48号 土坑検出状況	図版30	第Ⅱ文化層 遺物出土状況 1号・3号石器ブロック検出状況 2号石器ブロック・1号縄群検出状況 第Ⅲ文化層 1号土坑内遺物出土状況	
図版8	縄文時代	64号～71号土坑検出状況	図版31	縄文時代 遺物出土状況 1号住居跡検出・完掘状況	
図版9	縄文時代	3号集石検出・完掘状況 縄文時代 1号・5号・13号・14号・ 21号集石検出状況	図版32	縄文時代 1号・2号土坑完掘状況	
図版10	1号・2号住居跡検出状況 1号住居跡完掘状況	図版33	縄文時代 1号・5号・7号集石検出状況		
図版11	2号住居跡完掘状況 3号住居跡完掘状況	図版34	1号住居跡出土遺物		
図版12	1号竪穴状遺構検出・完掘状況	図版35	旧石器時代 出土石器		
図版13	1号・2号住居跡出土遺物 1号竪穴状遺構出土遺物	図版36	縄文石器		
図版14	第Ⅰ文化層出土石器(1)	図版37	第Ⅰ群土器 第Ⅱ群土器(1)		
図版15	第Ⅰ文化層出土石器(2)	図版38	第Ⅱ群土器(2) 第Ⅲ群土器		
図版16	第Ⅱ文化層・第Ⅲ文化層出土石器(1)	内野山V遺跡			
図版17	第Ⅲ文化層出土石器(2)	図版39	遺跡全景		
図版18	第Ⅲ文化層出土石器(3)	図版40	テストピット完掘状況		
図版19	第Ⅳ・第Ⅴ文化層出土石器	図版41	4号・5号・7号縄群検出状況 1号石器ブロック検出状況		
図版20	縄文石器(1)石鏃 縄文石器(2)石錐・削器類・楔形石器	図版42	縄文時代 遺物出土状況		
図版21	縄文石器(3)石匙	図版43	1号焼土・1号土坑完掘状況		
図版22	縄文石器(4)打製石斧 縄文石器(5)大型石器	図版44	4号土坑周辺遺物出土状況		
図版23	第Ⅰ群土器 撫糸文・押型文 第Ⅱ群土器 茅山上層式・打越式・ 鶴ヶ島台式	図版45	4号土坑内遺物出土状況		
図版24	第Ⅱ群土器 入海Ⅱ式 復元1・2 第Ⅱ群土器 石山式・尖底縄文土器	図版46	縄文時代 土器出土状況		
図版25	第Ⅲ群土器(1)	図版47	5号集石検出・完掘状況		
	第Ⅲ群土器(2)	図版48	縄文時代 5号集石検出状況		
		図版49	縄文時代 配石・炉跡検出状況		
		図版50	縄文石器集中出土土器 炉跡出土土器		
		図版51	4号土坑出土石器		
		図版52	旧石器時代出土石器(削器・尖頭器)		
		図版53	縄文石器(1)(2)		
		図版54	第Ⅰ群土器 第Ⅱ群土器(1)		
		図版55	第Ⅱ群土器(2)		
		図版56	第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器		

第1章 発掘調査と資料整理

第1節 調査の経緯と方法

1 調査の経緯

塚松遺跡、入ノ洞B遺跡、及び内野山V遺跡は静岡県裾野市に所在し、いずれも第二東名建設事業に伴い調査が行われた遺跡である。調査時はそれぞれ第二東名No144地点、No.144-2地点、及びNo.144-3地点として取り扱った。本節では3遺跡の調査に至る経緯を概説する（第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取扱いの経緯の詳細は「静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第191集 捄返遺跡・今里遺跡」を参照のこと）。

第二東名長泉町～御殿場市区間の建設に先立ち、平成6年度に行なった現地踏査によるリストアップと平成10年度の再踏査を経て、静岡県教育委員会では当該区間に埋蔵文化財調査対象地点を21か所設定した。そこには塚松遺跡となるNo.144地点も含まれており、その後の協議により上記区間の調査を（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が担当することになった。

一方、入ノ洞B遺跡は、その北側に位置する桃園トンネルの建設関連工事に先立ち、平成13年7月に行なわれた現地踏査と工事立会によって所在が明らかになった遺跡である。旧石器時代から縄文時代にかけての散布地である可能性が高まり、No.144-2地点として調査が行われる運びとなった。

富士山

愛鷹山



第2図 遺跡の位置と周辺の地形

また、富沢トンネルの建設工事箇所であった内野山V遺跡も入ノ洞B遺跡と同様、いわゆるやせ尾根上に位置しており、当初は周知の埋蔵文化財附蔵地外であった。しかし、隣接する長泉町内で進められていた別の遺跡の調査でこのような尾根上にも遺跡が存在することがわかり、当地での遺跡の存在も十分想定されたことから平成14年1月に再踏査が行われた。その結果、本線工事の計画範囲内に良好な平坦地の存在が認められ、縄文時代早期や後期旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性が高いと判断された。そして、当地も第二東名No144-3地点として正式に調査対象地点となつた。

このような経緯で、各地点における本格的な調査が順次実施される運びとなつた（第1表参照）。

年度	内容	遺跡	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成13 年度	確認調査 その1	No144地点 塚松遺跡								■	■			
	確認調査 本調査I	No144-2地点 入ノ洞B遺跡									■	■		
平成14 年度	確認調査 その2	No144地点 塚松遺跡												
	本調査II	No144-2地点 入ノ洞B遺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
平成15 年度	本調査I	No144地点 塚松遺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
	本調査	No144-3地点 内野山V遺跡							■	■	■	■	■	■
平成16 年度	本調査II	No144地点 塚松遺跡	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
平成17 年度	本調査III	No144地点 塚松遺跡		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

確認調査 ■■■■■

本調査 ■■■■■

第1表 現地調査の工程表

2 調査の方法

現地での発掘調査は各遺跡で若干の相違はあるものの、概ね以下の方法で実施した。

測量にあたっては、3遺跡はいずれも日本測地系（改正前）の平面直角座標第VIII系を使用している。塚松遺跡は（X, Y）=（-92, 100, 35, 200）、入ノ洞B遺跡は（X, Y）=（-91, 080, 35, 500）、内野山V遺跡は（X, Y）=（-91, 710, 35, 340）をそれぞれ原点（A, 1）として、X軸方向（南から北）にA、B、Cの順にアルファベットで、Y軸方向（西から東）に1、2、3の順にアラビア数字で記号を付け、遺跡全体に10×10m方眼でグリッドを設定した。

抜根や表土除去、また排水処理にはバックフォーとクローラーダンプを使用した。掘削は手掘りを原則としつつも、遺物の分布が希薄な部分や旧石器時代の無遺物層の除去の際には、適宜重機を用いて作業の迅速化を図った。旧石器時代の調査からはグリッドごとに4×4mのテストピットを設けて人力で掘り下げ、出土状況によって調査範囲を拡張する方法をとった。また、愛鷹山麓では第III黒色帯で土坑の検出例があるため、第IIIスコリア帶の上面でそれらの有無を確認した。その後、さらにテストピットを設けて中部ローム層まで人力掘削し、遺構や遺物の有無を確認した。

遺構の実測は主に手実測で行い、縮尺1/20を基本に平面・断面図を作成し、詳細図が必要な場合は縮尺1/10とした。遺構や遺物の位置の観測には（株）トブコンの光波測定器を使用し、座標（X・Y）と標高（Z）を記録した。取り上げた遺物には原則として1点ごと土器=P、石器=S、礫=R、炭化

物-Cの略号と遺物番号を付け、出土層位と合わせて記録した。センター図や土層図の作成、遺構の実測、写真撮影は塚松遺跡の確認調査その1を除き測量会社に委託して実施し、塚松遺跡と内野山V遺跡では実測図面のトレースも委託した。調査で記録したデータは株式会社シン技術コンサルの「遺跡管理システム」を用いて活用した。

写真撮影は6×7判（モノクロ、カラーリバーサル）フィルムの使用を基本とし、作業工程の記録用として35mm判（カラー、モノクロ）を併用した。遺構の全体写真等、広範囲の撮影では必要に応じてローリングタワーや高所作業車、またラジコンヘリを用いた。

ところで、入ノ洞B遺跡は細尾根の先に位置する急傾斜地であるため、調査区から谷を隔てて離れた場所に作業員棟を設けた。調査に先立ち、階段付きの長い通路と転落や土砂の流出防止用の柵を調査区周辺に敷設し、安全面には十分に配慮して調査にあたった。

なお、具体的な調査経過は各遺跡で異なるため、それらの詳細はグリッド配置図や基本層序図等、遺跡の概要を示した図面と併せて第3～5章の各第1節「調査の経過」でそれぞれ言及する。



現地作業風景（塚松遺跡／遺構検出）

第2節 整理作業と報告書編集

基礎整理作業と資料整理の概略

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、調査の性格上、現地調査の進捗が優先されるため、多くの調査が終了した後に各遺跡の資料整理を順次実施する方針になっている。本書で報告する3遺跡も、本格的な資料整理作業の体制を整えるまでにある程度の期間が経過しているが、現地調査を進めながらも行える基礎整理作業（遺物の洗浄・注記、台帳作成、写真整理等）は、発掘調査と並行しながら基礎整理棟において実施した。各遺跡から出土した遺物（石器・土器・礫）は洗浄後、順次遺物番号の注記作業を行った。ホルンフェルス製の石器については、薬品処理(PARALOID B-72、ワッカ-OH-100)による劣化遅延措置を施した。その後、石器・礫については石材の同定と石材や層位ごとの分類を行い、同じ遺跡内の石器に関して接合作業を行った。

本書作成のための本格的な資料整理は、平成18年4月に財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所長泉地区事務所で開始した。その後2年余りの期間を要して3遺跡の整理を行い、報告書の刊行に至った。整理作業は、まず塚松遺跡（第二東名No144地点）から着手し、平成19年4月からは入ノ洞B遺跡（同No.144-2地点）、同年6月から内野山V遺跡（同No.144-3地点）という具合に順次作業を進めた。土器の分類・接合・拓本・実測・トレース、石器の実測・トレース、また、報告書の版下作成等は、3遺跡を通してほぼ同じ作業スタッフが担当した。

遺物の実測

石器の実測については、作業効率の面から、一部の石器に関して実測図・トレース及び観察表の作成業務を外部に委託して行った。塚松遺跡では礫石器は本研究所で実測・トレースし、剥片石器や接合資料については委託するという具合に分け、平成18年度に縄文時代の石器を、平成19年度に旧石器時代の石器を委託した。また、入ノ洞B遺跡と内野山V遺跡では、平成19年度に礫石器と剥片石器の一部を本研究所で実測・トレースし、その他の製品類を2遺跡合わせて委託したが、両遺跡では実測図をトレースする際、一部にデジタルトレースを用いた。

土器の整理作業は型式分類をした後に接合作業を行い、文様構成が明確なものを中心に拓本と断面実測を実施した。また、残存状態が良好な個体については復元を試み、欠損部の補填には塚松遺跡ではワーカブルを、入ノ洞B遺跡と内野山V遺跡では石膏を用いた。

図表の作成

報告書の編集に先立ち、分布図や遺構図のトレース、観察表や石器の組成表や一覧表の作成、及び遺物の版下の作成を行い、整理作業の成果をふまえて本文を執筆した。遺構図に関しては、調査時に作成した実測図の中から必要な図面を選び出し、パソコン用ソフト(Adobe Illustrator ver10.0)で図版を作成した。入ノ洞B遺跡では調査時に遺構図面のトレースを行わなかったため、整理作業にて手実測の図面をスキャニングし、デジタルトレースを施した。石器一覧表等の作成には表計算ソフト(Microsoft Excel)を用いた。



整理作業風景(内野山V遺跡／土器の復元)

写真図版の作成

遺物の写真撮影は、文化層の設定と報告書の章立てが固まった平成19年度後半になってから、当研究所本部写真室にて、写真専門職員が3遺跡分をまとめて撮影した。土器・石器とともに原則として6×7判フィルムを用い、器種別及び出土層位別に遺物を分類、集合させた状態で表面(正面)のみ撮影した。なお、3遺跡から出土した主な石器と復元した土器の集合写真を4×5版カラーで撮影し、本書巻頭図版に用いた。

遺物の分析

遺跡から出土した黒曜石の石器は、3遺跡ともに独立行政法人沼津工業高等専門学校教授 望月明彦氏に依頼して産地分析を行った(附録及び付属CD収録第77・85・89表参照)。その際、旧石器時代の石器は全点を、縄文時代のものについては剥片・碎片以外のものを分析対象とした。

また、内野山V遺跡では一部の土坑から植物の実と思われる炭化物が出土したため、その樹実同定と年代測定を平成19年度に株式会社加速器分析研究所に委託し、C14年代測定(AMS法)を用いて分析を実施した(附録参照)。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

報告する3遺跡が所在する裾野市及び愛鷹山東南麓について、当地域の層序の特色と合わせて地理的環境を概観する。また、各遺跡の立地についても後述する。

1 3遺跡の概観

塚松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡は、静岡県東部の裾野市に所在する。その名通り富士山の東南麓に広がる裾野市は北を御殿場市、南を駿東郡長泉町と接する人口約6万人の地方都市である。東京から車で1時間程度という交通の至便さも手伝い、既存の東名裾野インターチェンジ開設後は市の西側の愛鷹山丘陵部へ企業進出が増え、今日では東海工業地域の一翼を担うようになった。また、裾野市は東を箱根山西麓とも接しており、市域の中央部には富士山麓を水源とし、富士火山の溶岩流の名残を今もとどめる黄瀬川が北から南に流れ、その作用で形成された平野に市街地が広がる。

さて、3遺跡はいずれも愛鷹山東南麓に延びた緩やかな尾根上に所在する。裾野市域の第二東名関連遺跡の中では南部に位置し、南から順に塚松遺跡、内野山V遺跡、入ノ洞B遺跡と並ぶ。特に塚松遺跡と内野山V遺跡は近く、深い開析谷を隔ててはいるものの最短で120m程の距離で対峙する（第1図）。

富士山の南に位置し、標高1,457mの位牌岳を主峰とする愛鷹山は裾野市から富士市に至る3市1町に山裾を広げ、東西範囲は約16kmに及ぶ。愛鷹山は約50～40万年前に活動を始め、約10万年前に活動を停止した壯年期の円錐形状の成層火山で、玄武岩質や凝灰角砾岩質、及び安山岩質の噴出物で形成されたと考えられている。そして、それらの上には愛鷹ローム層と呼ばれる火山灰層が厚く堆積する。愛鷹ローム層は上部・中部・下部の各層に分けられるが、中でも上部ローム層は約8万年前から活動した古富士火山と約1万年前から活動した新富士火山によって供給された層で、関東ローム層における立川ロームに相当する。また、上部ローム層は火山噴出物から成るスコリア帯と生活面である黒色帶が相互に重なり合っている。これまでに人類の営みの跡は上部ローム層以上で確認されており、当地でも後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が数多く発見された。また、愛鷹山の複数の峰から生じた水脈は、長い年月の浸食作用で多数の開析谷を形成した。その結果、愛鷹山東南麓は枝尾根が多く入り組んだ地形となり、遺跡の多くは尾根上の平坦地を選ぶかのように点在している。

これまでに見つかった愛鷹山麓周辺の遺跡は、従来は山の東南麓に集中していたが、第二東名建設に伴う発掘調査が進むにつれて、その範囲も愛鷹山南麓から東麓にかけた一帯へと広がりつつある。そして、それらの遺跡の多くは、山が傾斜を緩めて放射状の丘陵に移行するような場所で発見されている。

2 各遺跡の位置と立地

塚松遺跡

第二東名No144地点の塚松遺跡は、JR御殿場線裾野駅から西に約3kmの愛鷹山南東麓の標高206～223mに立地する。南北約300m、東西約130mの範囲に菱形状に広がる当遺跡は、北西から南東に尾根筋が緩やかにはしる丘陵地にあり、南北を深い開析谷に挟まれている。南側の谷には梅木沢川が流れ、それを挟んで南西側の低い位置には局部磨製石斧がまとまって出土した梅木沢遺跡（同No143-2地点）

がある。また、本遺跡と同一の尾根筋には塚松A・B遺跡、中林遺跡、平林I・II遺跡といった縄文時代の遺跡がある。なお、遺跡中央部には調査以前から市道が横切っていた。調査前は山林であった。

入ノ洞B遺跡

第二東名No144-2地点の入ノ洞B遺跡は裾野市桃園に所在し、愛鷹山南東麓に伸びた標高225～235mのやせ尾根上に位置する。当然ながら遺跡自体も東西約180m、南北約15～30mと細長い。また、遺跡の南北はともに深く開削され、谷を流れる沢と尾根平坦部の比高差は40m近い。調査前は山林であったが、遺跡の南西側一帯はゴルフ場として既に開発されていた。当遺跡の北西約1kmに位置する市清掃センター所在地には中畠遺跡がある。入ノ洞B遺跡はその北側に開口する第二東名桃園トンネルの作業ヤード建設に伴い調査され、約500mに及ぶトンネルを抜けると第二東名No145地点の老平遺跡がある。内野山V遺跡

第二東名No144-3地点の内野山V遺跡は裾野市富沢に所在し、JR御殿場線裾野駅から西北西に2km程離れた愛鷹山南東麓のやせ尾根上に位置する。尾根は西端が一段高くなった独立した丘陵で、南東方向に緩やかに傾斜し、東端は狭いがほぼ平坦である。本遺跡は南北側と西側を各々深い谷で開削されており、南西側の谷底には黄瀬川の支流となる小河川の谷頭が存在し、谷を隔てた向かいの尾根には塚松遺跡がある。標高は尾根上で約224m、谷部で約215mである。当遺跡は第二東名富沢トンネル工事に伴い調査された遺跡で、約500mに及ぶトンネルを抜けると入ノ洞B遺跡に至る。調査前は山林であった。

3 愛鷹山麓の層序と堆積の特色

本研究所では、静岡県東部の愛鷹山南麓から東麓で調査を行う際、愛鷹ローム団研グループ（愛鷹ローム団研グループ1969）により火山灰層序学的区分に準拠し、設定された考古学基本土層を用いることを標準としている。この基本土層はスコリア礫・軽石礫・ガラス質火山灰鍵層を根拠に定義されたもので、ここではそれに基づき、愛鷹上部ローム層の概略と裾野市域における堆積の特色を述べる。

愛鷹山は富士山の南に位置するため、富士火山が激しく噴火していた時期には噴出物が大量に降り、短期間で粒の粗い暗褐色のスコリア層が形成される。一方、降灰が沈静化する時期にはスコリア層上面に植物等が腐食、土壤化した黒色帶の形成が進む。その結果、当地では発色の異なる地層が互い違いに層序を成すという特色が見られ、旧石器時代遺跡の調査では妥当性の高い文化層設定が可能となる。

愛鷹上部ローム層には、中部ローム層の直上から後述する休場層の下まで何層もの黒色帶が堆積しており、最下層は第VII黒色帶である。また、第I・第II黒色帶の間には約2万5千年前に噴火した姶良丹沢広城火山灰（AT）がパッチ状に見られる風化の進んだスコリア層があり、ニセローム層と呼んでいる。休場層は旧石器時代末に数千年間堆積した細かい黄褐色の火山灰層で、約1万4千年前の細石器や炉跡の発見で知られる沼津市の休場遺跡（国指定史跡）から名付けられた。第VII黒色帶から休場層までが主に後期旧石器時代の遺物を包含する層で、休場層も色調や粘性、含有するスコリアの差異で更に上位・中位・下位に分層される。その上には漸移層があり、富士黒土層、栗色土層、新規スコリア層等が続く。

このような基本層序は標準的なもので、遺跡ごとに層厚や発色等の相違があることは言うまでもない。層序には地域性もあり、桃沢川（長泉町）以北の愛鷹山麓では黒色帶を形成する埋没腐植土の色調が薄い点や、北に位置する遺跡ほど休場層が厚くなる等の指摘がある。また、裾野市北部から御殿場市では、表土の下に縄文時代後・晩期の富士山の活動に伴い堆積した砂沢スコリアと呼ばれる火山灰層が見られるようになり、報告する3遺跡のうち最北に位置する入ノ洞B遺跡ではそれが純層として確認された。

なお、各遺跡の基本層序と具体的な堆積状況は第3・4・5章の各第1節で図示し、言及する。

第2節 歴史的環境

本節では、報告する3遺跡と関連が深い周辺の主な遺跡と出土状況を取り上げ、旧石器時代から縄文時代までの裾野市及び愛鷹山東南麓の歴史的な環境を概観する。

1 旧石器時代

わが国では今日まで5,000か所以上の旧石器時代遺跡が発見されているが、静岡県内だけでも350か所を越える遺跡が存在する。県内の旧石器時代遺跡の分布には偏りがあり、報告する3遺跡が所在する愛鷹山東南麓から南麓は特に集中する。第二東名高速道路は、県東部では愛鷹山麓の緩斜面上を横断するよう通過するため、平成8年から始まった調査では旧石器時代の遺構や遺物が続々と見つかっている。

いわゆる旧石器捏造事件以降、わが国の人類の足跡は約3万2千年前の後期旧石器時代から始まると思われるが、今のところ県内最古の石器は愛鷹山東南麓に位置する長泉町の向田A遺跡（第二東名No140地点）、細尾遺跡（No141地点）、富士石遺跡（No142地点）、及び沼津市の愛鷹山南麓に位置する第二東名の調査地点となった幾つかの遺跡で出土した石核や剥片である。それらはいずれも愛鷹上部ローム最下層の第VII黒色帯相当から出土し、放射性炭素年代測定の結果等から約3万～3万2千年前の石器と推定された。報告する3遺跡のうち、最も古い遺物は入ノ洞B遺跡の第IV黒色帶出土の局部磨製石斧で、遺構では塚松遺跡の第III黒色帯から検出された土坑群である。塚松遺跡は先述の富士石遺跡と1km程度の距離であり、3遺跡の周辺は日本列島の最初期の人々の痕跡が残る地域であるといえる。

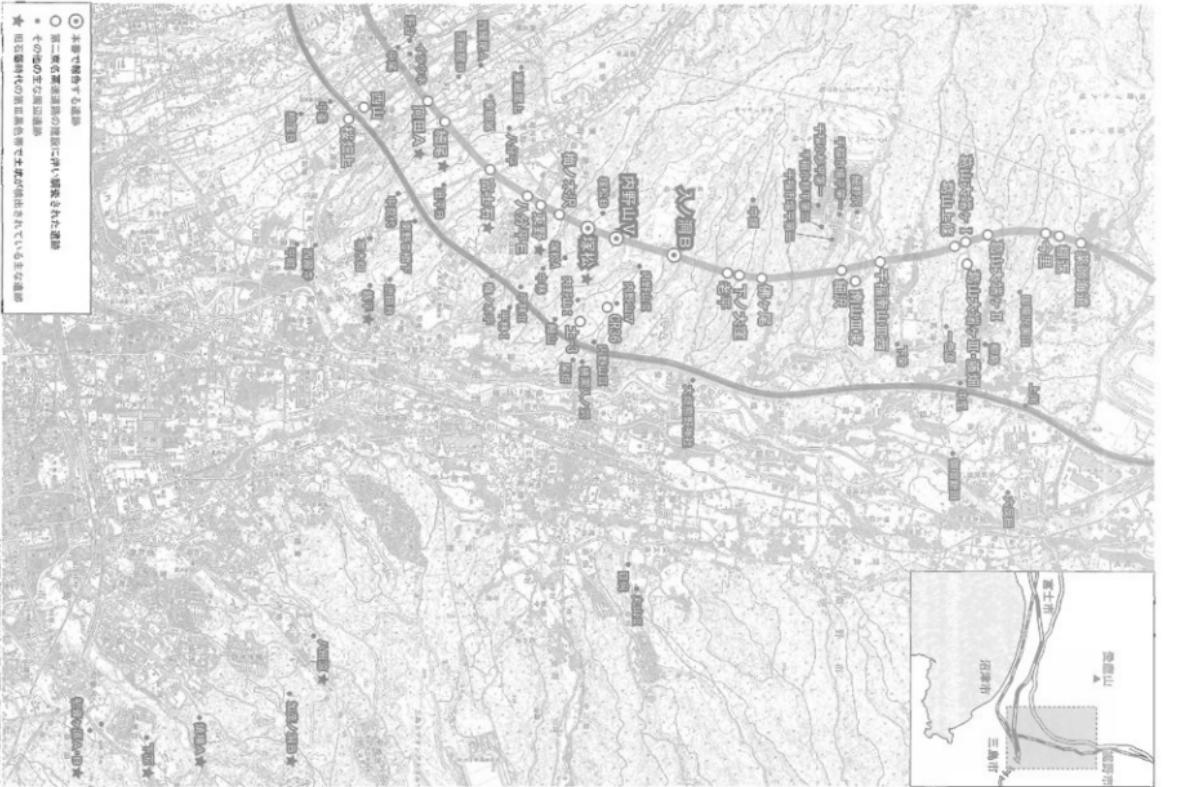
また、愛鷹山東南麓は箱根山西麓と並び、陥穴として造られたと思われる旧石器時代の土坑が集中して見つかっている地域でもある。当該期の配列された土坑群では三島市の初音ヶ原遺跡のものがよく知られるが、第二東名建設に伴う調査でも先述の向田A遺跡や細尾遺跡、富士石遺跡、及び沼津市の鎌瀬遺跡（第二東名No28地点）、そして報告する塚松遺跡等でいずれも約2万7千年前の第III黒色帯から土坑群が検出されている。さらに、第二東名に程近い長泉町の鉄平遺跡でも土坑群は見つかっている。愛鷹山東南麓の土坑群は箱根山西麓同様に配列されたものが多く、検出例も相次いでいることや、富士石遺跡と鉄平遺跡のように同一丘陵の遺跡からも発見されていることから、当地一帯が狩り場で、その範囲も広域に及ぶ可能性が指摘されている。なお、当地では、旧石器時代には第III黒色帯の時期以外で土坑群は造られておらず、ほぼ同時期に陥穴の機能をもった相当数の土坑が掘られたようである。穴を深く、多く掘るには大人数の労力が必要で、定期的な巡回も必要すると推測されている。限られた地域での土坑の大量発見が、少人数での移動生活を中心であると考えられていた旧石器時代觀を変えつつある。

ところで、愛鷹山東南麓で出土する石器の石材では黒曜石やホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩が多く見られている。黒曜石については、箱根烟宿や天城柏峰など近在の産地のものに加えて、遠距離石材である信州産や神津島産のものも多く持ち込まれている。ただし、石核の出土量はさほど多くなく、当地で大きな剥片を剥がす作業は顕著でなかったようである。

そのほか、旧石器時代の注目される遺物として、報告する入ノ洞B遺跡では約2万8千年前の土層である第IV黒色帯から局部磨製石斧が単独で出土した。周辺では、塚松遺跡の南側の谷を隔てた駿東郡長泉町の梅ノ木沢遺跡（第二東名No143-2地点／資料整理中）で局部磨製石斧がまとめて出土しており、報告が待たれる。また、時代は下るが、調査中の富士石遺跡では旧石器時代末の休場層中から、穿孔され、側縁部に線刻と磨きが施された垂飾（ペンダント）と思われる石製品が出土している。

従来、裾野市では旧石器時代の遺跡がわずかで、愛鷹山麓僅に限ると東名裾野インターチェンジ地点

第3図 周辺の主な遺跡の分布



第2表 周辺遺跡地名表

*は本文で言及している遺跡

○第二東名高速道路関連の遺跡（裾野市内・駿東郡長泉町内）

遺跡名（調査地点No.）	時代	遺跡名（調査地点No.）	時代
今里薦師海道遺跡（No.154）	（未報告）	入ノ洞B遺跡（No.144-2）	旧石器・縄文（早・前）
棚返遺跡（No.153）	（旧石器・縄文（早～晩）他）	内野山V遺跡（No.144-3）	旧石器・縄文（早・中）
今里遺跡（No.153-2）	銅文	塚松遺跡（No.144）	旧石器・縄文（草創～中）
葛山大端ヶII遺跡（No.151）	（未報告）	海ノ木沢遺跡（No.143-2）*	旧石器・縄文（草創～後）
葛山大端ヶI遺跡（No.150）	（未報告）	東野遺跡（No.143）	（未報告）
裾葛山大端ヶ日遺跡・藤畠遺跡（No.150-2）	（未報告）	富士石遺跡（No.142）*	（調査中）
葛山上條遺跡（No.149）	（未報告）	八分平E遺跡（No.141-2）	（未報告）
千福南山田西遺跡（No.148-2）	（調査中）	細尾遺跡（No.141）*	（未報告）
南山田東遺跡（No.148-3）	（未報告）	向田A遺跡（No.140）*	旧石器・縄文
細沢遺跡（No.148）	（未報告）	西山遺跡（No.2）	縄文（草創～中）
佛ヶ尾遺跡（No.147）*	旧石器・縄文（草創～中）他	桜塚上遺跡（No.1）	（未報告）
下ノ大窪遺跡（No.146）*	旧石器・縄文（草創～後）他	富沢内野山田西遺跡（土-3）	（未報告）
老平遺跡（No.145）	旧石器・縄文（草創～中）	富沢内野山田北遺跡 他 (C R 36)	（未報告）

注)報告書が刊行されている遺跡のみ時代区分を記載している。「未報告」は資料整理中または未整理の遺跡を示す。

●その他の主な旧石器・縄文時代遺跡

遺跡名	時代	遺跡名	時代
田場沢真山遺跡*	縄文（早～後）	日向遺跡	旧石器
上川遺跡*	旧石器・縄文	丸山II遺跡	旧石器
柳島遺跡	縄文（前・中）	池田B遺跡	旧石器・縄文（早・前）
一色原遺跡	縄文（前～後）	鉢平遺跡*	旧石器・縄文（草創～後）
下条遺跡	縄文（早・中・後）	八分平遺跡	旧石器・縄文（早・前）
中里遺跡	縄文（後）	東細尾上遺跡	縄文（早）
細野沢遺跡*	縄文（草創～中）	東細尾遺跡	縄文（早・前）
千福市場平第一遺跡	縄文（早～中）	西細尾A遺跡	縄文（早・前）
千福市場平第二遺跡	縄文（早）	西細尾B遺跡	縄文（早・前）
千福小杉平第一遺跡	縄文（早）	イラウネ遺跡	旧石器・縄文（早～中）
千福小杉平第二遺跡*	縄文（早）	中尾遺跡	旧石器・縄文（早～中）
中畠遺跡*	縄文（早～前）	野台遺跡	旧石器・縄文（早～中）
内野山I遺跡*	縄文（早・中・後）	迨平日遺跡	縄文（早・前）
内野山II遺跡	縄文	東野II橋下遺跡	旧石器・縄文（早～中）
内野山III遺跡	縄文	梅ノ木平遺跡	縄文（早・前）
内野山IV遺跡	縄文	中見代遺跡	旧石器・縄文（早）
中林遺跡・塚松A遺跡*	縄文	茶木畠遺跡	旧石器・縄文（草創～中）
塚松B遺跡*	縄文	西願寺遺跡	旧石器・縄文（早～中）
平林I遺跡*	縄文（早・中）	中峯遺跡*	縄文（早～後）
平林II遺跡*	縄文（早）	平畦遺跡	旧石器・縄文（早～後）
細山遺跡*	縄文（早・中）	柏庭B遺跡	縄文（前・中）
桃園ノ洞遺跡	縄文（早・中）・奈良	八田原遺跡	旧石器・縄文（草創～前）
尾畠遺跡*	旧石器・縄文（早～中）	加茂ノ洞B遺跡	旧石器・縄文（草創～中）
大畠熊野神社	縄文（中期以降）	焼場A遺跡	旧石器・縄文（草創～後）他
六反田遺跡	縄文（中）	下原遺跡	旧石器・縄文（草創～前）
御宿新田遺跡	縄文（中）	初音ヶ原A・B遺跡*	旧石器・縄文（草創～後）他

注) () 内の略記：草創=草創期、早=早期、前=前期、中=中期、後=後期、晚=晚期。～は時期の連続を示す。

の上川遺跡でナイフ形石器が20点余り出土した以外は、平林Ⅰ・Ⅱ遺跡で尖頭器が、尾畠遺跡でナイフ形石器が若干数収集された程度であった。しかし、近年の第二東名建設に伴い休場層以下でも調査が進んだ結果、旧石器時代の遺構・遺物が次々と見つかった。既に報告された下ノ大窪遺跡（第二東名No.146地点）と佛ヶ尾遺跡（No.147地点）では複数の旧石器時代文化層が確認され、沼津市や長泉町での調査と同様に、裾野市の愛鷹山麓でも遺物や遺構が重層的に存在することがわかった。下ノ大窪遺跡では第Ⅲ黒色帶から休場層上部までの5枚の文化層のほとんどから石器ブロックと砾群が検出されている。

2 縄文時代

静岡県内の縄文時代遺跡も、旧石器時代と同様に愛鷹山麓にその分布が集中している。ここでは裾野市域を中心に、愛鷹山南東麓から東麓にかけての縄文時代の様相を時期別に概観する。

まず草創期は、既に報告されている遺跡に限れば当地域での土器の出土例はない。しかしながら、第二東名建設に伴う調査以前から裾野市内では複数の遺跡で有茎尖頭器が採集されており、当該期の人々の存在を窺い知ることができる。それらは報告する塚松遺跡でも比較的多く出土している。なお、佛ヶ尾遺跡では、その加工技術等から草創期の石器ブロックと認められる遺構が検出されている。

当地的縄文時代の隆盛期は早期で、特にその後半にかけて遺跡数が大幅に増加する。早期前半の千福小杉平第二遺跡からは、撫系文が主体の土器が多く出土する。また、この時期は押型文土器の出土量も増える。押型文は県内では東部に集中して見られ、施文方向も含めると多様な種類が確認されている。田場沢裏山遺跡、内野山Ⅰ遺跡ではそれぞれ梢円押形文、格子目文を施した土器が出土している。

早期後半になると、細野沢遺跡のように遺跡が細い尾根稜部の平坦地全体を占めるようになり、規模や出土量が増大する。各遺跡では野島式や鶴ヶ島台式、打越式など関東系土器を中心に様々な型式の条痕文系土器群が多く出土する。田場沢裏山遺跡では貝殻条痕文・腹縁文を施された土器が見つかっている。また、東海系の入海式に比定される土器や、清水柳E類のように愛鷹地域が主体となる在地の土器が出土する遺跡もある。市内にはこの時期の集落遺跡が幾つかあり、報告する3遺跡に近い標高では佛ヶ尾遺跡や下ノ大窪遺跡で打越式土器を伴う複数の住居跡が、また中畠遺跡でも住居跡が1軒検出されている。さらに、北部の上川遺跡では清水柳E類や神之木台式、打越式土器が多く出土し、住居跡も16軒検出されている。早期後半以降は各地で編み出された様々な型式の土器の分布範囲が拡大する時期であるが、当地域でも関東系や東海系の土器群が混在している。そして、その傾向は前期も続く。

前期は遺跡数がやや減少するが、その初頭では長泉町の鉄平遺跡で器厚が薄い東海系の木島式土器が住居跡とともに出土している。後半になると、裾野市では田場沢裏山遺跡で羽状縄文が施された土器が、細野沢遺跡で半段竹管による沈線が施された土器が出土している。細野沢遺跡では5軒の住居跡を始めとして集石・炉跡・土坑等の遺構が多く検出され、当地域の前期後半の集落形態を示している。

中期になると丘陵上の広い平坦地に遺跡が立地するようになるが、裾野市域では遺跡が限られ、住居跡も検出されていない。下ノ大窪遺跡では勝坂式や加曾利EⅠ式が確認されたが、早期に比べて数は少なかった。大型集落が登場して最盛期を迎える南関東とは異なり、当地では遺跡規模が縮小する。一方長泉町では中峯遺跡のように中期後半の住居跡が多く検出されている。ところで、裾野市の細山遺跡近辺では釣手土器が発見されている。中期以降に登場する釣手土器は、県内では伊豆の国市など東部を中心に戦例しか報告がない。さらに、尾畠遺跡では典型的な勝坂式の顔面把手付土器や、穿孔された翡翠の大珠とそれが取められたとされる大型土器が出土しており、裾野市では中期の希少遺物が見られる。

なお、裾野市域では後期は遺跡数が激減し、晚期に至ってはこれまで確実な土器は出土していない。後期以降の冷涼化が丘陵台上での食料の獲得を困難にし、人々の移動を促したとも考えられている。

第3章 塚松遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経過

(1) 確認調査

塚松遺跡の確認調査は平成13年10月から同年11月までと、平成14年11月から平成15年3月までの2回に分け、計24,760m²の範囲を対象に実施した。

確認調査その1

遺跡南側の梅ノ木沢川に接する河岸段丘面3,260m²を対象に、まず幅2mのトレンチを2か所設けて奈良・平安～弥生時代の遺構の有無を調査した。重機で表土約0.2mを除去すると第2層の暗褐色土が堆積していたため、この上面では遺構と遺物を調査したが認められなかった。次に、縄文～旧石器時代の遺物包含層の有無を確かめるため、4×4mのテストピットを5か所設定して、重機で0.4m掘削してから人力で4m掘り進めたところ遺物包含層の存在が認められた。縄文時代の層からは土器や石器・礫が、旧石器時代の層からは礫が出土した。確認調査その1では当初、実掘表面積の設定を200m²としていたが、テストピットで遺物が検出されたため調査範囲を拡張して550m²を実掘した。

確認調査その2

翌年度は試掘対象面積の残り21,500m²を範囲とした。調査範囲全体にはば等間隔に5×5mのテストピットを31か所設け、表土約1.0mを重機で除去してから、人力で0.1m掘り下げて精査し、奈良・平安～弥生時代の遺構の有無を調べた。さらに、地表下2.0mまで人力で掘り下げたところ縄文～旧石器時代の遺物包含層の存在が認められた。そこで、包含層の性格や分布範囲、層位を確認するため5か所でテストピットを拡張し、包含層の内容を確定した後、トレンチ調査に入った。確認調査その2は広範囲にわたったが28か所のテストピットで遺物が確認され、縄文時代の遺構・遺物が尾根全体に広がる状況を把握することができた。縄文時代の遺構では集石や土坑が、遺物では土器や石器・礫等が出土し、土器の集中地点も認められた。旧石器時代の遺物ではホルンフェルスの剥片や礫が出土した。

なお、調査区南西部に該当する区画は地山が開析されていたため、次年度の本調査の対象範囲に含む必要性は薄いと判断された（第4図参照）。

(2) 本調査

確認調査の結果に基づき、本調査を実施した。遺跡全体を3つの調査区に分け、遺跡のほぼ中央を南東から北西に貫く市道を境にその南半分を1区、市道に面する北側を2区、また2区の北側に隣接して遺跡の北端に該当する区域を3区と設定し、1区から順に計3期にわたり本調査を実施した。

本調査Ⅰ期

本調査Ⅰ期は、総調査面積18,510m²のうち遺跡南側に該当する1区5,840m²を対象（当初計画）として、平成15年4月から平成16年3月まで実施した。4月下旬から縄文時代の調査に着手し、前年度末に

表土除去済みの調査区全域を栗色土層上面まで精査して遺物を取り上げた。その後、幅3mのトレンチを南北に設け、栗色土層・富士黒土層・漸移層について層位ごと、トレンチ人力掘削→出土状況に応じた拡張区の人力掘削→遺構・遺物の検出と出土状況の撮影→無遺物層の除去→新たなトレンチ設定という手順で調査した。縄文時代の調査では、7月から9月にかけて集石や土坑が検出された。

7月末から旧石器時代の調査に入り、 4×4 mのテストピットを26基設定して休場層上位から人力で掘削し、状況によって拡張区を設定して遺構・遺物の有無を精査した。第Ⅲスコリア帯上面で遺物出土状況の全体写真を撮り、中間層を除去した後にテストピットを再び設けて、平成16年1月からは第Ⅲスコリア帯から中部ローム層上面までの人力掘削を行った。そして、2月には1区の調査を終了した。

なお、1期では予定を早め、本調査対象範囲の北側部分（その内、1区に接する南半分を2区、北半分を3区とした）についても同年6月から12月にかけて順次表土を除去した。2区の調査は、7月以降に1区と同じ手順で栗色土層～休場層まで行った。ただし、1区の調査を優先したため、2区は広い面積を一度に調査せずに分割して進めた。その結果、年度末には当初計画を上回る6,904m²の本調査を終了した。次年度に2区は第Ⅰ黒色帯から、3区は縄文時代相当層からの掘削となった。

平成16年1月には2区で竪穴住居跡が2軒並んで検出され、木島式土器と見られる土器片を伴っていたため縄文早期末～前期初頭の住居であると推定された。2月には1区の調査を終了し、埋め戻した。11月から12月にかけて、次年度の本調査Ⅱ期の対象となる3区の表土除去を行った。

本調査Ⅰ期を通して、縄文時代の遺構としては1区で土坑や集石が、また、2区では2軒の竪穴住居跡、陥穴と思われる土坑、及び集石が検出された。旧石器時代の調査では、1区の第Ⅰ～第Ⅲ黒色帯と2区の休場層から礫群、配石、及び石器ブロックが検出されたが、遺跡全体から見ると遺構密度は薄かったといえる。

本調査Ⅱ期

遺跡の北半分を調査する本調査Ⅱ期では、前年度（Ⅰ期）に休場層まで調査した2区4,200m²と未調査の3区7,352m²を合わせた計11,552m²の範囲を、平成16年4月から平成17年3月にかけて実施した。

2区は旧石器時代の調査から再開し、テストピットを45か所設けて人力掘削した。5月には休場層から石器、礫等が出土し、また6月上旬には第Ⅱ黒色帯からガラス質黒色安山岩の剥片が出土した。後者についてピットを拡張すると、炭化物集中地点から同石材の剥片や礫が出土した。さらに、6月上旬には中央のテストピットで第Ⅲ黒色帯からの掘り込みと思われる土坑が検出された。重機で中間層を除去しつつ周辺を拡張して土坑の有無を更に調べたところ、7月上旬に当初検出された土坑から6～7m置きに、円形の平面プランをもつ土坑が複数並んで検出された。7月中旬には異なる列を形成する土坑も幾つか検出された。第Ⅲ黒色帯からの土坑検出は10月まで続いたが、土坑は半裁し、覆土を除いた後に検出面を空撮した。その後は順次断ち割りを進め、形状や堆積状況の確認と実測を行い、完掘した。また、土坑内の調査と並行して第Ⅲスコリア帯から中部ローム層までのテストピット掘削を進めたが遺構は検出されず、遺物の出土も少なく、2区は11月に調査を終えた。

2区の調査と並行して、遺跡最北部に該当する3区も5月末から縄文時代の調査に着手した。サブトレンチを富士黒土層の上面まで入れて堆積状況を確認したところ、栗色土層上面では土器片や黒曜石の剥片、礫が散在し、富士黒土層に近付くと遺物は減少した。6月には調査区西側で土坑及び集石を伴う土坑が検出された。7月中旬から富士黒土層のトレンチ掘削に入り、概して遺物は少なかったが、中央のトレンチ西端の漸移層から5cm以上の黒曜石の剥片が出土した。休場層上位まで精査し、富士黒土層の遺物出土状況を撮影した後、8月下旬から重機で無遺物層の除去を始めた。9月までの精査で、3区西側一帯からは、遺構では竪穴状遺構や配石、陥穴と思われる土坑、及び集石土坑が更に検出された。

10月には3区も旧石器時代のテストピット調査に入り、西側の休場層中位から石器ブロックが検出され、範囲を拡張して更に入力で掘り下げたところ、11月から12月にかけて西側の第I黒色帯から石器と礫群が検出された。一方、3区東側でも第II黒色帯から石器ブロックが2基検出され、その一方からは蔽石も出土した。さらに、重機で中間層を除去した後、第IIIスコリア帯の上面から陥穴と思われる土坑を6基検出した。その後、再びテストピットを設定して入力で掘削、調査したが遺構・遺物は見つからず、中部ローム層に達したところで3区の調査を終了した。

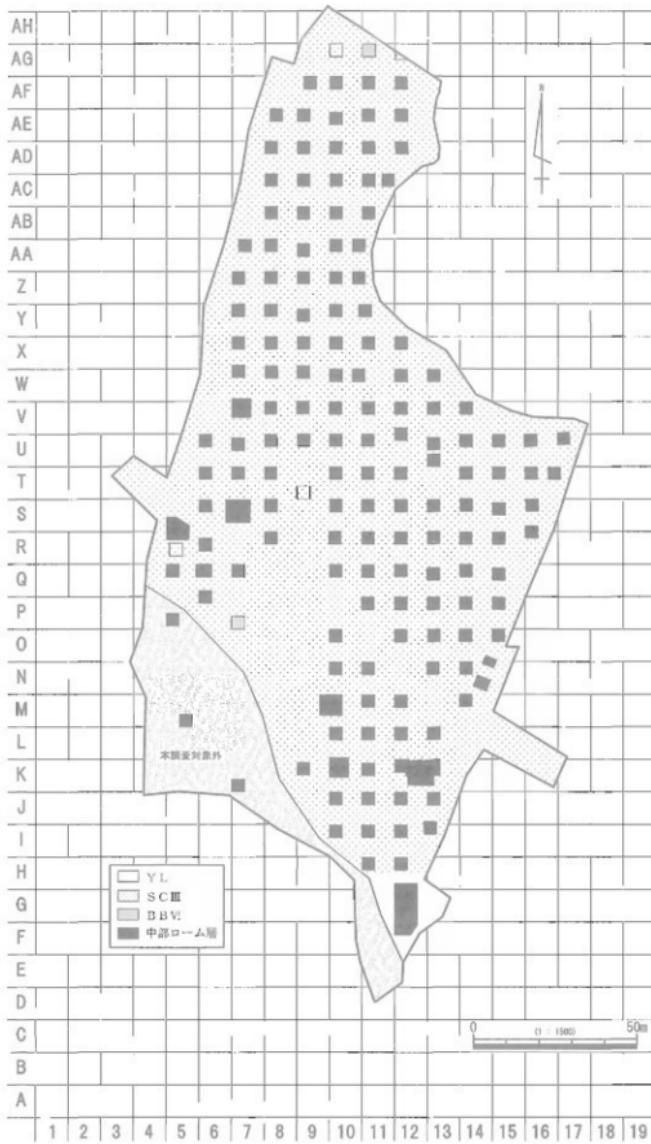
本調査II期では、縄文時代の遺構では、逆茂木痕と見られる底部施設をもつため陥穴として造られたと推測される土坑や、焼土跡、集石が検出されたが、住居跡は見つかなかった。旧石器時代の遺構では休場層から2区で礫群と配石が、3区では石器ブロックと礫群が検出された。第II黒色帯でも石器ブロックが2基検出された。また、第IIIスコリア帯上面では2区・3区ともに、第III黒色帯で陥穴として掘り込まれたと思われる土坑が計20基検出された。このような検出状況から、本遺跡が所在する丘陵が、旧石器時代から縄文時代にかけて狩り場として利用された場所であることが次第にわかつってきた。

本調査III期

最終年度の本調査III期では当初13m²の範囲を予定していたが、日本道路公団（当時）の指示で調査範囲を広げ、前年度の調査区の東側53.9m²が対象となった。そのため、当初計画よりも調査の着手が約1か月延び、平成17年5月から同年8月までの発掘調査となった。

まず、重機で表土を除去し、栗色土層から富士黒土層まで人力掘削したところ調査区西側と中央部で土器や石器が出土した。更に掘り下げるごとに出土量が減り、漸移層に到達すると全域で風倒木痕が見られた。休場層上位まで掘り下げてから富士黒土層の遺物出土状況を撮影した。

6月第2週からは休場層の人力掘削に入り、中央部で主に休場層中位からホルンフェルスの剥片の石器ブロックを検出した。また、この遺構は調査区南側の区域外に広がるものと推測された。休場層中位では他の遺構は認められず、遺物もごく少量の剥片が出土したのみであった。その後、石器ブロックと休場層上位～中位の出土状況を撮影し、第Iスコリア層が出たところで休場層下位の状況を同様に記録した。その後も第I黒色帯まで人力で掘削したが遺物、遺構は確認できなかつた。なお、ニセローム層上面で炭化物の集中範囲が認められ、怪が大きいものののみ計測して採取したが、周辺遺跡や前年度の調査から自然遺物の可能性が高いため図化はしなかつた。第I黒色帯を全域にわたって精査した後は、テストピット調査に切り替えた。7月半ばからテストピット内部を人力で掘削し、土層の計測や壁面の精査を行いつつ徐々に掘り下げた。第III黒色帯まで調査したが遺構も遺物も認められないため、テストピット外もニセローム層から第III黒色帯まで重機で掘り下げた。本遺跡では前年度までに第III黒色帯～第IIIスコリア帯で土坑が多く検出されていたため、テストピット内部で土坑のプランを精査したが見つかなかつた。この後はテストピット外を第III黒色帯まで重機で掘削して更にテストピットを設定し、第VII黒色帯及び中部ローム層内のペアスコリア2まで調査したが遺構、遺物は認められなかつた。その後は重機でテストピットを拡張し、基本土層面の精査と撮影を行つた。8月末には埋め戻して引き渡し、本調査III期並びに塚松遺跡の全調査を完了した。



第4図 グリッドと調査範囲

2 基本層序と土層の堆積状況

(1) 堆積状況（第5図～第6図）

調査区全体は愛鷹山の北西から南東へ走る尾根筋を、南北方向に縦断する。調査区の南から北への距離は約300mを測り、標高で見るならば高低差は約17m認められる。傾斜角は4°の緩斜面である。

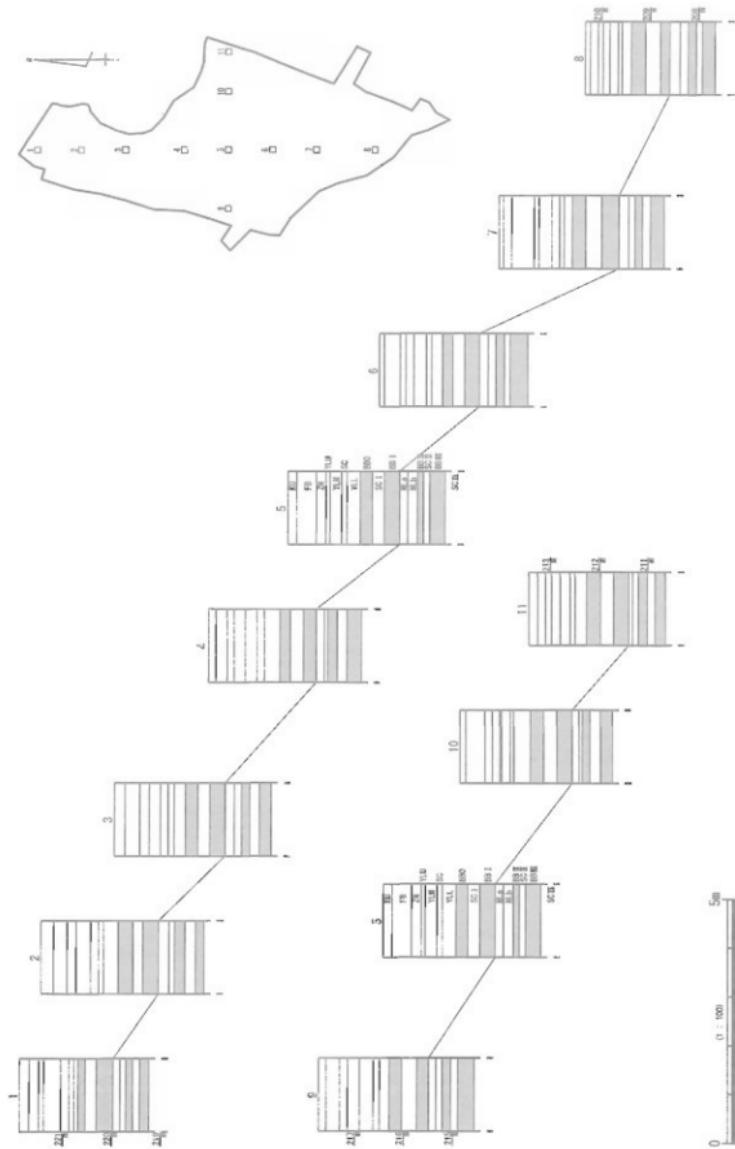
本遺跡の堆積状況は、愛鷹・箱根山麓標準土層とほぼ一致し、概ね良好であった。全体的に黒色土の発色が悪く、特に休場層直下黒色帶(B B 0)から下層の黒色帶は、褐色に近い程である。調査では中部ローム層以下も掘り下げて記録したが、基本土層として掲げるには省略した。

縄文時代の遺物が出土するのは暗褐色土層～富士黒土層(A N～F B)である。旧石器時代の遺物は休場層上位～下位(Y L U～Y L L)を中心として出土した他、休場層直下黒色帶(B B 0)～第Ⅲ黒色帶(B B III)までの各黒色帶を中心に出土した。



第5図 調査区と周辺地形

第6圖 土層柱狀圖



(2) 基本層序 (第7図)

第2層は表土直下の黒褐色土層である。新規スコリアを多量に含み、砂沢・仙石スコリアを含む。

第3層は黒色土層である。カワゴ平パミスを多量に含む。仙石スコリアを少量含む。

第4層は黒色土層である。赤褐色スコリアを少量含む。

第5層は暗褐色土層(AN)である。仙石スコリアをごく少量含む。

第6層は栗色土層(KU)である。

第7層は富士黒土層(FB)である。下層に径2~5mmの赤褐色スコリアを少量含む。

第8層は褐色土から黒褐色土への漸移層(ZN)である。

第9~12層は休場層(YL)である。土壤の色調と質感に応じて、休場層上位(YLU)、同中位(YLM)、同下位(YLL)に分層した。赤褐色スコリアを含み、休場層上位から下位にいくに従って、スコリアの径は大きく、含有量も増すようになる。休場層中位と下位に挟まれて、径5mm前後の暗赤褐色スコリアのブロックが認められた。

第13層は休場層直下黒色帶(BBO)である。黒色土の発色が弱い。粒径大の黒褐色スコリア、赤褐色スコリアを含む。

第14層は第Iスコリア層(SCI)である。褐色土を主体に、上部は径10mm以下の明黄褐色・黒褐色・赤褐色スコリアからなるスコリアのブロックを多量に含む。下部は暗赤褐色スコリアを多量に含む。

第15層は第I黒色帶(BBI)である。黒色土の発色が弱く、褐色に近い程である。赤褐色スコリアを多量に含む。

第16~17層はニセローム層(NL)である。明黄褐色土を主体とし、スコリアの含有量の多い上部(NLa)と、姶良丹沢広域火山灰(AT)の含有量が多い下部(NLb)に分層した。

第18層は第II黒色帶(BBII)である。第I黒色帶よりも更に黒色土の発色が弱い。赤褐色スコリアを多量に含む。

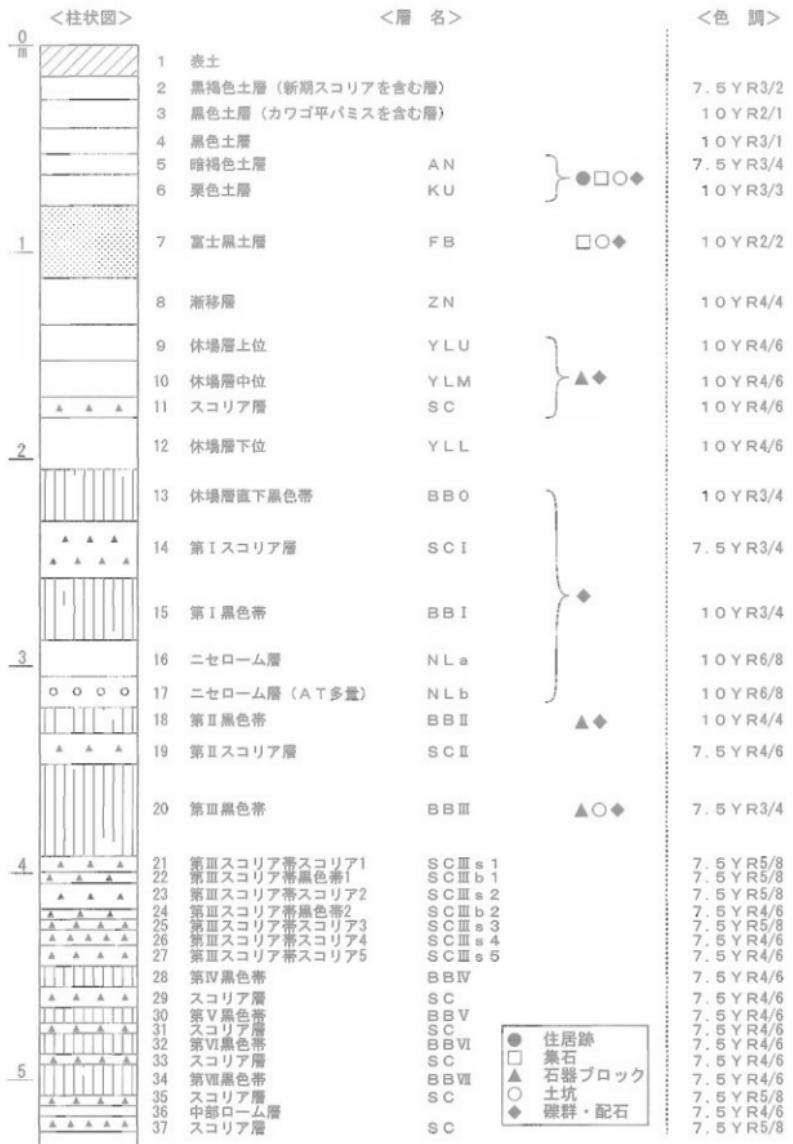
第19層は第IIスコリア層(SCII)である。第II黒色帶と第III黒色帶との間に包含される層であるが、境界が確認できないところもあった。径10mm以下の赤褐色スコリアを多量に含む。

第20層は第III黒色帶(BBIII)である。黒色帶としての発色は弱いが、上層の黒色帶よりは黒味が強い。粒径小の赤褐色スコリアを多量に含む。

第21~27層は第IIIスコリア帶(SCIII)である。明褐色土を主体にスコリアを多量に含む層である。特に第26層は、暗赤褐色・黒褐色・明黄褐色スコリアがブロック状に含まれ、非常に硬質となっている。愛鷹・箱根山麓標準土層における第IIIスコリア帶スコリア4(SCIII s 4)に相当すると考えられる。

第28~35層は第IV黒色帶(BBIV)から第VII黒色帶(BBVII)に相当する。黒色帶とスコリア層との互層で分層したが、スコリア量は微量な為、確認できないものもあった。

第36~37層は中部ローム層である。ローム層と赤褐色スコリアの集積層が互層で堆積する。



第7図 基本土層図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

旧石器時代の遺構・遺物は、古くは第III黒色帯より検出されており、本遺跡では縄文時代草創期の尖頭器類までを含めて、主として石器の特徴から5枚の文化層を設定した。

第I文化層は、第III黒色帯～第II黒色帯に設定し、遺構は第III黒色帯より愛鷹～箱根山麓に特有とされる陥穴の機能をもつ土坑が26基検出されたほか、礫群5基、配石11基、石器ブロック16基が検出されている。礫群・配石の中には炭化物集中範囲を伴って検出されたものも多い。遺物は、礫58点、石器542点の合計600点が出土しており、調査区南半分に比較的まとまった分布を示す。石器はホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩を中心に、接合資料も多く確認された。

第II文化層は、第I黒色帯～休場層直下黒色帯に設定した。遺構は礫群3基、配石2基のみで、遺物も礫72点、石器20点の合計92点と少なかった。調査区全体に渡って散漫な分布を示している。

第III文化層は、休場層に設定し、遺構は礫群9基、配石5基、石器ブロック6基が検出されている。遺物は、礫143点、石器858点の合計1001点と最も多い。分布は調査区全体にわたる。調査区北西部では在地系の箱根烟宿産黒曜石による比較的大規模な石器ブロックが検出されている。

第IV文化層は、休場層上位～縄文時代包含層下位の細石器類を、旧石器時代終末期の石器ととらえ、1つの文化層を設定した。細石核1点、細石刃19点が出土している。石材はすべてが黒曜石である。調査区全体に散漫に分布する。

第V文化層は、休場層上位～縄文時代包含層下位の、両面細調整の尖頭器及び有茎尖頭器を、旧石器時代から縄文時代への過渡期を特徴づける石器ととらえ、縄文時代草創期として1つの文化層を設定した。12点が出土している。多様な石材が用いられており、調査区全体に散漫に分布する。

第I～第V文化層の分析可能なすべての黒曜石については蛍光X線による産地分析を行った。本遺跡における産地の大まかな推移を見てみると、第I～第II文化層では黒曜石自体の出土数も少なく、産地もそのほとんどを蓼科冷山産を主体とする信州系が占め、在地系は天城柏崎産がわずかに混じる程度である。第III文化層では産地が一挙に多様化する。在地系では箱根烟宿産や神津島恩馳島産が登場し、中でも箱根烟宿産黒曜石は、1か所ではあるが大規模なブロックを形成している。信州系では蓼科冷山産から諏訪星ヶ台産及び和田鷹山産へ、主たる産地の移行が見られる。第IV文化層では出土数は少ないものの、神津島恩馳島産、続いて諏訪星ヶ台産が主体となる。第V文化層では黒曜石は和田鷹山産が1点出土したのみであった。第IV文化層における神津島恩馳島産及び諏訪星ヶ台産の利用は、そのまま縄文時代に受け継がれ、特に神津島恩馳島産は急激に数を増やし、逆に箱根烟宿産は急激に減少していく。

またホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩、黒曜石、碧玉についても肉眼による「母岩別資料分類」を行った。石器ブロックの記述の中で使用される「個体」という言葉は「同一母岩のもの」を意味する。分類結果は付属CD収録の「石器一覧表」、及び石材ごとの「個体別分類表」に記載するが、特に第I文化層では比較的同一母岩のまとまりが認められたため、石材ごとに母岩別の分布図を作成した（第17図～第22図）。

第3表 旧石器時代 文化層別石器組成表

《器種別》	ナイフ形石器	尖頭器	有茎尖頭器	擂器	削器	抉入削器	台形石器	石錐	影器	加工痕剥片	使用痕剥片	櫛形石器	石核	細石核	石刃	細石刃	刮片・碎片	礫器	點石	台石	計
第Ⅰ文化層 (BBⅢ～BBⅡ)					9					3	7	4	12			7	499	1		542	
第Ⅱ文化層 (BBⅠ～BBⅠ)	4			1							2					2	11			20	
第Ⅲ文化層 (YLL～YLJ)	56	19	3	9	5	2	1	1	1	6	9	19				8	718	1	1	858	
第Ⅳ文化層 (YLJ～縄文層)															1	17				18	
第Ⅴ文化層 (YLJ～縄文層)		4	8																	12	
計	60	23	8	4	18	5	2	1	1	9	18	4	31	1	17	17	1,228	1	1	1	1,450

《石材別》	ホルンフェルス	黒曜石						産地不明	珪質頁岩	碧玉	黄玉石	流紋岩	細粒安山岩	角閃石安山岩	輝石安山岩	その他石材	計		
		ガラス質黒色安山岩	夢料冷山群・他	和田露山群・他	腰防里ヶ台群	天城柏峰群	箱根烟宿群												
第Ⅰ文化層 (BBⅢ～BBⅡ)	408	92	17 (*1)	1		1				5	5				3	4	3	3	542
第Ⅱ文化層 (BBⅠ～BBⅠ)	12	1	2		3	1			1										20
第Ⅲ文化層 (YLL～YLJ)	292	12	7	19 (*2)	29	2	282	5	179 (*3)	3		1	1	21	2		2	1	858
第Ⅳ文化層 (YLJ～縄文層)			1		6		1	8	2										18
第Ⅴ文化層 (YLJ～縄文層)	3	5		1						1				1		1		1	12
計	715	110	27	21	38	4	283	13	182	9	5	1	1	21	6	4	6	4	1,450

*1) 夢料双子山群1点を含む

*2) 和田土屋橋北群2点、和田土屋橋西群1点、和田芙蓉ライト群1点を含む

*3) 4点を除いて全て「箱根烟宿群」と推定される

2 第Ⅰ文化層(BBⅢ～BBⅡ)の遺構と遺物

BBⅢからは、陥穴の機能をもつ上坑が26基検出された。土坑の大半は第Ⅲスコリア帯(SCⅢ)の上面で検出されたが、埋土にBBⅢの土を含むため掘り込み面はBBⅢであると判断した。開口部の径は約1.2～1.7m、深さは約1.3～1.6mと大型で、不規則ながらも列状をなし、箱根・愛鷹山麓で特に検出される狩猟用の土坑群と考えられる。遺構図及び計測表はP.66～74に、配列に関しては第6章総括で記載する。

その他の遺構は、礫群5基、配石11基、石器ブロック16基が検出された。礫群及び配石は、それぞれ石器ブロック、炭化物集中範囲と重なって検出されている。全体的な分布も、調査区中央部及び中央部西端にそれぞれ集中箇所が見られるほかは、ほとんどが調査区南部に集中している。

遺物は、礫58点、石器542点の合計600点が出土した。石材を見てみると、石器の約75%をホルンフェルスが占めており、ガラス質黒色安山岩の17%と合わせて約92%を両石材で占めている。黒曜石は全体の3.5%で、19点出土したが、うち16点を信州系の夢科冷山産が占め、在地系のものは天城柏峰産のものが1点出土したのみであった。石器542点中、石核が12点含まれ、また接合関係が確認された石器は45組、141点と全石器の26%を占める。本遺跡で石器製作が行われたことは間違いないが、製品は削器9点、楔形石器4点、加工痕剥片3点、使用痕剥片7点、敲石1点の合計24点と非常に少なく、ナイフ形石器は1点も出土していない。このことから本遺跡は生業活動の場というより、剥片剥離を主たる目的とする石器製作の場としての側面が強く受けられる。また作られた製品は持ち出された可能性を考慮に入れる必要がある。遺物の出土層位は第Ⅲ黒色帯からニセローム層の各層にわたるが、接合関係によって同時期のものであることが確認されている。

第4表 第Ⅰ文化層 石器組成表

		削器	楔形石器	加工痕剥片	使用痕剥片	石核	石刃	剥片・碎片	敲石	計
ホルンフェルス	Hor	5		3	3	8	5	384		408
ガラス質黒色安山岩	GAn	3	1			2		86		92
黒曜石 (Ob)	夢科冷山群	TSTY		3		1	1	11		16
	夢科双子山群	TSHG						1		1
	和田鹿山群	WDTY					1			1
	天城柏峰群	AGKT						1		1
珪質頁岩	SSh				3	1		1		5
碧玉	Ja					1		4		5
角閃石安山岩	An(Ho)							3	1	4
輝石安山岩	An(Py)	1						2		3
細粒安山岩	FAn							3		3
砂岩(粗粒)	CSS							1		1
硬質頁岩	HS							1		1
水晶	RC							1		1
計		9	4	3	7	12	7	499	1	542

もっとも、土坑群以外の遺構及び遺物の検出層位の主体は第II黒色帯であり、当初は第III黒色帯と第II黒色帯を別々の文化層として設定するつもりであったが、整理作業の段階で検討した結果、

- ① 遺物の接合及び母岩別分類等の作業の結果、B B III～S C II～B B II～N Lの各層にわたり、層位を超えて接合、または同一の母岩と推定される資料が認められたこと（第12図参照）。
- ② 平面分布上、B B IIIの遺構・遺物の出土エリアとB B IIのエリアが重なっており、かつ垂直分布上も、B B IIIの遺物とB B IIの遺物が交錯しており、明確に判別することが困難であったこと。
- ③ B B IIIとB B IIで、使用されている石材のほとんどがホルンフェルスとガラス質黒色安山岩に集中し、円礫のまま撤入した素材の直接打撃による剥片剥離という共通の特徴が見られること、また製品が極端に少ないという特徴も共通していること。
- ④ 磬群、石器ブロック、炭化物集中範囲等の遺構及び遺物が、第III黒色帯の土坑群の検出されなかったエリアに、まるで土坑群を避けるように分布しており、このことから土坑群とその他の遺構がほぼ同時代に存在した可能性があること（第8図参照）。

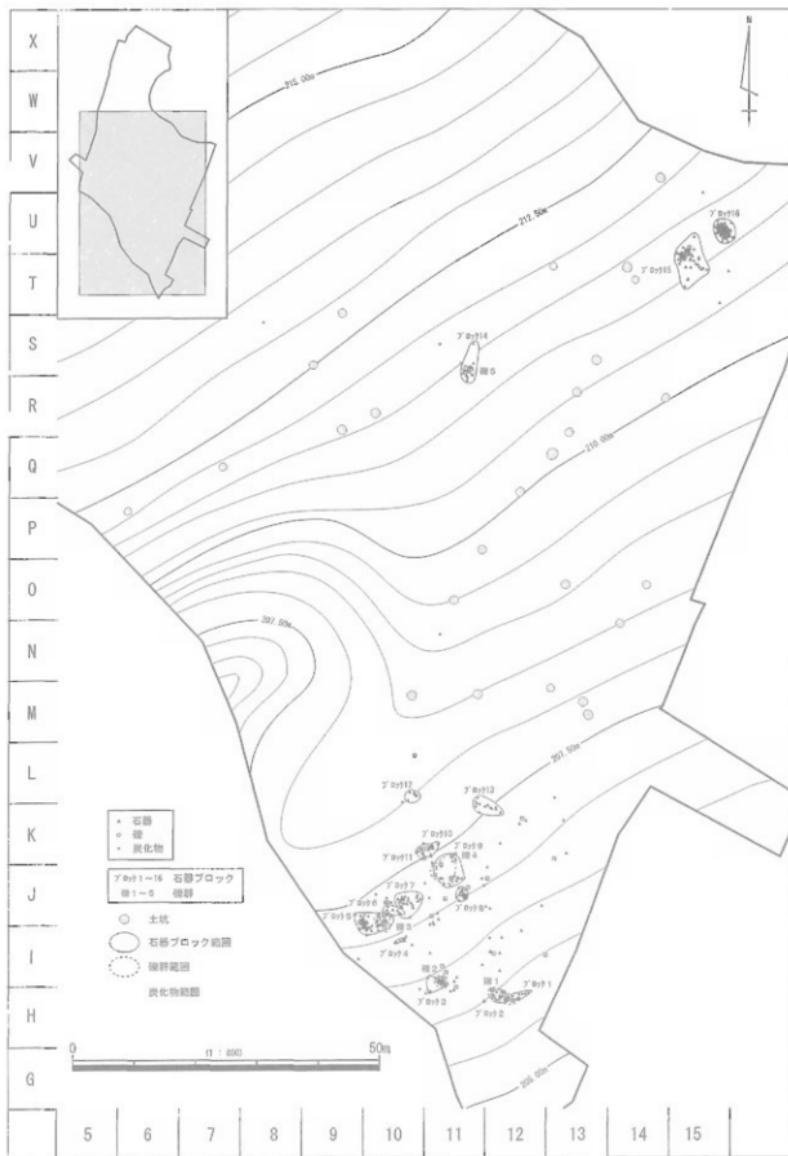
以上の理由により、複数の文化層に分かれる可能性はあるものの、1枚の文化層として報告することとした。

以下、第9図・第10図の(A)～(F)の範囲ごとに石材別の個別図を作成し、遺構については礐群、配石、石器ブロックに分けて記載する。統いて遺物の詳細を石器ブロックごとに記載するが、接合資料のうち図化されたものについては最後にまとめて記載する。

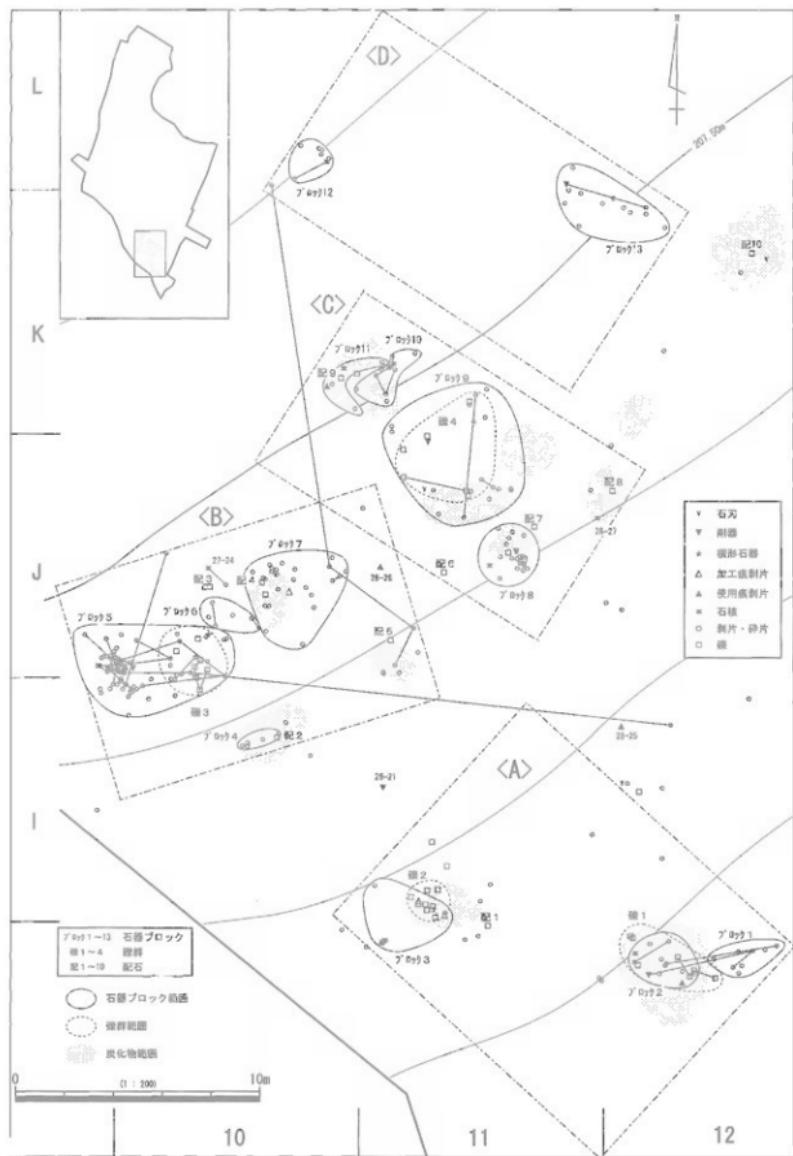
第5表 第I文化層 磐群・配石組成表

		1号礐群	2号礐群	3号礐群	4号礐群	5号礐群	計
輝石安山岩	An(Py)	1	1	-	4	2	8
玄武岩	Ba	5	1	7	-	-	13
多孔質安山岩	VAn	-	-	-	-	-	0
多孔質玄武岩	VBa	2	7	-	2	2	13
計		8	9	7	6	4	34
総重量(g)		7,330	1,450	2,640	10,220	500	22,140

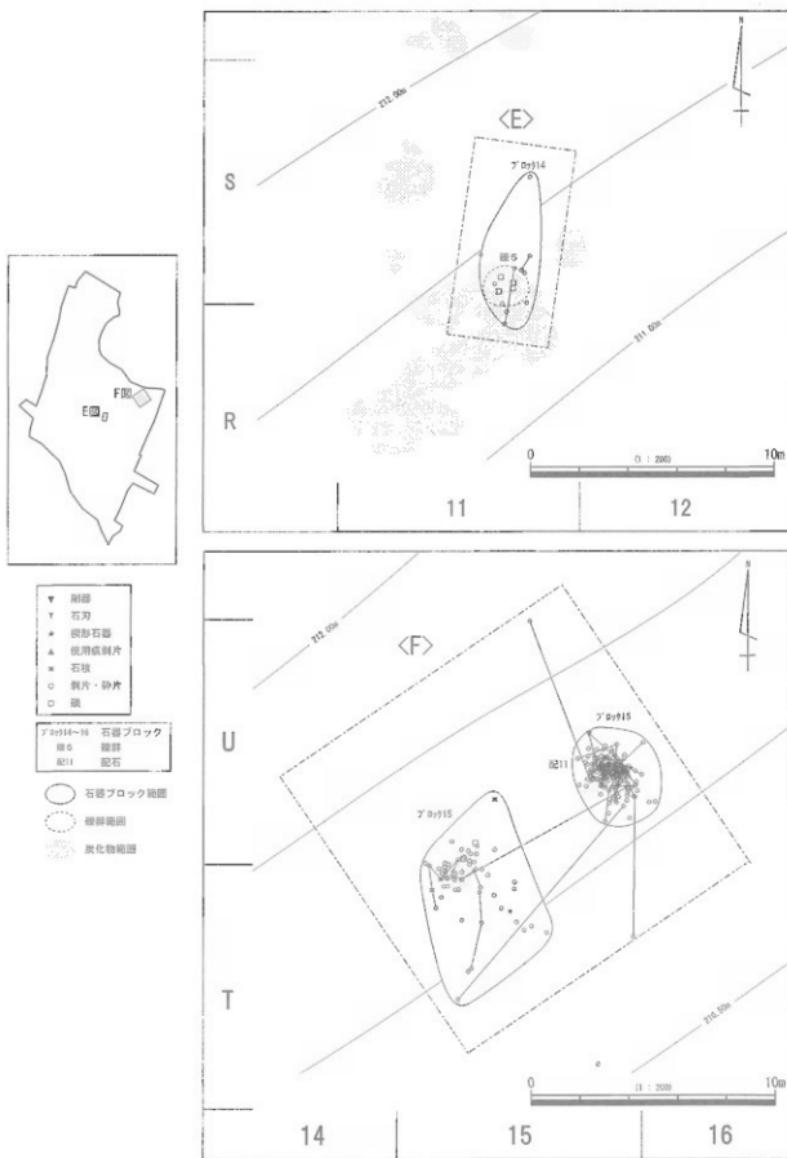
	個数	石材	重量(g)
1号配石	1	玄武岩	1,250
2号配石	1	玄武岩	1,100
3号配石	2	玄武岩	1,510
		玄武岩	2,830
4号配石	2	輝石安山岩	3,270
		輝石安山岩	850
5号配石	1	輝石安山岩	2,680
6号配石	1	玄武岩	1,210
7号配石	1	輝石安山岩	3,550
8号配石	1	輝石安山岩	1,650
9号配石	1	輝石安山岩	3,960
10号配石	1	輝石安山岩	1,880
11号配石	1	玄武岩	2,580



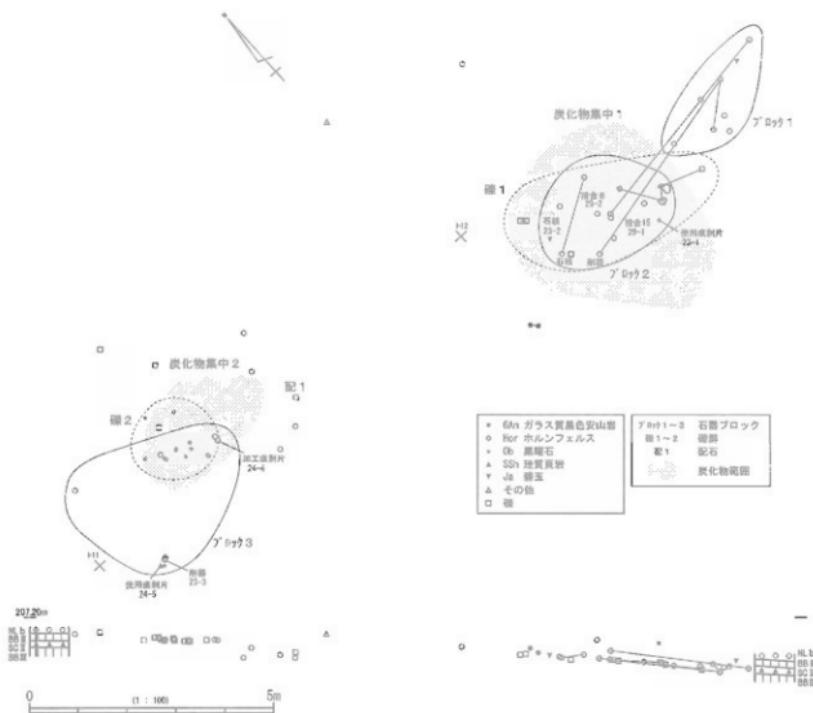
第8図 第I文化層 遺物分布図



第9図 第I文化層 器種別分布図(1)



第10図 第I文化層 器種別分布図(2)



第11図 第I文化層 石材別分布A図

(1) 範囲(A)の構成 (第11図)

1号砾群

グリッドH-Iの北西に位置し、2号石器ブロック及び炭化物集中範囲と重複している。8点の砾で構成され、検出層位の主体はB B IIである。石材の内訳は玄武岩5点、多孔質玄武岩2点、輝石安山岩1点で、総重量は7,330g(平均重量916.3g)である。玄武岩4点、多孔質玄武岩2点はそれぞれ接合が確認された。

2号砾群

グリッドI-IIの南西に位置し、3号石器ブロック及び炭化物集中範囲と重複している。9点の砾で構成され、検出層位はB B IIである。石材の内訳は多孔質玄武岩7点、玄武岩1点、輝石安山岩1点で、総重量は1,450g(平均重量161.1g)である。

1号配石

グリッドH-IIの北端、1号砾群と2号砾群の中間に位置する。検出層位はB B IIIである。石材は玄武岩で、重量は1,250gである。

1号石器ブロック

グリッドH-I2の北に位置し、2号石器ブロックと隣接している。8点の石器で構成され、検出層位はSC II～BB IIである。石材の内訳はホルンフェルス7点、碧玉1点で、全て剥片である。ホルンフェルスは母岩別分類により2個体(Hor 1, 2)に分類され、2号ブロックと共に通する。2号ブロックとの間に2組の接合関係を有する。

2号石器ブロック

1号礫群及び炭化物集中範囲と重複している。約8m西に3号ブロックがある。12点の石器で構成され、検出層位の主体はBB IIである。石材の内訳はホルンフェルス10点、碧玉1点、蓼科冷山産黒曜石1点である。ホルンフェルスと碧玉の石核が含まれるもの、製品はホルンフェルスの削器1点、黒曜石の使用痕剥片1点のみである。ホルンフェルスは母岩別分類により4個体に分類された。うちHor 1、2は1号ブロックと共に通し、Hor 5、14は3号ブロックと共に通する。蓼科冷山産黒曜石は15号ブロック出土の剥片と同一母岩(TSTY 3)と推定される。1号ブロックとの間に2組の接合関係を有する。なお検出層位がBB Iのものも3点(ホルンフェルス2点、黒曜石1点)含まれ、約40cmのレベル差があるが、それぞれ同一母岩と推定されるものが3号ブロックに含まれるため、2号ブロックより標高の高い3号ブロックから埋没過程で流れ込んだ可能性がある。

3号石器ブロック

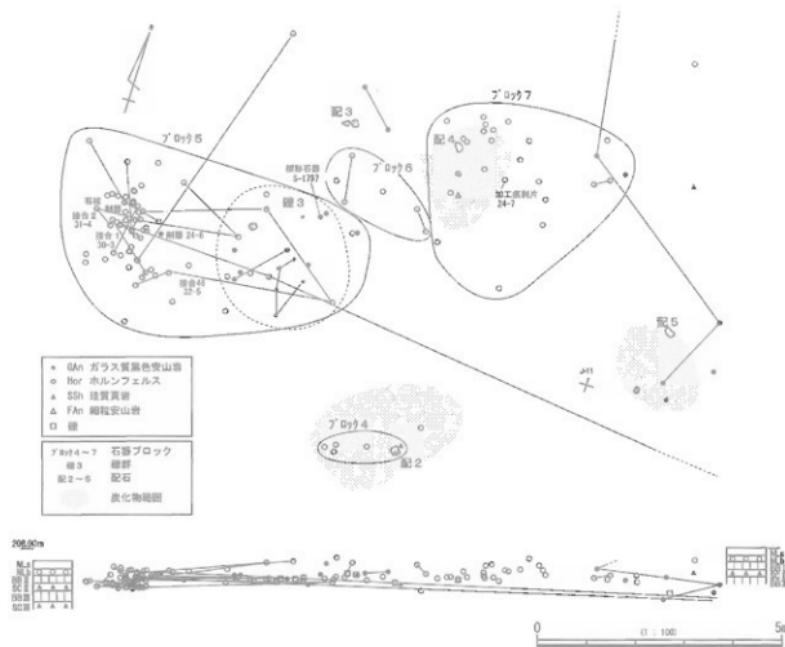
2号礫群及び炭化物集中範囲と重複している。8点の石器で構成され、検出層位はBB IIである。石材の内訳は、ホルンフェルス6点、珪質頁岩1点、蓼科冷山産の黒曜石1点である。製品は、ホルンフェルスの削器、加工痕剥片2点、珪質頁岩の使用痕剥片が含まれる。ホルンフェルスは母岩別分類により4個体に分類された。うちHor 5、14は2号ブロックと共に通し、Hor 19は4号ブロックと共に通する。蓼科冷山産黒曜石は15号ブロック出土の剥片と同一母岩(TSTY 3)と推定される。

第6表 1号～3号石器ブロック組成表

1号石器ブロック		剥 片 ・ 碎 片				
ホルンフェルス	Hor	7				
碧玉	Ja	1				
計		8				

2号石器ブロック		削 器	使 用 痕 剥 片	石 核	剥 片 ・ 碎 片	計
ホルンフェルス		Hor	1	1	8	10
黒曜石(Ob)	蓼科冷山群	TSTY		1		1
碧玉	Ja			1		1
計			1	1	2	8
						12

3号石器ブロック		削 器	加 工 痕 剥 片	使 用 痕 剥 片	剥 片 ・ 碎 片	計
ホルンフェルス		Hor	1	2	3	6
黒曜石(Ob)	蓼科冷山群	TSTY			1	1
珪質頁岩	SSh			1		1
計			1	2	1	4
						8



第12図 第I文化層 石材別分布B図

(2) 範囲(B)の遺構 (第12図)

3号礫群

グリッドI-10とJ-10の境に位置し、5号ブロックと重複している。7点の礫で構成され、検出層位はB B IIIである。石材は全て玄武岩で、総重量は2,640g(平均重量377.1g)である。うち5点は接合が確認された。

2号配石

グリッドI-10に位置し、4号ブロック、炭化物集中範囲と重複している。検出層位はB B IIである。石材は玄武岩で、重量は1,100gである。

3号配石

グリッドI-10に位置し、すぐ南に6号ブロックがある。検出層位はB B IIIである。隣接する2点の礫で構成され、石材は玄武岩で、重量は1,510gと2,350gである。赤化している。

4号配石

グリッドI-10に位置し、7号ブロックと重複している。検出層位はB B IIIである。2点の礫で構成され、石材は輝石安山岩で、重量は3,270gと850gである。

5号配石

グリッドJ-11の南西に位置し、炭化物集中範囲と重複している。検出層位はB B IIIである。石材は輝石安山岩で、重量は2,680gである。

4号石器ブロック

2号配石及び炭化物集中範囲と重複している。5点の石器で構成され、検出層位はB B IIである。石材の内訳はホルンフェルス4点、珪質頁岩1点で、製品はなく全て剥片である。ホルンフェルスは母岩別分類により2個体に分類された。うちHor19は3号ブロックと共通し、Hor7は5号ブロックと共通する。

5号石器ブロック

グリッドI-9、J-9、I-10、J-10の境を中心に拡がり、東側は3号礫群及び炭化物集中範囲と重複している。82点の石器で構成され、検出層位はB B III～S C II～B B IIの各層にわたるが、主体はS C IIである。石材の内訳はホルンフェルス73点、ガラス質黒色安山岩9点である。ホルンフェルスは石核2点を含むが、製品は削器1点しか出土せず、剥片剥離がこのブロックでの作業の中心であったと考えられる。ガラス質黒色安山岩に削器1点、楔形石器1点がある。ホルンフェルスは母岩別分類により7個体に分類された。Hor7は4号ブロックと、Hor9、I2は6号、7号ブロックと、Hor18は9号ブロックと共通する。同様にガラス質黒色安山岩は5個体に分類された。うちGAn2は9号、10号ブロックと、GAn3は7号、9号ブロックと、GAn4は13号ブロックと共通する。ホルンフェルスはブロック内外で8組、ガラス質黒色安山岩は1組の接合関係を有する。

6号石器ブロック

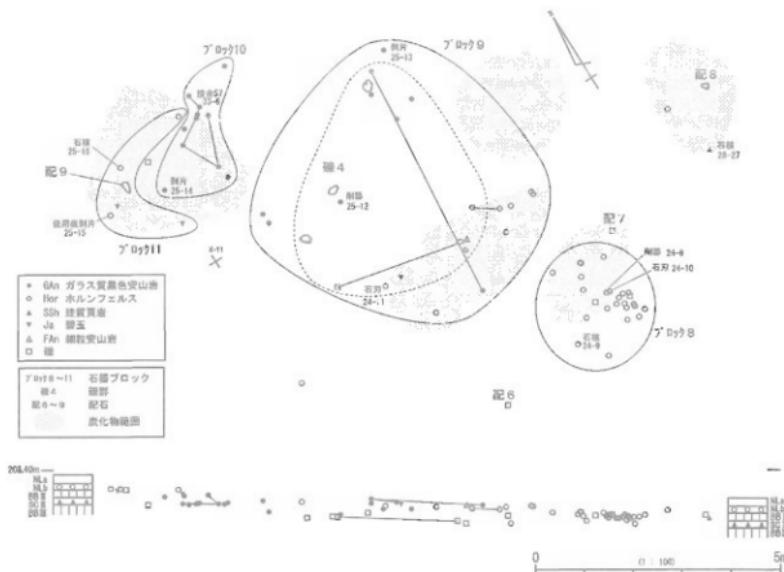
グリッドJ-10に位置し、5号及び7号ブロックと隣接している。7点の石器で構成され、検出層位はB B III～S C IIである。全てホルンフェルスの剥片で、2組の接合関係が確認された。母岩別分類により3個体に分類され、Hor9、I2は5号、7号ブロックと、Hor11は7号、9号ブロックと共通する。

7号石器ブロック

グリッドJ-10の西側に位置し、4号配石と重複する。23点の石器で構成され、検出層位はB B III～S C IIである。石材の内訳はホルンフェルス20点、ガラス質黒色安山岩2点、細粒安山岩1点である。製品はホルンフェルスの加工痕剥片1点のみである。ホルンフェルスは母岩別分類により3個体に分類され、Hor9、I2は5号、6号ブロックと、Hor11は6号、9号ブロックと共通する。同様にガラス質黒色安山岩は2個体に分類された。うちGAn3は5号、9号ブロックと共通する。ホルンフェルス1組、ガラス質黒色安山岩1組の接合関係を有する。ガラス質黒色安山岩のものはブロック外のものとの接合である。

第7表 4号～7号石器ブロック組成表

4号石器ブロック		剥片・碎片	5号石器ブロック			削器	楔形石器	石核	剥片・碎片	計
ホルンフェルス	Hor	4	ホルンフェルス	Hor	1			2	70	73
珪質頁岩	SSh	1	ガラス質黒色安山岩	GAn	1	1			7	9
計		5	計			2	1	2	77	82
6号石器ブロック		剥片・碎片	7号石器ブロック			加工痕剥片	剥片・碎片	計		
ホルンフェルス	Hor	7	ホルンフェルス	Hor	1	19	20			
ガラス質黒色安山岩	GAn		ガラス質黒色安山岩	GAn		2	2			
細粒安山岩	FAn		細粒安山岩	FAn		1	1			
計			計			1	22	23		



第13図 第I文化層 石材別分布C図

(3) 範囲(C)の遺構 (第13図)

4号砾群

グリッド J-11とK-11の境に位置し、9号ブロック及び炭化物集中範囲と重複している。6点の砾で構成され、検出層位はB B IIIである。石材は輝石安山岩4点、多孔質玄武岩2点で、総重量は10,220g(平均重量1,703.3g)と、比較的大型の砾が多い。うち輝石安山岩2点は接合が確認された。

6号配石

グリッド J-11に位置する。検出層位はB B IIである。石材は玄武岩で、重量は1,210gである。

7号配石

グリッド I-10に位置し、南西に隣接して8号ブロックがある。検出層位はB B IIである。石材は輝石安山岩で、重量は3,550gである。

8号配石

グリッド J-12の西端に位置し、炭化物集中範囲と重複している。検出層位はB B IIである。石材は輝石安山岩で、重量は1,650gである。

9号配石

グリッド K-10の南東に位置し、11号ブロック及び炭化物集中範囲と重複している。検出層位はB B IIである。石材は輝石安山岩で、重量は3,960gである。

8号石器ブロック

グリッド J-11に位置し、炭化物集中範囲と重複している。23点の石器で構成され、検出層位はS C II～B B IIである。全てホルンフェルスで、石核、石刃各1点を含むが、製品は削器1点のみである。

母岩別分類により2個体に分類され、Hor 4はブロックの主体を占め、9号、14号ブロックと共に通する。Hor17は石刃1点のみである。

9号石器ブロック

グリッドJ-11とK-11の境に位置し、4号疊群及び炭化物集中範囲と重複している。18点の石器で構成され、検出層位はB B III～S C II～B B IIにわたるが、主体はB B IIである。4号疊群とは平面分布では重複しているものの、垂直分布では疊群より約20cm高く、この付近ではB B IIIとB B IIの区別が明確になっている。

石材の内訳はホルンフェルス7点、ガラス質黒色安山岩9点、碧玉1点、細粒安山岩1点である。製品はガラス質黒色安山岩の削器1点のみである。ホルンフェルスは母岩別分類により3個体に分類された。うちHor 4は8号、14号ブロックと、Hor11は6号、7号ブロックと、Hor18は5号ブロックと共に通する。同様にガラス質黒色安山岩は3個体に分類された。うちGAn 1は10号ブロックと、GAn 2は5号、10号ブロックと、GAn 3は5号、7号ブロックと共に通する。ホルンフェルス1組、ガラス質黒色安山岩1組の接合関係を有する。

10号石器ブロック

グリッドK-11の南西に位置し、炭化物集中範囲と重複している。11点の石器で構成され、検出層位はB B III～S C II～B B IIにわたるが、主体はB B IIIである。石材はすべてガラス質黒色安山岩で、製品はない。剥片6点が接合する。母岩別分類により2個体に分類された。うちGAn 1は9号ブロックと、GAn 2は5号、9号ブロックと共に通する。

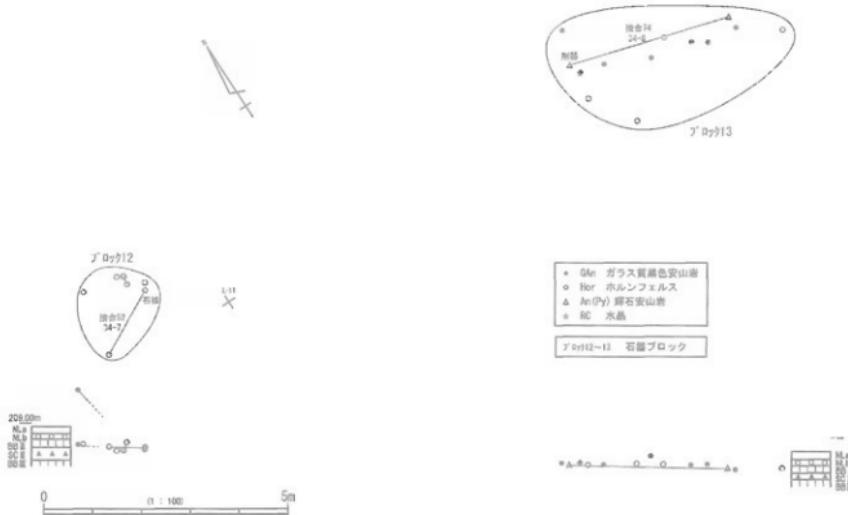
11号石器ブロック

10号ブロックの西に隣接し、9号配石及び炭化物集中範囲と重複している。5点の石器で構成され、検出層位はB B IIである。平面分布では10号ブロックに隣接しているものの、垂直分布では約20cm高く、この付近ではB B IIIとB B IIの区別が明確になっている。

石材の内訳はホルンフェルス3点、碧玉2点で、製品はホルンフェルスの使用痕剥片1点のみだが、石核1点も出土している。ホルンフェルスは母岩別分類により3個体に分類された。うちHor 5は2号、3号、12号、13号ブロックと共に通する。

第8表 8号～11号石器ブロック組成表

8号石器ブロック		削器	石核	石刃	剥片・碎片	計	10号石器ブロック		剥片・碎片						
ホルンフェルス	Hor	1	1	1	20	23	ガラス質黒色安山岩					GAn	11		
9号石器ブロック					使用痕剥片		11号石器ブロック					石核	剥片・碎片	計	
ホルンフェルス	Hor			1	6	7	ホルンフェルス	Hor	1	1	1	3			
ガラス質黒色安山岩					碧玉		碧玉					Ja		2	2
碧玉							計						1	1	3
細粒安山岩							計						1	1	5
計				1	1	16	計								



第14図 第I文化層 石材別分布D図

(4) 範囲(D)の遺構 (第14図)

12号石器ブロック

グリッドL-10の南東に位置する。周囲にほかのブロックではなく、独立して存在している。7点の石器で構成され、検出層位はB B IIである。全てホルンフェルスで、石核1点を含むが製品はない。母岩別分類により2個体に分類され、Hor 3は13号ブロックと、Hor 5は2号、3号、11号、13号ブロックと共に通する。2組の接合関係を有する。

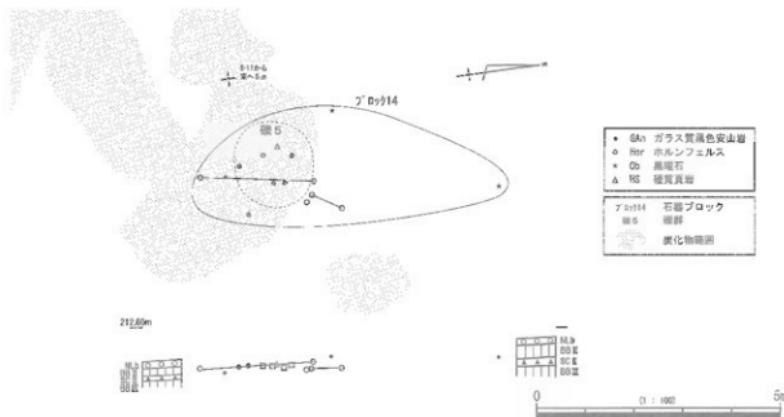
13号石器ブロック

グリッドK-11とK-12の境に位置する。12号ブロック同様、独立して存在している。14点の石器で構成され、検出層位の主体はB B IIである。石材の内訳はガラス質黒色安山岩7点、ホルンフェルス4点、輝石安山岩2点、水晶1点である。製品は輝石安山岩の削器1点のみであり、剥片と接合する。ホルンフェルスは母岩別分類により2個体に分類され、Hor 3は12号ブロックと、Hor 5は2号、3号、11号、12号ブロックと共に通する。同様にガラス質黒色安山岩は3個体に分類された。うちGAn 4は5号ブロックと共に通する。

第9表 12号・13号石器ブロック組成表

12号石器ブロック		石核	剥片・碎片	計
ホルンフェルス	Hor	1	6	7

13号石器ブロック		削器	剥片・碎片	計
ホルンフェルス	Hor	4	4	4
ガラス質黒色安山岩	GAn	1	7	7
輝石安山岩	An(Py)	1	1	2
水晶	RC	1	1	1
計		1	13	14



第15図 第I文化層 石材別分布E図

(5) 範囲(E)の遺構 (第15図)

5号砾群

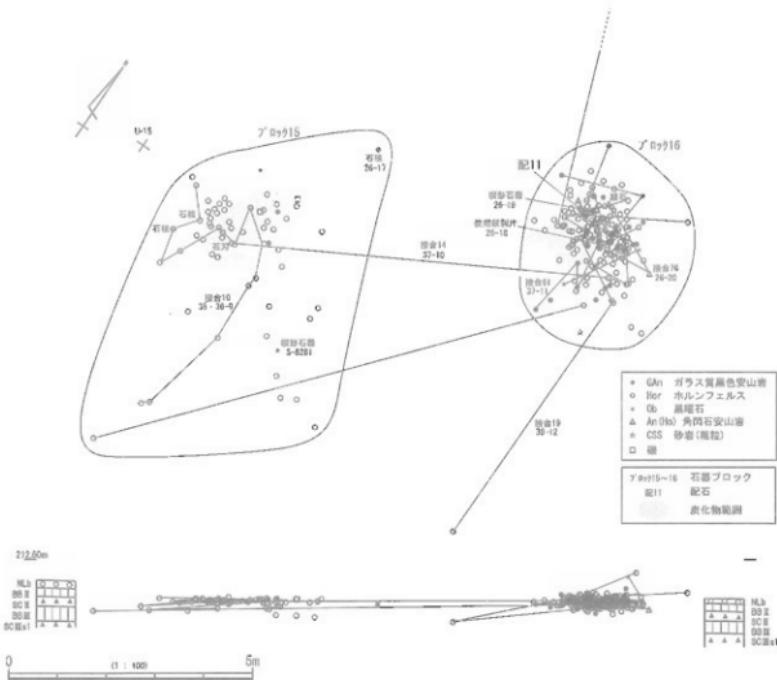
グリッド S-II の南に位置し、14号ブロック及び炭化物集中範囲と重複している。4点の礫で構成され、検出層位は B B II である。石材は輝石安山岩2点、多孔質玄武岩2点で、総重量は500g(平均重量125g)と、小礫が多い。

14号石器ブロック

グリッド R-II と S-II の境に位置し、5号砾群及び炭化物集中範囲と重複しているが、ほかのブロックとは孤立している。II点の石器で構成され、検出層位は B B II である。石材の内訳はホルンフェルス5点、ガラス質黒色安山岩2点、黒曜石3点、硬質頁岩1点と多様である。全て剥片で製品はない。黒曜石3点は、2点が蓼科冷山産で1点は天城柏峰産である。ホルンフェルスは母岩別分類により2個体に分類され、うちHor 4は8号、9号ブロックと共に通す。同様にガラス質黒色安山岩は2個体に分類された。蓼科冷山産黒曜石は同一母岩(TSTY 1)と推定され、16号ブロックと共に通す。ホルンフェルスは2組の接合関係を有する。

第10表 14号石器ブロック組成表

14号石器ブロック		剥 片 ・ 碎 片
ホルンフェルス	Hor	5
ガラス質黒色安山岩	GAn	2
黒曜石(Ob)	蓼科冷山群	TSTY
	天城柏峰群	AGKT
	硬質頁岩	HS
計		11



第16図 第I文化層 石材別分布F図

(6) 範囲(F)の遺構 (第16図)

11号配石

グリッドU-15に位置し、16号ブロック及び炭化物集中範囲と重複している。検出層位はB B IIである。石材は玄武岩で、重量は2,580gである。赤化している。

15号石器ブロック

グリッドT-15とU-15の境に位置し、中心部は炭化物集中範囲と重複している。約6m北東に16号ブロックが位置する。63点の石器で構成され、検出層位はS C II～B B IIにわたるが、主体はB B IIである。石材の内訳はホルンフェルス58点、ガラス質黒色安山岩3点、蓼科冷山産黒曜石1点である。ホルンフェルスが主体で、石核2点、石刃1点が含まれるもの、他は全て剥片で製品は含まない。製品は黒曜石の楔形石器1点のみであった。ホルンフェルスは母岩別分類により6個体(Hor21～26)に分類され、全ての個体が16号ブロックと共に通する。同様にガラス質黒色安山岩は3個体に分類され、GAn13は1点のみだが16号ブロックと共に通する。黒曜石は2個体に分類され、TSTY2は16号ブロックと、TSTY3は2号、3号ブロックと共に通する。ホルンフェルスはブロック内で1組、16号ブロックとの間に2組の接合関係を有する。

16号石器ブロック

グリッドU-15とU-16の境に位置し、中心部は11号配石及び炭化物集中範囲と重複している。191点の石器で構成され、第Ⅰ文化層中で最も石器が集中的に分布する。検出層位はSCⅡ～BBⅡ～NLにわたるが、主体はBBⅡである。石材の内訳はホルンフェルス141点、ガラス質黒色安山岩37点、夢料冷山産黒曜石8点、角閃石安山岩4点、砂岩(粗粒)1点と多様である。15号ブロック同様ホルンフェルスが主体だが、石刃1点が含まれるもの、製品は使用痕剥片1点のみである。ホルンフェルス以外では黒曜石の楔形石器が2点出土したほか、角閃石安山岩の4点が接合し、敲石1点となった。ホルンフェルスは母岩別分類により6個体(Hor21～26)に分類され、全ての個体が15号ブロックと共に通す。ガラス質黒色安山岩は、母岩別分類の結果、全ての剥片が同一母岩(GAn13)と推定される。黒曜石は2個体に分類され、TSTY1は14号ブロックと、TSTY2は15号ブロックと共に通す。ブロック内で14組、15号石器ブロックとの間に2組、ブロック外との間に2組の接合関係を有する。

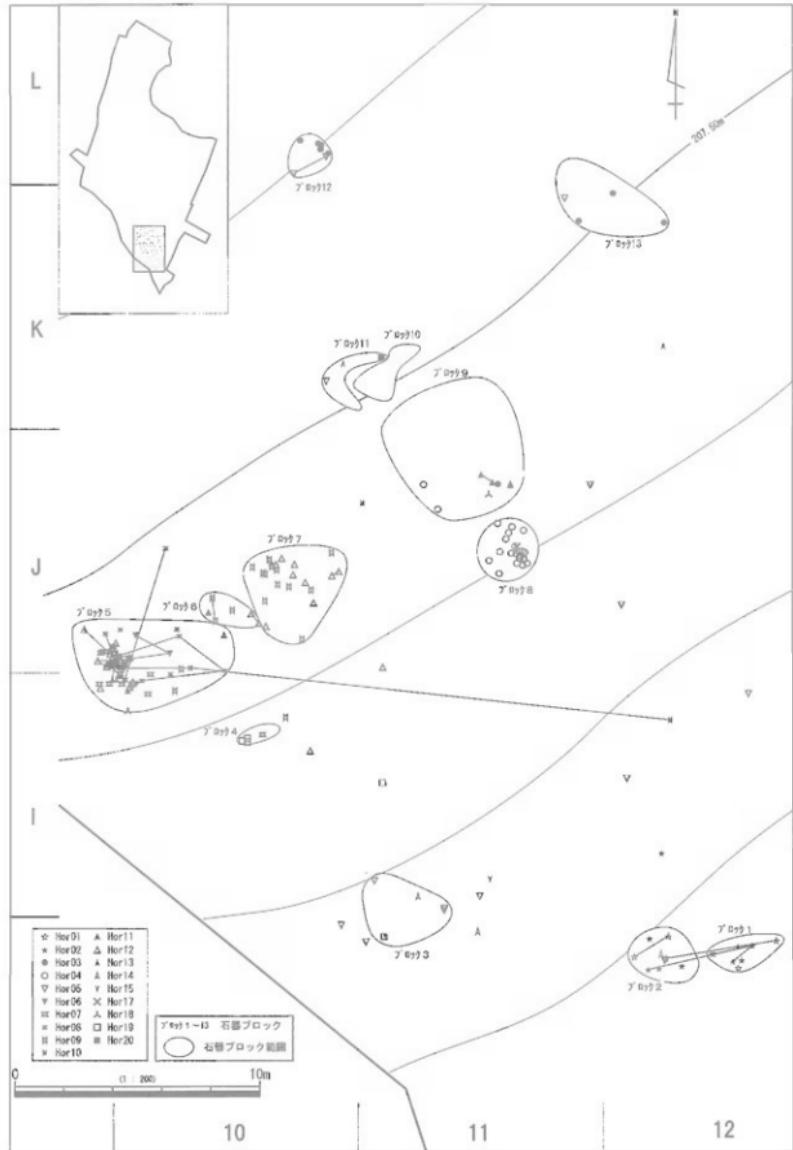
第11表 15号・16号石器ブロック組成表

楔形石器		15号石器ブロック					16号石器ブロック					
		石核	石刃	剥片・碎片	計	楔形石器	使用痕剥片	石刃	剥片・碎片	敲石	計	
ホルンフェルス	Hor	2	1	55	58		1	1	139		141	
ガラス質黒色安山岩	GAn		1	2	3				37		37	
黒曜石(Ob)	夢料冷山群	TSTY	1		1	2	2		6		8	
角閃石安山岩	An(Ho)								3	1	4	
砂岩(粗粒)	CSS								1		1	
計		1	3	1	58	63	2	1	1	186	1	191

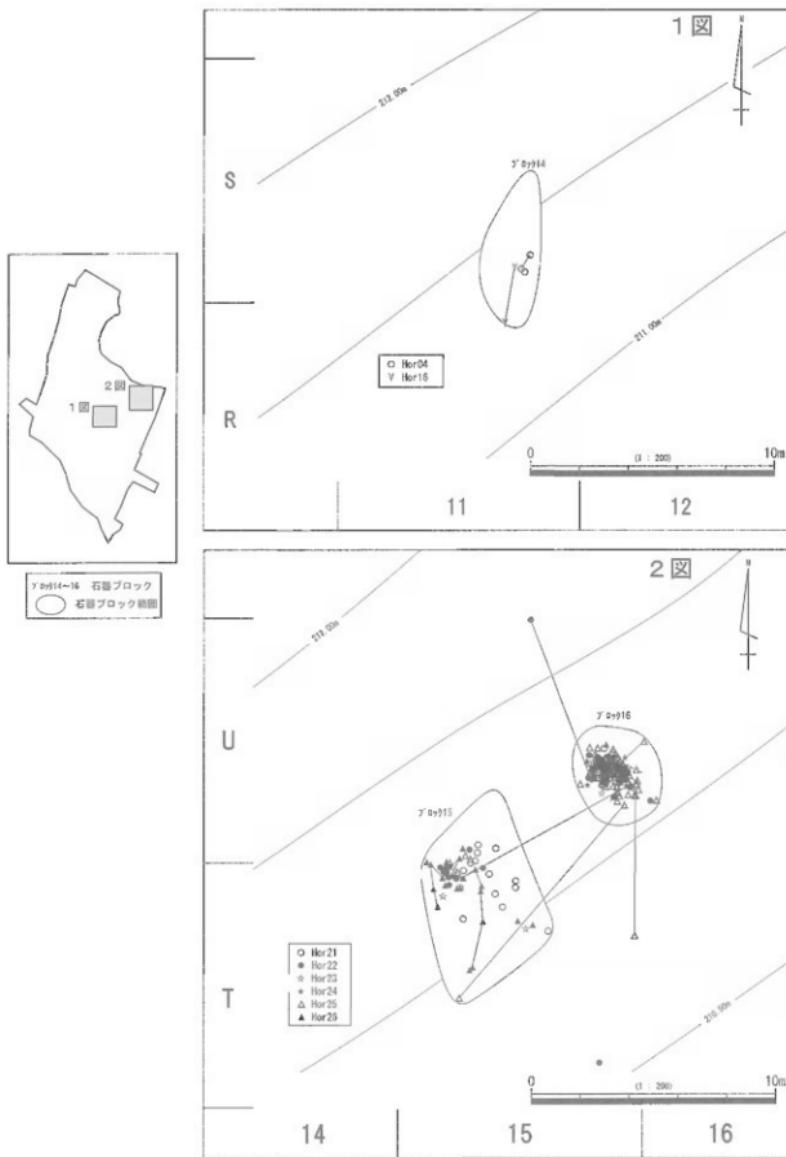
(7) 範囲外の遺構 (第9図)

10号配石

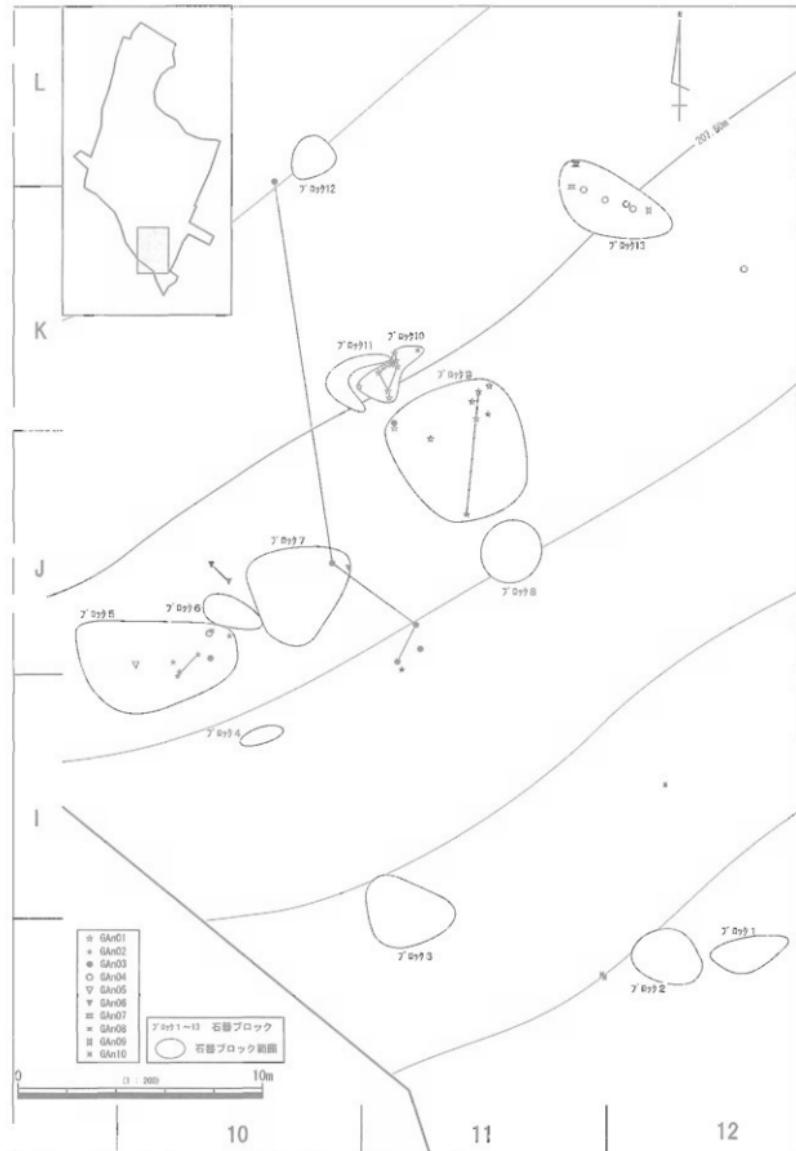
グリッドK-12に位置し、炭化物集中範囲と重複している。検出層位はBBⅡである。石材は輝石安山岩で、重量は1,880gである。



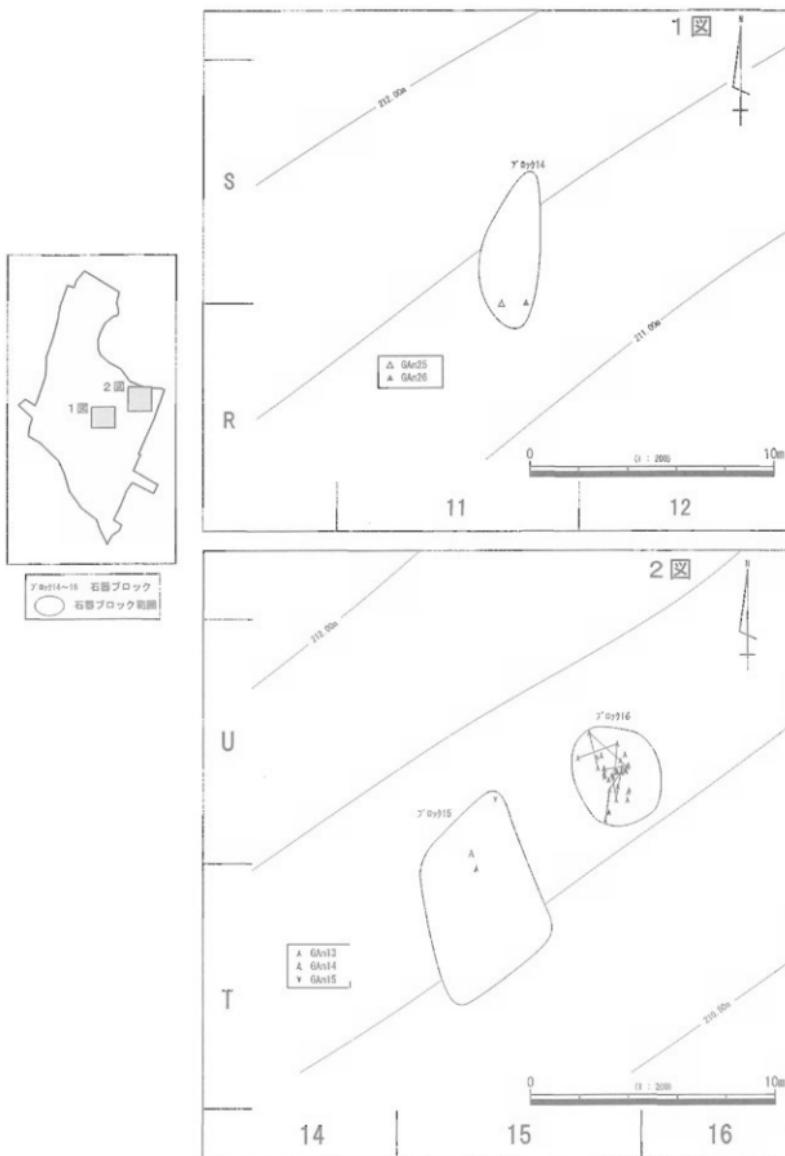
第17図 第I文化層 個体別資料分布図(1)



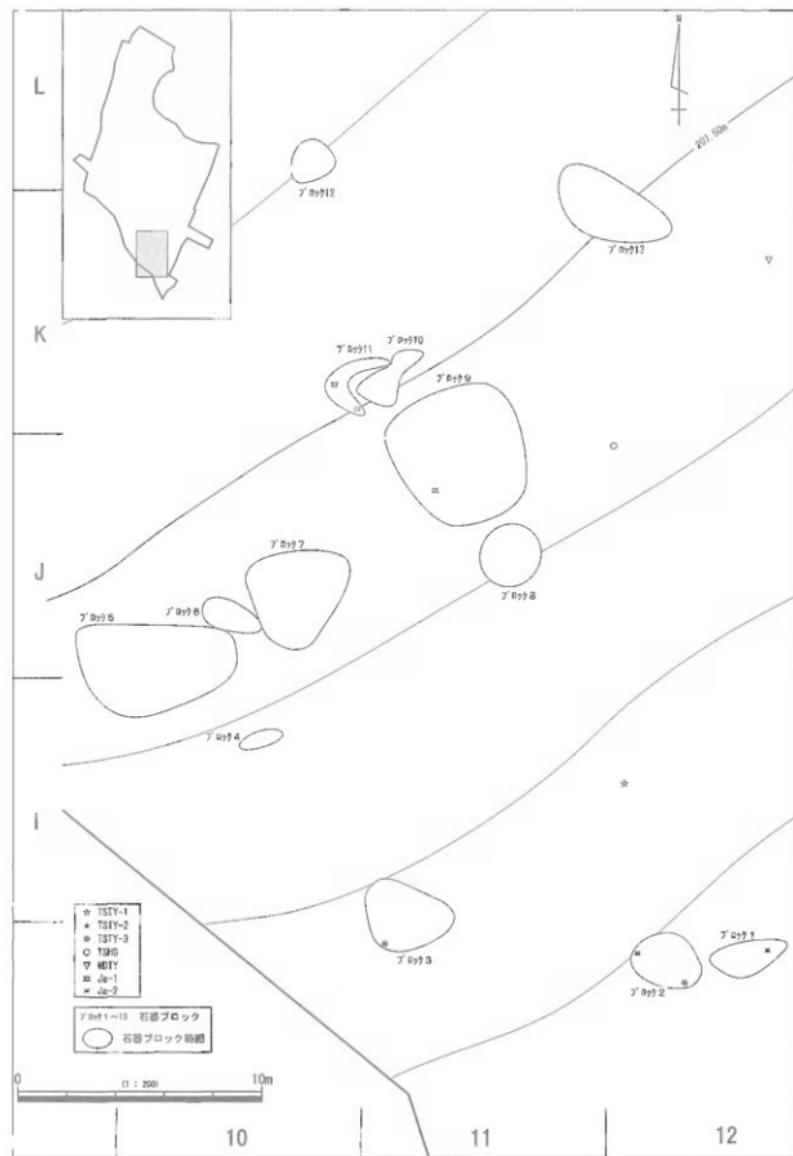
第18図 第I文化層 個体別資料分布図(2)



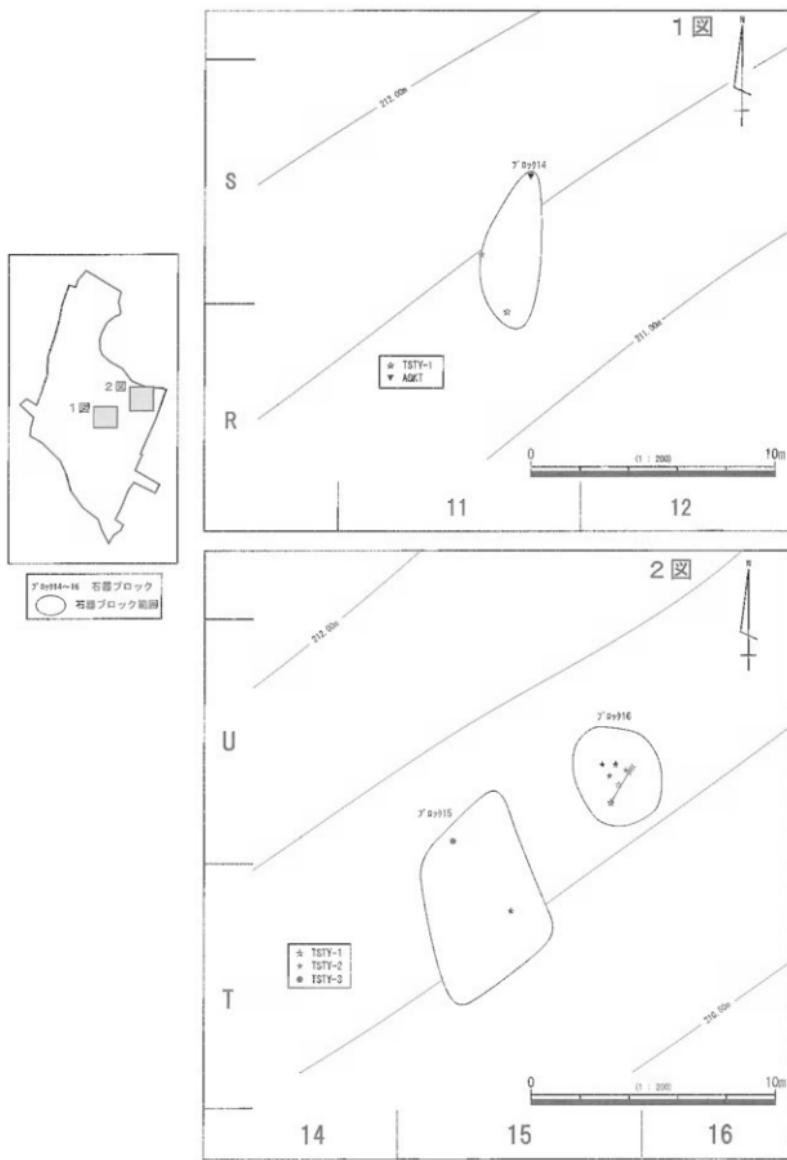
第19図 第Ⅰ文化層 個体別資料分布図(3)



第20図 第I文化層 個体別資料分布図(4)



第21図 第I文化層 個体別資料分布図(5)



第22図 第I文化層 個体別資料分布図(6)

(8) 石器ブロック内の遺物 (第23図1～第26図20)

1号石器ブロック

ホルンフェルスの剥片に碧玉の剥片1点が加わる。ホルンフェルスの中には比較的大きい剥片も認められるが、製品は含まない。2号ブロックとの間に2組の接合関係を有する。

2号ブロックの削器に接合する調整剥片2点が含まれる(p.47、接合番号15、第29図1)。

2号石器ブロック (第23図1～2)

ホルンフェルスの削器、石核、剥片に加えて、蓼科冷山産黒曜石の使用痕剥片及び碧玉の石核が含まれる。1号ブロックとの間にホルンフェルス2組の接合関係を有する。

ホルンフェルスの削器には、1号ブロックの調整剥片2点が接合する(p.47、接合番号15、第29図1)。

ホルンフェルスの石核は剥片素材で、素材剥片剥離に関わる接合資料が得られている(p.47、接合番号6、第29図2)。

ホルンフェルスの剥片はいずれも不定形である。

黒曜石の使用痕剥片(1)は、上部2面が折損した剥片を使用している。末端部はペン先状の厚みのある刃部を有し、その右の刃部に特に多くの微細剥離痕が認められる。腹面右下に認められる幅広の剥離は左下の微細な使用痕の後になされたもので、使用に伴うものと考えられる。

碧玉の石核(2)は、折れた剥片の下半を利用していている。素材剥片は、平滑な主要剥離面をもち、背面には末端部を中心に自然面が残存する。打面を素材剥片の折面に固定しており、剥片剥離は素材剥片の背面右側縁から中央部にかけて行われる。縦長の剥片の剥離を意図していたと考えられる。また、腹面の末端部及び右側縁を中心に微細剥離痕が認められ、使用の痕跡と考えられる。

3号石器ブロック (第23図3～第24図5)

ホルンフェルスの削器、加工痕剥片に、珪質頁岩の使用痕剥片、蓼科冷山産黒曜石の剥片が加わる。製品の組成に占める割合が高い。

ホルンフェルスの削器(3)は、剥片を素材に、周囲に断続的に調整剥離が行われる。素材剥片打面部には調整剥離は行われないが、その左側から剥片末端部にかけて特に顯著に調整がなされる。左側縁については背腹両面に粗い調整がなされる。背面に残された古い剥離痕は主要剥離とほぼ同じ方向からのものであり、同一の平坦な剥離面に打面を固定して、連続して剥片剥離がなされたと推定される。

ホルンフェルスの加工痕剥片(4)は、打点部から垂直に折れた剥片を素材に、その厚みのある末端部に調整を行っている。背面の剥離痕は、多くが主要剥離面と同じ方向からのものであり、同一の平坦な剥離面に打面を固定して、連続して剥片剥離がなされたと推定される。

珪質頁岩の使用痕剥片(5)は、背面下部に自然面が残る剥片を素材としている。鋭い縁辺をもつ左側縁に使用痕と考えられる微細剥離痕が認められる。右側縁から末端部には、折面様の急角度の剥離が並ぶが、これは主要剥離に先行する加撃によって形成されたものと考えられる。背面の剥離痕は、多くが主要剥離と同じ方向からのものであり、同一の比較的平坦な剥離面に打面を固定して、連続して剥片剥離がなされたと推定される。

剥片はいずれも不定形であり、ホルンフェルスの特に大きいもの(S-1729)はするどい縁辺を持ち、使用されている可能性がある。

4号石器ブロック

ホルンフェルスの剥片に珪質頁岩の剥片が加わる。珪質頁岩の剥片(S-1858)は大きいものではないが、背面に広く自然面が残る。ホルンフェルスの剥片も自然面が残存するものがある。

5号石器ブロック (第24図6)

ホルンフェルスが主体を占め、ガラス質黒色安山岩の削器、楔形石器、剥片が伴う。ホルンフェルスは削器1点しか製品は組成せず、剥片剥離がこのブロックでの作業の中心であったと考えられる。ブロック内外で9組の接合関係を有する。

ホルンフェルスの削器は、石核を転用したもので、そこから剥離された剥片が接合する(p.47、接合番号1、第30図3)。

ホルンフェルスの石核には剥片2点が接合するもの(p.47~48、接合番号2、第31図4)と、剥片6点が接合するもの(p.48、接合番号46、第32図5)がある。

ホルンフェルスの剥片どうしが接合するものは5組あり、ブロック外の剥片と接合するもの2組を含む。1組(接合番号44)は5号ブロック北のグリッドJ-10から出土した剥片を含み、同一の打面から剥離された剥片が接合する。ブロック外出土の剥片が先に剥離され、打面での剥離が介在し、5号ブロック出土の剥片が剥離される。5号ブロック出土の剥片は節理面に沿って折れている。もう1組(接合番号54)は5号ブロック出土の剥片3点と約20m距離を隔てたグリッドI-12出土の剥片が接合する。いずれも自然面を多く残す不定形な剥片である。5号ブロック出土の3点が先に剥離され、グリッドI-12の比較的大きい剥片が最後に剥離されている。

ガラス質黒色安山岩の削器(6)は横長剥片を素材としている。末端部は折れ、あるいはステップしてめくれあがっている。打面調整がなされているが、打撃されるのは平坦な剥離面である。右側縁から末端部にかけて腹面側から、比較的急斜度の調整剥離が行われる。

ガラス質黒色安山岩の楔形石器(S-1797)は、厚みのある台形の形態で、背面の下半に自然面が残る。腹面だけに剥離が認められる辺2辺、背腹両面に剥離が認められる辺1辺、剥離痕の認められない鋭い縁辺1辺で構成される。背腹両面に剥離が認められる辺では、剥離の打点部周辺につぶれが認められる。断面はカマボコ型、もしくはクサビ形である。

ガラス質黒色安山岩には1枚の剥離面を打面にして連続して剥離された縦長の剥片2点が接合する例(接合番号59)が含まれる。

6号石器ブロック

ホルンフェルスの剥片6点で構成され、2組の接合関係を有する。両者とも折れた剥片の接合である。剥片には比較的大きいものが多く含まれる。

7号石器ブロック (第24図7)

ホルンフェルスを主体に、ガラス質黒色安山岩、細粒安山岩を含む。1点の加工痕剥片と剥片が組成する。ブロック内外で2組の接合関係が確認された。

ホルンフェルスの加工痕剥片(7)は、末端部が折損した薄い剥片を素材としている。打点側の背面に調整がなされる。特に右肩部の調整は深く抉るような剥離になっている。

ホルンフェルスの剥片の中には比較的大きいものも含まれているが、使用の痕跡は認められない。

ガラス質黒色安山岩では、7号ブロックの剥片1点、グリッドJ-11の剥片2点、グリッドL-10の剥片1点の計4点が接合している(接合番号60)。グリッドJ-11の1点とグリッドL-10のものは折面で接合する。これらの剥片は3度の連続した剥離で得られたものである可能性が高い。

8号石器ブロック (第24図8~10)

ホルンフェルスの石器がまとめて出土している。

削器(8)は、打点部から垂直に折れた剥片を素材とする。打面は平坦な剥離面であり、また背面に自然面を広く残す。比較的鋭い縁辺を有する腹面左側縁に調整加工を施す。

石核(9)は、背面に自然面を残す厚みのある剥片を素材としている。素材は平坦な節理に沿った剥離

面を打面に剥離されている。剥片を折るように剥片剥離が行われている。

石刃(10)は平坦な剥離面を打面にして剥離されている。背面に残る先行する剥離の方向は3枚とも主要剥離とはほぼ一致する。左側縁上部は折れている。末端部にいくにしたがって薄く、細くなる。

剥片類には比較的大きいものも含まれるが、小さいものが大部分を占める。

9号石器ブロック (第24図11～第25図12・13)

ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩を中心に、碧玉、細粒安山岩を含む。2組の剥片どうしの接合関係を有する。

ホルンフェルスの石刃(11)は平坦な剥離面を打面にして剥離されている。背面の先行する剥離は概ね主要剥離と同一方向である。寸詰まりで、打点側より末端側が分厚くなる。

ホルンフェルスの剥片は、縦長のものや背面の大部分が自然面で覆われる大型のものを含む。

ガラス質黒色安山岩の削器(12)は、背面全体に平坦な自然面が残る剥片を素材としている。2枚の剥離面の稜上を打撃して剥片剥離が行われており、打点周辺は厚みをもつ。鋭い縁辺をもつ右下側縁に、背面側に比較的平坦な調整加工を行っている。

ガラス質黒色安山岩の剥片には比較的大きい剥片も含まれ、ここで剥片剥離が行われたものと考えられる。13は打面側を折損する。左側縁に細かい剥離が認められるが、その剥離が行われたのがどの段階であったのかは不明である。

1点のみ出土している碧玉の剥片は小型で、黄色みを帯びた緑色を呈するものである。

10号石器ブロック (第25図14)

ガラス質黒色安山岩の剥片のみで構成される。

剥片 6点が接合する(p. 48、接合番号57、第33図6)。

剥片のうち1点を図示した(14)。背面には自然面を残し、その周間に小さい剥離痕が多数認められる。底面は比較的広い剥離面であり、主要剥離と同時に生じたと考えられる左面の折れが底面に広く伸びている。

11号石器ブロック (第25図15～16)

ホルンフェルスの使用痕剥片、石核、剥片と碧玉の剥片が組成する。

使用痕剥片(15)は、左右の側縁に比較的鋭い縁辺をもつ剥片を素材としている。背面左半には自然面が残存する。打面は2枚の剥離面で構成されるが、打撃されているのは平坦な面である。左側縁上半に特に多くの剥離痕が残されるが、腹面左側縁にも微細な剥離が認められる。

石核(16)は背面に自然面を残す大型の剥片を素材としている。素材剥片の末端部は折損している。腹面打点側には左右から大きめの剥片剥離が行われている。また、素材剥片の打面周辺には腹面から比較的小さく段階状になる剥離が行われている。そのほかにも、縁辺には連続しない微細な剥離が各所に認められる。

碧玉の剥片2点は小型で、白みがかった薄い緑色である。

12号石器ブロック

ホルンフェルスのみで構成される。2組の接合関係を有する。

剥片素材の石核に剥片1点が接合する(p. 48、接合番号52、第34図7)。

剥片の中には折面で接合する大型で不定形の剥片が含まれる。2枚の剥離面の稜上を打撃して剥離しており、末端部には幅広く鋭い縁辺を有する。

13号石器ブロック

ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩に加え、輝石安山岩、水晶を組成する。製品は輝石安山岩の削器1点のみで、ほかは剥片である。

ガラス質黒色安山岩の剥片には一部に縦長のものが含まれる。

輝石安山岩の削器には剥片が接合する(p.48、接合番号74、第34図8)。

水晶の剥片は小さいもので、自然面は認められない。

14号石器ブロック

ホルンフェルスを主体に、ガラス質黒色安山岩、黒曜石、硬質頁岩といった多様な石材を組成する。

ホルンフェルスの剥片は5点出土しているが、2組計4点の接合資料が得られている。1組(接合番号47)は背面のほとんどが自然面で覆われている剥片を連続して剥離したもので、打面は1枚の剥離面のものと、2枚の剥離面によるものとの二者がある。もう1組(接合番号24)は剥片末端部に自然面を残すもので、2枚の剥片剥離の間におそらく1枚の剥片剥離が介在する。同一の1枚の剥離面を打面として、剥片剥離を行っている。

ガラス質黒色安山岩の剥片には、比較的大型で厚みのある末端部が尖る縦長剥片が含まれる。

黒曜石の剥片はいずれも小片である。

硬質頁岩は背面に自然面を残す縦長剥片であるが、使用痕などは認められない。

15号石器ブロック (第26図17)

ホルンフェルスが主体で、少量のガラス質黒色安山岩と黒曜石が加わる。ブロック内で1組、16号ブロックとの間に2組の接合関係を有する。

ホルンフェルスの石核2点に剥片12点が接合している(p.49、接合番号10、第35・36図9)。原礫の形が推定できるまでに接合されており、原礫に近い状態でこのブロックに持ち込まれ、剥片剥離が行われたことが明らかである。

ホルンフェルスの石刃が16号ブロックの石刃と接合している(p.49、接合番号14、第37図10)。

ホルンフェルスの剥片が16号ブロックの剥片と接合している(接合番号18)。折れた剥片の末端部が更に垂直に折れたものが接合する。背面には自然面が広く残される。

ホルンフェルスの剥片は小さいものがほとんどだが、中には比較的大きいものも含まれる。平坦な調離面を打面とするものが多く、縦長のものもある。

ガラス質黒色安山岩の石核(17)は打面転移を頻繁に繰り返し、剥片剥離が進められている。石核調整はなされていない。石材中に存在する気泡の多い部分で割れた面は存在するが、自然面は残されていない。

黒曜石の楔形石器(S-8281)は、両極打法による剥片剥離の結果残された残核と考えられる。両端に刃部様の部分が認められるが、その向きは約70度ずれており、ねじれた格好になる。両端部からは縦長や不定形な剥片の剥離がなされている。片方の端部には若干の潰れが認められる。また、一部に自然面を残す。

16号石器ブロック (第26図18~20)

ホルンフェルスを主体にガラス質黒色安山岩が一定量組成し、蓼科冷山産黒曜石、角閃石安山岩、砂岩(粗粒)を含む。第I文化層中で、最も石器が集中的に分布する。ブロック内で14組、15号石器ブロックとの間に2組、ブロック外との間に2組の接合関係を有する。

ホルンフェルスの使用痕剥片(18)は末端部側を折損した縦長剥片を使用している。背面に残された剥離痕は主要剥離面と同一の剥離方向のものが多いが、異なるものも含まれる。背面右下には自然面が残る。打面は数枚の剥離面で構成されるが、打面調整はなされていないものと考えられる。腹面右側縁に比較的大きい剥離痕が残されている。

ホルンフェルスの石刃が15号ブロックの石刃と接合している(p.49、接合番号14、第37図10)。

ホルンフェルスの剥片どうしの接合資料は10組得られている。15号ブロックと接合するものが1組

(接合番号18)、ブロック外と接合するものが2組含まれる。

ブロック外と接合する1組は、剥片5点にグリッドT-15の剥片1点が接合するものである(p.50、接合番号19、第38図12)。

ブロック外と接合するもう1組(接合番号4)は、グリッドU-15の剥片と接合する。連続して剥離された剥片の接合で、16号ブロックのものが先に剥離される。背面に自然面を取り込みながら、打点を少しずつずらして剥離を進めている。打面調整が行われている可能性がある。

ブロック内で接合するものは7組ある。5点が接合するもの(接合番号22)は、異なる分割縦で剥片剥離が行われたものが接合する。打面転移を頻繁に繰り返している。4点が接合するもの(接合番号17)も、頻繁に打面転移を行って剥片剥離が進められる。2点が接合するものの中には剥片が折面で接合する例が3点含まれる。残る2組のうち1組(接合番号5)は平坦な剥離面を打面にして連続して剥離された小剥片が接合するものである。もう1組(接合番号45)は、平坦な剥離面を打面にして連続して剥離された比較的大型の剥片が接合しており、背面はほぼ全面が自然面で覆われている。

ホルンフェルスの剥片中には比較的大きいものも多数認められるが、製品と認定できるものは乏しい。

ガラス質黒色安山岩の接合資料は4組得られており、そのうち2組は折面での接合である。7点が接合するものは、削器1点と剥片6点で構成される(p.49~50、接合番号61、第37図11)。もう1組の3点が接合するもの(接合番号62)は、折面での接合を含む。頻繁に打面転移が行われたことが明らかで、先に剥離された剥片の剥離面が後に剥離された剥片の末端部にくるかたちで接合する。

黒曜石はいずれも蓼科冷山産のものである。楔形石器2点が含まれ、1点を図化した。19は小型のもので上端部は新たに欠損する。剥片末端部には潰れが認められ、左側縁には末端部側からの剥離方向をもつ剪断面が認められる。もう1点の楔形石器(S-8323)には、両極打法による剥片剥離によって得られた2点の剥片が接合する。楔形石器には上下両端に潰れが認められ、表裏面には上下からの剥離痕が認められる。左右側縁には剪断面が残される。縦断面は概ね凸レンズ状を呈する。また、接合している剥片のうち1点はU-15グリッド出土のものである。

敲石(20)は角閃石安山岩で、拳大の円礫ではあるが各所に端部をもつものを使用する。使用の痕跡である敲打痕は各端部に集中してみられる。端部から剥がれ落ちた剥片3点が接合する。

(9) ブロック外出土の遺物 (第26図21~第28図27)

特に注目されるものについて石材別に図化した。

ホルンフェルスの削器(21)はグリッドI-11より出土した。厚みのある大型の剥片を素材としている。打面は2枚の剥離面で構成されるが、打撃は広い平坦な剥離面に対してなされる。背面右下には丸みのある自然面が広く残される。腹面の右側縁から打面にかけて粗い調整剥離が施される。深く剥離を行っており、刃部は鋸歯状になる。また、背面右側縁打点側には小さい剥離が並ぶ。そのほかにもいくらか小さい剥離が認められる箇所がある。

ホルンフェルスの使用痕剥片(22)はグリッドL-13より出土した。厚みのある剥片を使用している。末端部には自然面が残存する。打面には作業面側からの剥離がなされ、打面調整の可能性がある。背面の剥離痕は概ね主要剥離面と同一の剥離方向をもつことから、素材剥片は連続した同じ方向からの剥片剥離の中で剥離されたものと考えられる。比較的縁辺が鋭い腹面左側縁から末端部にかけて微細剥離痕が断続的に認められ、打面周辺には若干大きい剥離もみられる。背面左側縁末端部には比較的大きい剥離がみられる。

ホルンフェルスの石刃(23)はグリッドJ-12より出土した。右側縁に鋭い縁辺をもち、末端部は薄くなるが尖らない。背面左側縁には自然面を残す。背面中央から右側縁には先行する石刃の剥離痕が認め

られる。打面は打点部については線状になる。

ガラス質黒色安山岩の石核(24)はグリッドJ-10より出土しており、剥片が接合している。石核調整はなされず、剥離面を打撃するものが多いが、自然面から剥離が行われる箇所も認められる。剥離されている剥片はいずれも不定形である。接合している剥片は比較的鋭い端部を加撃して剥離されている。

珪質頁岩の使用痕剥片(25)はグリッドI-12より出土した。背面に稜をもつ厚みのある縦長剥片を使用している。素材は平坦な剥離面を打面とし、末端部は折れる。稜上からの剥離がなされるが、いずれも主要剥離に先行する。腹面左側縁中央部に微細剥離痕が認められる。

珪質頁岩の使用痕剥片(26)はグリッドJ-11の西端より出土した。厚みのある縦長剥片を使用している。背面右側縁から打面にかけて自然面が残存する。背面右下部分には繰り返し打撃が行われているが、良好な剥離はなされていない。比較的鋭い縁辺をもつ背面左側縁を中心に微細剥離痕がみられる。また、右側縁中央部には比較的大きい剥離痕が認められる。石材は節理が発達する。

珪質頁岩の石核(27)はグリッドJ-11の東端より出土した。賽子状を呈する。主となる作業面の裏面には自然面が残されている。比較的後の段階になされた剥離面を打面に据えて、正面から左面にかけて剥片剥離が行われている。下面にも平坦な剥離面があり、正面には下面からなされた剥片剥離痕も認められる。右面と左面には比較的古い段階になされた剥離面が残されている。自然面には繰り返し打撃が行われており、右面と下面には自然面からの剥離も認められる。石材は節理が発達する。

(10) 接合資料 (第29図1～第38図12)

接合番号15 (第29図1)

2号ブロックの削器に1号ブロックの調整剥片2点が接合する。削器は、背面下部に自然面を広く残す不定形な剥片を素材とし、打点側の腹面に調整剥離を行い刃部を作り出している。調整剥片2点は腹面右側に接合し、2078、2082の順に剥離が行われる。削器の下端部にも大きめの剥離が部分的に認められる。

接合番号6 (第29図2)

2号ブロックの石核と剥片が接合する。石核は剥片を素材とする。石核の素材剥片が剥離された剥離面を打面として、1629の剥片が剥離されている。それぞれの背面に残された剥離痕から打面と作業面を転移しながら剥片剥離を進めていたことが分かる。石核は厚みのある剥片の左側縁を利用し、打面と作業面を入れかえて小型の剥片の剥離を行っている。

接合番号1 (第30図3)

5号ブロックの削器に剥片が接合する。削器は石核を転用したもので、接合した剥片はその石核から剥離された剥片である。石核には厚みのある剥片が利用されている。その末端部には自然面が残存する。右側縁の平坦な剥離面を打面として、打面調整を行って剥片剥離を行っており、その過程で剥離されたのが1972の剥片である。1972は打点から垂直に折れている。剥片剥離作業の後に、素材剥片の末端部に背面と腹面に交互に調整剥離を行うことで刃部を作り出している。

接合番号2 (第31図4)

5号ブロックの石核に剥片2点が接合する。石核は背面に自然面を残す縦長の剥片を素材とする。石核の素材となった剥片は、自然面を打面とした連続した縦長剥片の剥離の中で剥離されたもので、1977はその素材剥片の剥離に先行する剥離である可能性が高い。その素材剥片の末端部を腹面側から加撃して剥離されたのが2006の剥片である。それに続く剥離は、素材剥片末端部右下の小さい剥離が認められるのみであり、ほとんど剥片剥離が行われないまま、この石核は放棄されている。

接合番号46 （第32図5）

5号ブロックの石核に剥片6点が接合する。円礫もしくはそれを分割したものを素材とし、頻繁に打面転写を繰り返して剥片剥離を行っている。石核調整は行われない。2070の剥離は接合した資料の中では最初に行われたと考えられるが、それ以前にも剥片剥離が行われており、もともとの素材の大きさなどを推定することは難しい。2070、1997、2067の順番で剥離が行われ、この3点には背面に自然面が残されている。そのいずれも打面、作業面とともに同一ではなく、また接合していない剥片の剥離が介在している。一方、1971、1793、1796の順に剥離される3つの剥片は、比較的小さく、剥片剥離の後半に位置付けられる。1971が剥離された剥離面を打面に1793が剥離される。その後、1枚の剥片剥離を介在させ、少しずらして1796を剥離している。この3点はほぼ連続して剥離されたものと考えられる。石核の最終的な剥離は、比較的平坦な1793、1796が剥離された面での求心的な剥離と、その面を打面とした剥離とが主体となる。石核には一部にのみ自然面が残存する。

接合番号57 （第33図6）

10号ブロックの剥片6点が接合する。1888と1954、及び1949と1953は折れたものの接合である。1950の剥離は1949・1953及び1952の剥離に先行するが、1950と1888・1954の剥離の先後関係は不明である。ただし、1888・1954と1949・1954の剥離の連続性を考慮すれば、1950の剥離はこの接合資料中で最初に剥離されたものと考えられる。以下では、それを前提として記述する。

まず、平坦な剥離面を打撃して1950が剥離される。その剥離に先行して、同一の打面から剥片剥離が行われていた痕跡が残されている。また、その剥離の末端部側にあたる1952の背面には、自然面が認められるものの多様な方向の剥離痕も認められ、すでに一定程度の剥片剥離が進行している状態であったことが分かる。1950の剥離の後、打面と作業面が入れ替えられ、1888・1954の背面中央に残された剥離、1888・1954の剥離、1949・1953の剥離が打点を後退させるかたちで連続して行われ、接合してはいないが、更にもう1枚剥片が剥離されたと考えられる。その不在の剥片が剥離された剥離痕を打面にして、これまでの連続した剥離とは打面と作業面を入れ替えて剥離されたのが1952である。1952の背面にのみ自然面が残存する。接合している剥片はいずれも不定形である。剥片剥離の過程で石核調整がなされた痕跡は認められない。

接合番号52 （第34図7）

12号ブロックの石核に剥片が接合する。石核は剥片素材で打点側を折損する。素材剥片の背面には主要剥離面と同一の剥離方向をもつ剥離痕が認められ、連続した剥片剥離が行われた可能性がある。石核からの剥片剥離は、石核の主要剥離面を作業面として行われる。1738の背面には石核の主要剥離面が広く認められることから、剥片剥離の最初期に剥離されたと考えられる。その後の剥片剥離は石核の左右の側縁から腹面に向けて行われている。

接合番号74 （第34図8）

13号ブロックの削器と剥片が接合する。削器の素材剥片は、平坦な剥離面を打面としており、末端部は欠損する。背面の剥離痕は主要剥離面と同一の剥離方向であり、同一の打面からの連続した剥離の中で素材剥片が剥離されたものと考えられる。背面右下には平坦な自然面が認められる。接合する剥片は折れ片であるが、一部に二次加工様の剥離が認められるため、この剥片は調整を行う際に折れた可能性がある。その折面に対しては、両端に調整加工が施されるのみで、大部分は折面が残されたままである。削器の調整は左側縁になされ、主に背面に施されるが、上下端部については背面ではなく腹面に調整が行われる。右側縁にも部分的に小さい剥離痕が認められる。

接合番号10 (第35図～第36図9)

15号ブロックの右核2点と剥片12点の計14点が接合している。ほぼ原礫の形状が明らかになるほどに接合しており、原礫は $11 \times 10 \times 6\text{cm}$ 程度のやや扁平な円礫であったことが分かる。接合資料に先行して、原礫の $10 \times 6\text{cm}$ の面を打面にして $10 \times 11\text{cm}$ の面に何處かの大きな剥離が行われている。接合資料には2枚の大きい剥離痕が確認される。それより先行する剥離が行われた可能性はあるが、剥離面が残されておらず不明である。その剥離の後、打面と作業面を入れ替えて原礫の $10 \times 6\text{cm}$ の面を幅広に用いた連続した不定形剥片の剥離が行われる。その過程で剥離されたのが8239と8267である。同一の平坦な剥離面を打面とすると考えられる。これらの剥離の後、残された石核の分割が行われる。先ほどの剥離の末端部側にあたる自然面を加撃して、石核は2つに割られる。その分割と同時に潜在的な剥離面から剥離したと考えられるのが8234である。背腹両面にポジティブな剥離面をもち、切り合い関係は明確ではない。

分割された石核のうち、先行する剥離面を多く残す側は、片面に分割面を、もう片面には先ほどの連続する剥離面をもつ。一端では分割面を打面にして剥片剥離が行われ、8252及び8250が剥離される。この二者は一度の打撃で同時に剥離しており、8250が8252に押されるかたちで剥離している。また、もう一端では剥離面を打面にして分割面を背面に取り込む8236の剥離が行われる。この二端からの剥離は前後関係を判断することはできない。その二端からの剥離の後、8236の剥離面を打面に据えて、末端部に8250の剥離痕を取り込む剥片剥離が連続して行われる。その剥離の中で剥離された比較的大きい剥片が8237である。それらの剥離の後、少し加撃部を左にずらして8292が剥離される。接合資料は得られていないものの、比較的遅い段階の剥離が8249の石核の分割面に残されている。8252の剥離面を打面とした小剥片の剥離とその右隣りの経過からなされる比較的大きな剥片の剥離である。以上の剥離の結果残されたのが8249の石核である。

分割された石核のうち、自然面が多く残される側は、分割面の裏面に丸みを帯びた自然面が広く残され、その一部に最初期の剥離面を残している。こちらの分割された石核では分割面と最初期の剥離面とが接する部分を中心に、打面と作業面を交代させながら剥片剥離が行われる。最初期の剥離面と自然面の境を加撃して8273が最初に剥離される。背面には分割面及び8234の剥離痕が残される。必ずしもその直後とはいえないが、隣接部分を加撃して8241が剥離される。その後、打面と作業面を入れ替えて数枚の剥片が剥離されるが、その中の1点が8290である。それらの剥離の後、更に打面と作業面を入れ替えて剥片剥離が行われ、8248などが剥離される。その後で、もう一度、打面と作業面を入れ替えて剥片剥離がなされ、剥片剥離が終了している。以上の剥離の結果残されたのが8246の石核である。

総じて打面や作業面を固定せずに剥片剥離を進行させているといえる。また、剥片剥離の過程の中に石核の分割を組み込んでいる点に特徴がある。有効な剥片も得られているが、接合資料中に製品は含まれない。

接合番号14 (第37図10)

15号ブロックと16号ブロックの石刃が接合する。16号ブロックのものが剥離されたのちに、1枚の石刃の剥離をはさんで15号ブロックのものが剥離される。打面調整はなされず、平坦な剥離面を打面にしている。8240の末端部の背面と腹面のなす角度は90度に近くなることなどから、石刃の剥離が幅の狭い小口のような部分で行われたことが想定される。また、両石刃とも腹面が弧を描かず、打点から末端までが直線的である。

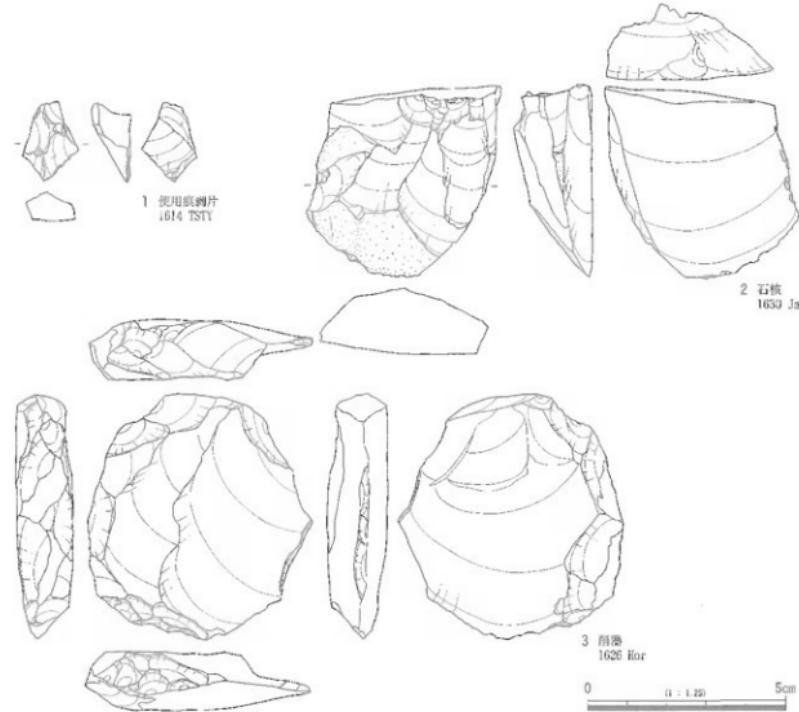
接合番号61 (第37図11)

16号石器ブロックの削器に剥片6点が接合する。接合資料中、最初に剥離された大型の剥片は折れており、その右半が削器として利用される。大型の剥片の剥離の後で8365+8462と8339が順に剥離される。いずれも同一の作業面で剥離が行われるが、打面は異なる。大型の剥片の剥離とその後の剥片剥離との

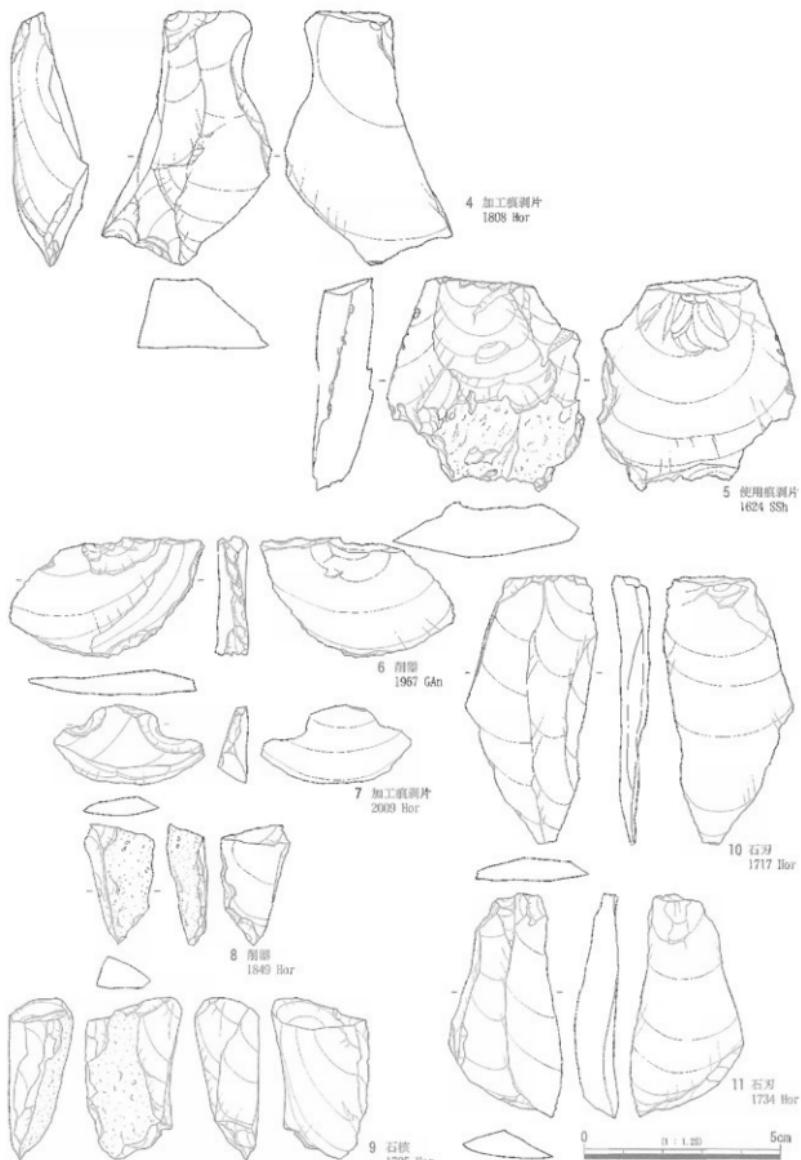
間には何枚もの剥片剥離が介在しており、打面と作業面を転移しながら剥片剥離を進行させたと考えられる。削器は背腹両面に二次加工が行われ鈍い尖頭部が作り出される。その過程で腹面側になされた調整の調整剥片2点が接合する。

接合番号19 (第38図12)

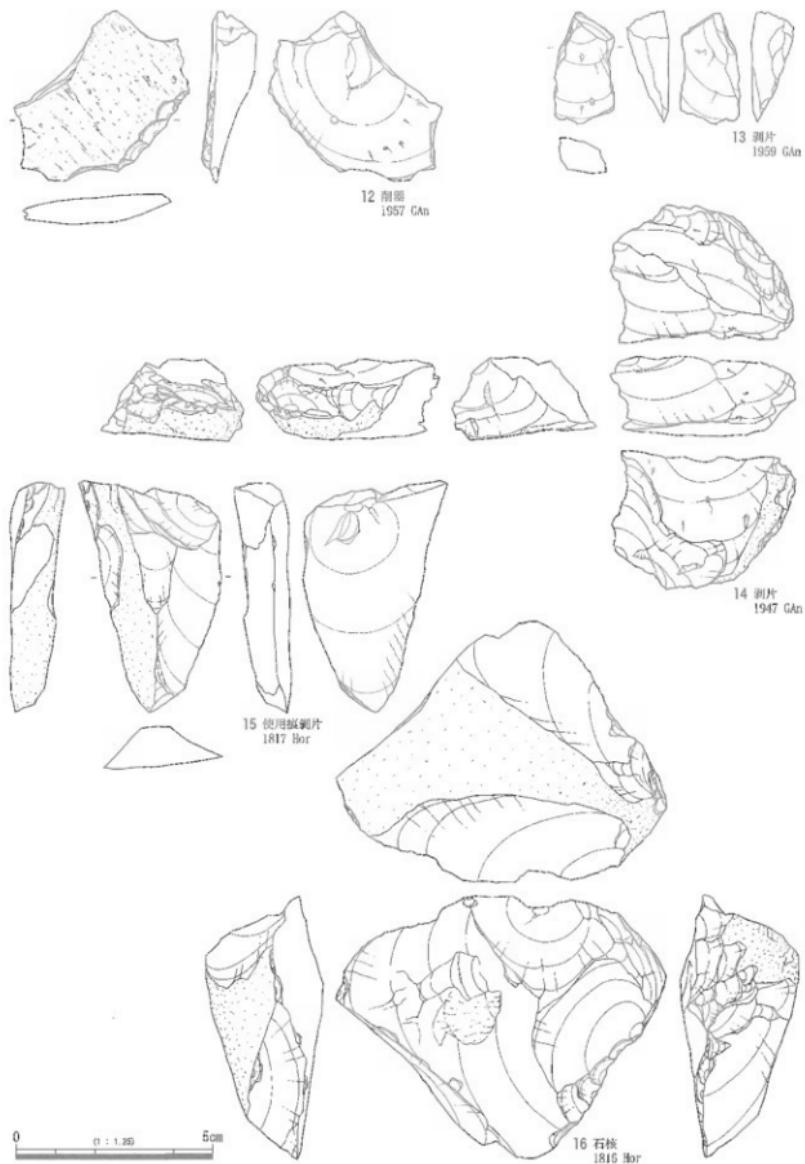
16号ブロックの剥片5点とグリッドT-15の剥片1点が接合している。接合している剥片は全て同一の作業面で剥離されている。接合している剥片の背面の下部には自然面が広く残される。接合している剥片の剥離以前に、打面に広い剥離面が3枚確認でき、その面を打面とした2枚以上の剥片剥離が行われている。それらに統いて、8392、8431、8406が連続して剥離される。3枚の剥離はいずれも剥離面と剥離面の稜上を加撃している。その後、打面と作業面を入れ替え、接合していない剥片の剥離が行われる。一定の大きさの剥離面が認められ打面調整ではなかったと考えられる。その剥離の後、再び打面と作業面を入れ替えて剥片剥離が行われる。接合していない剥片の剥離も介在するが、8315、8387、8397が順に剥離される。8315についてはより上部に打点をもつ剥片の剥離に押されるようにして剥離したものと考えられる。これらの剥離では稜上への加撃も認められるが、平坦な面を打撃して剥離が行われたようである。石核は残存しておらず、持ち出されたものと考えられる。



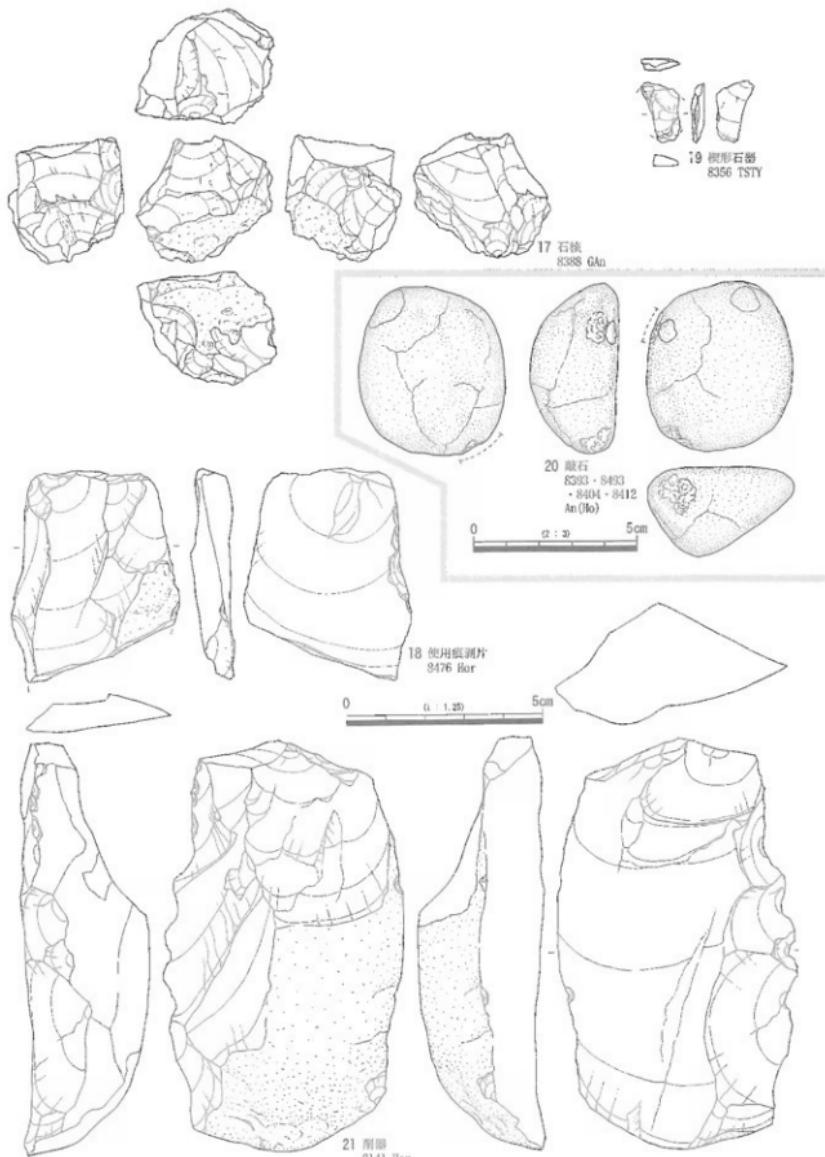
第23図 第I文化層 出土石器(1)



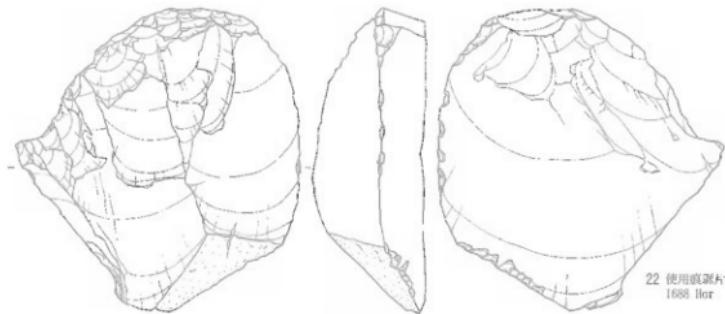
第24図 第I文化層 出土石器(2)



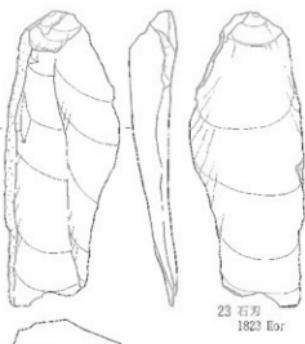
第25圖 第I文化層 出土石器(3)



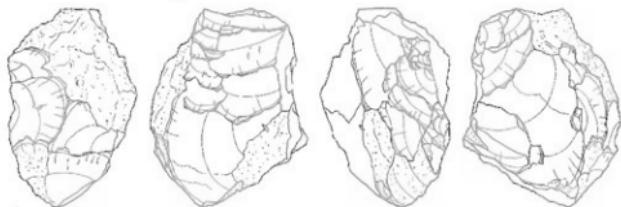
第26図 第I文化層 出土石器(4)



22 使用痕削片
1688 Hor



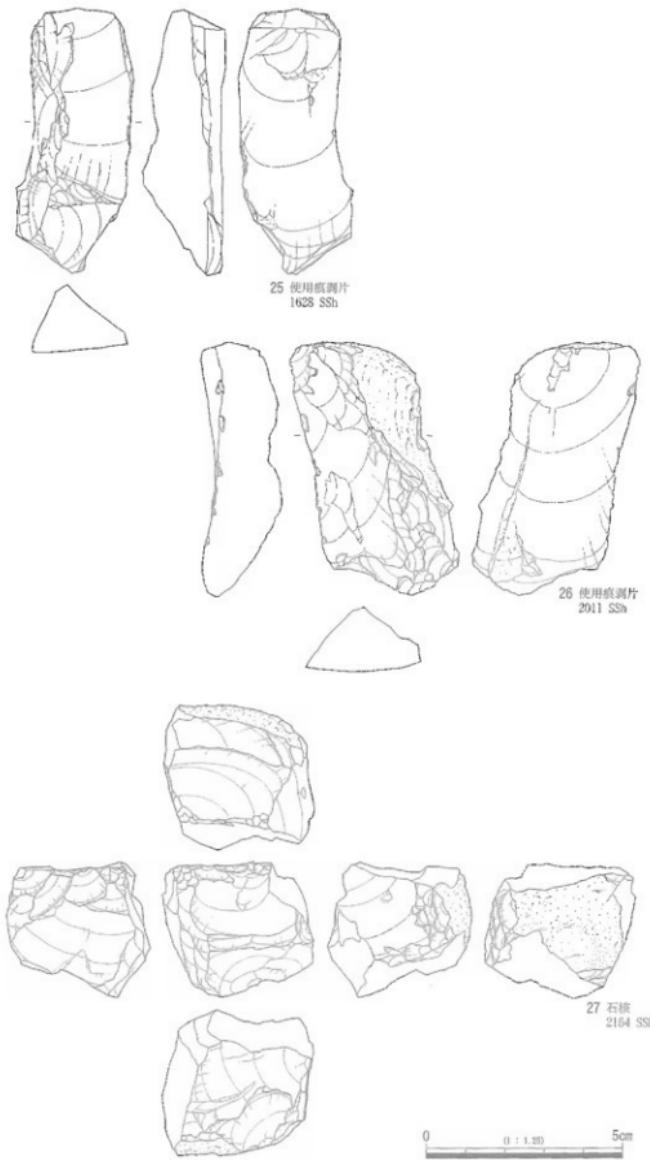
23 石刃
1823 Hor



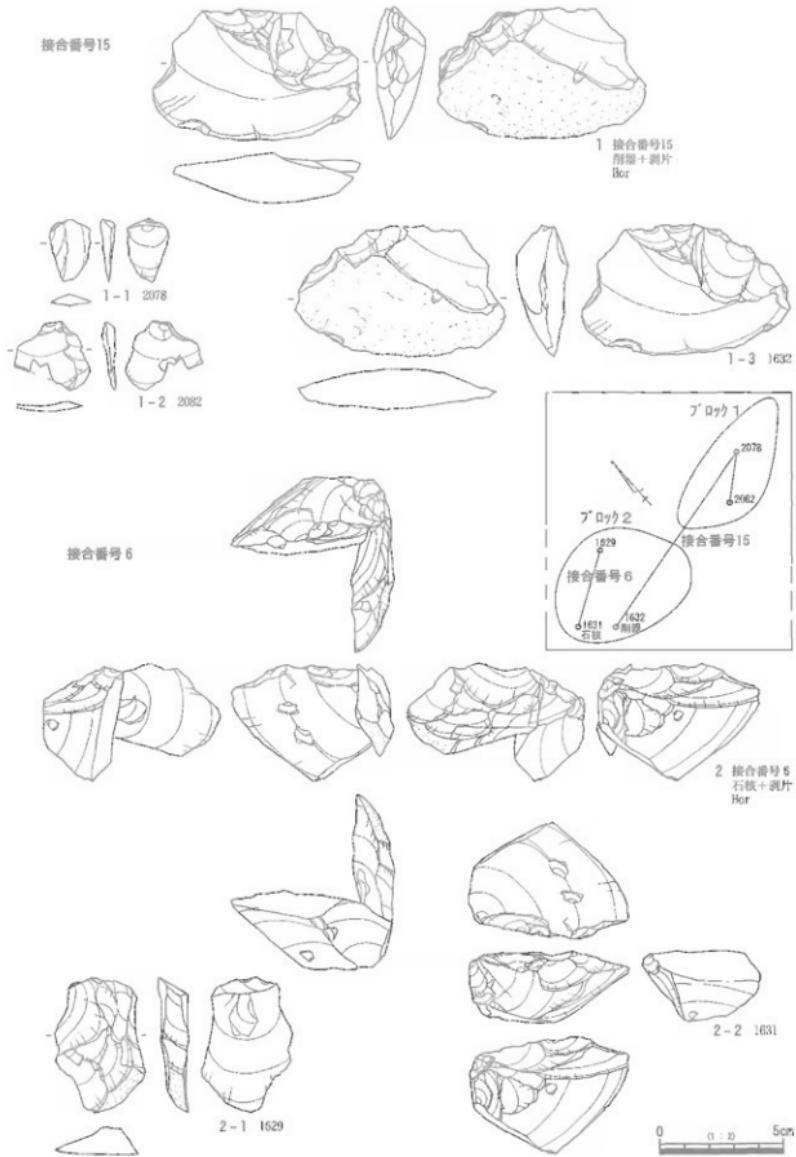
24 石核+刮片
1969 - 2139 Ga



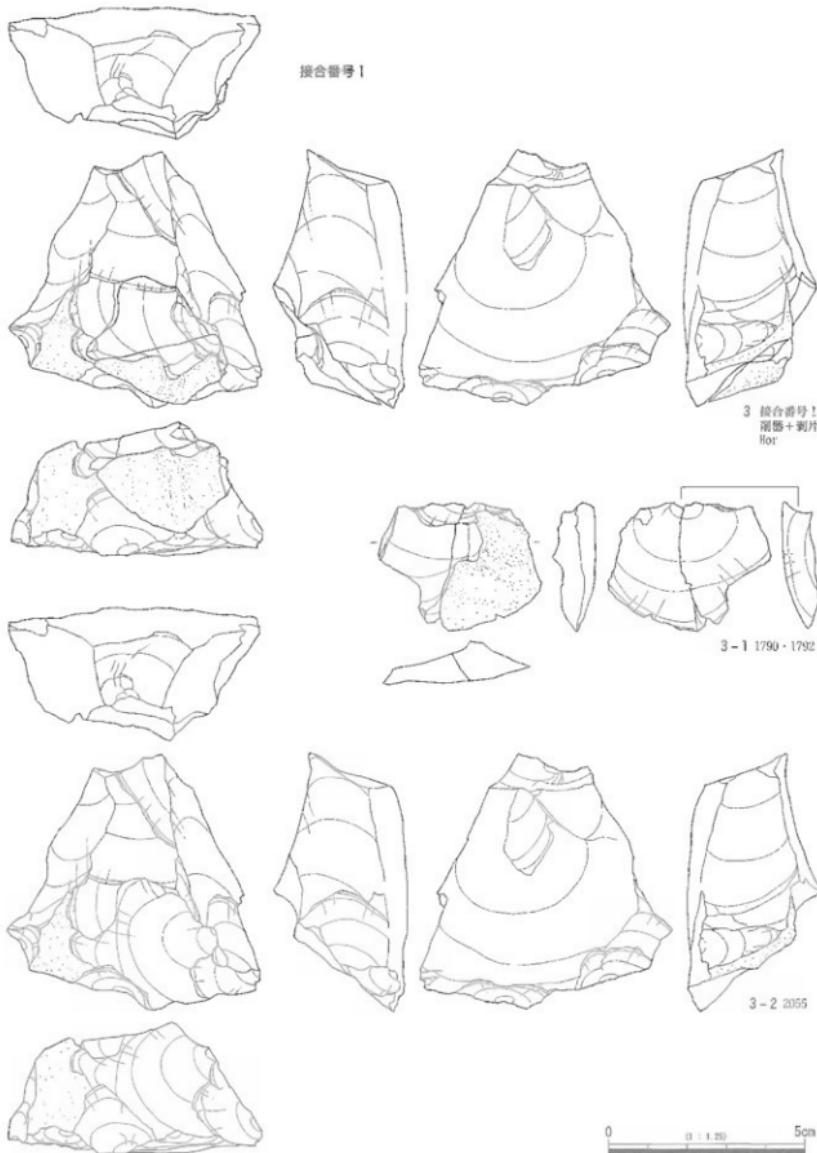
第27圖 第I文化層 出土石器(5)



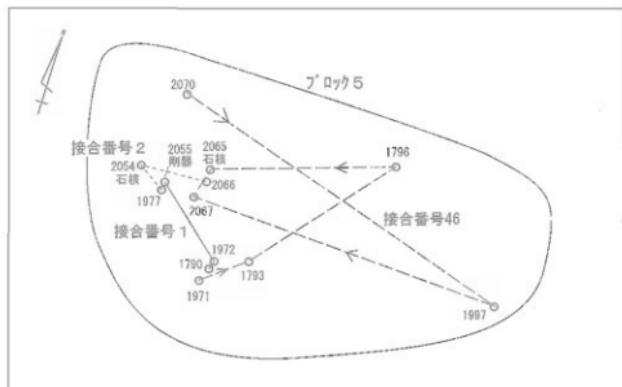
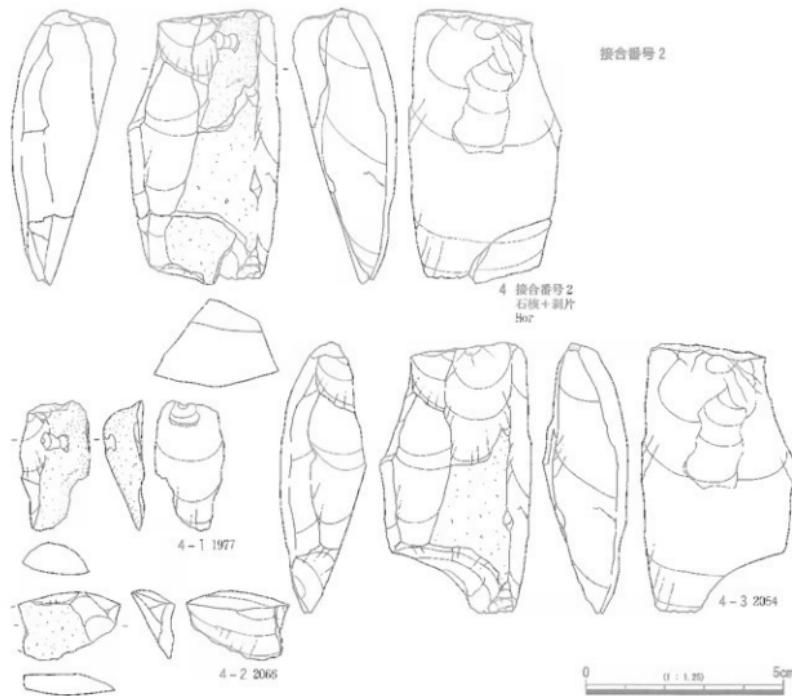
第28図 第I文化層 出土石器(6)



第29図 第I文化層 出土石器(7)



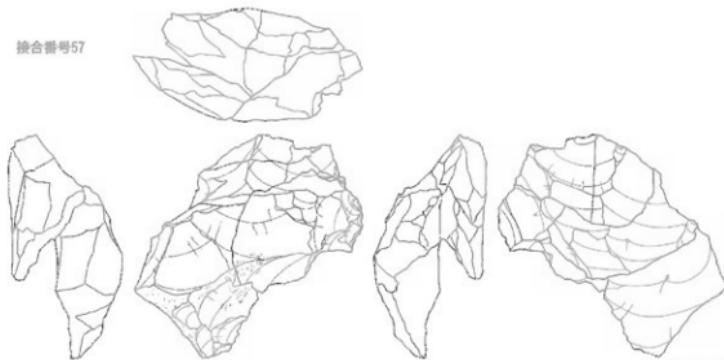
第30図 第I文化層 出土石器(8)



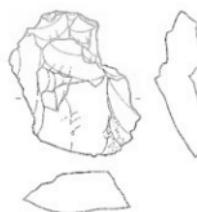
第31図 第I文化層 出土石器(9)



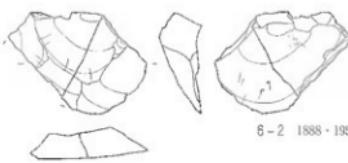
接合番号57



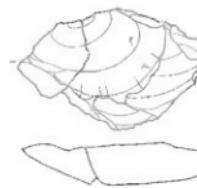
6 接合番号57
断片
Gla



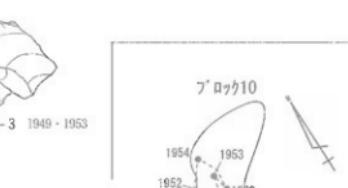
6-1 1850



6-2 1888・1954

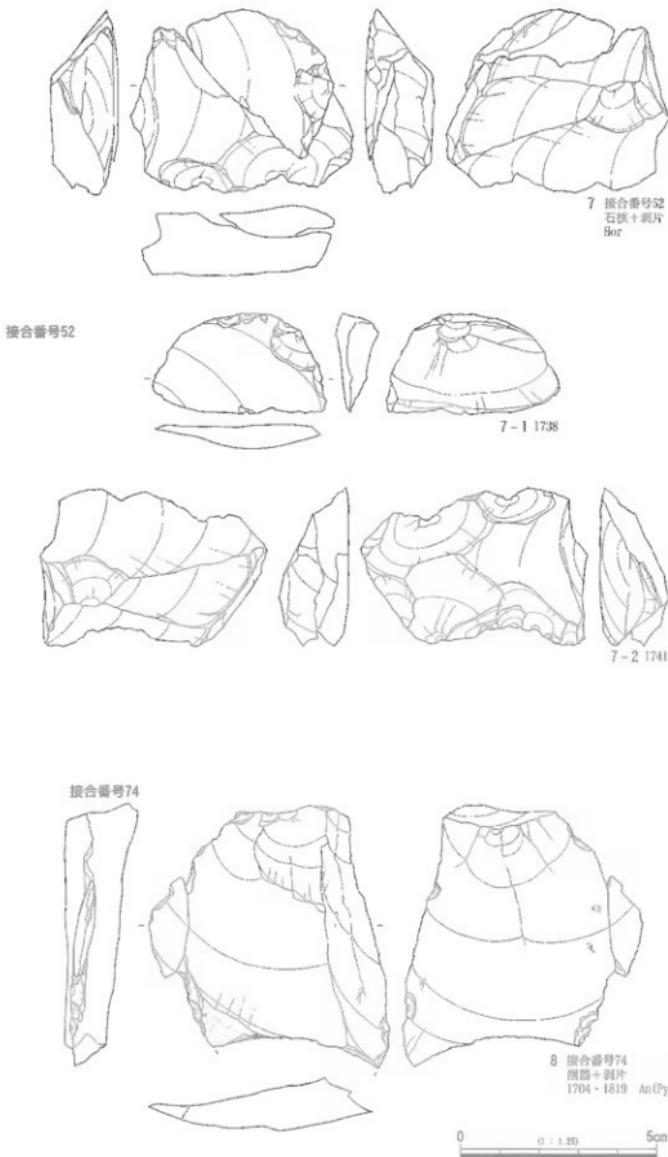


6-3 1949・1953



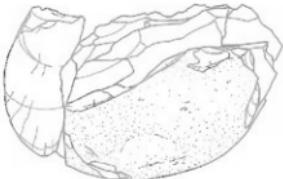
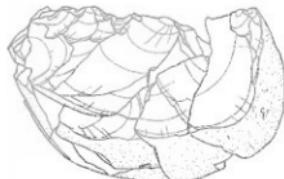
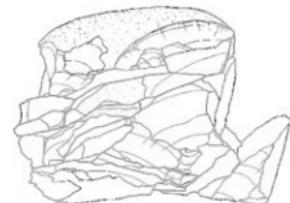
6-4 1952

第33図 第I文化層 出土石器(11)

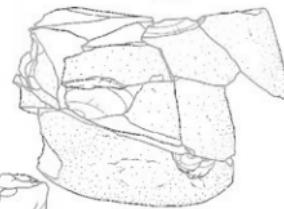


第34図 第I文化層 出土石器(12)

接合番号10



9 接合番号10
石核+剥片
Hor



9-1 8239

0 5cm
0 : 2

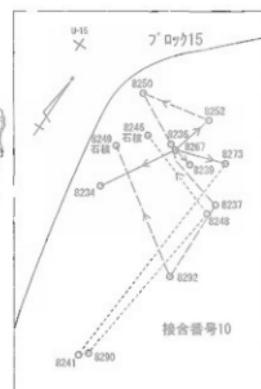
第35図 第I文化層 出土石器(13)



9-2 8267

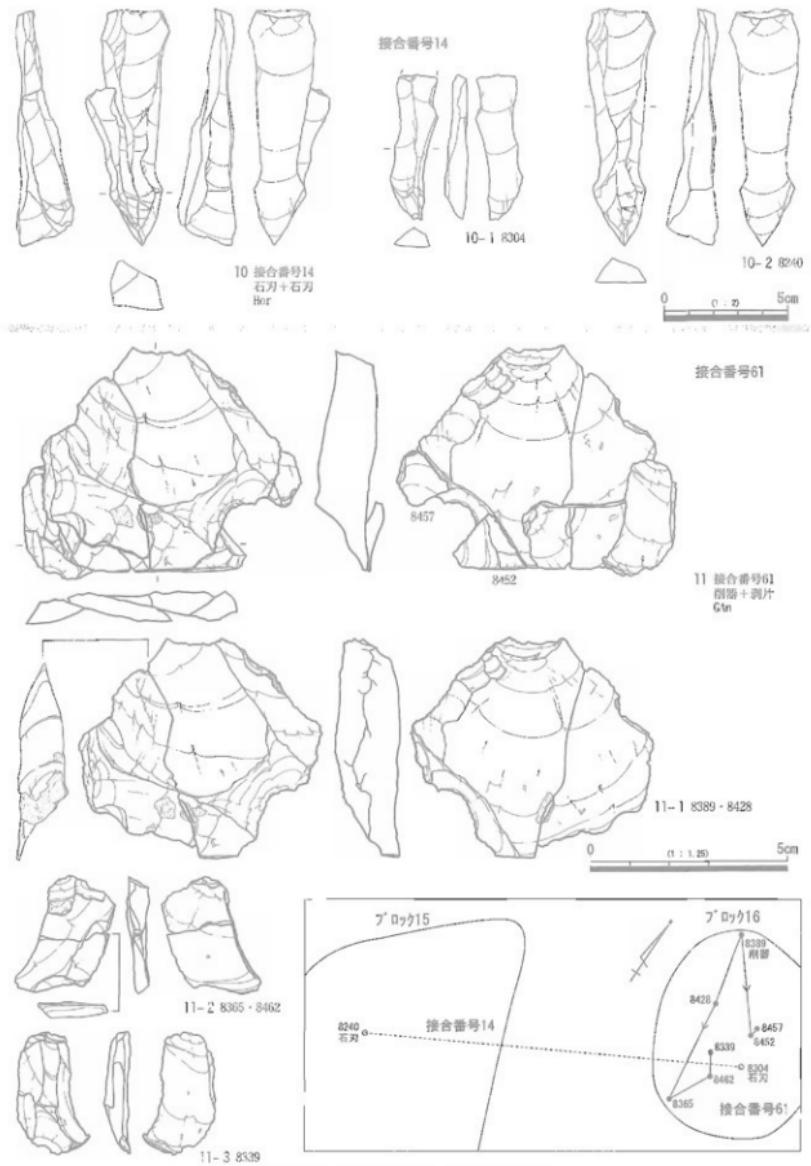


9-3 8234

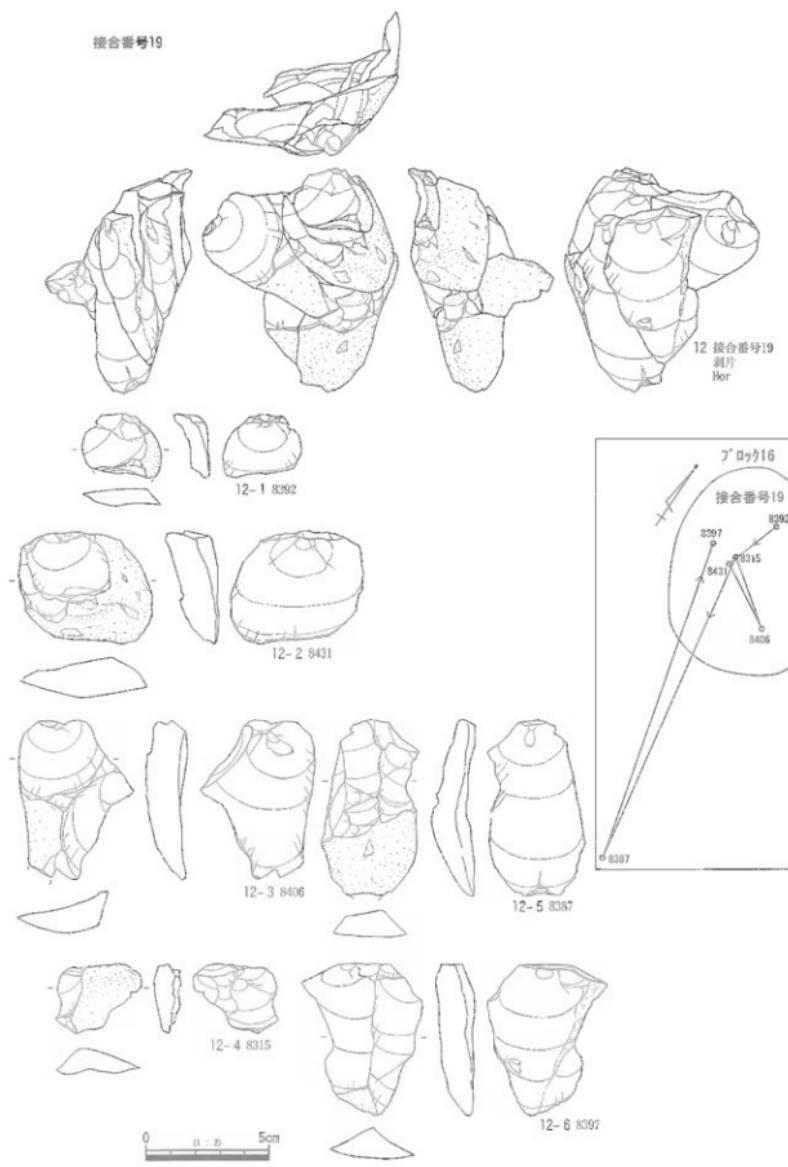




第36圖 第I文化層 出土石器(14)



第37図 第I文化層 出土石器(15)

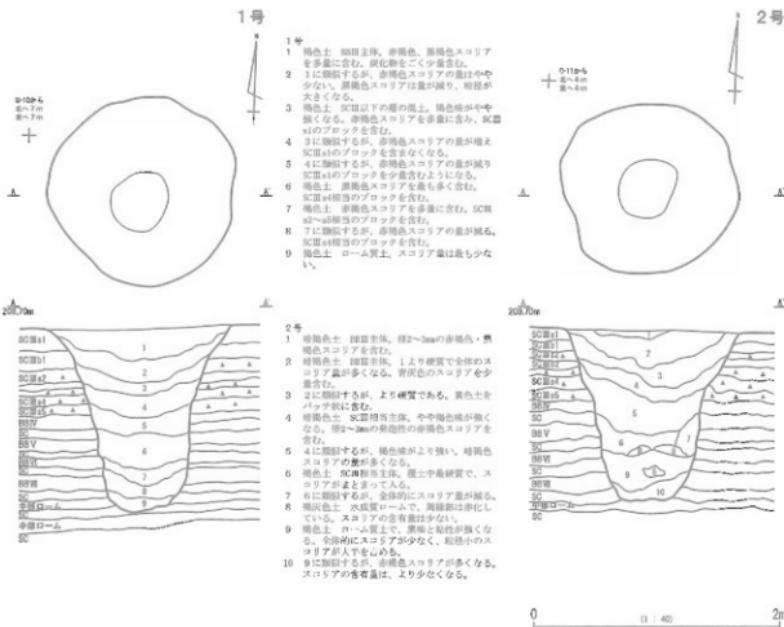


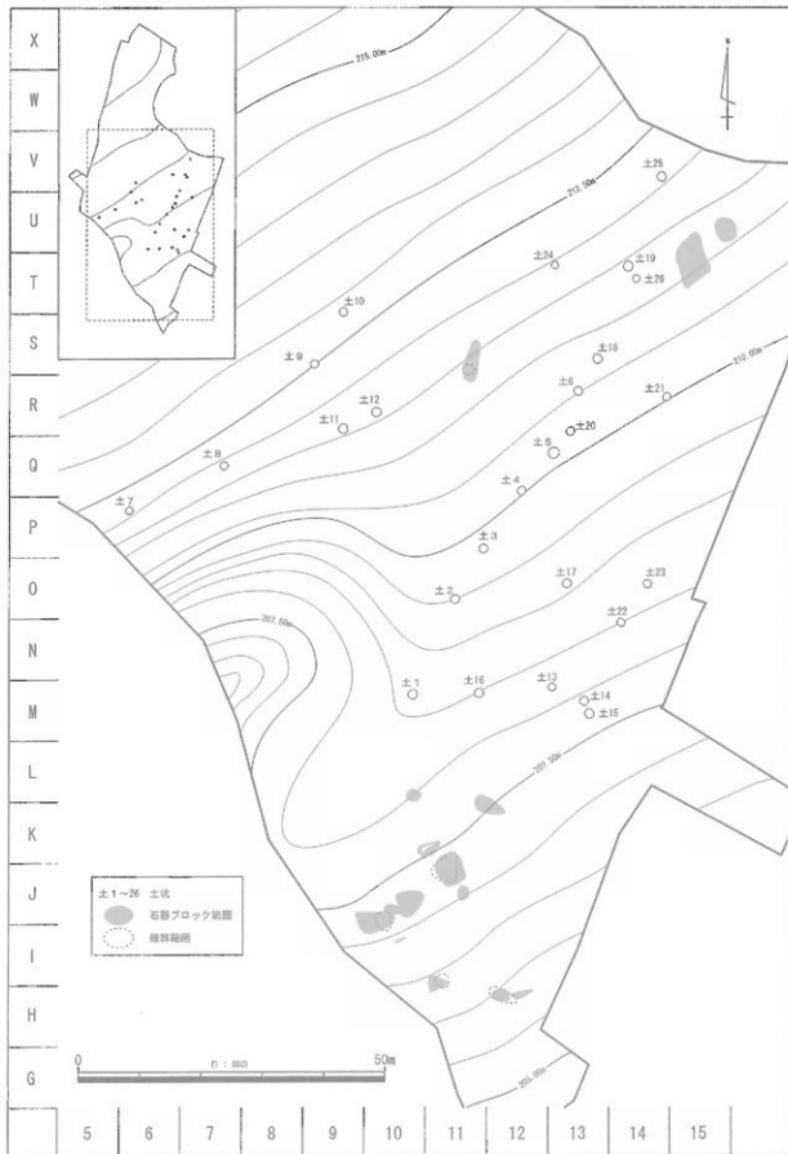
第38図 第I文化層 出土石器(16)

(11) 土坑 (第39図～第47図)

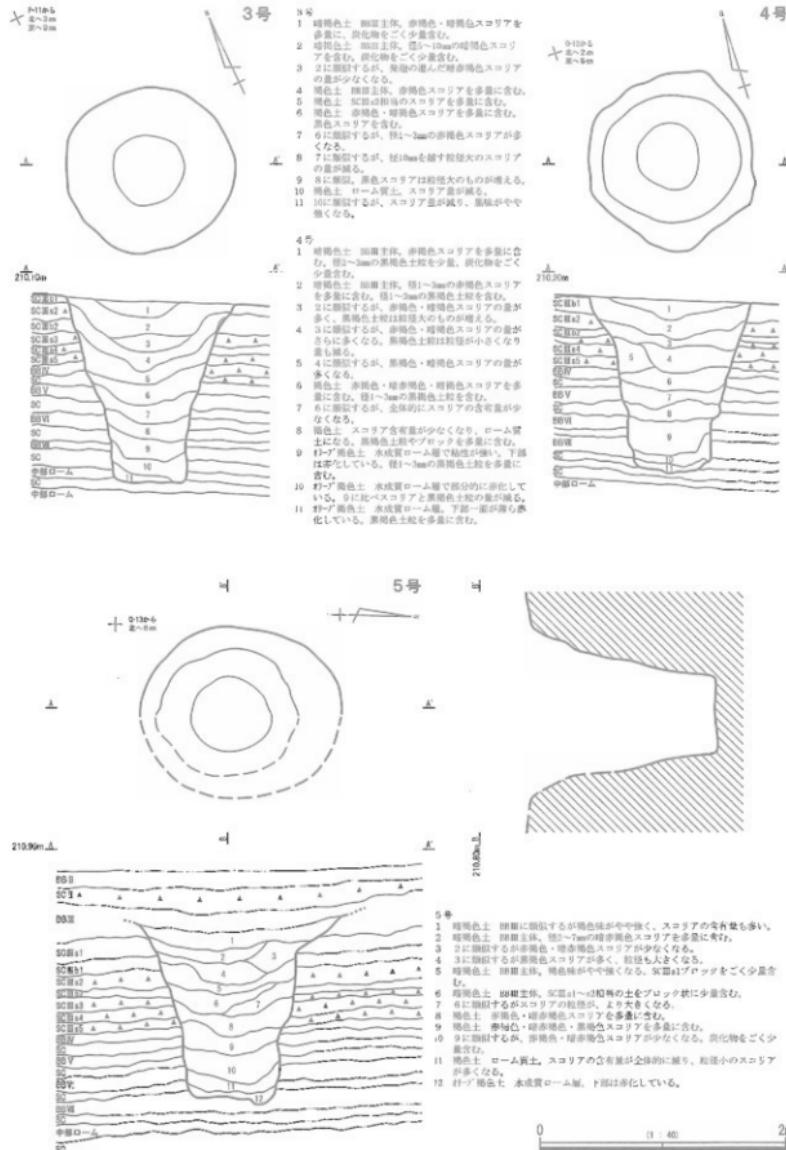
土坑は26基検出した。調査区の標高207.50m～212.50m付近に占地し、北東から南西方向に尾根を横断するように配置されていた。その殆どは緩斜面に、7号、8号土坑は谷への落ち際に構築されていた。検出土面はSC III s 1の上面で、覆土は自然堆積を示していた。5号土坑はテストピットの壁面で検出されたことにより、掘り込まれた時期がBB III中であると判断できた。他の土坑も類似する覆土状況をもつ為、同時期と考えられよう。土坑の平面形は、開口部及び底面が円形のもののが23基、開口部は円形で底面が梢円形のものが3基である。断面形は開口部付近でラッパ状に開く。開口部付近は壁の崩落の影響もあると考え、底部の立ち上がり方の違いから分類して掲載する。

- ① 1号～12号土坑：底部から僅かに開きながら立ち上がり、開口部付近で大きくラッパ状に開く。
- ② 13号～14号土坑：底部からほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でラッパ状に開く。
- ③ 15号～19号土坑：底部から緩やかに立ち上がり、土坑の断面形がコップ型に近い。
- ④ 20号～21号土坑：底面はやや起伏があり、底部の断面はオーバーハング気味にU字型を呈す。
- ⑤ 22号～23号土坑：底部からほぼ垂直に立ち上がり、土坑の断面形は円筒形に近い。
- ⑥ 24号～26号土坑：底面の平面形が梢円である。

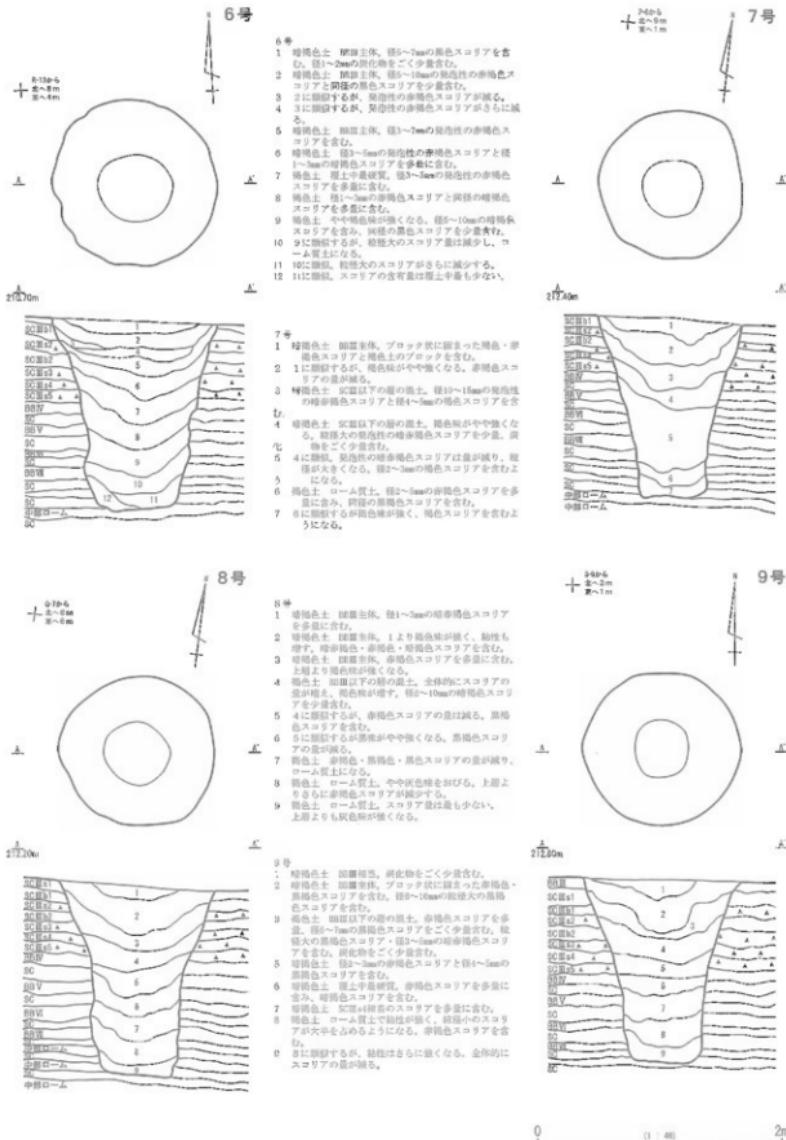




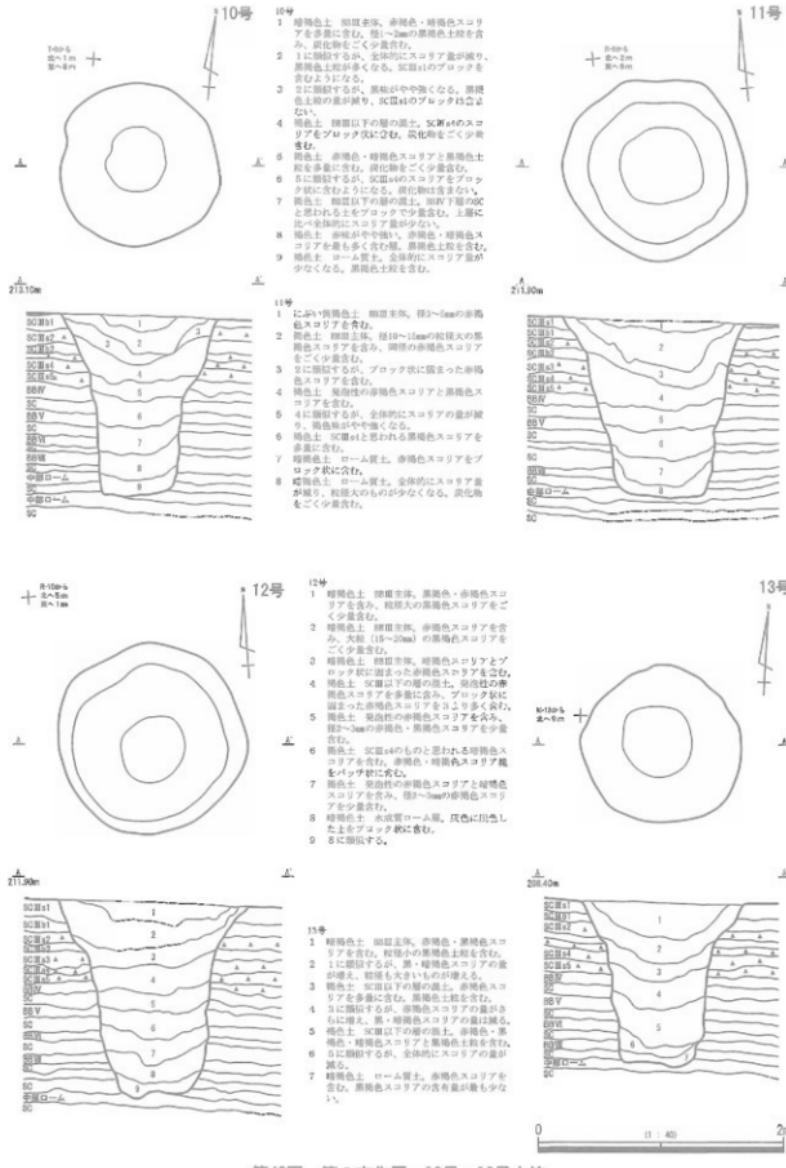
第40図 第I文化層 土坑分布図



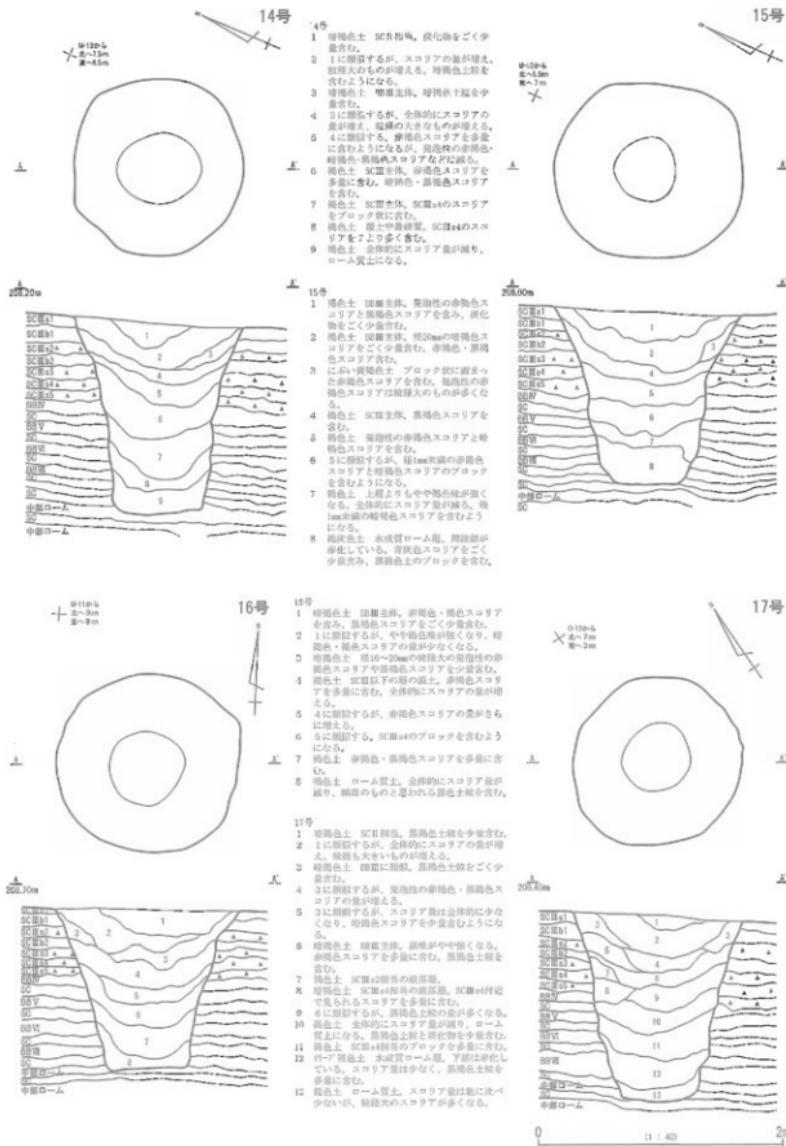
第41図 第I文化層 3号～5号土坑



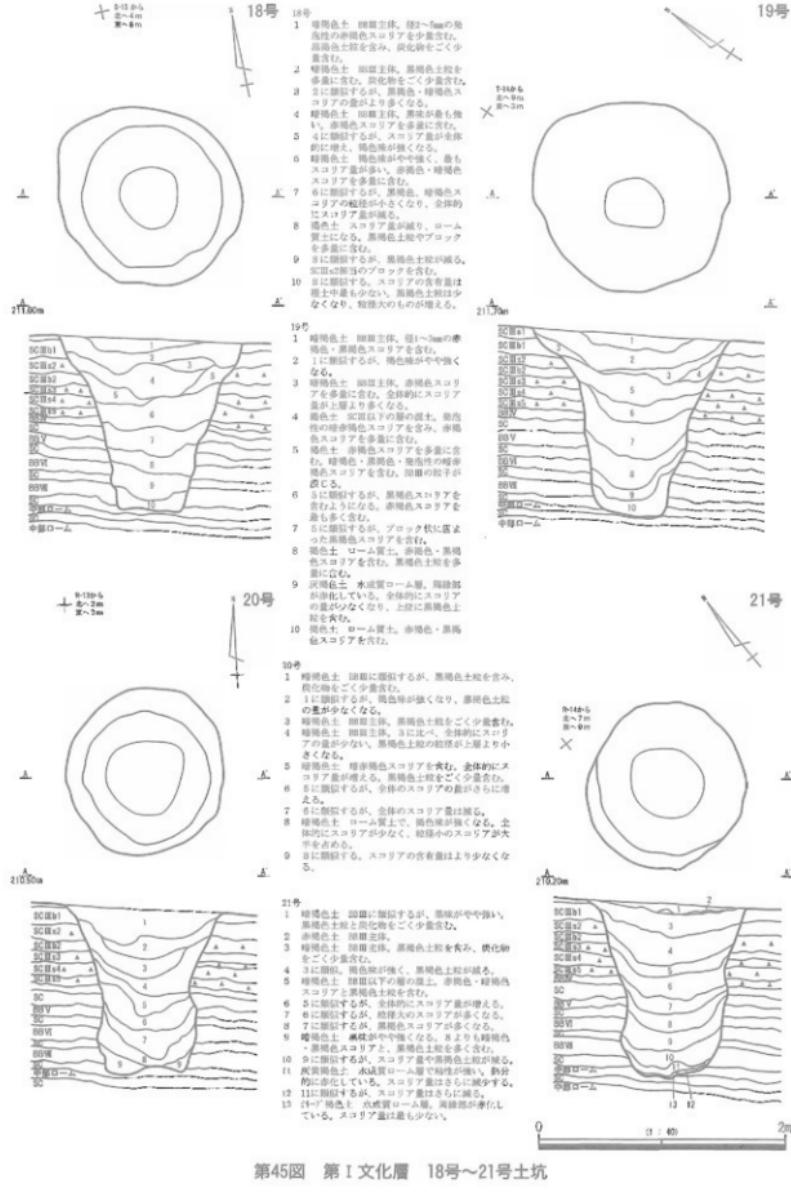
第42図 第I文化層 6号～9号土坑



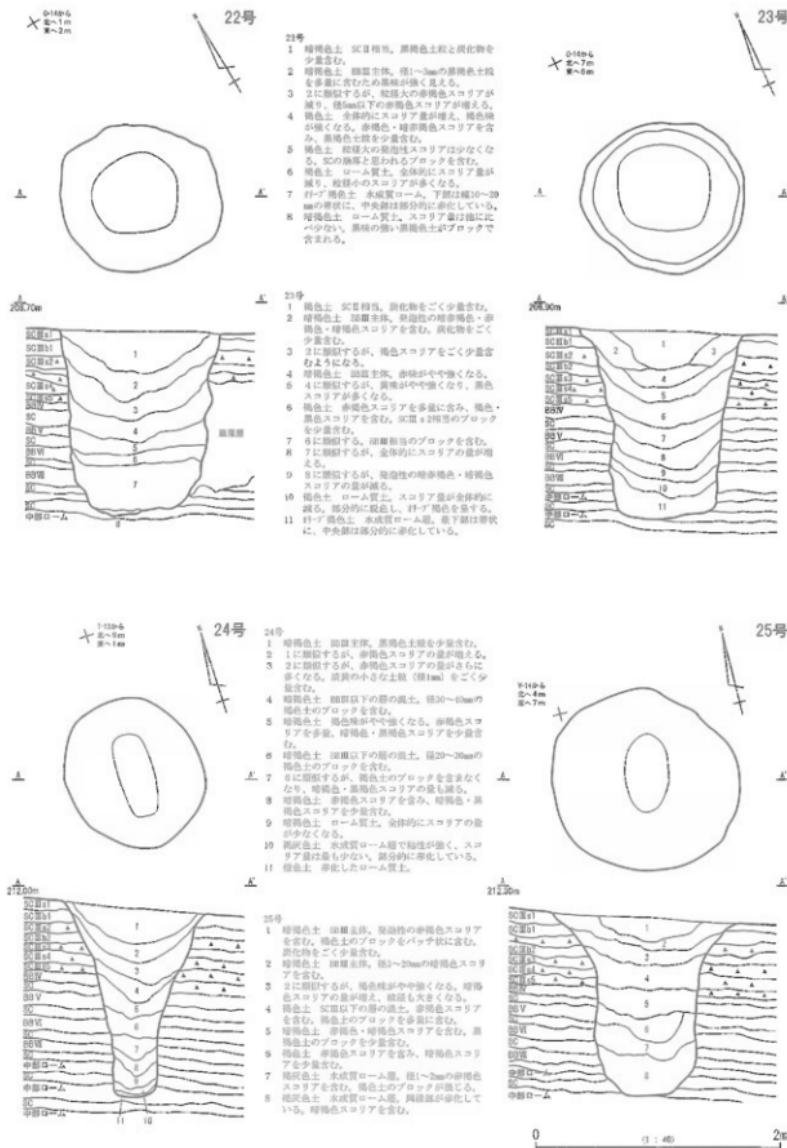
第43図 第I文化層 10号～13号土坑



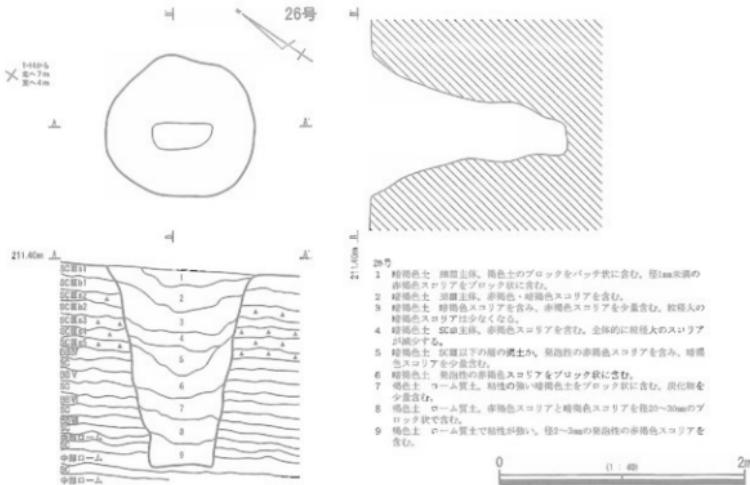
第44図 第I文化層 14号～17号土坑



第45図 第I文化層 18号～21号土坑



第46図 第I文化層 22号～25号土坑



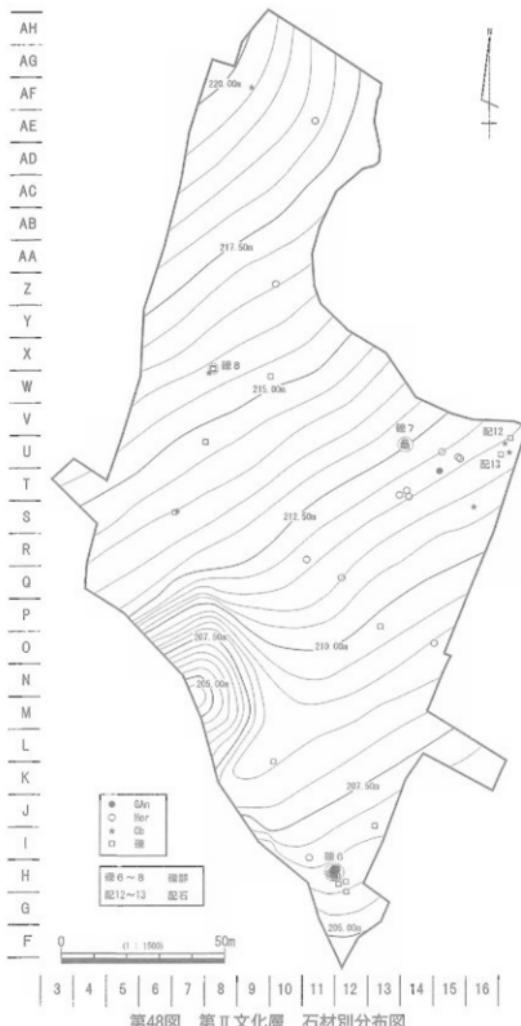
第47図 第I文化層 26号土坑

第12表 第I文化層 土坑計測表

土坑番号	開口部規模(m)	底面規模(m)	深さ(m)
1号	1.53×1.52	0.46×0.51	1.53
2号	1.48×1.44	0.46×0.53	1.40
3号	1.40×1.36	0.59×0.57	1.48
4号	1.46×1.33	0.52×0.55	1.33
5号	(1.65×1.40)	0.60×0.60	1.45
6号	1.39×1.33	0.60×0.55	1.55
7号	1.27×1.21	0.49×0.49	1.53
8号	1.28×1.23	0.53×0.50	1.62
9号	1.31×1.24	0.43×0.48	1.49
10号	1.36×1.31	0.50×0.53	1.49
11号	1.55×1.50	0.71×0.63	1.43
12号	1.56×1.55	0.50×0.58	1.60
13号	1.32×1.29	0.62×0.62	1.36
14号	1.45×1.38	0.60×0.60	1.58
15号	1.55×1.43	0.52×0.52	1.46
16号	1.56×1.48	0.61×0.61	1.34
17号	1.44×1.35	0.57×0.52	1.53
18号	1.57×1.43	0.50×0.50	1.40
19号	1.70×1.56	0.51×0.45	1.55
20号	1.42×1.28	0.62×0.67	1.37
21号	1.36×1.26	0.55×0.61	1.43
22号	1.30×1.23	0.64×0.70	1.50
23号	1.34×1.23	0.70×0.74	1.54
24号	1.26×1.11	0.68×0.29	1.60
25号	1.54×1.49	0.63×0.36	1.50
26号	1.23×1.15	0.49×0.20	1.65

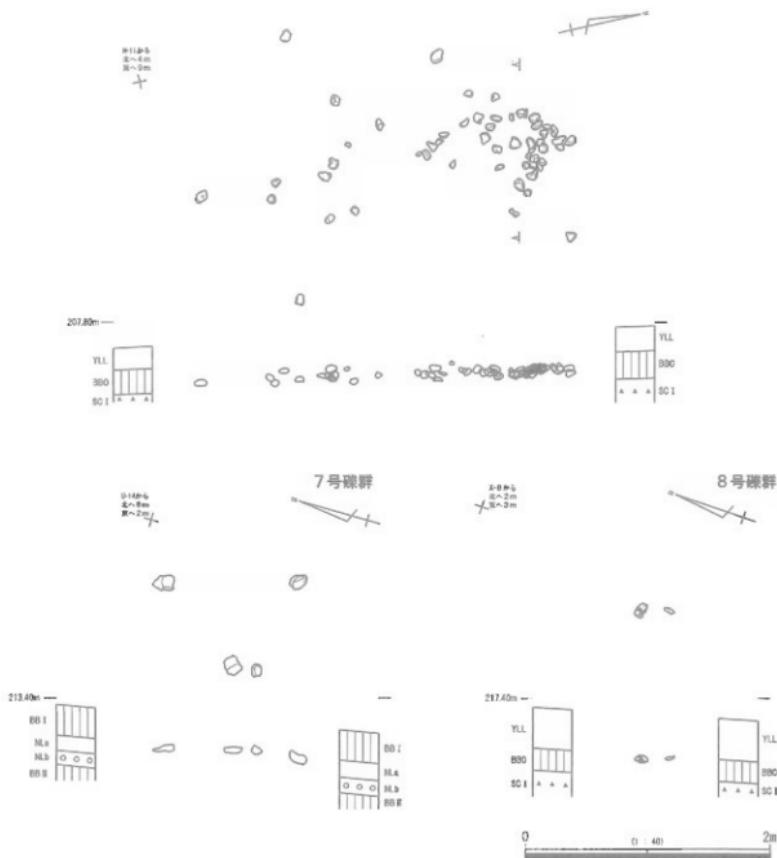
3 第II文化層(BB1～BB0)の遺構と遺物

第I黒色帯～休場層直下黒色帯からは、礫群3基、配石2基が検出されたが、石器ブロックは検出されなかった。遺物は、礫72点、石器20点が出土している。分布は調査区全体にわたり散漫である。



第48図 第II文化層 石材別分布図

6号砾群



第49図 第II文化層 6号～8号砾群

第13表 第II文化層 砾群・配石組成表

		6号砾群	7号砾群	8号砾群	計	12号配石	13号配石
輝石安山岩	An(Py)	25	1		26	1	1
玄武岩	Ba	12	2	5	19		
多孔質安山岩	VAn	9			9		
多孔質玄武岩	VBa	11	1		12		
計		57	4	5	66	1	1
總重量(g)		12,220	5,330	400	17,950	3,070	1,010

(1) 磨群 (第49図)

6号磨群

グリッドH-11とH-12の境に位置する。57点の磨で構成され、検出層位の主体はB B 0である。石材の内訳は輝石安山岩25点、玄武岩12点、多孔質安山岩9点、多孔質玄武岩11点で、総重量は12,220g(平均重量214.4g)である。磨集中部で浅い掘り込みが認められたが、覆土の確認が明確にできなかつたため土坑とは判断しなかった。

7号磨群

グリッドU-14の北西に位置する。4点の磨で構成され、検出層位はN L aであるが、ほぼB B 1との境に位置するため、第II文化層に含める。石材の内訳は玄武岩2点、多孔質玄武岩1点、輝石安山岩1点で、総重量は5,330g(平均重量1332.5g)である。

8号磨群

グリッドX-8の南西に位置する。5点の小磨で構成され、検出層位の主体はB B 0である。石材はすべて玄武岩で、総重量は400g(平均重量80g)である。近くで諏訪星ヶ台産黒曜石の幅広の石刃(第52図8)が出土している。

(2) 配石 (第48図)

12号配石

グリッドU-17の北端に位置する。検出層位はB B 0である。輝石安山岩で、重量は3,070gである。

13号配石

グリッドU-17の西端に位置する。検出層位はB B 0である。輝石安山岩で、重量は1,010gである。12号配石との間から蓼科冷山産黒曜石の使用痕剥片と剥片が出土している。

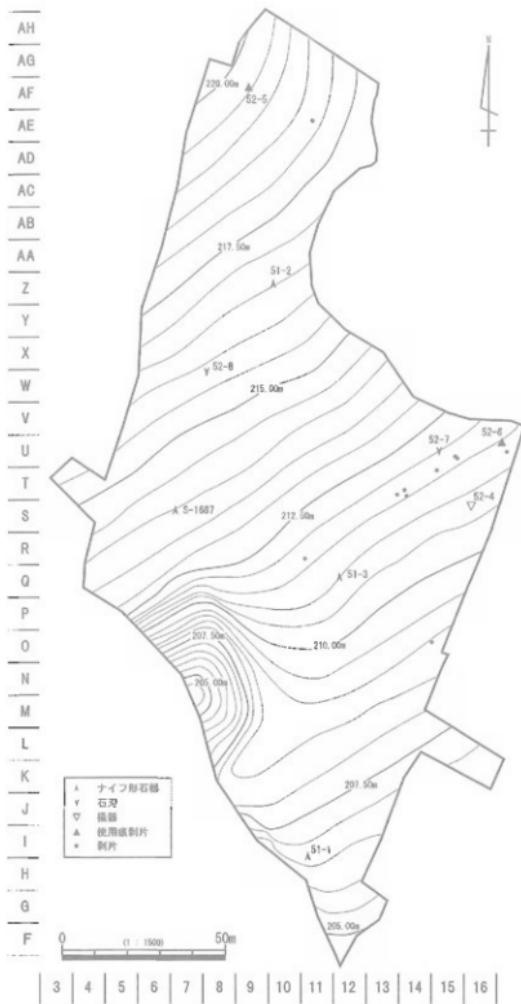
(3) 遺物 (第51図1～第52図8)

石器は調査区全体から散漫に出土している。

ナイフ形石器は4点出土している。いずれも石刃を素材とし、打点部側を基部に据える。また、整形剥離は背面への急斜度剥離にはば眼定される。ホルンフェルスを使用した3点を図化した。1は二側縁加工ナイフ形石器である。素材となる石刃は打点側を折損し、背面には主要剥離面とは反対方向からの剥離も認められる。左側縁及び右側縁下半を二次加工するが、基部には素材の折面が残置される。刃部腹面側にも剥離痕が認められるが、意図的な剥離ではないだろう。先端部には若干潰れた様な剥離が認められる。2と3は基部加工ナイフ形石器である。2は腹面基部側にパルバースカーが認められるが、

第14表 第II文化層 石器組成表

		ナイフ形石器	撲器	使用痕剥片	石刃	剥片・碎片	計
ホルンフェルス	Hor	3			1	8	12
ガラス質黑色安山岩	GAn					1	1
黒曜石 (Ob)	諏訪星ヶ台群 蓼科冷山群 天城柏崎群 產地不明	SWHD TSTY AGKT -		1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	3 2 1 1
計		4	1	2	2	11	20



第50図 第II文化層 器種別分布図

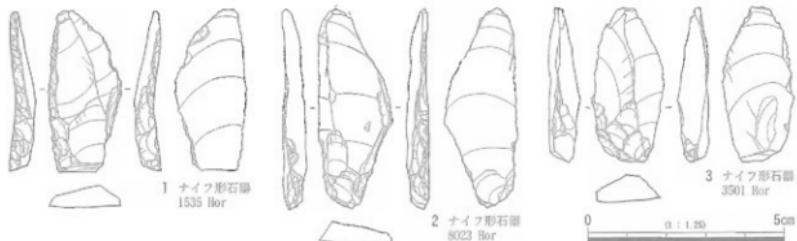
打面は残されていない。二次加工は基部を中心になされる。右側縁には基部と刃部の間に屈曲が認められる。刃部右側縁には小さい折面や微細な剥離が認められるが、二次加工ではないと考えられる。腹面基部の右側縁には若干の加工が認められる。刃部は左側縁では鈍く、右側縁では鋭い。先端部は若干欠損する。3は基部に平坦な剥離面打面が残存する。左側縁を中心に右側縁にも整形加工が行われる。先端部には折面様の剥離が2枚認められる。天城柏崎産黒曜石のナイフ形石器は、ホルンフェルスのナイフ形石器の2/3程度の大きさのものである。二側縁加工で基部を欠損する。左側縁及び右側縁基部側を整形剥離する。刃部には微細剥離痕が多く認められる。

搔器(4)は黒曜石で、剥片素材の石核を素材としている。腹面は素材剥片の主要剥離面であり、左側面にはそれに先行すると考えられる剥離面が広く残される。右側面から背面上半にかけては上面の折面を打面にした剥離痕が認められる。背面右下に残された比較的広い剥離面は主要剥離に先行する可能性がある。背面左側に残された自然面には数か所に打撃痕が残されている。搔器の刃部は幅広の末端部を作り出されており、粗雑な調整剥離が施されている。

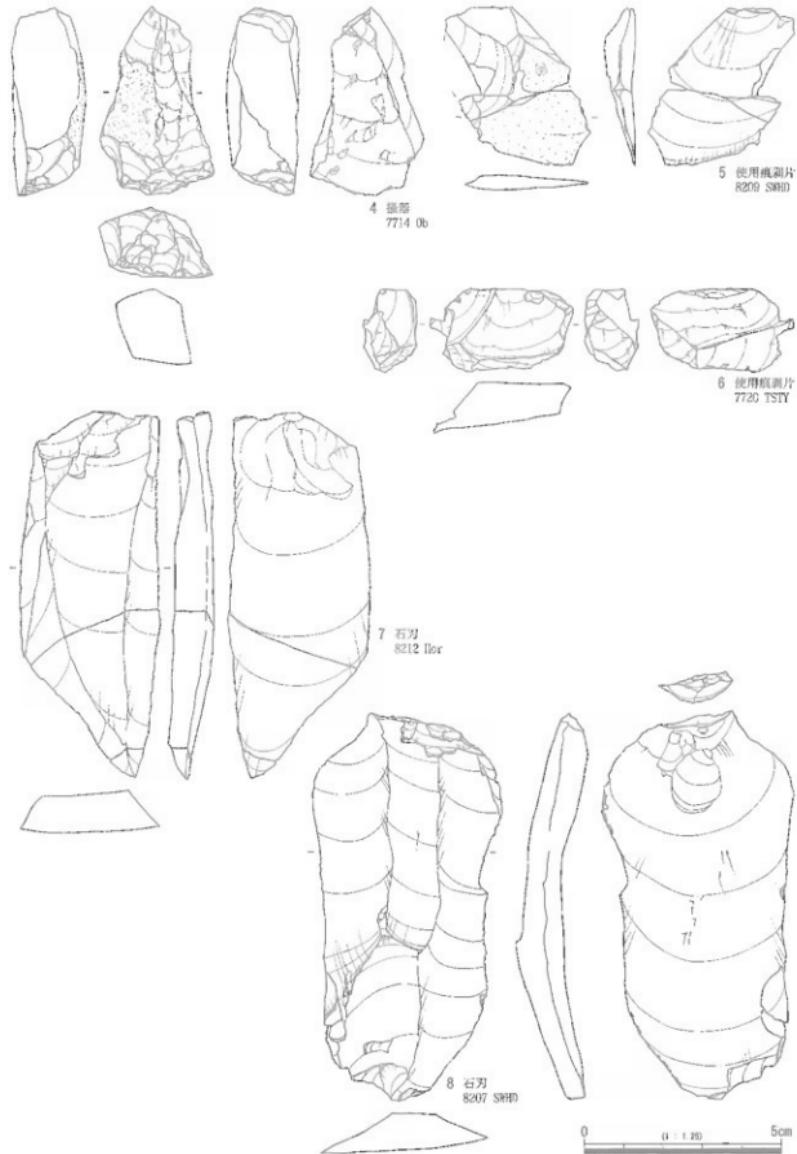
使用痕剥片は2点出土した。5は調査時の破損で3分する。打点部付近も新しく欠損する。諏訪星ヶ台産黒曜石の、末端部が薄くなる剥片を使用している。背面下半には自然面が残存し、一部に打撃痕が認められる。腹面左側縁中央部から末端部に微細剥離痕が認められる。6は蓼科冷山産黒曜石の、剥片の折れた末端部を使用している。末端部は厚みがある。腹面左側縁上部の比較的鋭い縁辺、及び腹面右側縁下部から末端部の鈍い縁辺に微細剥離痕が認められる。また、上端の折面には比較的大きいものも含む剥離痕が多く認められる。

石刃は2点出土している。ホルンフェルスの石刃(7)は末端部が尖る幅が広いもので、両側縁に鈍い縁辺をもつ。打面は小さく残るのみだが、平坦な剥離面である。腹面は若干膨らみをもち、背面側に向けて反る形状である。諏訪星ヶ台産黒曜石の石刃(8)は両側縁に鋭い縁辺を有する幅広のものである。打面には、打面調整と考えられる細かい剥離が認められる。背面末端部左側には古い末端部方向からの剥離が認められるが、そのほかの剥離は同一作業面での石刃の剥離痕である。背面中央の比較的古い石刃の剥離痕は打面調整に先行する。腹面末端部には偶発的な割れが生じている。背腹両側縁に微細剥離痕がほぼ途切れなく認められる。

ホルンフェルスの剥片は比較的大きいものが多い。平坦な剥離面を打面にして縦長の剥片を連続して剥離するものが一定量存在する。近接するものの接合例が1組あるが、折面での接合である。単独で出土しているガラス質黒色安山岩の剥片は小さく厚さがある不定形のものである。蓼科冷山産黒曜石の剥片は、平坦な剥離面打面をもつ厚みのある不定形のものである。打面転移を繰り返して剥片剥離を進行させている。



第51図 第II文化層 出土石器(1)



第52圖 第II文化層 出土石器(2)

4 第Ⅲ文化層(Y L L~Y L U)の遺構と遺物

休場層からは、礫群9基、配石5基、石器ブロック6基が検出された。各遺構は1か所を除きそれぞれ個別に検出されており、遺構の重複は見られなかった。遺物は礫143点、石器858点で、本遺跡の文化層中もっとも多い。これらの遺構・遺物は調査区の北部と、中央部～南部に分かれて分布している。

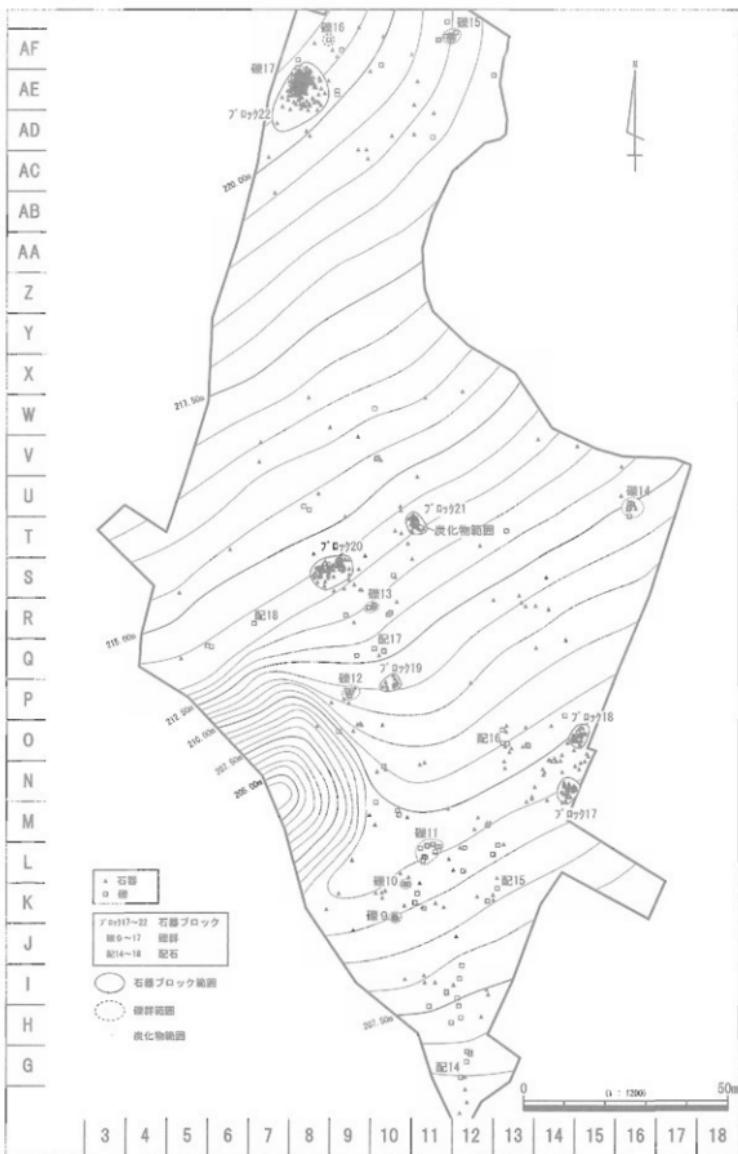
石器の石材では黒曜石が全体の61%を占め、ホルンフェルスの34%がこれに続く。黒曜石は産地の多様化が見られ、在地系では箱根畠宿産や神津島恩馳島産が登場し、信州系では主たる産地が蓼科冷山産から諏訪星ヶ台産及び和田鷹山産へ移行している。中でも箱根畠宿産黒曜石は調査区北西部に大規模なブロックを形成しており、資料が小さいため産地分析が不可能であった碎片類を含めると、全石器の53%が集中している。

器種では、858点中83.7%を剥片・碎片類が占めており、製品は113点であった。ナイフ形石器が56点と製品の半数を占め、尖頭器の19点がこれに続く。また石核も17点出土しており、ホルンフェルスを主体に接合資料も比較的多く確認された。

第15表 第Ⅲ文化層 石器組成表

		ナイフ形石器	尖頭器	攝器	削器	抉入削器	台形石器	石錐	彫器	加工痕剥片	使用痕剥片	石核	石刃	剥片・碎片	礫器	台石	計
ホルンフェルス	Hor	4	2		5	3				2		15	1	260			292
ガラス質黒色安山岩	GAn	2	4		1	1					1			3			12
黒曜石 (Ob)	諏訪星ヶ台群	SWHD	15	4	1	1					2		3	3			29
	夢科冷山群	TSTY			3						1		1	2			7
	和田鷹山群	WDTY	4	5						1			2	3			15
	和田土屋橋北群	WDTK	2														2
	和田土屋橋西群	WDTN										1					1
	和田芙蓉ライト群	WDHY											1				1
	神津島恩馳島群	KZOB								3			2				5
	天城柏峰群	AGKT	1								1						2
	箱根畠宿群	HNHJ	24	1	2	2	1	2	1	1	1	3		244			282
産地不明*	-	2								1		1		175			179
流紋岩	Rhy												21				21
珪質頁岩	SSh	1								1			1				3
チャート	Ch	1															1
黄玉石	YJa								1								1
細粒安山岩	FAn								1				2				2
デイサイト	Da												1				1
輝石安山岩	An(Py)													1	1		2
計		56	19	3	9	5	2	1	1	6	9	19	8	718	1	1	858

* 4点を除いて全て「箱根畠宿群」と推定される



第53図 第III文化層 遺物分布図

(1) 碓群

9号碓群 (第54図)

グリッドK-10の南に位置し、同一グリッドの北東に10号碓群がある。10点の碓で構成され、検出層位はYLMである。石材の内訳は輝石安山岩6点、玄武岩3点、多孔質玄武岩1点で、総重量は2,150g(平均重量215.0g)である。うち2点は接合が確認された。

10号碓群 (第54図)

グリッドK-10の北東角に位置する。4点の碓で構成され、検出層位はYLである。石材の内訳は輝石安山岩2点、玄武岩1点、多孔質玄武岩1点で、総重量は1,560g(平均重量390.0g)である。

11号碓群 (第54図)

グリッドL-11に位置する。11点の碓で構成され、検出層位はYLのSCである。石材の内訳は輝石安山岩1点、玄武岩5点、多孔質玄武岩5点で、総重量は4,890g(平均重量444.5g)である。

12号碓群 (第55図)

グリッドP-9に位置する。6点の碓で構成され、検出層位はYLUである。全て輝石安山岩で、総重量は3,230g(平均重量538.3g)である。碓群内で2組、5点の接合が確認された。

13号碓群 (第55図)

グリッドR-9とR-10の境に位置する。5点の碓で構成され、検出層位はYLMである。石材の内訳は輝石安山岩3点、多孔質安山岩2点で、総重量は1,640g(平均重量328.0g)である。

14号碓群 (第55図)

グリッドU-16に位置する。8点の碓で構成され、検出層位はYLMである。石材の内訳は輝石安山岩4点、多孔質玄武岩4点で、総重量は1,800g(平均重量225.0g)である。

15号碓群 (第55図)

グリッドAF-11とAF-12の境に位置する。14点の碓で構成され、検出層位はYLとYLUである。石材の内訳は輝石安山岩2点、玄武岩4点、多孔質玄武岩8点で、総重量は4,010g(平均重量286.4g)である。

16号碓群 (第55図)

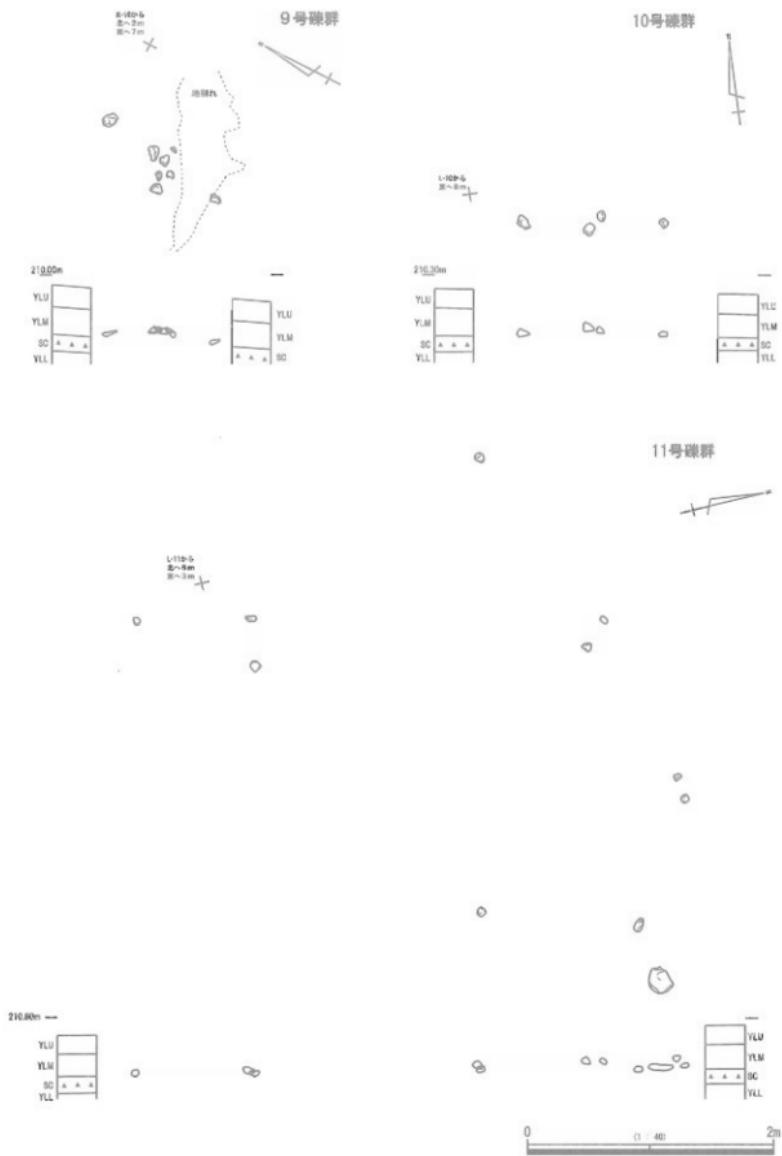
グリッドAF-8とAF-9の境に位置する。3点の碓で構成され、検出層位はYLUである。石材の内訳は輝石安山岩2点、多孔質玄武岩1点で、総重量は790g(平均重量263.3g)である。

17号碓群 (第56図)

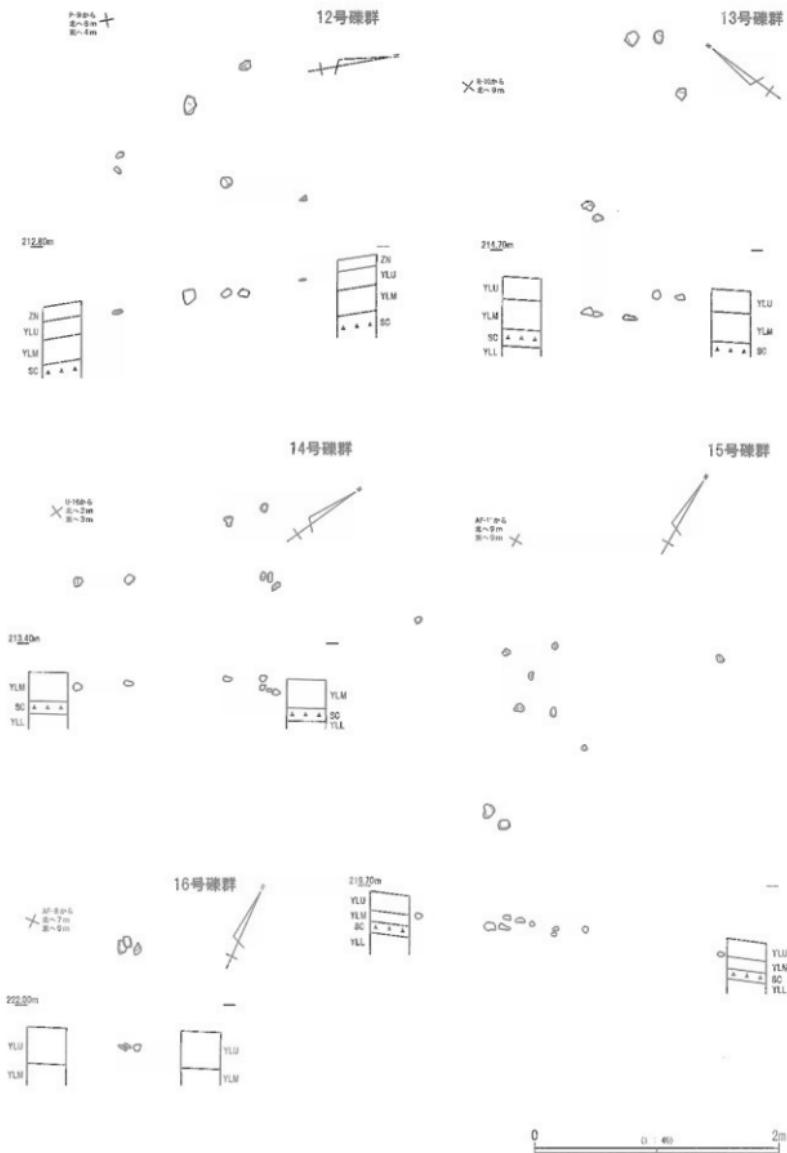
グリッドAE-8に位置し、22号ブロックと重複している。14点の碓で構成され、検出層位はYLMである。石材の内訳は輝石安山岩9点、玄武岩2点、多孔質安山岩1点、多孔質玄武岩2点で、総重量は2,240g(平均重量160.0g)である。うち5点は接合が確認された。

第16表 第Ⅲ文化層 碓群組成表

	9号	10号	11号	12号	13号	14号	15号	16号	17号	計
輝石安山岩 An(Py)	6	2	1	6	3	4	2	2	9	35
玄武岩 Ba	3	1					4		2	10
多孔質安山岩 VAn			5		2				1	8
多孔質玄武岩 VBa	1	1	5			4	8	1	2	22
計	10	4	11	6	5	8	14	3	14	75
総重量(g)	2,150	1,560	4,890	3,230	1,640	1,800	4,010	790	2,240	22,310



第54図 第III文化層 9号～11号 叢群



第55図 第III文化層 12号～16号縄群



(2) 配石 (第53図)

14号配石

調査区南端、グリッドG-12に位置する。検出層位はY LのS Cである。台石と礫で構成され、石材は2点とも輝石安山岩で、重量は台石が8,510g、礫は1,320gである。台石には赤化が見られる。

15号配石

グリッドK-13の北西に位置する。検出層位はY LのS Cである。石材は輝石安山岩で、重量は1,100gである。

16号配石

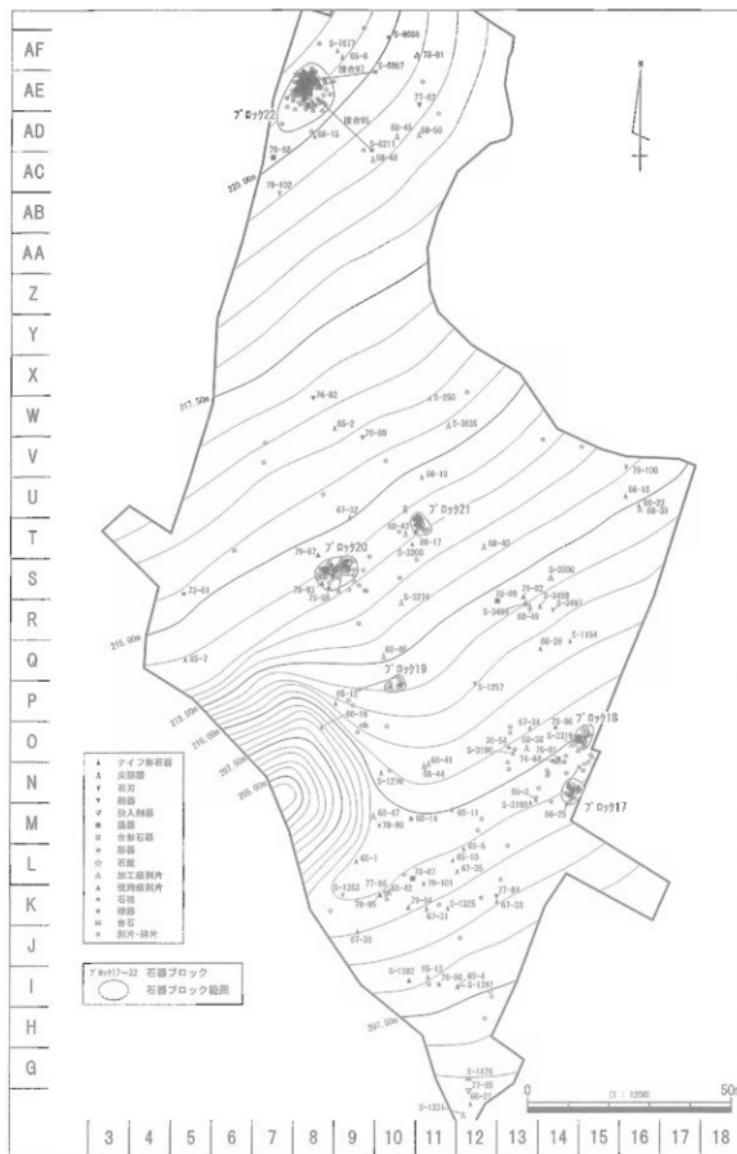
グリッドO-13に位置する。検出層位はY LMである。2点の礫で構成され、石材は輝石安山岩で、重量は1,370gと850gである。

17号配石

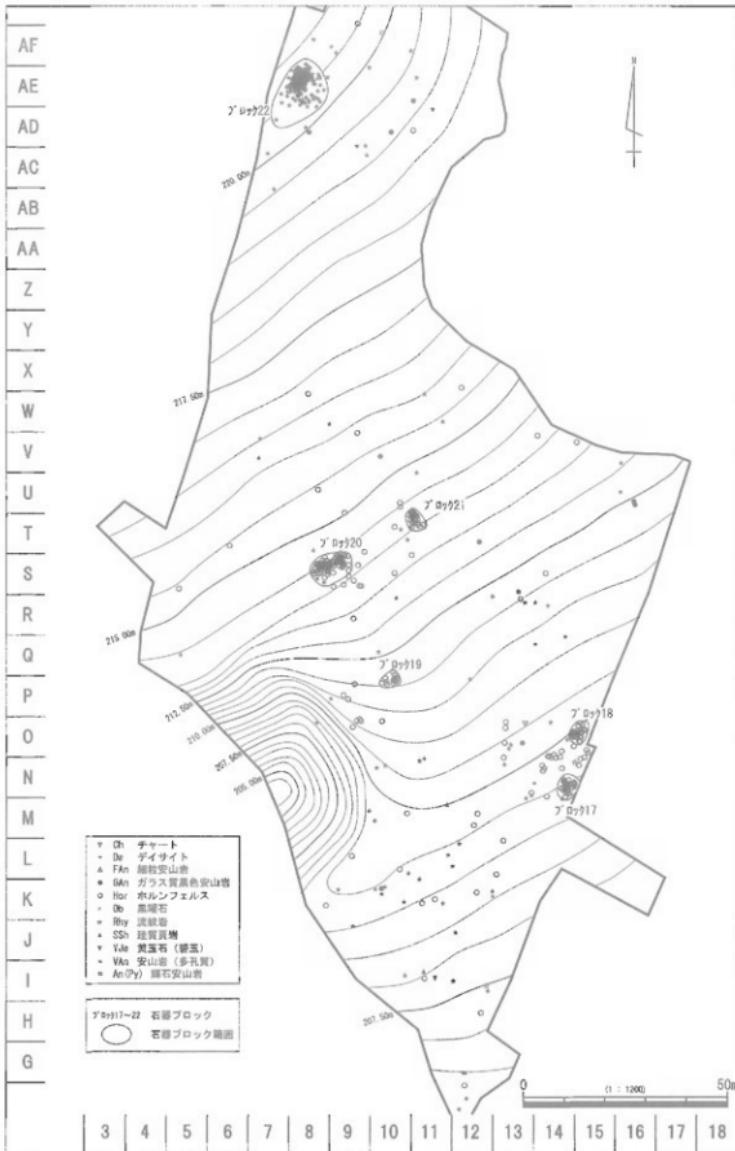
グリッドQ-10に位置する。検出層位はY LMである。2点の礫で構成され、石材は輝石安山岩で、重量は1,760gと640gである。

18号配石

グリッドR-7に位置し、周辺に遺物もなく孤立している。検出層位はY LUである。石材は多孔質安山岩で、重量は1,120gである。



第57図 第III文化層 器器別分布図



第58図 第III文化層 石材別分布図

(3) 石器ブロック

17号石器ブロック (第59図)

調査区東端、グリッドN-14とN-15の境に位置し、約10m北に18号ブロックがある。33点の石器で構成され、検出層位はYL M~YL Uである。石材の内訳は流紋岩19点、ホルンフェルス14点で、全て剥片である。ホルンフェルスは母岩別分類により3個体に分類された。流紋岩はすべて同一の母岩である。流紋岩の剥片の多くは尖頭器製作時の二次加工剥片と推定され、3組の接合関係を有する。

18号石器ブロック (第59図)

調査区東端、グリッドO-14とO-15の境に位置する。35点の石器で構成され、検出層位の主体はYL Mだが、YLのSCとYL Uも一定量含まれる。石材はすべてホルンフェルスで、石核1点、加工痕剥片1点が出土している。母岩別分類により8個体に分類された。1組の接合関係を有する。

19号石器ブロック (第60図)

グリッドP-10とQ-10の境に位置する。16点の石器で構成され、検出層位の主体はYL Mである。石材はすべてホルンフェルスで、石核1点、削器1点が含まれる。ホルンフェルスは母岩別分類により4個体に分類された。4組の接合関係を有する。

20号石器ブロック (第61図)

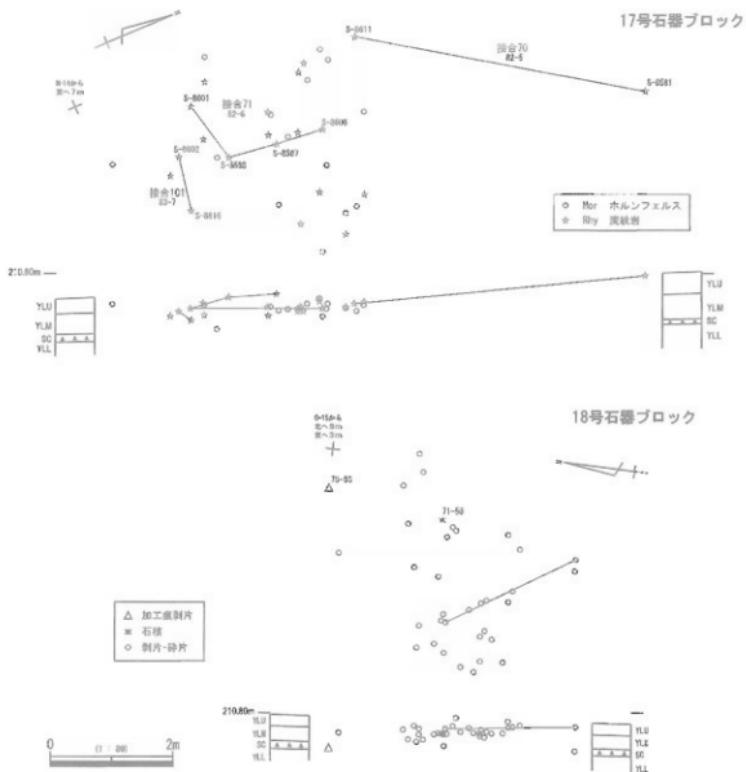
調査区中央部、グリッドS-8とS-9の境に位置する。108点の石器で構成され、検出層位の主体はYL Mであるが、YL L~YL Uまで散らばりがある。石材の内訳はホルンフェルス104点、箱根烟宿産黒曜石4点で、石核7点を除いて全て剥片である。ホルンフェルスは母岩別分類により13個体に分類され、黒曜石は2個体に分類された。12組の接合関係を有する。

21号石器ブロック (第63図)

調査区中央部、グリッドT-11の北西に位置する。炭化物集中範囲と重複する。48点の石器で構成され、検出層位の主体はYLのSCであるが、YL L~YL Mまで散らばりがある。石材の内訳はホルンフェルス40点、ガラス質黒色安山岩2点、黒曜石4点、細粒安山岩及び珪質頁岩各1点で、主体はホルンフェルスだが多様な石材を含む。ホルンフェルスの削器類3点、石核4点、石刃1点のほか、珪質頁岩の加工痕剥片1点が出土している。ホルンフェルスは母岩別分類により10個体に分類された。8組の接合関係を有する。

22号石器ブロック (第64図)

調査区北西部、グリッドA-E-8を中心に分布は周辺グリッドにまで及ぶ。17号礫群と重複している。434点の石器で構成され、検出層位はYL L~YL Uまで分散している。石材の内訳は、細粒安山岩の剥片1点を除いてすべて黒曜石である。産地分析にかけられない碎片が多くたため産地不明のもの171点を含むが、肉眼による観察によりすべてが箱根烟宿産黒曜石と推定される。小型のナイフ形石器19点をはじめ、削器類3点、台形石器2点、石錐1点、使用痕剥片1点、加工痕剥片2点と多様な製品が出土したが、石核は1点のみであった。黒曜石は母岩別分類により34個体に分類された。ブロック内外で17組の接合関係を有する。

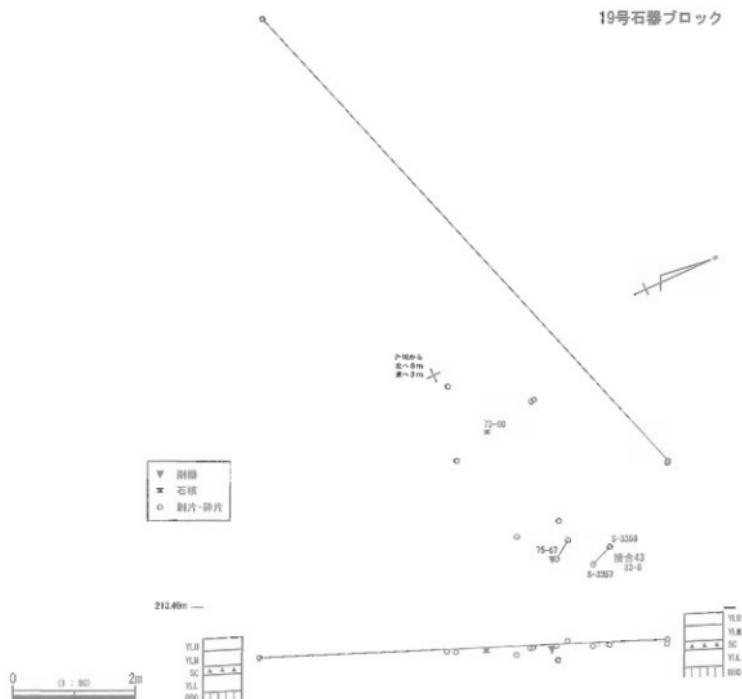


第59図 第Ⅲ文化層 17号・18号石器ブロック

第17表 17号・18号石器ブロック組成表

17号石器ブロック		剥片・碎片	加工痕剥片	石核	剥片・碎片	計
ホルンフェルス	Hor					
ホルンフェルス	Hor	14				
流紋岩	Rhy	19				
計		33				

18号石器ブロック		剥片・碎片	加工痕剥片	石核	計
ホルンフェルス	Hor				
ホルンフェルス	Hor	1	1	33	35

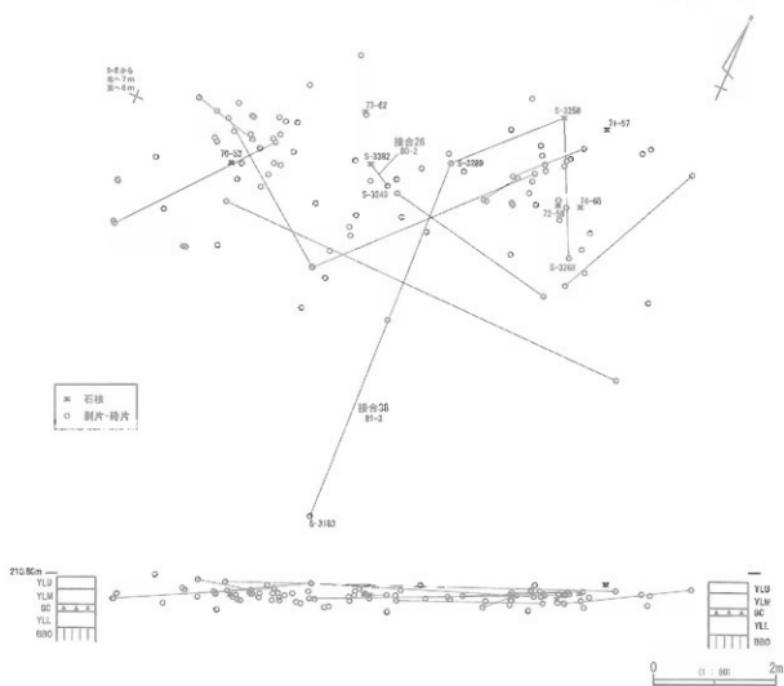


第60図 第III文化層 19号石器ブロック

第18表 19号石器ブロック組成表

19号石器ブロック	削器	石核	剥片・碎片	計
ホルンフェルス Hor	1	1	14	16

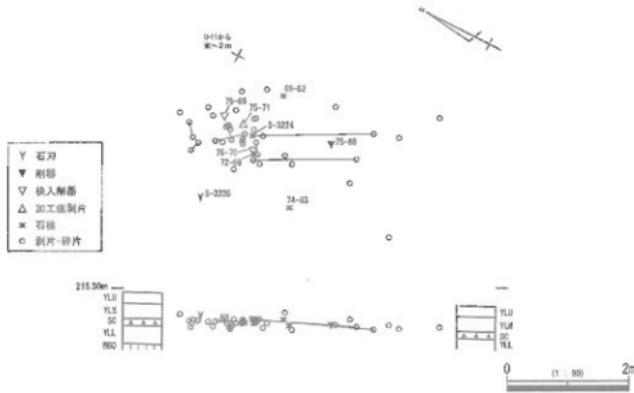
20号石器ブロック



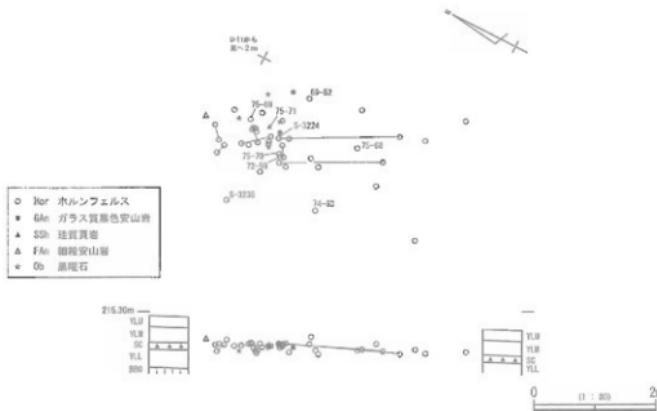
第61図 第III文化層 20号石器ブロック

第19表 20号・21号石器ブロック組成表

20号石器ブロック		石核	剥片・碎片	計	21号石器ブロック		削器	抉入削器	加工痕剥片	石核	石刃	剥片・碎片	計
ホルンフェルス	Hor	6	98	104	ホルンフェルス	Hor	1	2	4	1	32	40	
黒曜石	箱根烟宿群	HnHJ	1	3	4	ガラス質黒色安山岩	GAn					2	2
計		7	101	108	細粒安山岩	FAn					1	1	
珪質頁岩					SSh				1			1	
黒曜石	(Ob)				WDTY						2	2	
産地不明		-									2	2	
計				1	2	1	4	1	39	48			



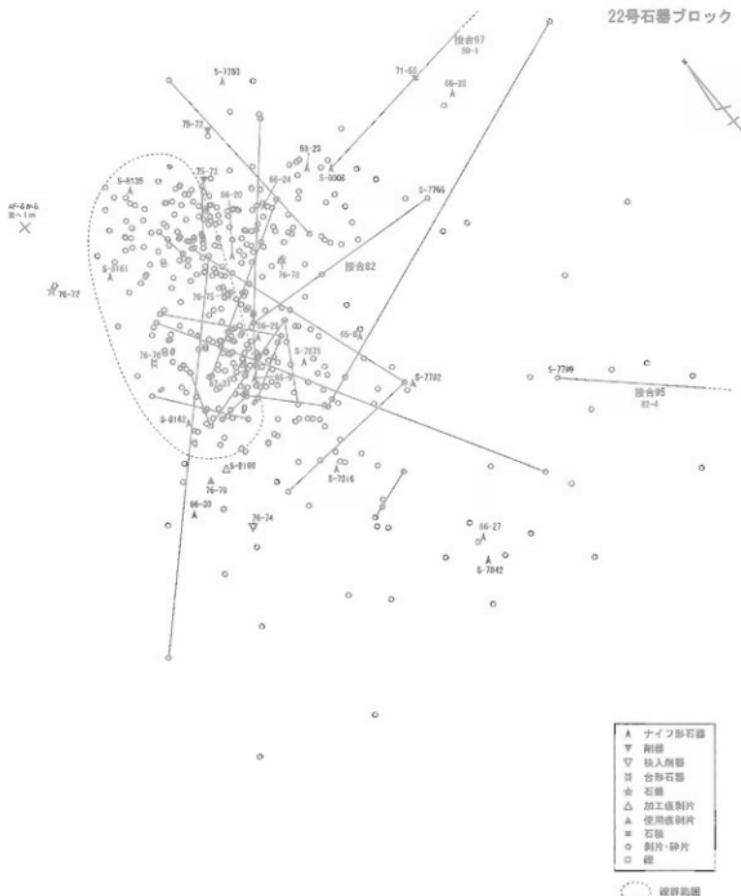
第62図 第III文化層 21号石器ブロック器種別



第63図 第III文化層 21号石器ブロック石材別

第20表 22号石器ブロック組成表

22号石器ブロック		ナイフ形石器	削器	抉入削器	台形石器	石錐	使用痕剥片	加工痕剥片	石核	剥片・碎片	計
黒曜石(Ob)	箱根烟宿群 HNHJ	18	2	1	2	1	1	1		236	262
産地不明	-	1						1	1	168	171
細粒安山岩	FAn								1	1	
計		19	2	1	2	1	1	2	1	405	434



第64図 第Ⅲ文化層 22号石器ブロック

(4) 遺物

出土している石器について報告する。この文化層については、まず出土数の多い石器について分類を行って記載し、その後でブロックごとに記載する。分類を行う器種は、ナイフ形石器、尖頭器、石核の三者である。また、図化した接合資料については最後にまとめて記載している。

なお本文中、図化した遺物は挿図番号、図化していない遺物については遺物番号(S-XXXX)で記載する。

(ア) ナイフ形石器・尖頭器・石核

ナイフ形石器 (第65図1~第67図37)

ナイフ形石器は56点出土している。まず、二次加工の部位から、二側縁加工、基部加工、先端部加工、先端・基部加工、一側縁加工に分類した。帰属数が多くなる二側縁加工については、素材の用い方をもとに、a類~c類に細分した。また刃部が特に傾くものを切出形として分けた。分類の内容と点数は以下の表のとおりである。なお、二次加工がなされていなくても、鋭い縁辺を持たない部分については、二次加工がなされた部位と同様に扱って分類を行ったところがある。

第21表 ナイフ形石器の分類と組成

	二次加工の部位	種類	内 容	点数
A	二側縁加工	a類	素材剥片末端部側を先端に据えるもの	18
B		b類	素材剥片打点側を先端に据えるもの	10
C		c類	素材剥片を横位に用いるもの	4
D		切出形	刃部が特に傾くもの	8
E	基部加工			6
F	先端・基部加工			4
G	一側縁加工			1
H	その他			5
			合 計	56

(ア) 二側縁加工a類 (第65図1~13)

18点中、1点がホルンフェルス、16点が黒曜石、1点が珪質頁岩を用いる。

1はホルンフェルスを用い、風化が激しく主要剥離面の剥離方向の認定が困難であるが、最も可能性が高いと考え、二側縁加工a類に分類した。腹面基部側には比較的平坦な剥離が両側縁から施される。背面では右側縁に急斜度剥離がなされる。先端部は節理面に沿って折損する。

調訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは4点ある(2・3・4・5)。2と3は基部が尖る。2は素材剥片の打面が基部にごく小さく残る。背面には主要剥離と同一の剥離方向の広い剥離面が認められる。右側縁基部には素材面が残される。その面から背面に向けてなされた剥離は接する二次加工の後でなされたものであり、二次加工と考えられる。厚みのある右側縁では二次加工は大きく、薄い左側縁では小さいものとなる。刃部腹面は新しく欠損する。3は基部腹面に主要剥離のバルバースカーラーが認められる。背面先端部側には自然面が残存し、右側縁には大きく先行する剥離が残される。先行する剥離面として残された剥離は、ナイフ形石器の素材となつた石刃よりかなり大きいものであったと考えられる。二次加工は背面への急斜度剥離に限定される。背面稜上からの剥離痕が認められるが、いずれも腹面からの二次加工に先行することから、素材剥片が剥離される以前に行われた剥離と考えられる。右側縁への剥離は基部に若干行われるのみである。腹面先端部に残される剥離は二次加工に先行するものと考えられ、その性格は不明である。先端部は新しく欠損する。4と5は逆台形状の基部をもつ。4は、背面に主要剥離と同様の剥離方向の剥離痕が残された石刃を素材とする。基部には打面が残されており、

調整打面の可能性がある。背面には一部に節理面が認められる。5は右肩部に刃部をもつと考えられる。左側縁は腹面側のみから比較的小さい加工が施されるのにに対して、右側縁では背面側には急斜度の、腹面側には平坦な剥離が施される。基部は腹面側のみに二次加工がなされる。刃部と考えられる部分には背腹両面に平坦な剥離が認められる。

和田鷹山産黒曜石を用いた1点(6)は、右肩に刃部をもつ。基部に折面が残置しており、折れた石刃の末端部側を素材とした可能性が高い。両側縁の二次加工はほぼ背面側への剥離に限定されるが、左側縁上部に例外的に背面を加擊した急斜度剥離が認められる。刃部背腹両面には平坦な剥離が認められるが、性格は不明である。腹面先端部からの剥離は衝撃剥離である可能性がある。刃部腹面には新しい欠損がある。

和田土屋橋北産黒曜石を用いた1点(7)は石刃を素材とすると考えられる。背面中央部に残された最も古い剥離面は主要剥離面と逆方向からの剥離である。背面への急斜度剥離が整形剥離の主体であるが、腹面左側縁基部寄り及び基部には平坦な剥離がなされる。背面基部側の左右側縁からの剥離は器体中央まで及ぶ。先端部は新しく欠損する。

天城柏崎産黒曜石を用いた1点(S-250)は先端部側を大きく折損する。基部に素材打面を残置し、小さい打面調整が認められる。整形剥離は背面側に限定される。右側縁の二次加工は基部側に小さいものが連続するのみで、それより先端部側には折面が認められる。

箱根烟宿産黒曜石を用いたものは7点ある(8・9・10・11)。内5点は22号石器ブロックに帰属する。2点は基部を折損し、3点は基部のみが残存する。8と9は基部を欠損する。8は、背面に右方向からの剥離が主に認められる剥片を素材とする。二次加工は、右側縁では腹面側からのみなされるが、左側縁では背腹両面からなされる。ただし、先端部側では腹面からの剥離が主体となる。9は背面に自然面を残す。整形剥離は腹面側に限定される。背面先端部に認められる剥離は使用による折面の可能性がある。3点は先端部側を大きく折損する。1点(S-8162)は、鋭い逆台形状の基部である。基部端には折面様の素材面を残す。両側縁に背面への急斜度剥離が施される。残る2点は、基部が比較的丸みをもつ。1点(S-7768)の基部端には折面様の素材面を残す。背面に残された素材面は左方向からの剥離が多く認められる。二次加工は背面側に限定され、右側縁では顕著であるが、左側縁ではごく基部寄りに部分的に認められるのみである。先端部を折損した折面にも二次加工のような剥離が施されるが、その性格は不明である。もう1点(S-7816)は基部の一部に鋭い縁辺を残しながら、左側縁では背面へ、右側縁では腹面へ二次加工が施される。2点はブロック外出土のものである。10は基部が逆台形状になる。折れた剥片の末端部を素材としており、基部には素材の折面が残存する。背面には素材剥片主要剥離とは反対方向の剥離軸をもつ広い剥離が認められる。二次加工は背面への加工がほとんどであるが、左側縁では基部付近で背面への加工が乏しくなり、それを補うように腹面に平坦な剥離がなされる。刃部背面先端部には小さい剥離が認められる。11は厚みのある剥片を素材とする。背面には主要剥離と同一の剥離方向をもつ剥離が3枚認められる。二次加工は背面への急斜度剥離が主体である。ただし、右側縁先端部には背面から腹面側に向けた二次加工がなされている。また、基部腹面にも平坦剥離が施され、腹面右側縁からが主体であるが、左側縁からも剥離される。基部腹面の剥離は背面での二次加工の後に施されている。刃部背面にも一部に剥離が認められる。

产地不明の黒曜石を用いたものは2点ある(12)。1点(S-7842)は22号石器ブロックに帰属する。先端部及び基部を折損する。石刃を素材とする可能性が高い。左側縁には背面への二次加工が並び、右側縁上半には鋭い縁辺が、下半には折面が認められる。加工は左側縁のみになされるが、形態から二側縁加工に分類した。12は先端部を新しく欠損する。左側縁の基部端に素材面を残す。背面に残された素材の剥離面は様々な方向からの剥離である。

珪質真岩を用いた1点(13)は、背面に主要剥離と反対方向の剥離軸をもつ剥離痕が認められる。基部に自然面が残存し、その部分は二次加工が施されない。右側縁の加工は内湾し、刃部との境界に明瞭な屈曲を有する。

(B) 二側縁加工b類 (第66図14~21)

10点中、1点がホルンフェルス、1点がガラス質黒色安山岩、8点が黒曜石を用いる。

ホルンフェルスを用いた1点(14)は基部が尖る。先端部側は新しく欠損するが、左肩部に刃部が存在したものと考えた。基部の加工は腹面への平坦剥離を両側縁から行い、右側縁上半では背面側へ急斜度剥離が行われる。

ガラス質黒色安山岩を用いた1点(15)は左肩に刃部をもつ。二次加工は基部側左側縁の1枚を除いて、小さいものが認められるのみである。腹面左側縁上半を新しく欠損する。

調訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは5点ある(16・17・18・19)。16は涙滴形の外形を呈する。右側縁から、基部、左側縁下半に、背面に向けて二次加工が施される。腹面への加工は基部周辺に限定される。他の3点は基部が尖る。17は、右側縁では背面に急斜度剥離を行い、腹面基部側には平坦剥離を施す。左側縁では背面での二次加工は基部端に比較的大きい剥離が認められるものの先端部側では小さい剥離が行われるのみであり、むしろ腹面への平坦剥離が主体になる。先端部は屈曲するが、小さい剥離が認められ、先端部の折損に対して整形剥離が行われた可能性がある。18は左肩に刃部をもつ。腹面基部には石材に含まれた夾雜物が認められる。二次加工は急斜度剥離に限定される。右側縁基部には素材面が残存し二次加工は施されない。刃部背面側には微細な剥離が認められる。もう1点(S-3498)は先端部を折損する。背面に主要剥離と同一方向の剥離軸をもつ剥離面が2枚認められる石刃を素材とする。左肩に刃部をもち、刃部には微細剥離痕が認められる。左側縁の整形剥離は背面側にも一部認められるものの、腹面側への剥離が主体で、特に基部圓では急斜度剥離になる。右側縁の整形剥離は、基部側では腹面に向けての急斜度剥離で行われ、先端部側では背腹両面からの急斜度剥離による。19は基部が丸みを帯びる。末端部に自然面が残存する石刃を素材としている。基部には小さく素材片の折面が残されている。右側縁及び左側縁の大部分では整形は背面側になされるが、左側縁先端部では腹面側に向けて急斜度剥離が施される。基部及び右側縁基部端には二次加工は施されない。刃部は鈍く、背面側に微細剥離痕が認められる。

箱根畠宿産黒曜石を用いたものは3点ある(20・21)。内2点は22号石器ブロックに帰属する。20は、基部に素材折面を残置しており、基部が台形状を呈する。右側縁は背面への二次加工がなされる。左側縁基部は折面が残され、明確な剥離には至っていないが、背面に整形剥離を意図したと考えられる打撃痕が認められる。もう1点(S-8161)は先端部側と基部端を欠損する。左右側縁に背面方向に向けた小さい急斜度剥離が認められる。背面には右方向から剥離された素材面が残される。ブロック外出土の1点(21)は基部が小さい逆台形状である。背面基部には自然面が残存する。左右側縁及び基部端の調整は全て背面側になされる。先端部及びその周辺の刃部には折面が認められる。

(C) 二側縁加工c類 (第66図22~25)

4点中、1点がガラス質黒色安山岩、3点が黒曜石を用いる。

ガラス質黒色安山岩を用いた1点(22)は涙滴形を呈するが、基部には整形剥離は施されていない。背面基部側に認められる左側縁方向からの剥離は主要剥離以前のものである可能性が高い。左側縁先端部及び右側縁には背面側への二次加工が認められる。腹面への加工は、腹面右側縁と左側縁中央部に認められる。

黒曜石を用いたものは全てが箱根畠宿産である(23・24・25)。3点中2点が22号石器ブロックに帰属する。23と24は基部が台形状になる。23の背面には、主要剥離と同一方向からなされた素材剥離面が残

存する。左側縁及び右側縁に急斜度剥離を行い、基部には二次加工が施されない。24は小型である。背面に残された素材面は主要剥離と剥離軸を異にする。整形剥離が左右側縁にはなされるが、基部にはなされない。ブロック外出土のものは1点である。25は左肩に刃部をもつ。背面には主要剥離と同一の剥離軸をもつ剥離面が多い。背面側への剥離が主体となるが、右側縁基部には背面側からの剥離が行われているかもしれない。刃部腹面側にも断続的に剥離が認められる。

(D) 切出形 (第66図26~30)

8点全てが黒曜石を用いる。

諏訪星ヶ台産黒曜石を用いた1点(26)は素材剥片打点側を先端に据える。基部は逆台形状になる。主要剥離と背面に残された剥離の剥離軸は若干異なる。基部には折面が残存するが、二次加工が折れのあとに施されることから、素材の折面である可能性がある。左側縁の整形は背腹両面への平坦な剥離でなされる。右側縁の二次加工は先端部側で顕著で、中ほどでは施されず、基部端に小さい剥離が認められる。

箱根烟宿産黒曜石を用いたものは7点ある。内6点は22号石器ブロックに属する(27・接合97・28・29・30)。素材剥片末端部側を先端に据えるものが2点ある。27は小さい逆台形状の基部をもつ。基部には平坦な素材面が残存し、確実ではないが、素材剥片打面の可能性がある。背面先端部には主要剥離とは異なる剥離軸をもつ剥離が認められ、不定形な剥片を素材とした可能性が高い。背面への加工が主となるが、左側縁中央部には背面側からの剥離も認められる。素材自体が薄くなる右側縁では、二次加工は小さいものが主体となる。もう1点はブロック外のII b類石核と接合する(p.116、接合番号97、第80図1)。28は素材剥片を横位に用いる。基部は三角形状になる。背面には主要剥離と同一の剥離方向の剥離面が2枚認められる。左側縁から、基部端、右側縁にかけて急斜度剥離が施される。残る3点は、左下側縁に素材剥片打面を残置し、左肩に刃部を有する。また、二次加工は右側縁に限定される。29は基部が小さい逆台形状になる。背面に主要剥離と異なる剥離軸の剥離が存在する。素材打面は調整打面である。右側縁の二次加工は背面側へのものが主体だが、腹面側へ向けたものも若干認められる。基部が逆台形状になるものが2点ある。30は基部にも鋭い線辺を残す。素材打面は平坦な剥離面である。背面の素材剥離面は概ね主要剥離と剥離軸を同じくするが、異なるものもある。もう1点(S-8135)は基部及び先端部に折面が認められるが、基部側の折面は素材剥片剥離と同時に生じたものと考えられる。背面に残された素材剥離に先行する剥離面は主要剥離面と剥離軸を同じくする。右側縁の二次加工は背面側に向けたものである。ブロック外出土の1点(S-7677)は素材剥片を横位に用いる。右肩に刃部をもち、基部は尖る。左側縁には背面側に整形剥離が行われるのに対して、右側縁では腹面側へ剥離される。いずれも急斜度剥離である。

(E) 基部加工 (第67図31~34)

6点中、2点がホルンフェルス、3点が黒曜石、1点がチャートを用いる。素材打点側を基部に据えるものである。

ホルンフェルスを用いたものは2点ある(31・32)。両者とも石刃を素材とする。31は基部を先鋒に作り出す。右側縁は背腹両面に二次加工がなされる。左側縁では背面側への二次加工は基部端を中心に一部に限定され、腹面側での剥離が主となるが、右側縁ほど加工は顕著でない。先端部は節理面で折損する。32は、基部左右両側縁に二次加工がなされるが、左側縁基部寄りに腹面側への剥離がみられる以外は背面側に加工される。基部周辺以外にもいたるところに剥離が認められるが、表面の風化に伴う剥落である可能性が高い。

諏訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは2点ある(33)。33は平坦な剥離面打面を基部に残置する。石刃状の剥片を素材とするが、背面左右の刃部をなす剥離面はかなり広いものであったと考えられる。両側縁

に小さい整形剥離を行うのみである。もう1点(S-1397)は基部のみが残存する。石刃を素材とする。右側縁に整形剥離が行われ、尖鋭な基部を作り出し、左側縁には鋭い縁辺が残存する。よって基部片ではなく先端部片である可能性もあるが、素材打点側が加工されていることから基部加工に分類した。

和田鷹山産黒曜石を用いた1点(S-1154)は先端部を折損する。折れた剥片の末端部側を使用しており、基部には素材の折面が残存する。背面の素材剥離面は主要剥離と同一の剥離軸をもつ剥離が主体となる。左側縁基部に背面側への小さい整形剥離が施される。

チャートを用いた1点(34)は基部の一端を錐状に突出させる。右側縁と左側縁基部端への二次加工は背面に向けて行われるが、左側縁の先端部寄りの加工は腹面へ向けた急斜度剥離である。また、左側縁下半には素材折面と考えられる面が認められる。

(F) 先端・基部加工 (第67図35・36)

4点全てが黒曜石を用いる。

諫訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは3点ある(35・36)。いずれも石刃を素材とする。35は基部に素材折面が残る。先端部は左側縁を加工し、基部では左右側縁から二次加工を施す。ただし、基部側の加工は小さいものが主体で、素材の形を大きく改変するものではない。36は小型である。先端部は左右側縁から整形し、先頭部を作り出す。背面側への加工が主体であるが、腹面にも平坦な剥離がなされる。基部は丸みをもつ。基部端では腹面側に小さい整形剥離が施される。基部右側縁では背面側に加工がなされる。左側縁には鋭い縁辺が認められるが、右側縁では加工されない部分には折面が残され、刃部といえる部分はない。腹面先端部には衝撃剥離の可能性のある剥離が認められる。もう1点(S-3208)は基部側を大きく折損し、基部が実際に加工されていたかは不明である。先端部は左側縁の背面側が加工される。

和田鷹山産黒曜石を用いた1点(S-3198)は小型である。先端部側は左側縁を背面への急斜度剥離と、腹面への平坦剥離で加工する。基部側は右側縁を背面への急斜度剥離で整形している。外形は丸みを帶びた菱形様を呈し、二側縁加工のものに似る。

(G) 一側縁加工 (第67図37)

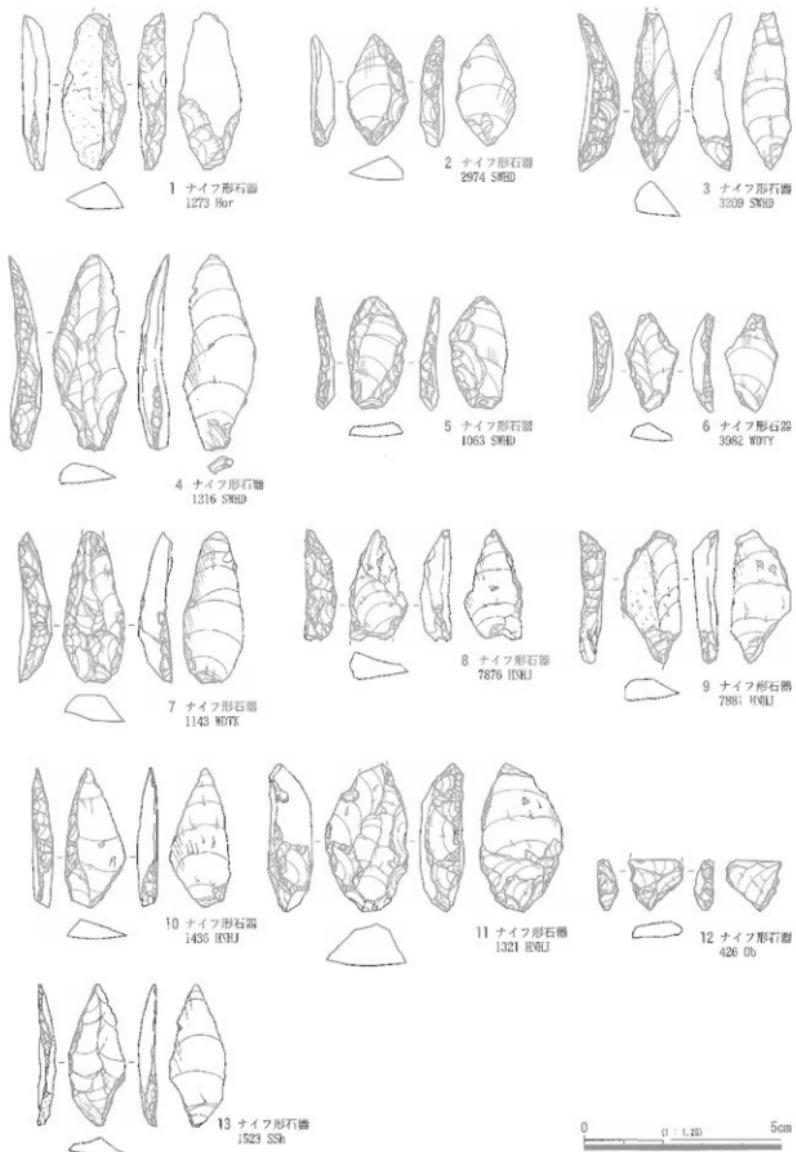
箱根畠宿産を用いた1点のみである(37)。22号石器ブロックに帰属する。調整打面を基部に残置する。小型の縦長剥片を素材とする。右側縁に二次加工が施され、左側縁には鋭い縁辺が残される。左側縁中ほどで屈曲をもつため、外形は二側縁加工のものに似る。腹面右肩部は新しく欠損する。

(H) その他

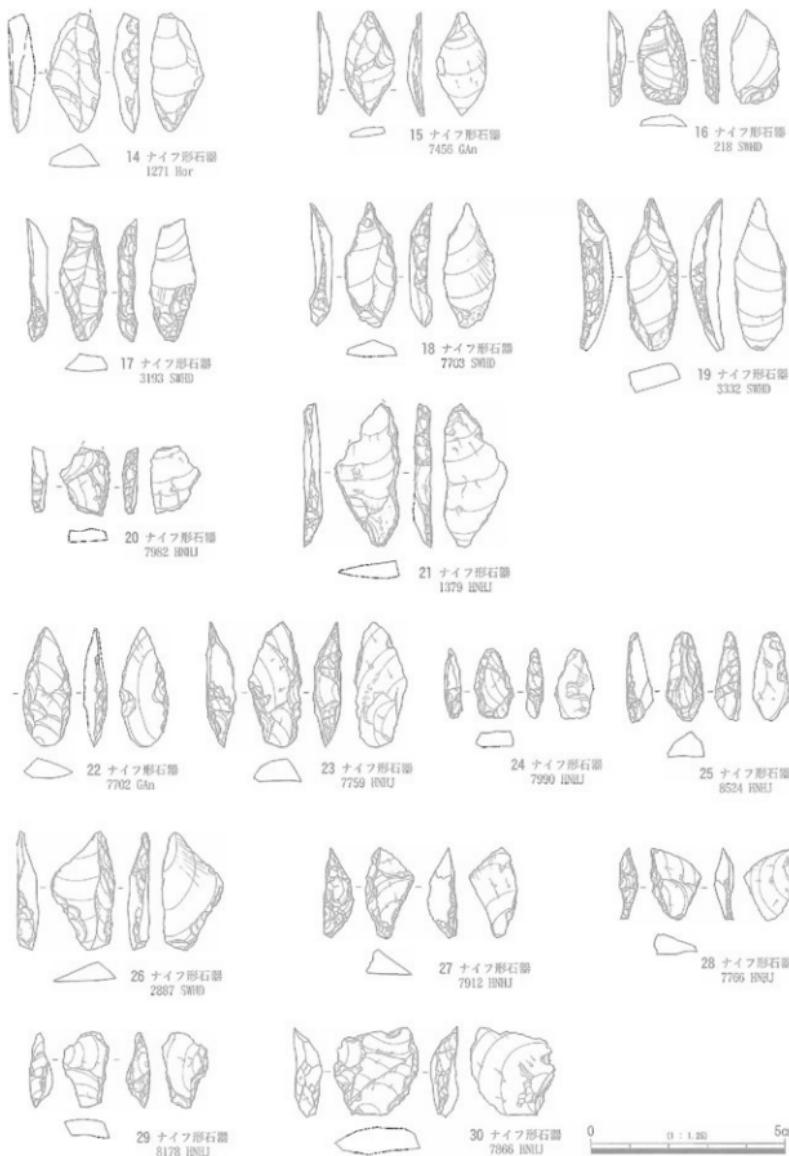
以上に分類できないものが5点ある。5点全てが黒曜石を用いる。

和田鷹山産黒曜石を用いたものは2点ある(S-1325・S-3190)。両者とも先端部片で、左側縁のみに二次加工が認められる。また、素材剥片末端部側を先端に据える。

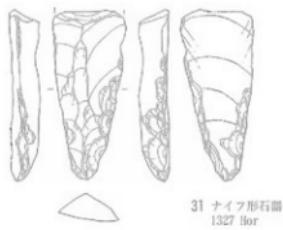
箱根畠宿産黒曜石を用いたものは3点ある。内2点は22号石器ブロックに帰属する。1点(S-7762)は右下部を折損する。残存する左側縁上半には刃部が残される。右側縁には背面に向けて二次加工が施されるが、基部側には部分的に腹面に向けての二次加工もなされる。素材末端部を先端部に据える。もう1点(S-7875)は先端部を大きく折損する。基部には平坦な打面が残され、右側縁に二次加工が施される。左側縁には鋭い縁辺が残される。ブロック外出土の1点(S-1270)は、大型で先端部を折損する。右側縁に粗い整形剥離が行われる。基部側に据えられた素材打面は線状である。



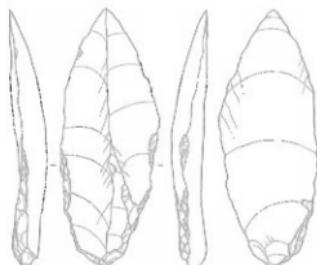
第65図 第III文化層 出土石器(1)



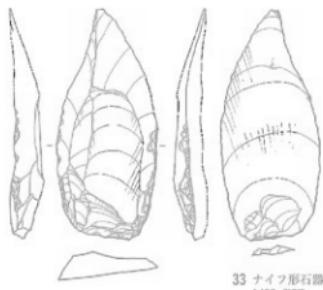
第66図 第III文化層 出土石器(2)



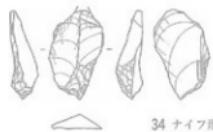
31 ナイフ形石器
1327 Hor



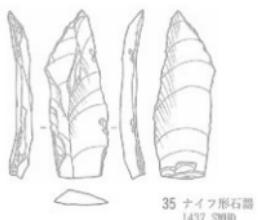
32 ナイフ形石器
3244 Hor



33 ナイフ形石器
1492 SWHD



34 ナイフ形石器
3327 Ch



35 ナイフ形石器
1437 SWHD



36 ナイフ形石器
417 SWHD



37 ナイフ形石器
8121 SWHD



第67図 第Ⅲ文化層 出土石器(3)

尖頭器（第68図38～51）

尖頭器は19点が出土している。二次加工のある面と範囲によって以下のとおり分類した。

第22表 尖頭器の分類と組成

	分類	内 容	点数
A	両面加工	両面のほぼ全面に調整が施されるもの	5
B	半両面加工	片面のほぼ全面が調整され、その裏面に部分的に調整がなされるもの	2
C	片面加工	片面全面が調整され、その裏面に調整がなされないもの	4
D	両面周縁加工	両面の周縁に調整がなされるもの	1
E	周縁部分加工	片面を周縁加工し、その裏面に部分的に調整がなされるもの	5
F	片面周縁加工	片面を周縁加工し、その裏面に調整がなされないもの	2
		合 計	19

(A) 両面加工（第68図38～40）

5点中、1点がホルンフェルス、3点がガラス質黒色安山岩、1点が黒曜石を用いる。

ホルンフェルスを用いた1点(S-3499)は下部を折損し、上端部を新しく欠損する。調整は粗く、器体は少し厚みをもつ。最大幅は基部寄りになると推定される。

ガラス質黒色安山岩を用いたものは3点ある(38・39・40)。38は表面右下部分に膨らみをもち、それがうまく除去されていない。最終段階の剥離は裏面側の周縁に認められる剥離である。最大幅は若干基部側に寄る。先端部は新しく欠損する。39は周縁の小さい剥離が最終的になされるが、特に剥離順序などの傾向は認められない。両面とも左側縁の剥離が比較的後になされる傾向がある。40は基部を丸くおさめる。両面とも左側縁の剥離が遅くなれる傾向がある。

和田鷹山産黒曜石を用いた1点(S-3274)は、基部と先端部を両方折損し、いずれが先端部にあたるかは不明である。折れの小さい側には折れた後に二次加工を施している。最終的な剥離は裏面になされる。微細剥離痕が両側縁の裏面側に連続して認められるが、その性格は不明である。

(B) 半両面加工（第68図41・42）

2点とも蓼科冷山産黒曜石を用いる(41・42)。両者とも縦長剥片を素材とする。41は素材の屈曲のため側面觀が屈曲する。基部と先端部を折損するが、基部では折れの後に二次加工がなされている。腹面の調整は極めて平坦である。背面下半中央部には若干素材面が残存する。42は腹面基部にバルブを除去するような調整剥離がなされる。腹面基部の剥離の後、背面周縁の細調整が施されるところが多い。先端部は折損し、折面から腹面に向けた小さい剥離が認められる。折面の縁辺を使用した際の使用痕の可能性がある。

(C) 片面加工（第68図43・44）

4点全てが黒曜石を用いる。

諏訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは2点ある(43・44)。両者とも不定形剥片を横位に用いる。43は先端部を折損する。腹面には部分的に剥離が認められるが、いずれも背面の調整の後になされたもので、意図的になされたものであるか判断できないため、片面加工に分類した。腹面中央部に小さい打撃痕が認められる。44は加工が総じて粗く、形態は不安定である。側縁には微細な剥離が認められる。右下側縁には素材折面が残存する。基部は尖らない。

和田鷹山産黒曜石を用いたものは2点ある。1点(S-1331)は縦長剥片を素材とする。基部には平坦な打面が若干残されている。調整は比較的細かく細身の形態になる。先端部を折損する。もう1点(S-3635)は基部片で、打点側を基部に据える。腹面にも一部に剥離は認められる。断面は凸レンズ状になる。

(D) 両面周縁加工

和田鷹山産黒曜石を用いた1点のみである(S-3319)。比較的幅広の形態で、剥片の打点側を基部に据える。左上から右下へ斜めに折れている。腹面先端部に認められる先端部からの剥離が要因の折れと考えられることから、使用による破損の可能性がある。背面中央に残された素材面は広い剥離面で剥離方向は判断しがたい。基部は丸く作り出される。

(E) 周縁部分加工 (第68図45~49)

5点中、1点がガラス質黒色安山岩、4点が黒曜石である。

ガラス質黒色安山岩を用いた1点(45)は、縱長剥片の打点側を基部に据える。小型で薄く、調整も全体として小さい。背面の調整は右側縁上半と左側縁下半になされる。腹面側では先端部及び腹面左側縁下端に調整が行われる。基部は尖らず、丸くなる。背面左側縁下端には部分的に新しい欠損がある。

諏訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは2点ある(46・47)。46は石刃を素材とし、打点側を基部に据える。腹面側の調整が顕著で基部側全体と上半の側縁を調整する。背面では基部側に顕著な調整が認められ、上端にも調整が認められるが、そのほかの部分は断続的に剥離が認められるのみである。47は剥片末端部を横位に用いる。背面の調整は厚みのある右側縁では大きい急斜度の剥離が多く、厚みのない左側縁では平坦で小さい剥離が主体となる。腹面では腹面左側縁に比較的大きい平坦な剥離がなされる。基部には素材折面が残存するが、腹面側では折面から微細な調整が施される。

蓼科冷山産黒曜石を用いた1点(48)は基部と先端部を折損する。両面にポジティブな面が残存する可能性が高く、素材の形状は判断しがたいが、厚い部分と薄い部分との差が激しい。表面は厚みのある右側縁に限定して調整がなされる。裏面は両側縁に微細な調整が施される。

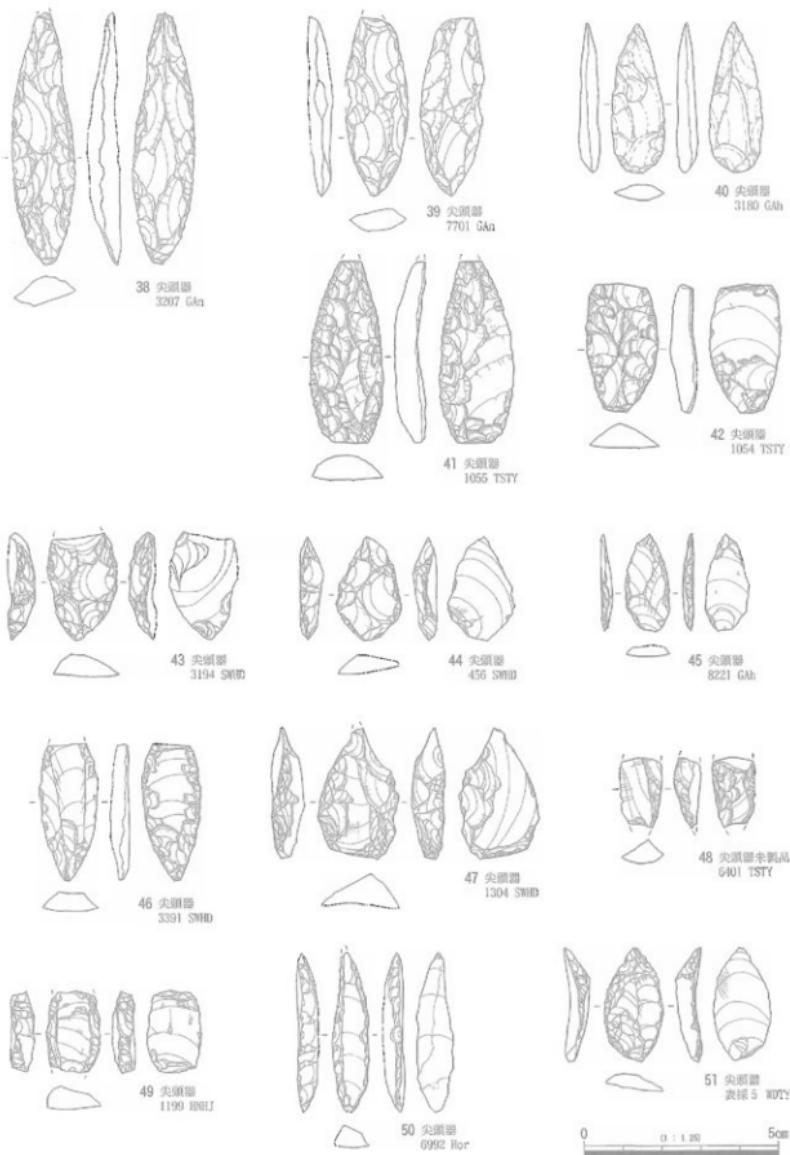
箱根畠宿産黒曜石を用いた1点(49)は縱長剥片を縦位に用いる。両端を折損するが、基部側の折面は二次加工に先行する。両側縁を背面側への急斜度剥離で加工し、背面には端部に若干の剥離が認められるのみである。特に左側縁の剥離の角度が急である。左側縁下端部には急角度で立ち上がる素材面が残存する。

(F) 片面周縁加工 (第68図50・51)

2点中、1点がホルンフェルスを、もう1点が黒曜石を用いる。

ホルンフェルスを用いた1点(50)は極めて細身である。両側縁を急斜度剥離で加工する。先端部を新しく欠損する。

和田鷹山産黒曜石を用いた1点(51)は石刃を素材とし、背面には主要剥離面と同一の剥離軸をもつ素材面が残存する。基部には調整された素材打面が残される。調整は先端部では重点的に行われるものの、そのほかの部分では小さい剥離が周縁になされるのみである。左側縁先端部にも素材面が残存する。



第68図 第III文化層 出土石器(4)

石核 (第69図52～第74図65)

19点が出土している。主体を占める剥片剥離の進行のさせ方から以下のとおり分類を行った。

第23表 石核の分類と組成

	分類	内 容	点数
A	I類	平坦な剥離面を打面に据え、その一端から剥片剥離を進行させていくもの	5
B	II a類	打面と作業面を入れ替えながら、一端から剥片剥離を進行させていくもの	5
C	II b類	II a類の作業がほぼ全周に及んでいるもの	3
D	III類	打面と作業面を頻繁に転移しながら剥片剥離を進行させていくもの	5
E	その他	I～III類にあてはまらないもの	1
		合 計	19

(A) I類 (第69図52～第71図55)

5点中、4点がホルンフェルスを、1点が黒曜石を用いる。

ホルンフェルスを用いたものは4点ある(53・接合26・52・54)。2点が20号石器ブロックに帰属する。53は大型の剥片を上下に分割し、その分割面を打面に据えて2枚の剥片を剥離している。石核下端部には自然面が広く残存する。その後、石核の素材剥片の主要剥離面に打面を移し、自然面と先行する剥離面との境界で小剥片の剥離を行って、この石核は廻旋されている。もう1点は折れており、その折片が接合する(p.117、接合番号26、第80図2)。52は21号石器ブロックに帰属する。分割礫を素材とする可能性が高い。自然面を一端に残し、幅広い面を作業面に剥片剥離を行う。打面を中心にクモの巣状の亀裂が認められ、被熱している可能性がある。54はブロック外から出土している。広い剥離面が主要な打面となり、その裏面にも比較的広い剥離面が認められ、疊を輪切り状に分割したものを素材としている可能性がある。一端に自然面を残し、その反対の面で剥片剥離を行った後、作業面を左に接する面に移動して数枚の剥片を剥離している。最終的な剥離は打面に深く入り込み、打面を鋸歯状にしている。最終的な作業面の反対の面にはより古い剥片剥離の痕跡が認められる。

产地不明の黒曜石を用いた1点(55)は22号石器ブロックに帰属する。背面に自然面を残す剥片の主要剥離面を打面とする。素材剥片の打面側を作業面としている。素材剥片末端部は折れる。夾雜物の多い黒曜石を使用している。

(B) II a類 (第71図56～第72図59)

5点全てがホルンフェルスを用いる(56・57・58・接合38・59)。56は18号石器ブロックに帰属する。比較的小さい円礫を素材とする可能性が高い。3点が20号石器ブロックに帰属する。57は不整形な剥片を素材とする。素材剥片打面側で、背面を打面に据えた剥離を行った後に、打面と作業面を入れ替えて剥片剥離を行う。剥離作業はそれほど行われていない。58は左面に認められる折れが最終的なもので、廻旋のきっかけであったと考えられる。平らな円礫を素材にその平坦な面と、接する狭小な面とで剥離を進行させている。もう1点は同一ブロック内、及びブロック外の剥片と接合する(p.117、接合番号38、第81図3)。59は21号石器ブロックに帰属する。敲石を転用している可能性があり、自然面端部には部分的に潰れているところがある。また、剥離面の一部にクモの巣状の亀裂が認められ被熱している可能性がある。最終的な剥片剥離は上面の小剥片の剥離であり、その前には最終剥離の打面となっている面の剥離が行われる。下面にもいくらか剥離が認められることから、ある程度作業面と打面の転移が行われたものと考えられる。

(C) II b類 (第73図60・61)

3点中、2点がホルンフェルス、1点が黒曜石を用いる。

ホルンフェルスを用いたものは2点ある(60・61)。60は19号石器ブロックに帰属する。平坦な面をも

つ亜円礫を利用しており、下面及び側面には自然面が残存する。61はブロック外から出土している。扁平な剥片を素材としており、裏面には主要剥離面が残存する。正面下半に認められる比較的広い剥離も素材面の可能性がある。作業面と打面を入れ替えながら剥離を行うことからII b類に分類したが、扁平な素材を用いるため他のものとは形態が異なる。

箱根畠宿産黒曜石を用いた1点はブロック外出土であるが、22号石器ブロックの切出形ナイフ形石器と接合する(p.116、接合番号97、第80図1)。

(D) III類 (第73図62～第74図65)

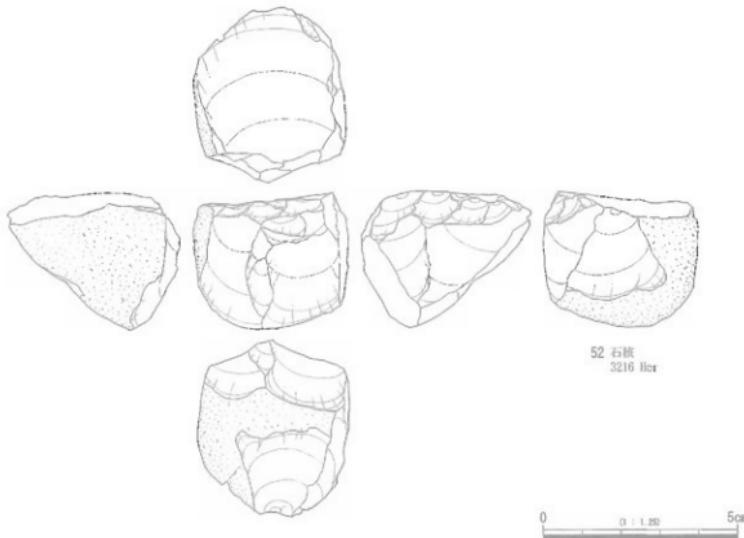
5点中、3点がホルンフェルス、2点が黒曜石を用いる。

ホルンフェルスを用いたものは3点ある(62・63・64)。62は20号石器ブロックに帰属する。裏面中央部に残された剥離は素材の主要剥離面の可能性がある。裏面を除く全面で剥片剥離を行っている。63は21号石器ブロックに帰属する。左側面に比較的広く、正面に少し自然面が残存し、小円錐を素材とする可能性が高い。64はブロック外の出土である。一端に自然面を残す。正面及び上面での剥片剥離が主体であるが、右面では下面を打面にした剥片剥離も認められる。

箱根畠宿産黒曜石を用いたものは2点ある(65・接合95)。65は22号石器ブロックに帰属する。形状は角柱型である。左側縁の端部裏面及び右側縁下端正面の向かいあう端部に潰れ様の剥離が認められる。もう1点はブロック外出土であるが、22号石器ブロックの剥片と接合する(p.117、接合番号95、第82図4)。

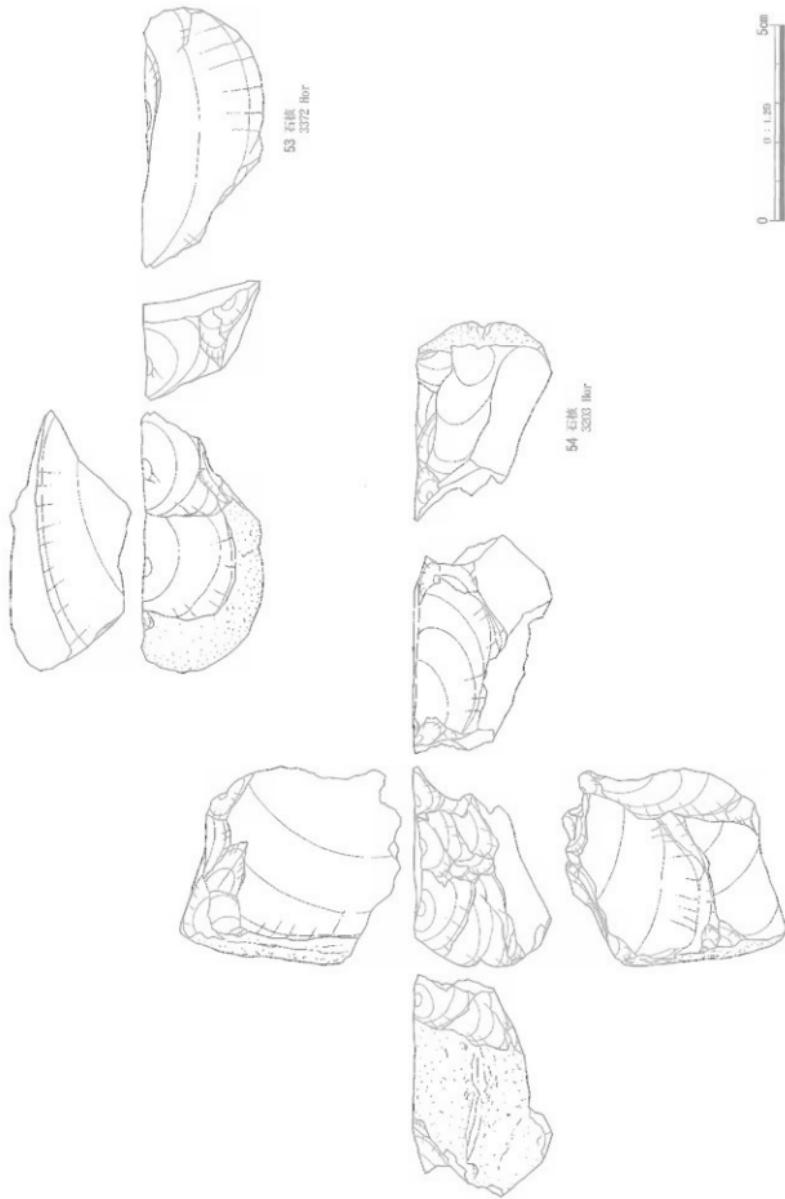
(E) その他

ホルンフェルスを用いたものが1点(S-3224)ある。剥片(S-3212)が接合し、両者とも21号石器ブロックに帰属する。砕けるように剥離しており、被熱している可能性がある。

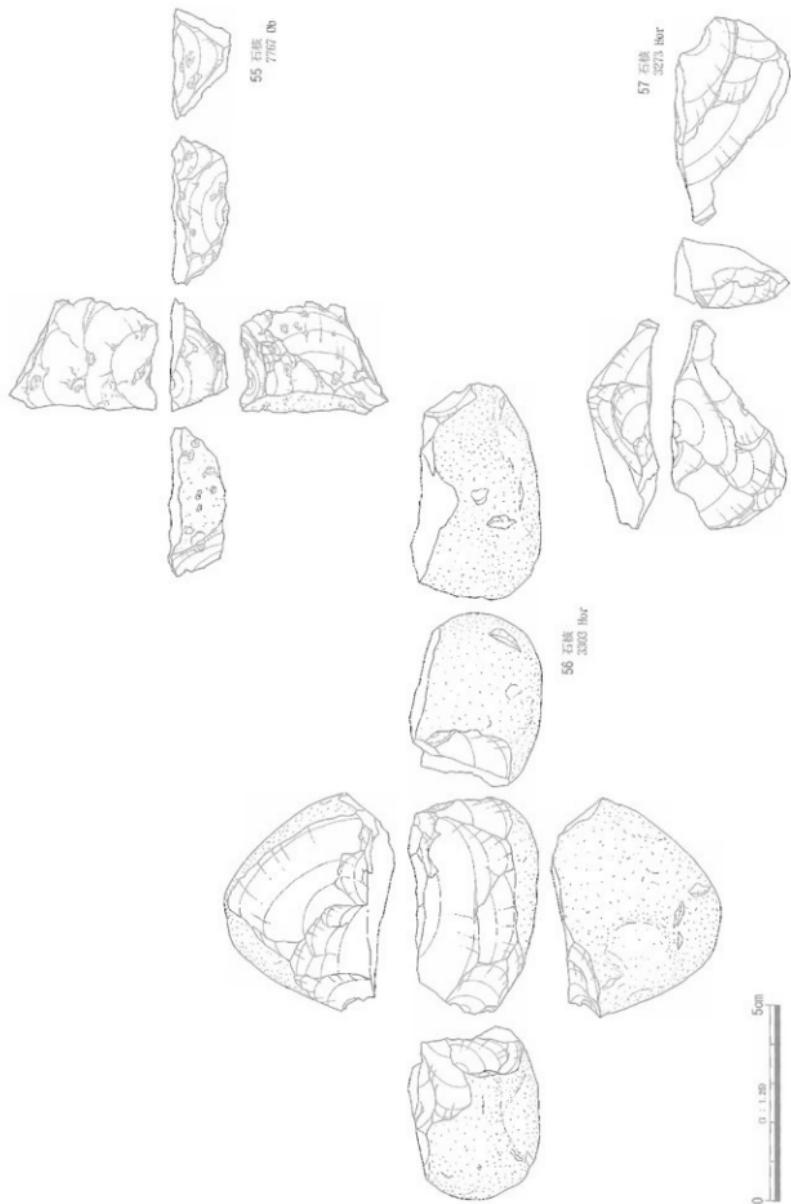


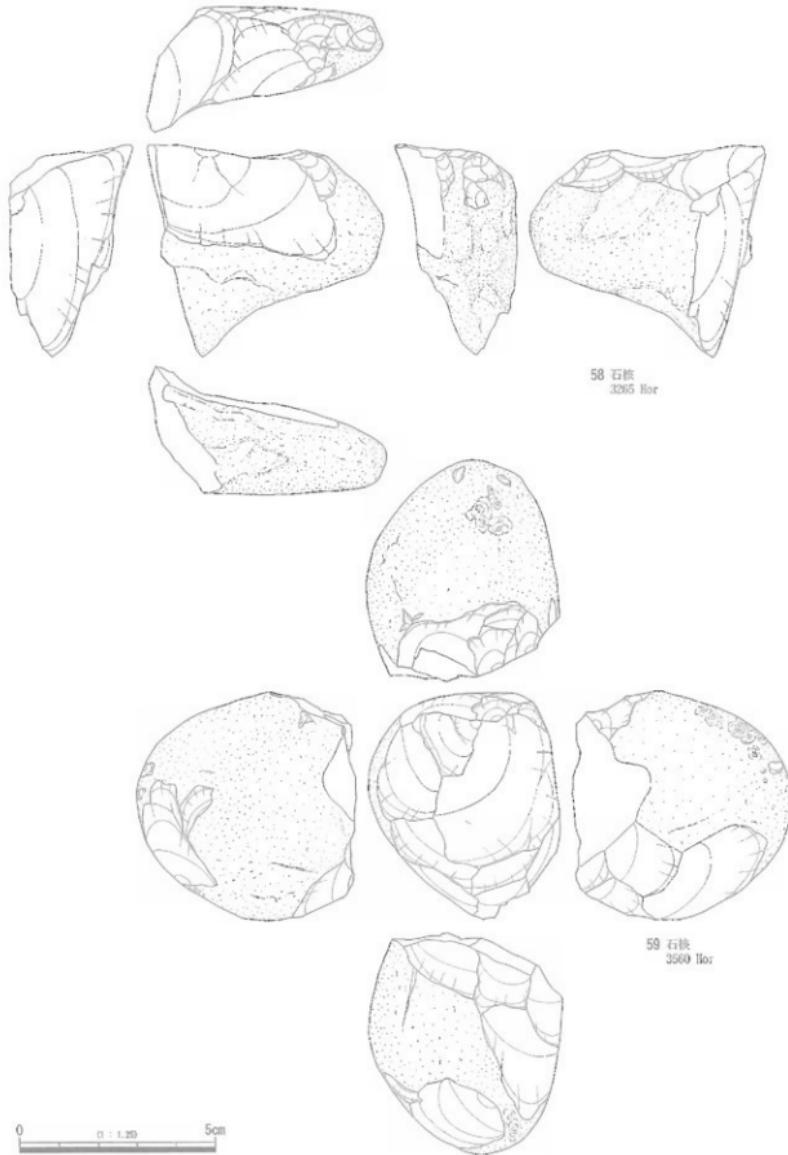
第69図 第III文化層 出土石器(5)

第70图 第Ⅲ文化层 出土石器(6)



第71圖 第三文化層 出土石器(7)

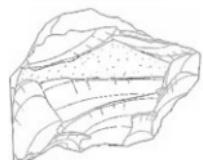




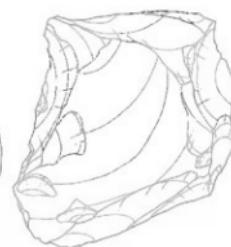
第72圖 第III文化層 出土石器(8)



60 石核
3363 Hor



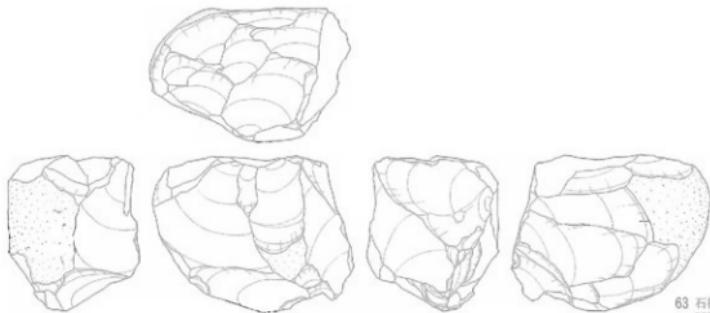
61 石核
1683 Hor



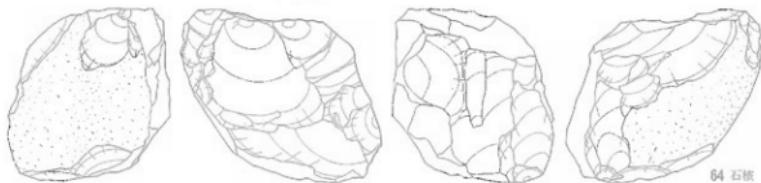
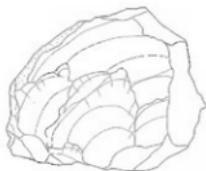
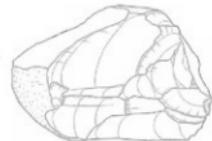
62 石核
3380 Hor



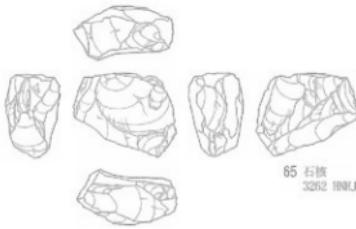
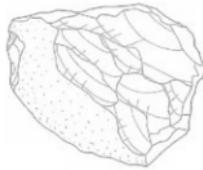
第73図 第Ⅲ文化層 出土石器(9)



63 石核
3237 Ber



64 石核
3324 Ber



65 石核
3262 Ber U

0 0 : 1.20 5cm

第74図 第III文化層 出土石器(10)

(イ) 各ブロック出土の石器 (第75図66～第76図79)

17号石器ブロック

流紋岩を主体に、ホルンフェルスも一定量含まれる。

ホルンフェルスは小さい剥片のみで構成され、何らかの二次加工が行われた可能性がある。

流紋岩は剥片のみの出土であるが、その特徴から多くが尖頭器の二次加工剥片であると判断される。ブロック外の剥片を含めた8点3組の接合が得られている(p. 117、接合番号70・71・101、第82図5～第83図7)。

18号石器ブロック (第75図66)

ホルンフェルスのみで構成される。

加工痕剥片(66)は、小片の端部に部分的に調整を加えたものである。断面は三角形状になる。

石核はII a類に属する(第71図56)。

剥片には厚手で大きいものが特に多く見受けられる。いずれも不定形で多くが背面に自然面を残す。また、その中には同一の打面から連続して剥離された剥片の接合も含まれ、打面でも剥片剥離が行われているのが分かる。

19号石器ブロック (第75図67)

ホルンフェルスのみで構成される。

削器(67)は末端部が厚くなる剥片を素材とする。下部中央には自然面が残存し、二次加工が施される以前には下半部に広く自然面を有していた可能性がある。素材打面は線状になる。下端部は尖る。下端部の調整は粗く、右下部分と左側縁には比較的細かい調整が施される。

石核はII b類に属する(第73図60)。

綫長の剥片に折れた末端部が接合する例がある(p. 117、接合番号43、第83図8)。

ブロック外の1点を含めた剥片6点、3組の接合が認められる。いずれも折面での接合である。剥片は一部に比較的厚みのあるものが多く含まれ、一部に自然面を残すものが多い。

20号石器ブロック

ホルンフェルスを主体に、少數の箱根烟宿産黒曜石が含まれる。石核と剥片のみで製品を含まない。

ホルンフェルスの石核は6点あり、2点がI類(第70図53・接合26)、3点がII a類(第71図57・第72図58・接合38)、1点がIII類(第73図62)に属する。内2点はブロック外のものを含めた剥片と接合する(p. 117、接合番号26・38、第80図2～第81図3)。

剥片どうしの接合は9組確認され7組は折面での接合である。連続して剥離された大型の剥片2点が接合した例では、分割縫の一端から、分割面を打面に据えて剥片剥離がなされている。

剥片中には疎面を背面に広く残すものや不定形のものが多いが、一部には連続した綫長剥片の剥離が行われたことを示す資料も含まれている。

黒曜石の石核はIII類に属する(第74図65)。

黒曜石の剥片中にも打面を転移しながら剥片剥離を行ったことを示す接合資料が認められる。

21号石器ブロック (第75図68～71)

ホルンフェルスを主体に、様々な石材が含まれる。比較的狭い範囲に製品、石核、剥片が集中する。

ホルンフェルスの削器(68)は、打点側を折損する剥片を素材とする。左右の側縁に調整が加えられる。末端部には節理面が残されている。

ホルンフェルスの抉入削器は2点ある(69・70)。69は折れた石刃の中間部分を素材とする。右側縁に加工を行い、緩やかな抉りを作り出す。70は不定形剥片を素材とする。鋭い縁辺を有する腹面右側縁上半に小さい加工を行い緩やかな抉りを作り出す。

ホルンフェルスの石核は4点あり、I類(第69図52)、IIa類(第72図59)、III類(第74図63)、その他(S-3224)がそれぞれ1点ずつある。

ホルンフェルスの石刃(S-3235)は末端部が厚みをもつ寸詰まりのものである。主要剥離と同一方向からの剥離に加え、末端部側からの剥離も背面に残されている。

剥片どうしの接合は7組確認される。碎けたような割れが認められるものが多く、被熱を受けている可能性がある。全体に自然面を残す剥片は少ない。

ガラス質黒色安山岩の剥片は2点とも厚みのあるもので、1点には被熱が認められる。

細粒安山岩の剥片は厚みがあり、節理面で折れている。

珪質頁岩の加工痕剥片(71)は、背面に綫をもつ縦長剥片の折れた下半部分を素材とする。背面綫上に認められる剥離痕は素材剥片剥離以前になされている可能性が高い。折面及びその周辺の縁辺に微細剥離痕が部分的に認められる。

黒曜石の剥片はいずれも小さい。和田鷹山産のもの2点と鹿地不明のものが2点ある。

22号石器ブロック (第75図72~第76図79)

1点の細粒安山岩の剥片を除く全てが黒曜石で、明らかにその他のブロックとは異なる石材組成を示す。黒曜石については全点が箱根畠宿産と推定される。

ナイフ形石器は19点あり、6点が二側縁加工a類(第65図8・9・S-8162・S-7768・S-7816・S-7842)、2点がb類(第66図20・S-8161)、2点がc類(第66図23・24)、6点が切出形(第66図27~30・接合97・S-8135)、1点が一側縁加工(第67図37)、2点がその他(S-7762・S-7875)に属する。

削器は2点ある(72・73)。72は板状の不定形剥片を素材とする。素材打面は平坦な剥離面である。右側縁には急角度で立ち上がる素材面が残存する。右側縁下半及び左側縁に二次加工を加える。73は厚みのある不定形剥片を素材とする。打面は調整打面の可能性がある。左側縁上半に対して粗い二次加工を行っている。素材末端部の鋭い縁辺を有する部分には小さい剥離痕が表裏に認められる。

抉入削器(74)は厚みのある折れた剥片を素材とする。素材末端部に数度の剥離で抉りを作り出す。下端部に残る折面からも背面側に剥離がなされているが意図は不明である。右側縁や左側縁にも二次加工が施される。素材剥片末端部分は新しく欠損する。

台形石器は2点ある(75・76)。75は不定形剥片の鋭い右側縁を刃部に用いる。左側縁には素材打面が残され、加工は施されない。打面は数枚の剥離面で構成され、打撃による潰れが認められる。右側縁及び基部右半には背面側へ急斜度剥離が施される。76は末端部が折損した不定形剥片を素材とする。素材両側縁は鋭い刃部を有し、刃部及び基部にそのまま残される。右側縁には素材の平坦な剥離面打面を残す。左側縁下半には背面側への急斜度剥離が施され、上半には折面が残されている。

石錐(77)は、末端部が厚く広がる縦長剥片を素材とする。末端部両側縁を背面側へ急斜度剥離し、突出部を作り出している。素材打面部は新たに欠損する。

加工痕剥片は2点ある。78は横長剥片を素材とする。素材打面は比較的平坦な剥離面である。背面には特に夾雜物が多い。左側縁を中心に加工が行われるが、右側縁にも一部に加工痕が認められる。もう1点(S-8199)は厚みのある小剥片の一端に加工を行ったものである。

使用痕剥片(79)は折れた剥片の厚い末端部を素材とする。下端部には自然面が残存する。周縁の各所に微細な剥離痕が認められるが、腹面右下部分と腹面折面右端部分に特に集中する。

石核は1点(第71図55)組成し、I類に属する。また、ブロック内の剥片と接合するA-D-9グリッドの石核はIII類に属する(p.117、接合番号95、第82図4)。

剥片どうしが接合するものは15組存在する。折面での接合を除くと、同一の打面、作業面で連続して剥離された剥片の接合が多いが、打面転移を行っていることを示す資料も少なからず含まれる(p.117、

接合番号82、第83図9)。

剥片はほぼ全てが不定形である。剥片剥離の方法も一貫したものはなかったと考えられる。また、比較的大きい剥片の一部に自然面が残存するのみで、原石の状態で石材が持ち込まれていないことは明らかである。

細粒安山岩の剥片は背面下半に自然面が残存する不定形のものである。

(ウ) ブロック外の石器 (第76図80～第79図102)

特に注目されるものについて器種別に述べる。

削 器 (第76図80～第77図84)

削器は5点ある。ホルンフェルスを用いたものは3点ある(80・81・82)。80は背面に自然面を残す不定形剥片を素材とする。打面は平坦な剥離面である。背面右側縁から末端部にかけて加工が行われる。81は末端部が折れた継長剥片を素材とする。素材は2枚の剥離面の稜上を加擊して剥離され、背面に残る素材面からは同一打面から連続した剥片剥離が行われたことが分かる。左側縁上半は粗い剥離を行い鉋曲状になる。左側縁下半は腹面に小さい調整が行われる。右側縁では中央部に小さい調整が認められる。82は大型の不定形剥片を素材とする。背面には自然面及び広い剥離面が認められる。大きい円錐がもともとの素材であったことが分かる。腹面左側縁の比較的鋭い縁辺をもつ部分に、腹面側への二次加工が行われる。上端部分では背面側に向けた二次加工が行われる。いずれの調整剥離も粗い。83はガラス質黒色安山岩を用いる。平坦な剥離面を打面にもつ剥片を素材とする。調整の多くは腹面側になされる。腹面左側縁上半には大きい剥離痕が認められる。腹面末端部は小さい剥離で、直線的な外形を作り出す。左側縁では上端部は腹面側に調整が行われるが、中ほどでは背面側に調整が認められる。84は諏訪星ヶ台産黒曜石を用いる。末端部が厚みをもつ石刃を素材とする。背面は左側縁下半での調整が顕著で、腹面稜上から行われる剥離が部分的に腹面側からの剥離より後に行われたものであることから、背腹両面から二次加工が行われていることが分かる。腹面末端部では腹面左側縁から調整が加えられ、鋭い尖頭部を作り出している。左側縁には部分的に微細剥離痕が認められるものの、右側縁ではほとんど認められない。

抉入削器 (第77図85・86)

抉入削器は2点ある。85はホルンフェルスを用いる。平坦な剥離面を打面とする不定形の剥片を素材とする。腹面左側縁の比較的鋭い縁辺の部分を細かく調整し、緩やかな抉りを作り出している。86はガラス質黒色安山岩を用いる。末端部が折れた石刃を素材とする。幅広く残る打面は正面から調整されている。末端部左半に数度の剥離で抉りを作り出している。両側縁に部分的に背面側への剥離が認められる。

搔 器 (第78図87～89)

削器から特に刃部が急角度のものを区別し搔器とした。搔器は3点あり、いずれも黒曜石である。87は諏訪星ヶ台産黒曜石を用いる。石核を搔器に転用したものである。石核は、一端に自然面が残存するものの、大部分が剥離面で覆われる。両面に作業面を設定し、打点を移動させながら剥片剥離を行うIIb類の石核である。特に突出した端部には細かい調整を行っており、搔器として転用されたものと考えた。調整はほとんどが片面に向けて行われる。箱根畠宿産黒曜石を用いたものは2点ある(88・89)。88は厚みのある継長剥片を素材とする。打面部左半から左側縁、末端部にかけて調整がなされる。左側縁には粗い調整が行われたあとその端部に微細な剥離が認められる。そのほかの部分は比較的小さい調整剥離が施される。右側縁は鋭く、微細剥離痕が各所に認められる。89は、末端部が厚みをもつ剥片を素材とする。素材打面は1枚の剥離面である。左側縁末端部側を背腹両面へ加工し、末端に先頭部を作り

出している。右側縁末端部には鈍い縁辺を有し、背面側に微細剥離痕が並ぶ。そのほかにも各所に剥離痕が認められる。

彫 器（第78図90）

彫器(90)は黄玉石を用いる。左側縁は背腹両面からの二次加工で直線的に整形され、上端部で右に向けて屈曲する。更に、背面では上半部において、整形された左側縁を加擊して厚みを減じるような加工もなされている。上端の屈曲した二次加工面を加擊して、右側縁に槌状の剥離がなされる。右側縁下半には鋭い縁辺が残置し、背面方向に向けた小さい剥離痕が並ぶ。

加工痕剥片（第78図91）

加工痕剥片は2点ある。91は和田鷹山産黒曜石を用いる。末端部が鋭く尖る剥片の打点側を背腹両面から加工する。末端部には微細剥離痕が認められる。

使用痕剥片（第79図92～98）

使用痕剥片は8点ある。92はガラス質黒色安山岩を用いる。平坦な剥離面を打面として剥離され、両側縁に鋭い縁辺を有する。縁辺の各所に微細剥離痕が認められる。諏訪星ヶ台産黒曜石を用いたものは2点ある(93・94)。93は折れた小剥片を使用する。右側縁には比較的大きい剥離痕も認められる。微細剥離痕はほぼ全周に認められる。94は調整打面をもつ横長の剥片を使用する。背面には自然面が残存し、腹面末端には節理面が認められる。薄手で縁辺のほとんどにわずかな微細剥離痕が確認できる。95は夢科冷山産黒曜石を用いる。素材は平坦な剥離面を加擊して剥離されている。右側縁下半に比較的大きい剥離痕が認められるが、微細剥離痕はいたるところにみられる。96は天城柏崎産黒曜石を用いる。背面右半及び末端には自然面が残存する。両側縁に鋭い縁辺を有し、微細剥離痕が認められる。神津島恩馳島産黒曜石を用いたものは3点ある(97・98)。97は打面に数枚の剥離痕が認められる。2枚の剥離面の稜上を加擊して、剥片剥離されている。縁辺には様々な大きさの剥離痕が認められる。98は背面に広く自然面が残存する。打面は平坦な剥離面である。鋭い縁辺のある右側縁を中心に微細剥離痕が並ぶ。

石 刃（第79図99～102）

石刃は7点ある。全てが黒曜石を用いる。諏訪星ヶ台産のものは3点ある(99・100)。99は末端部に平坦面を取り込む寸詰まりのものである。調整打面を有する。先行する剥離とは若干剥離軸を異にする。側縁の一部に剥離痕が認められる。100は打点側が厚く、末端部が尖る。打面は調整打面の可能性がある。背面左半には主要剥離と逆方向からの先行する剥離が認められる。右側縁には微細剥離痕が認められる。和田鷹山産のものは2点ある。1点(101)は薄く末端部が尖る。打点側を折損する。左側縁に深く抉る二次加工がある。周縁のほぼ全面に微細剥離痕が認められる。和田土屋橋北産黒曜石を用いた1点(102)は、弓形に湾曲する。背面右半には自然面が残存する。

礫 器

礫器(S-8066)は輝石安山岩を用いる。稜をもつ板状の亜円礫を素材にして、一端を片面から打ち欠いている。拳大より少し大きい。

(工) 接合資料（第80図1～第83図9）

接合番号97（第80図1）

22号石器ブロックの切出形ナイフ形石器がグリッドA E-10のII b類石核に接合する。石核は自然面を一端に残しながらも、打面と作業面を入れ替えながら、幅広い面で剥離を進行させる。ナイフ形石器の素材剥片は比較的平坦な面への剥離で得られている。ナイフ形石器は左側縁と基部を整形剥離する。右側縁には自然面を残し、加工は施されない。基部が幅広く、四角形に近い形状をする。基部の辺は比較的鋭く作り出される。

接合番号26 (第80図2)

20号石器ブロックの1類石核と剥片が接合する。円礫から剥離された裏面に自然面を広く残す剥片を素材とする。素材の主要剥離面を打面に据え、その短辺で剥片剥離を行う。3249がどの時点で折れたのかは不明である。

接合番号38 (第81図3)

20号石器ブロックのII a類石核1点、剥片2点とグリッドS-9の剥片が接合する。円礫あるいは分割礫を素材として、その一端から作業面と打面を入れ替えるながら剥片剥離を進行させる。接合資料最初に剥離されるのは3268であるが、その剥離以前にかなり剥片剥離が進行している。3268の剥離の後、その剥離面を打面に剥片剥離が行われ、再び作業面と打面を入れ替えて、3183が剥離される。その後、作業面と打面を入れ替えて剥片剥離が行われ、更に作業面と打面を入れ替えて剥離されたのが3289である。その後にも、3289が剥離された剥離面を打面にして剥片が剥離されている。

接合番号95 (第82図4)

グリッドAD-9のIII類石核に22号石器ブロックの剥片が接合する。一部にはより早い段階に行われた広い剥離面も認められるが、多く認められる最終段階での剥離では小さい剥片が剥離されるのみである。7799は左半を新しく欠損する。

接合番号70 (第82図5)

17号石器ブロックの剥片とグリッドN-15の剥片が接合する。尖頭器製作の二次加工剥片と考えられる。両剥片は剥離方向を若干異なる。8611の剥離の後、少なくとも2枚の剥片剥離を介在させて、8581が剥離される。8611は打点側を折損し、末端部には反対方向からの先行する剥離のステップ部分を取り込む。

接合番号71 (第82図6)

17号石器ブロックの剥片4点が接合する。尖頭器製作の二次加工剥片と考えられる。剥離の順序は8606、8587が順に剥離されたのちに、8588・8601が剥離される。8606は末端部が尖る剥片の末端片である。8587は打面に尖頭器裏面の調整の痕跡が残る。また、打面側右側縁には小さい剥離痕が認められる。8588は比較的平坦な打面を有する。8601は打点側が折損する。接合している剥片は全て尖頭器の片側縁における調整剥片と考えられる。

接合番号101 (第83図7)

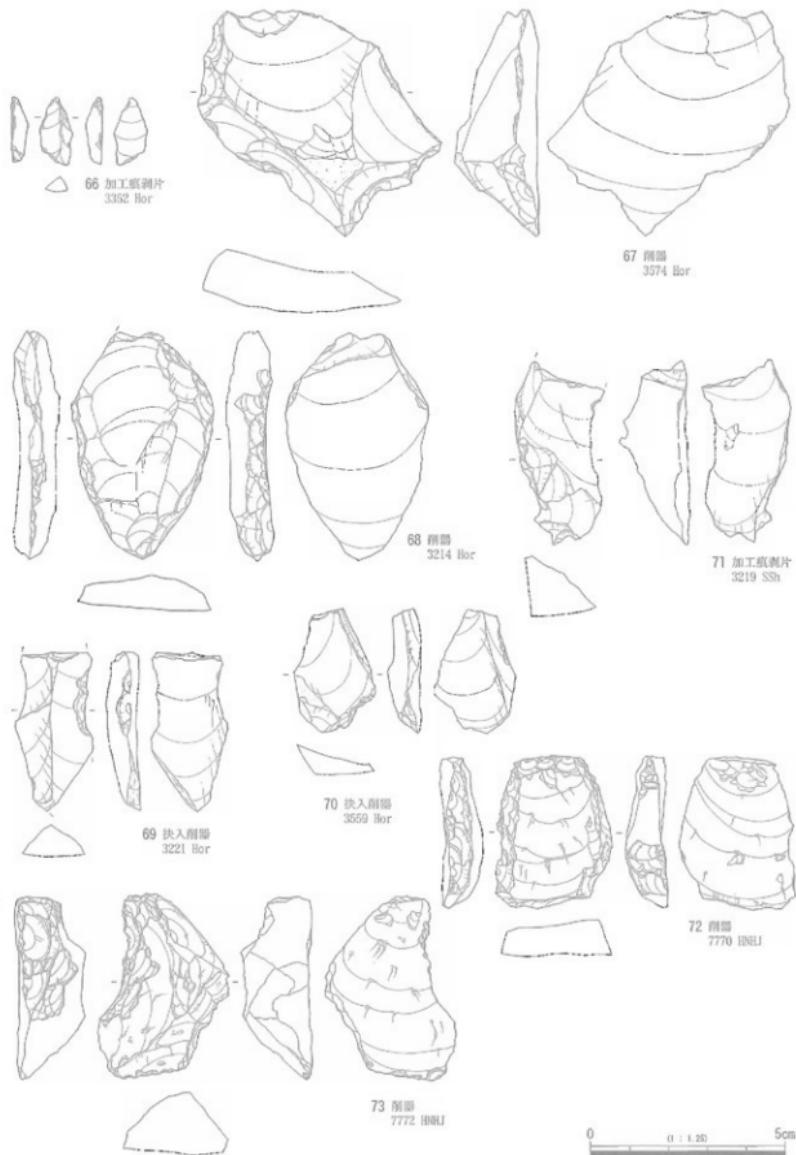
17号石器ブロックの剥片2点が接合する。尖頭器製作の二次加工剥片と考えられる。8602の剥離の後、8616が剥離される。8602は打点側を折損する。8616は打面に数枚の剥離面が認められる。両剥片の剥離軸は90度近く異なる。

接合番号43 (第83図8)

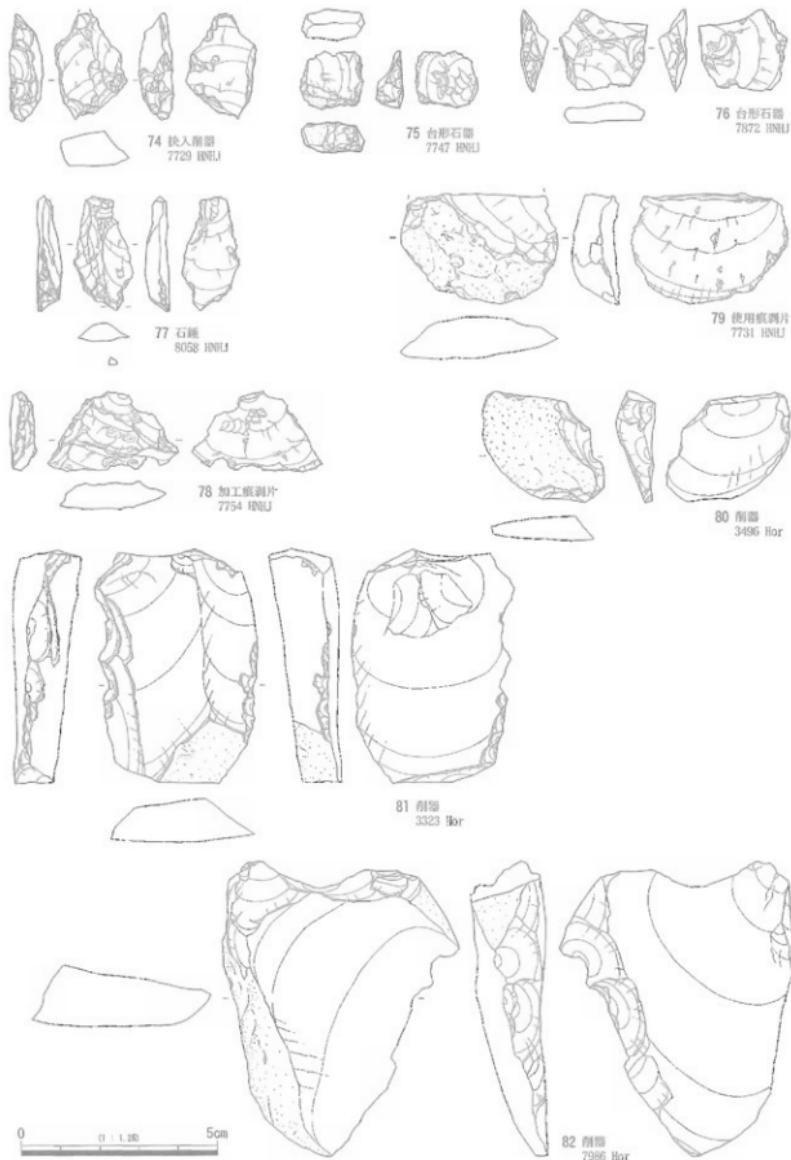
19号石器ブロックの剥片2点が接合する。末端部が節理面で折れたものの接合で、剥片剥離時に折れた可能性が高い。打点側も節理面で折れている。背面には多様な方向からの剥離面が認められ打面転移しながら剥片剥離が行われたと考えられる。

接合番号82 (第83図9)

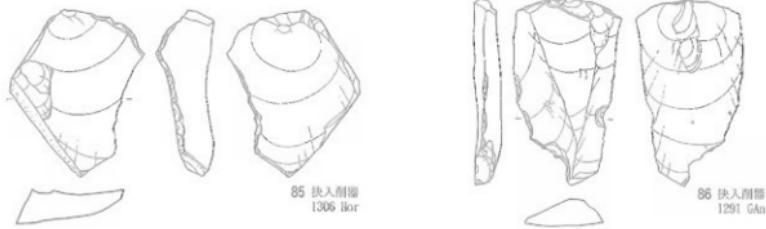
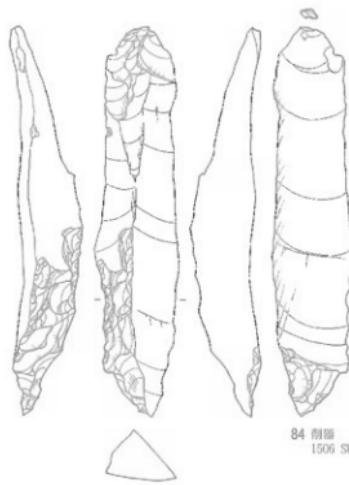
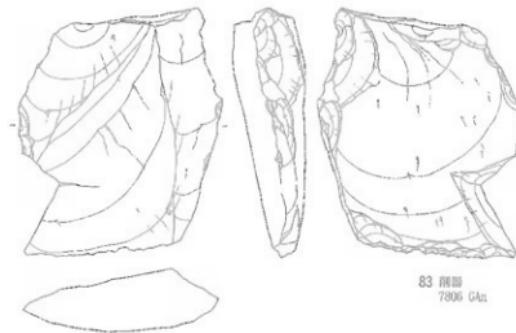
折れた剥片が折面で接合する。剥片背面には多様な方向からの剥離が認められ、打面転移が頻繁に行われたことを示す。打面は腹面方向からの剥離で形成されたもので激しく屈曲する。背面中央に接合する小片(8126)は打面となっている剥離面に接合している。



第75図 第III文化層 出土石器(11)

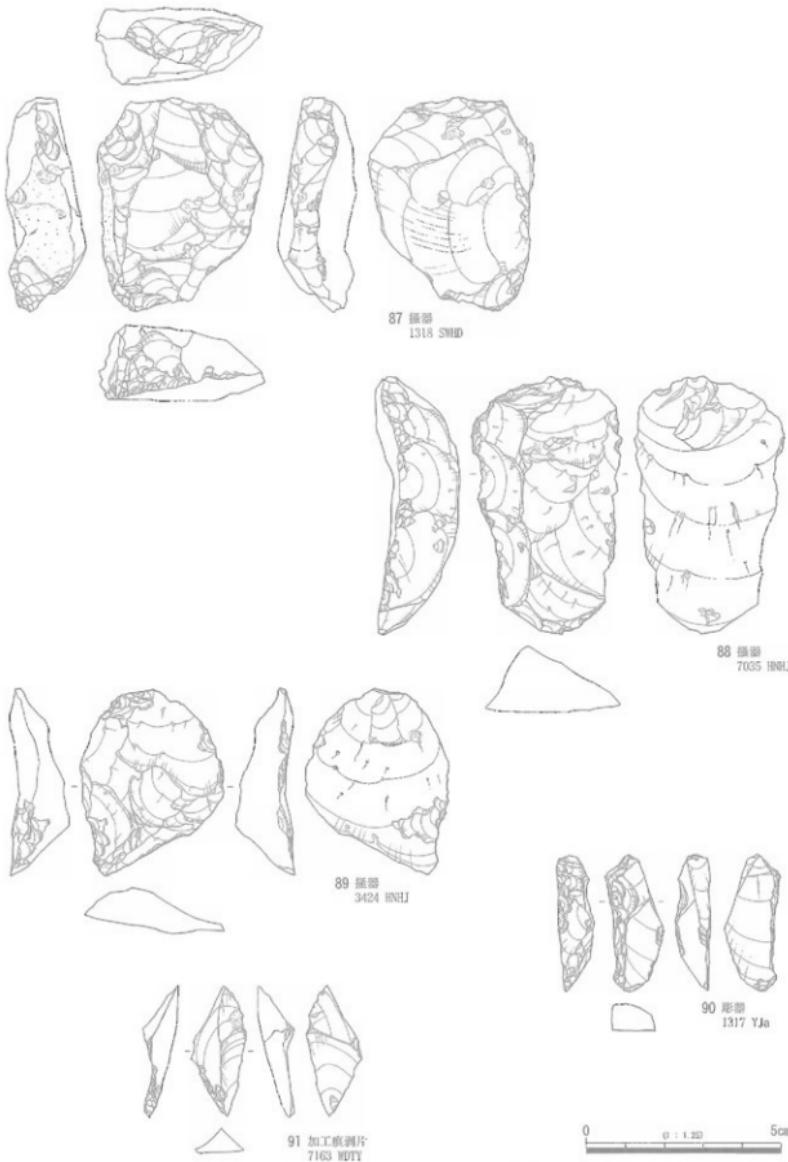


第76図 第III文化層 出土石器(12)

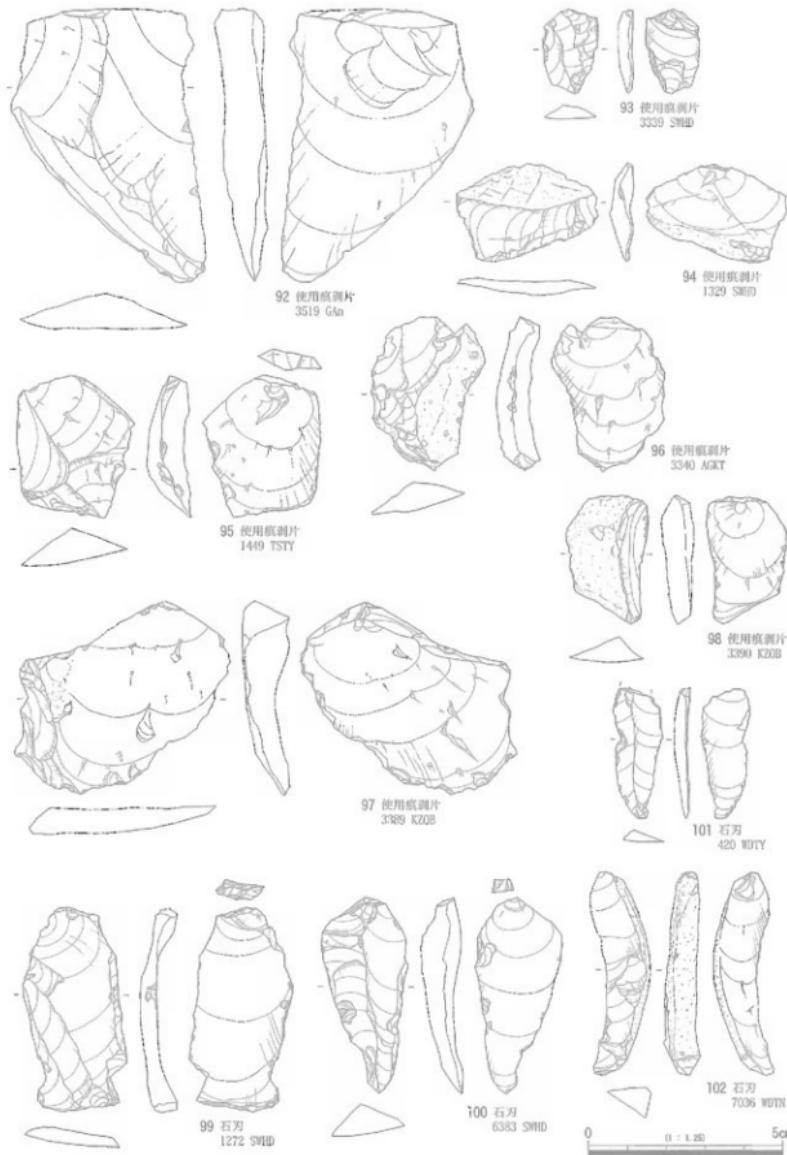


0 5cm
(1 : 1.25)

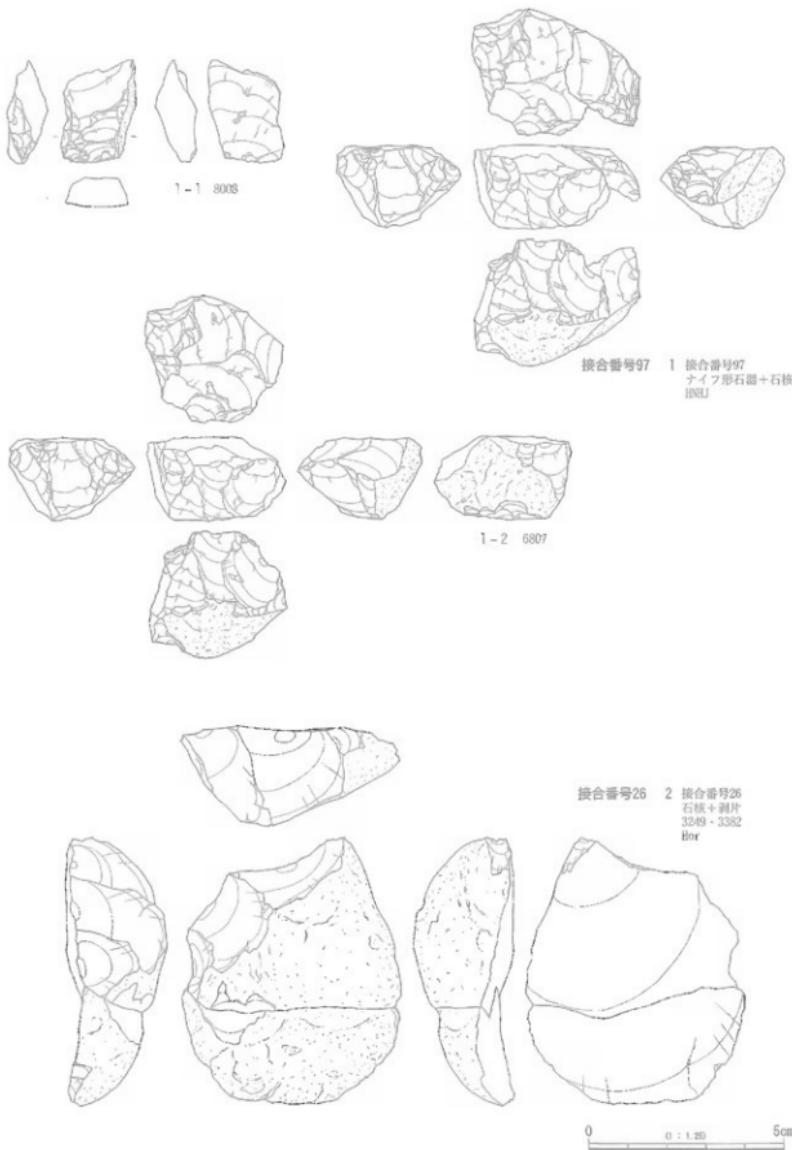
第77圖 第Ⅲ文化層 出土石器(13)



第78圖 第III文化層 出土石器(14)



第79圖 第III文化層 出土石器(15)



第80図 第Ⅲ文化層 出土石器(16)

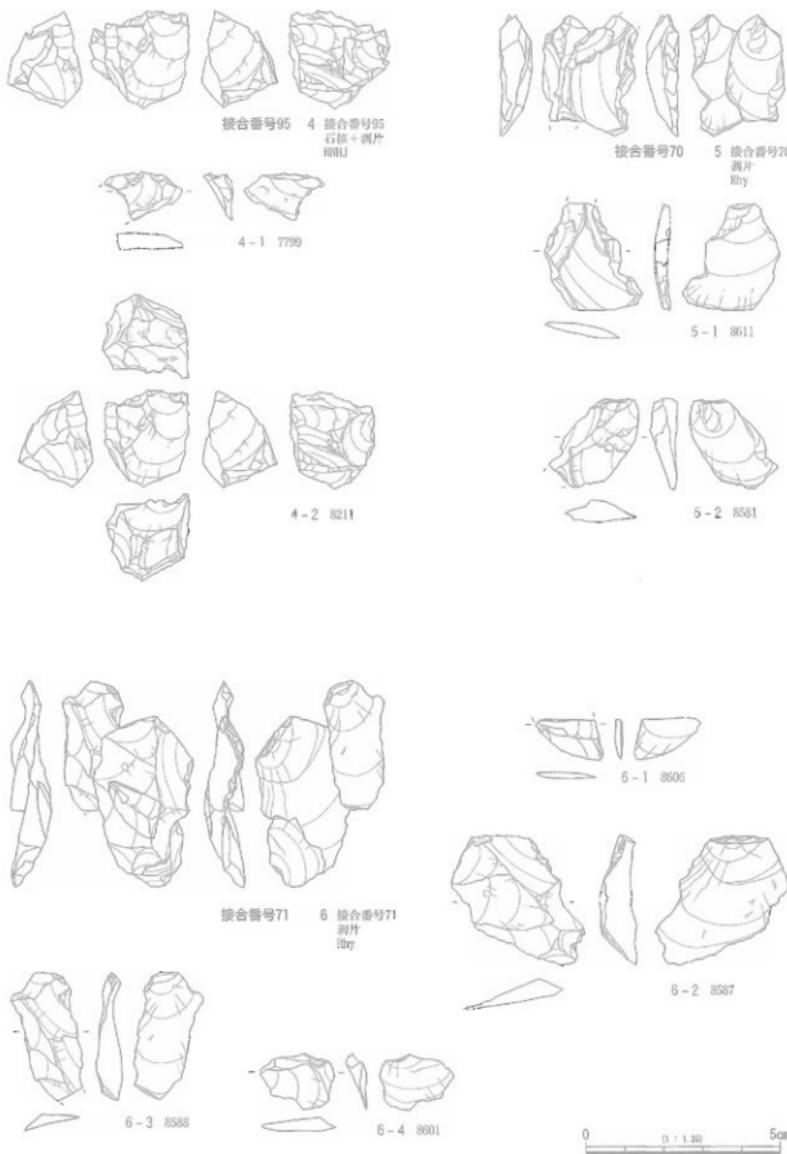
3 - 2 3183

第81圖 第Ⅲ文化層 出土石器(17)

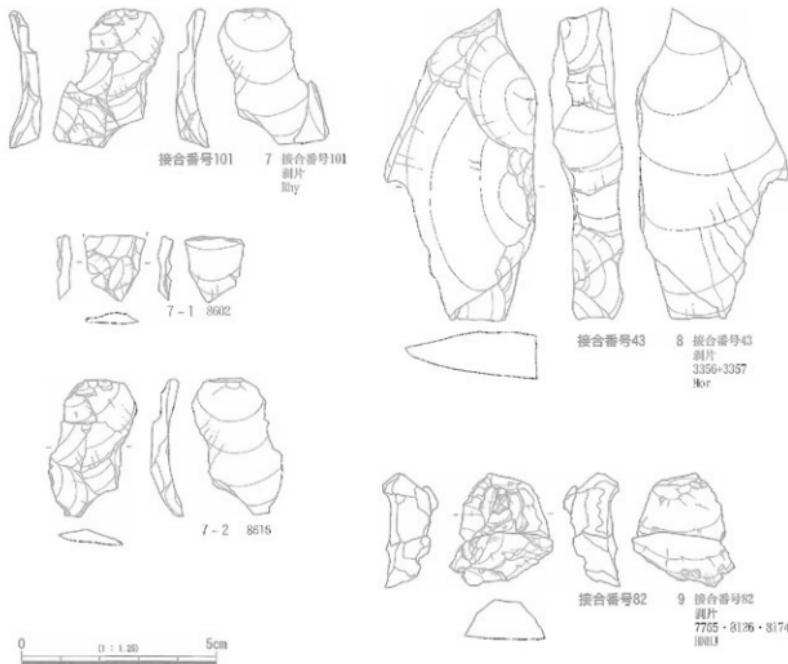
3 - 3 3289

3 - 4 3288

3 - 1 3288
3 - 2 3183
3 - 3 3289
3 - 4 3288



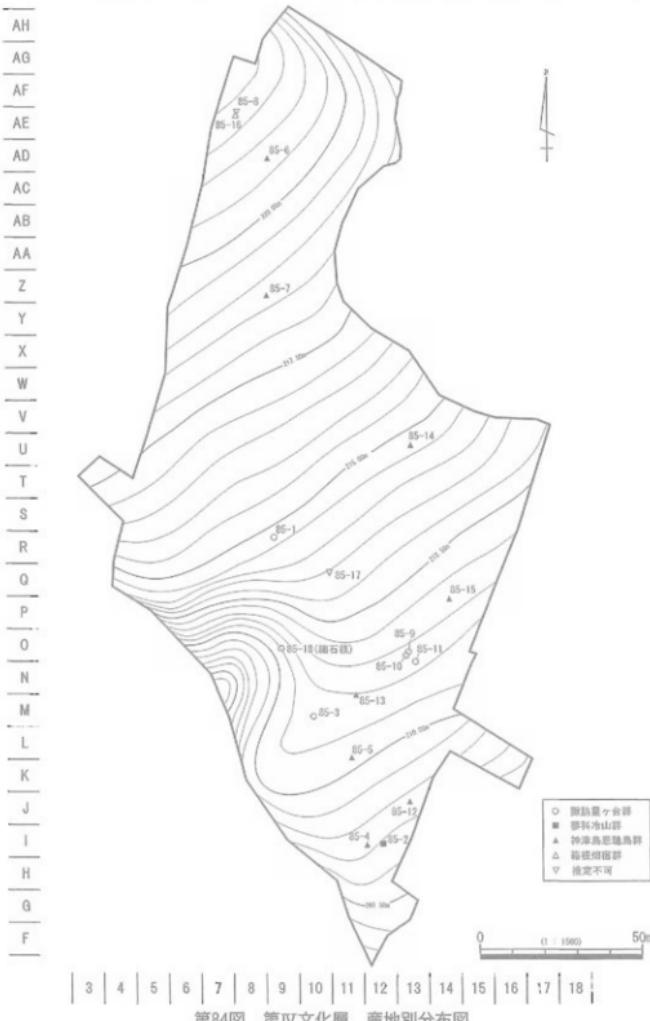
第82図 第III文化層 出土石器(18)



第83図 第Ⅲ文化層 出土石器(19)

5 第IV文化層(Y L U)の細石器類

休場層上層から、第III文化層のものとは共伴の可能性が低い細石刃・細石核を取り出し、第IV文化層を設定した。細石刃17点、細石核1点で構成される。使用石材は全て黒曜石である。黒曜石の産地は様々なものを含むが、神津島恩馳島産のものが最も多い。広範囲に散漫に分布が認められる。



細石刃17点(第85図1~17)は、打点から末端まで全体が残存するもの2点、末端側を折損するもの6点、打点側・末端側両方を折損するもの9点となる。末端側を折損するものが6点存在するにもかかわらず、末端側のみのものは出土しておらず、量的なアンバランスがある。遺跡内への持ち込みに際して、折り取りを含めた意図的な選択が影響している可能性が高い。

全体が残存するものは2点ある。1は諏訪星ヶ台産を利用する。末端部は腹面側に入り込み幅が広くなる。両側縁を中心に微細剥離痕が断続的に認められる。2は蓼科冷山産で、左側縁は新たに欠損する。背面には自然面が認められる。打面は比較的平坦な剥離面であるが、打面調整がなされている可能性もある。腹面左側縁に微細剥離痕が連続して認められる。

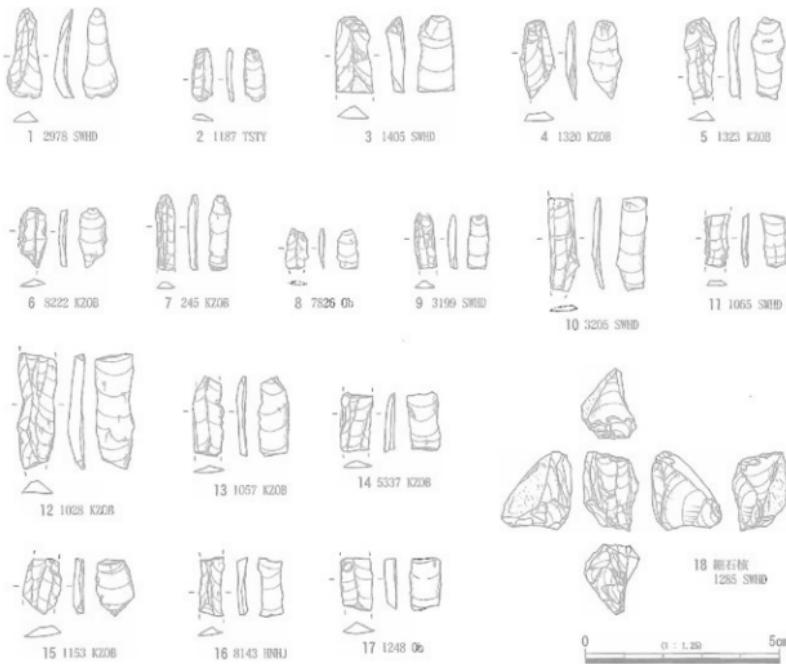
末端側を折損するものは6点ある。3は諏訪星ヶ台産を用いる。背面に比較的大きい2枚の剥離面をもち、末端部側には自然面も認められる。打点側が厚くなるが、打面は線状である。左側縁に微細剥離痕が認められる。4~7は神津島恩馳島産を用いる。4は左側縁打点側に比較的大きい剥離が認められる。5は平坦な剥離面打面をもつ。腹面左側縁上半の一部に微細剥離痕が認められる。6は下半部を新たに欠損する。7には若干打面が残存するが、調整打面である可能性がある。左側縁に断続的に微細剥離痕が認められるが、腹面左側縁にも一部に剥離がみられる。8は産地不明である。下端を折損するが、折面は薄く、それほど大きさは折損していない。

両端を折損するものは9点ある。9~11は諏訪星ヶ台産を用いる。9は上端を新たに欠損する。左側縁の上端と下端、そして右側縁の中央部から上端にかけて、微細剥離痕が集中的に認められる。10は右側縁上半に右方向からの、右側縁下端に下方方向からの細石刃剥離に先行する剥離を残す。11は、左側縁背面全体に比較的大きい剥離痕が連続する。12~15は神津島恩馳島産を用いる。12は背面左側縁に末端側からの比較的古い剥離が認められる。13は右側縁背面に微細剥離痕が認められる。14は腹面左側縁中央部の一部に微細剥離痕が認められる。15は腹面左側縁中央部の一部に微細剥離痕が認められる。16は箱根烟宿産を用いる。17は産地不明であり、全体に白く濁った色調である。左側縁背面に微細剥離痕が認められる。

細石核(18)は諏訪星ヶ台産を用いる。左側面には自然面が残存する。右側面には大きくネガティブな剥離面が認められ、その剥離の末端部側にはこの剥離に先行する剥離面が残されている。下面には右側面側からの調整剥離が施され、下面を平坦に作り出している。打面は大きな作業面側からの剥離で作り出した後に、細石刃剥離時の加熱部を中心に作業面側から小さい剥離で打面調整を行う。作業面に残された細石刃の剥離痕は小さいものも含めて6枚が確認される。頭部調整も施されている可能性がある。

第24表 第IV文化層 石器組成表

			細石刃	細石核	計	
					諏訪星ヶ台群	SWHD
黒曜石 (Ob)	蓼科冷山群	TSTY	1			1
	神津島恩馳島群	KZOB	8			8
	箱根烟宿群	HNHJ	1			1
	産地不明	-	2			2
	計		17	1	18	



第85図 第IV文化層 出土石器(1)

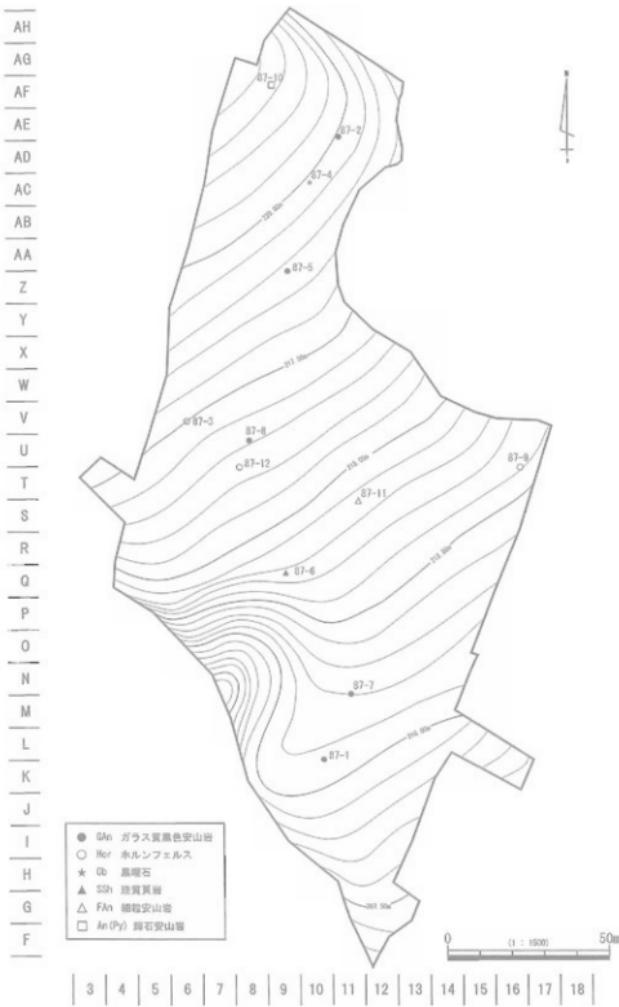
6 第V文化層(Y L U～縄文時代草創期)の尖頭器類

休場層上層から、第III文化層のものとは共伴の可能性が低い尖頭器類を取り出し、第V文化層を設定した。尖頭器4点と有茎尖頭器8点で構成される（第87図1～12）。ただし、それぞれの共伴関係は定かではない。広範囲に散漫に分布が認められる。尖頭器については両面が細かく調整されるものを選び出した。比較的大きいものが多い。有茎尖頭器は多様な内容をみせる。いずれも縄文時代草創期に位置付けることができる。

尖頭器は4点出土している。1と2はガラス質黒色安山岩である。1は概ね断面レンズ状になるが、表面中央部が若干高まりをもつ。中央部に比較的広い剥離面が残り、周辺は細かい剥離で覆われることから、段

第25表 第V文化層 石器組成表

		有茎 尖頭器	尖頭器	計
ガラス質黒色安山岩	GAn	3	2	5
ホルンフェルス	Hor	2	1	3
黒曜石 (Ob)	WDTY		1	1
珪質頁岩	SSh	1		1
輝石安山岩	An(Py)	1		1
細粒安山岩	FAn	1		1
	計	8	4	12



第86図 第V文化層 石材別分布図

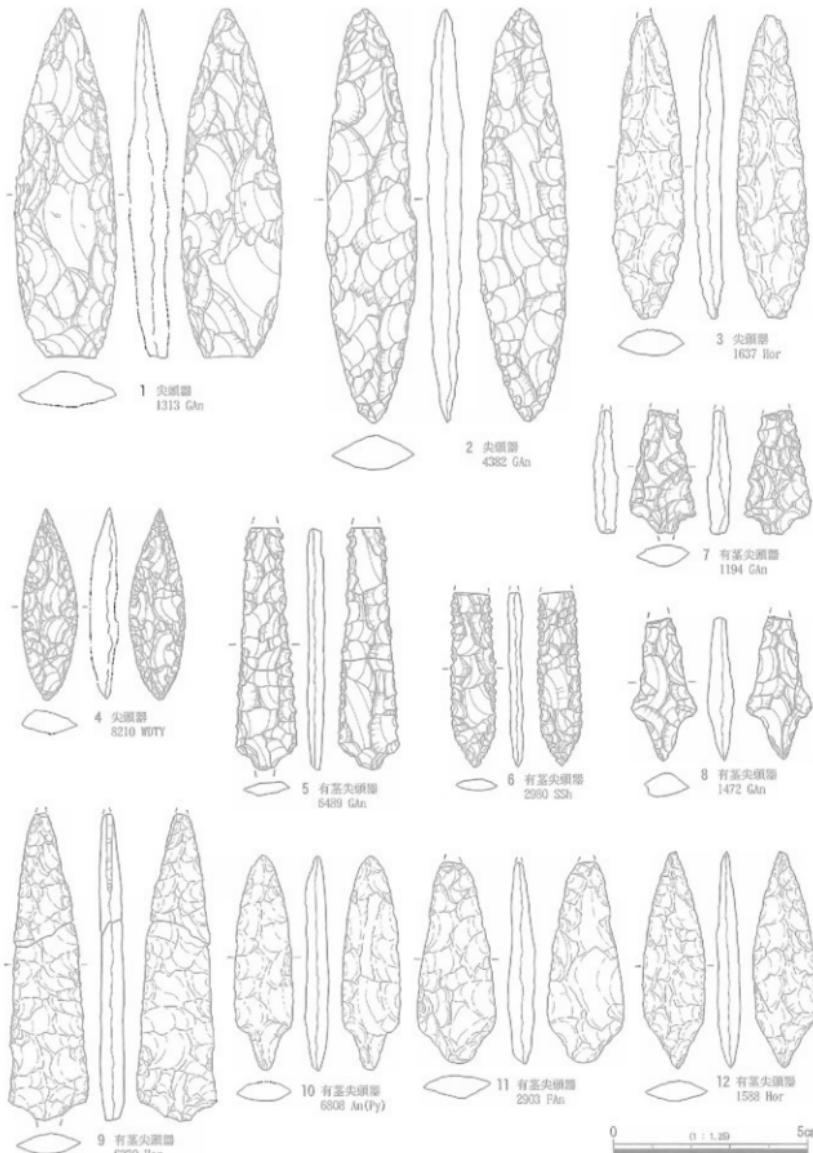
階的な製作工程が存在したことが想定される。最終的な剥離が表面右側縁に多く認められるなどの傾向はあるものの、多くの部分では表裏の剥離が並行して行われている。基部に残る折面は製作途中に生じたものである可能性が高いが、折れの後に両側縁から調整が行われている。2は断面が若干厚みのあるレンズ状になる。中央部に比較的古い広めの剥離面が残存する部分もあるが、先端部及び基部を中心に、器体中軸まで伸びる剥離が多く認められる。特に表面中央部基部寄りには右上から左下方に向転をもつ斜並行剥離様の剥離も一部に認められる。最終的な剥離は表裏に入り組んでなされている。最大幅は中ほどより少し基部寄りにある。3はホルンフェルスで、表面は風化が激しい。細身で最大幅は基部寄りに位置するが、屈曲は認められない。最終的な剥離は器体中央部では裏面に、基部では表面になされる傾向がある。4は和田鷹山産黒曜石で、小型である。表面の膨らみが若干強く、表面の縁辺の調整は比較的急な角度の剥離が多い。最終的な調整として両面に微細な剥離が施されている。先端部は鋭く作り出される。

有茎尖頭器は8点出土している。刃部が鋸齒縁状に作り出されるもの2点は他と明確に分けることができる。小型のもの2点は花見山型に位置付けられる。残された4点は返しの作りに差異をもつものの、その変化は漸移的である。

鋸齒縁状の刃部をもつものは2点あるが、その返しのあり方は異なる。5はガラス質黒色安山岩で、返しが作り出される。左側縁では返しと茎部の間に屈曲が認められるものの、右側縁では緩やかに内湾するだけである。返しは尖らず、丸みをもつ。鋸齒縁は返しの直上から認められ、背腹両面に対する剥離で作り出される。若干節理が発達した石材を使用しており、節理面は刃縁と概ね平行する。先端部及び基部は折損する。器体中央部は新しく折れる。6は珪質頁岩で、屈曲はするものの返しは作り出されない。5の2/3程度の大きさになると推定される。鋸齒縁の作り出しは、茎部と身部の境界より5mmほど先端部側からなされる。鋸齒縁は背腹両面への剥離によって作り出される。

花見山型のものは2点あり、ガラス質黒色安山岩である。両者とも幅に対して厚みがある。7の身部は概ね直線的な側縁をもつ。返しは器軸に対して垂直に近い。調整が粗雑であるため、刃縁が粗い鋸齒状を呈するが、意図的に制作されたものであるかは不明である。返しは、右は尖るが、左は丸みをもち、薄くなる。先端部、茎部ともに折損するが、先端部の折面は風化するものの、そのほかの面よりも新しい欠損である可能性がある。8は、直線的な身部を返しの手前で内湾させて、突出した返しを作り出す。特に左側縁ではそれが顕著である。返しは尖らず、丸みを帯びる。茎部は長く、鋭く尖る。先端部は新しく欠損する。7に比べて若干小さい。

以上に属さない4点をまとめて記載する。いずれも表面の風化が激しく、切り合ひ関係のみならず、稜線の位置の認定さえ困難な部分もある。9はホルンフェルスで、この調査で出土した有茎尖頭器の中で最も大きい。身部は緩やかに外湾し、返しと茎部の境界は明確には屈曲しないものの、深く抉り込んでいる。特に左の返しは明確に尖る。先端部は折損し、右側縁には先端部から極状剥離が認められ、使用による衝撃剥離と推定される。身部中ほどで新しく折れる。10は輝石安山岩で、身部は緩やかに外湾する。返しと茎部の境界は左では緩やかな屈曲が認められるものの、右では内湾するだけである。茎部は細長く突出する。11は細粒安山岩で、身部は先端部が屈曲する以外は概ね直線的である。返しから茎部にかけては緩やかに内湾するのみである。先端部は新しく欠損する。12はホルンフェルスで、身部は緩やかに外湾し、返しから茎部にかけては緩やかに内湾する。返しの作り出しは顕著でなく、特に右側縁では身部から茎部へは滑らかに移行する。先端部、茎部ともに先鋒に作り出される。以上の4者は返しと茎部の作り出しに差異が認められ、9と12は全く異なる形態をしているが、10や11といった中間的な形態のものが存在しており、その変化は漸移的なものと考えることができる。



第87図 第V文化層 出土石器(1)

第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構と遺構内出土遺物

(1) 概要 (第88図～第90図)

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡3基、竪穴状遺構1基、集石40基、焼土跡15基、土坑74基が検出された。遺構のほとんどは尾根の平坦部に位置し、包含層遺物が集中して出土した付近に竪穴住居跡・竪穴状遺構・集石は分布する。土坑もこれらと同じ領域に検出されたが、包含層遺物の出土量が少ない標高217.50m付近にも多く検出された。また、土坑の形態・規模・主軸方向を分析した結果、同じ規格性をもった土坑が尾根から谷への緩斜面を縱断、あるいは尾根を横断して配置されていた。

時期を判断するため、手掛かりとなる土器の分布状況と遺構を重ね図示した(第90図)。3号住居跡周辺では、縄文時代の早期後葉に位置付けられる土器(第II群土器)が多く分布する。1号・2号住居跡と竪穴状遺構は、その覆土と周辺から出土した縄文時代前期前葉の土器の時期に比定される。その他の

遺構は構築時期を特定できる遺物が出土しなかった。しかし、周辺の土器の分布と遺構の性格からみると、集石は縄文時代の前期から中期にかけて、焼土や土坑は早期から中期の時期差をもって構築されたと推測される。

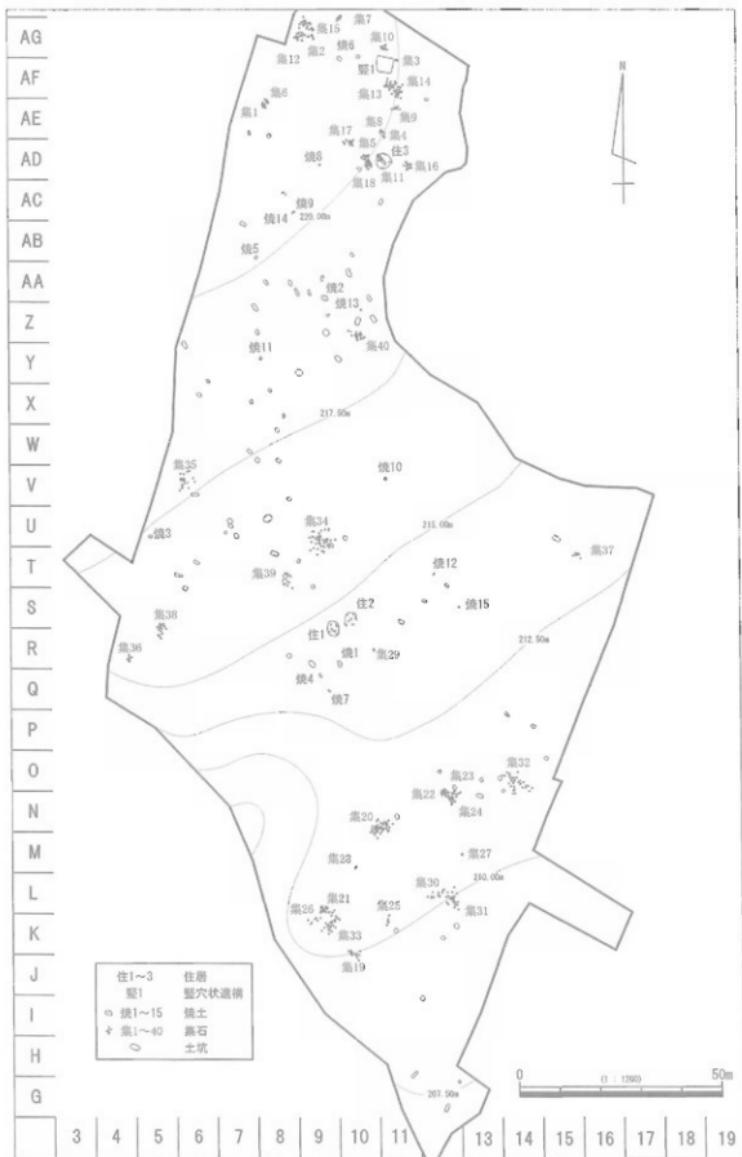
(2) 竪穴住居跡

1号住居跡 (第91図～第93図)

1号住居跡は調査区中央部の標高214.70mに占地する。隅丸長方形を呈し、FBからZNにかけて掘り込まれている。比較的明瞭に検出されており、遺物の出土数も多い。床面は掘り方に厚さ10cm前後の貼床を施しており、固くしまっている。柱穴は床面の4隅で検出された。炉は竪穴の中央西よりに位置し、明確な焼土層を持つ。遺物は炉の南東側に浅い梢円形の窪みがあり、そこから磨石・敲石類、石皿・台石類が出土している。第93図-3(遺物番号3166)は磨石として使用する他、堅果類などを割るために凹石としての用途も考えられる。また、床面と覆土中より礫が24点出土している。生活面と見られる炉の検出面からは、砂質で白色の粒子を多量に含む胎土の木島田式土器が出土している。第91図-1～11は住居跡の覆土の上面で出土したもので、このうち、1～10は口唇の端部に刺突を施し、口縁の輪積みに段部が見られ、



第88図 縄文時代 遺構と遺物分布



第89図 繩文時代 遺構配置図

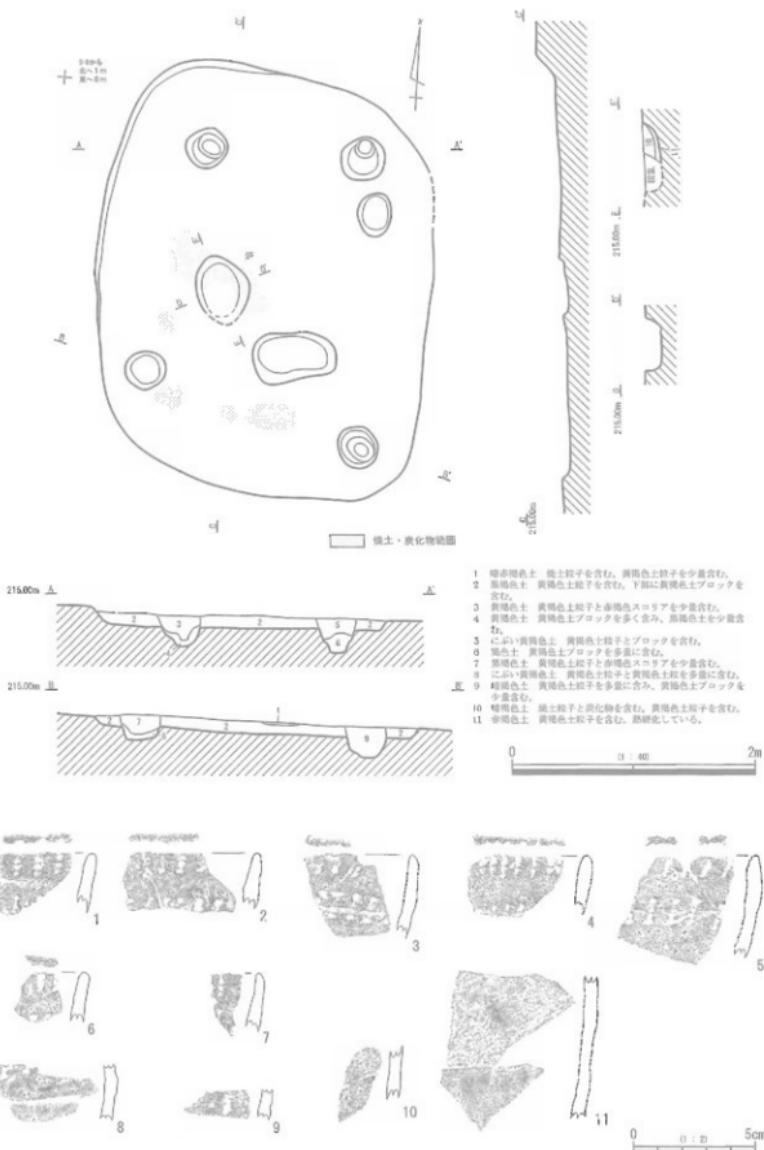


第90図 縄文時代 遺構と土器分布

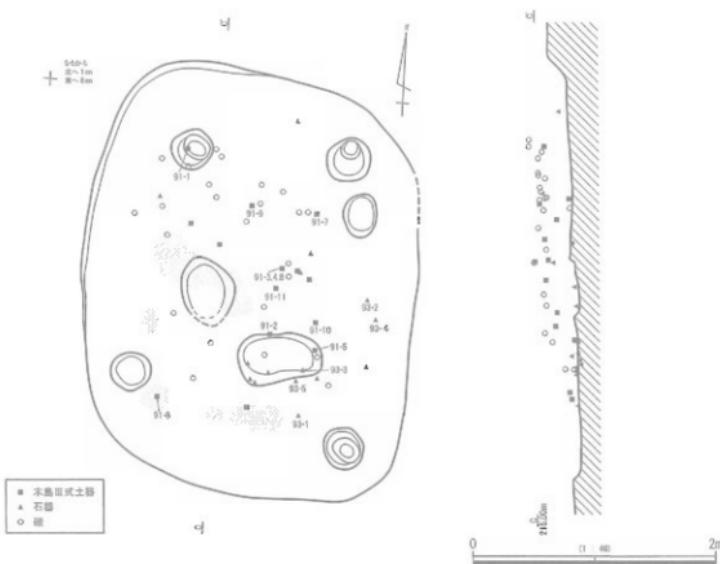
器面に細線文が施されていないことから、周辺の包含層出土の木島皿式土器（第146図-87）と同一個体と思われる。また第91図-11は、胎土などから包含層出土の土器（第146図-88、89）と同一個体と思われる。出土した土器より1号住居跡は、縄文時代の前期前葉の時期に比定される。なお、南西側を中心とする焼土及び10mm～15mmの炭化材が、覆土中から床面にかけてまとまっていることから焼失住居の可能性がある。

2号住居跡（第94図～第96図）

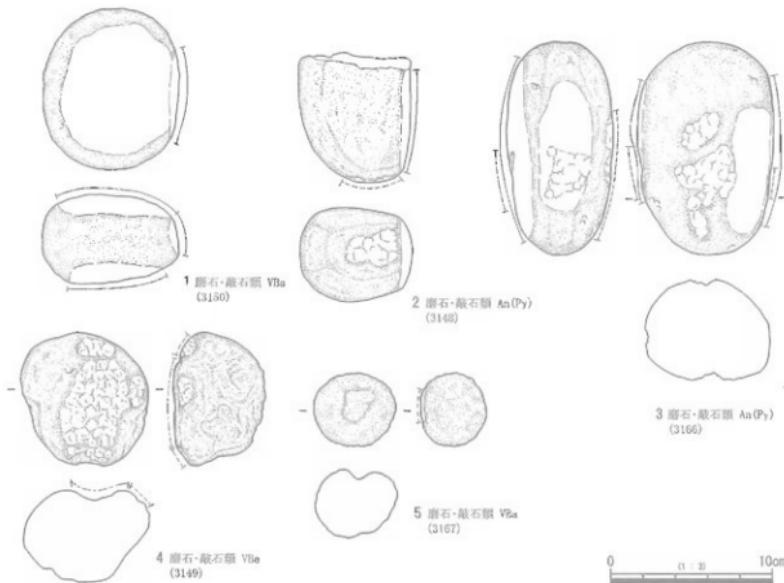
2号住居跡は調査区中央部の標高214.70mに占地する。南西に1号住居跡が隣接する。隅丸長方形を呈し、F Bの下層まで掘り込まれている。床面は1/4程度が検出できなかったが、比較的明瞭に検出された部分では6～7cmの固くしまった貼床を施していた。柱穴は床面の4隅で検出された。炉は床面中央に位置し、明確な焼土層を持つ。遺物は炉の東側に浅い楕円形の落ち込みがあり、磨石・敲石類が出土している。また、床面からは刃部片打製石斧の（第96図-1）が1点出土している。これはホルンフェルスを用いた小ぶりの搬形石斧で、土掘り具などに使用したものではないかと考えられる。時代を窺わせる遺物は、覆土の中層及び上層から出土した木島皿式土器で、第95図-1は胎土から1号住居跡の覆土の上面から出土したもの（第91図-1～10）と同一個体と思われる。第95図-2は無文である



第91図 1号住居跡と出土遺物(1)



第92図 1号住居跡 遺物分布図



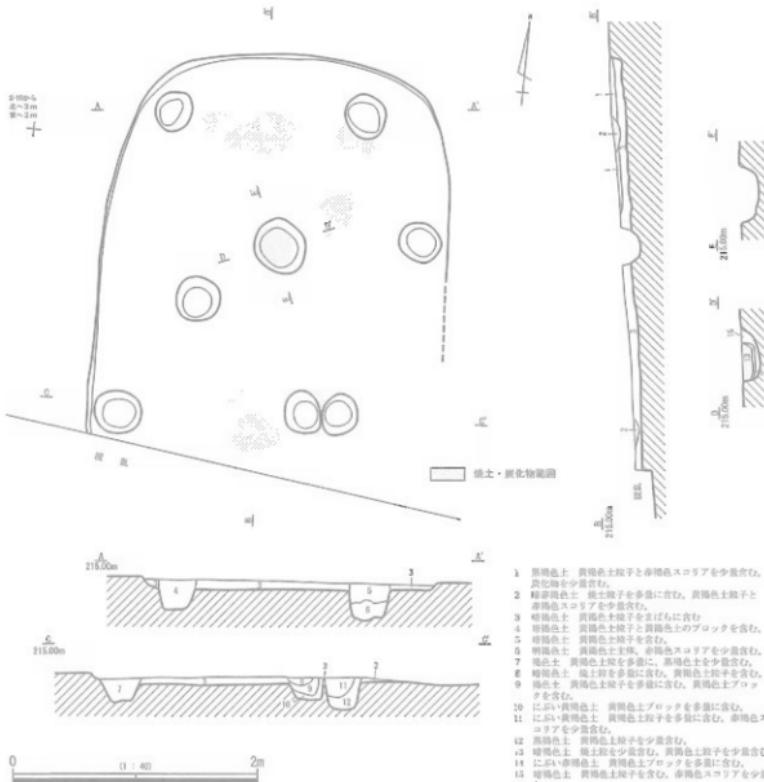
第93図 1号住居跡 出土遺物(2)

第26表 1号住居跡 土器観察表

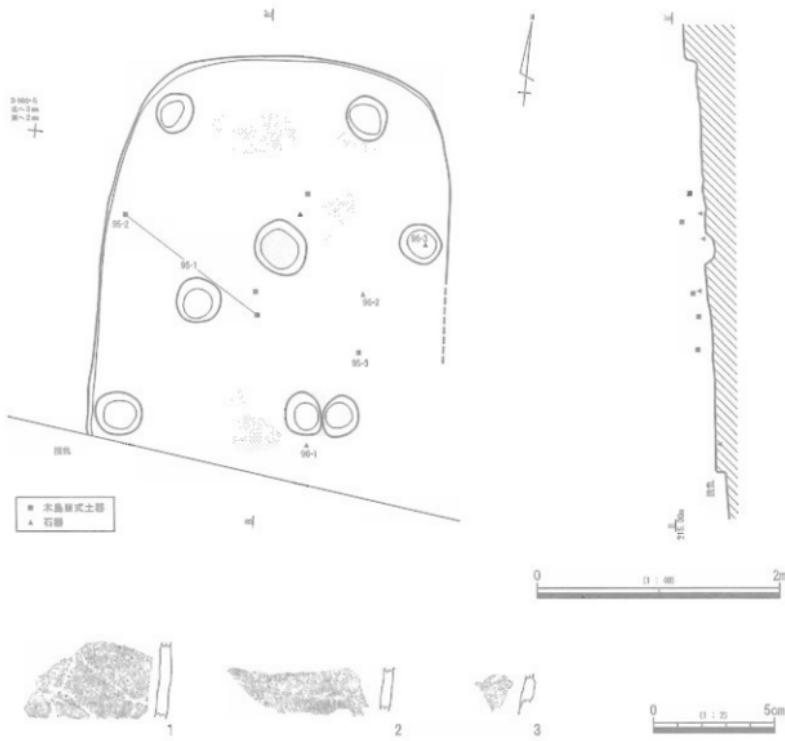
辨別番号	分類	残存部位	外褐色調 内褐色調	胎 土	鐵鉢	文 紋・調 整	焼成	
第91図	1~10	基壇群A層	口縁部 ・脚部	10YR7/4 10YR7/4	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	口唇部外縁と脚部に網突、脛頭状痕	やや 良
	11	基壇群A層	脚部	10YR8/4 10YR7/4	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無		やや 良

第27表 1号住居跡 石器計測表

辨別番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第91図	1	3150	壁土	玄武岩 (多孔質)	磨石・敲石類	99	86	55	530
	2	3148	壁土	輝石安山岩	磨石・敲石類	[80]	[69]	[58]	[510]
	3	3166	壁土	輝石安山岩	磨石・敲石類	130	85	66	1080
	4	3146	壁土	玄武岩 (多孔質)	磨石・敲石類	82	76	57	400
	5	3167	壁土	玄武岩 (多孔質)	磨石・敲石類	51	45	42	100



第94図 2号住居跡



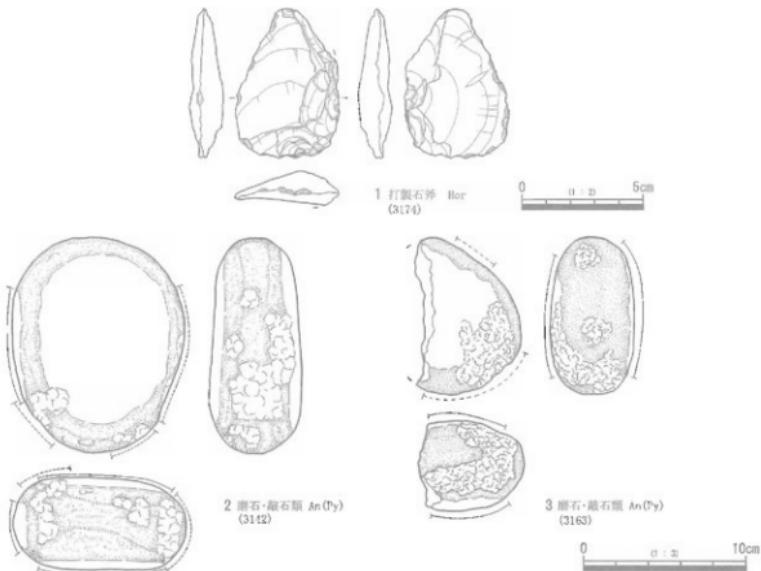
第95図 2号住居跡と出土遺物(1)

第28表 2号住居跡 土器観察表

探査番号	分類	残存部位	外面色調 内面色調	胎	上	織維	文様・調査		焼成
							種類	文様	
第95回	1	底部A層	剥離	10738/4	多量の石英・長石、輝石、白色粒子少量 の混在	無	指痕压痕		やや 良
	2	底部B層	剥離	10735/3 10735/4	石英・長石、輝石、蛋白、白色粒子	無	指痕压痕		やや 良
	3	底部B層	剥離	7.5734/1 7.5734/1	石英・長石、蛋白、白色粒子、少量の輝 石・赤色粒子	有	外側に削刃、指痕压痕		やや 良

第29表 2号住居跡 石器計測表

探査番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第96回	1	3174	表面	ホルンフェルス	打製石斧	61	43	14	25.8
	2	3142	壁土	輝石安山岩	磨石・敲石類	133	106	57	1240
	3	3163	壁土	輝石安山岩	磨石・敲石類	[97]	[65]	[35]	[460]



第96図 2号住居跡 出土遺物(2)

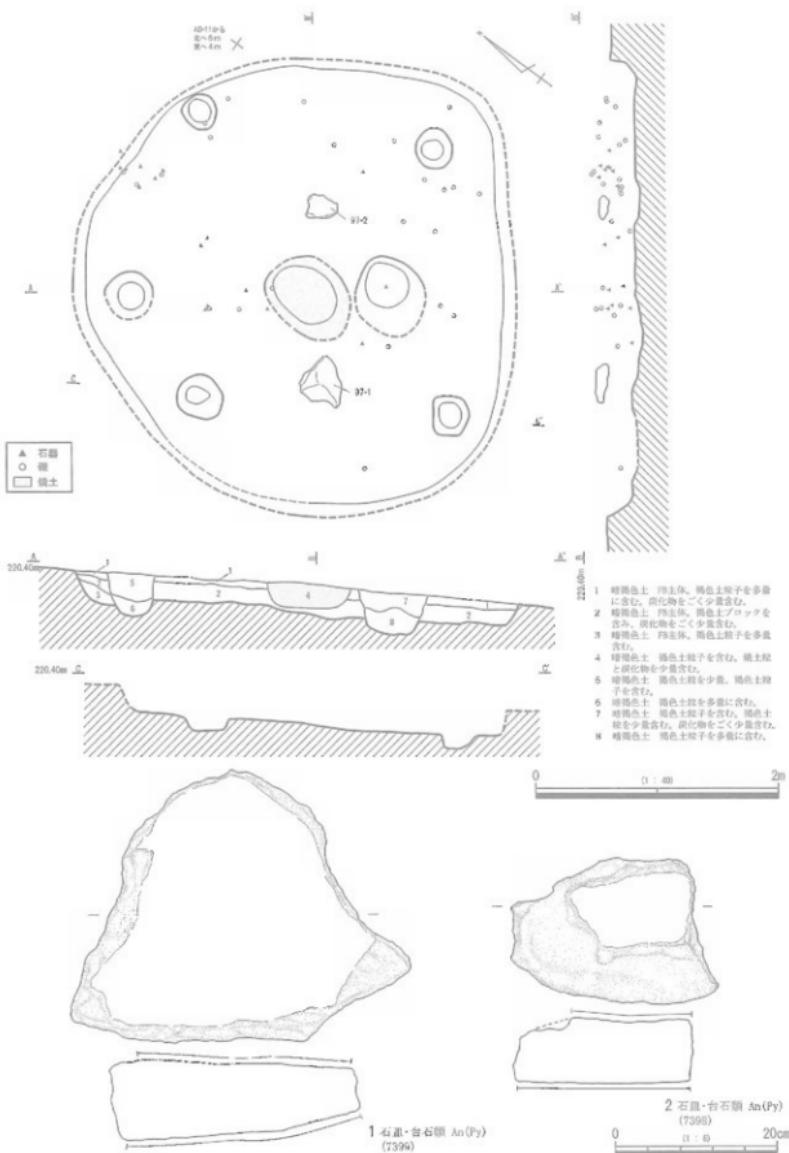
が胎土などから包含層出土の土器（第145図-69～73）、第95図-3は刺突や胎土から包含層出土の土器（第146図-88、89）とそれぞれ同一個体と思われる。このことから、2号住居跡も1号住居跡と同様に縄文時代の前期前葉のものと推測される。なお、北側と南側で焼土の広がりが見られ、北側では5mm～20mmの炭化物が覆土中に確認されている。このことから、焼失住居の可能性がある。

3号住居跡（第97図～第98図）

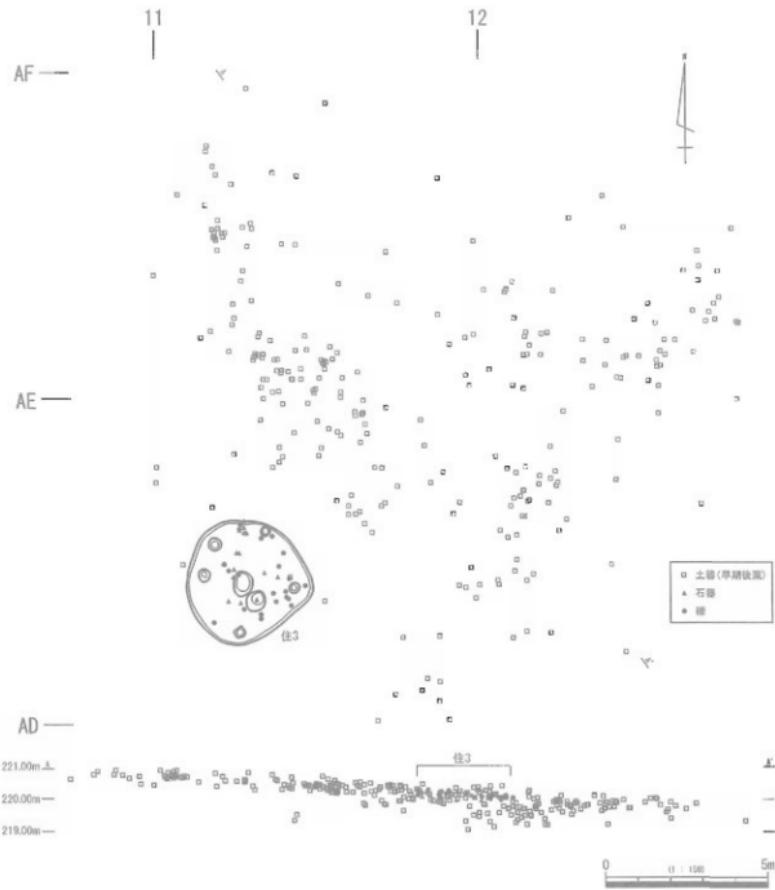
3号住居跡は調査区の北側の標高220.00mに占地する。分布上は周辺に集石遺構が隣接しているが、集石よりも標高が0.2m～0.3m低く、切り合い関係もない。検出面はF Bであるが、プランが検出時に於いて確定できなかった為、土層帯から推測した。規模は長軸3.76m短軸3.65m深さ0.45mの不整形を測る。遺構の第1層上面が周囲に比べ硬化していることから、床面と思われる。炉跡は住居のほぼ中央に位置し、深さ20cmを測る。柱穴らしきピットは浅いが、5穴確認された。住居跡からの出土遺物は石皿・台石類が2点（第97図-1, 2）の他、黒曜石とガラス質黒色安山岩の剝片、礫が出土している。土器は出土していないが、包含層出土の早期後葉に比定される土器が北東側に広く分布している。

(3) 堪穴状遺構（第99図～第101図）

本遺構は調査区北側の尾根の平坦部、標高221.00mに占地する。F Bで検出し、覆土中に礫や縄文の施された土器片が多数認められる。規模は長軸4.15m短軸3.92m深さ0.45mの扇円形を呈し、周辺からは集石がまとまって検出された。住居跡の可能性があったが、プランの北側がはっきりしないこと、炉や柱穴らしきピットは確認できないことから堪穴状遺構とした。出土した土器片は遺構周辺の同一個



第97図 3号住居跡と出土遺物

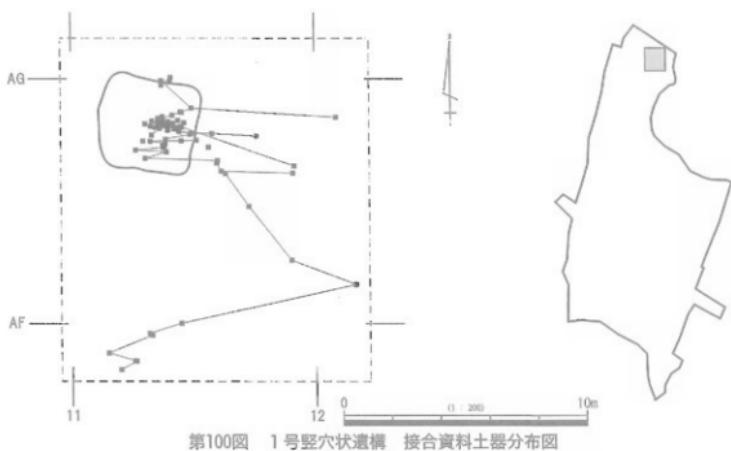
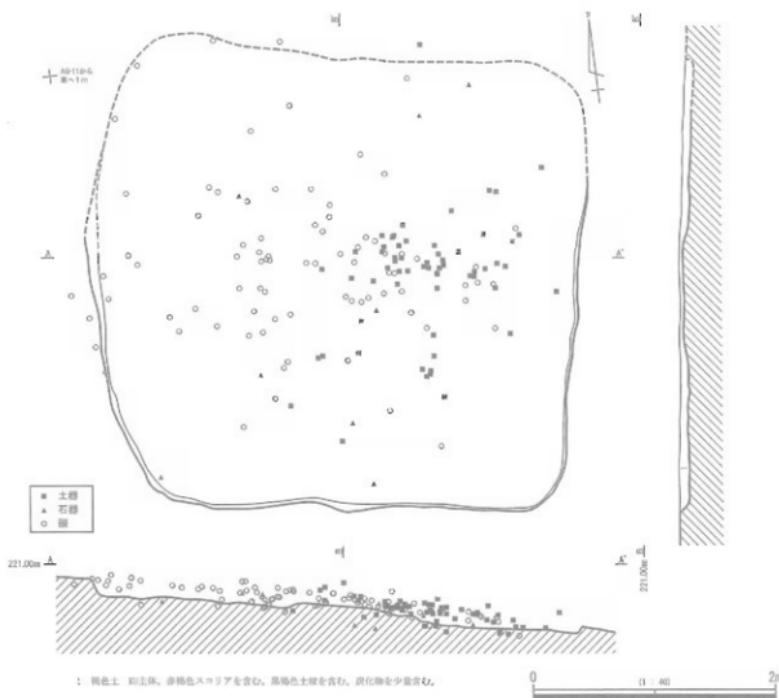


第98図 3号住居跡と周辺土器(早期後葉)分布

第30表 3号住居跡 石器計測表

標印番号	遺物番号	出土場所	石材	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第97図	1	7399	礫土	脚石安山岩	石直・台石瓶	427	340	104	18220
	2	7398	礫土	脚石安山岩	石直・台石瓶	184	260	83	[5470]

体と思われる土器とともに復元された(第101図-1)。この土器は4単位の波状口縁を持つ深鉢で補修孔があり、外面にR Lの縄文を横位に施し、原体端部のループが所々観察できるものである。胎土と器形から縄文時代の前期後半に位置づけられるものと考えられる。





第101図 1号竪穴状遺構 出土遺物

第31表 1号竪穴状遺構 土器観察表

博覧会号	分類	残存 部位	外面部 内面部	胎 土	破壊	文 様 ・ 圖 形	焼成
第101図	1	第Ⅲ群G類 ～底部	STBG/6 STBG/6	多量の石灰・黃石・白色粒子、輝石、雲母	無	波状口縁、外面上部にRの凹入を横断に施す。 頂部端部のループが所々観察できる。縫隙 孔あり	やや 良

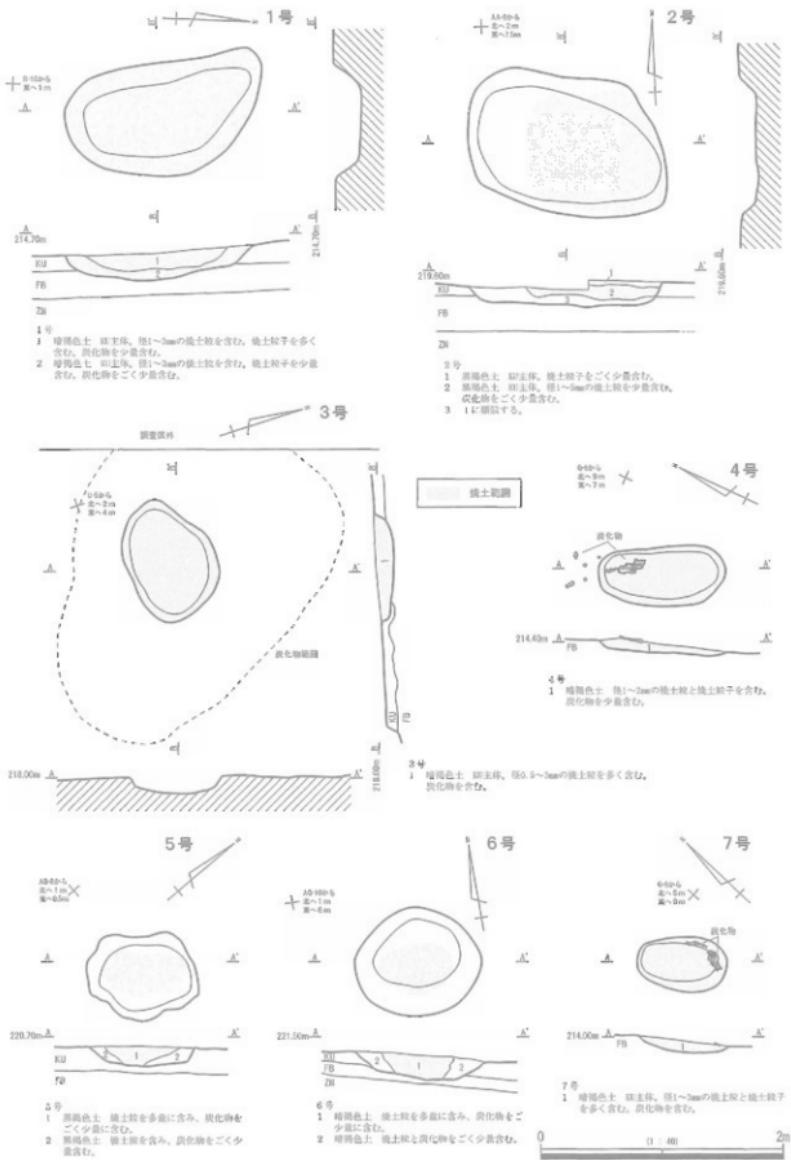
第32表 住居跡・竪穴状遺構計測表

住居跡	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	竪穴状遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
1号	3.50	2.75	0.15	1号	4.15	3.92	0.45
2号	3.50	2.85	0.05				
3号	3.76	3.65	0.45				

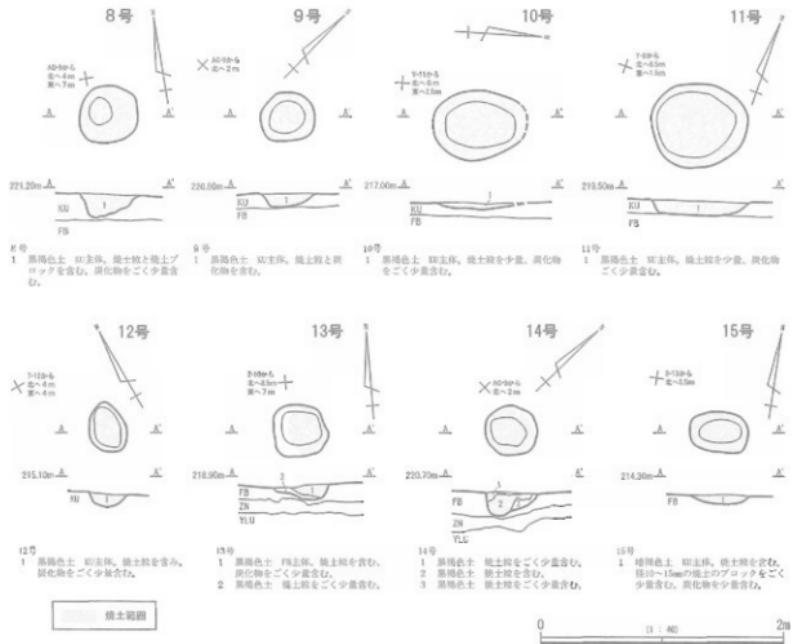
(4) 焼土跡 (第102図～第103図)

焼土が散漫に散っているところは除き、比較的掘り込みが明確なものを15基掲載した。

調査区の北側の標高220.00m付近、及び中央部の標高215.00m付近に占地するが、住居跡・集石との直接な関連性はないものと思われる。覆土はおおむねKUを主体とするが、遺物は出土していない。8号・15号焼土は焼土ブロックを含み、4号・7号焼土には20cm×10cm程の炭化物の塊が含まれている。



第102図 燐土跡(1)



第103図 焼土跡(2)

第33表 焼土跡調査表

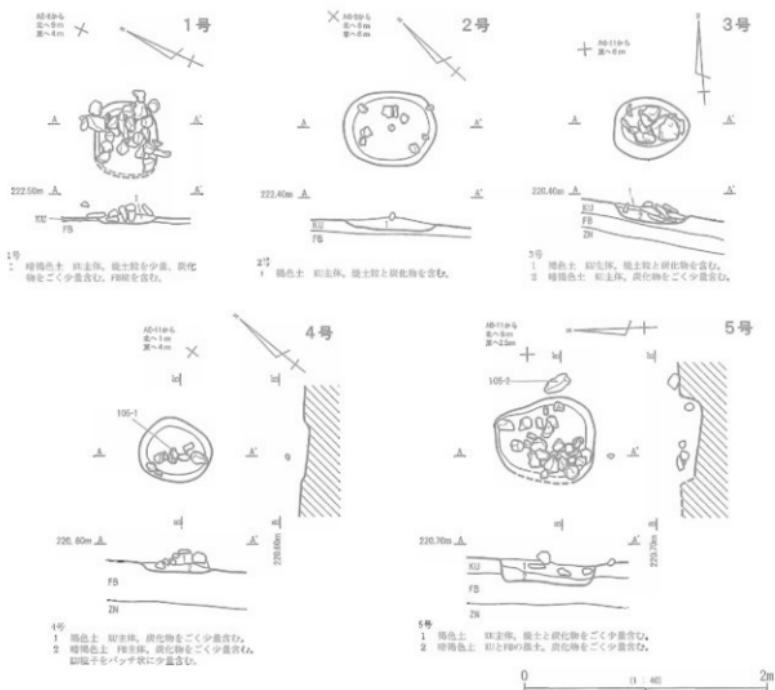
焼土番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	焼土番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1号	1.68	0.95	0.22	9号	0.45	0.40	0.10
2号	1.80	1.20	0.22	10号	0.74	0.56	0.05
3号	0.93	0.75	0.12	11号	0.80	0.67	0.12
4号	1.05	0.49	0.06	12号	0.43	0.33	0.12
5号	0.93	0.76	0.16	13号	0.45	0.41	0.12
6号	1.05	0.89	0.24	14号	0.43	0.40	0.20
7号	0.74	0.45	0.10	15号	0.48	0.32	0.08
8号	0.52	0.48	0.19				

(5) 集石 (第104図～第112図)

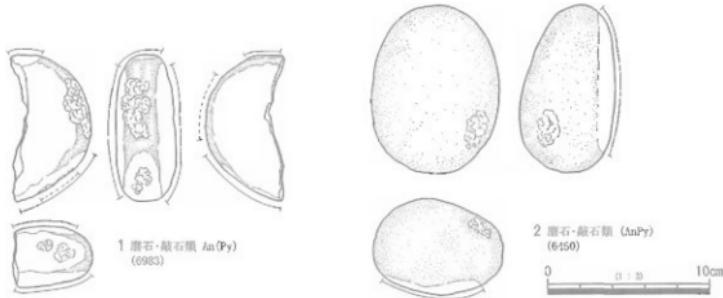
集石は40基が検出されている。調査区の北側と南側に集中している。

北側に分布するものは標高220.00m付近に占地し、土坑を伴う1号～5号集石と、やや集中している6号～11号集石、及び散漫に分布している12号～18号集石が検出された。土坑を伴うものはいずれも明確な焼土層を持たない。覆土には多少の焼土粒と炭化物粒が観察できるが、ロームの硬化面は見あたらぬ。土坑を伴わない6号～18号集石はK UからF Bで検出された。

南側に分布するものは標高210.00m付近に占地し、19号～33号集石が散漫に分布している。28・29号集石はF B及びZ Nの出土で構成礫数が少なめである。また調査区の中央部に散漫に分布する34号～40号集石が検出された。



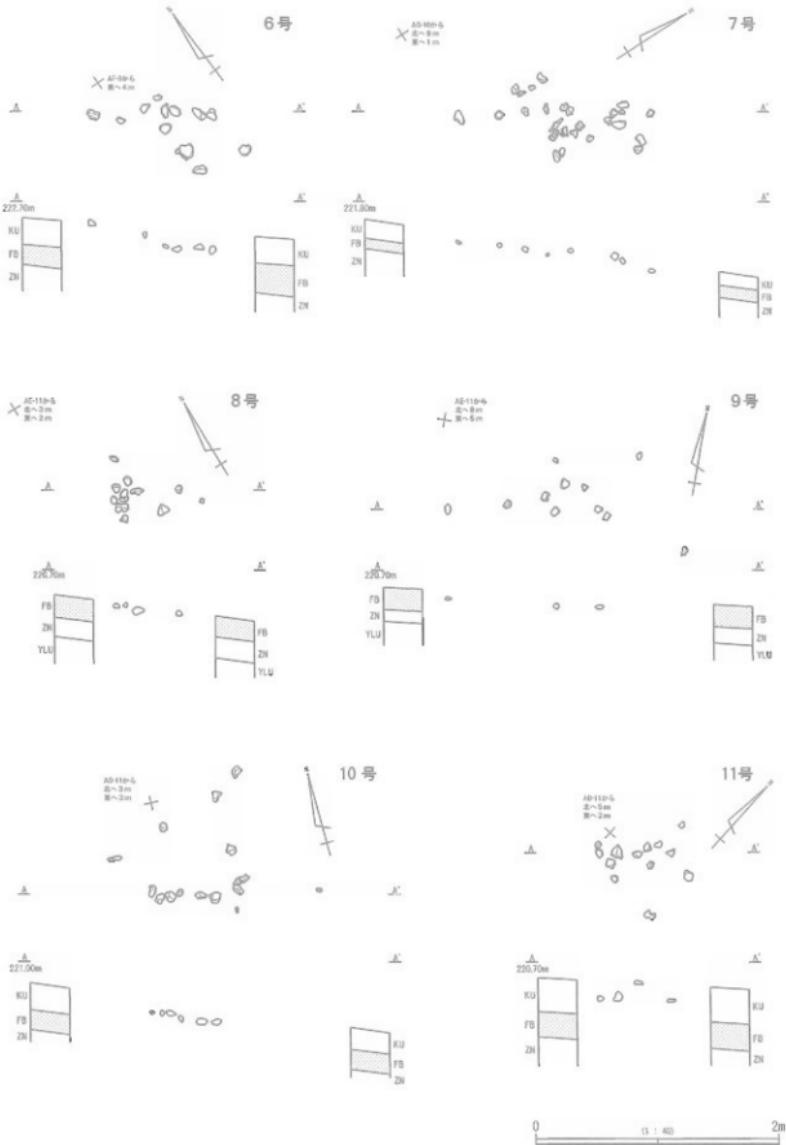
第104図 1号～5号集石



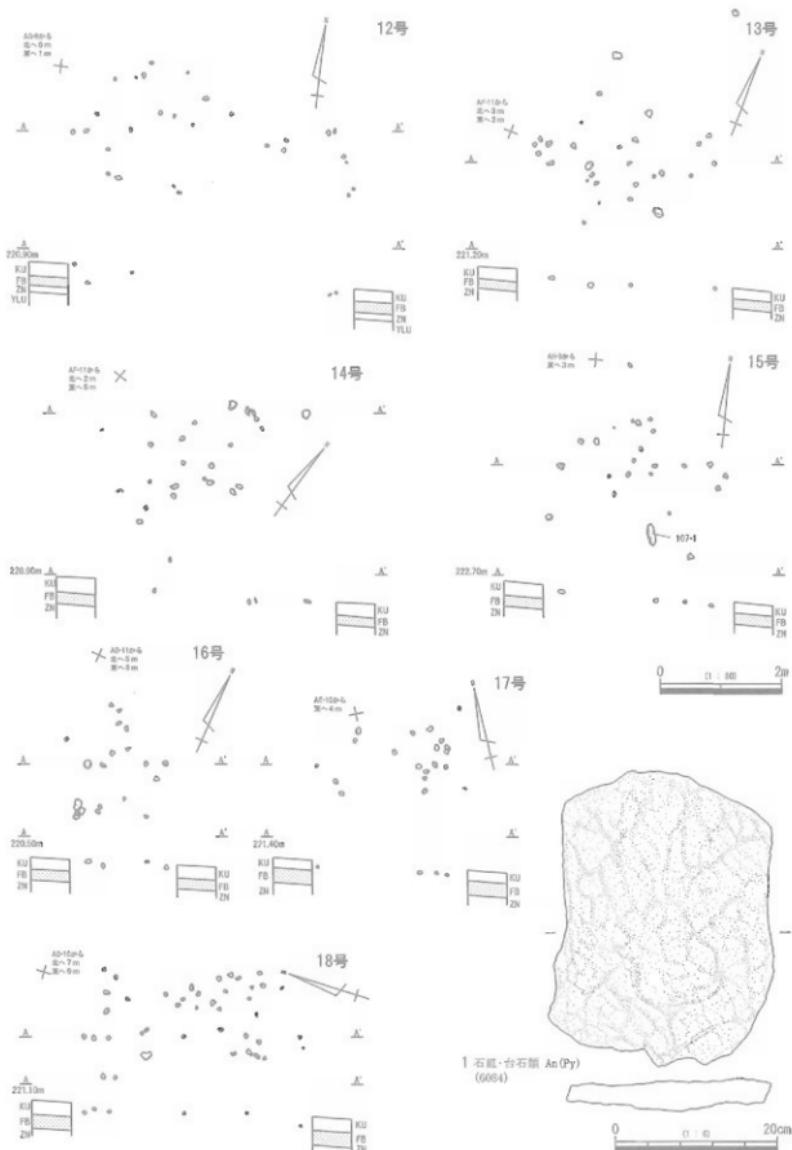
第105図 4号・5号集石出土 出土遺物

第34表 4号・5号集石出土 石器計測表

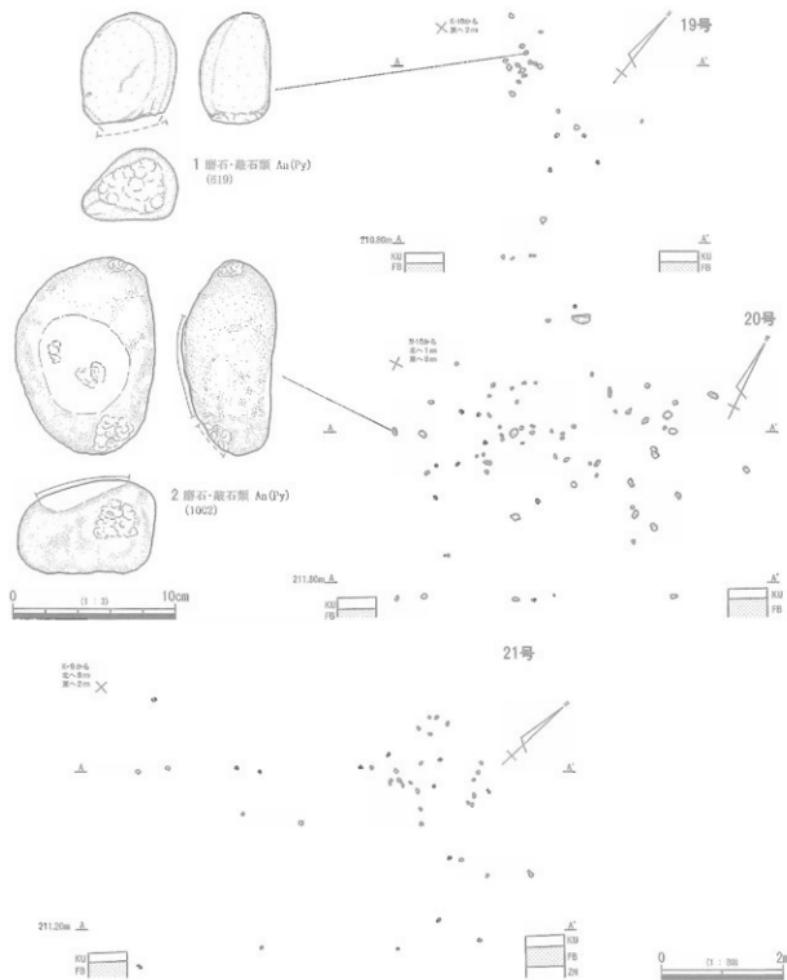
標図番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第34表	1 6450	褐色土	磨石・安山岩	磨石・敲石類	[90]	[48]	[37]	[200]	
第105図	2 6450	KU	玄武岩	磨石・敲石類	103	80	59	650	



第106図 6号～11号集石



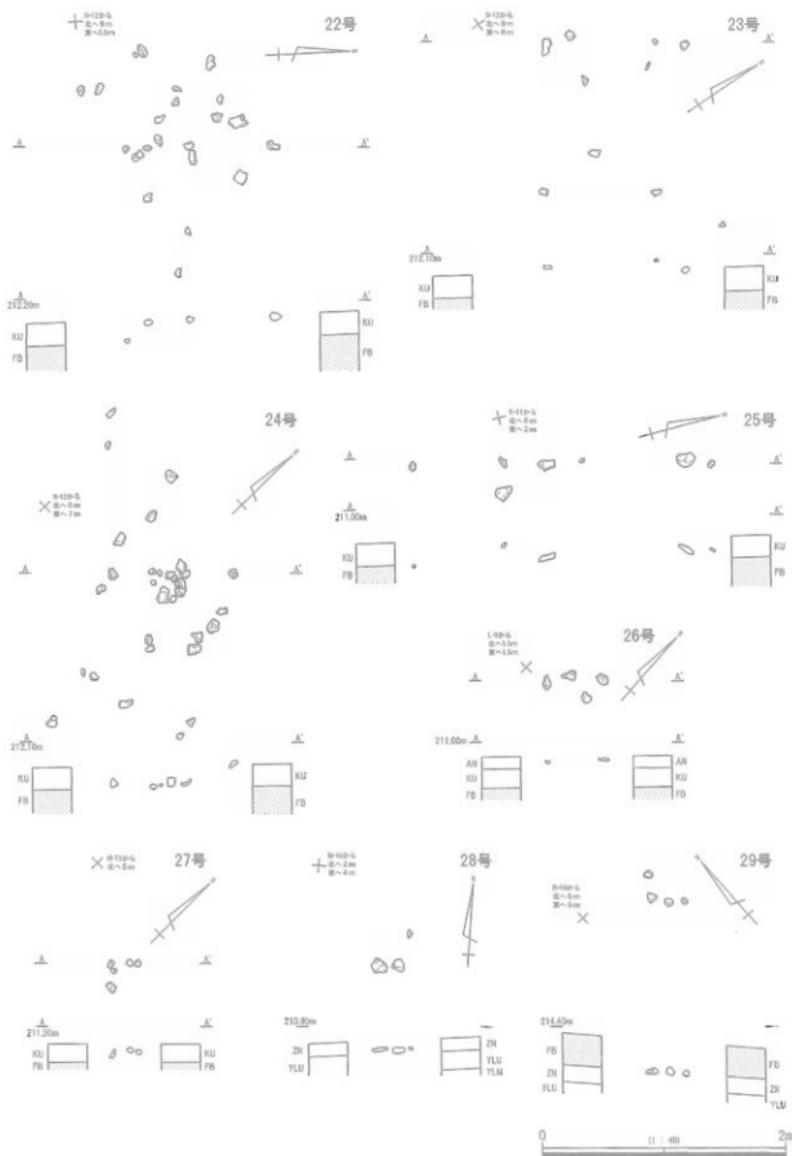
第107図 12号～18号集石



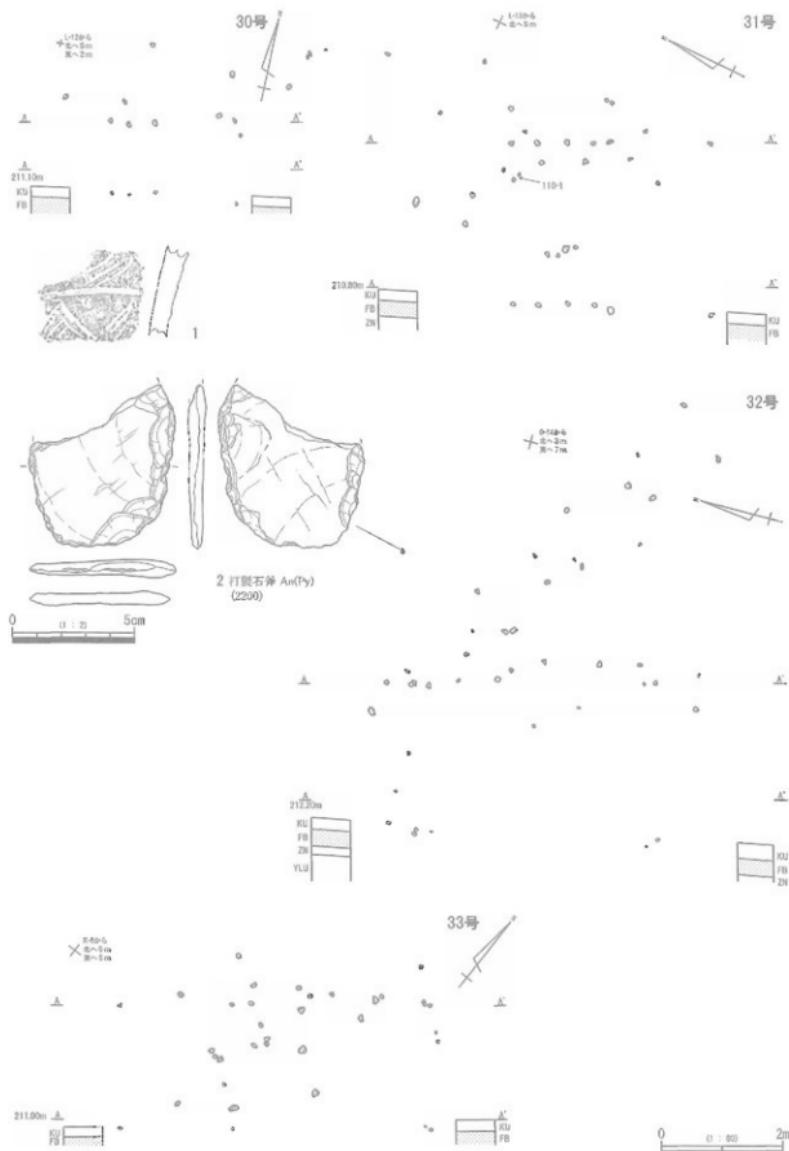
第35表 15号・19号・20号集石出土 石器計測表

探査番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第107回	1	6084	F.B.	脚石穿山岩	透頭・台石頭	366	205	41	5350
第108回	1	619	K.U.	脚石穿山岩	透石・磨石頭	[66]	[59]	[44]	[210]
	2	1002	K.U.	脚石穿山岩	磨石・磨石頭	120	86	58	830

第108図 19号～21号集石



第109図 22号~29号集石



第110図 30号～33号集石

第36表 31号集石出土 土器観察表

博団番号	分類	現存部位	外正面調 内面色調	土	測定	文様・調査	焼成	
第110回	1	第1部G部	調査	7.5786/6 7.5786/6	白色粒子、赤色粒子、少量の鐵石・黑色粒子	無	外面に燒成	やや 魚

第37表 32・34号集石出土 石器計測表

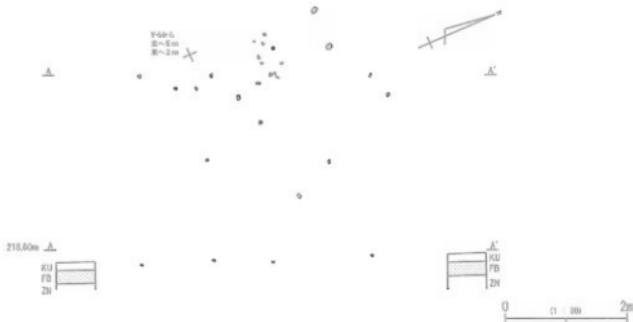
博団番号	遺物番号	出土層位	石材	基盤	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第110回	2	2200	KU	鰐石空山岩	打削石斧	[67]	60	7	[25.2]
第111回	1	2904	KU	安山岩(多孔質)	石頭・苔石頭	311	227	125	1132



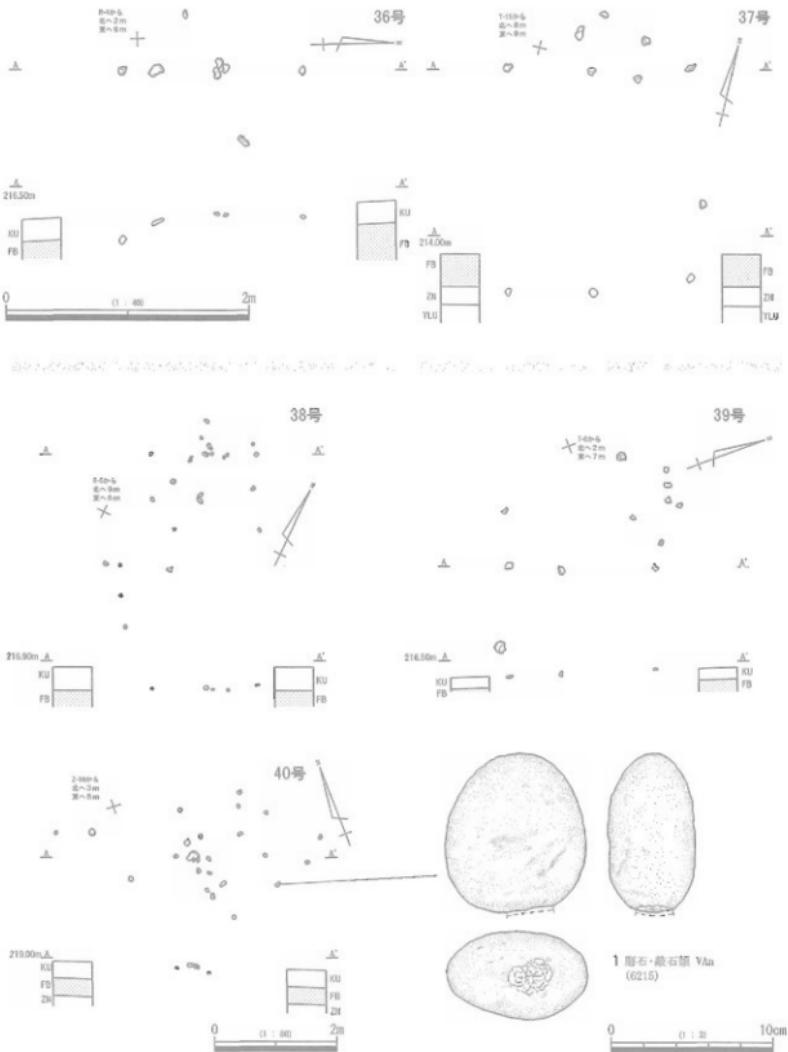
34号



35号



第111図 34号・35号集石



第38表 40号采集出土 石器計測表

探査番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第112回	1	6215	KU	安山岩(多孔質)	磨石・敲石類	98	36	54	590

第112図 36号～40号采集石

第39表 集石計測表

土坑を伴う 集石	長径(m) × 短径(m) (下段: 土坑の大きさ)	深さ(m)	個数	備考
1号	1.59×0.85 (0.61×0.52)	0.15 (0.07)	34	
2号	0.78×0.43 (0.77×0.61)	0.08 (0.09)	10	
3号	0.51×0.34 (0.63×0.50)	0.15 (0.16)	14	石器1点、土器1点
4号	0.60×0.52 (0.58×0.51)	0.08 (0.08)	8	石器1点、土器2点
5号	0.95×0.87 (0.82×0.71)	0.20 (0.22)	31	石器1点

集石番号	長径(m) × 短径(m)	個数	備考
6号	1.39×0.55	14	
7号	1.65×0.75	28	
8号	0.86×0.47	12	
9号	2.03×0.75	11	
10号	1.78×1.15	16	
11号	0.85×0.85	13	
12号	4.70×2.20	29	
13号	4.05×2.85	28	
14号	3.37×2.45	25	
15号	3.36×3.10	23	石器1点
16号	1.97×1.70	20	
17号	2.60×1.35	21	
18号	3.65×1.85	43	
19号	3.40×2.40	23	石器1点
20号	5.90×4.10	67	石器1点
21号	6.85×3.35	40	
22号	1.85×1.45	24	
23号	2.20×1.85	10	

集石番号	長径(m) × 短径(m)	個数	備考
24号	2.90×1.90	32	
25号	2.65×0.45	7	
26号	0.60×0.40	4	
27号	0.45×0.30	5	
28号	0.55×0.30	3	
29号	0.55×0.35	4	
30号	4.55×1.80	14	
31号	5.50×3.00	28	土器1点
32号	8.10×4.80	36	石器1点
33号	5.40×2.70	31	
34号	6.55×6.55	55	石器1点
35号	5.60×4.30	24	
36号	1.65×1.20	8	
37号	2.04×1.08	8	
38号	3.90×2.35	28	
39号	4.25×2.50	12	
40号	4.35×2.11	21	石器1点

(6) 土坑 (第113図～第129図)

土坑は合計74基発見され、土坑の分布には2つの傾向が見られる。1つは遺物が集中して出土したグリッドO-13、T-9付近及び、住居跡や集石の周辺に分布している。2つめは調査区の中央部よりやや北西側、標高217.50m～220.00m付近の遺物出土量が少ないとところにまとまって分布している。(第88図 調査区時代 遺構と遺物分布 参照)

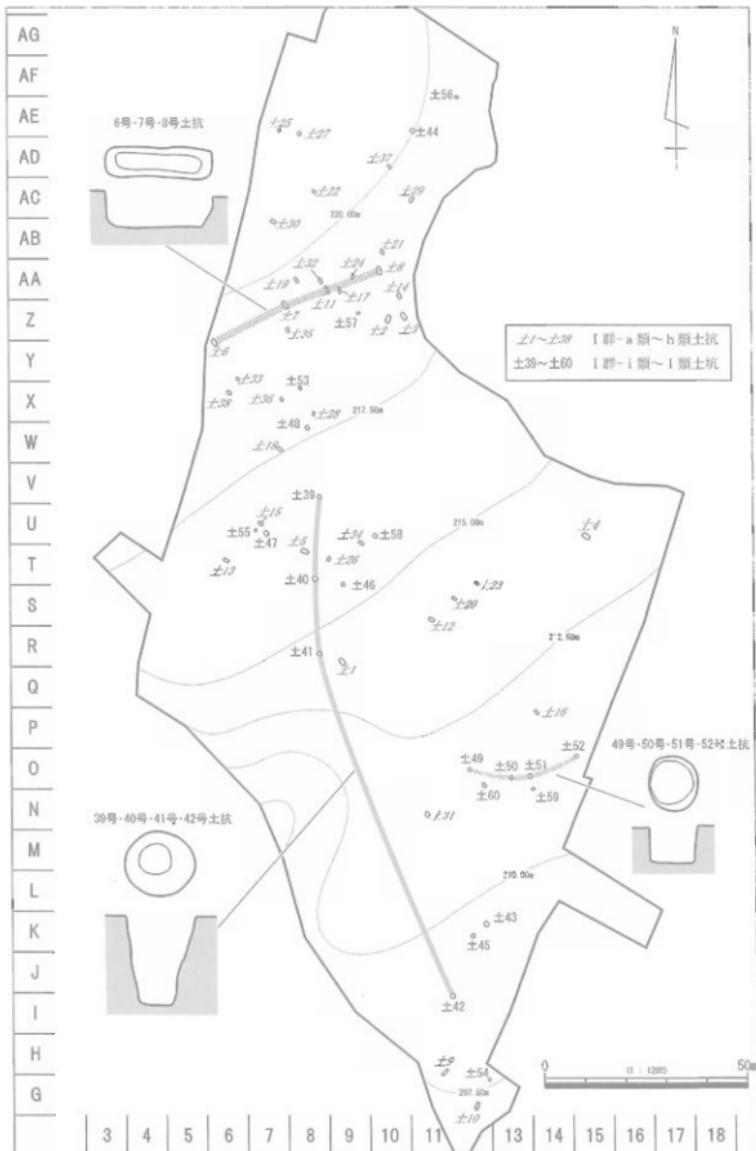
土坑の検出は難しく、黒褐色土を基調とする遺構の覆土と掘り込み面であるF Bでの見分けは容易ではなかった。ANからKUで検出された土坑以外のほとんどが、YL上面の褐色土で検出されることになった。従って、土坑の詳細な構築時期を全て把握することは困難であり、遺跡が営まれた状況を推測することが出来なかった。これらの土坑を検出面と主体となる覆土を基に2分類し、土坑の形状と深さにより細分類し報告する。土坑の形態を第42・43表にまとめた。

I群土坑 概要 (1号～60号土坑)

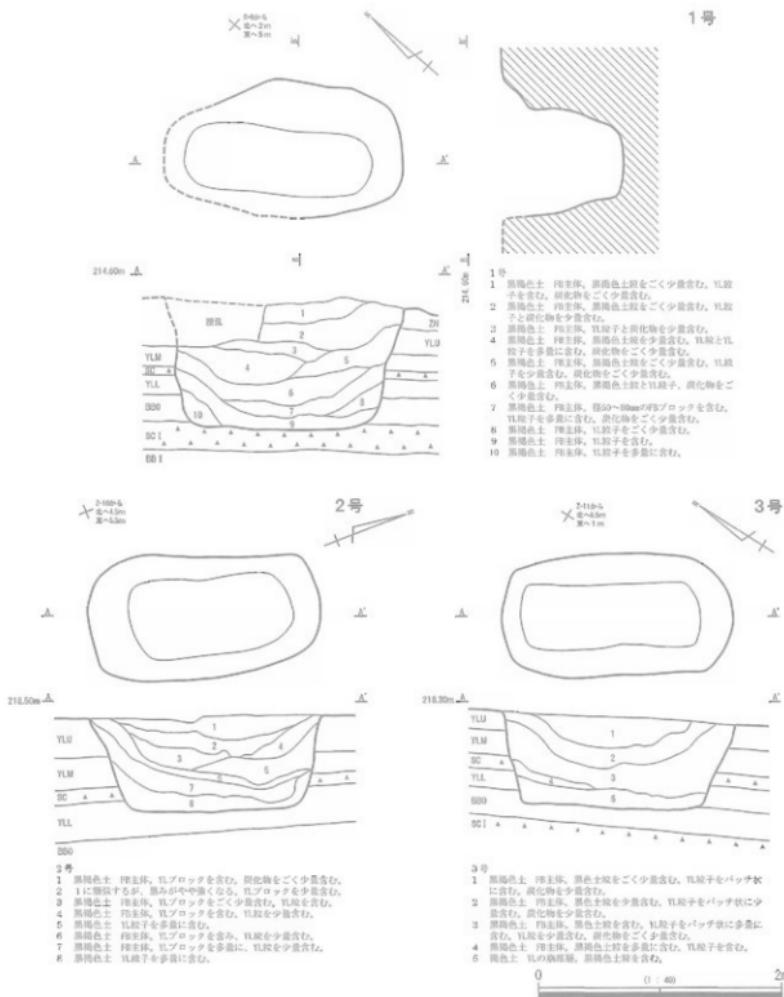
YL上面の褐色土で検出され、覆土はFBを主体する土坑である。おおむね自然堆積を示している。平面形態が長方形を呈するものが30基、梢円形および不整形を呈するものが8基、円形を呈するものが16基、不整形な円形を呈するものが6基ある。I群土坑のすべてに対して時期を限定することは困難であるが、覆土と周辺の土器の分布から、調査区時代の早期以降に作られたものであると推定される。

1群-a類土坑 (1号～3号土坑)

開口部及び底部の平面形態は長方形を呈する。平均規模は底部1.45m×0.54m深さ0.85mを測る。土



第113図 縄文時代 I群土坑分布図

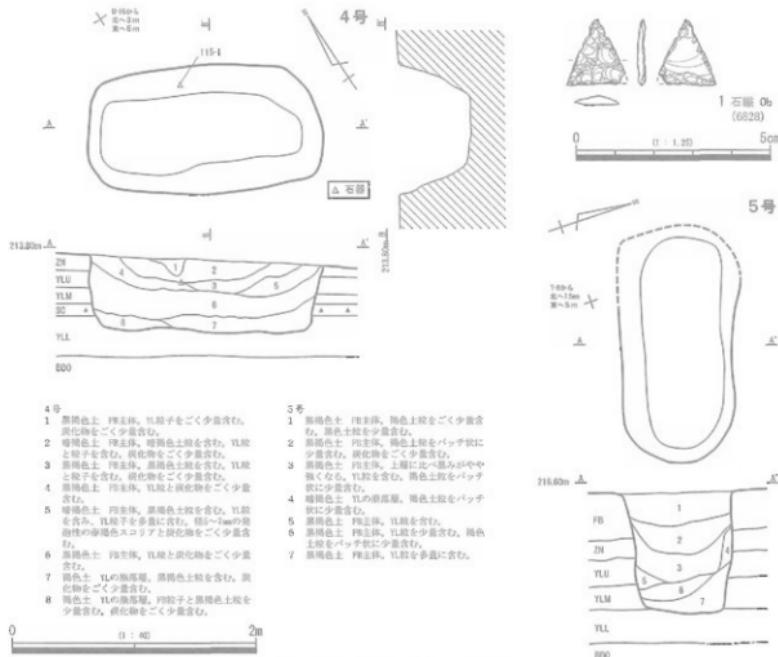


第1114図 繩文1号～3号土坑

坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。1号・3号土坑の主軸方向は等高線に対し直交し、2号土坑は右に傾いて構築されている。比較的深く掘り込まれた土坑ではあるが、底部からピットは検出されていない。

I群-b類土坑（4号・5号土坑）

開口部及び底部の平面形態は長方形を呈する。平均規模は底部 $1.70m \times 0.63m$ 深さ $0.80m$ を測る。土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。主軸方向は等高線に対し左に傾いて構築されている。共伴遺



第115図 繪文4号・5号土坑

第40表 4号土坑出土 石器計測表

測量番号	遺物番号	出土層位	石材	縦幅	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第115号	I 6828	壁上	黒曜石	石器	17	[15]	2	[0.4]	即ち墨ヶ谷群

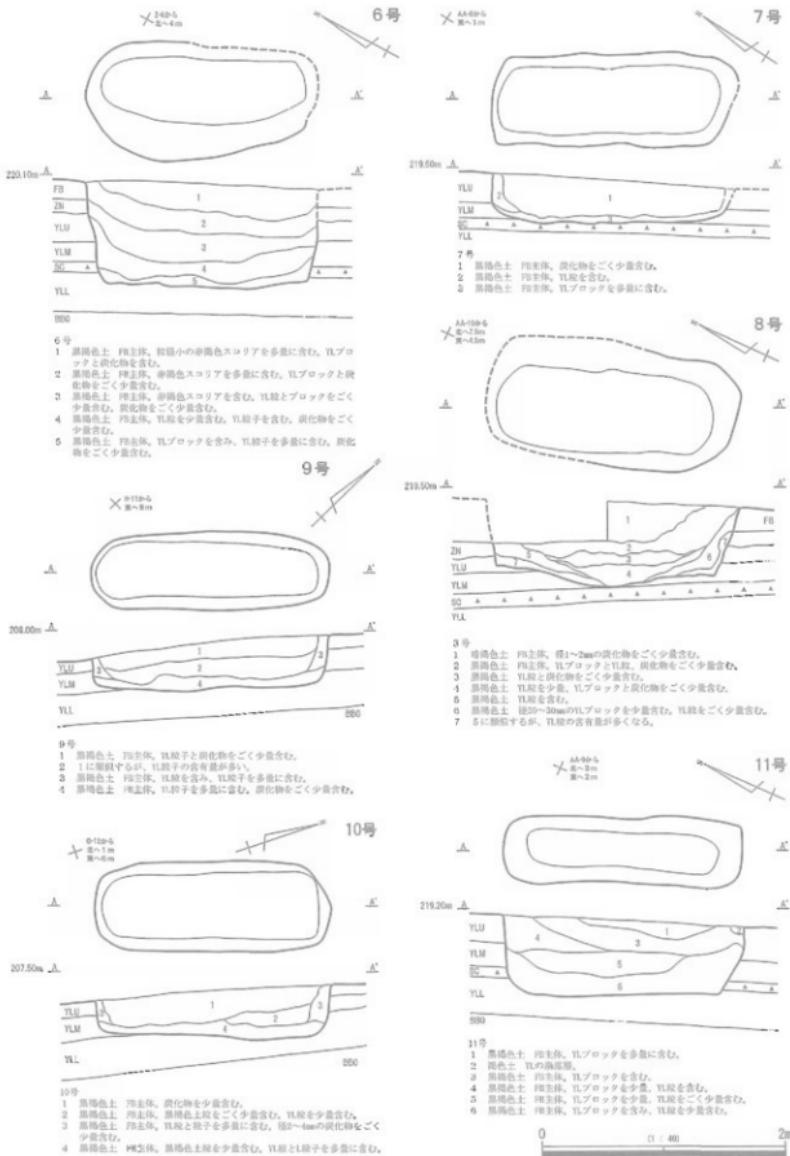
物として4号土坑から黒曜石の石鏃が出土している。比較的深く掘り込まれた土坑ではあるが、底部からピットは検出されていない。

I群-c類土坑（6号～8号土坑）

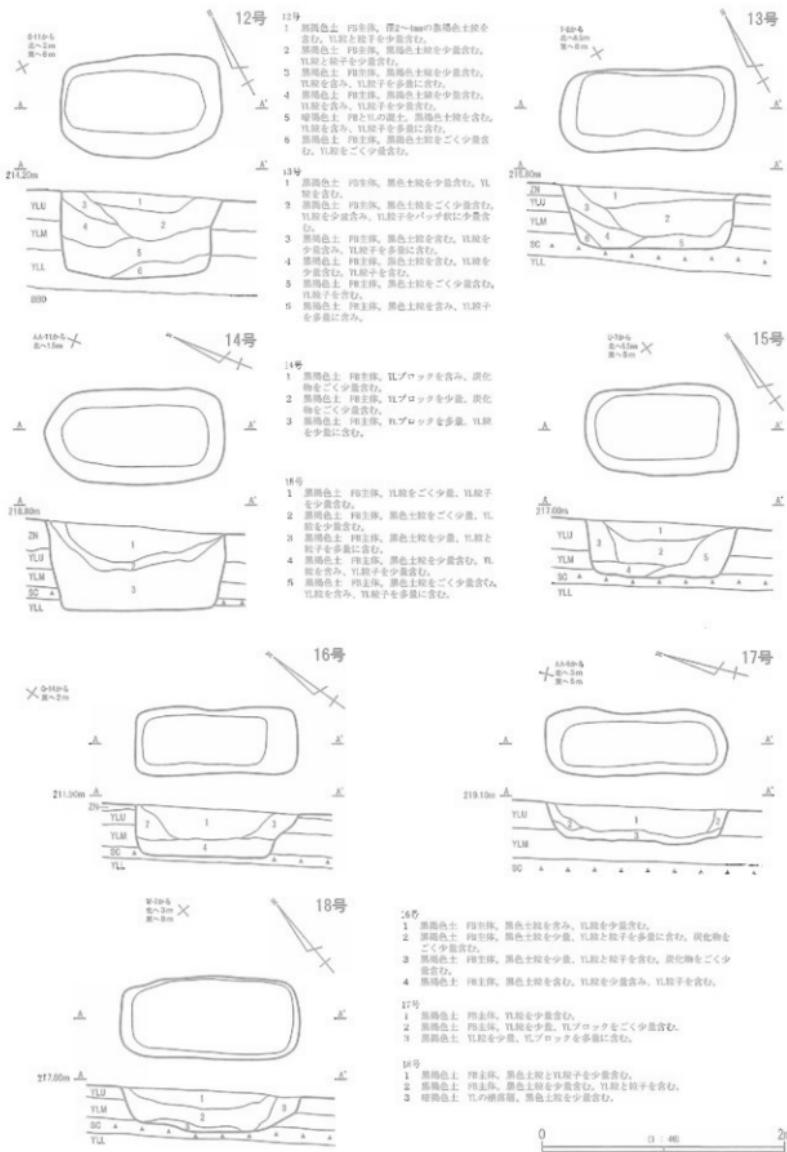
開口部及び底部の平面形態は長方形を呈する。平均規模は底部1.76m×0.58m深さ0.63mを測る。土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。主軸方向は等高線に対し直交して構築されている。それぞれの土坑の配置関係は、標高219.00m付近で尾根を横断するように配置されている。南西から北東方向に向かって6号・7号・8号土坑の順に並び、6号土坑と7号土坑の間隔は19.10m、7号土坑と8号土坑の間隔は23.37mである。7号土坑と8号土坑の間に11号土坑が配置されているが、底部の規模が1.57m×0.28mであり幅が狭い印象を受ける為、I群-c類土坑からは外した。土坑の規模を考えると、当時の代表的狩猟獣であるシカ・イノシシの捕獲は無理と判断されるが、小動物の捕獲を目的とした陷阱土坑として考えられよう。

I群-d類土坑（9号～11号土坑）

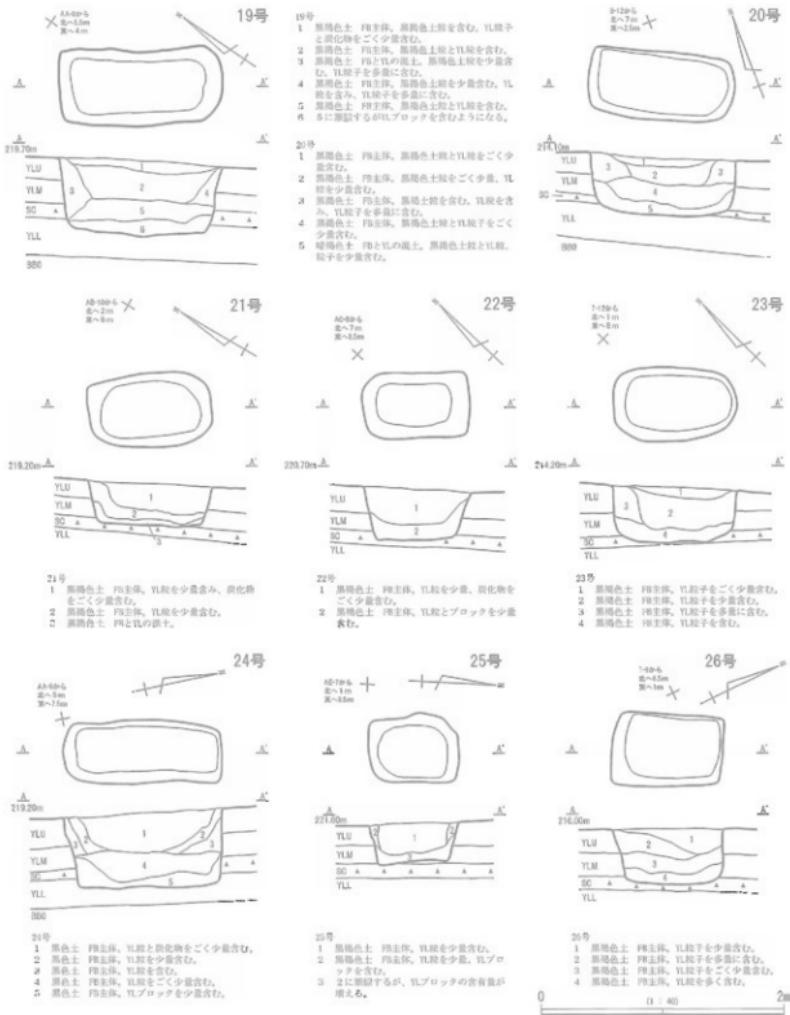
開口部及び底部の平面形態は長方形を呈する。平均規模は底部1.73m×0.42m深さ0.48mを測る。土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。9号・11号土坑の主軸方向は等高線に対し直交し、10号土坑は右に傾いて構築されている。



第116図 繩文6号～11号土坑



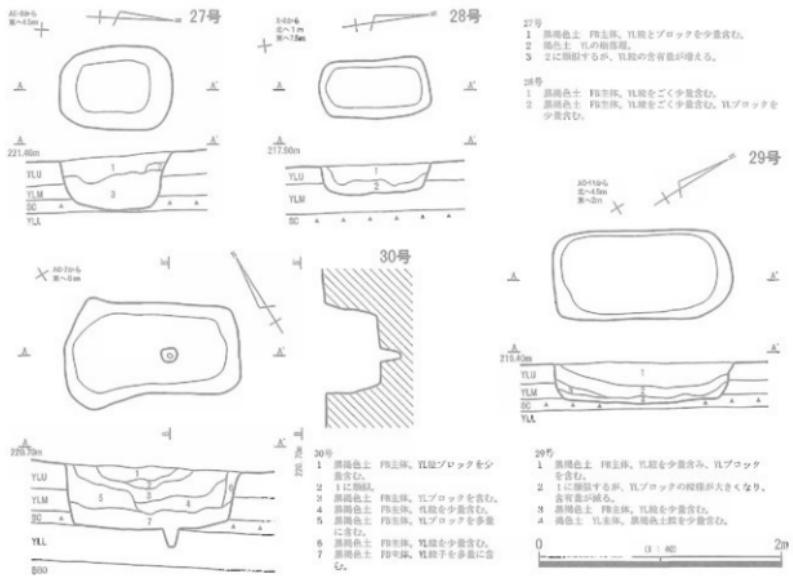
第117図 繩文12号～18号土坑



第118図 繪文19号～26号土坑

I群-e類土坑 (12号～23号土坑)

開口部及び底部の平面形態が長方形を呈し、平均規模は底部 $1.05m \times 0.44m$ 深さ $0.48m$ を測る。土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。土坑の主軸方向は等高線に対し直交して構築されている。



第119図 繩文27号～30号土坑

I群-f類土坑 (24号～29号土坑)

開口部及び底部の平面形態が長方形を呈し、平均規模は底部 $0.86m \times 0.43m$ 深さ $0.41m$ を測る。土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。24号～28号土坑の主軸方向は等高線に対し右へ傾いて構築され、29号土坑は平行して構築されている。

I群-g類土坑 (30号土坑)

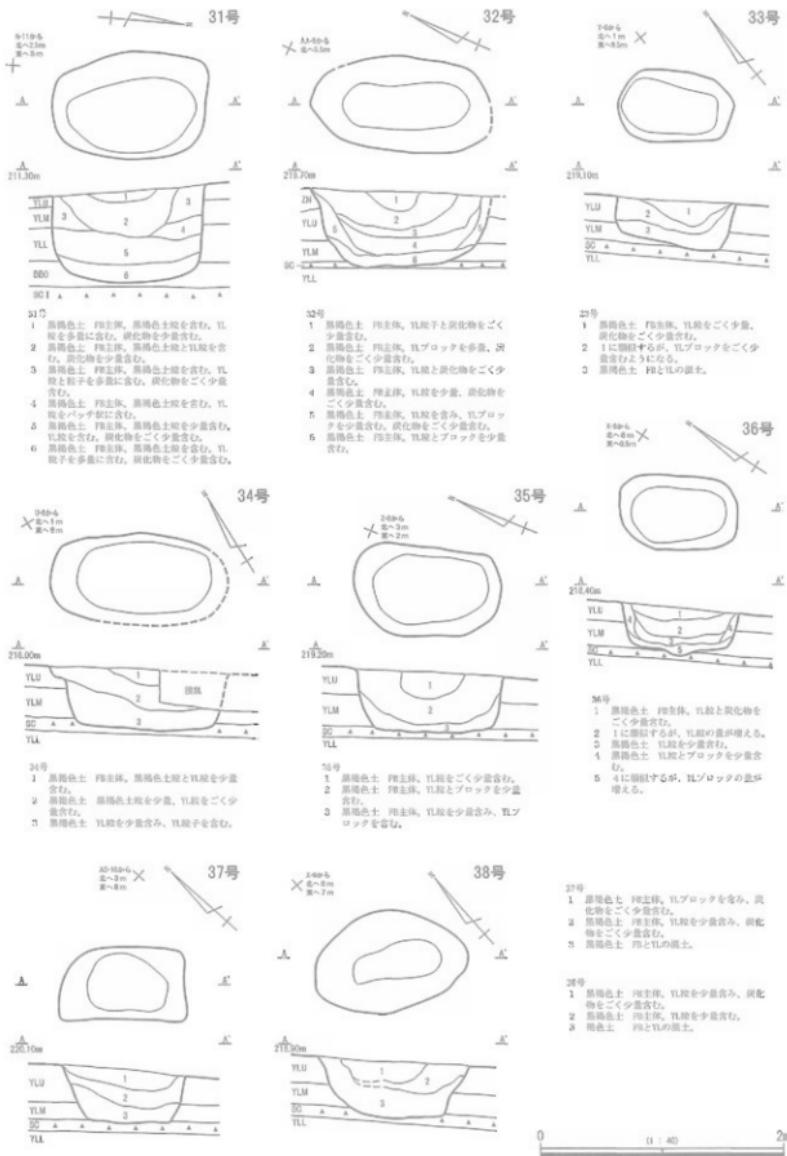
開口部及び底部の平面形態は長方形を呈する。土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。土坑の主軸方向は等高線に対し左に傾いて構築されている。底部からピットが1個検出された。I群-c類土坑と同様に、小動物の捕獲を目的とした陥穴状土坑の可能性がある。

I群-h類土坑 (31号～38号土坑)

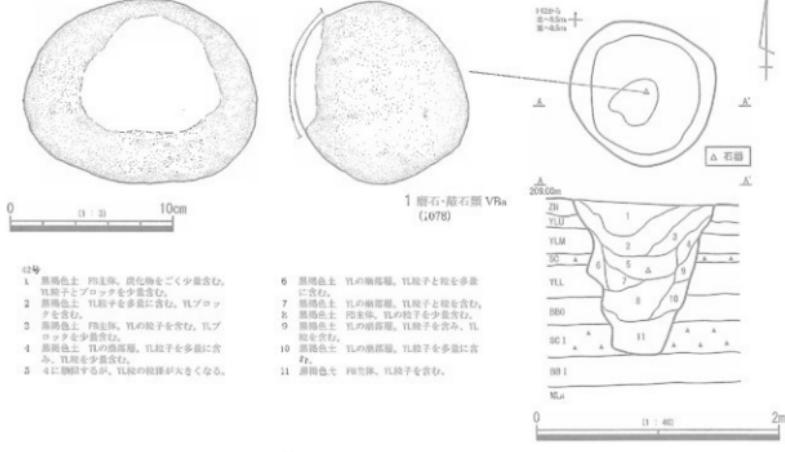
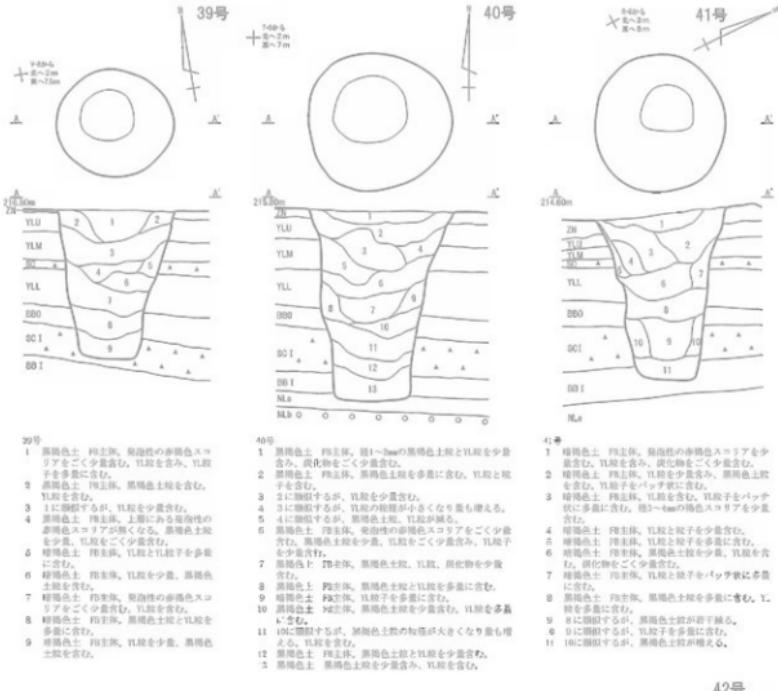
開口部及び底部の平面形態が円形または不整形を呈する。平均規模は底部 $0.89m \times 0.43m$ 深さ $0.53m$ を測る。31号・34号・35号土坑の断面は箱型で壁は垂直に立ち上がる。その他の土坑はU字状に開きながら立ち上がる。

I群-i類土坑 (39号～45号土坑)

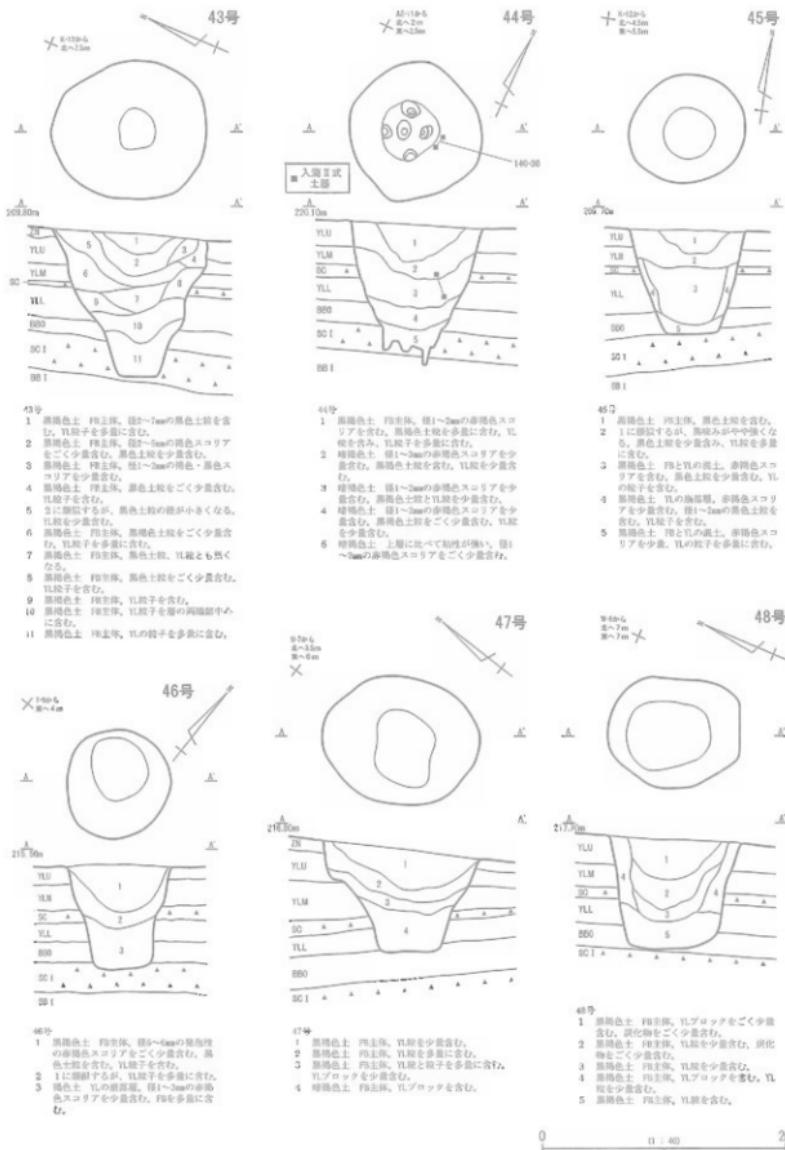
開口部及び底部の平面形態は円形を呈する。平均規模は開口部 $1.14m \times 1.05m$ 底部 $0.45m \times 0.41m$ 深さ $1.21m$ を測る。土坑の断面はコップ型で、底部から開口部に向けて僅かに開きながら立ち上がる。開口部と底部の径の差が大きく、底部の規模が小さいのが特徴である。39号～42号土坑は、調査区中央部の尾根から南東への斜面を縦断するように配置されている。39号土坑と40号土坑の間隔は $19.20m$ 、40号土坑と41号土坑の間隔は $18.33m$ であり、41号土坑と42号土坑は南西側への谷を越えて $91.06m$ の間隔で配置されている。共伴遺物として42号土坑から磨石・敲石類が出土している。44号土坑からは入海II



第120図 繩文31号～38号土坑



第121図 繩文39号～42号土坑

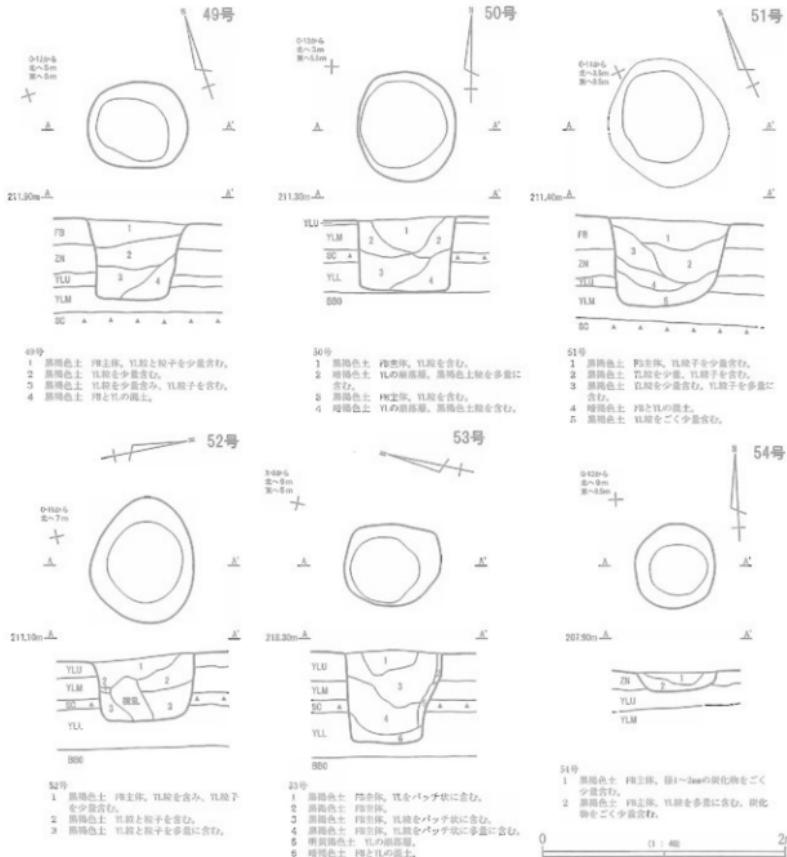


第122図 繩文43号～48号土坑

式の土器片が出土し、遺構周辺の包含層土器（第140図-30）と接合し、1個体に復元された。しかし、流れ込みの可能性があり、土坑の構築時期を判断することは不可能である。44号土坑は底部からピットを5個検出した。形状と深さから、動物の捕獲を目的とした陥穴伏状土坑として考えられよう。

I群- i類土坑 (46号～48号土坑)

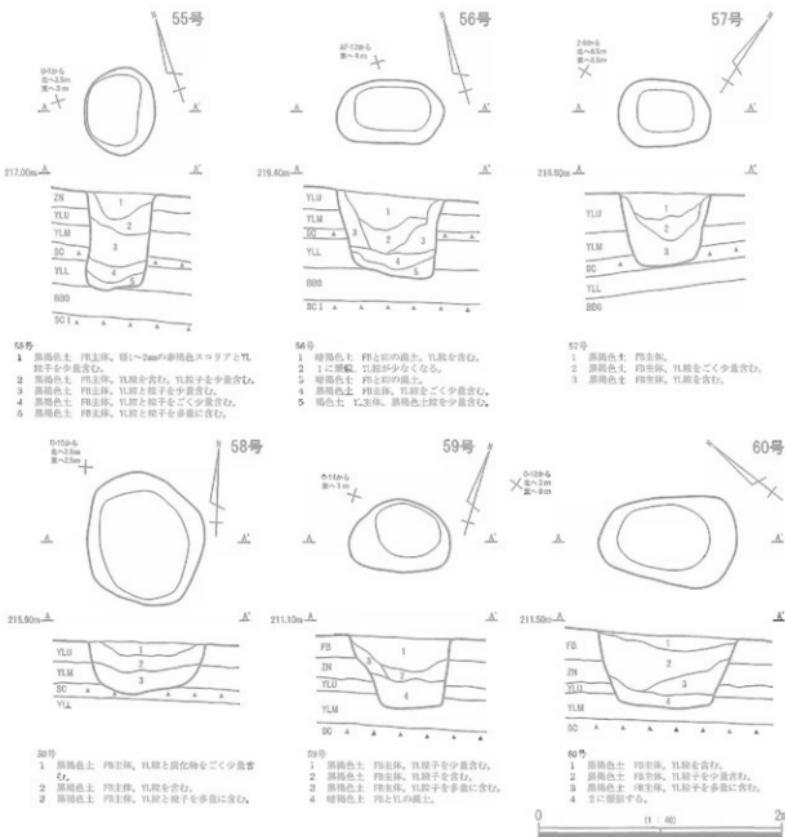
開口部及び底部の平面形態は円形を呈する。平均規模は開口部1.09m×0.93m底部0.62m×0.53m深さ0.87mを測る。土坑の断面はコップ型で、底部から開口部に向けて僅かに開きながら立ち上がる。I群-i類土坑よりも規模がやや小さい土坑である。



第123図 繪文49号～54号土坑

第41表 42号土坑出土 石器計測表

井戸番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第121回 1	1078	雁土	玄武岩 (多孔質)	磨石・敲石器	142	114	106	2230	



第124図 繩文55号～60号土坑

I群-k類土坑 (49号～54号土坑)

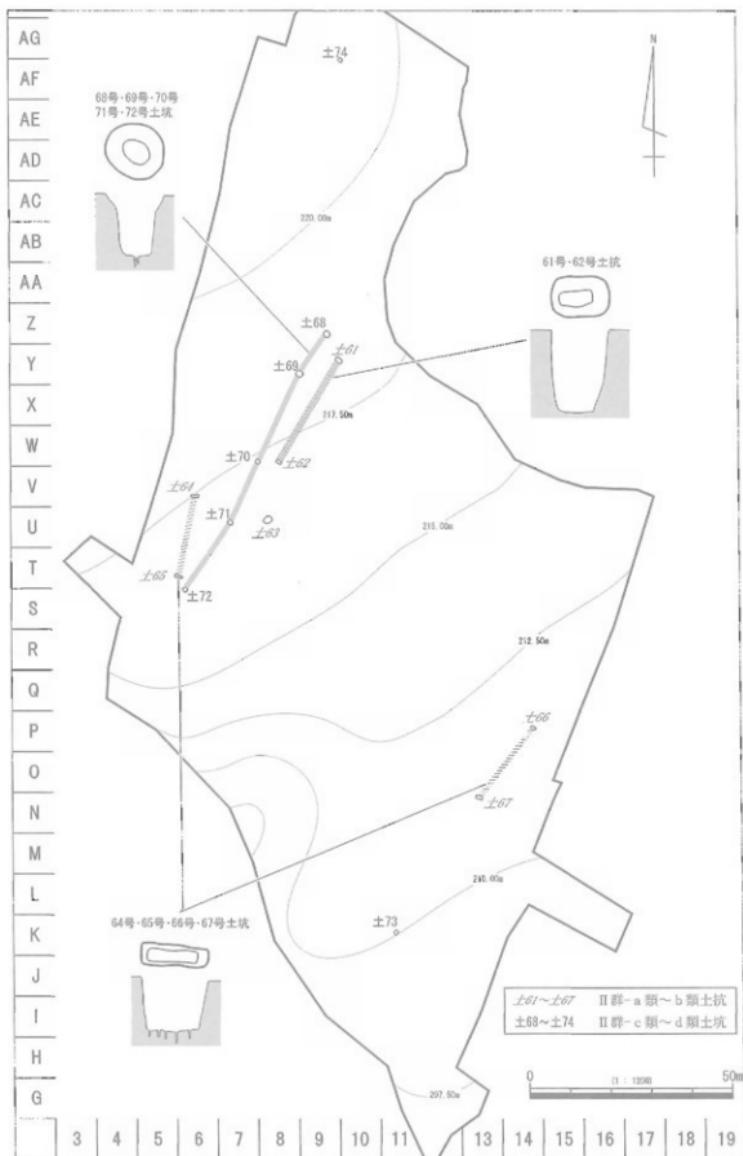
開口部及び底部の平面形態は円形を呈する。平均規模は開口部0.88m×0.77m底部0.64m×0.56m深さ0.56mを測る。土坑の断面は箱形で壁は垂直に立ち上がる。49号土坑と50号土坑の間隔は10.48m、50号土坑と51号土坑の間隔は4.70m、51号土坑と52号土坑の間隔は12.59mを測る。4基の土坑は、尾根の平坦部に弧を描くように配置されている。

I群-I類土坑 (55号～60号土坑)

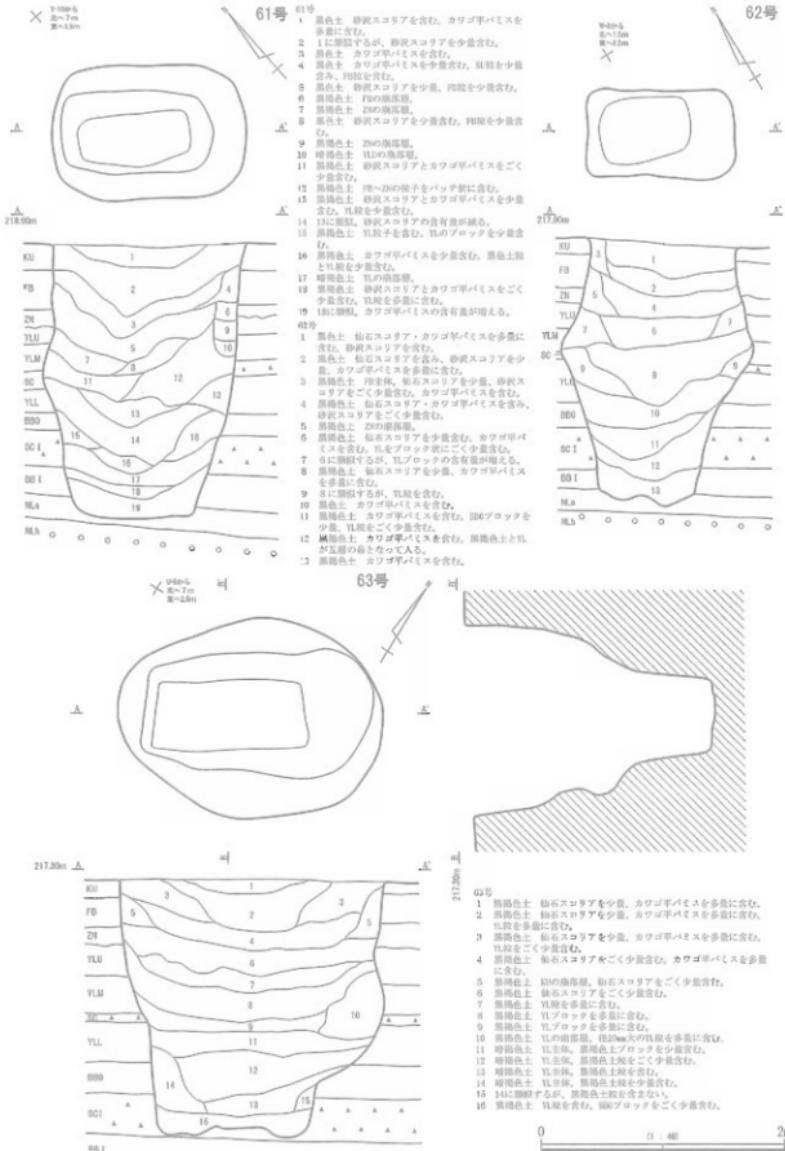
I群の中で平面形態が円形には属さない土坑をI類としてまとめた。開口部及び底部の平面形態は不整形な円形を呈する。土坑の断面は箱形で壁はほぼ垂直に立ち上がる。

第42表 I 群土坑形態分類表

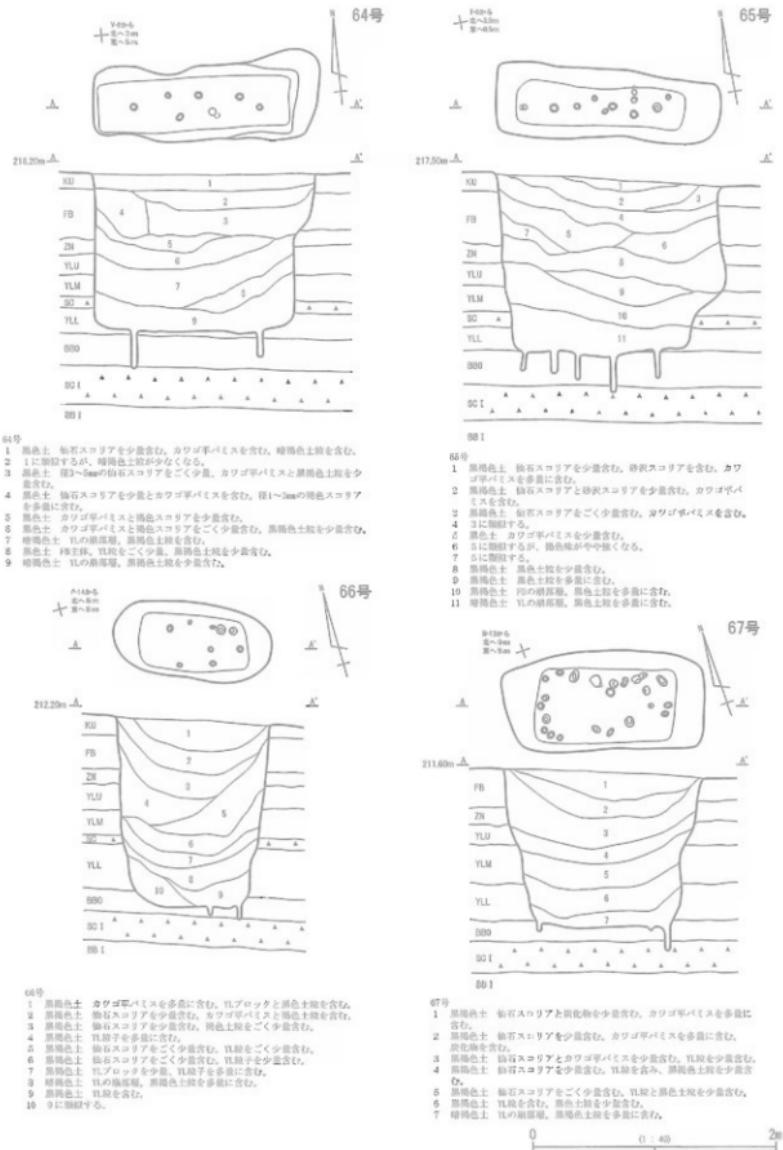
分類	土坑番号	開口部長(m) × 幅(m)	底部長(m) × 幅(m)	深さ(m)	底部の形状	等高線に 対して	底面 ピット	長軸方位	遺物
a類	1	(1.90×1.15)	1.54×0.52	1.05	長方形	直交する	—	N41° E	—
	2	1.91×0.99	1.35×0.60	0.77	長方形	右へ傾く	—	N21° E	—
	3	1.91×0.98	1.47×0.50	0.74	長方形	直交する	—	N32° W	—
b類	4	1.92×1.06	1.65×0.60	0.59	長方形	左へ傾く	—	N62° E	石器1点
	5	(1.95×0.95)	1.74×0.65	1.00	長方形	左へ傾く	—	N69° E	—
c類	6	(1.91×0.98)	1.67×0.52	0.85	長方形	直交する	—	N22° W	—
	7	2.00×0.74	1.85×0.52	0.35	長方形	直交する	—	N33° W	—
	8	(2.02×1.00)	1.76×0.69	0.69	長方形	直交する	—	N18° E	—
d類	9	1.95×0.65	1.83×0.45	0.42	長方形	直交する	—	N44° W	—
	10	1.95×0.74	1.78×0.52	0.42	長方形	右へ傾く	—	N19° E	—
	11	1.97×0.51	1.57×0.28	0.61	長方形	直交する	—	N25° W	—
e類	12	1.33×0.85	1.16×0.50	0.70	長方形	直交する	—	N62° W	—
	13	1.45×0.65	1.20×0.44	0.50	長方形	直交する	—	N60° W	—
	14	1.48×0.78	1.20×0.49	0.74	長方形	直交する	—	N22° W	—
	15	1.27×0.75	1.00×0.52	0.45	長方形	直交する	—	N53° W	—
	16	1.33×0.55	1.02×0.39	0.40	長方形	直交する	—	N37° W	—
	17	1.50×0.49	1.28×0.32	0.35	長方形	直交する	—	N14° E	—
	18	1.50×0.68	1.32×0.60	0.35	長方形	直交する	—	N51° W	—
	19	1.35×0.80	1.10×0.41	0.61	長方形	直交する	—	N35° W	—
	20	1.20×0.58	1.06×0.45	0.50	長方形	直交する	—	N65° W	—
	21	1.00×0.62	0.82×0.44	0.34	長方形	直交する	—	N34° W	—
f類	22	0.88×0.52	0.61×0.35	0.40	長方形	直交する	—	N44° W	—
	23	1.03×0.61	0.88×0.46	0.46	長方形	直交する	—	N45° W	—
g類	24	1.31×0.52	1.16×0.34	0.66	長方形	右へ傾く	—	N11° E	—
	25	0.74×0.55	0.57×0.42	0.33	長方形	右へ傾く	—	N35° W	—
	26	0.92×0.58	0.77×0.47	0.46	長方形	右へ傾く	—	N26° E	—
	27	0.93×0.67	0.60×0.40	0.44	長方形	右へ傾く	—	N23° W	—
	28	0.91×0.46	0.78×0.32	0.24	長方形	右へ傾く	—	N6° E	—
	29	1.48×0.70	1.25×0.62	0.32	長方形	平行する	—	N22° E	—
	30	1.43×0.94	1.27×0.56	0.50	長方形	左へ傾く	有	N50° W	—
	31	1.27×0.88	1.06×0.60	0.77	箱内形	直交する	—	N65° W	—
	32	1.48×0.78	1.04×0.35	0.65	箱内形	直交する	—	N24° W	—
	33	0.93×0.59	0.79×0.38	0.44	箱内形	直交する	—	N43° W	—
h類	34	(1.46×0.75)	1.11×0.55	0.50	箱内形	直交する	—	N57° W	—
	35	1.22×0.71	0.95×0.52	0.48	箱内形	直交する	—	N22° W	—
	36	0.97×0.60	0.78×0.40	0.43	箱内形	直交する	—	N33° W	—
	37	1.00×0.59	0.66×0.42	0.44	不整形	直交する	—	N42° W	—
	38	1.26×0.82	0.74×0.24	0.50	不整形	直交する	—	N61° W	—
	39	0.97×0.89	0.45×0.43	1.21	円形	—	—	N82° W	—
	40	1.20×1.12	0.60×0.55	1.55	円形	—	—	N60° W	—
	41	1.14×1.10	0.45×0.40	1.40	円形	—	—	N64° W	—
i類	42	1.20×1.12	0.40×0.35	1.25	円形	—	—	N2° E	石器1点
	43	1.30×1.14	0.37×0.33	1.15	円形	—	—	N23° E	—
	44	1.17×1.11	0.49×0.46	1.04	円形	—	有	N9° W	上野2点
j類	45	0.98×0.87	0.45×0.41	0.86	円形	—	—	N43° E	—
	46	0.90×0.86	0.52×0.45	0.85	円形	—	—	N59° W	—
	47	1.30×1.05	0.66×0.50	0.85	円形	—	—	N38° W	—
	48	1.08×0.88	0.70×0.56	0.93	円形	—	—	N24° W	—
k類	49	0.82×0.70	0.60×0.47	0.65	円形	—	—	N73° E	—
	50	0.90×0.81	0.60×0.72	0.60	円形	—	—	N1° W	—
	51	1.05×0.92	0.75×0.67	0.72	円形	—	—	N20° W	—
	52	1.03×0.85	0.65×0.60	0.53	円形	—	—	N18° W	—
	53	0.80×0.66	0.57×0.52	0.75	円形	—	—	N12° W	—
	54	0.70×0.66	0.48×0.40	0.15	円形	—	—	N22° E	—
l類	55	0.72×0.58	0.55×0.42	0.82	不整円形	—	—	N30° E	—
	56	0.89×0.52	0.63×0.34	0.73	不整円形	—	—	N74° W	—
	57	0.76×0.53	0.46×0.34	0.59	不整円形	—	—	N52° E	—
	58	1.10×0.97	0.88×0.73	0.43	不整円形	—	—	N2° W	—
	59	0.85×0.60	0.55×0.45	0.62	不整円形	—	—	N71° E	—
	60	1.15×0.75	0.76×0.54	0.60	不整円形	—	—	N39° W	—



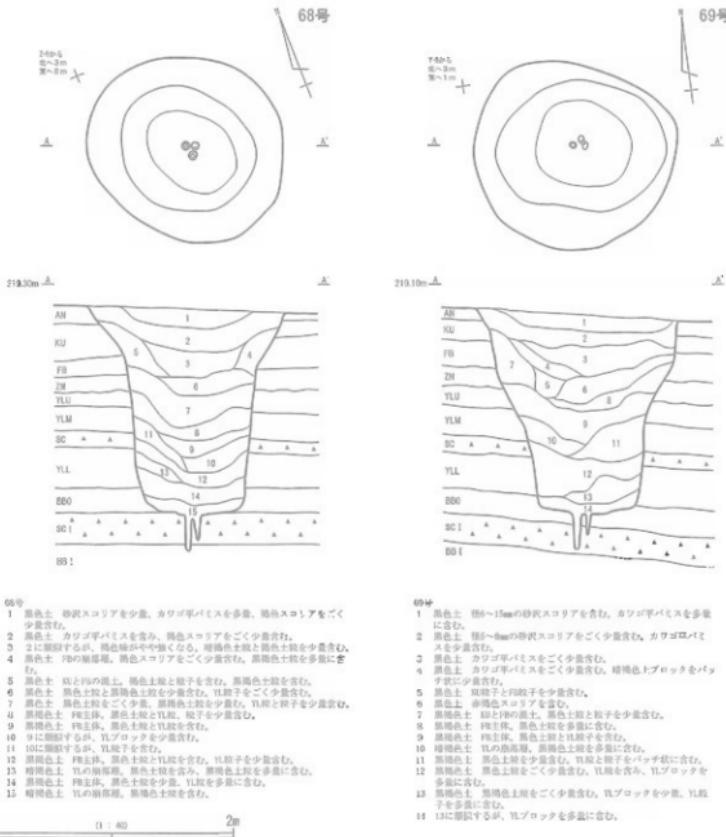
第125図 繩文時代 II群土坑分布図



第126図 繩文61号～63号土坑



第127図 繩文64号～67号土坑



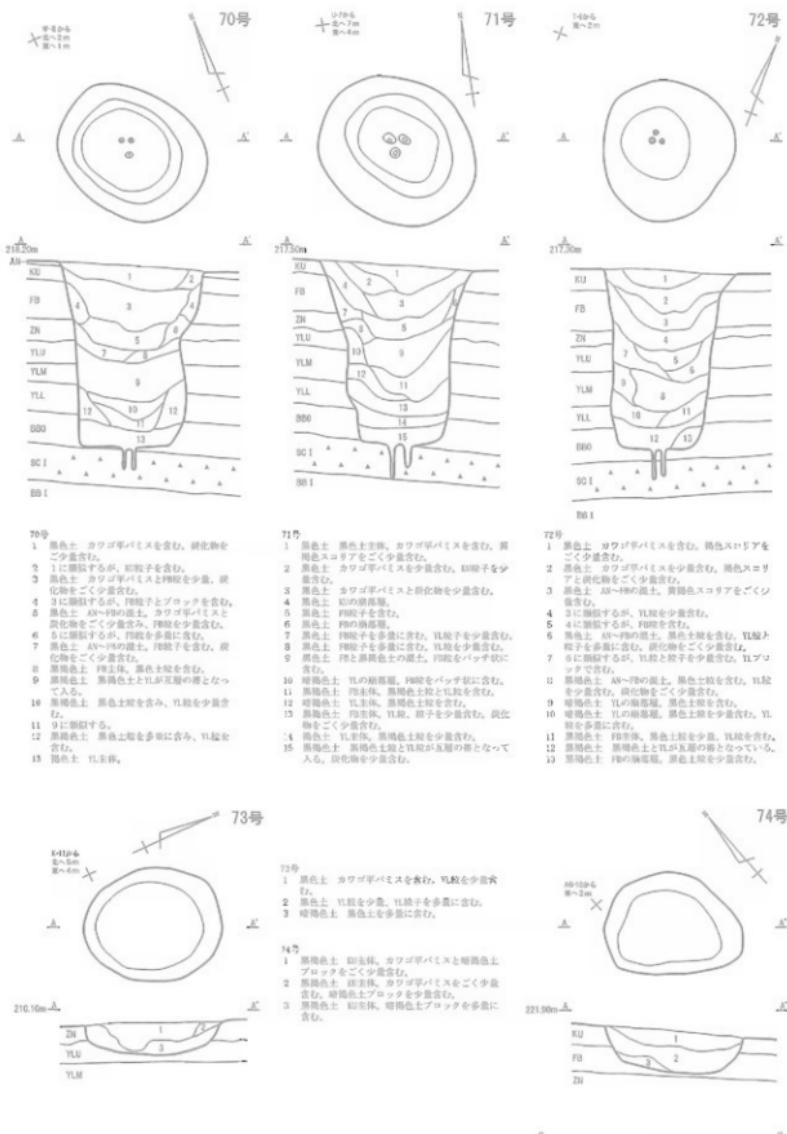
第128図 繩文68号・69号土坑

II群土坑概要 (61号~74号土坑)

KU下部もしくはFB上面で検出され、覆土がKUを主体とするものや、AN以上の新期スコリア等を含む土坑である。おおむね自然堆積を表している。平面形態が長方形を呈するものが7基、円形や不整形な円形を呈するものが7基ある。II群土坑のすべてに対して時期を限定することは困難であるが、検出層位と覆土に頼るならば、縄文時代の後半以降に構築されたものであると推測される。

II群-a類土坑 (61号~63号土坑)

開口部が長方形あるいは梢円形、底部の平面形態は長方形を呈する。平均規模は底部 $0.99m \times 0.51m$ 深さ $2.18m$ を測る。土坑の断面は箱型で、底部から開口部に向けて僅かに開きながら立ち上がる。61号・62号土坑の主軸方向は等高線に対し左へ傾いて構築され、63号土坑は平行して構築されている。また、61号土坑と62号土坑の間隔は $28.21m$ を測り、尾根から谷への緩斜面に配置されている。土坑の規



第129図 縄文70号～74号土坑

模と配置状況から陥穴状土坑と考えられよう。

II群-b類土坑 (64号～67土坑)

開口部及び底部の平面形態は長方形を呈する。平均規模は底部 $1.31m \times 0.47m$ 深さ $1.38m$ を測る。土坑の断面は箱形で壁は垂直に立ち上がる。土坑の主軸方向は等高線に対し左へ傾いて構築されている。64号土坑と65号土坑の間隔は $20.21m$ 、66号土坑と67号土坑の間隔は $21.65m$ を測り、それぞれ尾根から谷への緩斜面に配置されている。土坑の規模と配置状況から陥穴状土坑として考えられよう。底部から複数のピットが検出された。しかし、口径も小さく規則的に掘り込まれたものとは考えにくい為、逆茂木痕とするには疑わしい。

II群-c類土坑 (68号～72土坑)

開口部及び底部の平面形態は円形を呈する。平均規模は開口部 $1.42m \times 1.25m$ 底部 $0.73m \times 0.60m$ 深さ $1.55m$ を測る。土坑の断面は底部から垂直に立ち上がり、坑底より $90cm$ 付近からラッパ状に開いている。土坑と地形とのかかわりを見ると、調査区中央部の尾根から南西への斜面を縱断するように配置されている。68号土坑と69号土坑の間隔は $10.82m$ 、69号土坑と70号土坑の間隔は $23.52m$ 、70号土坑と71号土坑の間隔は $16.97m$ 、71号土坑と72号土坑の間隔は $19.75m$ を測る。底部からそれぞれ3個のピットが検出された。土坑の規模と配置関係から陥穴状土坑として考えられよう。

II群-d類土坑 (73号～74号土坑)

II群の中で浅めの土坑をd類としてまとめた。開口部及び底部の平面形態は、円形または不整形な円形を呈する。土坑の断面はU字形で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

第43表 II群土坑形態分類表

分類	土坑番号	開口部 長(m)×短(m)	底部 長(m)×短(m)	深さ(m)	底部の 形状	等高線に 対して	底面 ピット	長軸方位	遺物
II群	a類	61 62 63	1.62×1.08 1.23×0.70 2.20×1.60	0.92×0.45 0.80×0.50 1.25×0.58	2.30 2.13 2.10	長方形 長方形 長方形	左へ傾く 左へ傾く 平行する	— — —	N45° W N59° W N57° E
	b類	64 65 66 67	1.85×0.60 1.80×0.60 1.32×0.63 1.85×0.80	1.55×0.45 1.45×0.35 0.90×0.48 1.35×0.60	1.28 1.45 1.52 1.25	長方形 長方形 長方形 長方形	左へ傾く 左へ傾く 左へ傾く 左へ傾く	有 有 有 有	N28° W N72° W N64° W N73° W
	c類	68 69 70 71 72	1.65×1.50 1.65×1.50 1.25×1.03 1.35×1.17 1.18×1.05	0.80×0.60 0.80×0.70 0.75×0.63 0.70×0.55 0.60×0.50	1.65 1.83 1.53 1.47 1.47	円形 円形 円形 円形 円形	— — — — —	有 有 有 有 有	N27° W N67° W N37° W N49° W N16° W
	d類	73 74	1.13×0.93 1.14×0.83	0.88×0.72 0.84×0.58	0.27 0.39	円形 不整円形	— —	— —	N26° E N48° W

2 遺構外出土の土器

遺構外出土の土器は、縄文時代早期～中期を中心に、現地調査時に1,643点出土し、その中で接合したものと含めて168点を図示した。時期および型式を以下のように分類して報告する。

群	時期	類
第Ⅰ群	早期前葉～中葉	A 撫糸文土器
		B 押型文土器
第Ⅱ群	早期後葉	A 清水柳E類土器
		B 野島式土器
		C 鶴ヶ島台式土器
		D 茅山上層式土器
		E 打越式土器
		F 入海II式土器
		G 石山式土器
		H 尖底の縄文土器
		I 型式不明土器
第Ⅲ群	前期	A 木島田式土器
		B 上の坊式土器
		C 上の坊式並行上器
		D 諸職b式土器
		E 諸職式不明土器
		F 十三菩提式土器
		G 型式不明土器
第Ⅳ群	中期以降	A 藤内式土器
		B 井戸尻式土器
		C 加曾利E4式土器
		D 型式不明土器
第Ⅴ群	時期不明	A 縄文型式不明土器
		B 沈線文型式不明土器
		C 撫糸文型式不明土器
		D 無文型式不明土器

第Ⅰ群 早期前葉～中葉

〈A類 撫糸文土器〉(第138図1～4)

1～4は細めのRの撫糸を縱位に施しており、胎土には纖維が含まれる。同一個体と思われるものは調査区のほぼ中央付近より出土している。

〈B類 押型文土器〉(第138図5～8)

5は梢円押型文を横位に施しており、胎土には多量の石英・長石・輝石・雲母が含まれる。調査区北側、グリッドA-B-7より出土している。

6～8は梢円押型文を縱位に施しており、胎土には多量の白色粒子が含まれる。調査区南東部より出土している。

第二群 早期後葉

〈A類 清水柳E類土器〉(第138図9)

9は縦条体圧痕文が横位や斜位に施されている。胎土には纖維と多量の石英・長石が含まれる。調査区東側、グリッドR-15より出土している。

〈B類 野島式土器〉(第138図10・11)

内面に条痕による調整が観察され、胎土には纖維が含まれる。調査区北側、グリッドA E-II付近より出土している。

10は沈線で横方向に区画した中に、縱方向に短い沈線を施している。

11はやや幅広の沈線で区画し、その中を同じ太さの沈線で充填している。

〈C類 鵜ヶ島台式土器〉(第138図12～第139図18)

鵜ヶ島台式の特徴の一つである区画文の交差部分への竹管状工具による刺突が見られ、内外面に貝殻条痕による調整が施されている。調査区北側より出土しており、胎土、施文状況などから2個体に分かれた。

12～17は沈線で棒掛け状に幾何学的な区画文を描き、中を沈線で充填している。12は口唇に棒状工具による刻みが見られる。胎土には多量の白色粒子が含まれる。グリッドA B-10付近より密集して出土している。

18は4単位の波状口縁と推定され、口唇部の外面には棒状工具による刻みが一定間隔に施されている。細隆起線で幾何学的に区画し、沈線を充填している。胴部には段部が見られる。胎土には灰色～白色のデイサイト岩片が含まれる。グリッドA C-10付近より密集して出土している。

〈D類 茅山上層式〉(第139図19～23)

調査区中央部のグリッドX-9付近より密集して出土している。いずれも口縁部に屈曲が見られないため上層式とした。胎土には纖維が含まれ、内外面とも貝殻条痕による調整が施されている。

19～22は同一個体と思われ、波状口縁の器形が推測できる。

〈E類 打越式〉(第139図24～29)

調査区中央部東側、グリッドU-15付近よりまとまって出土している。

24～29は同一個体と思われ、貝殻条痕文の上に貝殻腹縁文や貝殻による刻みを施している。24・25は波状の口縁部で、口縁と平行に隆帯を貼付し、口唇部と隆帯上に貝殻による刻みを施し、隆帯の下位には斜位に貝殻条痕文が施されている。26～28は左右から斜走する貝殻条痕文の下に貝殻腹縁文が施されている。29の内面には貝殻条痕による調整がはっきりと残っている。

〈F類 入海II式〉(第140図30、第141図31)

調査区北側よりまとめて出土している。接合の結果2個体に分かれ、それぞれを復元した。

30は、口径が約25cmで、口縁は5単位の緩やかな波状を呈していると推定される。口唇部を肥厚させ籠状工具で刻みが施されている。口縁部上位にも籠状工具による斜めの連続刺突列が2条刻まれている。その下位には、2条の蛇行した隆帯が貼付され、隆帯上と同じ籠状工具による刻みが密に施されている。内外面とも条痕の器面調整が見られ、内面には横位の条痕が顕著に見られる。器厚は6mmと比較的薄く、胎土には纖維と多量の石英・長石と雲母が含まれており、器面は内外面ともくすんだ橙色(5YR6/6)を呈している。いわゆる東海系の特色を持つ土器である。グリッドA E-II・12付近よりまとめて出土している。

31は、口径が約36cmと30に比べて大きく、器厚も11mmと厚い。口唇には指または棒状の工具による大きめの刻みが施されている。口縁部には3～4条の蛇行した隆帯が貼付され、その上を籠状工具による斜めの連続刺突が密に施されている。器面には条痕による調整が見られ、内面には横位の条痕が見られる。胎土には石英・長石等が含まれるもの、雲母・纖維が含まれない点などから、在地の土を用いて東海西部の土器を模倣作成した可能性がある。グリッドAD・AE-11付近より密集して出土している。

〈G類 石山式〉(第142図32～35)

調査区北側より出土している。

32は口縁部で、口唇に刻みが密に施され、外面には籠状工具による3条の連続刺突列が施されており、器面には指頭圧痕が見られる。胎土には微量の纖維と多量の白色粒子が含まれる。これらは入海II式の隆帯がなくなったタイプと推察される。グリッドAA-10付近より出土している。

33は薄手の貝殻腹縁を使った爪形の連続刺突列が見られる。胎土には纖維が含まれる。グリッドAD-11・I2付近より密集して出土している。

34・35は口縁部で、爪形の連続刺突列が2条施されている。刺突の中には肋が見られ、薄手の貝殻の腹縁で施文していることがわかる。胎土には纖維が含まれる。グリッドAD-11・I2よりまとまって出土している。

〈H類 尖底の繩文土器〉(第142図36)

36はグリッドAD-11・I2よりまとめて出土し、接合により1個体となった。外面に原体Lの無節繩文を横位に施文しており、内面には条痕による調整が見られる。胎土には纖維と多量の白色粒子が含まれ、器形が尖底であることからII群とした。

〈I類 型式不明土器〉(第143図37～46)

早期後葉に属すると考えられるものの、型式が不明な土器をまとめた。

37・38は内外面に調整が見られ、胎土には纖維と多量の石英・長石が含まれる。調査区中央部より出土している。

39は内面に貝殻条痕による調整が施されている。底部に近い胸部で、丸底か尖底の器形と推測される。胎土には纖維と多量の白色粒子が含まれる。調査区南側、グリッドK-11より密集して出土している。

40・41は外面に貝殻条痕による調整が見られる。胎土には纖維が含まれる。

42・43は口縁部に先の尖った工具による連続した刺突列が2条施されている。口唇には同じ工具の横を使ったと思われる刻みが連続して施文されており、42は刻みが途中から逆方向になっている。43には補修孔があり横方向に紐ずれの痕が見られる。胎土には微量の纖維が含まれる。調査区北東部より出土している。

44～46は原体R Lの単節繩文を横位に施文しており、緩やかな波状口縁を呈している。纖維は確認されないものの30の入海II式土器の胎土と近似する。グリッドAE-I2よりまとめて出土している。

第III群 前期

〈A類 木島III式土器〉(第144図47～67)

1・2号住居跡を中心とした調査区のほぼ中央部より出土しており、住居跡覆土からも出土している。これらの土器は薄手で指頭圧痕が残されていること、器面に細線文が施されていること、特徴的な刺突が見られることなどから木島式とした。特徴的な刺突としては、口唇部に竹管状工具による刺突を施したもの、輪積みの接合部を段状に残し、その上に竹管状工具または爪によって連続的な刺突を加えたものなどが挙げられる。以下に個体ごとの特徴を記載する。

47は口唇部に半截した竹管状工具の内側を横に使って刺突を施している。48・49は輪積みの接合部を段状に残し、段部に半截した細めの竹管状工具を寝かせて横位に刺突している。外面には細線文が横位に施されている。

50も口唇部に刺突を施し、なおかつ輪積みの接合部を段状に残し、段部に竹管状工具で施文している。池谷信之氏の分類ではE類に属する（池谷2006）。細線文は施されていない。同一個体と思われるものはI・2号住居覆土からも出土している。

51～55は輪積み接合部を段状に残し、段部に半截した竹管状工具で爪形に施文している。外面には斜行する細線文が施されている。同一個体と思われるものは2号住居覆土からも出土している。

56～58は輪積み接合部の段部に先端を尖らせた半截竹管で横位に刺突、さらに上部にも一部刺突を縱位に施している。内外面にはV字状に細線文が施されている。

59は輪積み接合部の段部に先端を尖らせた半截竹管で横位に刺突、外面にはV字状に細線文が施されている。幅が同じことから細線文も刺突と同じ工具を使用していると思われる。

60は爪による刺突を器面對して斜めに加え、浮いた粘土を刺突方向に起こしながら押し付けるよう施文している。61は横位の細線文が施されている。同一個体と思われるものはI・2号住居覆土からも出土している。

62はV字状の細線文が横位に施されている。

63はV字状の細線文が縦位に施されている。

64～66はV字状の細線文が縦位に施されている。64には頸部と思われる括れが見られる。

67はV字状の細線文が横位に施されている。

〈B類 上の坊式土器〉(第145図68～第146図86)

調査区北側および中央部東端より出土している。施文の特徴としては、棒状もしくは箆状工具の先端を使い、上から下へ引くように刺突するものや、角頭状工具の先端で刺突を行うもの、刺突を綾衫状に施すものなどがある。棒状工具を使用するものは、その施文方法から刺突文の形状が下側が膨らむ水滴形となり、この型式の特徴の一つとなっている。

68は口縁部に爪形の連続刺突列を2条配し、間隔を空け胴部に棒状工具による連続刺突列を1条配しているもので、口唇部には若干の外反が見られ、器形は胴部の膨らみから砲弾形を想像できる。補修孔が4か所見られ、紐ずれらしき痕も確認できる。胎土に多量の白色粒子が含まれる。グリッドA E-9より密集して出土している。

69～72は太めの棒状もしくは箆状工具で口縁部に3条の連続刺突列を配している。刺突の右側が盛り上がりっている様子が部分的に見られる。胎土には多量の白色粒子が含まれる。グリッドD A A-10より密集して出土している。

73～75は波状口縁で、口縁部に3条の棒状工具による連続刺突列が施されている、73の中央の破片には口縁から垂下するように粘土を貼り付けた部分が見られる。75は口縁部を肥厚させ内湾させており、垂下隆脊が見られることから、同一個体の口縁波頭部ではないかと推察される。調査区北西部より散雜に出土している。

76～79は口縁部下の輪積みの接合部を段状に残し、その上から棒状工具による連続刺突列を施したものである。76～78は口縁部で段部までに3条の連続した刺突列が施されている。段上の刺突は上の2条の刺突に比べて密であり、装飾と接合のための圧着を兼ねていたと推察できる。79は上部剥れに刺突の痕が見られることから、段部の下位部分であると考えられる。調査区北西部より散雜に出土している。

80・81は口縁部と思われ、3条の連続刺突列が密に施されている。口縁部下には粘土を盛り上げた屈曲部が見られ、その上に棒状工具の先端で連続刺突を施している。内面には貝殻条痕による調整が施さ

れている。胎土には多量の輝石が含まれる。グリッドA E-9付近より出土している。

82は棒状工具による斜めの刺突が綾杉状に施されている。胎土には多量の石英・長石が含まれる。グリッドFAD・AE-9より出土している。

83～85も刺突が綾杉状に施されている。83には下側に段部らしき屈曲が見られ、補修孔がある。グリッドAD-II付近より出土している。

86は角頭状工具の先端で連続刺突を施したものである。胎土には多量の石英・長石が含まれる。グリッドN-14付近より密集して出土している。

〈C類 上の坊式並行土器〉(第146図87・88)

87・88は上の坊式と同様に、棒状工具による上から下へ引くような連続刺突文の土器だが、施文配置が不定形なものである。胎土も上の坊式と似通っており、分布も同じ範囲であるため上の坊式に並行する土器とした。胎土には多量の白色粒子が含まれる。グリッドAE-9よりまとまって出土している。

〈D類 諸磯b式土器〉(第147図92、第146図89～91)

92は接合・復元の結果、口縁がかなり開いた形の深鉢であると推測できる。一部の破片には、地文に原体RLの縄文を施したような様子が見受けられる。横位に2条貼り付けられた浮線文の上位には、3条の斜めに交差させた浮線と対弧状の浮線が見られる。また、2条の浮線文の下位には梯子状の浮線が横位に施されている。いずれの浮線にも斜めの刻みが施されている。胎土には多量の雲母と白色粒子が含まれる。グリッドN-IIよりまとめて出土している。

89～91は諸磯b式に見られる木の葉形の文様がわずかに見られる。89は口縁部で、口唇に刻みを入れる部分と、粘土を貼り付け波状口縁（または突起か？）となる部分が推測される。底部近くまで文様が入っていることから諸磯b式の終わり頃と推察される。胎土には多量の石英・長石・白色粒子が含まれる。グリッドL-I2付近より出土している。

〈E類 諸磯式不明土器〉(第147図93～97)

諸磯式と比定されるが、破片が小さく、数も少ないため型式を断定できないものを諸磯式不明土器として一括した。

93～96は半截竹管による平行沈線を斜めに組み合わせて施文している。93・94は内湾した口縁部と思われ、諸磯式の浅鉢形土器と推察される。調査区南東部より出土している。

97も内湾した口縁部で、半截竹管による沈線で施文されている。口唇部外面に先の尖った工具による連続刺突が見られる。胎土には多量の石英・長石・輝石・白色粒子・雲母が含まれる。調査区南東部、グリッドN-I3より出土している。

〈F類 十三菩提式土器〉(第148図101・102)

調査区南東部より出土している。出土範囲の中央には表土面より2m程度低い位置に市道が設置されていたため、縄文層はすでに無くなっている状態であり、この市道部分にも同型式の土器片があった可能性は高い。接合の結果、口縁～頸部～胴部の上の部位と、胴部～底部にかけての下の部位の二つにまとめた。二つの部位群は施文状況、胎土などから同一個体と推察されるものの、上部と下部が接合する部分は見いだせず、同一個体という確証は得られなかった。さらに、包含層からの比較的散らばった出土である点、同一個体とするには前例の無い大きさ（推定器高65cm）である点、また器形にも類例が見られないという点から、上下別個体として報告することとなった。十三菩提式土器の中でも桜沢系「集合沈線を主に使った文様帶を數段積み重ねる系統で、レンズ状文様が目立つ」（小島1989）に比定される土器である。

101は口縁の径約39cmの平線で、口唇を肥厚させ、三角形の削り取りを連続的に施すことにより鋸齒状の文様としている。頸部までは半截竹管による集合沈線で三角形に区画した中を削り取り、その下位

の段部にかけては、集合沈線で区画した横レンズ形と三角形の中を削り取っている。

102は胸部から底部にかけてで、底部付近の径が約14cmである。上位から一段目の段部にかけて、半截竹管による集合沈線で三角形を互い違いに型取り、その中を削り取っている。その下位には、やはり沈線により区画された縦レンズ形の削り取りが見られ、円形の粘土粒によるボタン状貼付が1か所だけ見られる。これより下位の底部にかけても、沈線による縦レンズ形の施文が見られるが、削り取りは行われていない。

〈Ⅲ群G類 型式不明土器〉(第147図98～100、第149図103～第150図120)

ここでは、施文方法、胎土、分布状況などから前期の土器と推察されるものの、型式を特定できない土器を一括した。

98～100は原体RとLの縄文を上下段で交互に横位に施文し、結果として羽状に見える部分もある。また、Rの施文には原体を強く撲った時にできる瘤状のループと、原体に結び目を作った時にできるS字状のループと推察される痕が部分的に観察される。98は口縁部で、外側に聞くように調整した結果、内面に明瞭な稜が見える。胎土には多量の石英・長石・白色粒子が含まれる。グリッドAD・AE-12付近より出土している。

103は、底部を除き復元したものである。口唇と胸部に原体Lの縄文を横位に施している。補修孔が2か所確認できる。胎土には纖維と多量の鉄石・白色粒子が含まれる。グリッドAE-12より密集して出土している。

104は口縁部で、原体LRの縄文を横位に施し、口唇にも同じ原体で施文を行っている。胎土には多量の石英・長石が含まれる。グリッドAD-12より出土している。

105・106は半截竹管による沈線で連続した三角形を形作っている。調査区南東部より出土している。

107～109は口縁に鋸歯状の隆帯を貼り付けている。110～114は同じ個体の胸部と考えられ、半截竹管による沈線が施されている。115はこれらの底部であると考えられる。胎土には多量の石英・長石・雲母が含まれる。調査区南東部より出土している。

116は撲糸文で、Rの撲糸を軸に縦に巻きつけた原体で横位に施文している。底部の端部に指か棒状工具を使って凹みを施している。胎土には多量の石英・長石・白色粒子が含まれる。調査区南東部より散雜に出土している。

117～119は波状の口縁部で、口唇に刻みを入れ、口縁部に尖った棒状工具で数条の連続刺突列を施している。胎土には多量の石英・長石・白色粒子が含まれる。グリッドV-13より密集して出土している。

120は口縁部の破片で、先の細い棒状工具で刺突している。グリッドX-12より出土している。

第IV群 中期以降

〈A類 藤内式土器〉(第150図121～130)

中期中葉の土器と考えられるものである。

121～130はいずれも井戸尻編年による「藤内期」に比定されると考えられ、調査区中央部の東端よりまとまって出土している。

121・122は隆帯脇を竹管の外皮を用いた幅広の連続押引文（キャタピラ文）で押さえ、その外側に波状沈線を並走させている。隆帶上には棒状工具による刻みが見られる。

123は、縦方向に貼り付けた隆帯が剥がれ落ちているが、残存部より、断面三角形の隆帶上に矢羽状に刺突が施されている様子が観察できる。内湾した形状から口縁部と考えられ、隆帶による弧状のモチーフが描かれる。

124～130は同一個体と思われ、124～127は脇を連続した爪形文で押さえた隆帶で三角形の区画文を展

開すると推察され、区画内には棒状工具による沈線文が充填される。128は口縁部と思われ、波状沈線に並走した隆帯を押さえた爪形文がわずかに見られる。

〈B類 井戸尻式土器〉(第150図131~134)

131~134は器形や胎土から「井戸尻期」に比定されると考えられる。調査区中央部西側、グリッドT-7より密集して出土している。131は折返しの口縁部で無文である。132~134は原体R Lの縄文を横位に施文している。132は渦巻状の貼付文が施された装飾突帯の一部を残す口縁から胴部上位で、上へ向かって広がる筒形を呈す。134は底に向かって若干膨らむ底部である。胎土に多量の輝石を含む。

〈C類 加曾利E 4式土器〉(第151図135~141)

135~141は頸部に筒形の橋状把手を縦に配した壺形土器である。調査区北側より分散して出土している。

135は口縁と平行に微隆起帯が施され、頸部から胴部にかけてはJ字状の区画をする様に同じような微隆起帯が施されている。136は器面に赤色顔料の残存が見られ、J字状の曲線部と縦方向に数条の微隆起帯が施されている。141は丸みを帯びた胴部最下位に疑似高台状の底部を貼り付けたものである。胎土には多量の石英・長石が含まれ、色調はいずれも鈍い黄橙色で、器面は磨き調整がなされている。

〈D類 型式不明土器〉(第151図142~第152図156)

ここでは施文方法、胎土、分布状況などから中期～後期の土器と推察されるものの、型式を特定できない土器を一括した。

142は釣手土器と考えられる。内面全体に煤が付着しており、口縁部には釣手と思われる取手の剥がれた痕が観察される。外側に屈曲する口縁部に、棒状工具による平行沈線と、渦巻き状の沈線が施されている。胎土には多量の石英・長石・白色粒子が含まれる。調査区ほぼ中央、グリッドT-10より出土している。釣手土器は中期中葉から後期まで見られ、中部～関東地方に分布するが静岡県の出土例は多くない。

143は無文で、壺形土器の口縁部である。補修孔らしき孔が見られ、胎土には砂粒が含まれ、器厚が1cmと厚めである。グリッドR-12よりまとめて出土している。

144・145は無文で、内外面とも磨き調整が施されている。144は口縁部で内側に稜が見られる。145は底部で、後期の浅鉢と考えられる。グリッドS-15付近より密集して出土している。

146~150は附加条縄文が施された土器で、LRの縄に0段の条を右巻きに巻いた原体で縦位に施文している。器厚が厚く、脆い。精製土器を伴って出土してはいないが関東地方では後期に見られる施文である。調査区中央部北側より散在して出土している。

151~154は原体LRの縄文を縦位に施文している。口縁が若干外側に開き、胴部が膨らむ深鉢と推察される。グリッドZ-8より密集して出土している。

155・156は絞条体による圧痕文の可能性があるが、摩滅が著しくはつきりしない。内面の磨きに帶状の痕が見られることから後期の粗製土器と考えられる。調査区南東部より散在して出土している。

第V群 型式および時期不明の土器

〈A類 繩文型式不明土器〉(第153図157~162)

157・158は原体RLの縄文を異方向に施文しており、口縁部は波状を呈す。158は底の角に調整した部分が見られ、底部へ接合したと思われる輪積み痕が観察される。内面には条痕による調整が見られる。グリッドL-12より密集して出土している。

159は原体LRの縄文を横位に施文している。胎土には多量の白色粒子が含まれる。調査区中央部から出土している。

160・161は胸部から底部にかけての破片である。原体R Lの縄文を横位または斜位に施している。161の下位には底の端部が見える。胎土には多量の石英・長石・雲母が含まれる。グリッドP-14・15より密集して出土している。

162は原体R Lの縄文を横位に施している。グリッドR-5よりまとまって出土している。

〈B類 沈線文型式不明土器〉(第153図163)

163は外面を磨いたあとで棒状工具により沈線を施している。中期～後期のものと推察される。グリッドL-13より出土している。

〈C類 撫糸文型式不明土器〉(第153図164)

164はrの撫糸の原体を短く乱れて施している。グリッドM-14より出土している。

〈D類 無文型式不明土器〉(第153図165～168)

無文だが、口縁部、底部で特徴的なものをここに一括した。

165は口縁部で、箆状工具の先で口唇に刻みを施している。指頭圧痕による器面調整が見られる。グリッドA D・A E-12よりまとめて出土している。

166は口縁部に連帯を巡らせ、調整で段部を消している。内外面、特に外面には横向方向に調整した痕が見られる。胎土には多量の輝石が含まれる。グリッドP-13より出土している。

167は外側へ開く口縁部である。胎土には砂粒が含まれる。グリッドA D-8より密集して出土した。

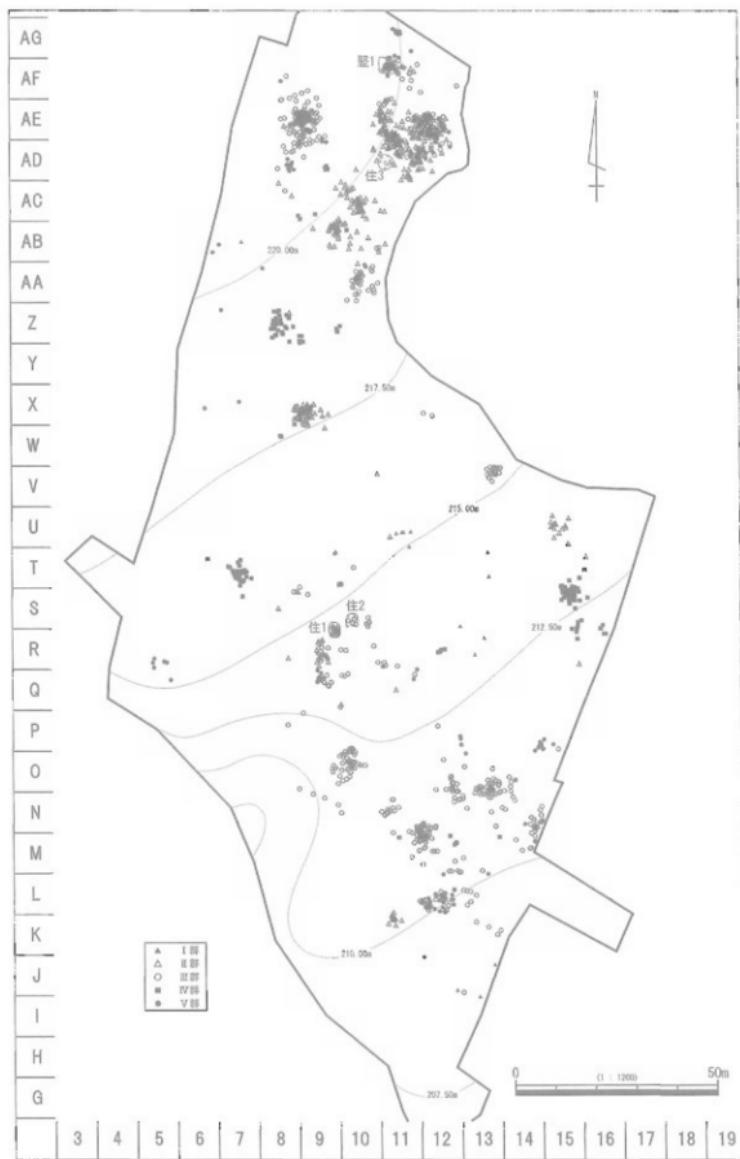
168は器厚がかなり厚く、大形の土器の底部と推察される。調査区中央部西側より出土している。

第44表 土器観察表

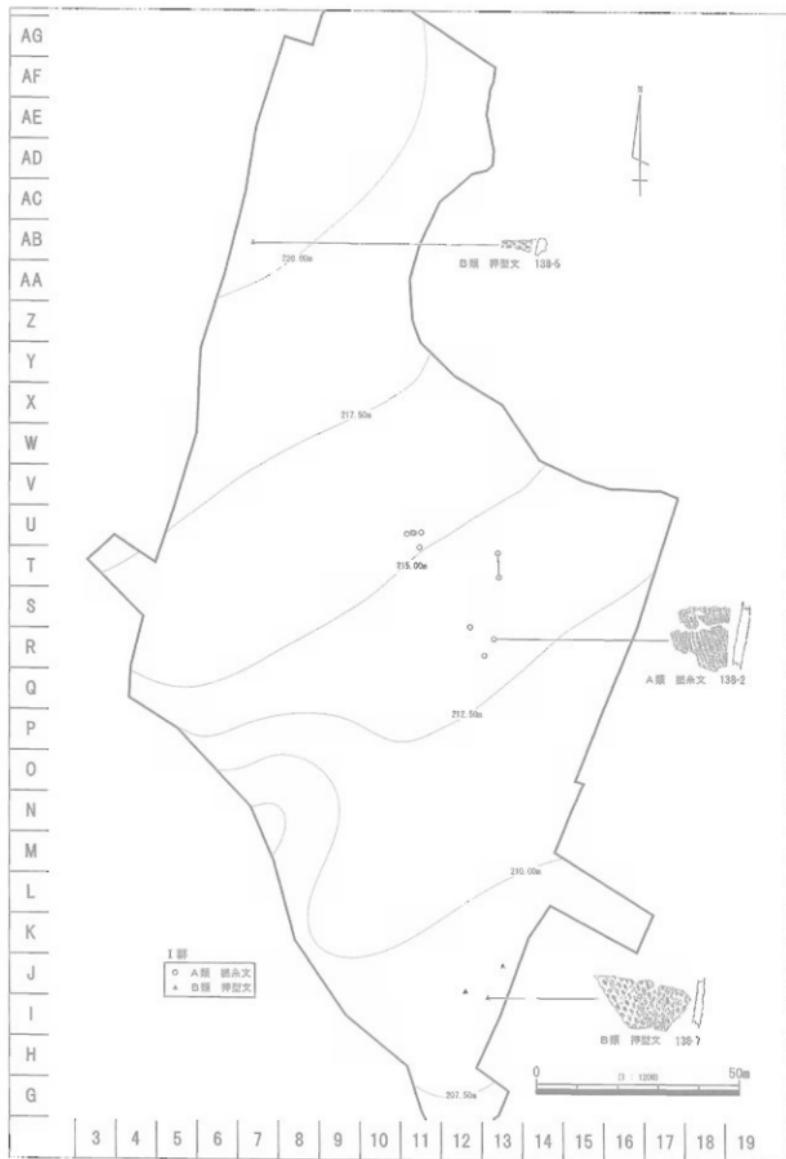
探査番号	分類	残存部位	外面色調 内面色調	胎土	識別	文様・調査	焼成
第138回	1～4	第Ⅰ群A類 ～	縄部 5TR6/6 5TR6/5	脚石、白色粒子。少量の石英・長石・黒色 粒子	有	外面にrの撫糸を模倣に施す	やや 良
	5	第Ⅰ群B類 ～	縄部 5TR5/5 5TR5/5	多量の石英・長石・輝石・雲母。黑色粒子	無	外面に指内押型を模倣に施す	やや 良
	6～8	第Ⅰ群B類 ～	縄部 10TR6/4 10TR6/4	多量の白色粒子。石英・長石・脚石・黒色 粒子	無	外面に指内押型を模倣に施す	やや 良
	9	第Ⅱ群A類 ～	縄部 7. 5TR6/8 7. 5TR6/8	多量の石英・長石・脚石、白色粒子。少量 の赤色粒子	有	外面に指内押型を模倣に施す	やや 良
	10	第Ⅱ群B類 ～	縄部 5TR6/6 5TR6/5	石英・長石・脚石、白色粒子。赤色粒子、 黑色粒子	有	背面に斑端、内面に朱赤	やや 良
	11	第Ⅲ群B類 ～	縄部 3TR6/5 3TR6/5	脚石、白色粒子。赤色粒子、少量の黑色 粒子	有	背面に斑端、内面に朱赤	やや 良
	12～17	第Ⅱ群C類 ～	U縄部 5TR6/6 5TR6/5	多量の白色粒子。石英・長石・脚石・黒色 粒子。少量の白色粒子	有	口唇に刻み、外面に比較・網目、外側に具體 朱赤	やや 良
	18	第Ⅱ群C類 ～	U縄部 5TR6/6 5TR6/5	灰色・白色のダイヤモンド切欠き、赤色粒子、 黑色粒子	有	状のU縫、口唇に刻み、外側に網目模様で直角 に仕切る文、斜め文、内面に具體朱赤	やや 良
	19～22	第Ⅱ群D類 ～	U縄部 5TR6/6 5TR6/6	多量の白色粒子。脚石、赤色粒子、黑色 粒子	有	状のU縫、内面に具體朱赤	やや 良
	23	第Ⅱ群D類 ～	5TR6/6 5TR6/5	脚石、白色粒子、赤色粒子、黑色粒子	有	内面に具體朱赤	やや 不良
第139回	24～29	第Ⅴ群E類 ～	5TR6/6 5TR6/5	脚石、白色粒子、赤色粒子、黑色粒子	有	状のU縫、口唇に刻み、外側に具體朱赤	良
	30	第Ⅱ群F類 ～	5TR6/6 5TR6/5	多量の石英・長石・脚石、雲母、白色粒子、 黑色粒子	有	状のU縫、口唇に刻み、口縁部に2条の刻み、 直下には赤の剥み入り蛇行階層	良
	31	第Ⅱ群F類 ～	5TR6/6 5TR6/5	多量の石英・長石・脚石、白色粒子	無	口唇に刻み、口縁部に3条～7条の剥み入り蛇 行階層	良
第140回	32	第Ⅱ群G類 ～	5TR6/6 5TR6/5	多量の白色粒子、石英・長石・脚石・赤色 粒子	無	口唇に刻み、外側に3条の剥み入り蛇行階層、 指頭圧痕	良
	33	第Ⅱ群G類 ～	5TR6/4 5TR6/5	石英・長石、白色粒子、脚石	有	外面に具體復元で通説削夷	やや 良
	34～35	第Ⅱ群G類 ～	5TR6/6 5TR6/5	石英・長石、白色粒子、脚石、黒色 粒子	有	外面に具體復元で2条の通説削夷	やや 良
	36	第Ⅱ群H類 ～	5TR6/6 5TR6/5	多量の白色粒子、石英・長石・脚石、赤色 粒子	有	外面にしの開文を模倣に施す、尖底	やや 良
第141回	37～38	第Ⅱ群I類 ～	5TR6/4 5TR6/4	多量の白色粒子、赤色粒子	有	外側に朱赤	やや 不良
	39	第Ⅱ群I類 ～	5TR6/6 5TR6/5	多量の白色粒子、石英・長石・脚石、白色 粒子。少量の赤色粒子	有	内面に具體朱赤	やや 良
	40～41	第Ⅱ群J類 ～	5TR6/4 5TR6/2	脚石、白色粒子、黒色粒子、少量の赤色 粒子	有	外側に具體朱赤	やや 良

擇団番号	分類	残存 部位	外面部 内面部	胎 土	埴 輪	文 様・ 調 整	進成
第143回	42~43	第Ⅱ群A類	口縁部	7.5V6/6 7.4S7/6	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、黑色 粒子	無	口唇に開み、口部に連続例突、補修孔あり 良
	44~46	第Ⅱ群A類	口縁部	7.5V6/6 7.4S7/6	多量の石英・長石・輝石、雲母、白色粒子	無	波状口縁、外面部にR.L.の調文を横位に施文 やや 良
第144回	47~49	第Ⅲ群A類	口縁部 ・胴部	10V7/4 10V7/4	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子、 褐色粒子	無	口唇部外面部と腹部に網目、外面部に網織文、接觸 良好
	50	第Ⅲ群A類	口縁部	10V7/4 10V7/4	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	口唇部外面部と腹部に例突、指部圧痕 やや 良
	51~55	第Ⅲ群A類	口縁部 ・胴部	10V7/3 10V7/3	石英・長石、雲母、白色粒子、少量の輝石	無	外面部に錐鍵文、鋸部に例突、指部圧痕 やや 良
	56~58	第Ⅲ群A類	胴部	10V7/1 10V7/1	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子、黑色 粒子	無	腹部及び外面部に網目、外面部に網織文、接觸 良好
	59	第Ⅲ群A類	胴部	10V6/4 10V6/4	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	外面部に錐鍵文、鋸部に例突、指部圧痕 やや 良
第145回	60~61	第Ⅲ群A類	胴部	10V7/8 10V7/7	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	外面部に錐鍵形の軋突(人の手)・錐鍵文、 指部圧痕
	62	第Ⅲ群A類	胴部	10V6/5 10V7/4	石英・長石、雲母、白色粒子、少量の輝石	無	外面部に錐鍵文、接觸圧痕 やや 良
	63	第Ⅲ群A類	胴部	2.3V8/3 2.3V7/3	石英・長石、雲母、白色粒子、少量 の輝石	無	外面部に錐鍵文、接觸圧痕 やや 良
	64~66	第Ⅲ群A類	胴部	10V5/3 10V5/4	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	外面部に錐鍵文、接觸圧痕 やや 良
	67	第Ⅲ群A類	胴部	2.3V7/4 2.3V7/3	石英・長石、雲母、白色粒子、少量 の輝石	無	外面部に錐鍵文、接觸圧痕 やや 良
第146回	68	第Ⅲ群B類	口縁部 ・胴部	7.5V7/6 7.5V3/6	多量の白色粒子、石英・長石、輝石、雲母、 赤色粒子	無	外面部は1段筋に3条の連続例突、胸部に1つの 連続例突、補修孔あり 良
	69~72	第Ⅲ群B類	口縁部	7.5V6/4 7.5V6/4	多量の白色粒子、石英・長石、輝石、赤色 粒子	無	外面部に3条の連続例突 やや 不良
	73~75	第Ⅲ群B類	口縁部	7.5V6/4 7.5V6/4	多量の白色粒子、石英・長石、輝石、黑色 粒子	無	波状口縁、外面部に3条の連続例突、垂下階層 良
	76~79	第Ⅲ群B類	口縁部 ・胴部	10V8/2 10V8/2	石英・長石、輝石、白色粒子	無	外面部に3条の連続例突 良
	80~81	第Ⅲ群B類	口縁部	SYR4/4 SYR5/6	多量の輝石、石英・長石、白色粒子、赤色 粒子	無	外面部に3条の連続例突、陰部に1条の例突、内面部 に貝殻発痕 良
第147回	82	第Ⅲ群B類	口縁部	7.5V5/4 7.5V5/4	多量の石英・長石、輝石、白色粒子	無	外面部に錐形状の例突文 良
	83~85	第Ⅲ群B類	口縁部	7.2V5/2 7.2V5/2	石英・長石、輝石、白色粒子、赤色粒子	無	外面部に錐形状の例突文 良
	86	第Ⅲ群B類	胴部	7.5V6/6 7.5V6/6	多量の石英・長石、輝石、白色粒子	無	外面部に丸頭状工具による連続例突 やや 不良
	87~89	第Ⅲ群C類	胴部	7.5V5/6 7.5V5/3	多量の白色粒子、石英・長石、輝石 ・赤色粒子	無	外面部に錐形例突 やや 良
	92	第Ⅲ群D類	胴部	7.5V5/4 7.5V5/4	多量の黑色系・白色粒子、石英・長石、 輝石、赤色粒子	無	外面部に斜面入り浮雕文、地面上にR.L.の調文 良
第148回	89~91	第Ⅲ群D類	口縁部 ・胴部 ・底部	10V7/4 10V7/4	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、雲母、黑 色粒子	無	口唇に開み、外面部に沈透、平底 やや 良
	93~96	第Ⅲ群D類	口縁部 ・胴部	7.5Y5/6 7.5Y5/6	石英・長石、輝石、白色粒子、黑色粒子、少量 の褐色粒子	無	口縁部は内側すら、外面部に沈透 良
第149回	97	第Ⅲ群E類	口縁部	7.5V5/4 7.5V5/4	多量の石英・長石・輝石・白色粒子、雲母、赤 色粒子	無	口縁部は内側すら、外面部に沈透・連続例突 やや 良
	101	第Ⅲ群F類	口縁部 ・胴部	SYR5/4 SYR5/5	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	コ縁に細密状文を施文、半縦竹管による集合比摺 で三角形やレンズ形に延長し、中を削りぬけ 良
	102	第Ⅲ群F類	胴部	SYR6/4 SYR5/2	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	半縦竹管による集合比摺で三角形やレンズ形の 凹印の跡(裏蓋付近は形がわかれ)、一箇所ボタン 式取扱部材 良
第150回	98~100	第Ⅲ群G類	口縁部 ・胴部	SYP4/3 SYP4/3	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、赤色 粒子、黑色粒子、少量の雲母	無	外面部にR.L.として別状調文(筋線、ループあり) 良
	103	第Ⅲ群G類	口縁部 ・胴部	7.5V7/5 7.5V7/4	多量の輝石、白色粒子、赤色粒子、石英・長石	有	口唇と外面部にR.L.の調文を横位に施文、補修孔み やや 不良
第151回	104	第Ⅲ群G類	口縁部	7.5V8/4 7.5V8/5	多量の輝石、白色粒子、赤色粒子、少量の輝石、 白色粒子	無	口唇と外面部にR.L.の調文を横位に施文 良
	105~106	第Ⅲ群G類	胴部	7.5V8/5 7.5V8/6	白色粒子、赤色粒子、少量の輝石、白色粒子	無	外面部に沈透 やや 良
	107~115	第Ⅲ群G類	-胴部 ・胴部 ・底部	7.5V8/6 7.5V8/5	多量の石英・長石・輝石、雲母、白色粒子	無	口縁部に粗面状文、外面部に沈透、平底 やや 良
第152回	116	第Ⅲ群G類	底部	10V5/3 10V5/3	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、赤色 粒子、少量の雲母	無	外面部にR.L.の調文を横位に施文、底部に開み、平底 やや 良

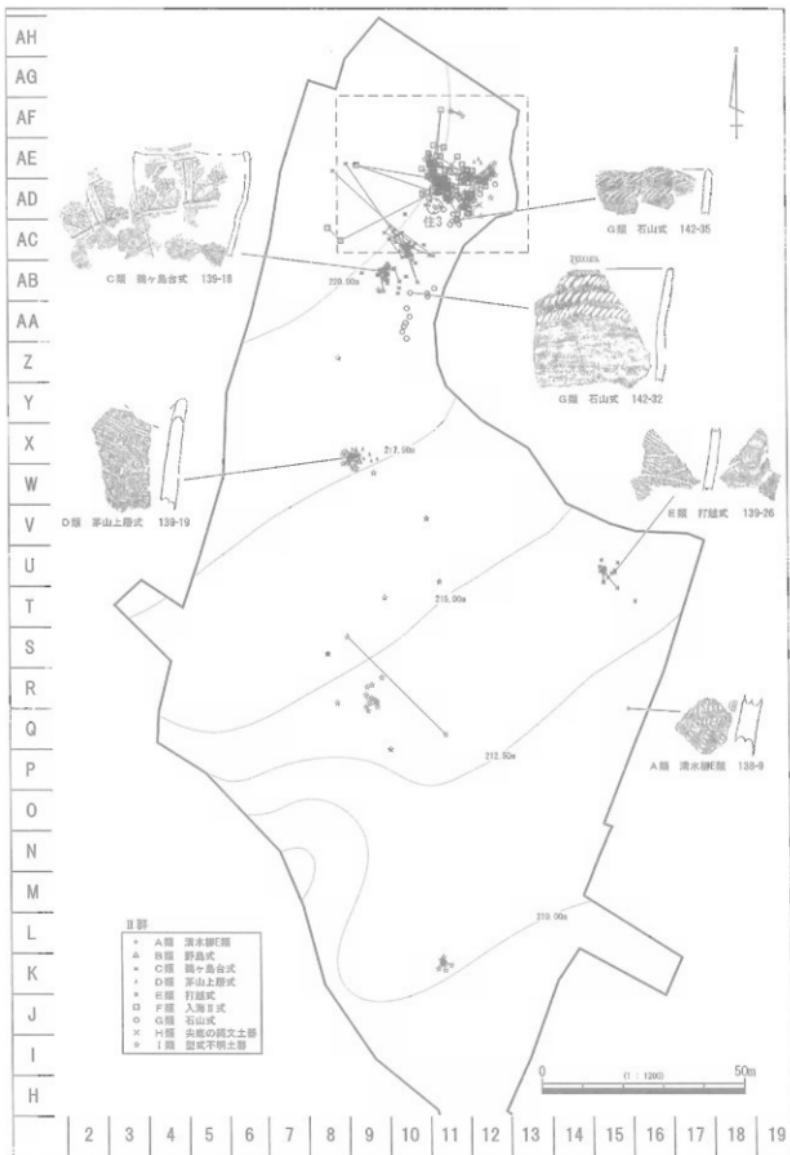
持留番号	分類	残存部位	外表面 内面裏	粉土	識別	文様・調査	焼成
第150回	117~119	第Ⅲ群G類	I1脚部 10YR8/4	多量の石英・長石・白色粒子、輝石	無	波状の縞、口唇に刻み、外面上に網状	良
	120	第Ⅲ群G類	I2脚部 7.5YR8/8 7.5YR7/6	石英・長石、輝石、白色粒子。少量の赤色粒子	無	外面上に刻夷	良
	121-122	第IV群A類	頭部 7.5YR17/6 7.5YR17/6	赤茶・長石、輝石、白色粒子、少量の赤色粒子	無	外面上は粗粒黏土をキャラビラス、板状結構、隆起等に、やや良	やや良
	123	第IV群A類	脚部 10YR8/4 10YR8/2	4枚・長石、輝石、白色粒子、赤色粒子	無	外面上は滑溜面上に矢羽状伏状刻夷	やや良
	124~130	第IV群A類	脚部 7.5YR8/4 7.5YR8/4	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、赤色粒子	無	外面上は滑溜面上に粗粒系板状・波状凹凸	やや良
	131~134	第IV群B類	口錐部 I1脚部 底部 7.5YR8/6 SYRS6/6	多量の輝石、石英・長石、白色粒子、赤色粒子	無	割り出し口縫、外面上に渦巻き状の付着文、RLの範囲を横に施文、平底	良
第151回	135~141	第IV群C類	口錐部 I1脚部 底部 10YR7/4 10YR7/3	多量の石英・長石、輝石、白色粒子、黑色粒子	無	塊状把子を底面に起した盤型上部、外面上に塊状起場 L字形に底面、赤色顔料の生存が見られる、外面上に施文	やや良
	142	第IV群D類	口錐部 底部 SYRS6/6	JV104/0 2子、黑色粒子	無	鉛手彫、外側に忍衝する口縫間に斜状L字に よる平行伏継・渦管文、内面全体に付着文	やや良
	143	第IV群D類	口錐部 I1脚部 底部 7.5YR8/4 7.5YR8/4	砂粒、石英・長石、輝石、黒色、白色粒子、赤色粒子	無	盤型上部、埴輪孔あり	やや良
	144~145	第IV群D類	口錐部 底部 7.5YR8/6 7.5YR8/6	石英・長石、輝石、白色粒子、黑色粒子、少量 の赤色粒子	無	渦旋、外面上に窓き、平底	やや良
第152回	146~150	第IV群D類	口錐部 I1脚部 底部 10YR8/2 0YR8/2	石英・長石、輝石、白色粒子、少量の赤色粒子	無	外面上にLRの間にO字の条を右巻きに帶いた原体で 付加陶文を模化し施文、平底	やや良
	151~154	第IV群D類	口錐部 I1脚部 SYNS5/4	石英・長石、輝石、黑色、白色粒子、赤色粒子	無	外面上にLRの範囲を底面に施文	やや良
	155~156	第IV群D類	脚部 7.5YR8/6 7.5YR8/6	石英・長石、輝石、白色粒子、少量の黒鉛	無	最適体直角か?、内面に窓き	やや良
第153回	157~158	第V群A類	I2脚部 7.5YR8/4	石英・長石、白色粒子、輝石、赤色粒子	無	波状口縫、外面上にLの範囲を真方向に施文、内面 に施文、平底	やや良
	159	第V群A類	脚部 SYRS6/6 SYRS6/6	多量の白色粒子、石英・長石、輝石、赤色粒子	無	外面上にLRの範囲を横位に施文	やや良
	160~161	第V群A類	I2脚部 7.5YR8/6 底部 SYRS6/6 SYRS6/6	多量の石英・長石・黒鉛、白色、輝石、白色粒子、黑 色粒子	無	外面上にRLの範囲を横位又は斜位に施文、左弧 不規	やや良
	162	第V群A類	脚部 SYRS6/4 SYRS6/4	石英・長石、輝石、白色粒子、赤色粒子	無	外面上にRLの範囲を横位に施文	やや良
	163	第V群D類	脚部 10YR8/1 10YR8/2	石英・長石、輝石、白色粒子	無	外面上に施文	やや良
	164	第V群C類	脚部 SYRS6/6 SYRS6/4	石英・長石、輝石、白色粒子、赤色粒子	無	外面上にLの筋条を斜く丸めて施文	やや良
	165	第V群D類	I2脚部 7.5YR8/6 7.5YR8/4	石英・長石、輝石、白色粒子、黑色粒子	無	口縫に刻み、出窓直風	やや良
	166	第V群D類	I1脚部 7.5YR8/3 7.5YR8/6	多量の輝石、石英・長石、白色粒子、黑色粒子 少量の赤色粒子	無	内面に施文を転写し模倣で段階を消す	やや良
	167	第V群D類	I2脚部 10YR8/4 10YR8/4	輝石、石英・長石、白色粒子、白色粒子、少 量の輝石	無		やや良
	168	第V群D類	底部 7.5YR8/6 7.5YR8/6	石英・長石、輝石、白色粒子、黑色粒子	無	平底	やや良



第130図 縄文土器 群別分布図



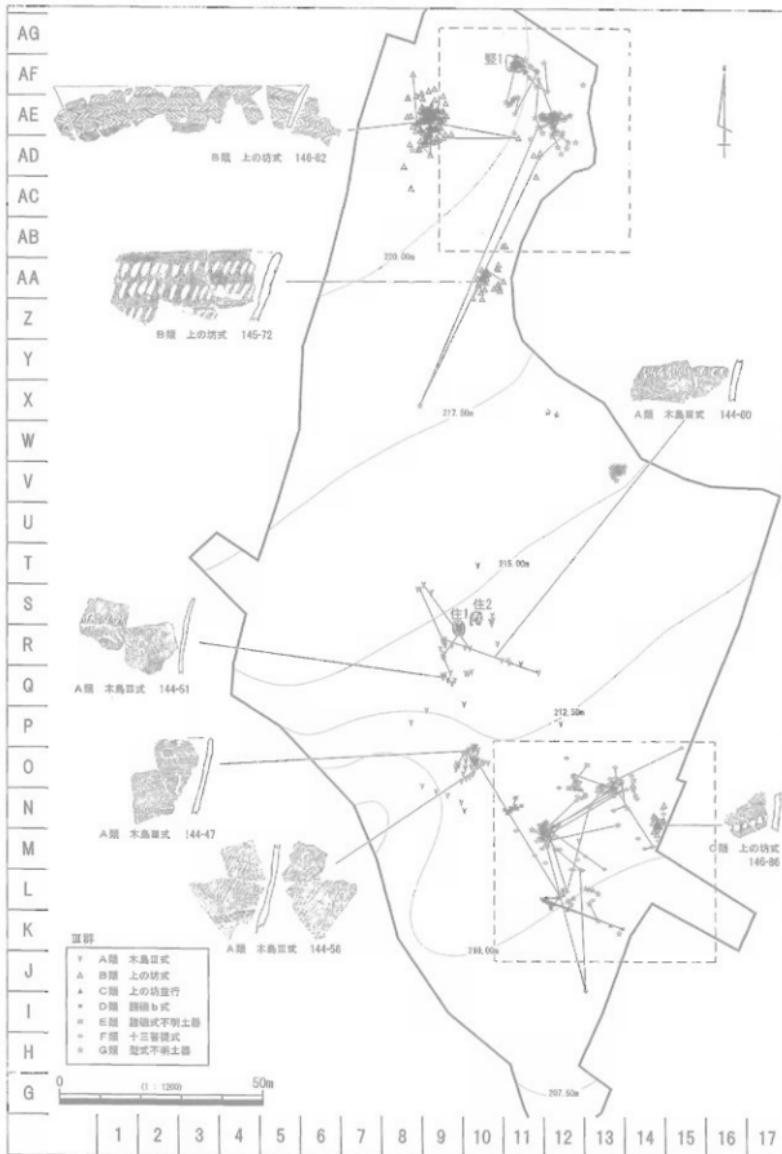
第131図 縄文土器 I群分布図



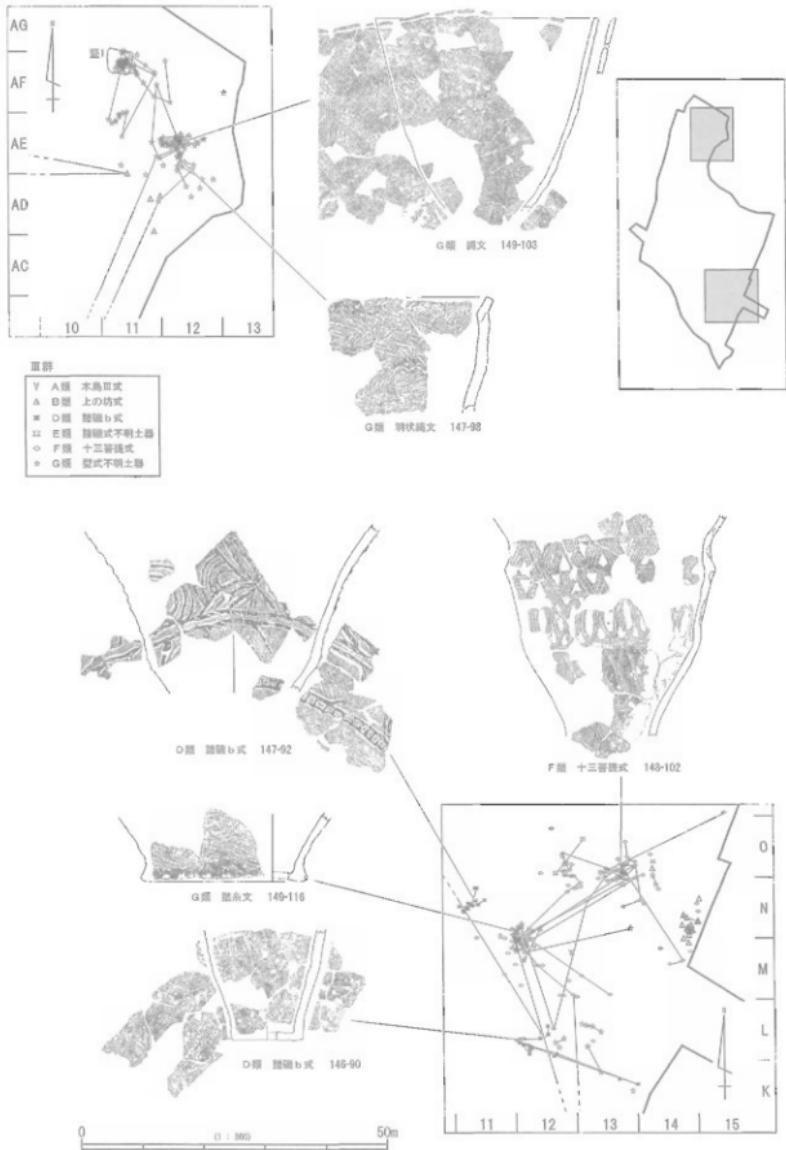
第132図 縄文土器 II群分布図



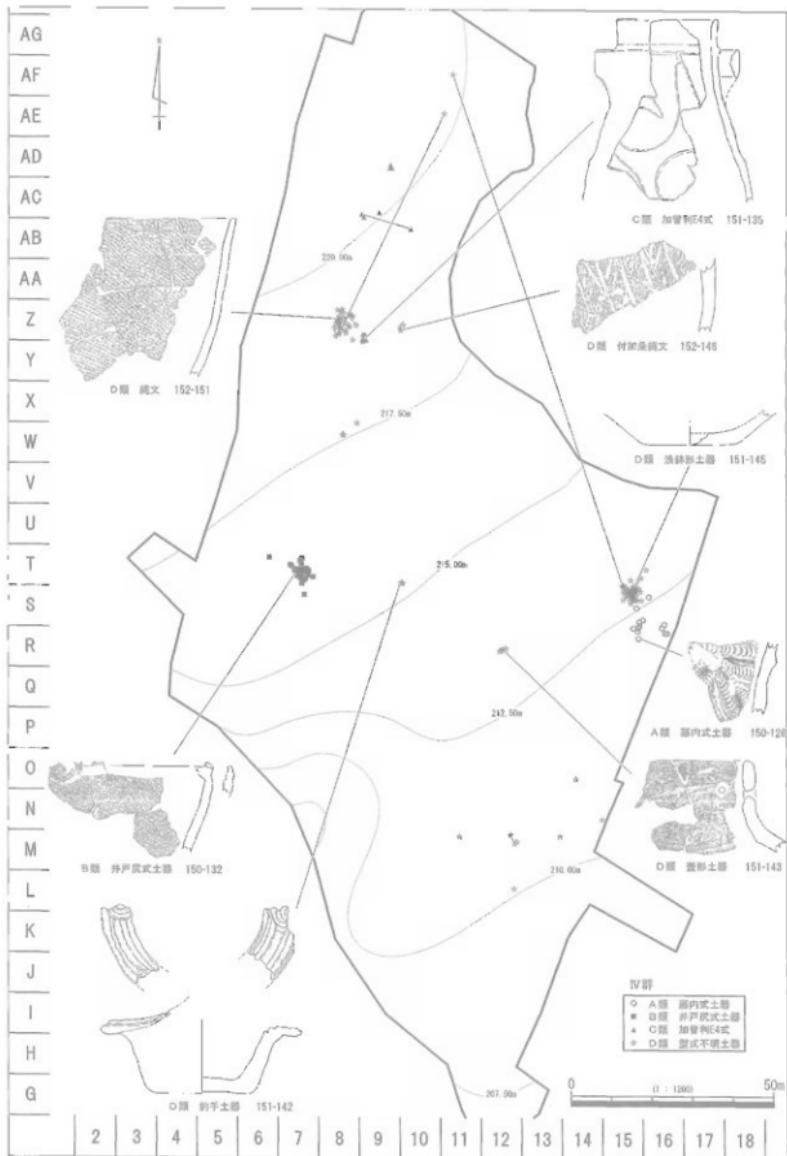
第133図 調文土器 II群分布拡大図



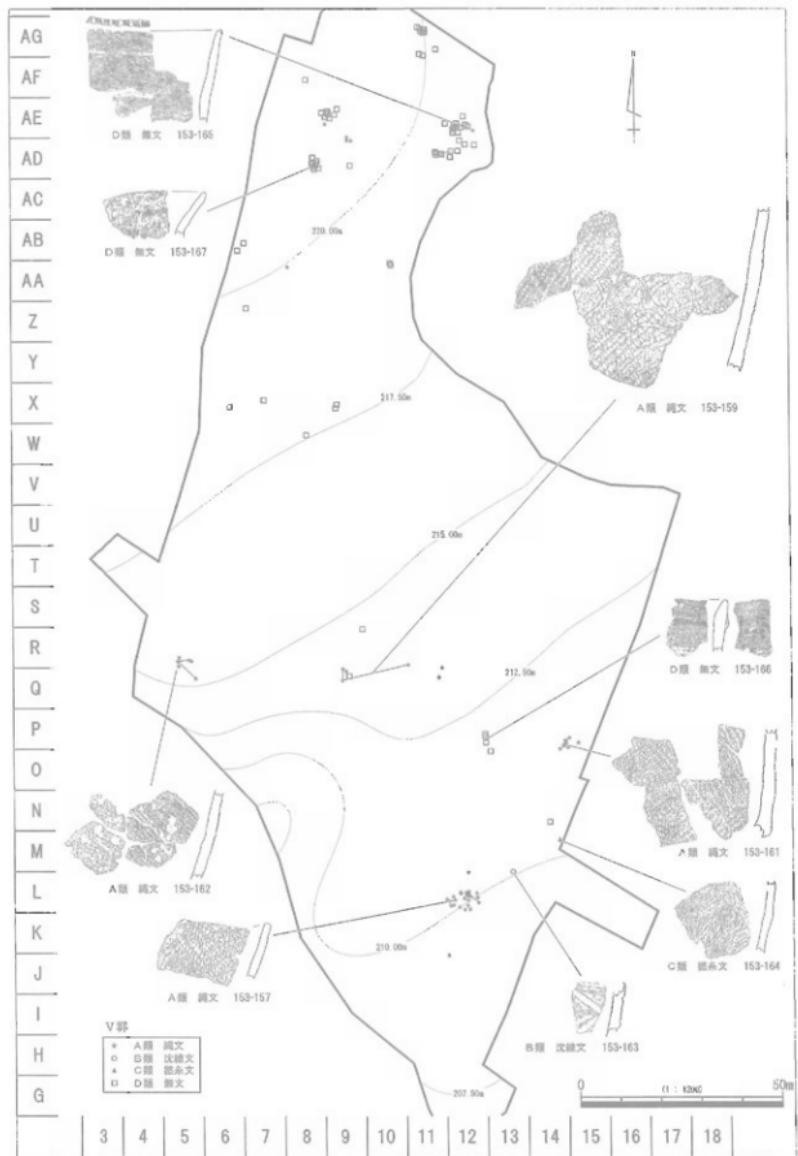
第134図 縄文土器 III群分布図



第135図 繩文土器 III群分布拡大図



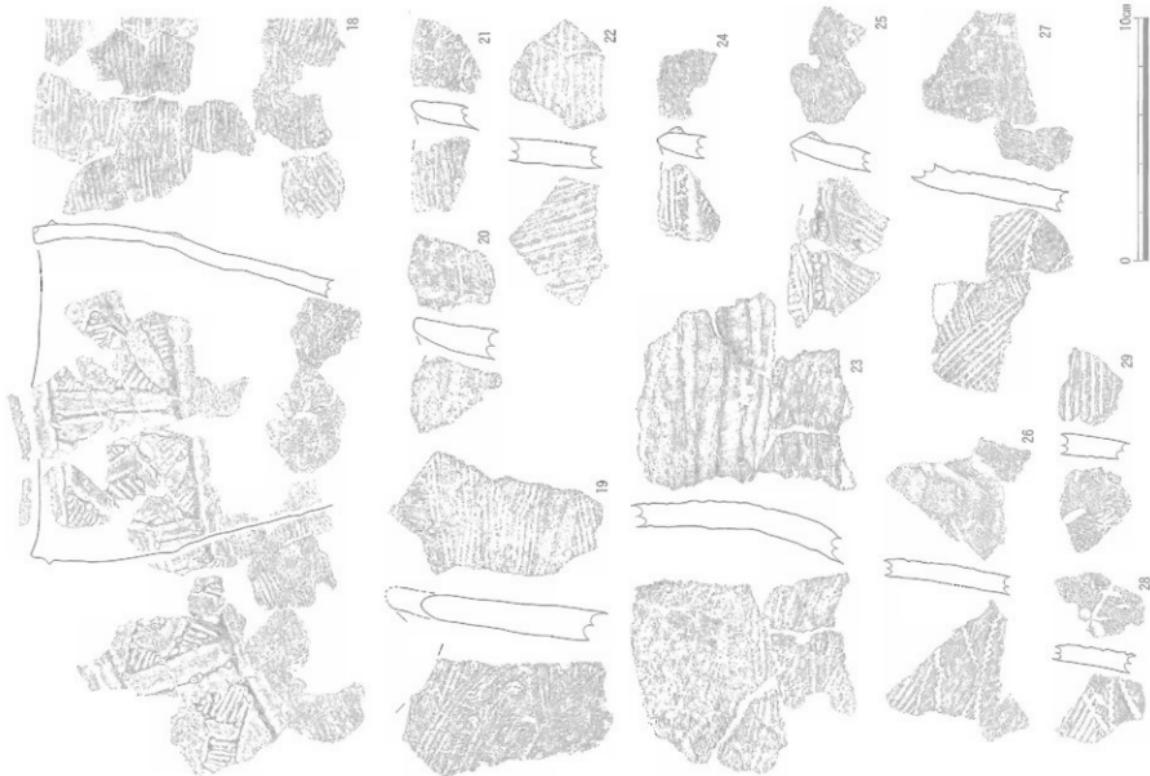
第136図 繩文土器 IV群分布図



第137図 繩文土器 V群分布図



第138圖 I群土器・II群土器(1)

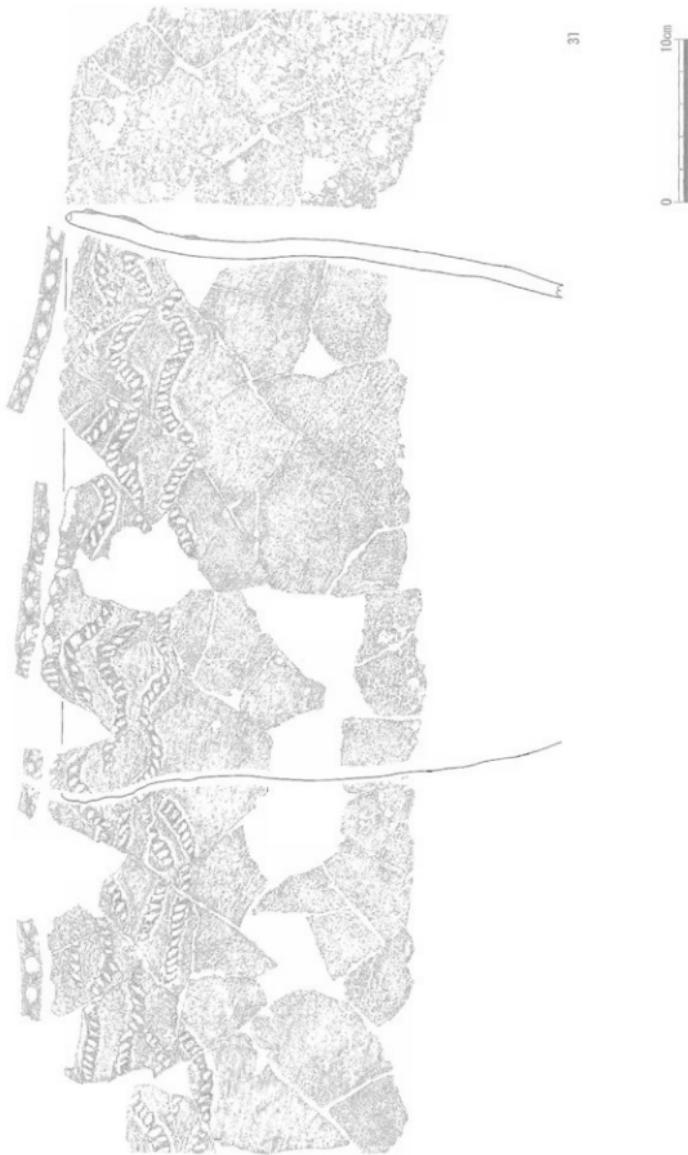


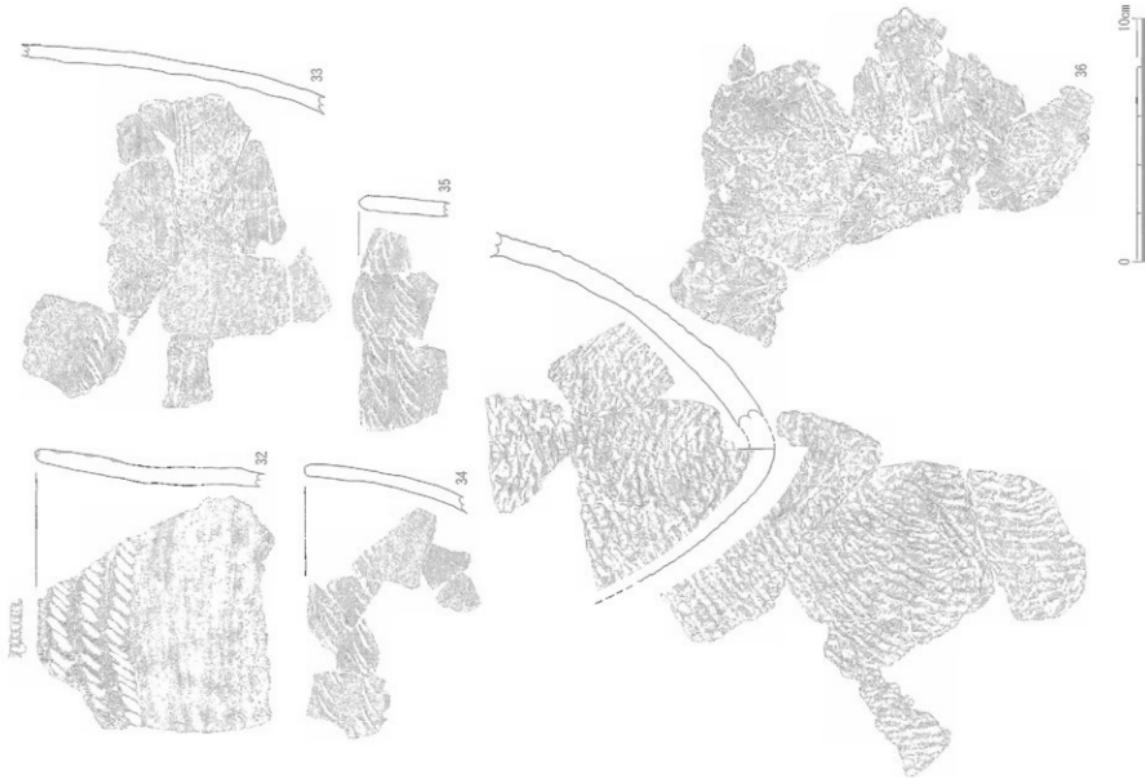
第139圖 II群土器(2)

第140図 II 駿河器(3)

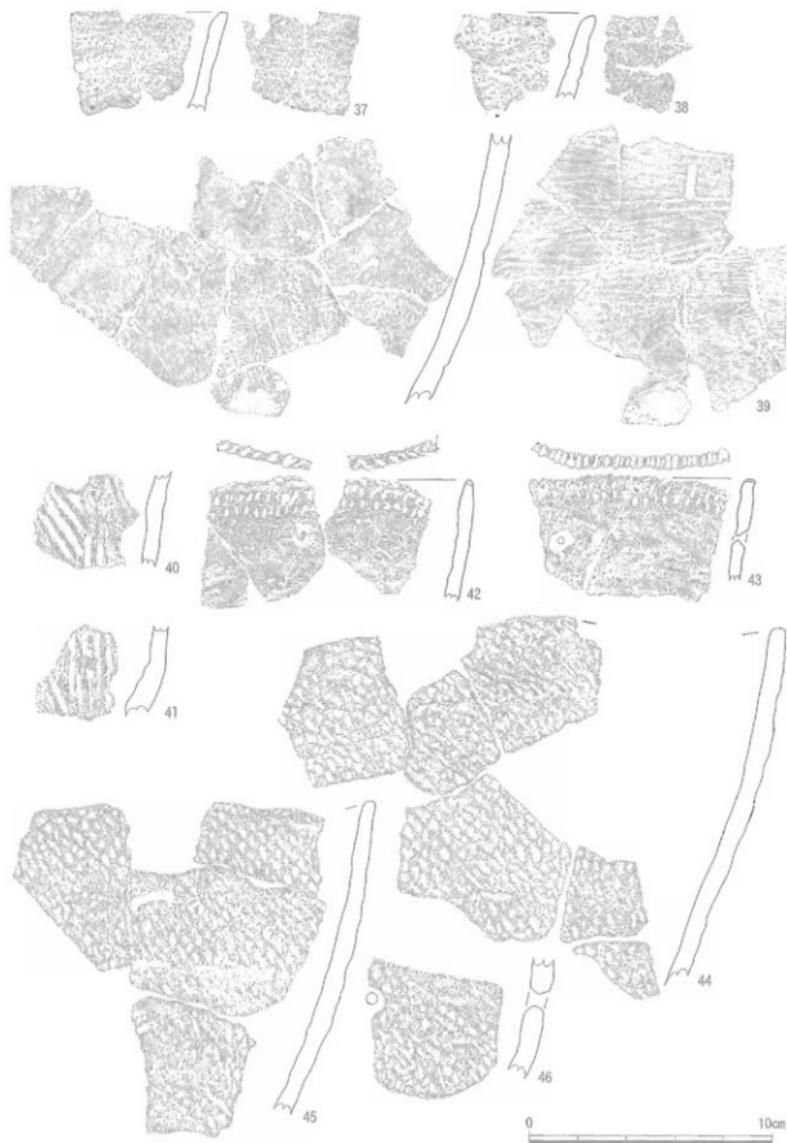


第141図 II群土器(4)

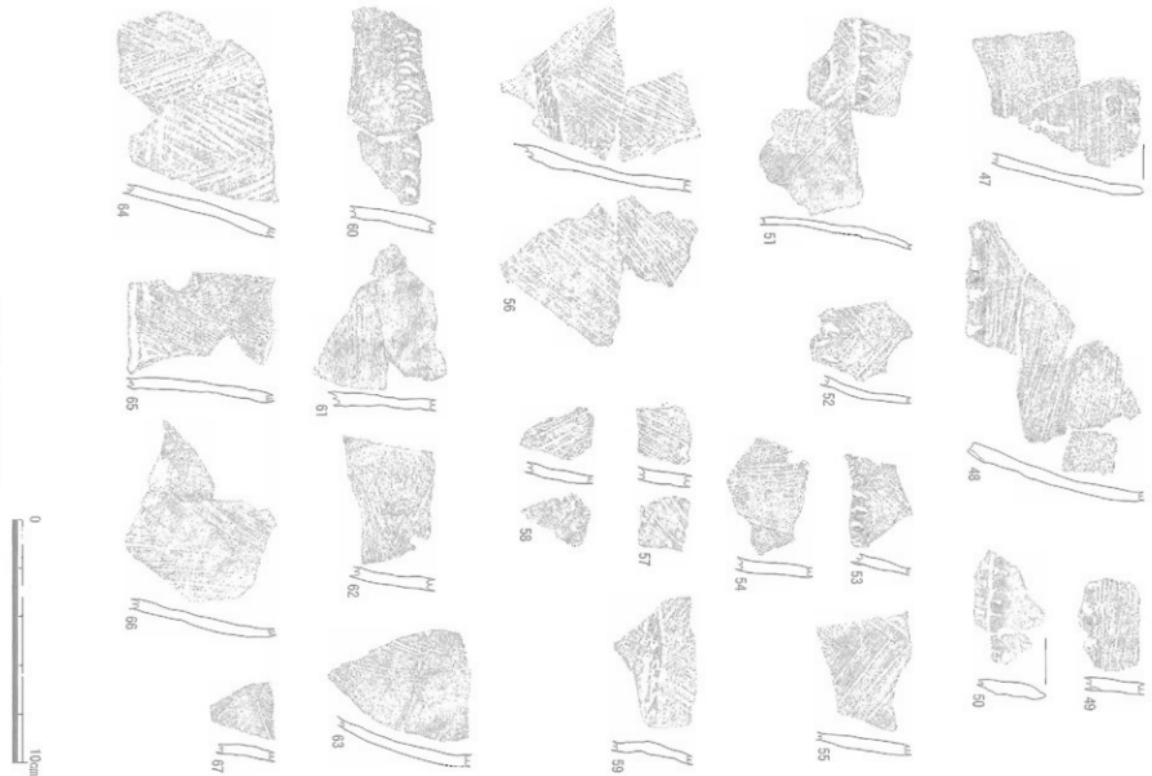




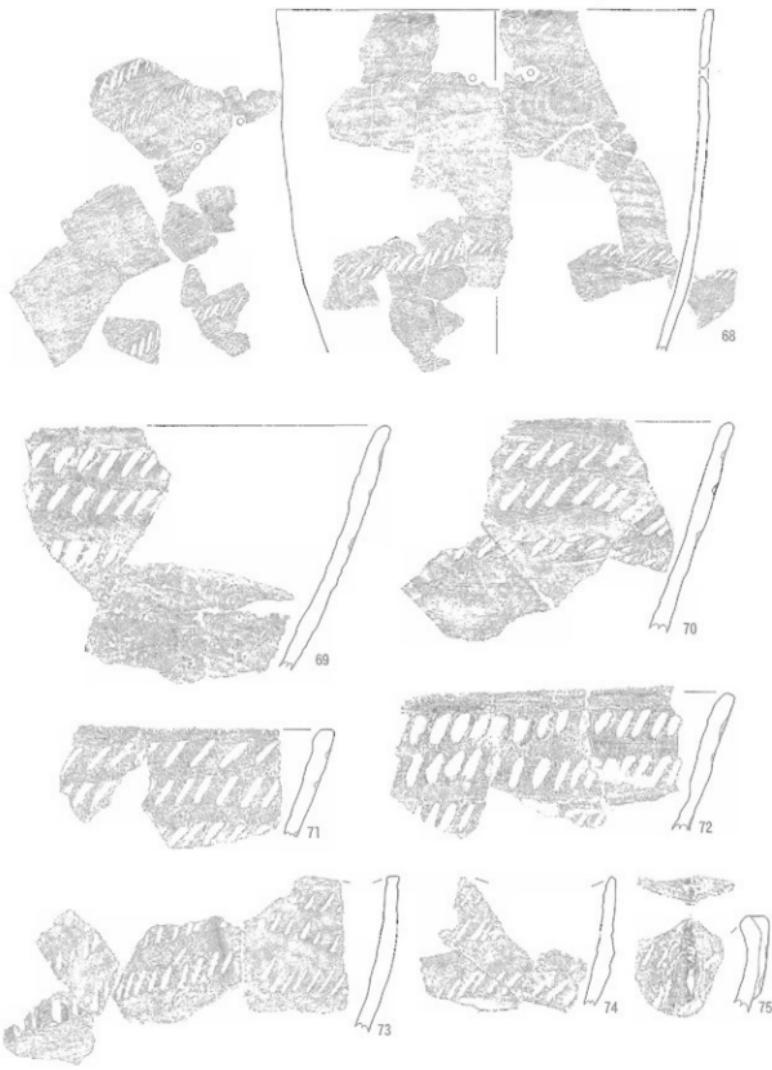
第142图 Ⅱ群土器(5)



第143図 II群土器(6)



第144圖 Ⅲ群土器(1)

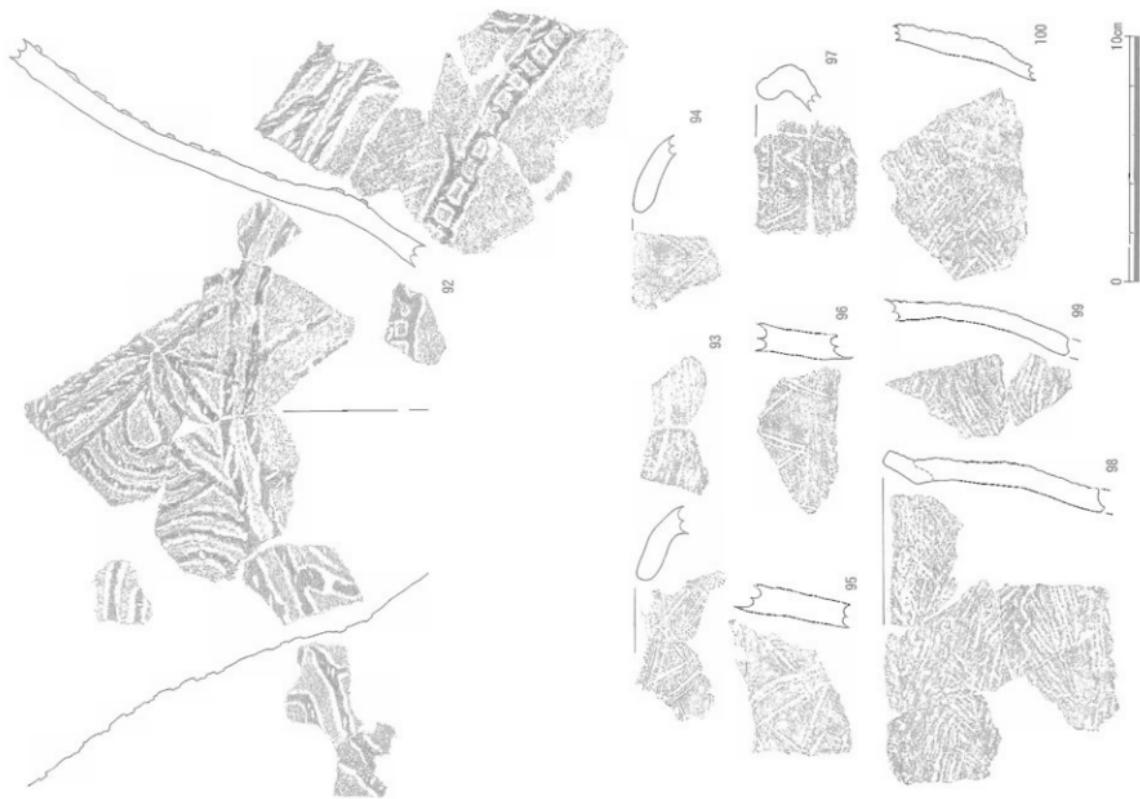


0 10cm

第145図 Ⅲ群土器(2)

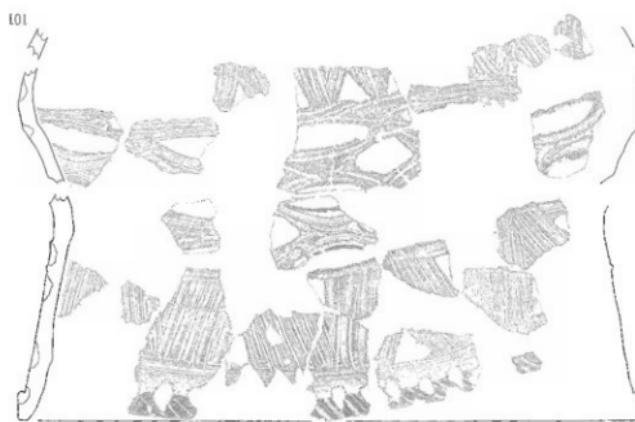
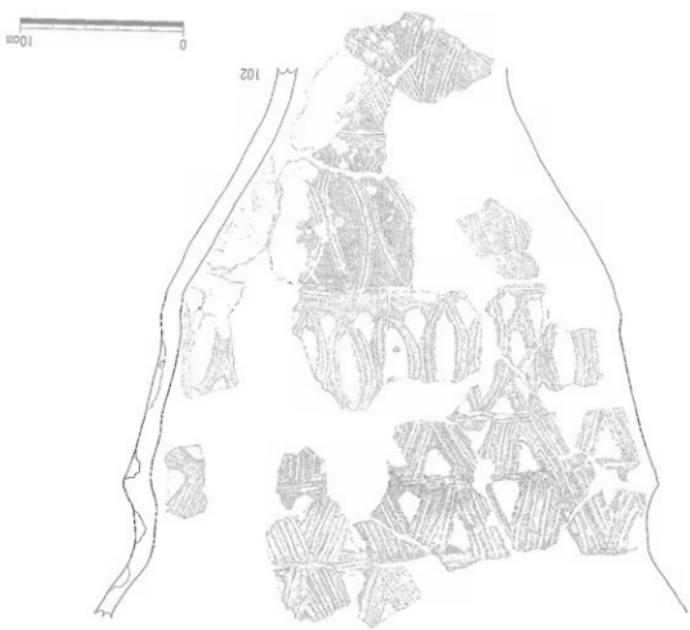


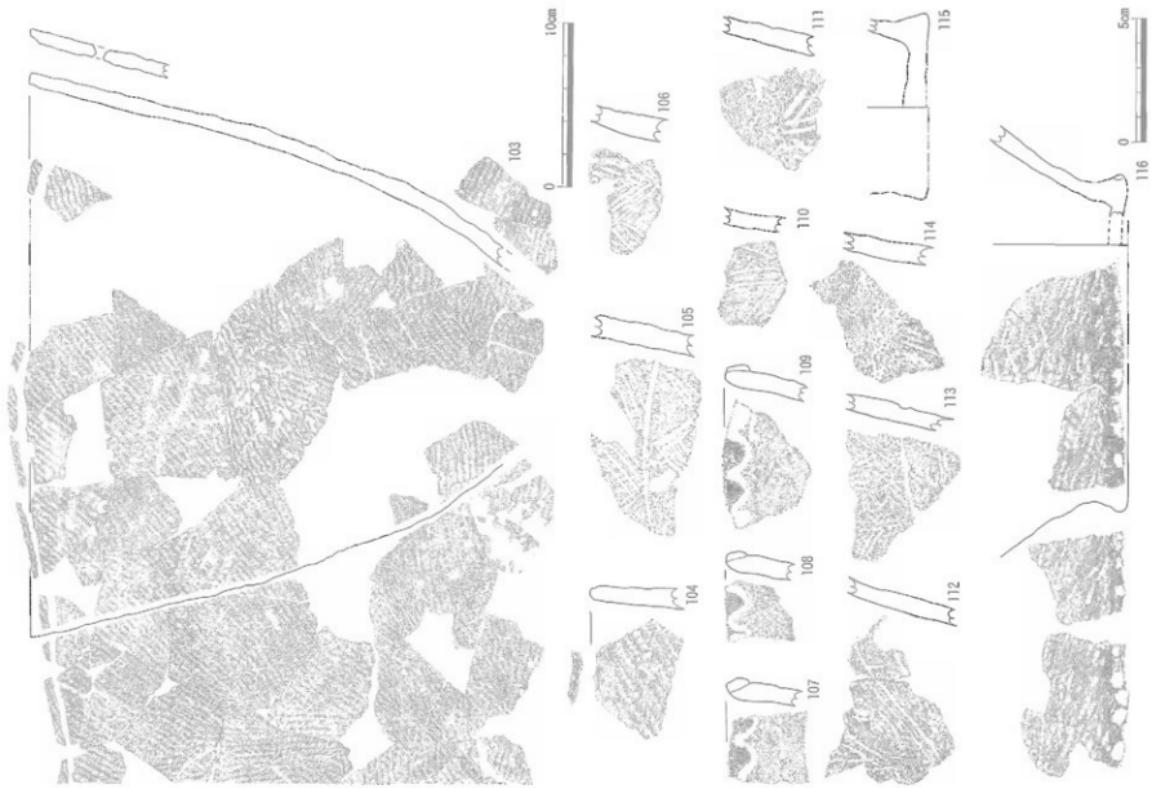
第146図 III群土器(3)



第147図 三星堆(4)

第148圖 三聯土器(5)

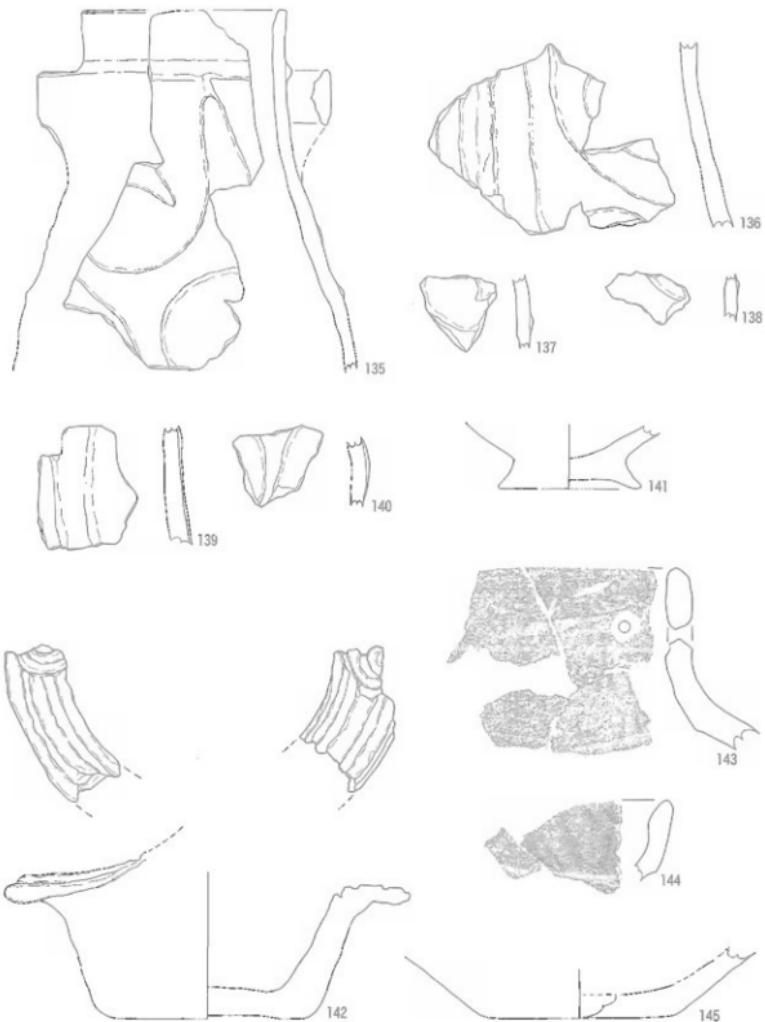




第149圖 Ⅲ群土器(6)



第150圖 Ⅲ群土器(7)・Ⅳ群土器(1)

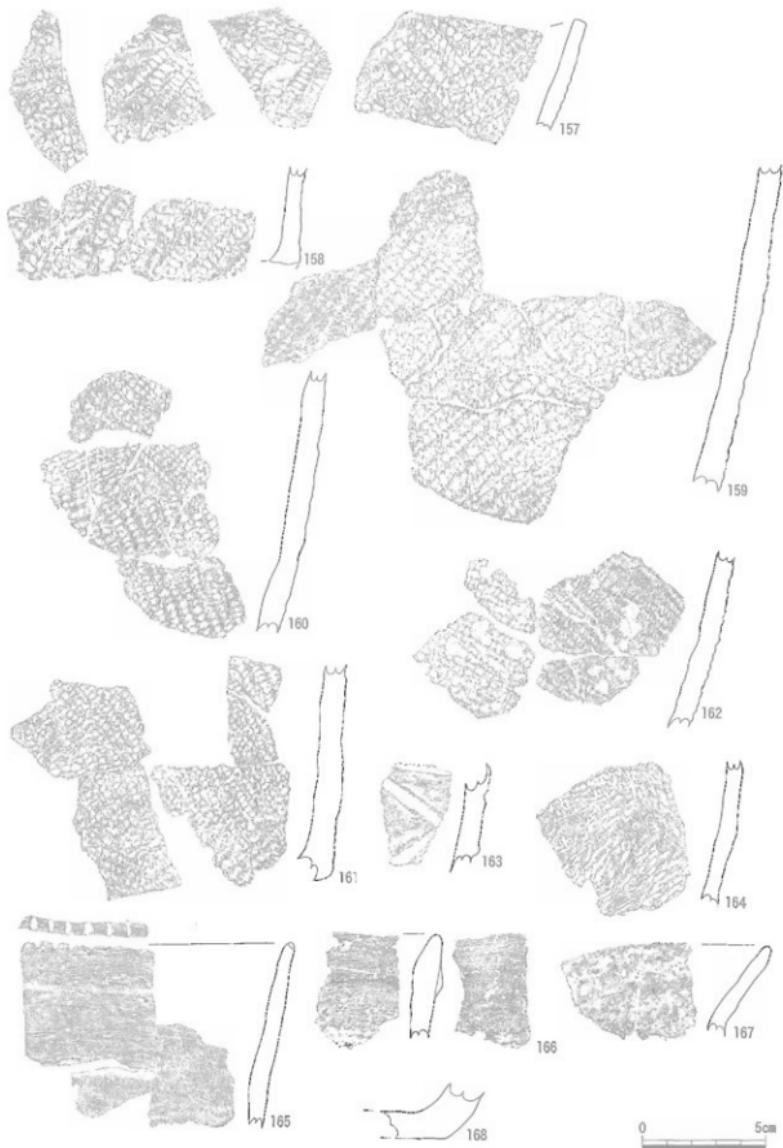


0 10cm

第151図 IV群土器(2)



第152圖 IV土壤剖面(3)



第153図 V群土器

3 遺構外出土の石器

縄文時代の石器は総数で771点が出土した。そのうち遺構内出土のものを除いて器種別に分類し210点を図示する。

本遺跡では調査区北側に2か所の石器集中範囲が確認される。黒曜石が出土総数の67%を占めており、石器集中範囲から神津島恩馳島群の楔形石器が多数出土している。また石鏃と石斧類が比較的多く出土した。

(1) 石鏃 (第156図1～第158図63)

石鏃は未製品・欠損品を含めて93点出土し63点図示した。全てが無茎鏃である。出土層位で時期をわけることが困難な為、下記の形態によって分類し報告する。

I群 基部を除いた平面形が二等辺三角形や正三角形を呈すもの

A類 四基無茎鏃 (基部が抉れているもの)

B類 平基無茎鏃 (基部が平坦なもの)

II群 基部を除いた平面形が五角形を呈すもの

III群 その他の未製品・欠損品

〈I群A類 四基無茎鏃〉(1～45)

I群A類は33点出土した、全体の83%を占め代表的な形態と言える。1と2は小型で、一部に素材剥離面を残し縁辺を中心に調整を施す。調整は急斜となってい。3～14は側縁が強く外湾するもので、3～6は側縁が鋸歯状となる。15～45は側縁が直線的なもので、15～17は脚部の抉りが全長の1/2以上となり、いわゆる長脚鏃と呼ばれるものである。18～26は基部の抉りが比較的深めのものである。27～45は基部の抉りが比較的浅めで緩やかな弧状をなすものである。

〈I群B類 平基無茎鏃〉(46～50)

46～50は基部が平坦なものである。5点出土した。

〈II群 基部を除いた平面形が五角形を呈すもの〉(51～54)

4点出土している。素材として薄く平らに剥がれやすい斑質粘板岩やチャートを使用しており、薄い剥片の縁辺に調整を施している。

〈III群 その他の未製品・欠損品〉(55～63)

小型の剥片に押圧剥離による調整が残るものを石鏃未製品とした。

なお石鏃の石材については黒曜石が83%でもっとも多く、産地は信州産が50%、神津島恩馳島群や天城等の地元産が45%で約半々の比率である(分析不可5%)。他はガラス質黒色安山岩が11%、斑質粘板岩が3%、ホルンフェルス2%、チャート1%となっている。

(2) 石錐 (第158図64・65)

2点出土している。64は断面三角形の細い縦長剥片を素材とし、末端部を調整して機能部としている。65は断面が菱形で全面に調整を施し、両端部を尖らせている。

(3) 石匙 (第158図66～第160図73)

未製品を含め8点が出土した。石匙のつまみ部分を上部に配置した場合の縦横の比率により分類した。

66～69は横型の石匙で、66は厚めの横長剥片を素材とし、刃部は急角度の片刃調整となってい。67は厚めの剥片を素材に用い、調整によりつまみ部分が作られている。刃部は片刃と思われるが、厚みを残しているため未製品の可能性がある。68は薄い横長剥片の縁辺に細かな調整を施し、刃部は弧状を呈している。69は厚めで幅広の縦長剥片を用い、つまみ部分が大きく刃部は片刃である。

70～73は縦型の石匙である。70は全体的に風化が著しく判然としないが、右片部については、折損後

第45表 縄文時代 石器組成表

		石鏟	石錐	石匙	削器	攝器	加工痕剥片	使用痕剥片	橢形石器	石核	裂片・碎片	磨製石斧	打制石斧	礫器	石錐	磨石・敲石類	石皿・台石類	計	
黒曜石 (b)	ホルンフェルス	Hor	2		4	1	1	1		4	35	3						51	
	ガラス質黑色安山岩	GAn	10		2	1		1		1	27							42	
	勝防星ヶ台群	SWHD	38			1		3	1		2							45	
	夢科冷山群	TSTY								2								2	
	和田鷹山群	WDTY	2							1								3	
	和田土屋橋西群	WDTN	1															1	
	神津島恩馳島群	KZOB	30	1	1	4		5	6	35	3							85	
	天城伯作群	AGKT	5							1								6	
	箱根烟宿群	HNNJ							1									1	
	產地不明*	-	3			1	1		3	1	363							372	
緑色凝灰岩		GT									1							1	
硬質細粒凝灰岩		HFT									1							1	
頁岩		Sh									3	13						16	
赤色頁岩		Sh(Re)						1										1	
珪質頁岩		SSh			1					1								2	
チャート		Ch	1	1			1											3	
チャート(赤色)		Ch(Re)								1								1	
珪質粘板岩		SSI	3															3	
流紋岩		Rhy								1								1	
砂岩(細粒)		FSS		1	1					1	2							4	
砂岩(中粒)		MSS								1	1	3						5	
砂岩(粗粒)		CSS									1							1	
ティサイト		Da										1	3					4	
細粒斑レイ岩		FG									1							1	
緑色片岩		GS									1							1	
下呂石		GRS								4								4	
結晶片岩		CSc											1					1	
輝綠岩		Dia									1							1	
口ディン岩		Ro									1							1	
細粒安山岩		FAn							2									2	
角閃石安山岩		An(Ho)													1	1		2	
輝石安山岩		An(Py)								2	4	3		32	17	58			
多孔質安山岩		VAn												1	5	4	10		
多孔質玄武岩		VBa												11	12	23			
玄武岩		Ba												8	8	16			
計			95	2	8	9	1	10	10	43	6	448	2	26	4	6	60	41	771

*產地不明の内訳は推定不可10点、未分析362点である

再調整を施している可能性がある。71は縦長剥片に大きめの剥離調整を施し整形している。刃部は片刃である。72は縦長剥片を用い打点部分につまみ部を設け、側縁部に刃部を作出する。つまみ部分の傾きを変えることで横型とも分類できる。73は剥片の打点部分を抉入状に調整し、つまみ部分を作り出している、刃部未作出のため未製品と思われる。

(4) スクレイバー類〈削器・抉入削器・搔器〉(第160図74～第161図83)

剥片の縁辺に連続的な調整を施すものをスクレイバーとして分類し、中でも角度が60°以下のもので調整部位が直線状のものを削器とした(74～78)。また、この調整部位が抉り状を呈するものを抉入削器とした(79～82)。刃部の角度が45°をこえ90°に近いものを搔器とした(83)。削器は5点、抉入削器は4点、搔器は1点出土している。抉入削器には一個体に數か所、抉り状の調整を有するものもある。

83は搔器でホルンフェルスの亜角礫からとった厚い剥片を素材とし、縁辺より調整を加えて刃部を作る。刃部は鋸歯状を呈している。

(5) 加工痕剥片 (第161図84～第162図92)

剥片に二次的な調整を施しているが、前述の(1)～(4)に分類不可能なものである。11点出土し9点図示した。使用痕と思われる微細な剥離が認められるものもある。

85は打面を平坦に調整している横長剥片を用い、右側縁の細かな剥離は素材剥片剥離以前の作業面調整の可能性がある。88は薄い剥片の左側縁に細い調整を連続的に施している。

(6) 使用痕剥片 (第162図93～100)

剥片の鋭利な縁辺に使用痕と考えられる細かな剥離が認められるものである。10点出土し8点図示した。

(7) 楔形石器 (第162図101～第163図118)

42点出土し17点図示した。厚みのある剥片の端部、あるいは上下、左右の対称位置に打撃の衝撃痕があるものを集めた。特に神津島恩馳島群の黒曜石が調査区北側に2か所の集中地点を形成する。そのほとんどがサイコロ状となり、衝撃痕の反対側が平坦な打面、あるいは旧剥離面となるものが多い。そのため当初は両極打法による残核とも考えたが、この遺物の周辺で剥片や碎片は出土数が少ないとから、両極打法によって生じる剥片や石核とは区別して扱いたい。このため楔形石器として報告する。

(8) 石核 (第164図119～121)

6点出土し3点図示した。119は素材の縁辺より打点を移動させながら貝殻状の剥片を取る。120はホルンフェルスの円礫を素材とし、上設の打面より剥片剥離している。作業面はほぼ固定されている。121はホルンフェルスの亜角礫を素材とし、原礫面を打面としてすばりの剥片を剥離する。石核調整は行わない。

(9) 磨製石斧 (第164図122・123)

2点出土している。122は石斧全体を丁寧に磨きあげており、左右対称ではなく右側縁は節理で破損した後に磨き直された可能性がある。刃部には刃こぼれと思われる微細な剥離が観察できる。石材はロディン岩でヒスイと間違われるためきつね石とも言われるが、軟玉の仲間である。色調は明オリーブ灰色を呈し、一部に暗緑色ブロックを含む。123は輝緑岩の礫を使用しており、基部は折れている。肩部は素材礫の形状を活かし刃部を中心に研磨する。刃部は両刃で使用による刃こぼれが見られる。

(10) 打製石斧 (第165図124～第168図144)

21点出土した。完形のものは少なく使用により破損しているものが多い。形状から短冊形、撥形、わらじ形に分類した。

124～137は短冊形の打製石斧である。124・127・128・130・131・134は側縁部に着柄のための潰れ状の敲打痕が顕著に見られる。また125・127・129は基部の先端を細く調整している。124は比較的大型で

残存状態が良いが、基部及び刃部は裏面より一部剥落している。刃部はやや尖刃となっており、刃部側の側縁は使用による摩耗痕が確認できる。I25は左側縁が節理面で剥落している。基部に抉り状の調整を行い、刃部は一部欠損している。I26は素材礫の形状を活かし、縁辺を中心に調整を行う。基部は抉り状の調整が施されており、刃部は尖刃を呈している。I28は下約半分が欠損したあとで再調整を施している。I29は裏面に使用によると思われる大きい剥離が見られるが、刃部は素材礫面が残り、未作成のため未製品の可能性もある。受熱によると思われる赤化が見られる。I31は欠損した基部の剥片が接合する。基部が破損したあと加工し再生利用したものと思われる。I34は基部欠損品である。右下側縁部に擦痕のような痕がわずかに確認できるが、使用時のものか研磨痕かは判然としない。磨削石斧は剥離調整のあと細かく敲いて成形するが、この石斧には敲き痕は見られない。I35は基部欠損品である。使用による摩耗痕がわずかに見られる。I37は胸部破片である。

I38～I41は撥形の打製石斧である。最大幅が刃部に位置する。I38は基部の抉り状の調整が丁寧に施されている。下端部は刃部欠損後も再調整しており、刃こぼれが見られることから、他の用途に使用されたと考えられる。I39は使用時の欠損による剥片と思われるが、両側縁を調整しており、石斧として報告する。I40は基部欠損品である。大型円礫の表皮付き剥片を素材としている。両側縁に敲打痕が見られる。I41は基部の破片である。

I42・I43はわらじ形の打製石斧である。扁平な剥片を素材とし縁辺部に調整を行っている。I42は基部片である。I43は基部欠損品である。

I44は素材礫の表皮付き剥片で、刃部の調整は見られるが側縁に調整が確認できず、加工時か使用時の欠損による破片と思われる。石斧関連剥片として報告する。

打製石斧の石材は頁岩が1点で52%ともっとも多く、砂岩が4点、輝石安山岩とホルンフェルスが2点ずつ、緑色片岩と細粒斑レイ岩が1点ずつとなっている。また大型円礫の表皮付き剥片を素材とするものが半数であった。

(11) 磨器 (第168図145～148)

自然礫に簡単な調整を施し、刃部を作出したものである。幅広で大型の器体を有する。4点出土した。I45は板状の自然礫を素材としている。縁辺から大きめの剥離を施し、裏面からも数回調整を加えて刃部を作出している。I46・I47・I48は板状の礫の一端に大きな剥離を数回加えて刃部としている。I48は右半分が欠損している。

(12) 石錘 (第169図149～154)

扁平な円礫の端部を打ち欠き、緊縛できるようにしたものである。6点出土している。円礫の長軸を縦方向に配置したときに、縦位置に抉り状の緊縛部分があり、潰れ状の打痕が観察できるものもある。

I49は71.7g、I50は44.4gと比較的小型である。I51～I54は200～250g程度の礫を使用し、I52は節理によって裏面が剥離した素材を使用している。I54は素材礫の形状を活かし、抉り状の縁辺を緊縛部分に使用している。

(13) 磨石・敲石類 (第169図155～第173図199)

打痕・磨痕が観察できるもので、持ち上げて使用したと推測される3kg未満の石器を分類した。47点が出土し46点図示した。打痕・磨痕の観察できる部位やその組み合わせを中心に分類し報告する。

〈I群 磨痕のみが観察できるもの〉 (155～162)

A類 平坦部の両面または片面に磨痕が見られるもの(155～159)

I55～I58は比較的扁平な礫の平坦部に磨痕が残る。I59は球状に近い礫の平坦部にわずかに磨痕が見られる。すべて10cm程度の礫であるが、I56・I57以外は使用痕跡が不明瞭である。

B類 側縁部に磨痕が観察できるもの(160・161)

160は円礫の両側縁にわずかに磨痕が残る。161は亜角礫の隣接する二面に磨痕が見られる。共に使用面の範囲が極めて狭い。

C類 棒状の礫の側縁にまで磨痕が及ぶもの(162)

162は棒状の礫に明瞭な磨痕が残り、使い込まれた結果側面が平坦になり断面が四角形となっている。

〈II群 打痕と磨痕が観察できるもの〉(163~182)

A類 棒状の礫に側縁にまで及ぶ磨痕と打痕が残るもの(163~165)

163は右側面が連続的な打痕によって平坦となっている。残りの側面は側縁にまで及ぶ磨痕により平坦で、使い込まれた結果、四角柱となっている。端部には打痕による剥離が見られる。164は表裏面が打痕によってほぼ平坦となり、上下端部にも打痕が見られる。右側面には磨痕が残るが、原礫面の形状が残り、使用頻度は高くなかった。165は裏面が欠損しているが、磨痕により断面が多角形になっている。

B類 扁平な円礫の平坦部に磨痕が、周縁部に打痕が残るもの(166~173)

170・173以外は磨痕が明瞭に残り、稜を形成している。打痕は全体的に周縁部の1~2か所に見られる。169・171は打撃による衝撃で割れたものと思われる。172・173は梢円礫の先端部に打痕があり、後述のIII群B類と類似するととも考えられる。

C類 打痕の周辺に磨痕が見られるもの(174~181)

磨痕と打痕が重なって観察され、一連の動作の中で複合的に使用されていたと思われる。

174~179は扁平な円礫の平坦部に明瞭な磨痕が確認される。175・177には側縁部にも磨痕が見られ、175は受熱による赤化が見られる。178・179は周縁部に顕著な打痕が残る。180・181は円礫に近く使用痕跡が不明瞭である。

D類 磨の平坦面の中央部に打痕が残るもの(182)

182は小型の亜角礫を使用し、表裏の平坦面に凹状の打痕を有している。側縁の平坦部には磨痕が観察される。凹石と言われるものである。

〈III群 打痕のみが観察できるもの〉(183~199)

A類 磨の平坦面や中央部に打痕が残るもの(183~186)

185・186は平坦面に凹状の打痕があり、所謂凹石である。186は表裏に凹状の打痕が数か所顕著に残っており、3,140gと大型で据え置いて使用されたと推察されるが、打痕の状況からここに分類した。B類 磨の端部、及び小型の円礫に打痕が観察できるもの(187~197)

187~192は磨の端部に打痕が見られる。193~197は5~6cm程の円礫で、周縁部に打痕が残る。一部に磨痕が観察できるものも混在するが、明瞭ではなく、主要な使用用途によって分類した。これらは石器製作用のハンマーとしての使用も考えられる。

C類 円礫の周縁部に打痕が残るもの(198・199)

198は円礫の周縁部ほぼ全体に連続的な打痕が残る。

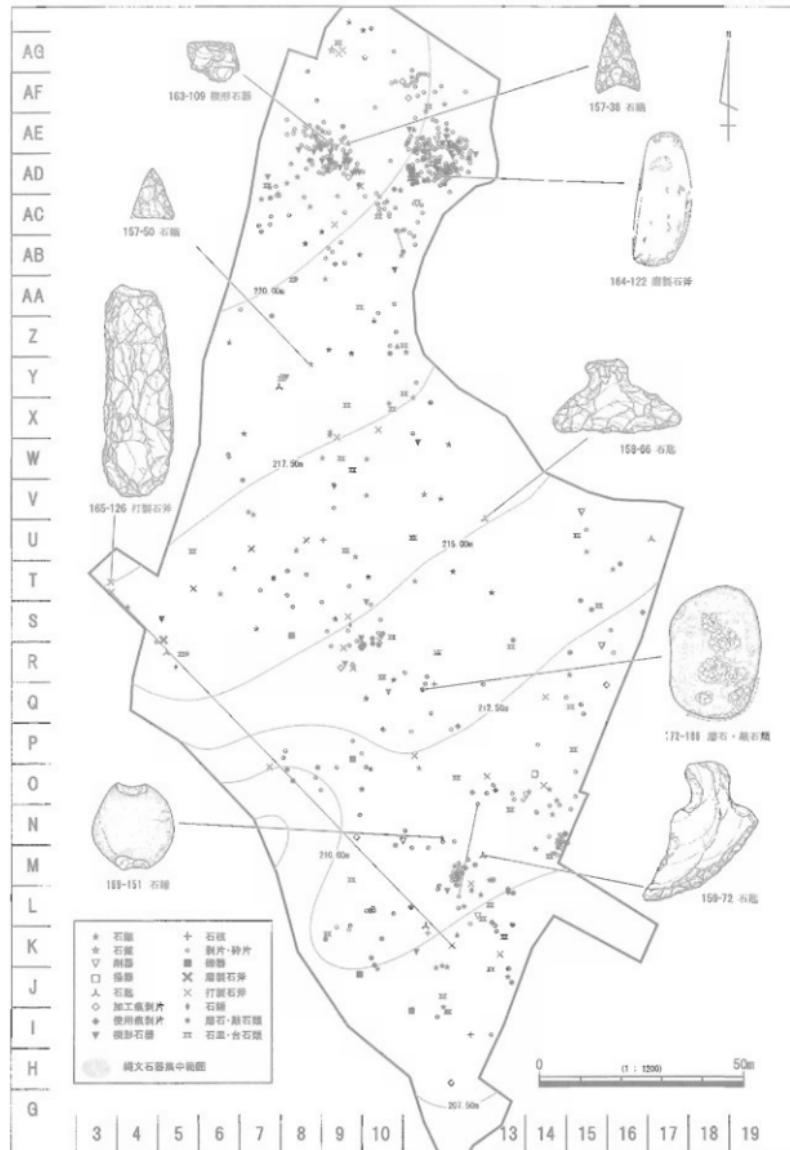
なお磨石・敲石類の石材は安山岩が65%ともっとも多く、玄武岩が31%、デイサイト4%であった。

(14) 石皿・台石類 (第173図200~第174図210)

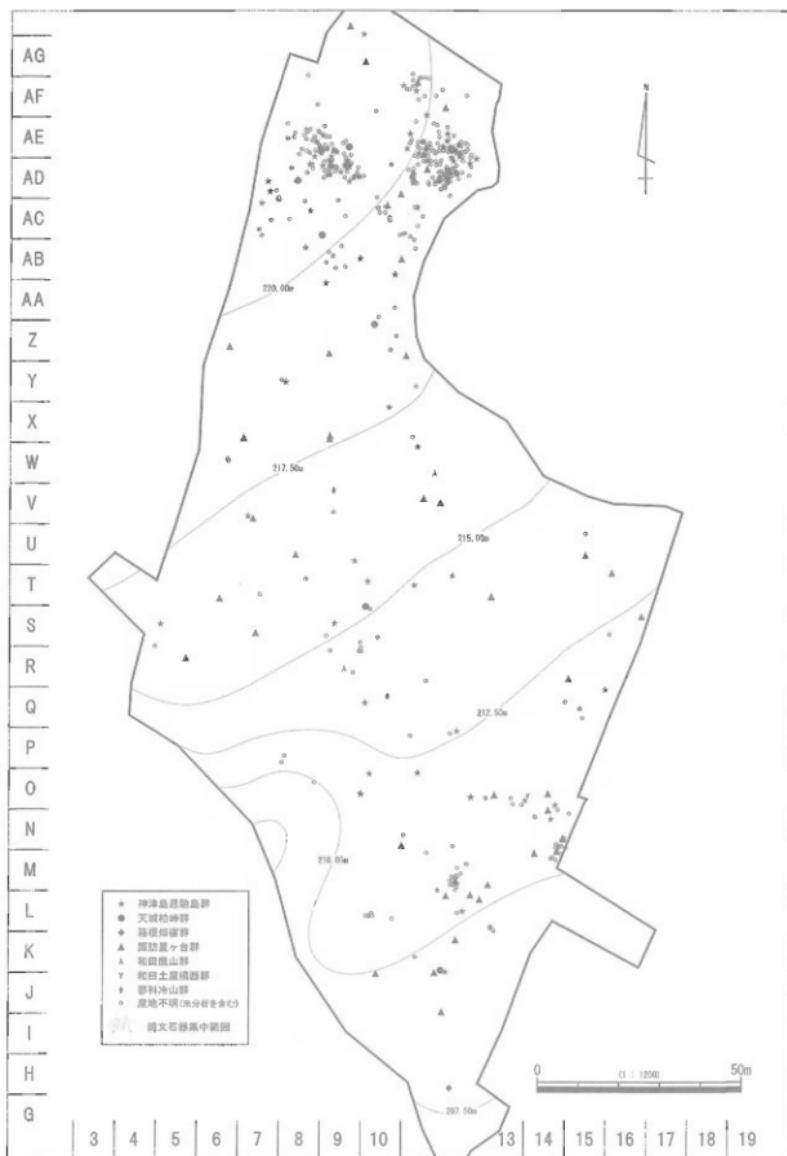
扁平な自然石を素材とし、磨痕や敲痕が観察できるもので、日常的に据えられた状態で使用されるものと考えられ、使用時の形態で3kg以上のものとした。破片を含め、37点出土し11点図示した。

200~207は磨痕のみが観察できるものである。200~202は裏面にも磨痕が見られる。203~207は表面のみの使用で、磨痕が側縁にまで及んでいる。208~210は打痕と磨痕が観察できるものである。打痕は礫面の中央に観察される。

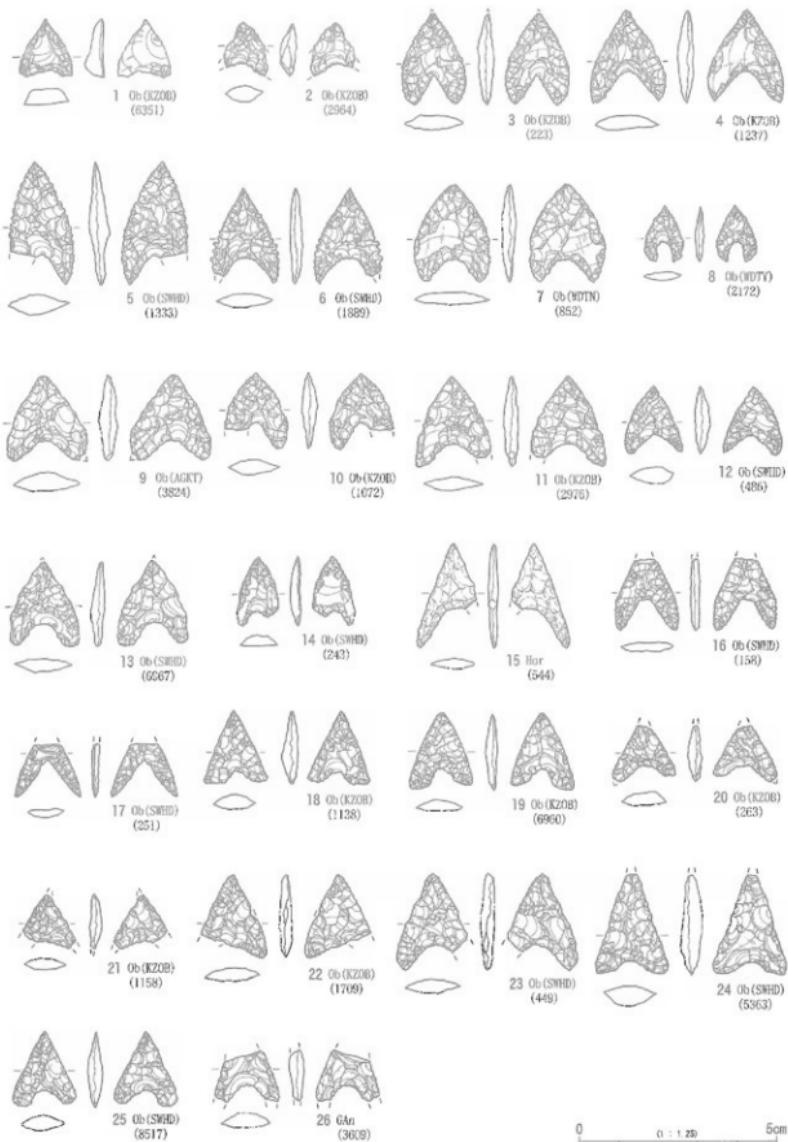
使用の度合いにより大きく窪むものや、浅いものなどがある。石材は玄武岩と安山岩が半々であった。



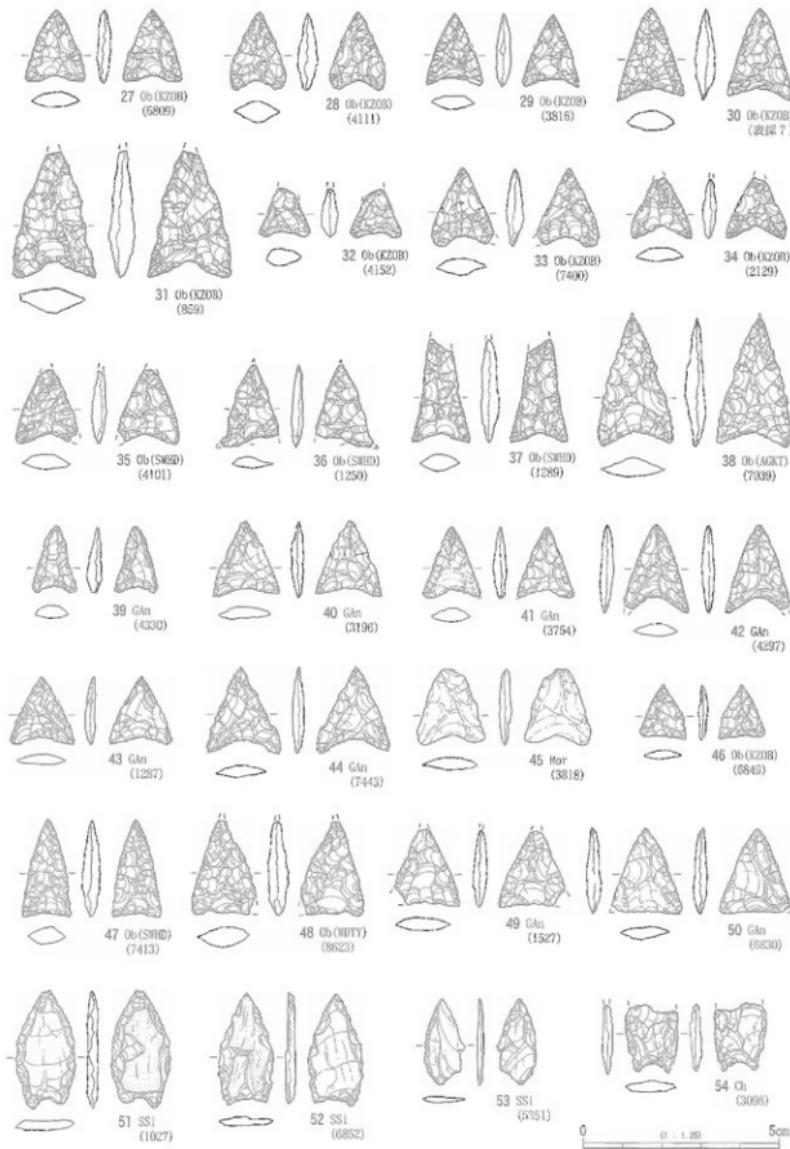
第154図 繩文石器 器種別分布図



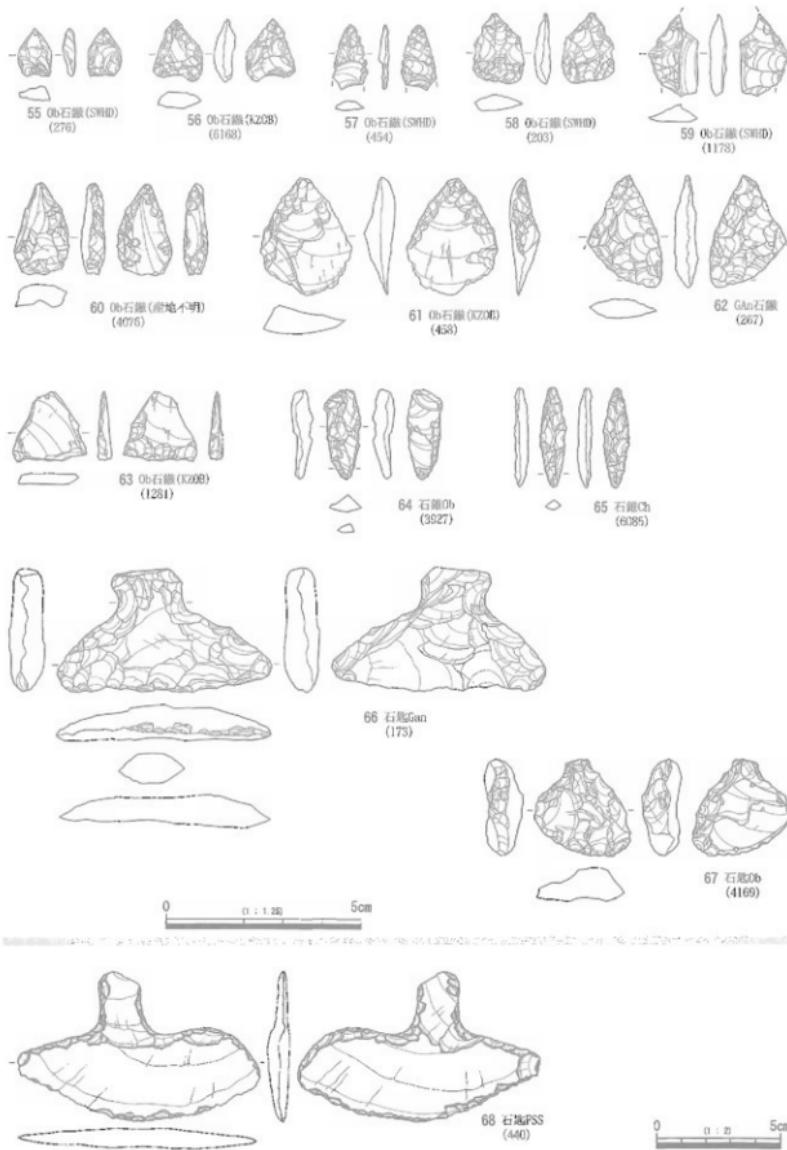
第155図 縄文石器 黒曜石産地別分布図



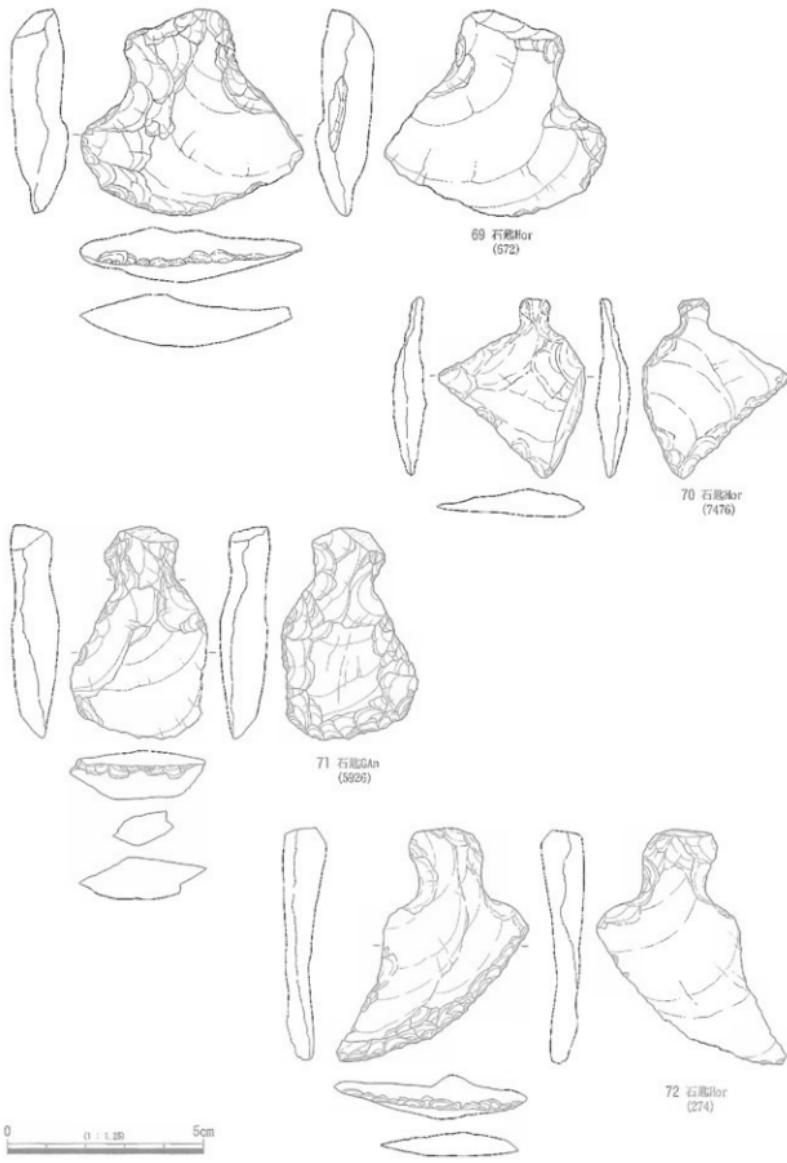
第156図 繩文石器(1) (石鏃)



第157図 繩文石器(2) (石鏃)

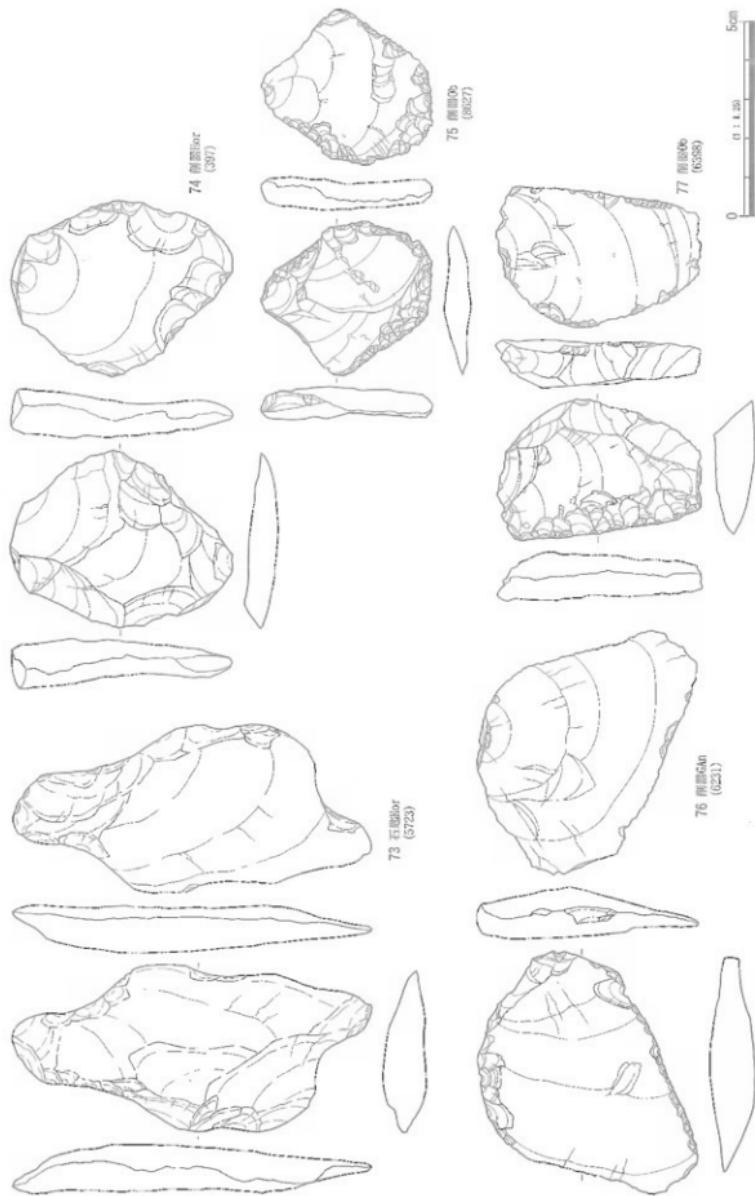


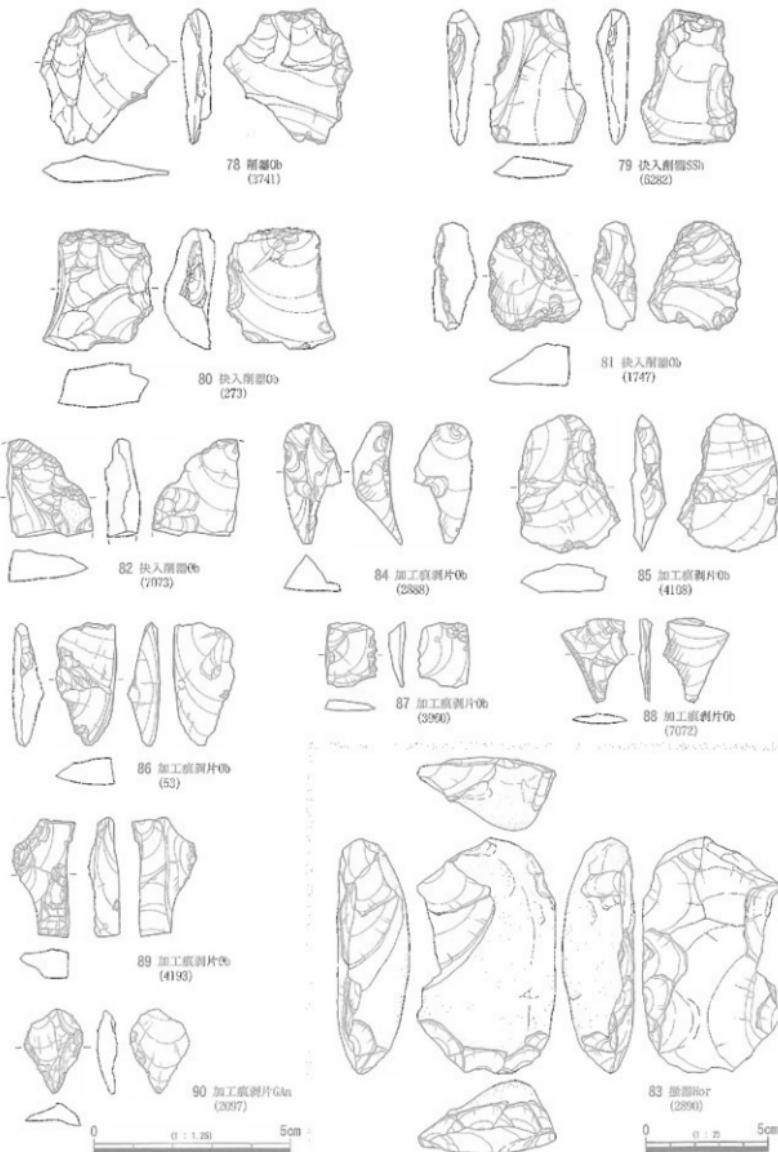
第158図 繩文石器(3)



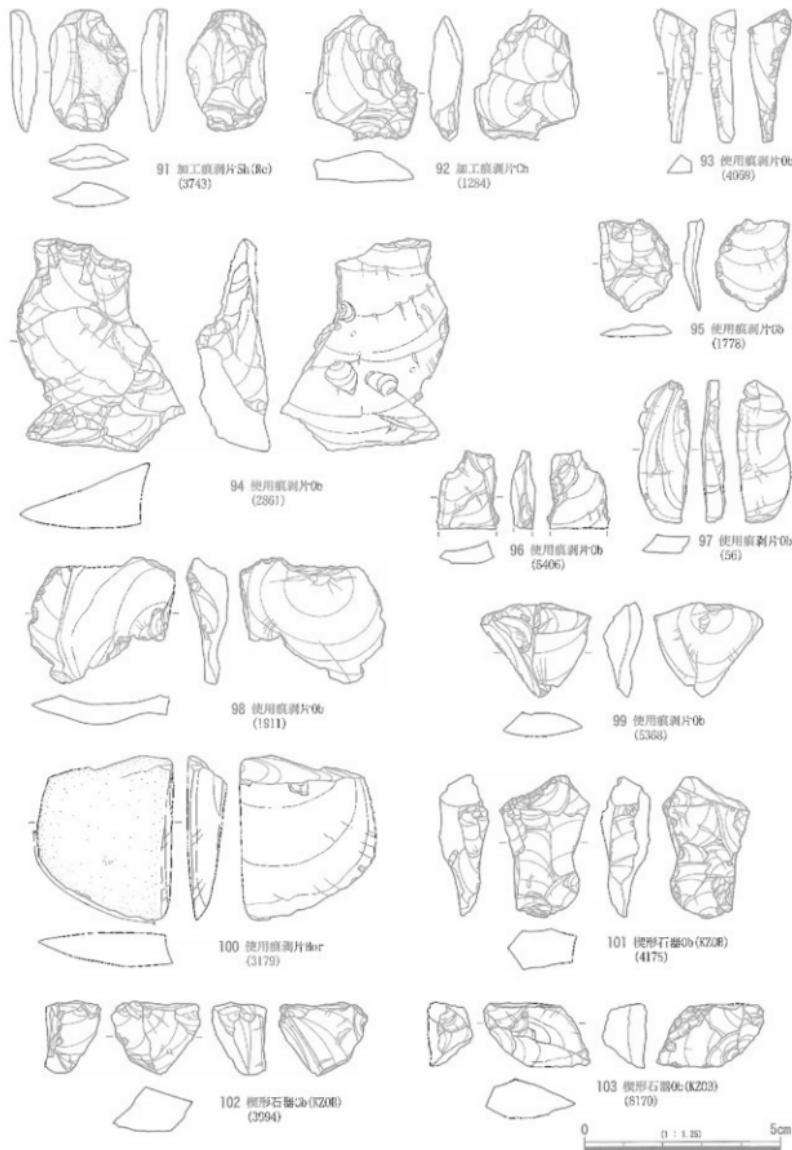
第159図 繩文石器(4)

第160圖 繪文石器(5)



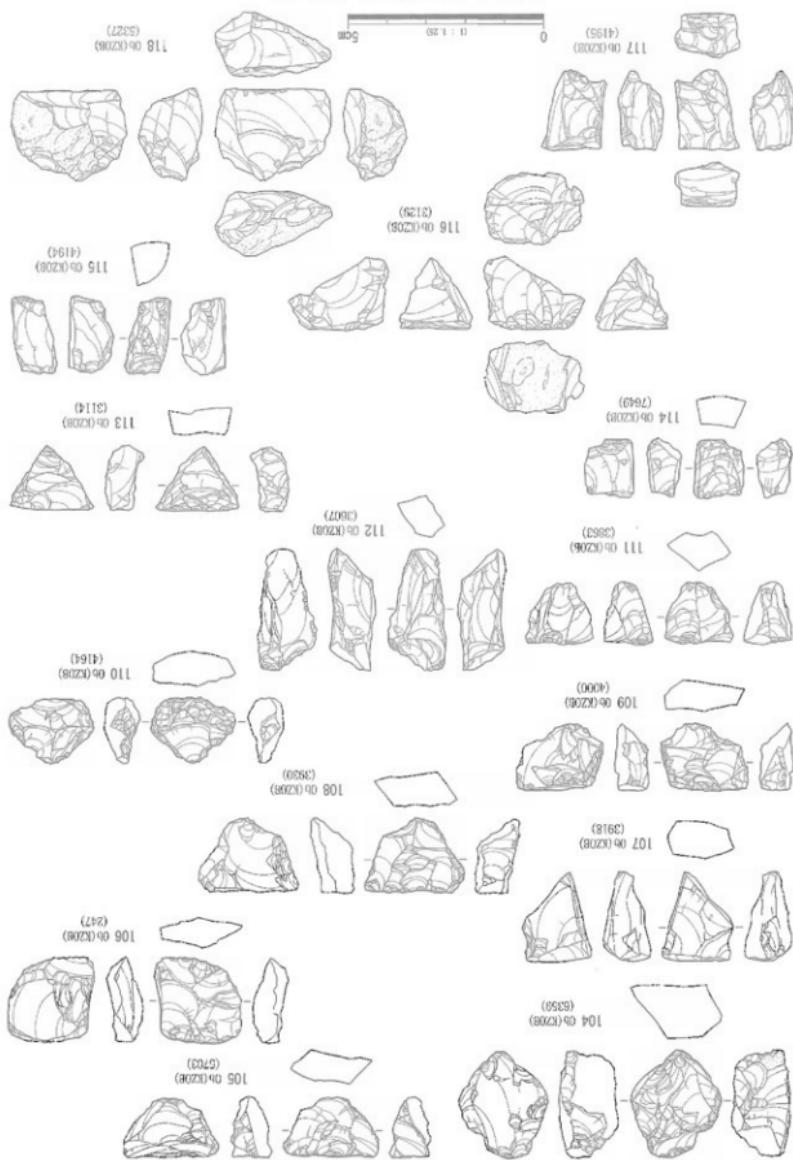


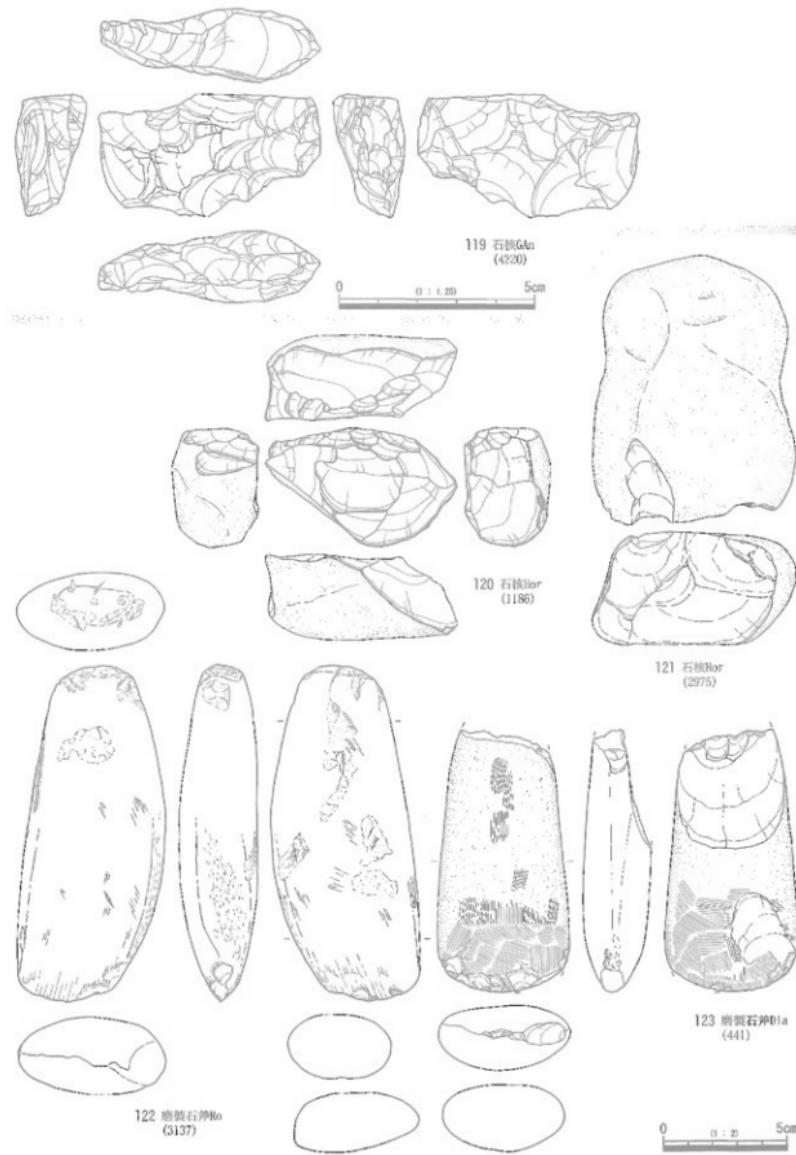
第161図 繩文石器(6)



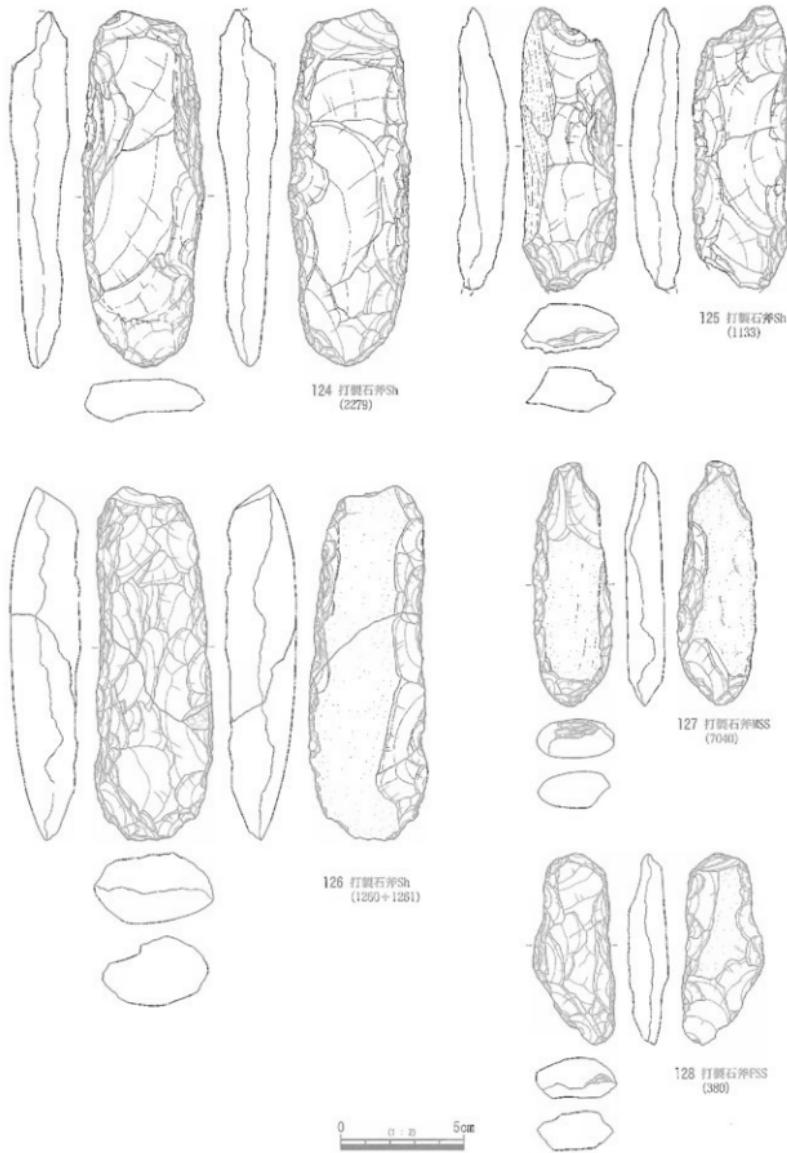
第162図 繩文石器(7)

第163圖 鐾文化石器(8) (圓形石器)

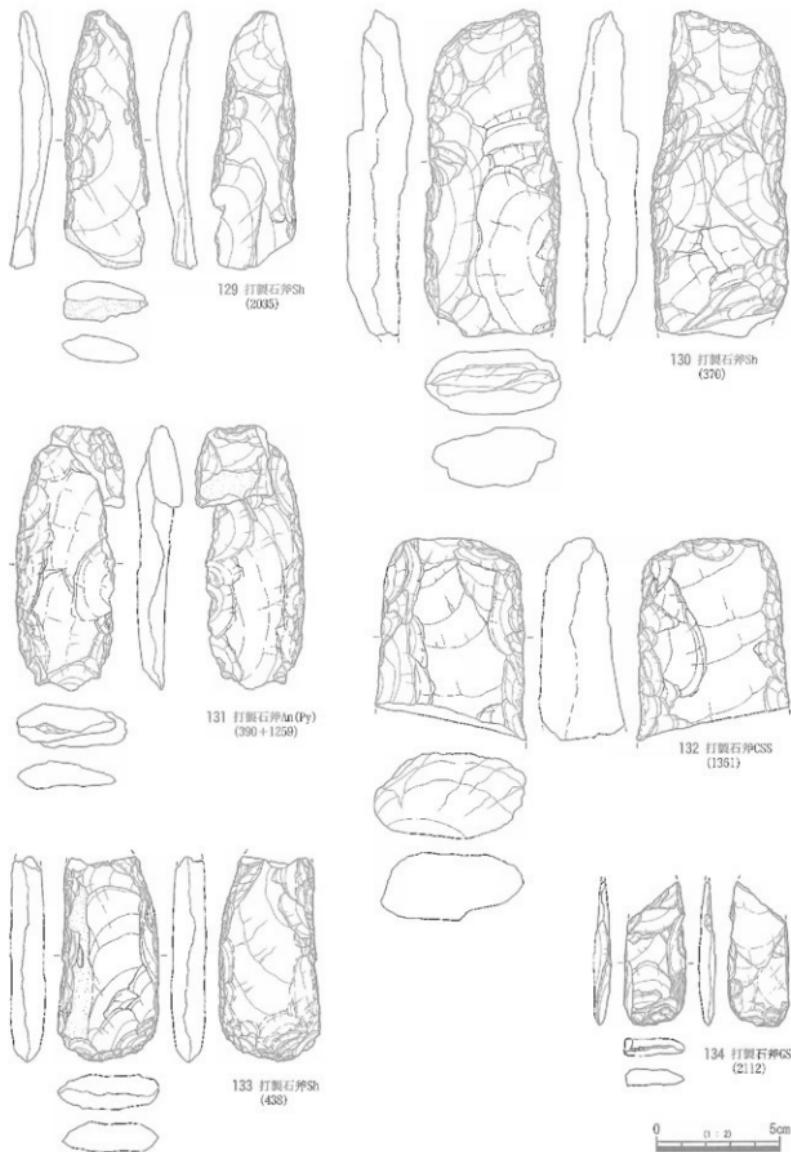




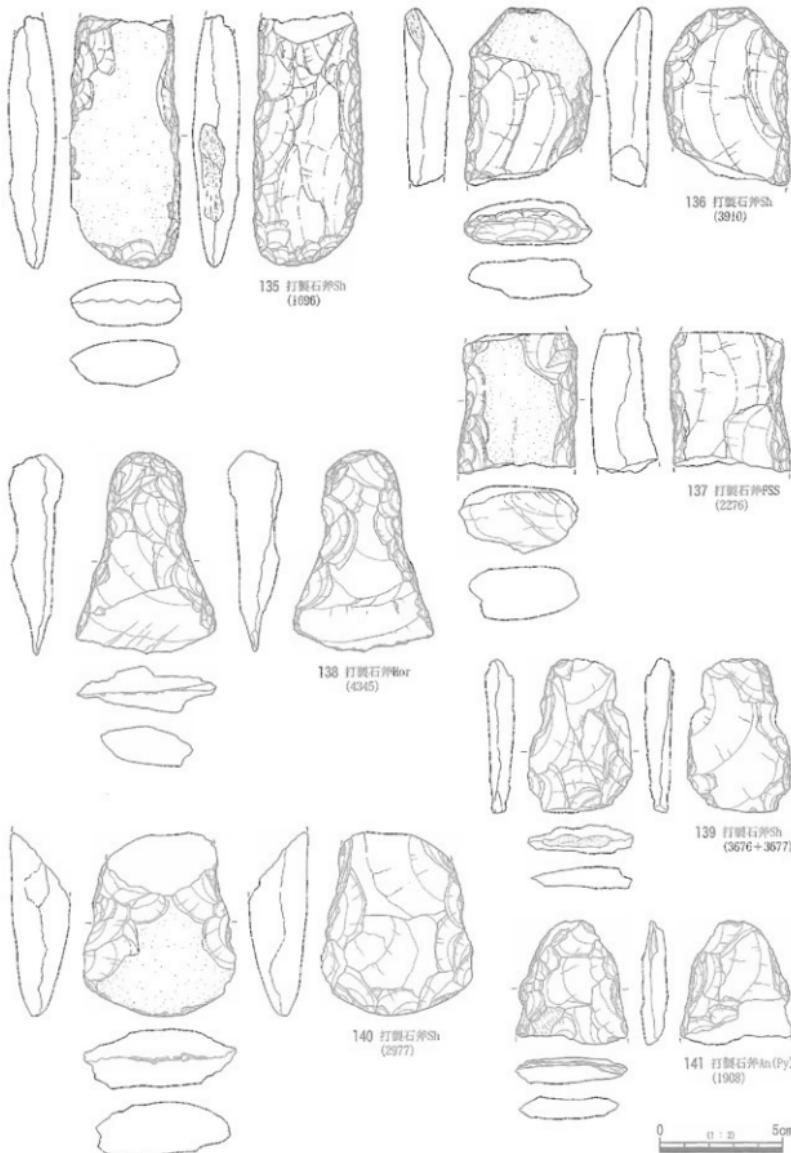
第164図 繩文石器(9)



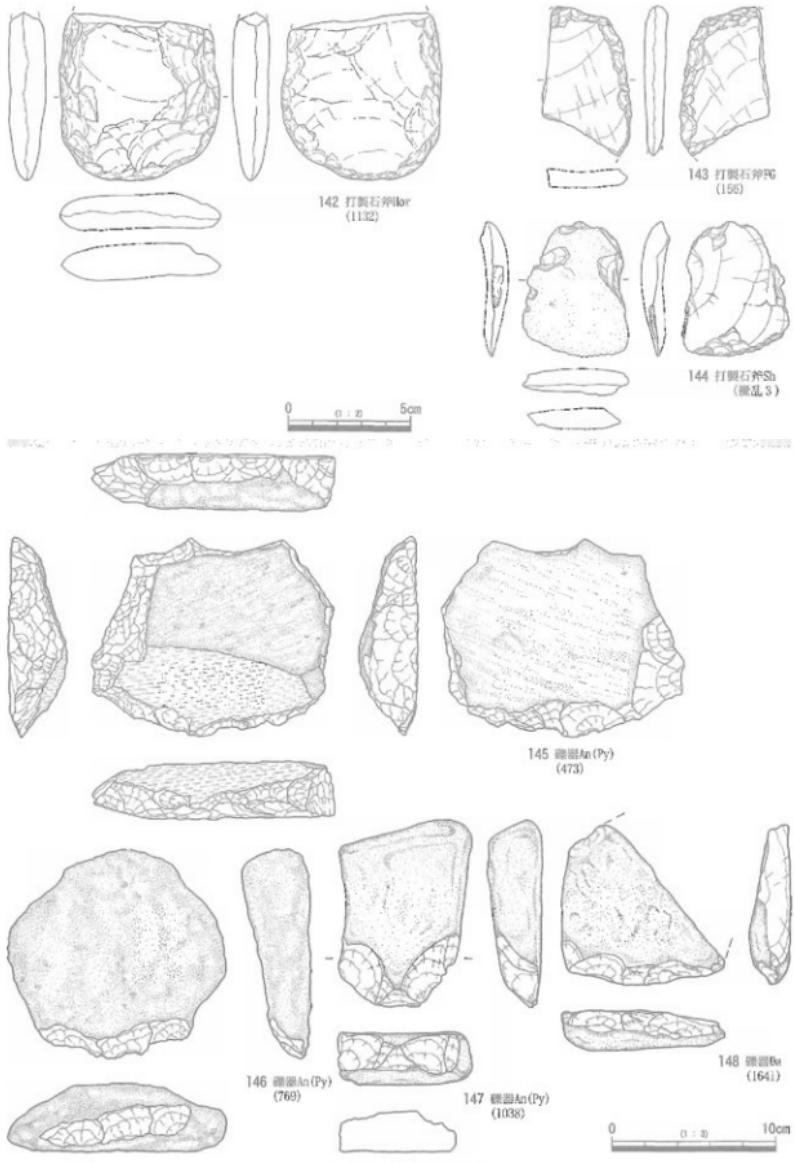
第165図 繩文石器(10)



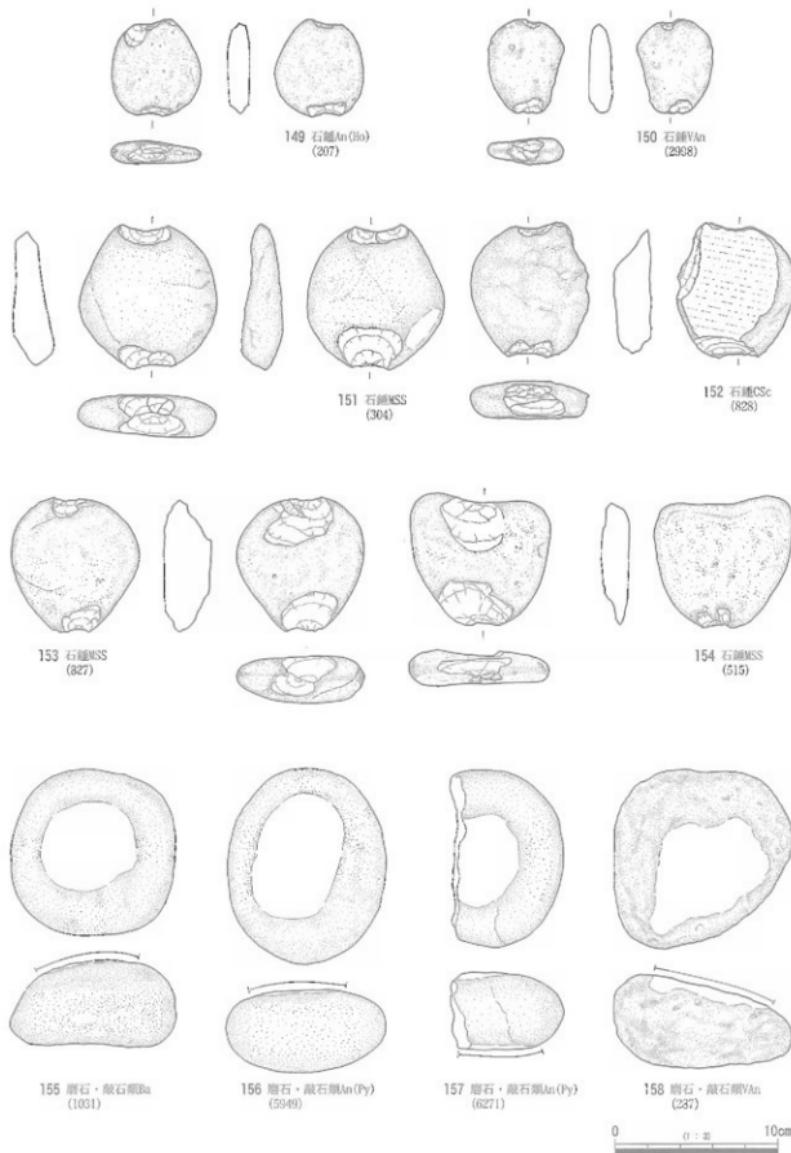
第166図 繩文石器(11)



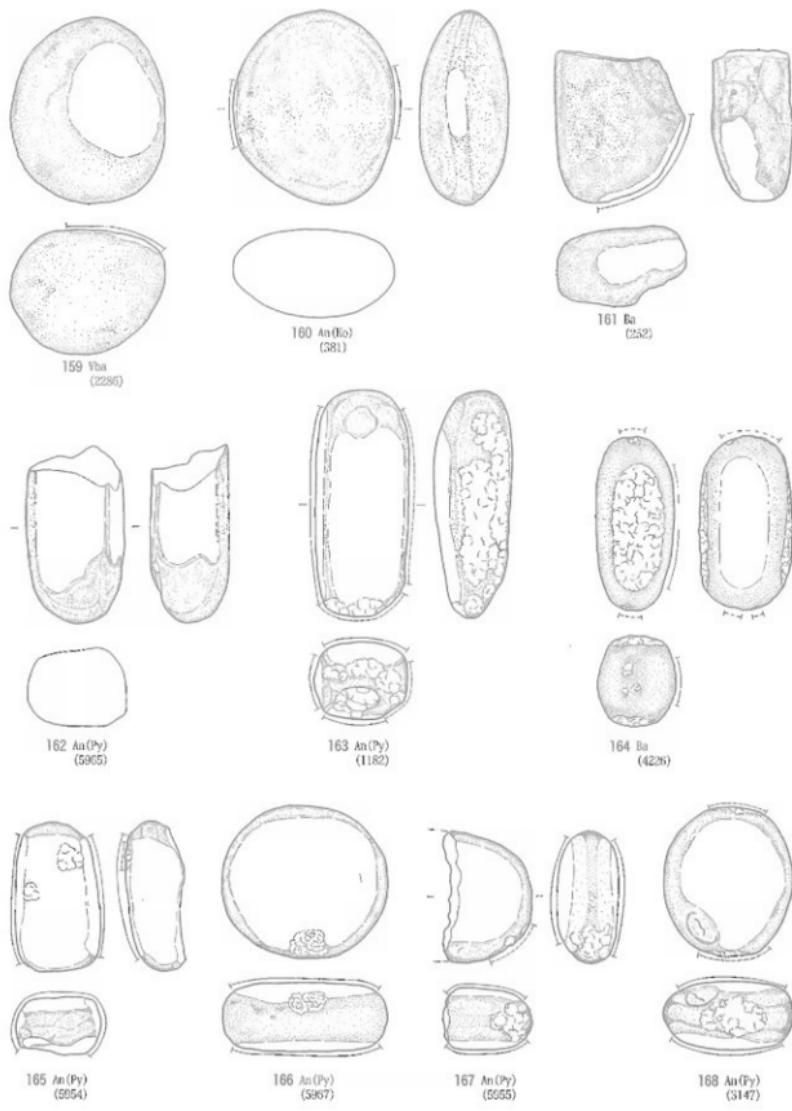
第167図 繩文石器(12)



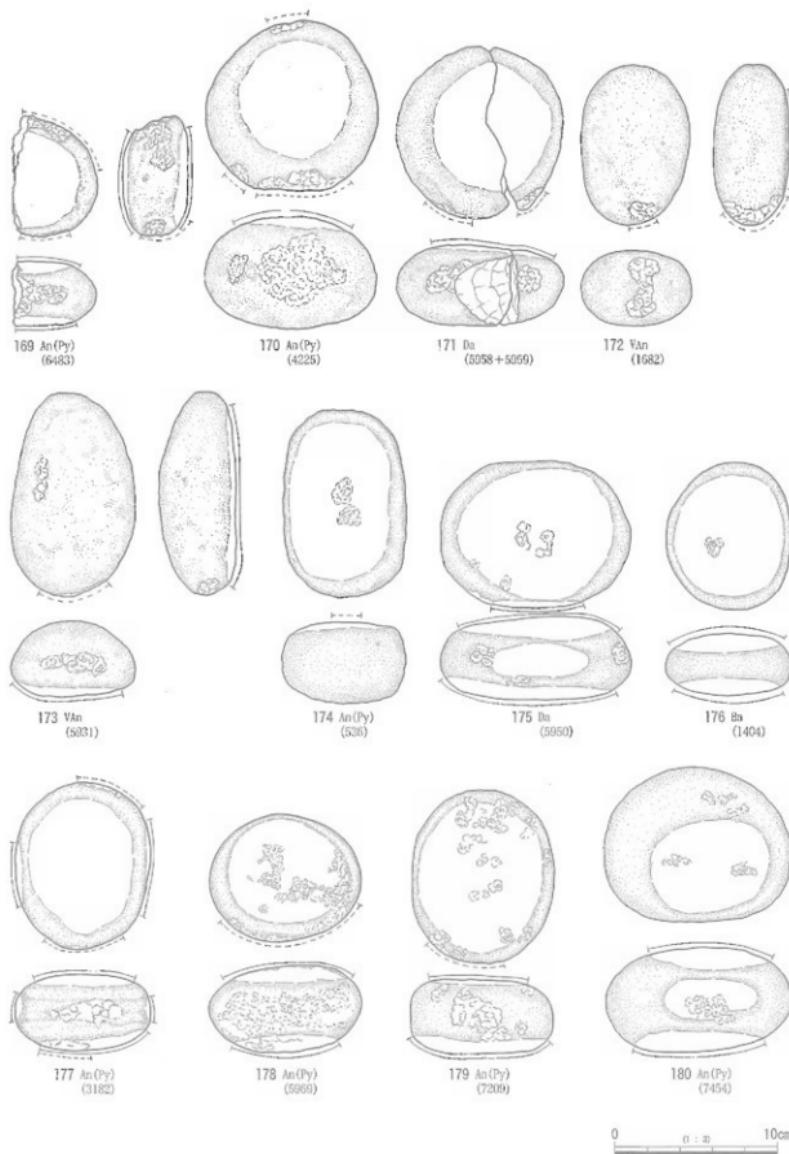
第168図 繩文石器(13)



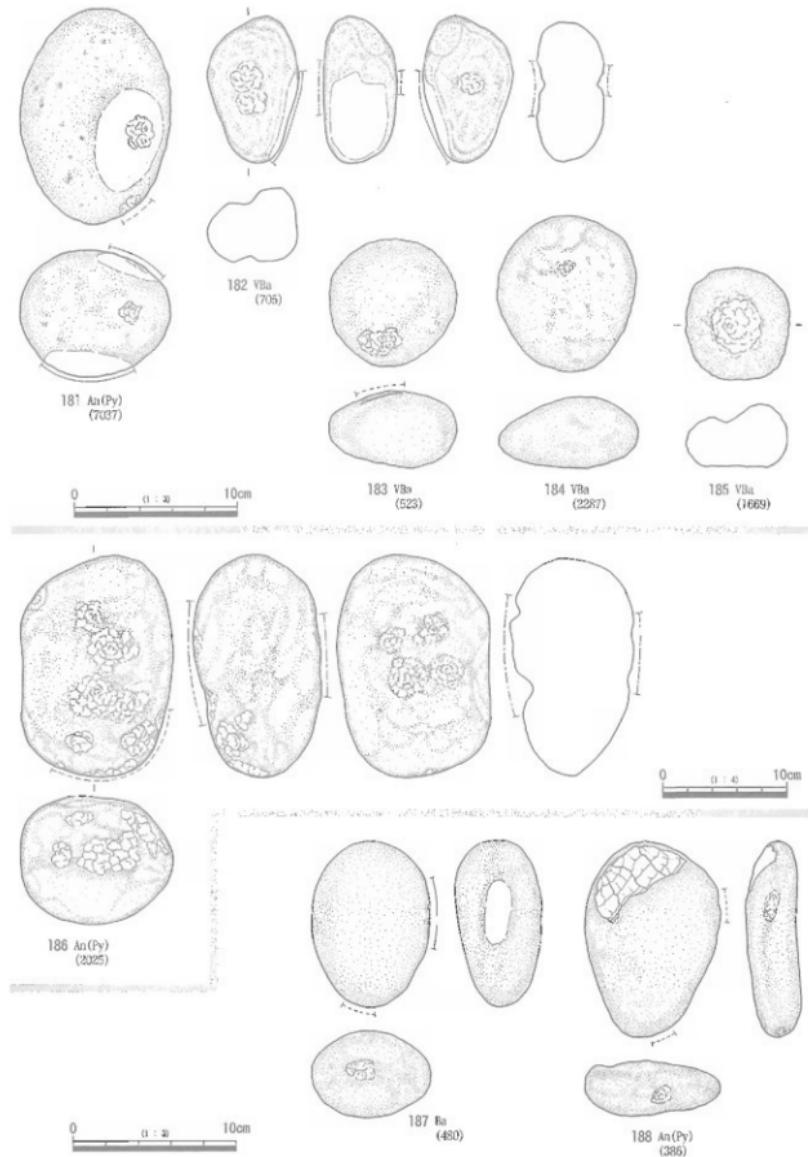
第169図 繩文石器(14)



第170図 繩文石器(15) (磨石・敲石類)

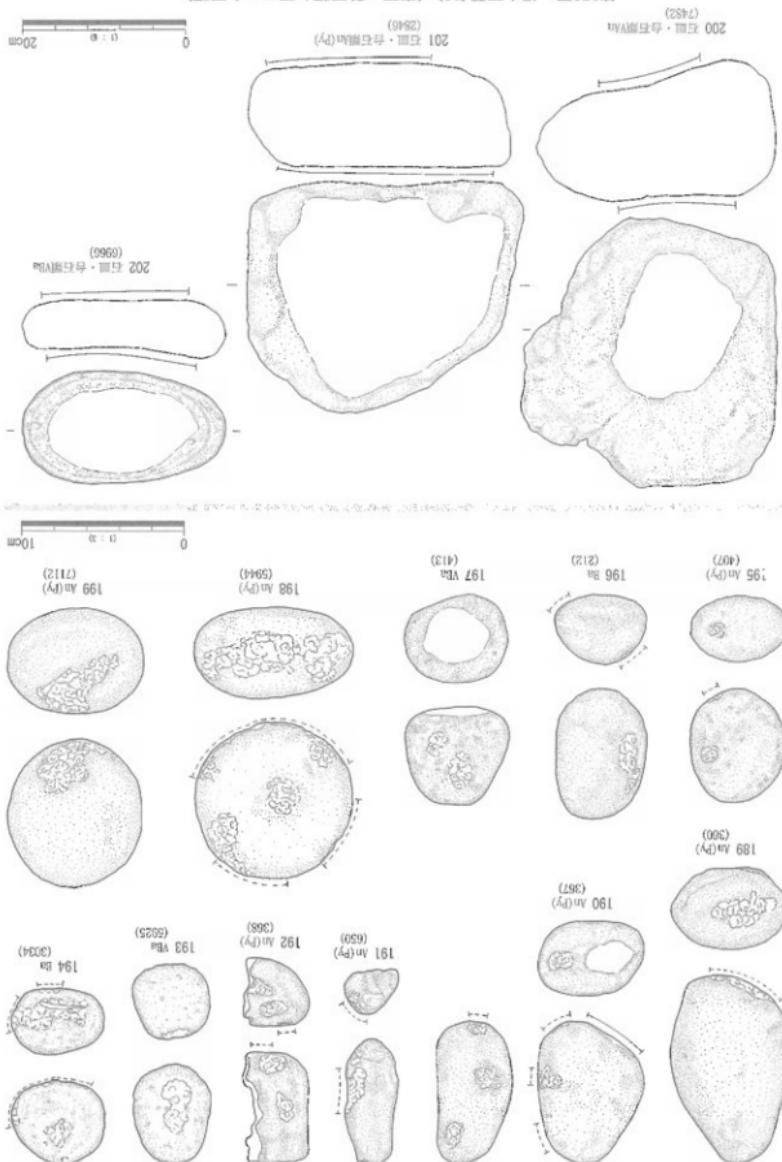


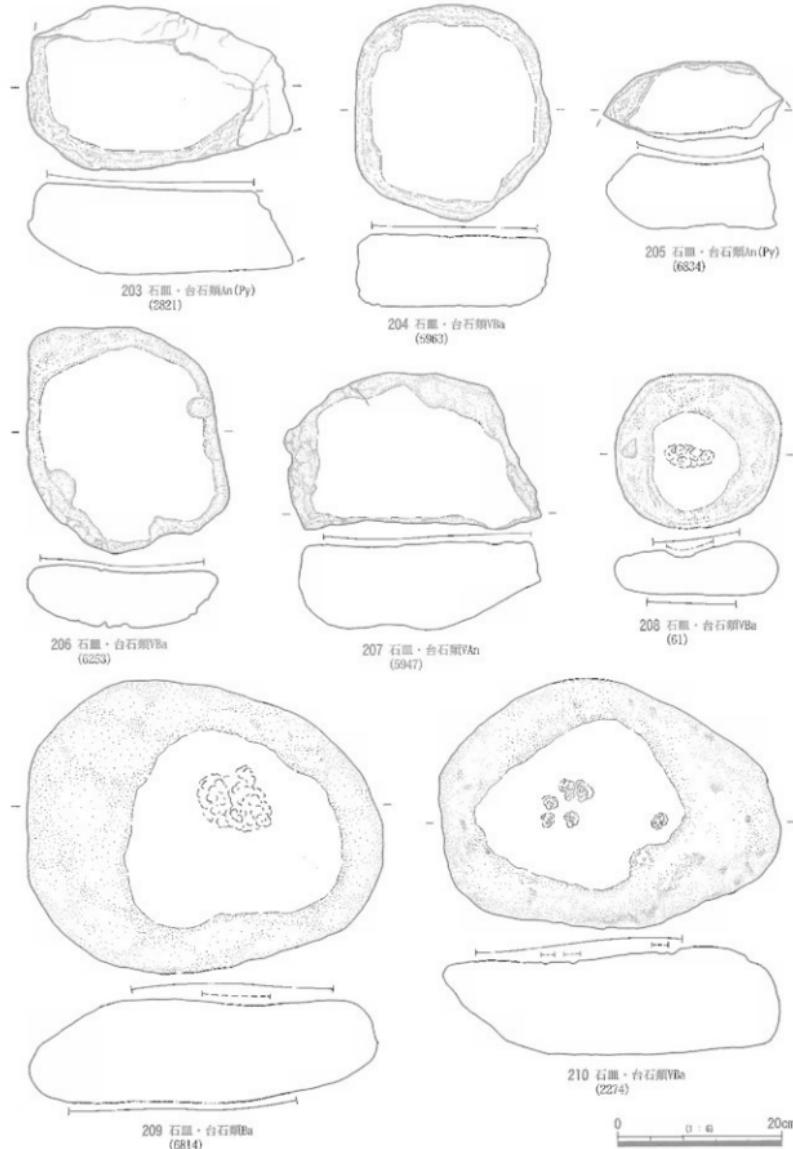
第171図 繩文石器(16) (磨石・敲石類)



第172図 繩文石器(17) (磨石・敲石類)

第173図 漢文石器(18) (磨石・研磨器・石臼・石杵等)





第174図 桜文石器(19)

第4章 入ノ洞B遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経過

(1) 確認調査

確認調査は、平成13年11月から同年12月まで実施した。調査対象地内にテストピットを4か所、トレーナーを5か所設定して重機で表土を0.5m除去した後、人力で掘削して弥生時代までの遺構と遺物の有無をまず調べた。その結果、当該年代の遺構・遺物は認められなかつたが、さらに人力で掘り進めたところ、縄文時代早期のものと思われる遺物を共伴した集石遺構や縄文時代から旧石器時代に至る厚い遺物包含層の存在を確認した。その後、各テストピットとトレーナーにおいて写真と図面による記録保存を行った後、重機で埋め戻し、確認調査を終了した。引き続いて本調査に入る運びとなつたため、その後すぐ、本調査1区の抜根作業等の準備工に着手した。

(2) 本調査

確認調査の結果を受けて、平成14年1月から同年3月（Ⅰ期）、平成14年4月から同年8月（Ⅱ期）までの約8か月間で本調査を実施した。

本調査Ⅰ期

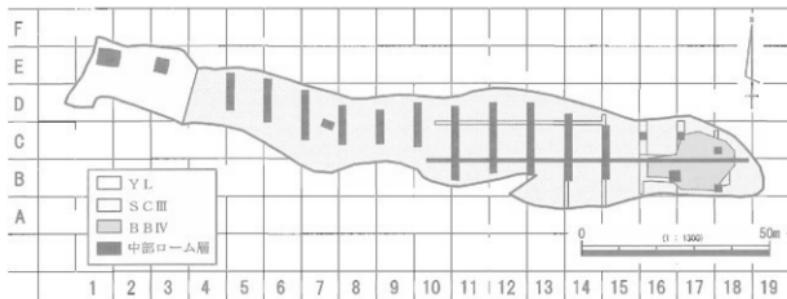
本調査Ⅰ期では、日本道路公団（当時）との協議で高速道路本線部分を先に引き渡すことが決まったため、先行調査する本線部分の1区、作業ヤード部分となる2区の計1,700m²を対象として調査した。

1区は、1月第2週に調査を始めた。重機で表土を除去した後、縄文時代の集石の調査等を行った。1月半ばからは、富士黒色土層まで人力で掘り進めた。1区の調査では中央の丘陵部から複数の柱穴を有する竪穴状遺構が検出されたため、床面や掘り方、また覆土等を精査した結果、住居跡であることがわかった。その他の縄文時代の遺構・遺物としては、集石、焼土、及び縄文時代早期～前期の土器が見つかり、各々実測と写真撮影を行った。1月下旬には、休場層の人力掘削に着手した。休場層の完掘状況を撮影し、出土遺物等の記録、取り上げを行つた。その後は、更に下層の調査を進めるためトレーナー掘削を開始した。そして、約2万7千年前の第III黒色帯における陥穴の有無を調べたが、本遺跡では確認することができなかつた。その後、さらに中部ローム層まで掘削、精査し、測量・写真等の記録作業を完了し、調査を終えた。1区は2月第3週に埋め戻し作業を行い、調査を完了して引き渡した。

2区の調査は1月末に始めた。重機で抜根と表土除去をした後、発掘調査の作業ヤード確保のために2区は東端部からの先行調査となつた。東端部の縄文時代の集石遺構等を精査した後、トレーナーとテストピットを設け、2月末から下層の旧石器時代の調査に入った。3月上旬になって調査区東端の尾根先端部にあたるグリッドで、テストピット内の第IV黒色帯相当から局部磨製石斧が単独で出土したため、更にトレーナーを拡張した。しかし、周辺やそれ以下からは遺構や遺物が見つからなかつたため埋め戻しを行い、当該年度の2区の調査を終了して3月末に本調査Ⅰ期が完了した。なお、2区東端部を除く約700m²相当が未調査のまま残つたため、そこは次年度の本調査Ⅱ期の対象となつた。本調査Ⅰ期では遺跡全体の約60%の調査を完了し、実掘削面積は1,000m²であった。

本調査Ⅱ期

平成14年4月から始めた本調査Ⅱ期では、3区・4区として設定された調査範囲計2,125m²の調査を前年度に統いて行った。まず3区の縄文時代相当層を人力で掘り進め、4月下旬には高所作業車で縄文時代の遺構と遺物の出土状況を撮影した。5月半ばにはトレンチを設けて休場層(YL)を人力で掘り進め、6月には石器ブロックに当たった部分の調査範囲を拡張した。その他のトレンチ部分は第Ⅲスコリア帯(SCⅢ)上面まで掘削した。7月には残る4区の表土除去に着手し、縄文時代の遺物包含層の調査を進めた。その後は、SCⅢ上面を精査して陥穴の有無を確認し、更にトレンチを設定して、土層の堆積状況を確認しながら中部ローム層まで掘削した。8月上旬には全調査区の調査と測量、写真撮影が終了し、重機による埋め戻しと撤去工を行い、本調査がすべて完了した。



第175図 グリッドと調査範囲

2 基本層序と土層の堆積状況

(1) 堆積状況 (第176図～第179図)

調査区全体は、愛鷹山の南東麓に延びる痩せ尾根上に位置する。調査区の西側から中央付近までは標高約230mを測り、次第に高度を下げ標高225m付近で、東側の尾根の頂部に至る。西側では全体が南側に向かって大きく傾斜し、東側では尾根筋から谷に向かう緩斜面に沿っている。したがって西側では、遺物の垂直分布（第175図 遺物分布図）も斜面地に沿って流れ落ちたような堆積状況を呈している。東側では富士黒土層および休場層出土の遺物も、南北方向での垂直分布は調査区西側ほど大きな高低差が認められない。富士黒土層ならびに休場層で確認された遺構は、東側の尾根平坦部に位置している（第193図 縄文時代 遺構配置図参照）。

本遺跡の堆積状況は、愛鷹・箱根山麓標準土層とほぼ一致し、概ね良好であった。土層断面図（第176図）の縦断面で観察される通り、調査区西側から東側の尾根の突端に向かう緩斜面に沿って堆積していることがわかる。また、横断面より第Ⅰスコリア層以下はかなりフラットな堆積状況を呈している。なお、グリッド13より東側では休場層以下において断層が認められた。全体的に黒色土の発色が悪く、色調が薄い。特に休場層直下黒色帶(B B O)から下層の黒色帶は、褐色に近い程である。

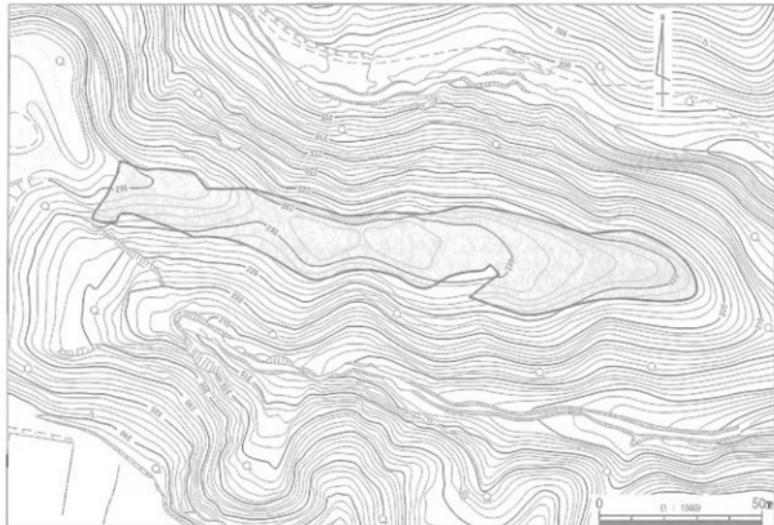
縄文時代の遺物が出土するのは栗色土層～富士黒土層(K U～F B)である。旧石器時代の遺物は休場層中位(Y L M)を中心として出土した。また、第IV黒色帶(B B IV)から局部磨製石斧が出土した。

(2) 基本層序 (第180図)

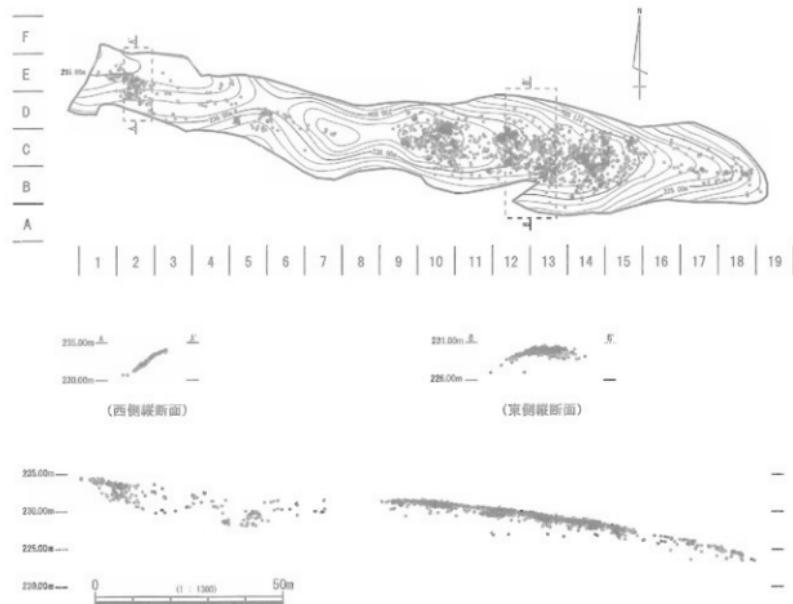
第2層は暗褐色土層である。砂沢スコリアを含む。

第3層は暗褐色土層である。カワゴ平パミスを多量に含む。仙石スコリアを少量含む。

第4層は栗色土層(K U)である。



第176図 調査区と周辺地形



第177図 遺物分布図

第5層は富士黒土層(F B)である。

第6層は褐色土から暗褐色土への漸移層(Z N)であるが、確認できないところもあった。

第7～11層は休場層(Y L)である。土壤の色調と質感に応じて、休場層上位(Y L U)、同中位(Y L M)、同下位(Y L L)に分層した。赤色スコリアを含み、休場層上位から下位にいくに従って、スコリアの径は大きく、含有量も増すようになる。休場層上位と中位の間、中位と下位の間に挟まれて、赤色スコリアのブロックが認められた。

第12層は休場層直下黒色帶(B B O)である。赤色・黒色スコリアを少量含む。黒色土の発色が弱い。

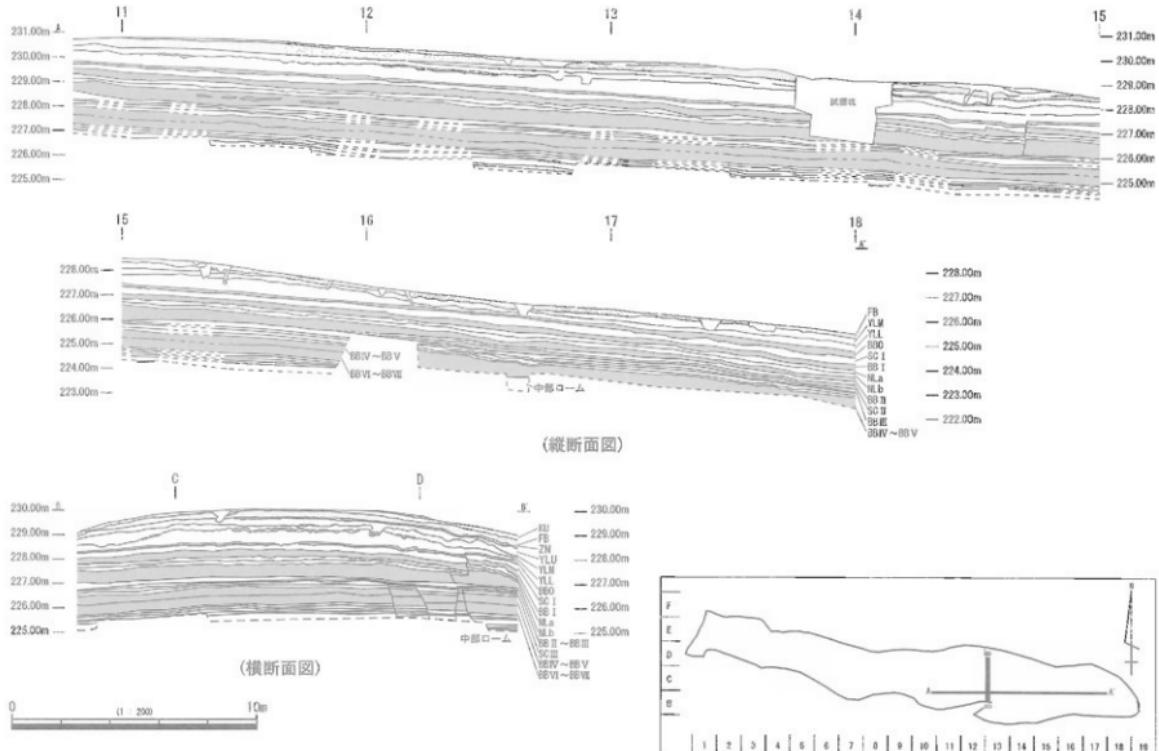
第13層は第Iスコリア層(S C I)である。褐色土を主体に赤色スコリアと黄色粒子を含む。粒径大の黒色スコリアを多量に含む。

第14層は第I黒色帶(B B I)である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。全体的には黒色の発色が弱いが、下部はやや黒味がある。

第15・16層はニセローム層(N L)である。黄褐色土を主体に赤色・黒色スコリアの含有量の多い上部(N L a)と、姶良丹沢広域火山灰(A T)の含有量が多い下部(N L b)に分層した。

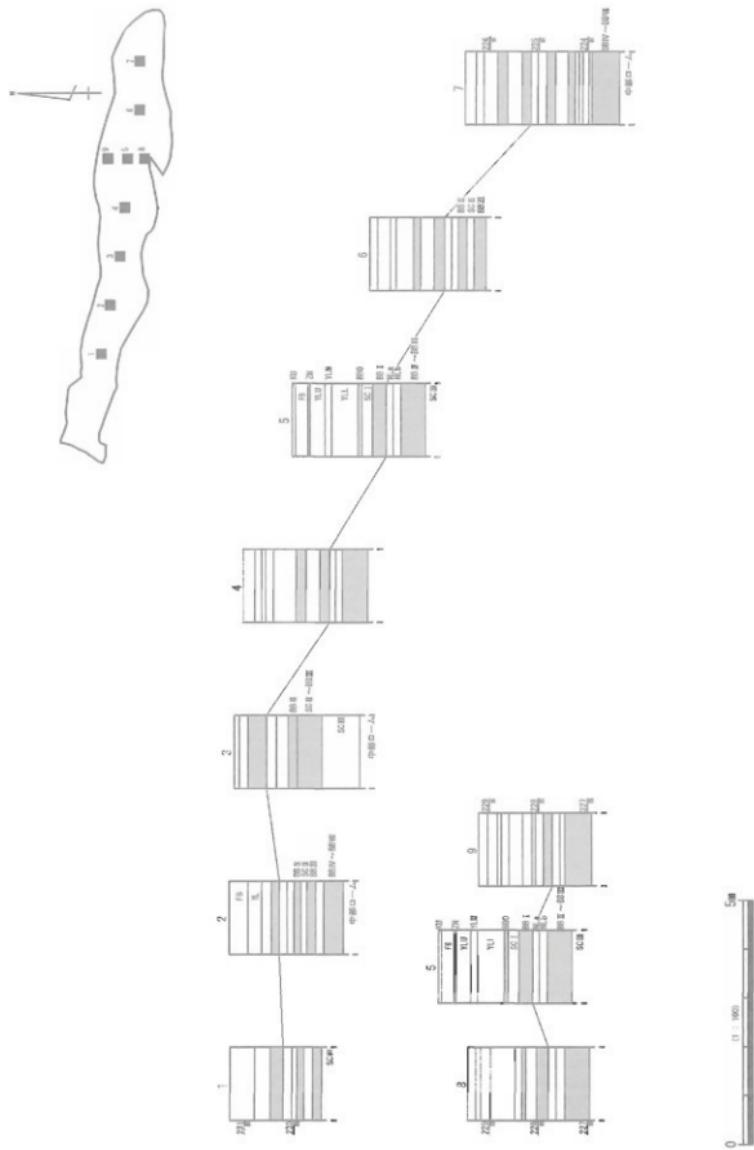
第17層は第II黒色帶(B B II)である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。黒色の発色が大変弱い。

第18層は第IIスコリア層(S C II)である。褐色土を主体に赤色スコリアを多量に、黒色スコリアを含む。第II黒色帶と第III黒色帶の間に包含される層であるが、調査区の中央部に於いては確認できなかつた。



第178図 土層断面図

第179図 土層柱状図



第19層は第III黒色帶(BB III)である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。黒色の発色が大変弱い。

第20～23層は第IIIスコリア帶(SC III)である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。特に第21層は、赤色・黒色・黄褐色スコリアがブロック状に含まれ、非常に硬質となっている。愛鷹・箱根山麓標準土層における第IIIスコリア帶スコリア4(SC III s 4)に相当すると考えられる。

第24層は第IV黒色帶(BB IV)から第V黒色帶(BB V)である。暗褐色土を主体に赤色スコリアと粒径大の黒色スコリアを含む。

第25層は第VI黒色帶(BB VI)から第VII黒色帶(BB VII)に相当する。暗褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。第24層に類似するが、黒色スコリアの含有量は減る。

第26層は中部ローム層である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアと白色粒子を含む。

第27層はスコリア層(SC)である。褐色土を主体に粒径大の赤色スコリアを含む。粒径大の黒色スコリアを少量含む。

第28層は中部ローム層である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアと白色粒子を少量含む。

第29層はペアスコリア層1である。褐色土を主体に粒径小の赤色スコリアと黒色スコリアを含む。

第30層は中部ローム層である。暗褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。上層に比べ黒味が強い。

第31層はペアスコリア層2である。暗褐色土を主体に赤色スコリアを多量に含み、黒色スコリア、黄色粒子を含む。

第32層は中部ローム層である。暗褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。

第33層はスコリア層(SC)である。暗褐色土を主体に赤色スコリアを多量に含み、黒色スコリアを含む。

第34層は中部ローム層である。暗褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。

第35層はスコリア層(SC)である。暗褐色土を主体に赤色スコリアを多量に含み、黒色スコリアを含む。黄色粒子を含む。

第36層は中部ローム層である。暗褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。

第37層はスコリア層(SC)である。褐色土を主体に黒色スコリアを含む。黄褐色土をパッチ状に含む。

第38層は中部ローム層である。褐色土を主体に赤色・黒色スコリアを含む。黄褐色土をパッチ状に少量化む。

なお、確認調査において堆積状況が良好である土壤をサンプルとして採取し、テフラ検出分析を(株)パレオ・ラボに委託した(附編2参照)。

<柱状図>		<層名>	<色調>
0	表土		7. 5 YR3/3
1	暗褐色土層（砂沢スコリアを含む層）		7. 5 YR3/3
3	暗褐色土層（カワゴ平バミスを含む層）		7. 5 YR3/2
4	栗色土層	K U	7. 5 YR3/2
5	富士黒土層	F B	7. 5 YR3/3
6	漸移層	Z N	7. 5 YR3/2
7	休場層上位	Y L U	10 YR4/6
8	スコリア層	S C	10 YR4/6
9	休場層中位	Y L M	▲◆ 10 YR4/6
10	スコリア層	S C	7. 5 YR3/4
11	休場層下位	Y L L	○ 7. 5 YR3/4
12	休場層直下黑色帶	B B O	7. 5 YR3/4
13	第Iスコリア層	S C I	7. 5 YR4/6
14	第I黒色帶	B B I	7. 5 YR3/4
15	ニセローム層	N L a	10 YR5/8
16	ニセローム層（A T多量）	N L b	10 YR5/8
17	第II黒色帶～第III黒色帶	B B II	7. 5 YR4/6
18	第IIスコリア層	S C II	7. 5 YR4/6
19	第III黒色帶	B B III	7. 5 YR4/6
20	第IIIスコリア帶スコリア1	S C III s 1	7. 5 YR4/6
21	第IIIスコリア帶スコリア2	S C III s 2	7. 5 YR4/4
22	第IIIスコリア帶黒色帶2～スコリア3	S C III b 2～s 3	7. 5 YR4/4
23	第IIIスコリア帶スコリア4	S C III s 4	7. 5 YR4/4
24	第IV黒色帶～第V黒色帶	B B IV～B B V (局部磨製石斧)	7. 5 YR3/4
25	第VI黒色帶～第VII黒色帶	B B VI～B B VII	7. 5 YR3/4
26	中部ローム層		7. 5 YR4/6
27	スコリア層	S C	7. 5 YR4/6
28	中部ローム		7. 5 YR4/4
29	ペアスコリア層1		7. 5 YR4/4
30	中部ローム層		10 YR3/4
31	ペアスコリア層2		7. 5 YR3/4
32	中部ローム層		7. 5 YR3/4
33	スコリア層	S C	7. 5 YR3/4
34	中部ローム層		7. 5 YR3/4
35	スコリア層	S C	7. 5 YR3/4
36	中部ローム層		7. 5 YR3/4
37	スコリア層	S C	10 YR4/6
38	中部ローム層		7. 5 YR4/4

- 住居跡
- 集石
- ▲ 石器ブロック
- 土坑
- ◆ 繩群

第180図 基本土層図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

旧石器時代の遺構は、休場層下位～中位で検出されており、石器ブロック3基、礫群1基、土坑1基が検出されている。

遺物は、第IV黒色帯から休場層までの層位において確認されたが、石器194点、礫52点、炭化物39点の合計285点と総数は少ない。石器は第IV黒色帯、第I黒色帯、休場層より出土している。第IV黒色帯からは局部磨製石斧が1点出土している。石器の出土は休場層に集中し、その下位～中位では在地系の石材である箱根烟宿産の黒曜石が石器ブロック2基を形成し、上位からは信州系を主体とする黒曜石のナイフ形石器や尖頭器が散漫に出土した。

本遺跡では石器の出土層に合わせ、第IV黒色帯を第I文化層、第I黒色帯を第II文化層、休場層下位～中位を第III文化層、休場層上位を第IV文化層に設定した。

第IIIスコリア帯、第II黒色帯、休場層直下黒色帯からも礫の出土が見られたが、そのほとんどが火山性の礫と判断されたため、文化層の設定は行わず、参考資料として本節の末尾に記載する。

なお旧石器時代の黒曜石は、分析可能なもののすべてについて蛍光X線による産地分析を行った。

第46表 旧石器時代 石器組成表

《石材別》	黒曜石					ホルンフェルス	ガラス質黒色安山岩	輝石安山岩	玄武岩	計
	箱根烟宿群	諏訪星ヶ台群	和田鹿山群	蓼科冷山群	産地不明					
第I文化層(BBIV)							1			1
第II文化層(BBI)						1				1
第III文化層(YLL～YLM)	114				53	7	2	1	1	125
第IV文化層(YLU)	2	7	2	1		2				14
計	116	7	2	1	0	10	2	1	1	141

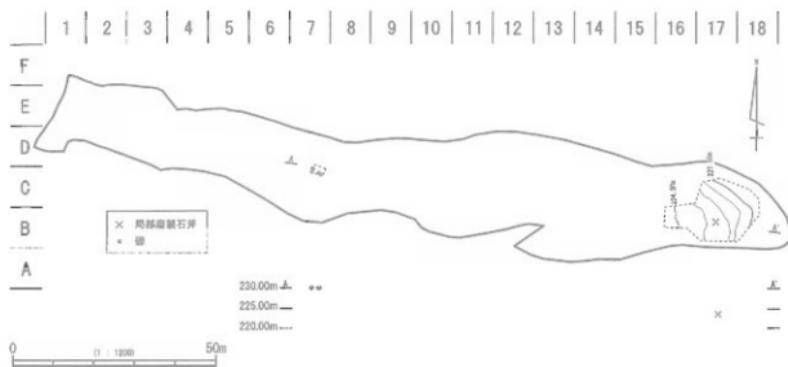
*遺物が小さすぎて分析できなかったもの。ほぼ全点が箱根烟宿群と推定される。

《器種別》	ナイフ形石器	尖頭器	器	台形石器	加工痕剥片	使用痕剥片	石核	石刃	剥片・碎片	局部磨製石斧	計
第I文化層(BBIV)										1	1
第II文化層(BBI)										1	1
第III文化層(YLL～YLM)	6	1	1		1	2	1	166		178	
第IV文化層(YLU)	5	4			1		1		3		14
計	11	4	1	1	1	1	3	1	170	1	194

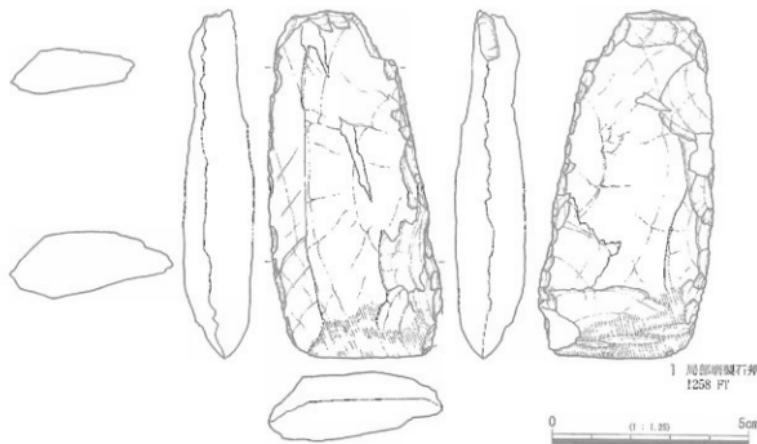
2 第I文化層(B BIV)の遺物

第IV黒色帶からは石器1点、礫5点が出土している。石器は、局部磨製石斧(第182図1)が調査区東端のテストピット中から単独で出土した。やや縁がかった細粒凝灰岩の横長剥片を素材とする。左右の側縁からの調整が主体だが、基部側からも若干の調整がなされる。いずれも比較的平坦な調整剥離である。背面左側縁への調整は乏しい。右側縁が刃部に対して傾斜するため、刃部に向かって広がっていく形態となる。研磨は両面になされ、直線的な刃部を作り出す。研磨の範囲は刃部周辺に限定され、研磨方向は刃部に対してやや左に傾く。

礫は、調査区中央部西よりの確認調査時のテストピットから小礫5点がまとめて出土した。



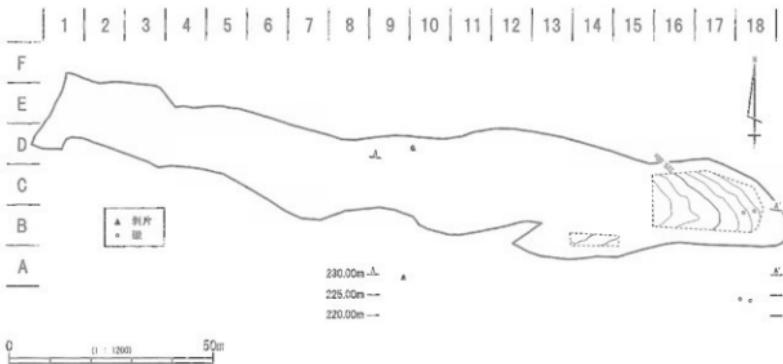
第181図 第I文化層 遺物分布図



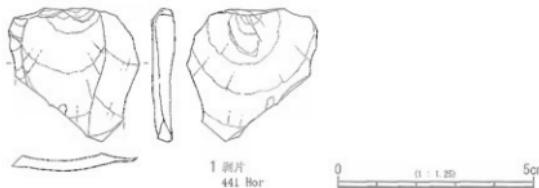
第182図 第I文化層 出土石器

3 第II文化層(BB I)の遺物

第I黒色帶からは石器1点と礫3点が出土した。石器はホルンフェルスの剥片(第184図1)で、調査区中央部北側から単独で出土した。下半が新しく欠損しているため詳細は不明だが、背面には主要剥離と同一方向の剥離が並んでおり、薄い縦長の剥片であった可能性が高い。礫は調査区東端から3点出土した。



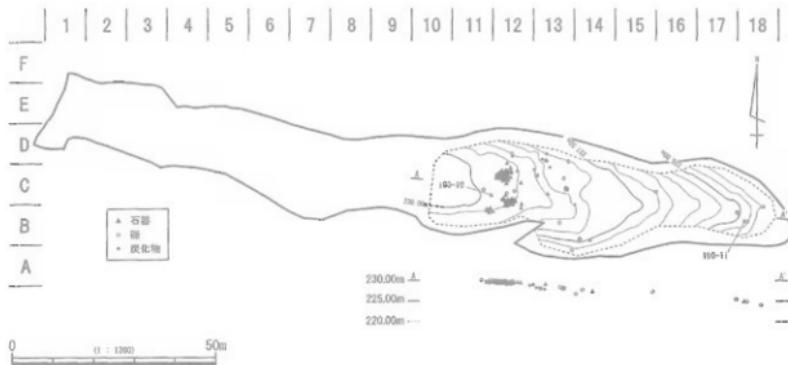
第183図 第II文化層 遺物分布図



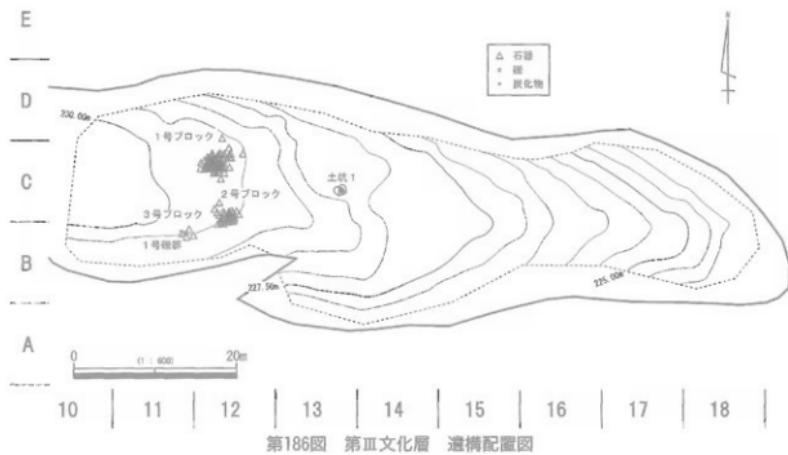
第184図 第II文化層 出土石器

4 第III文化層(YL L~YL M)の遺構と遺物

休場層下位～中位からは、石器製作址と考えられる箱根烟宿産黒曜石の石器ブロックが2基、礫群を伴ったホルンフェルスの石器ブロックが1基、埋土中にガラス質黒色安山岩のナイフ形石器を含む土坑が1基検出された。遺物は石器194点中167点を黒曜石が占め、碎片が多くかつたため産地分析ができないかったものが53点あったが、肉眼観察によりほぼ全点が箱根烟宿産の黒曜石と推定される。礫は6点からなる1号礫群を含め、23点が出土した。これらの遺構、遺物はいずれも調査区の東側半分に分布しており、特に遺構はほぼ調査区中央部の尾根部より検出されている。



第185図 第III文化層 遺物分布図



第186図 第III文化層 遺構配置図

1号石器ブロック (第186図～第188図 1～4)

調査区中央部の尾根上の平坦地(グリッド C-12)に位置する。南には約5m離れて2号ブロック、南西方向に約10m離れて3号ブロックが検出されている。遺物の検出層位はY LMである。出土した石器114点は全てが箱根烟宿黒曜石と推定される。碎片が中心ではあるが、中には比較的大きい剥片も含まれており、この場所で一定程度剥片剥離が行われたと考えられる。

ナイフ形石器3点は、いずれも一側縁に二次加工が施される。いずれも急斜度剥離である。また、すべて折損している。1は左側縁に整形剥離がなされるが、基部には加工がなされない。末端部に自然面が残る綫長剥片を、打点側がナイフ形石器先端側にくるように用いている。先端部を折損する。2は左

第47表 第III文化層 石器ブロック組成表

遺構名	石 材		ナイフ形石器	攝器	使用痕剥片	石核	剥片・碎片	計
1号石器ブロック	黒曜石(箱根烟宿群)	HNHJ	3	1	1		109	114
2号石器ブロック	黒曜石(箱根烟宿群)	HNHJ	2			2	46	50
3号石器ブロック	ホルンフェルス	Hor					6	6
計			5	1	1	2	161	170

側縁に二次加工が施されている。平坦な縦長の剥片を素材とし、打点側がナイフ形石器先端側にくるよう用いている。先端部を折損する。3は右側縁に調整がなされ、基部および先端部を折損する。

彌器(4)は厚みのある不定形な剥片の末端部および右側縁打点側に調整を行っている。左側縁の折れは素材剥片剥離時に生じたものと考えられる。

剥片・碎片は大きさにばらつきがあり、その中でも大きなものの中には使用痕の認められるものもある。

2号石器ブロック (第186図～第188図 5～8)

1号石器ブロックの南約5m付近に位置し、遺物の検出層位はY LMである。1号石器ブロックより規模は小さいものの、石核2点と剥片・碎片を含むことから、剥片剥離が行われたと考えられる。石器50点全てが箱根烟宿産黒曜石と推定される。

ナイフ形石器2点は、両者とも二側縁に二次加工が施される。5は不定形の剥片を横位に用い、素材剥片の打点・打面が残存している。基部寄りの二次加工が腹面側から施されるのに対して、先端では背面側からなされている。先端部には折れ面が残るが、この折れは二次加工に先行するものである。基部は明確には作り出されない。6は背面に広い剥離面をもつ剥片を素材に用いている。右側縁および左側縁先端部側を腹面から調整するのに対して、左側縁基部側は背面から調整がなされている。

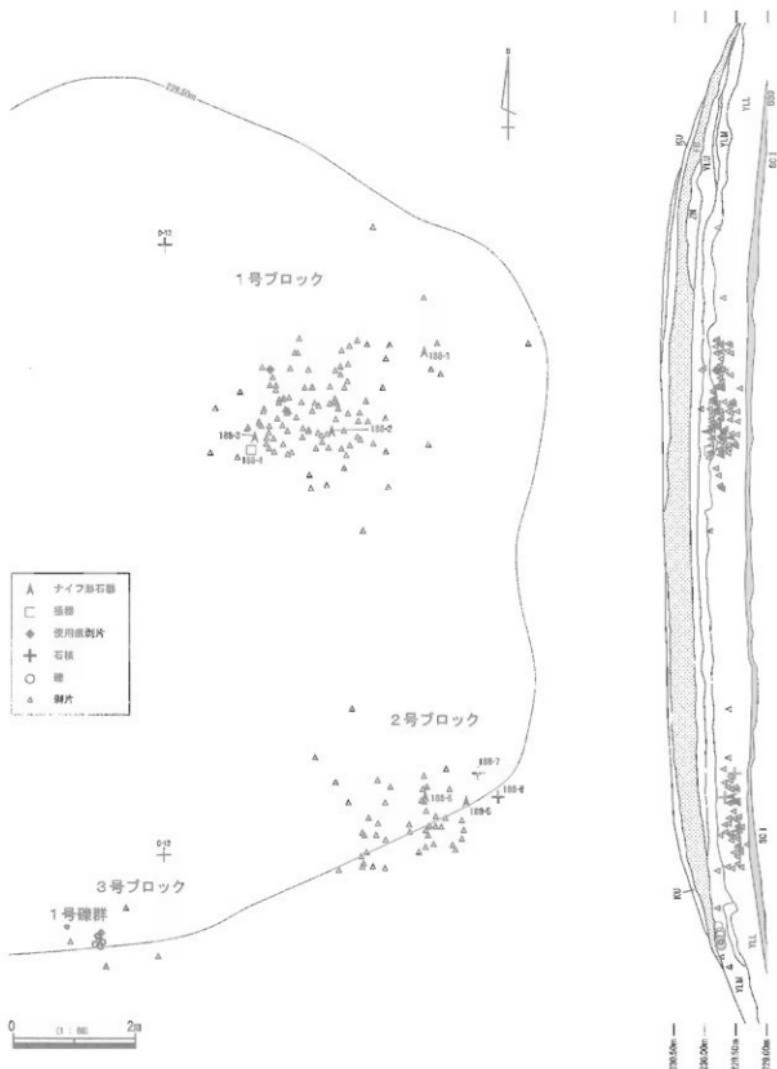
石核2点は平坦な面に打面を固定し、その長側縁を中心に剥片剥離の痕跡が残る。7は比較的平坦な1枚の剥離面を打面に設定している。作業面の裏面には広く自然面が残されており、分割縫を素材とした可能性が高い。8は平坦な自然面に打面を固定して剥片剥離を行っている。打面から作業面の裏側にかけて自然面が残されており、小縫を素材とした可能性が高い。

3号石器ブロック (第186図・第187図)

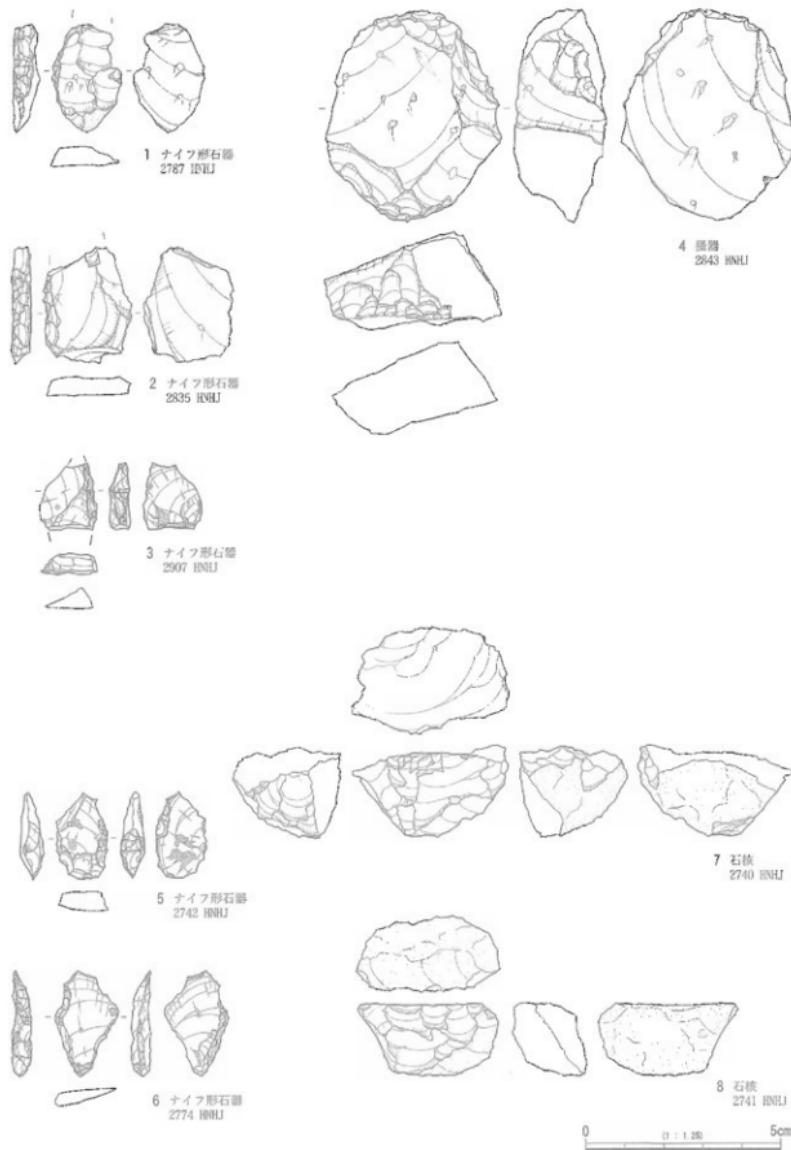
2号石器ブロックの南西約3m付近(グリッドB-II)に位置し、1号礫群を取り囲むようにホルンフェルスの剥片6点がまとめて出土した。遺物の検出層位はY LMである。縦長剥片が主体を占める。剥片には自然面がほとんど残されておらず、この場所には原礫は持ち込まれていないと考えられる。

1号礫群 (第186図・第187図)

グリッドB-IIの北東角に位置し、6点の礫が密集して出土した。遺物の検出層位はY LMである。石材の内訳は玄武岩4点、多孔質玄武岩2点で、総重量は1,750g(平均重量291.7g)である。



第187図 第III文化層 1号砾群・1号～3号石器ブロック



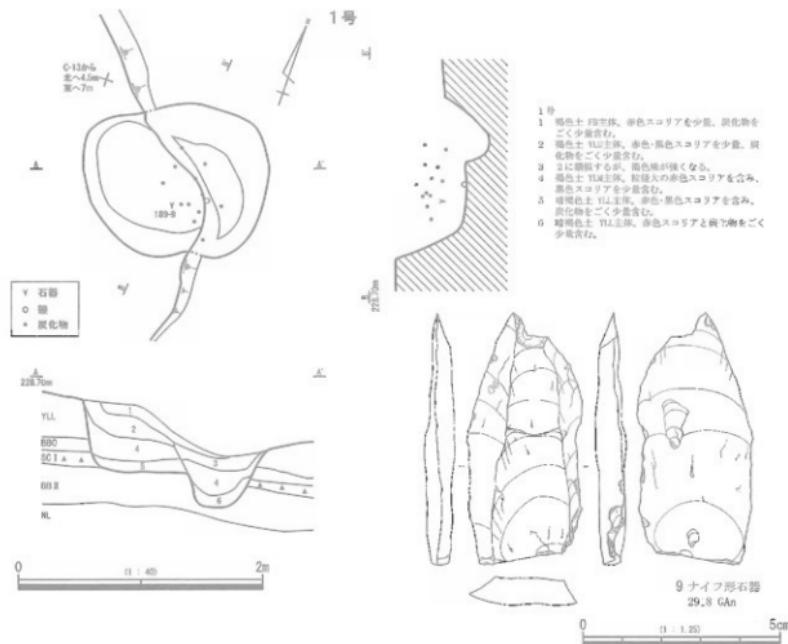
第188図 第III文化層 出土石器(1)

1号土坑 (第189図)

調査区中央部東よりの尾根上(グリッド C-13)より検出された。遺構検出面は Y L I である。長径 1.54m × 短径 1.3m の橢円形を呈し、検出面から底面までの深さは 88cm である。断層の影響を受け、東側が落ち込んでいる。覆土には炭化物が認められ、石器 1 点、礫 1 点が出土したが、垂直分布の出土位置より炭化物と石器は埋没過程での流れ込みと考えられる。

石器は、ガラス質黒色安山岩の先端・基部加工ナイフ形石器(9)で、平坦な 1 枚の剥離面で構成される打面をもつ、比較的幅が広い石刃を素材とする。基部右側縁には腹面側からの二次加工がなされる。腹面右側縁の先端部には、腹面への細かい剥離が認められる。

礫は、重量 20g の輝石安山岩である。



第48表 1号土坑出土 石器計測表

探査番号	遺物番号	出土層位	石 材	形 様	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
第189図	9	礫土	ガラス質黒色安山岩	ナイフ形石器	64.9	29.5	7.3	14.3	

第49表 第III文化層 1号土坑計測表

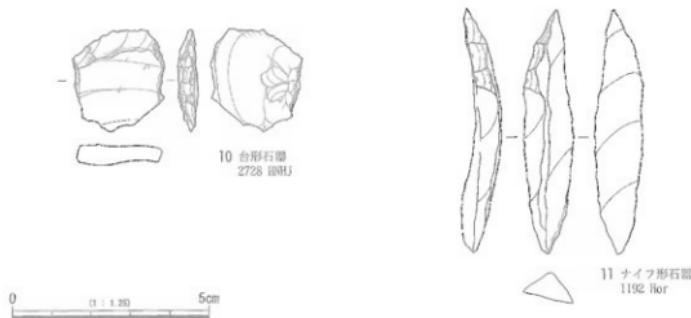
土坑番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形態	遺 物
1号	1.54	1.30	0.88	楕円形	石器 磕

遺構外出土の石器（第190図）

遺構外からは、台形石器とナイフ形石器が単独で出土している。

台形石器(10)は、1号および2号ブロックの近辺(グリッドC-11)より出土し、出土層位はY LMである。石材は箱根烟宿産黒曜石である。不定形の剥片を横位に用い、素材の打点と打面の一部が残存している。素材剥片の打面には背面から、末端部には腹面から調整を行うことで成形している。両側縁はほぼ平行する。

ナイフ形石器(11)は、調査区東端(グリッドB-18)より出土し、出土層位はY LMである。ホルンフェルスを用いた先端・基部加工ナイフ形石器である。先端部側の加工は比較的粗い。石刃を素材とし、打点側を基部に据えている。



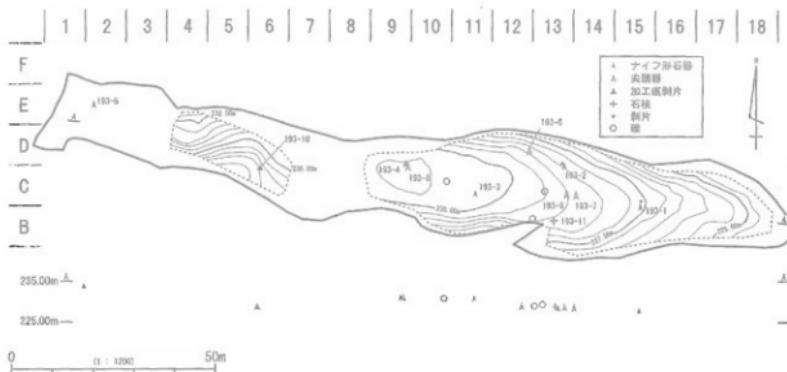
第190図 第III文化層 出土石器(2)

5 第IV文化層(Y LU)の遺物

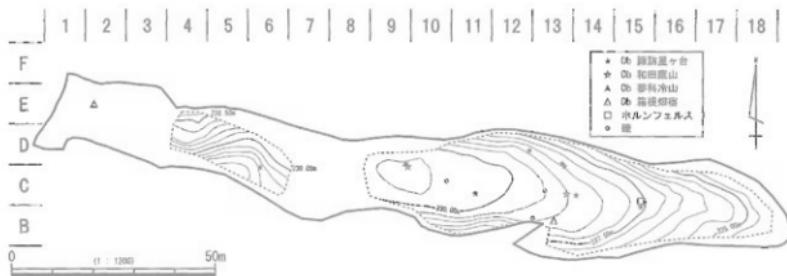
石器14点、礫3点が出土しており、調査区中央部を中心に散漫な分布が確認される。石器は製品を主体とし、剥片は3点出土しているのみで、石器製作の痕跡は乏しい。石材はホルンフェルスの剥片2点を除いて黒曜石である。産地で見ると、第III文化層では在地系の箱根烟宿産黒曜石が100%を占めていたのに対し、本文化層では諏訪星ヶ台産黒曜石を中心とする信州系の黒曜石が主体を占めている。

第50表 第IV文化層 石器組成表

			ナイフ形石器	尖頭器	加工痕剥片	石核	剥片	計
黒曜石 (Ob)	諏訪星ヶ台群	SWHD	3	2	1		1	7
	和田鷹山群	WDTY		2				2
	蓼科冷山群	TSTY	1					1
	箱根烟宿群	HNHJ	1			1		2
	ホルンフェルス	Hor					2	2
計			5	4	1	1	3	14

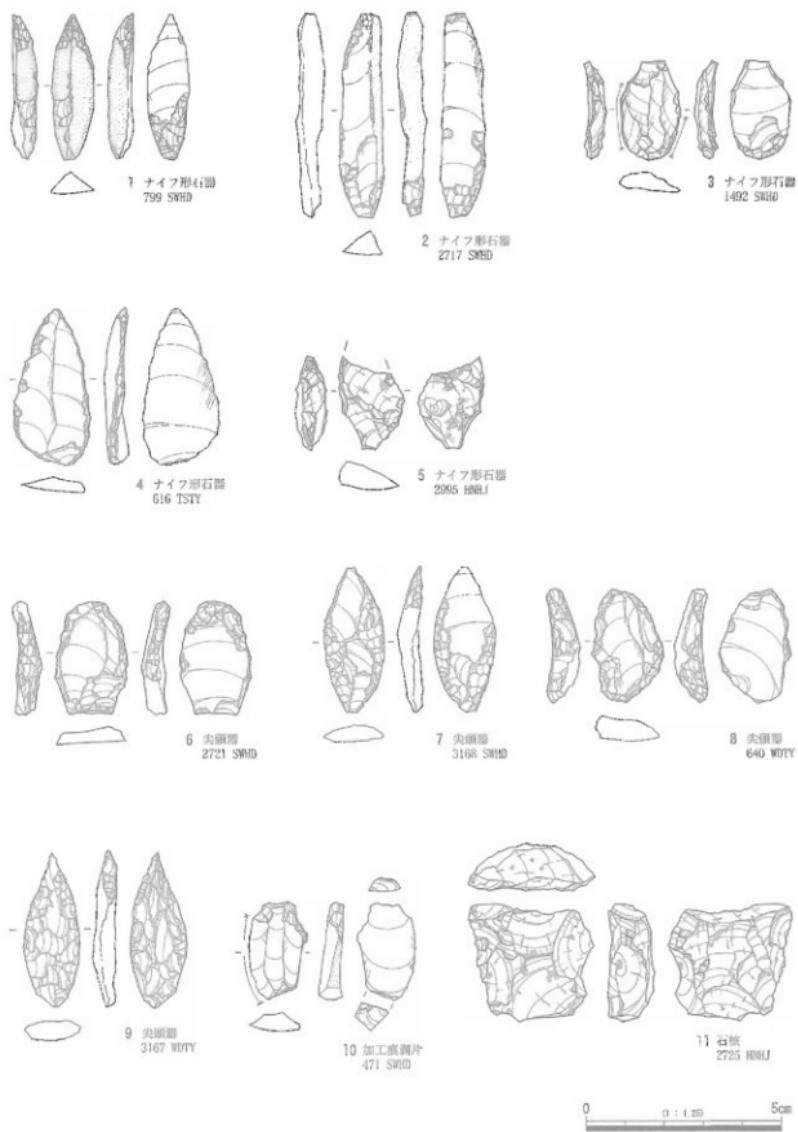


第191図 第IV文化層 器種別分布図



第192図 第IV文化層 石材別分布図

以下出土石器について記載する(第193図)。ナイフ形石器は5点が出土している。1～3は諏訪星ヶ台産黒曜石を用いている。3点とも背面上には自然面が残存する。1と2は先端・基部加工ナイフ形石器である。両者とも石刃を素材に用いる。1は、背面への急斜度剥離によって先端部を作り出している。一方、基部については、素材のバルブを除去するように腹面に平坦な剥離を行っている。いずれの剥離も左右両側縁からなされる。背面の稜には素材石刃剥離以前になされたと考えられる剥離の痕跡が残る。2は、左側縁からの剥離によって先端部を作り出す。基部については、腹面は右側縁からの平坦な剥離のみによって加工され、背面は右側縁の整形が中心である。先端部は折損するが、腹面にはその折面からの剥離が認められる。石刃を素材とするが、背面には主要剥離面とは逆方向からの先行する剥離痕が残される。3は、左側縁および右側縁基部側に調整がなされた二側縁加工ナイフ形石器である。基部腹面には、基部方向からの平坦な調整剥離がなされている。縦長剥片を素材としており、右側縁上半および先端部には、素材剥片剥離時の折れが残されている。4は蓼科冷山産黒曜石を用いる。薄手の石刃を利用した二側縁加工ナイフ形石器である。右側縁、及び左側縁の基部側を細かい急斜度剥離で整形する。刃部である左側縁上半部には使用によるものと考えられる微細剥離痕が認められる。基部は先鋒に作り出されず、若干丸みをおびている。素材打点側を基部に据えている。5は箱根烟宿産黒曜石を用いる。



第193図 第IV文化層 出土石器

不定形の剥片を斜位に用いており、打点と平坦な打面が残存している。二次加工は左側縁のみに限定されるが、右側縁基部側には素材剥片の打面が残存しているため形態は切出状を呈する。左側縁の整形は、上半は腹面側からなされるが、基部側は加工が顕著でなく、背面側から微細な剥離がなされている。先端部は折損する。

尖頭器4点のうち6～8は周縁加工がなされ、9はほぼ両面に調整がなされる。6と7は諏訪星ヶ台産黒曜石を用いる。6は右側縁下部を除く全周に調整がなされている。先端部では腹面への平坦剥離がなされるが、そのほかは背面への急斜度の剥離が施されている。折れた石刃を素材としており、基部の背面には折面からの調整剥離もなされている。7は、基部側では背腹両面への調整剥離がおこなわれているが、先端部側では腹面からの比較的急斜度の調整剥離がなされている。石刃を素材とし、打点側を基部に据えている。8と9は和田鷹山産黒曜石を用いる。8はほぼ全周を急斜度の剥離がめぐる。調整は背面側に限定される。先端部には折面が残されているが、この折れは調整剥離に先行するものである。9はほぼ両面が調整されるが、裏面中央の剥離は素材面である可能性がある。先端部の、裏面に向けての剥離が急斜度であるのを除いて、概ね平坦剥離によって成形される。

加工痕剥片(10)は折れた石刃を素材とし、折れの左右を背面側に調整している。末端部および左側縁には微細な剥離痕が認められる。

石核(11)は、打面と作業面を転移しながら剥片剥離を進行させている。最終的な作業面は平坦な表面に設定し、周囲から小さい剥片を剥離している。それに先行する剥片剥離は裏面で、左右から小さな剥片の剥離を行ったものと考えられる。表面右下の比較的広い剥離はポジティブな面であると考えられ、素材剥片の主要剥離面である可能性がある。

6 参考資料

第Ⅲスコリア帯、第Ⅱ黒色帯、休場層直下黒色帯の各層からも礫の出土が見られた。いずれも小さく、まとまりも認められなかったことから火山噴出物である可能性が高いと考えた。第Ⅲスコリア帯からは16点がグリッドE-3、E-5、B-12より出土し、第Ⅱ黒色帯からは1点がグリッドC-7のテストピットより出土、休場層直下黒色帯からは1点が調査区東端のグリッドC-17より出土した。石材は玄武岩、鉄石安山岩、細粒ハシレイ岩などである。

以上のことより文化層の設定は行わず、参考資料として報告する。

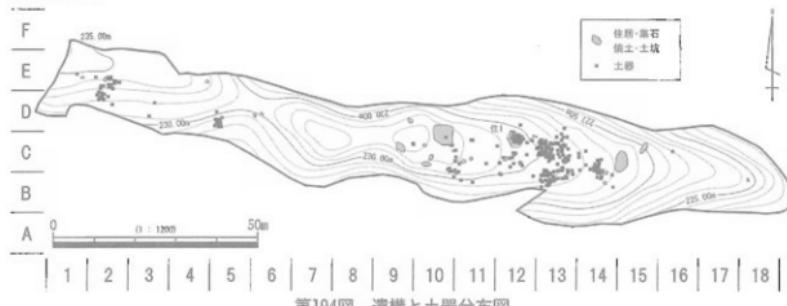
第3節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構と遺構内出土遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡1基、焼土跡6基、集石18基、土坑2基が検出された。遺構のほとんどが尾根の平坦部に位置し、調査区の最も平坦な中央部に集中する。

時期判断の手掛かりとなる土器の分布状況と遺構を重ね図示した(第194図)。竪穴住居とその周辺のグリッドD-12付近からは、縄文時代の前期後半の諸磯式土器が出土した。その他の土器はグリッドC-13、C-14付近に分布し、集石等の遺構はグリッドC-10、C-15付近に分布する。竪穴住居跡は縄文時代の前期後半に比定されるが、焼土跡、集石、土坑は土器の分布と重ならないため構築時期を特定できなかった。



第194図 遺構と土器分布図

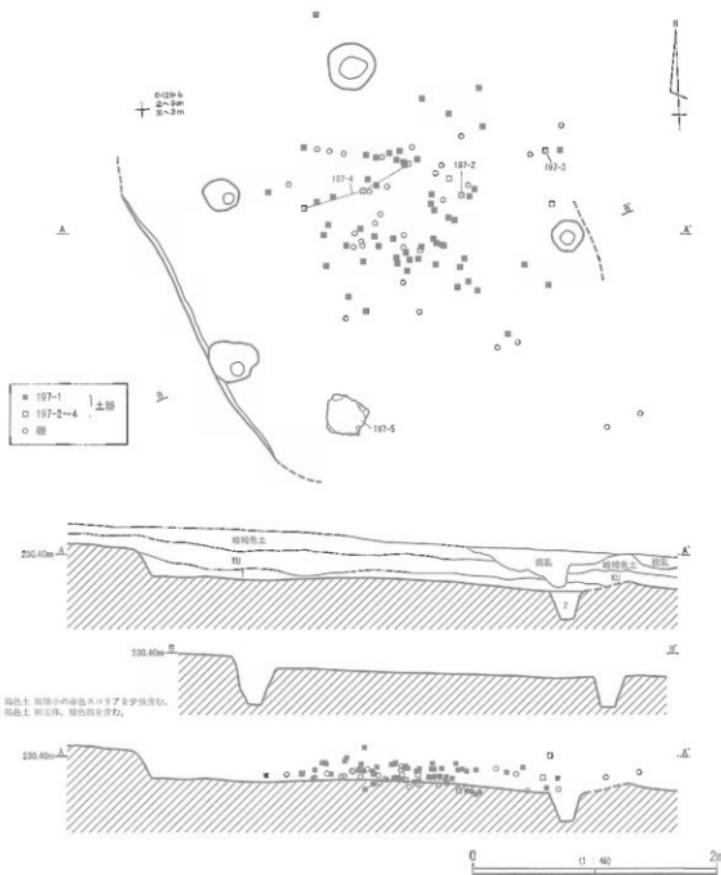
(2) 竪穴住居跡

1号住居跡 (第196図～第197図)

1号住居跡はグリッドC-12の尾根筋の平坦面、標高230.40m付近に位置する。検出面はF Bであるが、F BとK Uの土が混ざり地山と覆土の識別が困難であった。北東側は擾乱の影響を受け、住居跡壁面は西側で確認できたのみで、床は確認できなかった。検出面からの深さは10cmを測る。遺存状況が悪く、平面形態は推定できないが、遺物の分布状況ならびに壁面と柱穴の関係から、規模は1辺が約3mの圓丸の方形を呈する。柱穴は4穴確認できた。深さは30cmを測り平面形態は円形である。炉は確認していない。遺物は土器が68点、石皿が1点、礫が30点出土した。出土した土器片は2個体に分類された。第197図-1は諸磯c式に比定され、推定口径42cmの口縁部に向かって広がる大型の深鉢である。4単位の波状口縁を持ち、胸部を中心に半截竹管による平行沈線を渦巻き状に施しており、底部付近は横位の施文と思われる。胎土には石英・長石・輝石・雲母が多量に含まれる。第197図-2・3は口縁部に向かって若干広がる深鉢で諸磯c式に比定される。半截竹管による斜位の並行沈線を全面に施しており、2個1対の円形の貼付文をランダムに配している。1号住居跡の時期は出土している遺物より、縄文時代前期後半と推測される。更に1号住居跡周辺からも諸磯c式に比定される土器がまとめて出土している。



第195図 繩文時代 遺構配置図



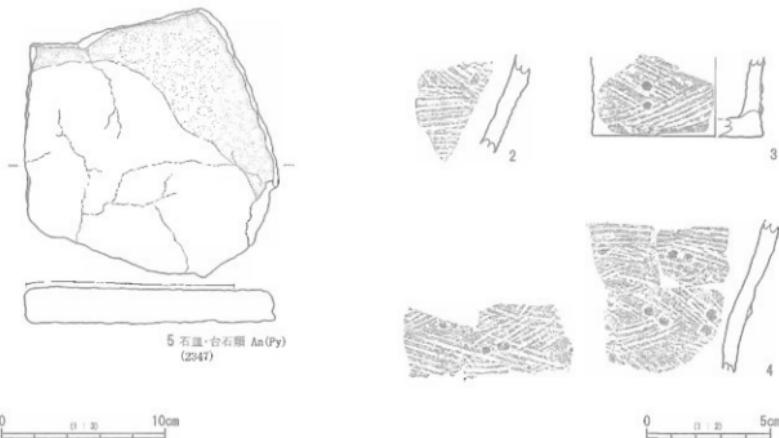
第196図 1号住居跡

第51表 1号住居跡 土器観察表

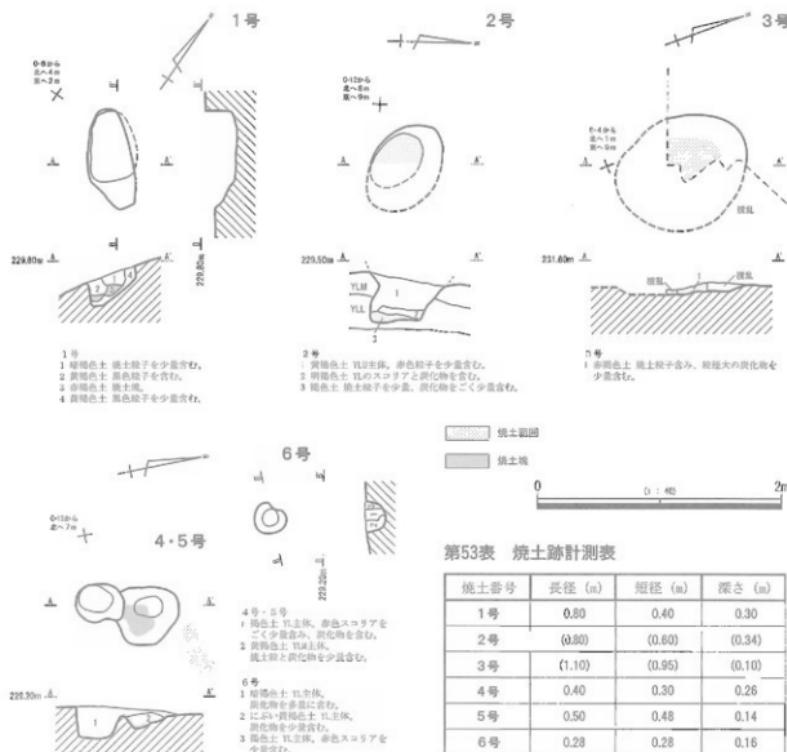
探査番号	分類	残存部位	外面色調 内面色調	胎土	調査	文様・調査	造成
第197図	1	器皿部全般 底部付近	口縁部～ SYR5/6 SYR5/6	多量の石質・長石、輝石、雲母、白色粒子、 黒色粒子	無	4単位の波状口縁。外側に半纏竹管による平行 沈澱は鈍頭状、底部付近は供便に短丈	良
	2～4	器皿部全般	SYR6/6 SYR6/6	多量の石質・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	平底。外側に半纏竹管による平行沈澱を斜径に 施す。2個1対の円形の點付文あり。	良

第52表 1号住居跡 石器計測表

呼出番号	造出番号	出土層位	石材	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第197図	5	2347	麻理	脚石・骨石類	335.9	316.0	54.2	8500	



第197図 1号住居跡 出土遺物



第198図 焼土跡

(3) 焼土跡 (第198図)

焼土跡は調査区の尾根の上部で6基検出された。これらの焼土のうち、2号焼土、4号焼土～6号焼土は2m×2mの範囲に集中していた。1号焼土と5号焼土からは覆土に焼土塊を確認した。いずれの焼土跡も出土遺物は無く、明確な時期の特定ができなかった。

1号焼土

1号焼土はグリッドD-6の標高229.80mに占地する。3号集石が北西側に隣接する。検出面はYLUである。覆土に焼土塊を確認した。

2号焼土

2号焼土はグリッドC-I2の標高229.40mに占地する。休場層調査時に土層帶壁面において確認された。

3号焼土

3号焼土はグリッドE-4の標高231.40mに占地する。検出面は表土直下のSCIである。試掘トレンチにより南側が破壊され、東側は搅乱を受け不明となっている。覆土に炭化物と焼土を確認したが掘

第53表 焼土跡計測表

焼土番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1号	0.80	0.40	0.30
2号	(0.80)	(0.60)	(0.34)
3号	(1.10)	(0.95)	(0.10)
4号	0.40	0.30	0.26
5号	0.50	0.48	0.14
6号	0.28	0.28	0.16

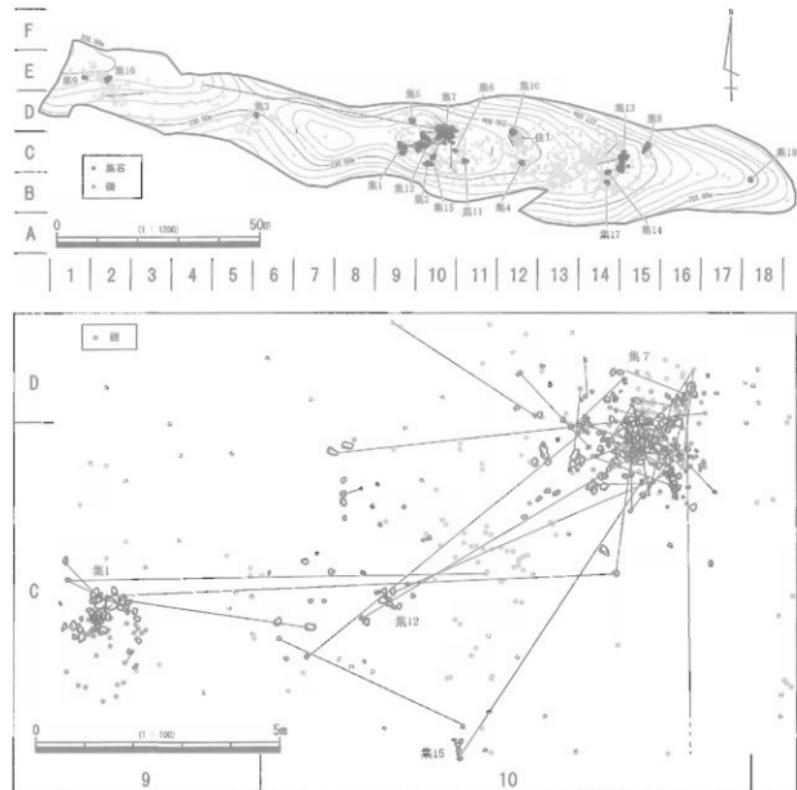
込みは浅い。

4号・5号・6号焼土

4号・5号・6号焼土はグリッドC-13の標高229.00mに占地する。5号～6号焼土間の距離は0.6mである。検出面はY L Lである。5号焼土の底部には焼土塊が確認され、周辺からも焼土が検出された。新旧関係は5号焼土より4号焼土のほうが新しい。

(4) 集石 (第199図～第203図)

現地調査において、礫がまとまって検出されたものを集石とした。集石と他の礫との分布状況を第199図に示す。集石は調査区中央グリッドラインより東側で15基、西側で3基の合計18基を検出した。集石の多くは尾根筋の平坦部に占地し、最も平坦な調査区中央グリッドC-9～11、グリッドD-9～10の標高230.50m付近に8基が集中して分布する。検出面をK Uに持つものが1基、K U～F Bの混土層に持つものが2基、F Bに持つものが15基で、F Bの検出例が最も多い。いずれの集石でも土坑などの

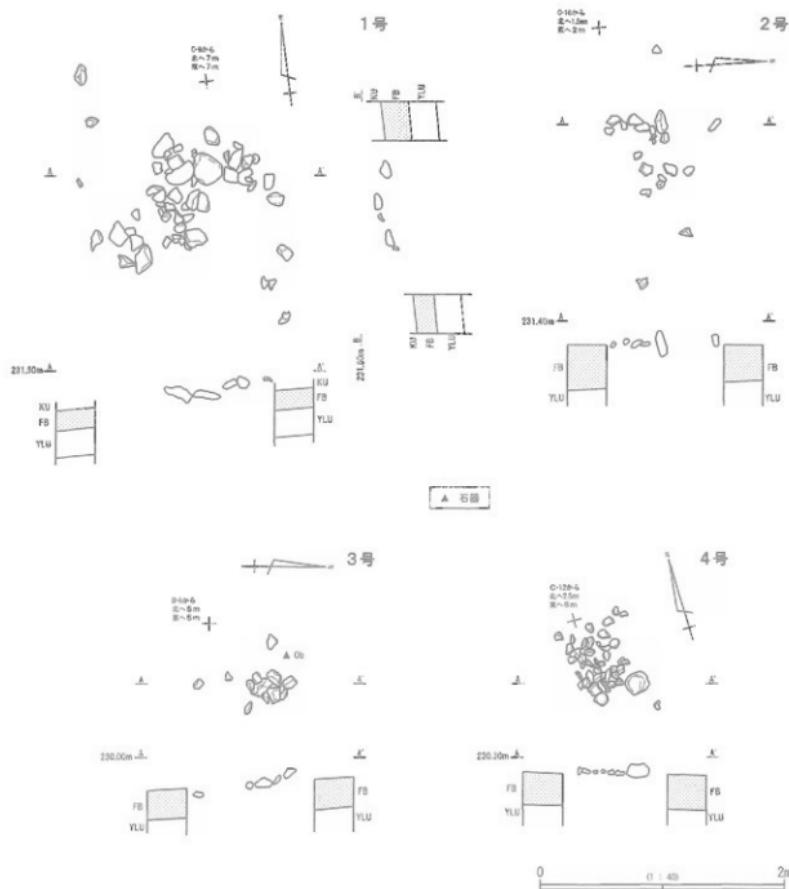


第199図 集石遺構と礫分布図

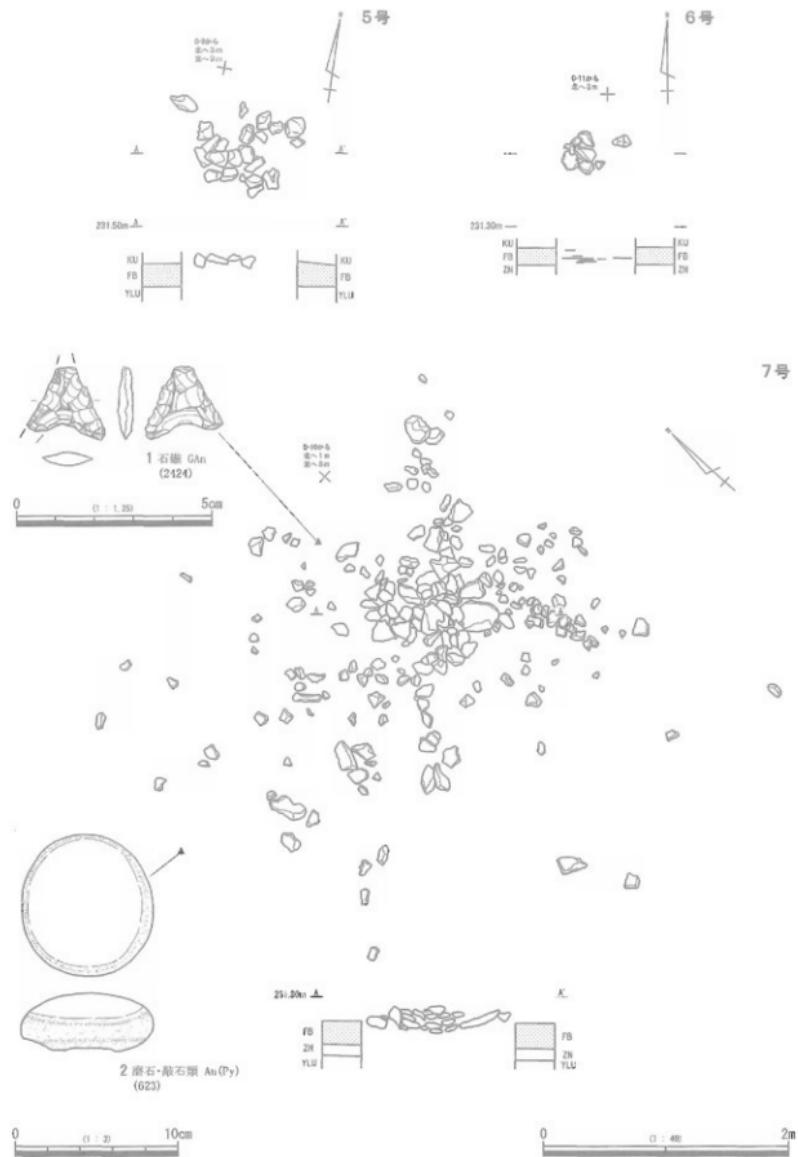
掘り込みは確認できなかった。集石内部での礫の接合関係が認められたが、集石間での接合も確認された。

特に1号、7号、12号、15号集石は互いに接合関係を持っていた。また集石の礫の殆どが赤化していた。集石の構築時期を確定できる遺物は出土しなかった。

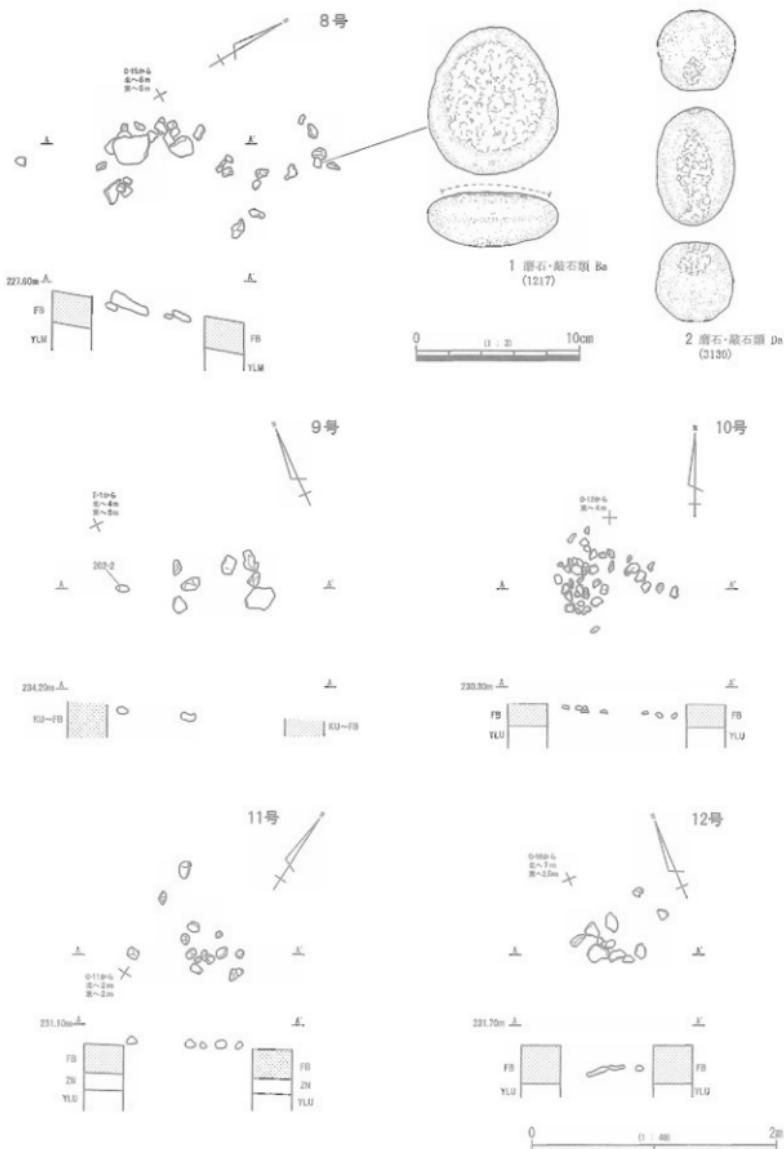
礫の平面分布ありかたについては、保坂氏が柏ヶ谷長ヲサ遺跡における礫群を分類する際、設定した分類基準「高密度で輪郭が明瞭な密集型、比較的高密度な密集部を持ち周辺に礫の分散分布する部分を持つ集中型、明瞭な密集部を持たず全体に礫が分散して分布する分散型」(保坂1997)を集石の分類基準として援用した。本遺跡にあてはめると密集型は1号～7号集石、集中型は8号～12号集石、分散型は13号～18号集石となる



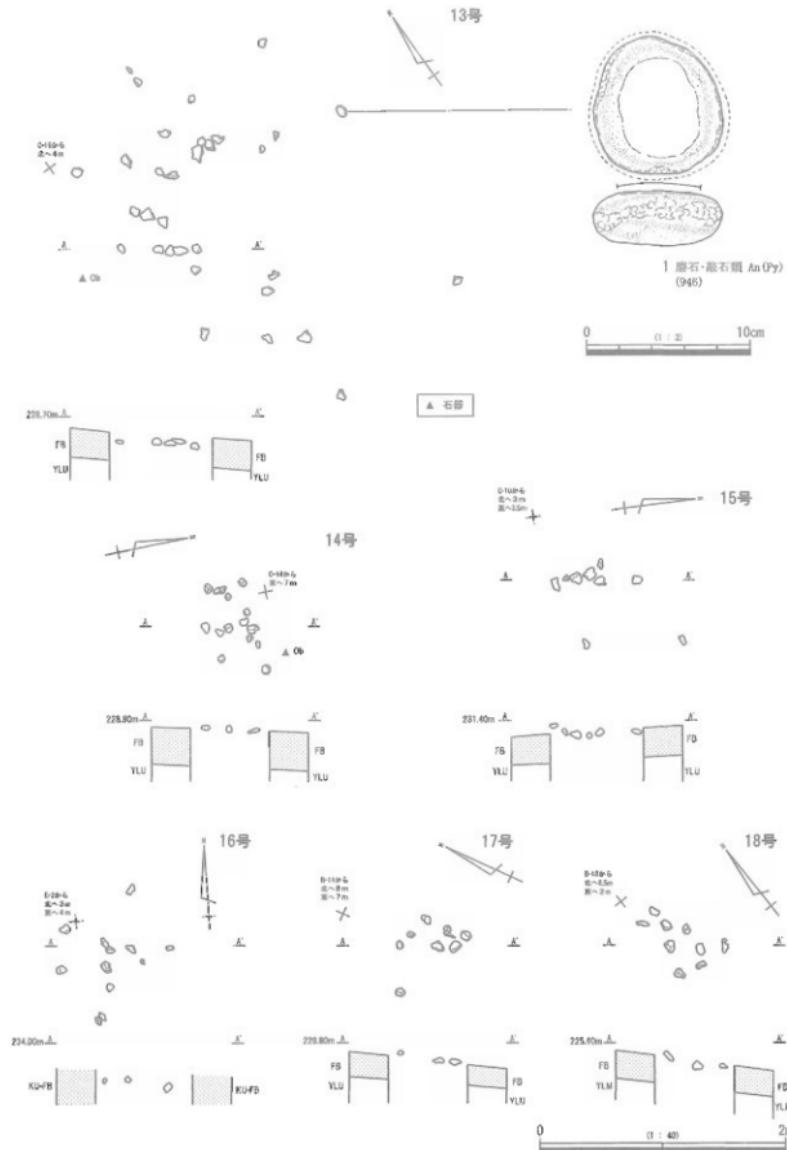
第200図 1号～4号集石



第201図 5号～7号集石



第202図 8号～12号集石



第203図 13~18号集石

第54表 集石出土 石器計測表

探査番号	集石番号	遺物番号	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
第201図	1	7号	2424	ガラス質透明玄山岩	石器	19.5	18.2	4.0	1.0
	2	7号	822	輝石安山岩	磨石・砥石類	82.5	81.2	36.0	360
第202図	1	8号	1217	玄武岩	磨石・砥石類	90.8	79.8	33.3	295
	2	9号	3130	ダイライト	磨石・砥石類	72.8	68.0	47.8	230
第203図	1	13号	946	輝石安山岩	磨石・砥石類	84.5	79.5	34.0	300

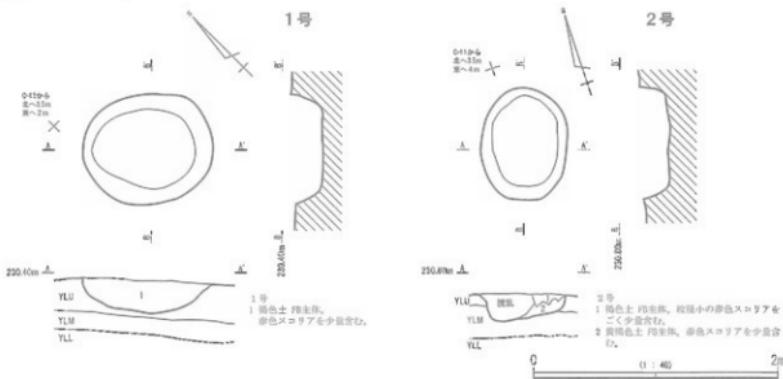
第55表 集石計測表

集石番号	長径(m) × 短径(m)	個数	備考
1号	2.65×1.65	105	
2号	2.00×0.95	31	
3号	1.20×0.70	12	石器1点
4号	0.95×0.65	50	
5号	1.20×0.90	25	
6号	0.60×0.40	9	
7号	5.70×4.80	302	石器2点
8号	3.50×2.70	33	石器1点
9号	1.30×0.50	8	石器1点

集石番号	長径(m) × 短径(m)	個数	備考
10号	1.50×0.85	44	
11号	1.70×1.00	15	
12号	8.00×6.00	12	
13号	3.20×2.00	36	石器2点
14号	0.90×0.60	22	石器1点
15号	1.10×0.80	9	
16号	1.95×0.90	12	
17号	0.80×0.40	9	
18号	0.70×0.50	9	

(5) 土坑 (第204図)

土坑は調査区中央において2基確認された。尾根筋の平坦面標高230.50m付近に占地する。開口部及び底面の平面形は橢円形で浅いものである。覆土はいずれもF Bを主体とし、時期を特定できる遺物は出土しなかった。



第204図 縄文1・2号土坑

第56表 土坑計測表

土坑番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形態
1号	1.10	0.95	0.26	橢円形
2号	0.90	0.74	0.22	橢円形

2 遺構外出土の土器

遺構外出土の土器は、縄文時代早期～前期を中心に現地調査時に396点出土した。その中から接合したものと含めて30点を図示した。時期および型式を以下のように分類して報告する。

群	時期	類	
第Ⅰ群	早期前半	A	撚糸文土器
		B	押型文土器
第Ⅱ群	早期後半	A	野島式土器
		B	鶴ヶ島台式土器
		C	条痕文系型式不明土器
第Ⅲ群	前期後半	A	諸磯b式土器
		B	諸磯c式土器
		C	諸磯式並行土器

分布状況（第205図・第206図）

本遺跡の土器は、やせ尾根状の平坦部に沿って出土し、多くが個体ごとにまとまって存在していた。

第Ⅰ群 早期前半

〈A類 撥糸文土器〉（第207図1）

1は口径約20cmの砲弾形の深鉢で、Rの撚糸を異方向に施している。口縁部には補修孔と思われる2個一対の孔が複数認められる。胎土には多量の石英・長石・白色粒子を含む。底部の器形は不明だが、口縁はほとんど肥厚せず緩やかに外反しており、早期前半の在地の土器と推察される。グリッドC-13から出土している。

〈B類 押型文土器〉（第207図2～6）

2～4はやや円形に近い橢円形押型文が異方向に施されている。グリッドC-13から出土している。

5・6は長橢円形の押型文が横位に施されている。胎土には多量の雲母を含む。調査区中央部から出土している。

第Ⅱ群 早期後半

〈A類 野島式土器〉（第207図7～10）

7～9は平縁の口縁部で、細隆起線で幾何学的に描かれた文様帯を有し、頸部との境に段が認められる。

10は異方向の斜行沈線を施した上に、細い棒状工具で横位に數列の連続刺突が施されており、絡条体圧痕に似た文様となっている。また無文帯との境には、横位に1条の細隆起線が施されている。

7～10はいずれも、内外面に擦痕調整が見られ、胎土にはデイサイト岩片と繊維が顕著に観察される。さらにグリッドD-5から密集して出土していることから、同一個体の可能性が極めて高いと思われる。口縁部は野島式特有の文様帯、胴部には清水柳E類特有の文様帯を持つことになり、清水柳E類から野島式へ移行する過渡期の土器の可能性がある。

〈B類 鶴ヶ島台式土器〉（第208図11）

11は口径30cmの深鉢で、外側に開く4単位の波状口縁を持ち、胴部には段部が見られる。波頭部は肥厚しており、そこから緩に3本の隆起線が配され、隆起線上には細い竹管による連続刺突が施されている。隆起線の間には横位の沈線が見られ、その周辺には半截竹管の外皮を使って幾何学的な文様が異方

向に充填されている。内外面とも貝殻条痕による調整が施されており、胎土には繊維と多量の白色粒子を含む。グリッドB、C-13付近からまとめて出土している。

〈C類 条痕文系形式不明土器〉(第208図12~14)

12は砲弾形の深鉢で、直径約3cmの乳房状の尖底部を持つ。器厚は5~7mmと比較的薄く、無文で外面に擦痕による調整が見られる。胎土には多量の繊維が含まれ、東海系土器とも考えられる。グリッドC-14付近から集中して出土している。

13は内外面ともに貝殻条痕が見られ、内面は横位に、外面は横位の上から重ねて縦位に施されている。器厚は約10mmとやや厚く、胎土には繊維を含む。グリッドC-10付近から出土している。

14は把手または突起の一部と思われる。接合部らしき痕が観察でき、全体に条痕による調整が見られる。グリッドB-14から出土している。

第三群 前期後半

〈A類 諸磯b式土器〉(第209図15~20)

15・16は外面に半截竹管による木の葉状の平行沈線を施している。1か所補修孔と思われる孔も確認できる。グリッドB-12から出土している。

17・18は地文として原体R Lの縞文を横位に施し、口縁部には半截竹管を用いて横位に平行沈線を引き、同じ工具で沈線の間に爪形文を連続的に施している。胎土には多量の石英・長石・雲母を含む。グリッドB-13からまとめて出土している。

19は口縁に平行して一本の幅広沈線を巡らし、その下に半截竹管による沈線を施し間に爪形文を施している。グリッドC-14から出土している。

20は口径約30cmのキャリバーフормの深鉢で、くの字に内折した4単位の波状口縁を持ち、波頭部は直径15mm程のボタン状の貼付文で装飾されている。外面には地文として原体R Lの縞文を横位に施している。口縁及び頸部に半截竹管による2条の沈線を巡らし、その間に斜行する沈線を充填している。胴部は間隔を空けて3条の沈線を2段に巡らし、その間を波状沈線で施文している。内面には擦痕が見られる。胎土には多量の石英・長石・白色粒子を含む。グリッドD-2付近からまとめて出土している。

〈B類 諸磯c式土器〉(第209図21~28)

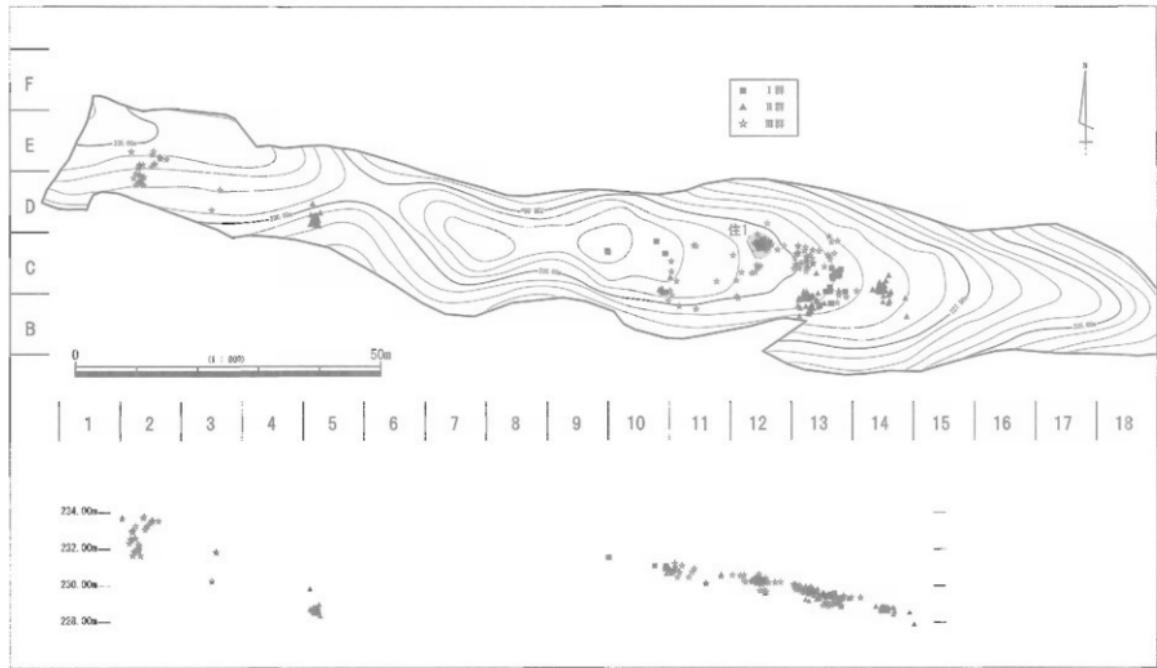
21は大型の深鉢の口縁部上位または胴部上位と思われる。段部を肥厚させ、その部分に半截竹管による押引文を4条施している。段部の下位には3条の押引文を半円状に連続して巡らせ、その結束部と真ん中には3条の押引文を縦位に施し、間に縦位の沈線で充填している。2個一対の円形の貼付文を配しており、さらにその位置からほぼ垂下する方向に、間隔を空けて同様の貼付文を施していると思われる。グリッドC-13付近からまとめて出土している。

22・23は同一個体と思われる。22は内側に屈曲する口縁部と推察され、斜行する平行沈線上に2個一対の円形の貼付文を施す。23は胴部の屈曲部と思われ、上側は横位に下側は縦位の矢羽根状に平行沈線を施し、22と同様に貼付文を配す。胎土には多量の石英と長石を含む。調査区中央部から出土している。

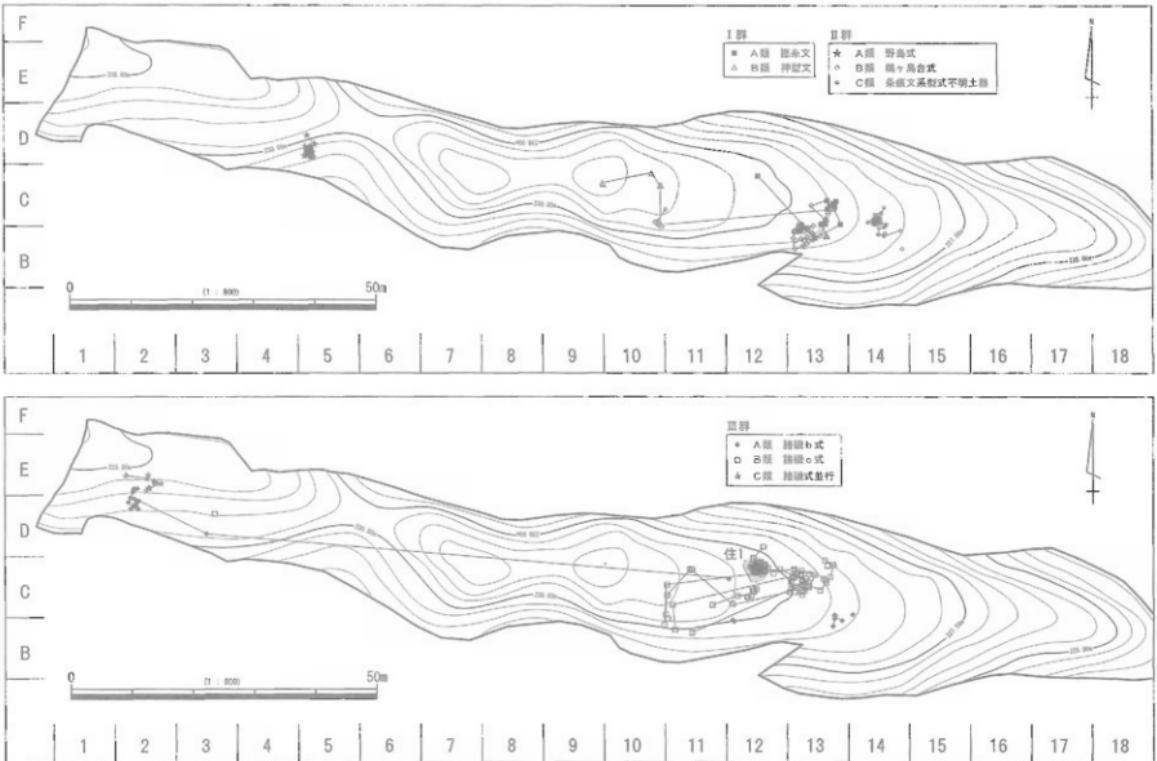
24~26は斜行する平行沈線の上に、2個一対の円形の貼付文を施している。胎土には多量の石英・長石を含む。調査区中央部から出土している。

27は径12cmの底に向かって広がる底部で、半截竹管による押引文で縦レンズ状の文様を連続的に巡らせているが、文様には乱れが見られる。胎土には多量の石英・長石・雲母・黒色粒子を含む。調査区中央部から出土している。

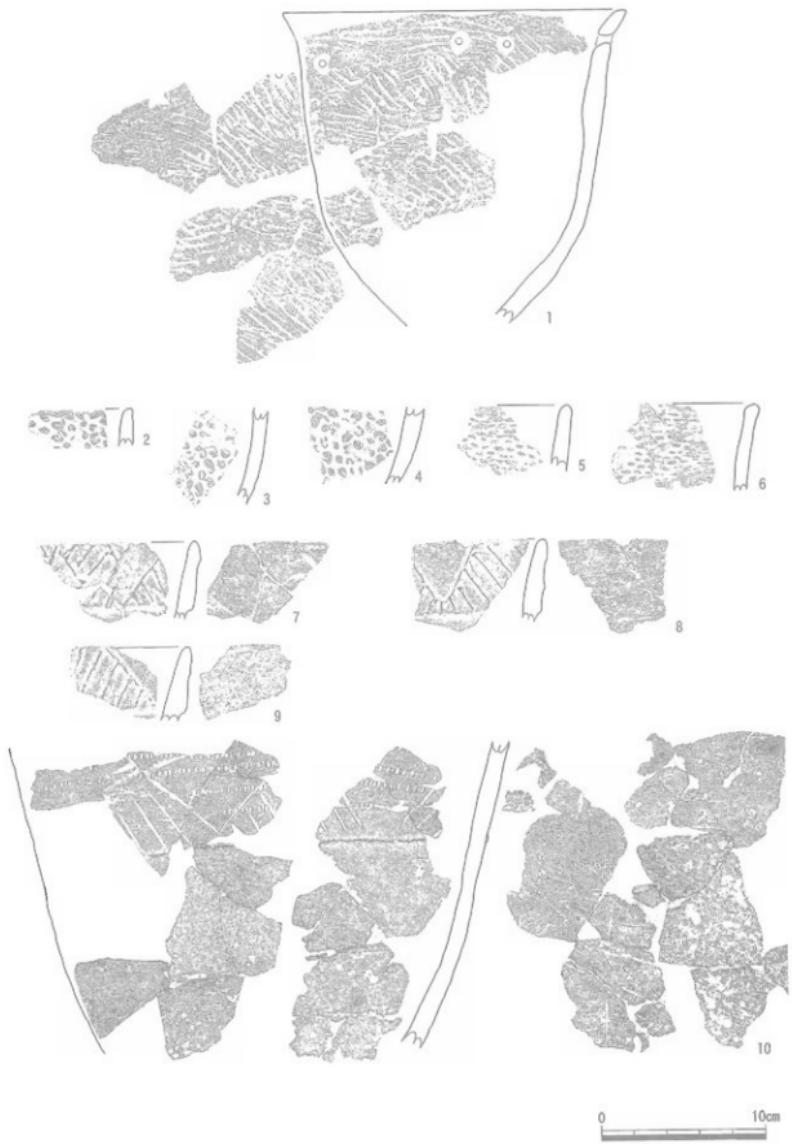
28も径12cmの底に向かって広がる底部で、半截竹管による押引文を半円状に施し、その上に山形に重ねて施文している。連続的な文様と思われるが摩耗が著しくはつきりしない。胎土には多量の石英・長石・黒色粒子を含む。グリッドC-12からまとめて出土している。



第205図 繩文土器 群別分布図



第206図 繩文土器 I・II群及びIII群分布図



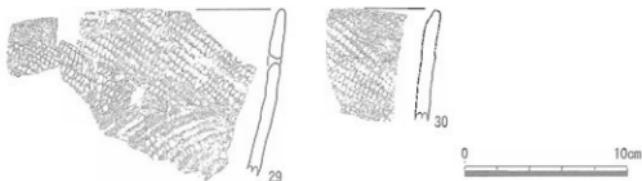
第207図 第I群土器・第II群土器(1)



第208図 第II群土器(2)

第209图 第三组工具(1)





第210図 第III群土器(2)

《C類 諸繩式並行土器》(第210図29・30)

29・30は胎土から諸繩式に並行する土器であると推定される。上段には原体R Lの、下段には原体L Rの繩文をそれぞれ横位に施し、羽状繩文を構成している。一か所補修孔と思われる孔が確認できる。胎土には多量の石英・長石・雲母を含む。グリッドE-2からまとめて出土している。

第57表 土器観察表

探査番号	分類	残存部位	外縁調 内面調	胎 土	繩 文	文 様	・ 調 整	流域
第207回	1	第I群A類	口縁部 ～側部	S19E5/3 S19E5/4	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、雲母、 黑色粒子	無	口縁部は肥厚せず縁や軒に外反、鉢脚孔あり、 Rの標示を異方向に施文	良
	2~4	第I群B類	口縁部 ～側部	S19E6/6 S19E6/6	白色粒子、石英・長石、輝石、少量の赤色 粒子	無	縫合押型文を異方向に施文	良
	5~6	第I群B類	口縁部	10F9E5/2 10F9E5/3	多量の雲母、石英・長石、輝石、白色粒子	無	縫合押型文を横位に施文	良
	7~9	第II群A類	口縁部	11F9E6/5 11F9E6/5	石英・長石・輝石、白色粒子、赤色粒子、少 量の雲母、ダイヤモンド片	有	外面に施何学的な斜線起継を施文、斜線あり、 内面に斜線	良
	10	第II群A類	側部	11F9E5/4 11F9E5/4	石英・長石、輝石、白色粒子、赤色粒子、 少量の雲母、ダイヤモンド片	有	平行沈降線上に斜状工具先端で横位に斜向連続狀 突し、斜線起継を側位に1全周す	良
第208回	11	第II群B類	口縁部 ～側部	10F9E5/4 10F9E5/4	多量の白色粒子、黒色粒子、少量の石英・ 長石・輝石・赤色粒子	有	4単位の斜状口継、斜突を施した斜起継を縦に 3本記し、斜質斜工具による斜波を施何学的に 施す。内面に貝殻魚痕	やや 良
	12	第II群C類	側部 底部	7. S19E6/4 7. S19E6/6	石英・長石、白色粒子、少量の雲母	多頭 有	始端形で直角部は乳頭状、無文で内外面に斜痕 す。内面に貝殻魚痕	やや 良
	13	第II群C類	口縁部	61F9E5/4 61F9E5/6	白色粒子、輝石、少量の石英・長石	有	月輪垂痕を外面は側位の上に施位、内面は横位 に施す	良
	14	第III群C類	把手？	51F9E5/6	少量の白色粒子	有	把手または突起の一既か？器底部分に亜痕	不良
第209回	15~16	第III群A類	側部	51F9E5/6 51F9E5/6	石英・長石、輝石、雲母、白色粒子	無	半截竹管による水の垂状の平行沈降を施文、通縫 孔あり	良
	17~18	第III群A類	側部	7. S19E5/6 7. S19E5/6	多量の石英・長石・雲母、輝石、白色粒子	無	地文にR Lの回文を側位に施し、半截竹管によ る瓜形文を施文	良
	19	第III群A類	口縁部	7. S19E5/4 7. S19E5/4	石英・長石、雲母、白色粒子、黑色粒子	無	口縫に通縫孔をめぐらし、半截竹管による瓜 形文を施文	良
	20	第III群A類	口縁部 ～側部	7. S19E5/6 7. S19E5/6	多量の石英・長石・白色粒子、輝石、赤色粒 子、黑色粒子	無	キャラリバ一型の回文、裏頭部にボタン状點狀文 を施した4単位の斜状口継、外縫に斜文として 只しの回文を側位に施し、半截竹管で状維を施 文、内面に原縫	良
	21	第III群B類	側部	51F9E5/6 51F9E5/6	石英・長石、雲母、白色粒子、黑色粒子	無	半截竹管による押引文を施し、間に側位の沈痕 を施文、2箇一对の円形の押引文あり	良
第210回	22~23	第III群B類	側部	51F9E5/6 51F9E5/6	多量の石英・長石、雲母、白色粒子、黑色 粒子	無	半截竹管による平行沈痕、2箇一对の円形の船 形文あり	良
	24~26	第III群B類	側部	51F9E5/6 51F9E5/6	多量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子、 少量の雲母	無	半截竹管による平行沈痕、2箇一对の円形の點 狀文あり	良
	27	第III群B類	底部	7. S19E5/6 7. S19E5/6	多量の石英・長石・雲母、無色粒子、白色 粒子	無	平縫、半截竹管による押引文を縫レンズ形に施 す	良
第210回	28	第III群B類	底部	51F9E5/6 51F9E5/6	多量の石英・長石、無色粒子、雲母、白色 粒子	無	平縫、半截竹管による押引文を半円状と山形に 施す	やや 良
	29~30	第III群C類	口縁部 ～側部	7. S19E5/6 7. S19E5/6	多量の石英・長石、雲母、白色粒子、少量の 雲母	無	R LとしRの回文を横位に施し羽状を呈す、清 掃孔あり	良

3 遺構外出土の石器

縄文時代の石器は総数で83点が出土した。そのうち遺構内出土のものを除いて器種別に分類し、41点を図示する。

本遺跡では調片石器が12点と少なく、磨石・敲石を中心とする礫石器が37点と多いことが特徴にあげられる。それに伴い、石材の内訳も輝石安山岩がもっと多く、全体の37%を占め、黒曜石の33%を上回る。

グリッドD-5からは早期後半の野島式土器が集中して出土しているが、それと共に磨石・敲石類3点が出土している。

第58表 縄文時代 石器組成表

	石 鏃	尖頭器	削器	石 匙	使用 痕 剥 片	石 核	原石	剥 片 ・ 碎 片	礫 器	磨 石 ・ 敲 石 類	石皿 ・ 台石 類	計	
黒曜石	Ob	4		1		1	3		19			28	
ホルンフェルス	Hor			1	1	1			1			4	
ガラス質黒色安山岩	GAn	1	1									2	
赤玉石(碧玉)	RJa						1	1	1			3	
珪質頁岩	SSh					1			1			2	
閃綠岩	Di								1			1	
砂岩(細粒)	FSS							1				1	
石英	Qt									1		1	
テイサイト	Da									3		3	
細粒安山岩	FAn								1			1	
輝石安山岩	An(Py)							5		24	2	31	
玄武岩	Ba									6	0	6	
計		5	1	2	1	3	4	1	29	1	34	2	83

(1) 尖頭器 (第213図1)

1点出土した。ガラス質黒色安山岩を用いた両面加工の尖頭器である。平面形が左右対称で槍先形を呈し、断面形がレンズ状となっている。比較的幅広で粗雑な剥離が施され、裏面は剥離が中央まで到達せず、全体が均一な厚さとなっていない。

(2) 石鏃 (第213図2～5)

4点出土した。全てが基部に抉入のある凹基無茎石鏃である。石材は全て黒曜石である。

2は全体的に丁寧な調整が施され、薄く銳利な側縁となっている。3は全体に丸みを帯び急角度の側縁を持つ。5は欠損品だが、脚部の抉りが全長の1/2以上となる長脚鏃と推察される。

(3) 削器 (第213図6・7)

2点出土した。6は黒曜石製で縁辺を中心に調整を施し、先端部は尖頭状となっている。7は風化が著しく判然としないが、ホルンフェルスの縦長剥片を素材とし、側縁から大きめの剥離で調整を施す。

(4) 石匙 (第213図8)

1点出土している。つまみ部分を上部に配置した場合の縦横の比率により横型の石匙とする。ホルンフェルスの縦長剥片を用い、縁辺より調整を施していると思われるが、風化が著しく判然としない。右片は欠損している。

(5) 石核 (第214図9~12)

4点出土している。いずれも単剥離打面で打面調整はほとんど見られない。作業面と打面を転移しながら幅広の剥片を剥離している。石核の石材は9~11は黒曜石で、12は赤玉石(碧玉)である。

(6) 原石 (第214図13)

13は石器素材の原石と思われる赤玉石(碧玉)の転疊である。試し割りと思われる剥離が一部に見られる。長軸が5cm程の大きさである。

(7) 碓器 (第214図14)

自然疊に簡単な調整を施し、刃部を作出したものである。1点のみの出土である。14は細粒安山岩の疊より表皮付き剥片を取り、右側縁より大きめの剥離で厚みを整え、下端部に両面から調整を行い刃部としている。

(8) 磨石・敲石類 (第215図15~第216図40)

打痕・磨痕が観察出来るもので、持ち上げて使用することを考え、使用時の形状で3kg未満の石器を分類した。28点出土し26点図示した。打痕・磨痕の観察できる部位やその組み合わせを中心に分類し報告する。また、21・28・38・39は受熱によると思われる赤化が観察できる。

〈I群 磨痕のみが観察できるもの〉 (15~16)

15・16は扁平な円疊を用いており、15は平坦部両面に磨痕が残る。16は側縁部の磨痕が直線的で明瞭な稜を形成している。

〈II群 磨痕と打痕が観察できるもの〉 (17~26)

A類 扁平疊の平坦面に磨痕、周縁部に打痕が残るもの (17~21)

17・18は素材疊の形状により表面に稜を形成して2面の磨痕が見られる。19は周縁部の顕著な打痕によって素材疊の平面形が判別不能である。20は平坦面の磨痕の周辺にまで打痕が残る。21は磨面が稜を持ち平坦で明瞭である。17・19・20は周縁部全周に連続的で顕著な打痕が観察される。

B類 周縁部に磨痕と打痕が残るもの (22~24)

22・23は梢円疊の側縁に磨痕、端部に打痕が残る。24は円疊の周縁部の一部に磨痕が見られる。共に疊に厚みがあり、使用痕跡は不明瞭で、長期間の使用ではないと推察される。

C類 磨痕が周縁にまで及び棒状のもの (25)

25は断面が磨痕によって多角形になっていると思われ、長軸の端部にわずかに打痕が残る。

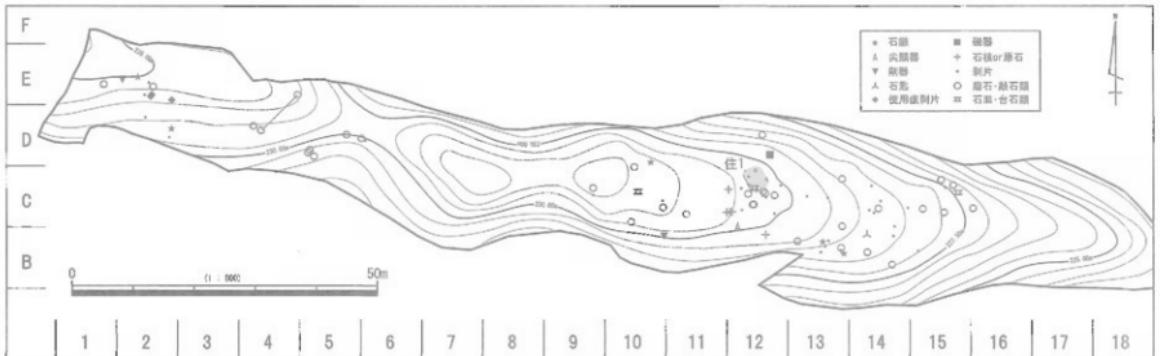
D類 扁平疊の平坦部に打痕が観察できるもの (26)

26は疊の周縁部に打痕、磨痕が観察され、平坦面には凹状の打痕が残る。所謂凹石。側縁からの打撃によって裏面を欠損する。

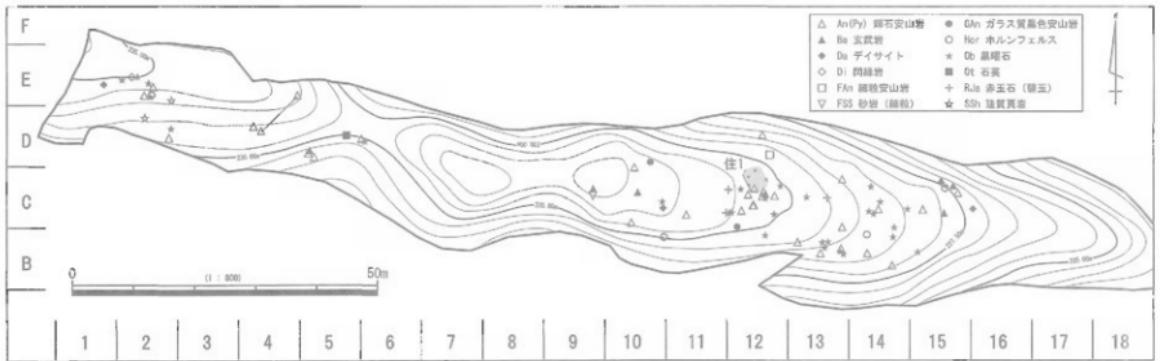
〈III群 打痕のみが観察できるもの〉 (27~40)

A類 疊の平坦面に打痕が残るもの (27・28)

平坦面の中央部分に打痕が見られる。28は打痕がやや凹状に窪んでおり、II群D類と類似した使用状況とも考えられる。



第211図 繩文石器 器種別分布図



第212図 繩文石器 石材別分布図

B類 磚の周縁部に打痕が残るもの(29~36)

32以外は磚の周縁部、ほぼ全周に連続的な打痕が観察できる。29~32は平坦面中央部にも打痕が見られる。

C類 小型の梢円磚(37~40)

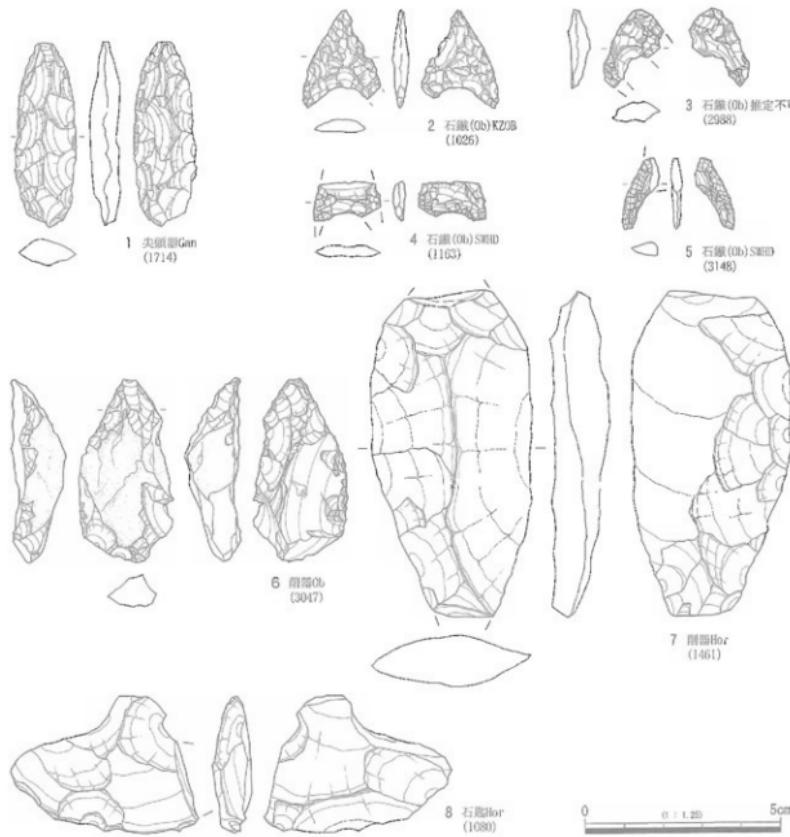
比較的小型の磚で37~39は長軸の端部に打痕が観察できる。これらは石器製作用のハンマーの可能性も考えられる。

なお、磨石・敲石類の石材は安山岩が70%を占めている。

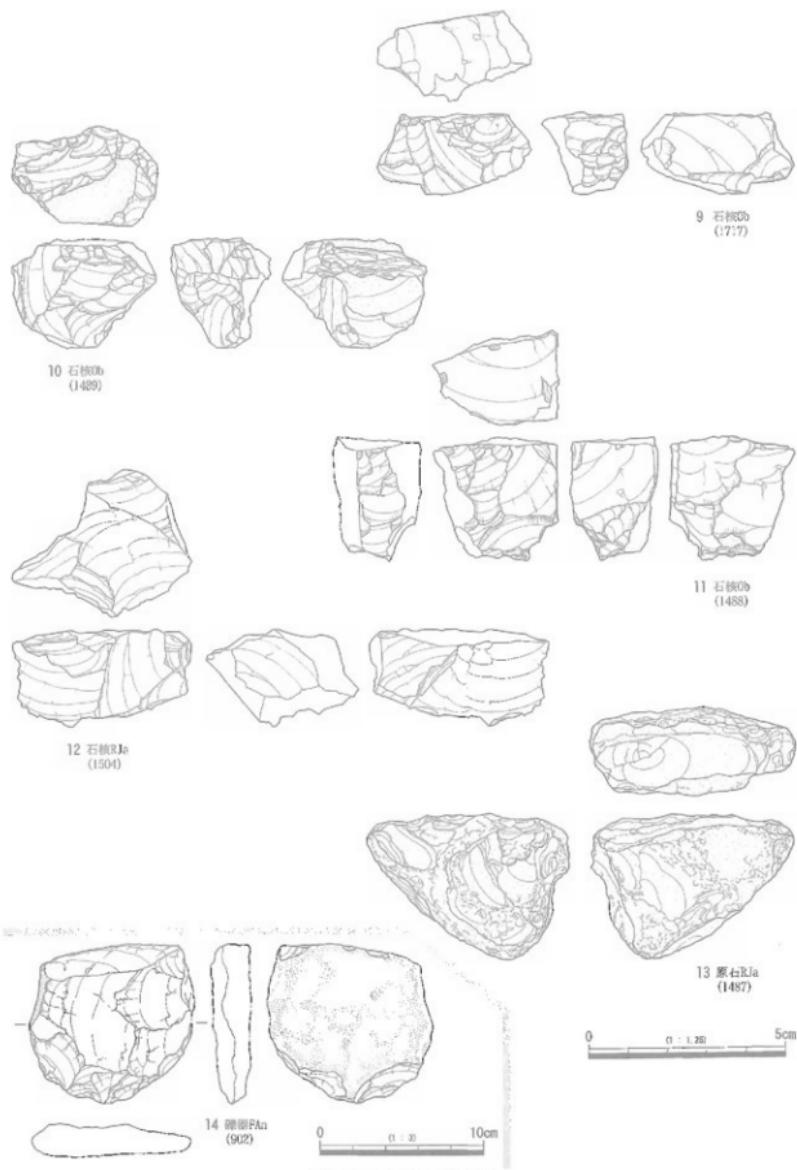
(9) 石皿・台石類 (第216図41)

磨痕や打痕が観察できるもので、完形時の重さが3kg以上であり、日常的に据えて使用したと思われるものである。1点出土した。

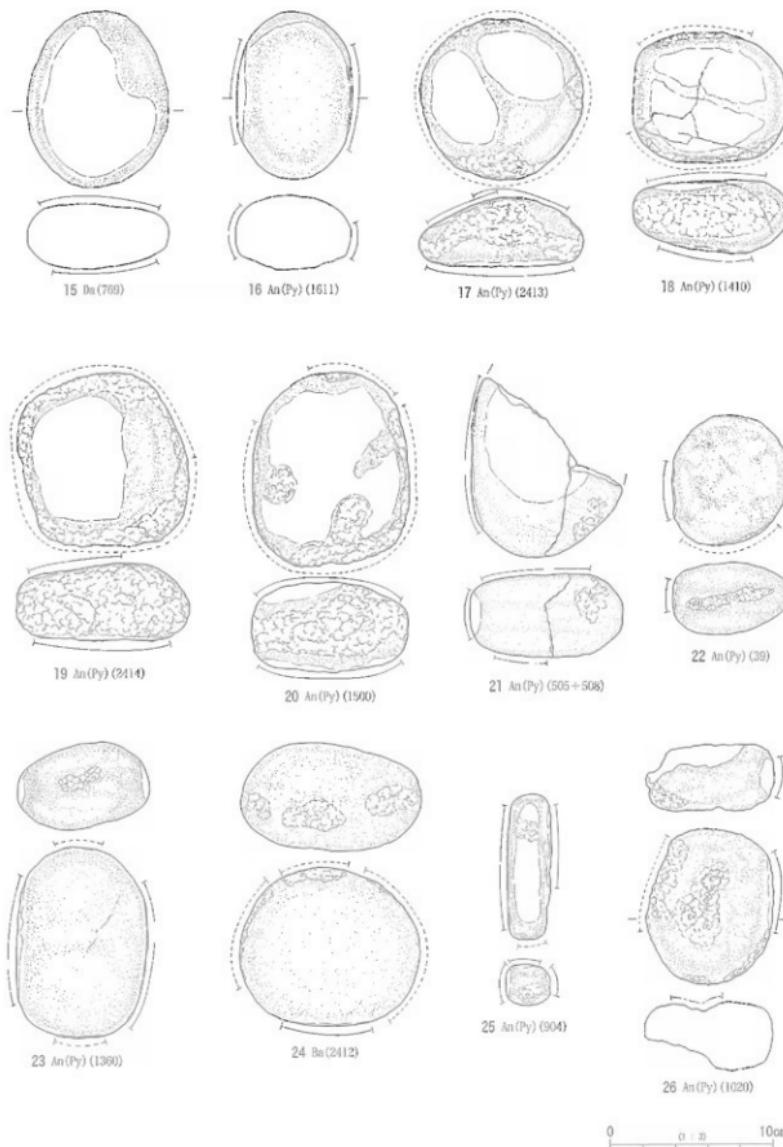
41は輝石安山岩の板状の磚を使用し、中央部分を中心に磨痕が見られる。



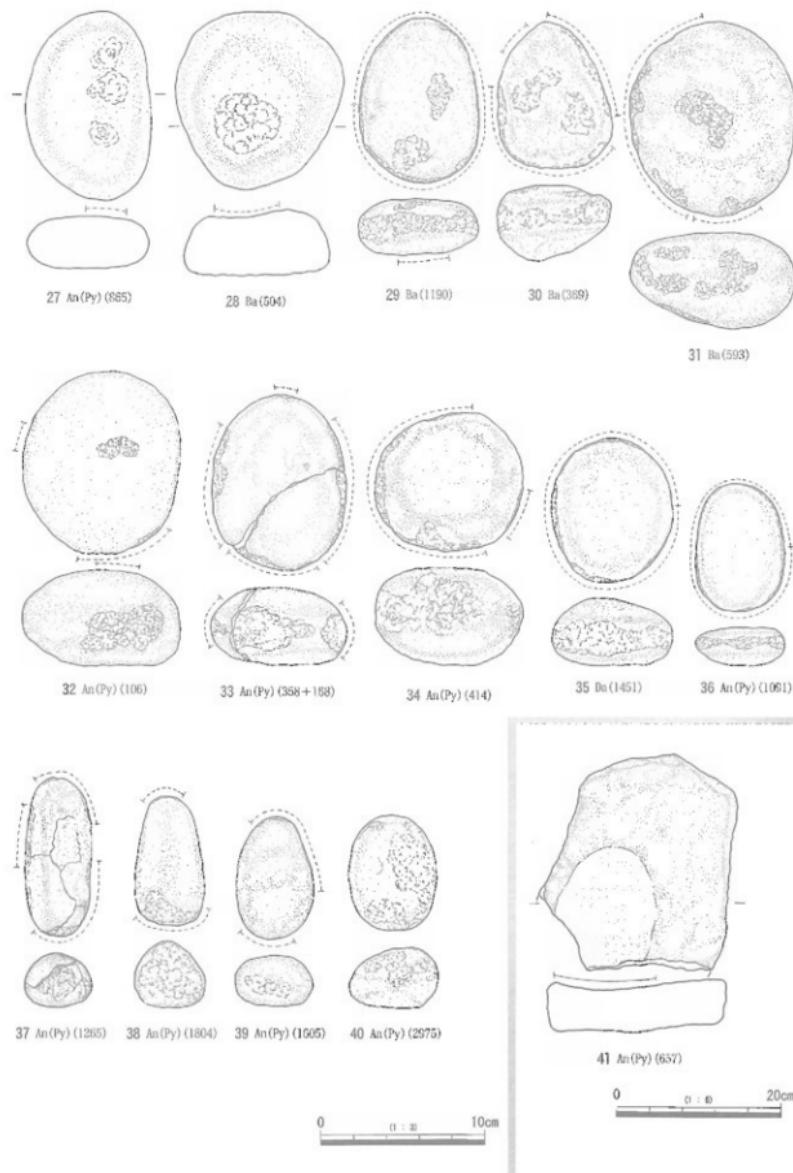
第213図 繩文石器(1)



第214図 繩文石器(2)



第215図 繪文石器(3)(磨石・敲石類)



第216図 繩文石器(4)(磨石・敲石類と石皿・台石類)

第5章 内野山V遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経過

発掘調査は対象面積3,500m²を調査範囲として、平成15年9月から同16年3月までの6か月余の期間で実施した。内野山V遺跡は平成15年度中に調査を終えて、その後すぐに日本道路公団（当時）に引き渡す計画であったため当初から本調査対応として、縄文時代の遺物包含層2枚、及び旧石器時代の文化層2枚程度を想定して調査を開始した。

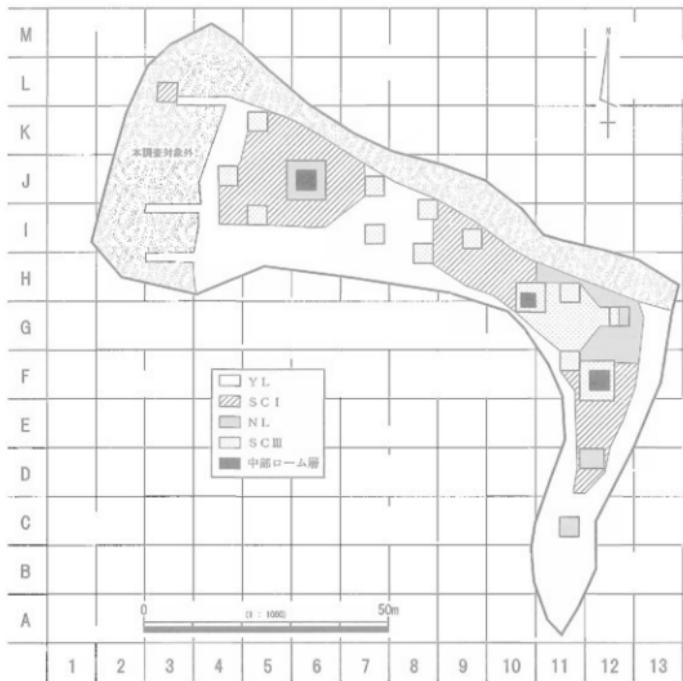
本調査

調査は、まず重機で拔根と表土と擾乱土を取り除き、遺物や遺構が確認できる層位まで掘り下げた。その結果、表土から約0.3m下で縄文時代早期のものと思われる遺物の存在が認められた。10月以降は人力で掘削し、縄文時代の遺物包含層を精査した。テストピットを設定して土層の堆積状況を調べたところ、カワゴ平バミスを含む褐色土層からニセローム層に至る堆積を確認することができたが、栗色土層と富士黒土層の分層は困難であった。そして、その栗色土層と富士黒土層を含む層位の上面では集石が検出され、10月末に検出状況をローリングタワー及び高所作業車を使って撮影した。その後、遺跡が所在する尾根上のほぼ全域にわたって栗色土層～富士黒土層を人力で掘削し、土坑、焼土跡、及び集石を検出した。その過程で検出された遺構は、12月第3週に休場層の上面でラジコンヘリによる空撮、記録を行った。遺物では縄文時代早期の押型文系や条痕文系の土器、石器、及び礫が出土した。

休場層上層の調査からは、調査区の尾根上を中心にして4×4mのテストピットを17か所設定し、層位ごとにピット内の人力掘削を進めた。遺物が出土した地点については、20mないし30m四方を拡張して調査したところ、調査区東側の尾根上から礫群と少量の石器が出土した。この休場層の遺構は平成16年1月第4週に第Ⅰスコリア層の上面でラジコンヘリを使って空撮、記録した。また、調査区西側の休場層からも礫群が1基検出されたため周辺を拡張して調べたが、特にまとまった遺物の広がりは見られなかつた。

上記の作業と並行しつつ、更に下層の旧石器時代文化層を調べるためにテストピットを掘り下げたところ、尾根上東側の第Ⅰ黒色帶から礫群、石器ブロックを検出した。2月第2週には、ローリングタワー上からそれらの出土状況を撮影した。さらに、尾根上東側のテストピット内の第Ⅲ黒色帶で石器の剥片が1点出土したため周辺を拡張したが、他に遺物や遺構は認められなかつた。また、同層位での土坑の存在も調べたが認められなかつた。17か所のテストピットのうち2か所で、調査区東側の永久法面を越えない範囲まで掘削を行つた。また、西側の谷底に設定したテストピット1か所は、休場層まで掘削した段階で永久法面に達したため、その時点で調査を終えることにした。残る14か所のテストピットのうち3か所では中部ローム層まで掘削し、ほかのピットは第Ⅲスコリア帶の上面まで掘削したが、いずれも遺構や遺物を確認することはできなかつた。

これらの作業がほぼ終わった3月第1週にラジコンヘリによる空撮を実施した。その後、埋め戻し作業と撤去工を行い、3月第2週に現地を引き渡して調査を終了した。



第217図 グリッドと調査範囲

2 基本層序と土層の堆積状況

(1) 堆積状況 (第219図)

本遺跡は愛鷹山東麓に位置する。南北は開析されており急斜面となっている。調査区西側の頂部は標高224mを測り、次第に高度を下げながら東側の標高220mの尾根に至る。東側からは更に尾根地形がのびている。この尾根上のG-12グリッドに土層確認のテストピットを入れたところ、いわゆる愛鷹上部ローム層がおおむね良好に堆積していることを確認できた。この愛鷹上部ローム層は立川ロームとほぼ対応する。本遺跡における上部ローム層の黒色帶の発色は薄い部分も見受けられたが、スコリア層の堆積は良好であった。

縄文時代の遺物が出土するのは栗色土層～富士黒土層(K J～F B)である。旧石器時代の遺物は休場層上位～中位(Y L U～Y L M)を中心として出土した。また、第I黒色帶(B B I)と第III黒色帶(B B III)からも石器が出土し、第I黒色帶からは礫群が検出された。



第218図 調査区と周辺地形

(2) 基本層序 (第220図)

第2層は伊豆天城山から降灰した、カワゴ平バミスと見られる白色バミスを多量に含む褐色土層である。カワゴ平バミスの降灰は繩文時代後期頃と考えられている。

第3層は仙石スコリアと見られる橙色スコリアを含む褐色土層である。このあたりから遺物が出土し始めるが、遺物のほとんどが繩文時代早期のものである。

第4層には本来、栗色土層(KU)と富士黒土層(FB)が堆積しているが、本遺跡では発色が悪く、栗色土層と富士黒土層の分離が容易ではなかった。このような傾向は、裾野市内における第二東名関連の調査で多く見られた。繩文時代の遺構・遺物の多くがここで検出されている。

第5層は休場層上位～中位(YLU～YLM)である。休場層も本遺跡では上位と中位の分離が容易ではなかったため、中位下部に存在する赤褐色スコリアを目安として、下位と二分している。

第6層は休場層下位(YLL)である。なお、休場層直下の黒色帯も発色が極めて悪いことから、6層と一緒にしている。休場層からは疊群を検出している。

第7層は第Iスコリア層(SC I)である。黄色・赤色スコリアを含み、黒褐色スコリアを多量に含む褐色土層である。

第8層は第I黒色帶(BBI)である。赤褐色・黒褐色スコリアを少量含む暗褐色土層である。上位で疊群や石器ブロックを検出している。

第9層はニセローム層(NL)である。上半部は大粒のスコリアを含み、下半部に風化したスコリアを多く含む。中位から下位にかけて始良丹沢広域火山灰(AT)がパッチ状に含まれている。

第10層は第II黒色帶(BB II)である。赤褐色・黒褐色スコリアを少量含む暗褐色土層である。本層位は他遺跡では厚みはそれほどないが、ここではかなりの層厚を測る。

第11層は第IIスコリア層(SC II)である。赤褐色スコリアを多量に含む暗褐色土層である。第II黒色帶と第III黒色帶との境界が、はっきりと分離できた。

第12層は第III黒色帶(BB III)である。赤褐色スコリアを含み、黒褐色スコリアを少量含む暗褐色土層である。近年の調査では、本層位に掘り込み面をもつと考えられる土坑が数多く検出されているが、本遺跡では検出されなかった。

第13～19層は第IIIスコリア帶(SC III)である。特に18層は褐色土を主体に赤褐色・黒褐色のきわめて硬くしまったスコリアを多量に含む層である。上半部に黒色帶が存在するが、本遺跡では発色が薄く、スコリアの密度の多少で分層している。

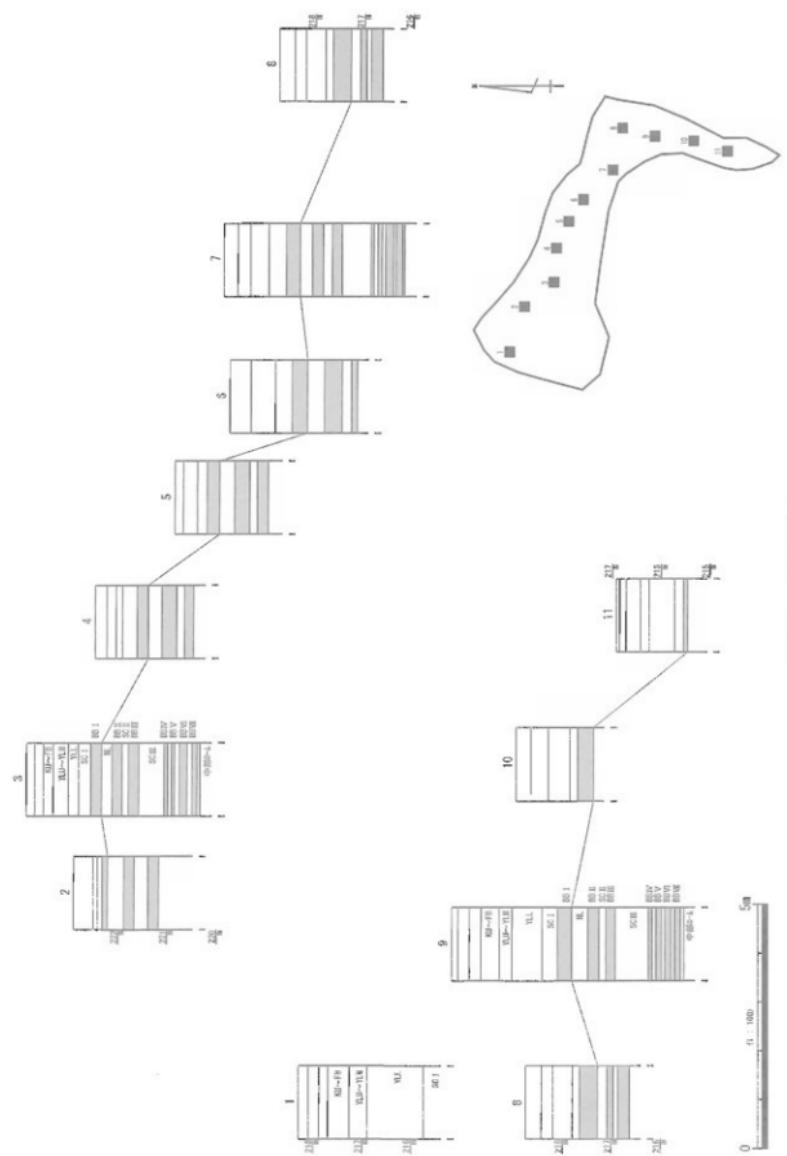
第20～27層は黒色帶とスコリアの交互堆積であるが、黒色の発色はきわめて薄い。赤褐色・黒褐色スコリアを含む。

第28層は中部ローム層である。赤褐色・黒褐色スコリアをごく少量含む褐色土層である。

第29層はスコリア層(SC)である。褐色土を主体に赤褐色スコリアを多量に含み、黒色スコリアを少量含む。

第30層は中部ローム層である。赤褐色・黒褐色スコリアを含む褐色土層である。

第31層はペアスコリア層1(SC)である。褐色土を主体に赤色スコリアを多量に含み、黒色スコリアを含む。



第219図 土層柱状図

<柱状図>		<層名>		<色調>
0	表土			
	2 褐色土層（カワゴ平バミスを含む層）			7.5 YR4/6
	3 褐色土層（仙石スコリアを含む層）			7.5 YR4/6
1	4 栗色土層～富士黒土層	KU～FB	□○◆▲	7.5 YR3/4
	5 休場層上位～中位	YLU～YLM	○◆	7.5 YR4/6
	6 休場層下位	YLL	◆	7.5 YR4/6
2	7 第Iスコリア層	SCI		7.5 YR3/4
	8 第I黒色帶	BBI	◆▲	7.5 YR2/1
	9 ニセローム層	NL		10 YR5/8
3	10 第II黒色帶	BBII		10 YR3/4
	11 第IIスコリア層	SCI		10 YR3/4
	12 第III黒色帶	BBIII		10 YR3/4
	13 第IIIスコリア帶スコリア1	SCIII s 1		10 YR4/4
	14 第IIIスコリア帶黒色帶1	SCIII b 1		10 YR4/6
	15 第IIIスコリア帶スコリア2	SCIII s 2		10 YR4/4
	16 第IIIスコリア帶黒色帶2	SCIII b 2		10 YR4/6
	17 第IIIスコリア帶スコリア3	SCIII s 3		10 YR4/4
	18 第IIIスコリア帶スコリア4	SCIII s 4		10 YR4/4
	19 第IIIスコリア帶スコリア5	SCIII s 5		10 YR4/4
	20 第IV黒色帶	BBIV		10 YR4/4
	21 スコリア層	SC		10 YR4/4
	22 第V黒色帶	BBV		10 YR3/4
	23 スコリア層	SC		10 YR3/4
	24 第VI黒色帶	BBVI		10 YR3/3
	25 スコリア層	SC		10 YR3/3
	26 第VII黒色帶	BBVII		10 YR3/3
	27 スコリア層	SC		10 YR3/4
	28 中部ローム層	SC		10 YR4/6
	29 スコリア層	SC		10 YR4/6
	30 中部ローム層	SC		10 YR4/6
5	31 ベースコリア層1		□ 集石 ▲ 石器ブロック ○ 土坑 ◆ 碓群・配石	10 YR4/6

第220図 基本土層図

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

1 概要

旧石器時代の遺構は、第Ⅰ黒色帯と休場層で確認され、第Ⅰ黒色帯からは炭化物集中地点を伴った礫群3基と石器ブロック1基が、休場層からは礫群4基が検出されている。

遺物は、第Ⅲ黒色帯、第Ⅰ黒色帯、第Ⅰスコリア層、休場層の各層において確認されたが、石器42点、礫106点の合計148点と総数は少ない。

本遺跡では石器の出土層に合わせ、第Ⅲ黒色帯を第Ⅰ文化層、第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層を第Ⅱ文化層、休場層下位～上位を第Ⅲ文化層に設定した。

なお旧石器時代の黒曜石は、分析可能なものすべてについて蛍光X線による産地分析を行った。

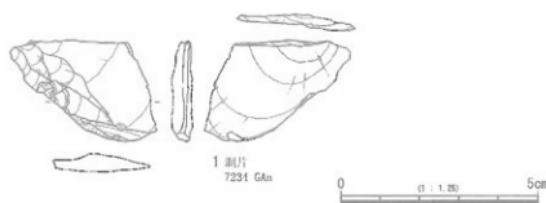
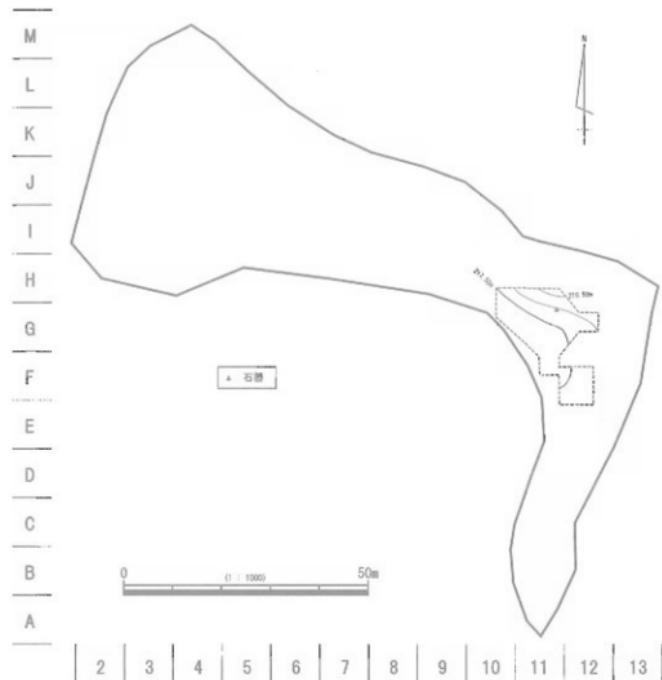
第59表 旧石器時代 石器組成表

《石材別》	黒曜石					ホルンフェルス	ガラス質黒色安山岩	細粒安山岩	テイサイト	砂岩(粗粒)	計
	天城柏崎群	津島鳥島群	廻訪星ヶ台群	和田鷹山群	産地不明						
第Ⅰ文化層(BBⅢ)							1				1
第Ⅱ文化層(BBⅠ～SCⅠ)	5		1			1					7
第Ⅲ文化層(YL)		4	3	1	5	12	2	5	1	1	34
計	5	4	4	1	5	13	3	5	1	1	42

《器種別》	ナイフ形石器	尖頭器	削器	加工痕剥片	使用痕剥片	石核	石刃	剥片・碎片	磨石・敲石	計
第Ⅰ文化層(BBⅢ)								1		1
第Ⅱ文化層(BBⅠ～SCⅠ)				1	1		1	4		7
第Ⅲ文化層(YL)	1	3	2		2	2		22	2	34
計	1	3	2	1	3	2	1	27	2	42

2 第I文化層(BB III)の遺物

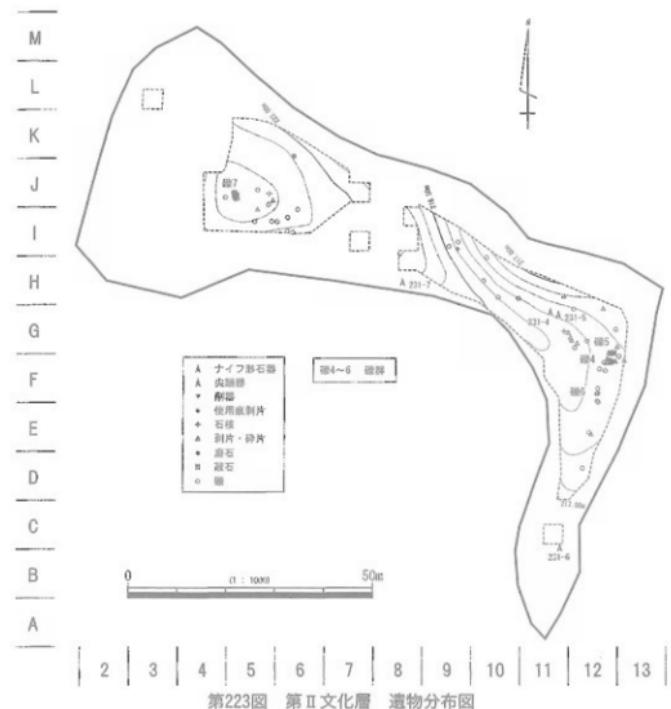
第III黒色帶では、調査区北東部の尾根部でガラス質黒色安山岩の剥片(第222図-1)が単独で出土している。打点側を折損するため全体形は不明である。背面には主要剥離面と同一の方向からの剥離痕が数枚認められる。末端部には自然面が残存する。



第222図 第I文化層 出土石器

3 第II文化層(B B I ~ S C I)の遺構と遺物

第I黒色帯～第Iスコリア層からは、炭化物集中範囲を伴った礫群3基、石器ブロック1基が検出された。遺物は石器7点、礫40点が出土している。分布は石器1点を除き、調査区北東部の尾根部にまとまっている。



第223図 第II文化層 遺物分布図

第60表 第II文化層 遺物組成表

礫	1号礫群	2号礫群	3号礫群	1号石器ブロック	遺構外				計
	輝石安山岩	1	4		2	3			10
玄武岩	8	10	4				8		30
計	9	14	4	2			11		40
総重量(g)	9,470	7,290	3,140	3,210			-		23,110
石器				剥片	石刃	剥片	加工痕	使用痕	計
	天城柏峰			1	1	2	1		5
	黒曜石						1		1
	諏訪墨ヶ台							1	1
	ホルンフェルス								
計				1	3		3		7

1号砾群（第224図）

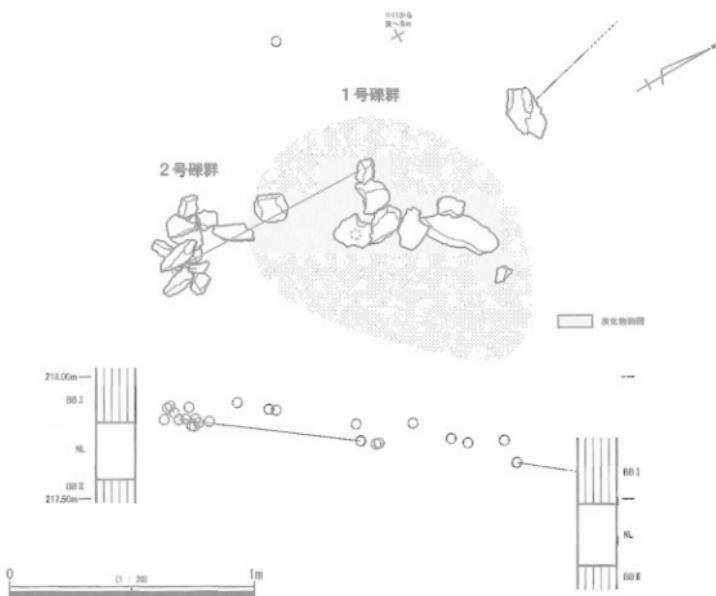
グリッドG-11とH-11の境目に位置し、9点の砾が炭化物集中範囲を伴って出土した。検出層位はB B Iである。南に隣接して2号砾群がある。石材は、玄武岩8点、輝石安山岩1点で、総重量は9,470g（平均重量1,052.2g）である。玄武岩1点は2号砾群の砾2点との間に接合が確認された。また北側の玄武岩1点は遺構外の砾1点との間に接合が確認された。

2号砾群（第224図）

グリッドG-11に位置し、14点の砾が出土した。検出層位はB B Iである。北に隣接して1号砾群がある。石材は、玄武岩10点、輝石安山岩4点で、総重量は7,290g（平均重量520.7g）である。玄武岩2点は1号砾群の砾1点との間に接合が確認された。

3号砾群（第225図）

グリッドF-12とG-12の境目に位置し、4点の砾が出土した。その北側より石器1点が出土しており、さらに約1m北西に炭化物集中範囲が確認された。検出層位はB B Iである。約3m西に1号石器ブロックがある。石材はすべて玄武岩で、うち3点は接合が確認され、遺構外の1点とも接合した。総重量は3,140g（平均重量785g）である。石器は天城柏崎産黒曜石の剥片である。



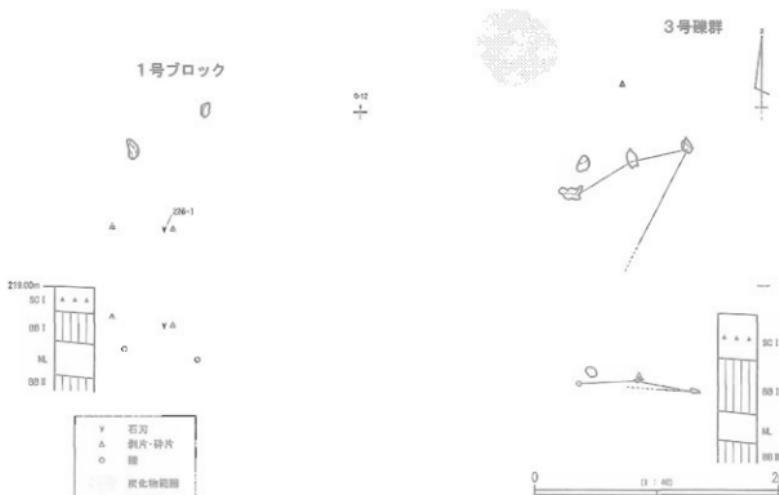
第224図 第II文化層 1号・2号砾群

1号石器ブロック（第225図・第226図-1）

グリッドF-IIとG-IIの境目に位置し、3点の石器と2点の礫で構成される。礫の検出層位はB B Iだが、石器の検出層位はS C Iである。石器と礫の間には約25cmの高低差が認められるが、石器をB B Iからの浮き上がりと捉えた現地調査での見解を尊重し、ブロックとして報告する。約3m西に3号礫群がある。礫の石材は2点とも輝石安山岩で、総重量は3,210g（平均重量1,605g）である。

石器は、天城柏崎産黒曜石の石刃1点、剥片2点で構成され、3点とも同一の母岩と推定される。

石刃(1)は、背面に主要剥離面と同一方向の剥離が多く認められる小型のものである。左側縁上半と右側縁下端に微細剥離痕が認められる。また、腹面には打点部周辺に打面側からの調整がなされる。



第225図 第II文化層 3号礫群と1号石器ブロック



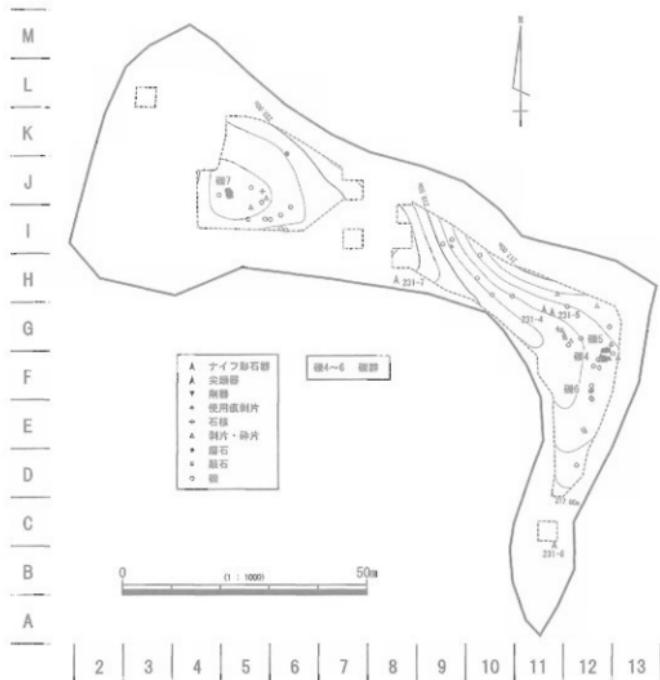
第226図 第II文化層 出土石器

遺構外の石器

調査区東部から黒曜石およびホルンフェルスの剥片などが出土した。黒曜石のものには一部に加工痕、使用痕が認められるものがある。

4 第Ⅲ文化層(Y LL~Y LU)の遺構と遺物

休場層からは礫群4基が検出され、うち2基は石器を伴って出土したが、石器ブロックは確認されなかった。遺物も石器34点と少なく、製品は10点とさらに少ない。礫は66点が出土し、37点が礫群からの出土である。これらの遺構、遺物は調査区の西側尾根部と東側尾根部を中心に分布している。



第227図 第Ⅲ文化層 遺物分布図

第61表 第Ⅲ文化層 磫組成表

	4号礫群	5号礫群	6号礫群	7号礫群	礫群計	遺構外
輝石安山岩 An(Py)		3		15	18	12
玄武岩 Ba	3	1	1	9	14	16
多孔質玄武岩 VBa			2	2	4	
アブライト Ap	1				1	
細粒斑レイ岩 PG					0	1
計	4	4	3	26	37	29
総重量(g)	2,340	1,330	840	9,580	14,090	

4号礫群（第228図・第230図-1）

グリッドF-12の北東角に位置し、4点の礫と7点の石器が出土した。検出層位はY LMである。北に隣接して5号礫群がある。礫の石材は、玄武岩3点、アブライトの小礫1点で、総重量は2,340g（平均重量585g）である。石器の石材は、ホルンフェルス3点、神津島恩馳島産黒曜石2点、細粒安山岩2点で、製品は削器1点と使用痕剥片1点が出土している。

削器（1）は、細粒安山岩の大形の不定形な剥片を使用したものである。剥片の末端部に部分的な調整加工が認められる。背面に残された素材剥片の剥離は方向が一定ではなく、打面と作業面を転移しながら素材剥片の剥離が行われたと考えられる。

黒曜石の使用痕剥片（S-6885）は、小さい剥片の鋭い縁辺に微細な剥離が多数みられるものである。

5号礫群（第228図・第230図-2・3）

グリッドF-12とG-12の境目に位置し、4点の礫と5点の石器が出土した。検出層位はY LMである。南に隣接して4号礫群がある。礫の石材は、輝石安山岩3点、玄武岩1点で、総重量は1,330g（平均重量332.5g）である。石器の石材は、ホルンフェルス1点、諏訪星ヶ台産の黒曜石1点、細粒安山岩2点、ディサイト1点で、製品は削器1点と敲石1点が出土している。

削器（2）は、4号礫群出土のものと同様、細粒安山岩の大形の不定形な剥片を素材とし、両者は同一の母岩であると推定される。剥片の末端部と左側縁を刃部として利用している。背面に残された素材剥片の剥離痕は概ね主要剥離面と同一の剥離方向を示し、数枚の剥片が同一の作業面で剥離されたことがうかがわれる。背面下部には広く自然面が残存している。

敲石（3）は、ディサイトの、拳大で厚みのある円礫を利用したもので、その一端に敲打痕と大きな破損が認められる。使用部から生じたヒビが礫の周囲に巡っている。

第62表 第III文化層 磕群内石器組成表

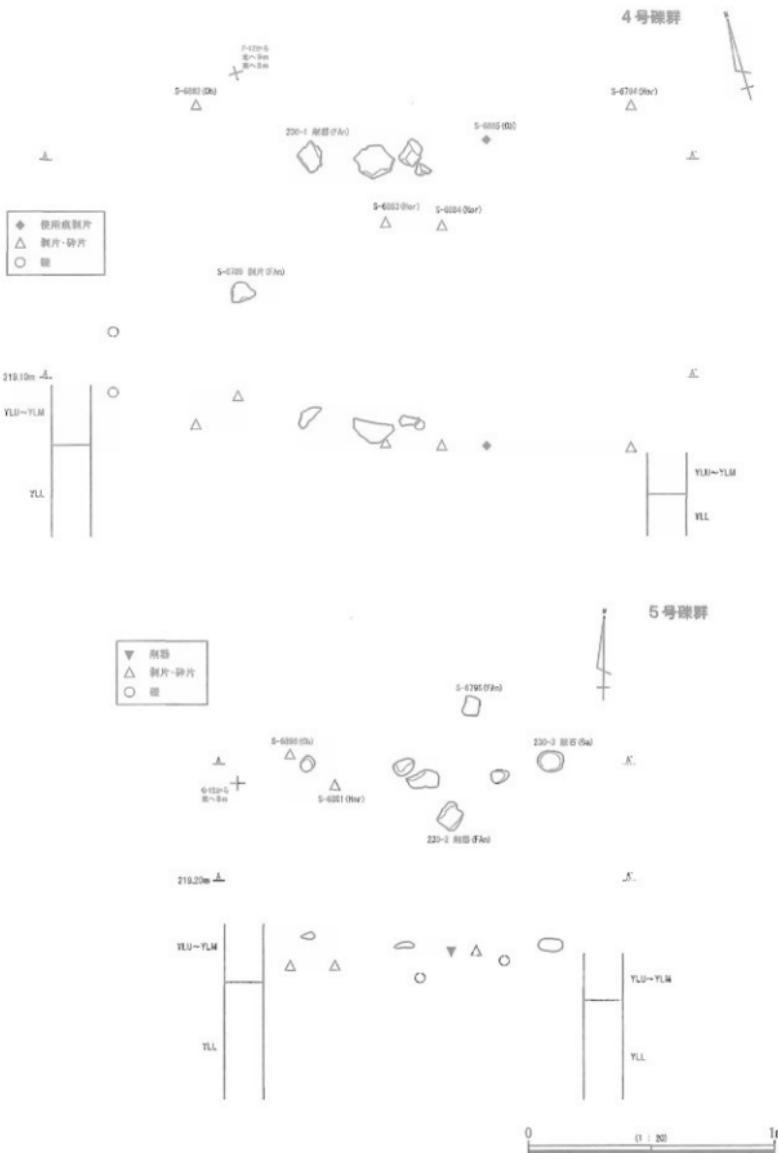
削器	《4号礫群》			《5号礫群》			計
	使用痕剥片	剥片	計	削器	剥片	敲石	
黒曜石 (Ob)	神津島恩馳島群 KZOB		1 1 2				
	諏訪星ヶ台群 SWHD				1	1	
細粒安山岩	FAn	1	1 2	1	1		2
ホルンフェルス	Hor		3 3		1		1
ディサイト	Da					1	1
計		1 1 5	7	1	3	1	5

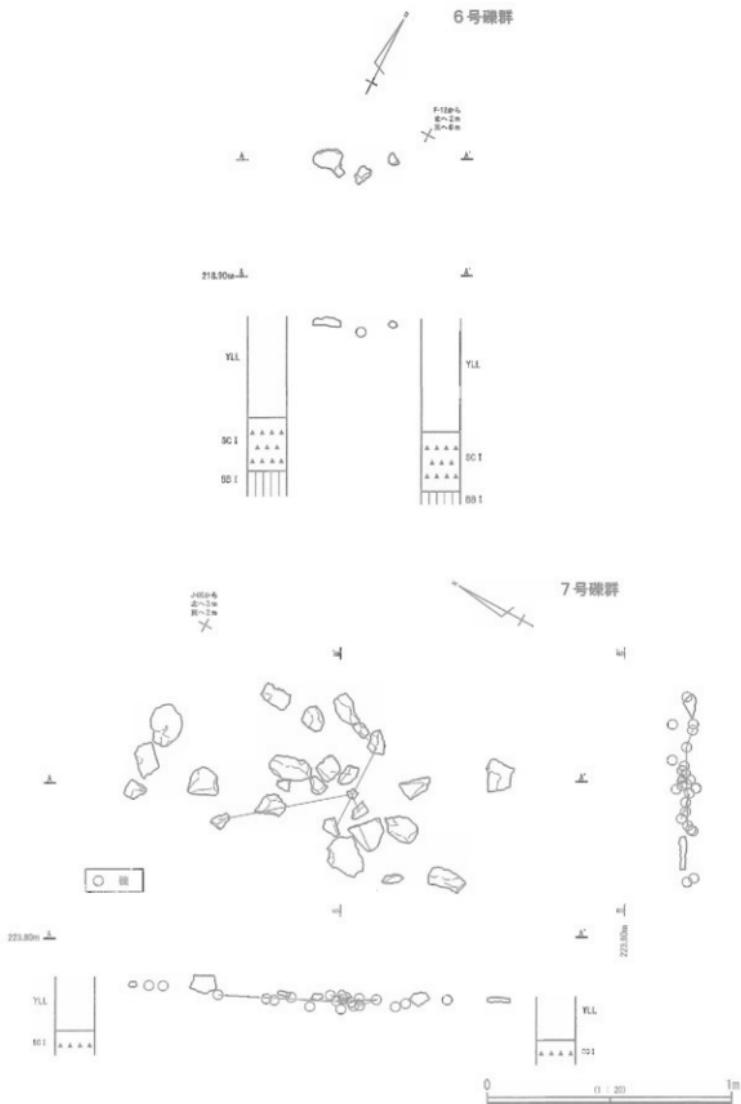
6号礫群（第229図）

グリッドF-12の南側に位置し、3点の礫が出土した。検出層位はY LSである。約8m北に4号礫群がある。礫の石材は、玄武岩1点、多孔質玄武岩2点で、総重量は840g（平均重量280g）である。

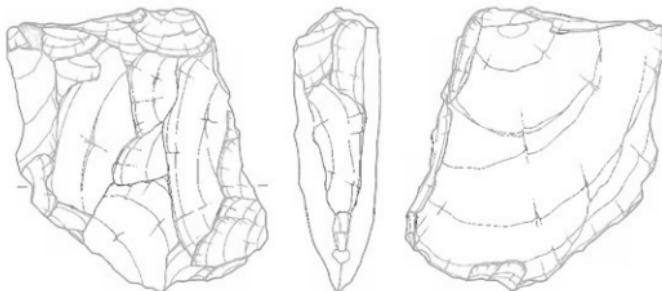
7号礫群（第229図）

グリッドJ-5、調査区西側の尾根上の平坦部に位置し、26点の礫がまとまって出土した。検出層位はY LSである。礫の石材は、輝石安山岩15点、玄武岩9点、多孔質玄武岩2点で、総重量は9,580g（平均重量368.5g）である。礫群内で3組の接合が確認された。

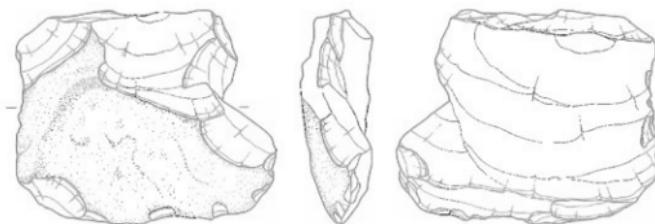




第229図 第III文化層 6号・7号砾群



1 破器
6790 FAn



2 刨器
6796 FAn



0 1 : 2 5cm



3 磨石
6795 Dg

0 1 : 2 10cm

第230図 第III文化層 出土石器(1)

遺構外出土の石器（第231図）

調査区全体から石器が出土しているが、ナイフ形石器や尖頭器といった製品は調査区の東半部にのみ確認される。

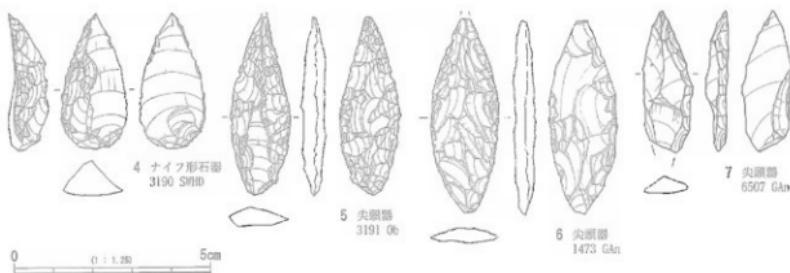
ナイフ形石器(4)は厚みのある縦長の剥片を素材としている。左側縁の腹面側からの急斜度剥離が調整の大部分を占める。右側縁基部の背面への小さい剥離、腹面右側縁基部の平坦な剥離、および背面の綫上からの左右に向けた剥離がそれに加わる。素材打面が残存しており、基部は厚みをもつ。涙滴形の外形である。

尖頭器は3点が出土している。5は両面加工、6は半両面加工、7は部分加工である。5は黒曜石を用いている。ほぼ全面が細かい調整で覆われるが、表面基部側中央の縦に長い剥離痕は素材面が残されているものと考えられる。6と7はガラス質黒色安山岩を用いる。6は、表面は全面に調整が施されるが、裏面には中央部に広く素材面と考えられる横方向からの剥離面が残る。先端部は若干折損する。7は縦長剥片を素材に用いる。右側縁と左側縁先端部を腹面から比較的急斜度の剥離で調整し、腹面右側縁下部を比較的平坦な剥離で調整する。基部は折損する。

そのほかにホルンフェルスの石核(S-6903)が出土しているが、節理に沿った剥離が多く、剥片剥離のあり方は判断しがたい。

第63表 第Ⅲ文化層 遺構外出土石器組成表

		ナイフ形石器	尖頭器	使用痕剥片	石核	剥片・碎片	磨石	計
黒曜石 (Ob)	神津島恩馳島群	KZOB			1	1		2
	諏訪星ヶ台群	SWHD	1			1		2
	和田鷹山群	WDTY		1				1
	産地不明	-		1	1	4		5
	ガラス質黒色安山岩	GAn	2					2
	細粒安山岩	FAn				1		1
	ホルンフェルス	Hor			1	7		8
砂岩(粗粒)		CSS					1	1
計			1	3	1	2	14	1
								22



第231図 第Ⅲ文化層 出土石器(2)

第3節 繩文時代の遺構と遺物

1 遺構と遺構内出土遺物

(1) 概要 (第230図・第231図)

繩文時代の遺構としては、焼土跡2基、炉跡1基、配石1基、繩文石器集中3基、集石20基、土坑5基が確認された。遺構のほとんどが尾根上の平坦部に位置し、尾根がもっとも細くなる調査区中央付近に少なく、東西の平坦部に偏って検出された。

炉跡は繩文中期の石圓炉と考えられる。4号土坑は土器と炭化物が出土した。炭化物は放射線測定により繩文時代早期前葉から中葉にかけてのものと確認され、土坑の構築時期もこれらの内に求められると考える。繩文石器集中に伴う土器から、1号と3号は繩文時代早期後半のものと推定される。その他の焼土跡、集石、土坑は、検出層位がK U～F Bの混合層である為、遺構の明確な時期区分は困難である。しかし、周辺の包含層から燃系文系、押型文系、条痕文系の土器が多く出土しており、遺構の分布と遺物の集中地点が重なることから、他の遺構も繩文時代早期に属すると推測される。



第232図 繩文時代 遺構配置図



第233図 縄文時代 遺物分布図

(2) 焼土跡 (第234図)

焼土跡は調査区の尾根上で2基検出された。集石、配石との距離は近いものの検出面の高低差があることから、周辺の遺構との関係は無いと考えられる。検出された焼土跡からは出土遺物は無く、明確な時期の特定ができなかった。

1号焼土

1号焼土は調査区の東側、グリッドE-12の標高219.80mに占地する。検出面はK U～F Bの混合層である。

2号焼土

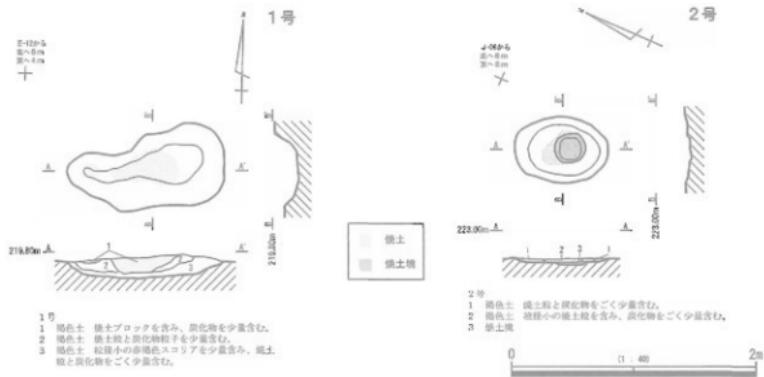
2号焼土は調査区の西側、グリッドJ-6の標高223.80mに占地する。焼土粒を含むプランをY LMで検出したが浅く、実際は更に上面から構築されていたと思われる。底部に焼土塊を確認した。

(3) 炉跡 (第235図)

炉跡は調査区の中央部よりやや西側、尾根上の標高222.70mに占地する。検出面はK U～F Bの混合層である。平面形態は不整形な楕円形を呈し、長径0.8m短径0.7m深さ0.29mを測る。断面形はU字状を呈し、覆土に炭化物が含まれるが、焼土は確認されなかった。炉石は20cm～30cmの石が3個のみ確認され、熱を受けた痕跡がある。炉内から燃糸文をもつ土器が1点出土し、胎土から炉の構築時期は縄文時代の中期後半と思われる。また同一個体の土器が炉跡から10m～20m離れて出土した。住居の可能性があったが、柱穴及び住居プランは確認できなかった。

(4) 配石 (第236図)

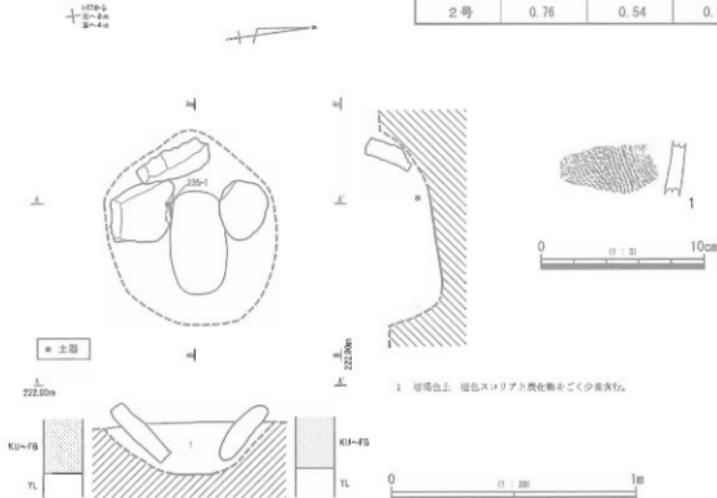
配石は調査区の中央部よりやや西側、尾根上の標高233.00mに占地する。検出面はK U～F Bの混合層の中位である。長径40cm大の礫1点、拳大の礫2点、及びやや赤化した磨石・敲石類1点、敲石2点、ホルンフェルスの礫器1点がまとまって出土した。大型の礫は水平にはなってないか近接して礫器類が出土したことから、何らかの作業を行った場所の可能性があると捉えられよう。遺構の周辺から条痕文系及び押型文系土器が出土している。構築時期もこれらの内に求められると考える。



第234図 焼土跡

第64表 焼土跡計測表

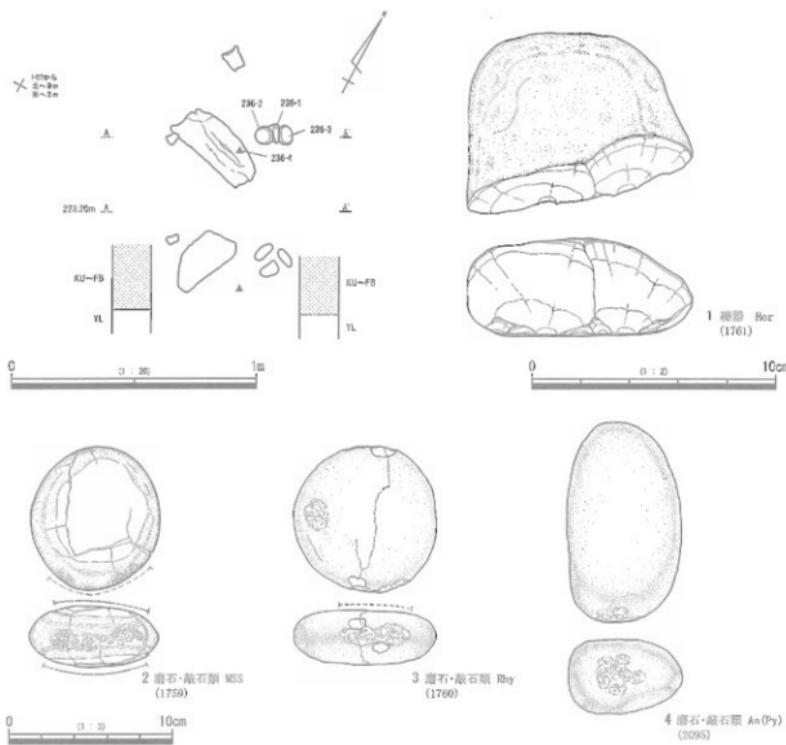
焼土番号	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1号	1.28	0.68	0.18
2号	0.76	0.54	0.05



第235図 炉跡と出土遺物

第65表 炉跡 土器観察表

探査番号	分類	残存部位	外面部調 内面部調	胎 土	織津	文様・調整	焼成
第235図 1	第VI群	脚部	T.SY25/6 T.SY25/4	多量の石片・瓦片、雲母、少量の輝石	無	只の捺印を施す	良



第236図 配石と出土遺物

第66表 配石 石器計測表

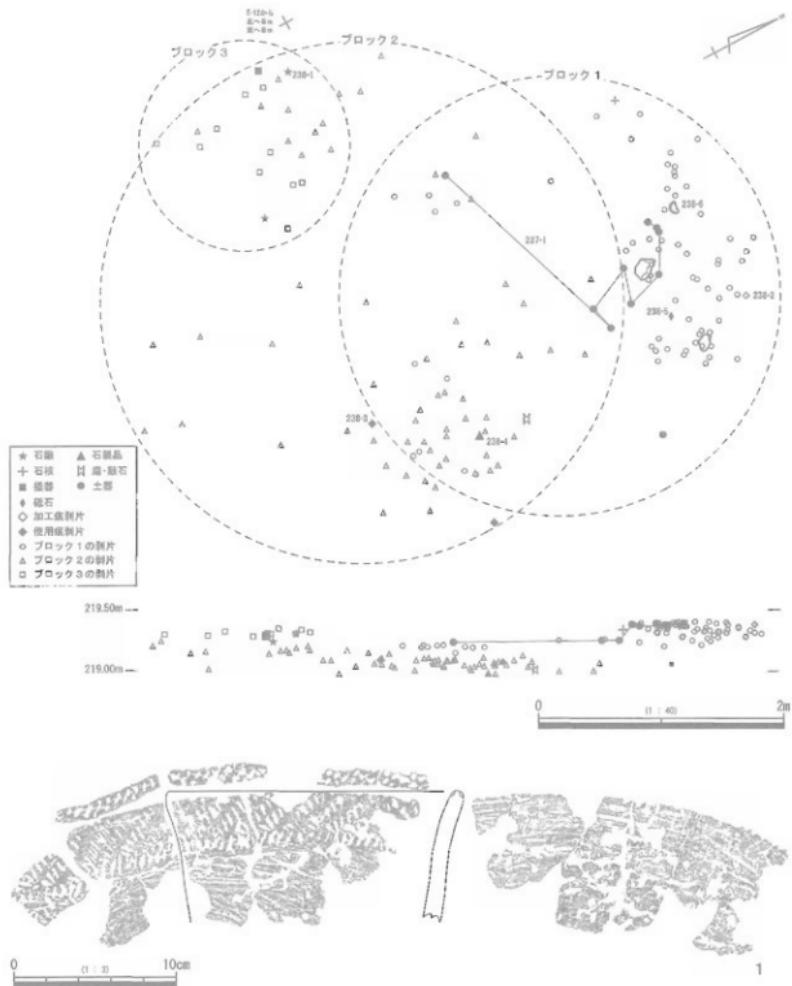
探査番号	遺物番号	出土層位	石材	断面	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第236図	1 1761	KU～FB	ホルンフェルス	縦断	93	74	40	395.2	
	2 1759	KU～FB	砂岩(中層)	横断	87	80	37	340	
	3 1760	KU～FB	漂砾岩	横断	90	88	34	410	
	4 2095	KU～FB	輝石安山岩	横断	123	71	46	590	

(5) 繩文石器集中 (第237図・第238図)

縩文石器集中は調査区東側の尾根上平坦部の標高219.00m～219.40mの範囲に占地する。石器は黒曜石を主体に151点、礫8点が出土している。垂直分布を検討した結果、平面分布のまとまりと共にレベルの高低差が見られることから、1号～3号のブロックに分けて報告する。

1号ブロックは72点の石器と8点の礫で構成される。天城柏崎産黒曜石の加工痕剥片、細粒安山岩の砥石、ホルンフェルスの石核、輝石安山岩の磨・敲石が出土している。早期後半の絞条体圧痕文土器を伴うことから同時期のものと考えられる。

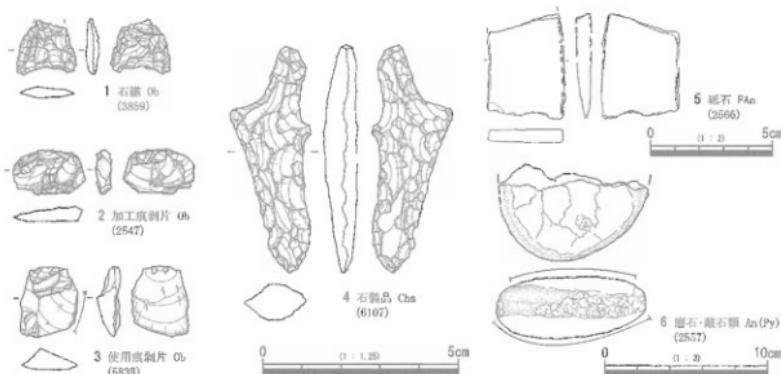
土器(第237図)は、口縁部文様帯に斜方向の半置半転絡条体を施し、その下は水平方向の一条の施文により無文部と区別する。口唇部にも同じ原体で圧痕が施されている。内外面に条痕が確認でき、胎土



第237図 繩文石器集中と出土土器

第67表 繩文石器集中 土器観察表

掲図番号	分類	残存 部位	外面部色調 内面部色調	胎 土	鐵捲	文様・調査	焼成
第237図	1	第IV部	口縁部 ～瓶底 7.5YS/5 7.5YS/5	多量の黒色粒子、石英-長石、輝石、白色 粒子	多量 原体	口縁部に半圓半軸線状を施文、口周部にも同 原体で施文あり(原体不明)	やや 不良



第238図 繩文石器集中 出土石器

第68表 繩文石器集中 石器計測表

博団番号	遺物番号	出土層位	石 材	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備 考
第238図	1	KD~PB	黒曜石	石器	13.9	14.9	2.9	0.6	縄目星ヶ台群
	2	KD~PB	黒曜石	加工痕剥片	18.0	115.0	4.0	0.9	天城柏崎群
	3	KD~PB	黒曜石	使用痕剥片	17.4	14.5	5.5	7.1	天城柏崎群
	4	KD~PB	玉髓	石削器	58.0	20.5	8.1	8.1	
	5	KD~PB	縞模質岩	石器	53.5	39.5	7.5	23.3	
	6	KD~PB	縞石安山岩	縞石・巣石類	[64.9]	91.2	37.2	[210]	

には多量の繊維と黒色粒子が含まれる。形式は不明であるが、早期中葉以降でとらえたい。

2号ブロックは1号および3号ブロックに比べ、約20~30cm低いレベルから出土している。66点の石器で構成され、天城柏崎群を中心とする在地系黒曜石が主体となると考えられる。天城柏崎産黒曜石の使用痕剥片2点、玉髓の石製品、岬石安山岩の敲石が出土している。散漫な分布ながら縄文系文土器を伴う。数個体が含まれるが、胎土に繊維を含むものが多いことから、早期の中でも比較的早い時期の土器と考えられる。また2号ブロックの北側境界付近からは押型文土器(第254図-71参照)が小規模ながらまとまって出土している。

3号ブロックは13点の石器で構成され、いずれの黒曜石も透明度が高く信州系の可能性が高い。石鏡2点が出土している。3号ブロックの南東側境界付近より早期後半の入海I式の土器(第254図-87参考)が集中して出土していることから、1号ブロック同様、早期後半のものと考えられる。

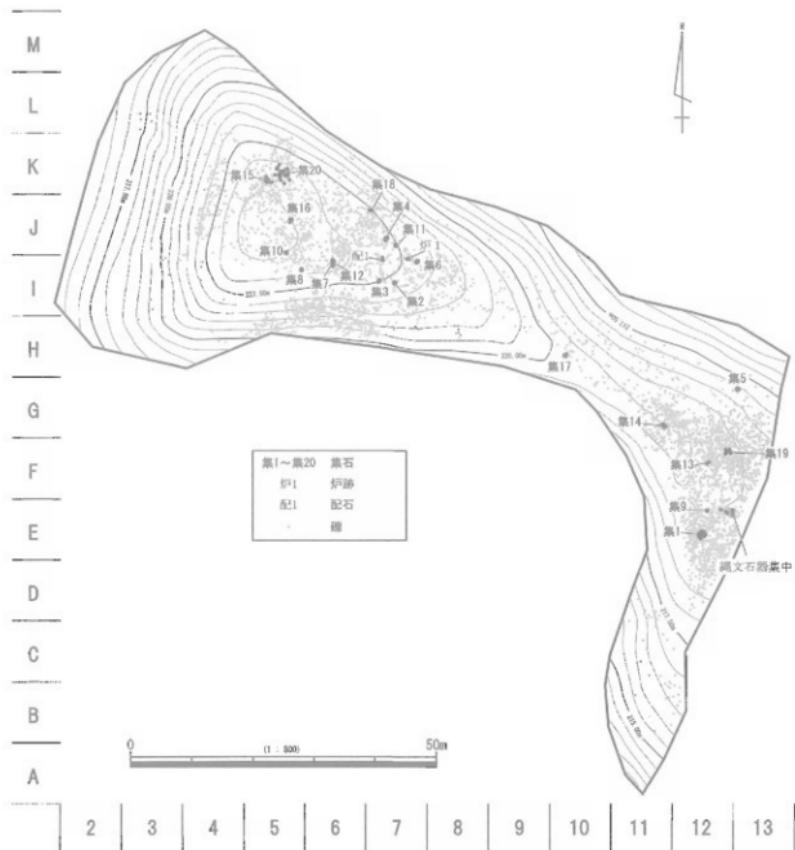
いずれのブロックも碎片を主体とし、比較的大きい剥片を少量伴う。剥片剥離作業は行われていたとしても小規模であったといえる。石器の二次加工が行われた可能性がある。

おもな出土石器について記載する。1号ブロックには2、5、6が属する。2は加工痕剥片で、右側縁に自然面を残す不定形剥片を素材に、腹面の打点部に連続した二次加工を行っている。5は縞石で、平面形は四角形に近く、3辺には未加工の面が残される。残る1辺は表裏面が接し比較的鋭い縁辺となっており、刃こぼれ様の剥離も認められる。表裏面には様々な方向の擦痕が認められる。6は磨・敲石で、碎ける様に割れ半分を失う。扁平円形の礫を素材としたと考えられ、平坦な面に磨痕が、周辺部分に打痕が認められる。2号ブロックには3、4が属する。3は使用痕剥片で、背面には上下からの剥離が認められ、両極打法で得られた素材の可能性がある。特に鋭い縁辺を有する右側縁に微細剥離痕が

並ぶ。4は白色半透明の玉髓を用いた石製品である。形態は有茎鏡に似るが器軸は湾曲しており、石鏡としての利用は考えにくい。全体に厚みがある。右側縁の返しは緩やかに内湾する側縁に小さい突出を作り出す。左側縁の返しはより大きく作られ、身部からわずかに内湾しながら返しに至り、返しから茎部にかけては深く内湾する。茎部は側縁が平行し、長く作り出される。3号ブロックには1が属する。基部を緩く抉る凹基無茎石鏡で、裏面上半部には先端部側から階段状の剥離が認められ、使用による衝撃剥離の可能性がある。

(6) 集石 (第238図～第242図)

集石は調査区の尾根上ないし尾根から斜面への変換点付近で20基検出された。調査区の西側で13基、東側では6基、尾根がもっとも細くなる中央で1基分布する。



本遺跡も入ノ洞B遺跡と同様に保坂1997の分類にあてはめると、密集型は1号～9号集石、集中型は10号～16号集石、分散型は17号～20号集石となる。

また1号～7号、10号～12号集石は土坑を伴っていた。全ての集石の構築時期を確定するのは難しいが、周辺からやはり条痕文系及び押型文系の土器が出土していることから、縄文時代早期に位置付けられると思われる。

1号集石

1号集石は調査区南東側、尾根から南への緩斜面の標高219.30mに占地する。K U～F Bの混合層の中位で検出された。本遺跡の最大数の礫からなり、まとまりも最大のものである。中心部を樹木痕で搅乱されていた。遺構は円形土坑を伴うもので、土坑の底部付近は硬化しており、受熱に伴うものと考えられる。礫14点が6個体として接合した。遺物は黒曜石とホルンフェルスの剥片石器が9点、土器は撲糸文系が2点出土した。土器片は遺構周辺の包含層出土の土器と同一個体と思われる。(第252図-21)出土土器から構築時期は縄文時代早期の撲糸文の時期と思われる。

2号集石

2号集石は調査区中央よりやや西側、尾根から南東への緩斜面の標高222.60mに占地する。K U～F Bの混合層の中位で検出された。密集度の高い集石で土坑を伴っていた。遺物は出土していない。

3号集石

3号集石は調査区中央よりやや西側、尾根から南東への緩斜面の標高222.60mに占地する。K U～F Bの混合層の下位で検出された。土坑を伴うが、当初プランが確認できなかつたため、掘り込み面を大幅に欠いてしまった。実際の土坑の平面形態、深さは推定である。礫2点が1個体として接合した。遺物は出土していない。

4号集石

4号集石は調査区中央よりやや西側、尾根上の標高222.80mに占地する。K U～F Bの混合層の下位で検出された。土坑を伴うが、北東部分は掘りすぎで欠いてしまった。礫3点が1個体として接合した。遺物は磨石・敲石類が1点出土した。

5号集石

5号集石は調査区北東側、尾根から北への斜面地の標高218.60mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。土坑を伴い小さながらも礫はまとまりを見せる。周辺は受熱に伴うものと考えられる炭化物と、地山の硬化が認められた。礫2点が1個体として接合した。遺物は出土していない。

6号集石

6号集石は調査区中央よりやや西側、尾根から東への緩斜面の標高222.60mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。土坑を伴い、底部に板石のような礫が1個認められた。遺物は出土していない。

7号集石

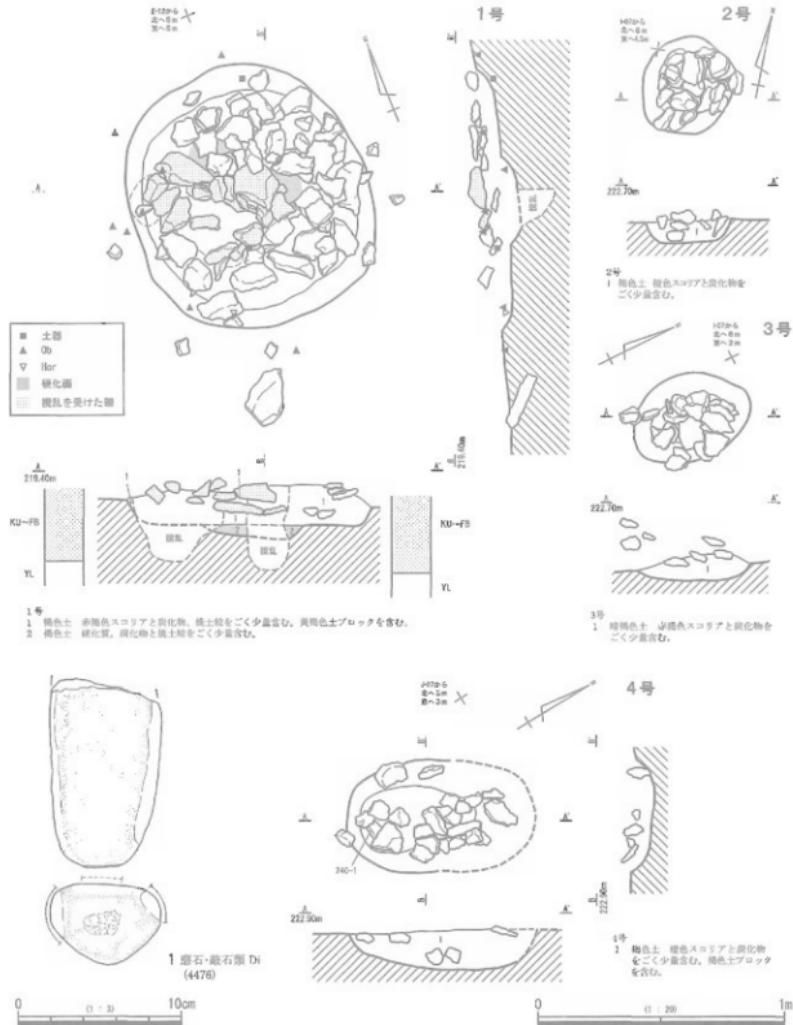
7号集石は調査区西側、尾根上の標高223.50mに占地する。南側に12号集石が隣接する。K U～F Bの混合層で検出され土坑を伴う。遺物は出土していない。

8号集石

8号集石は調査区西側、尾根から南への緩斜面の標高223.30mに占地する。K U～F Bの混合層の下位で検出された。比較的密度が高い。遺物は出土していない。

9号集石

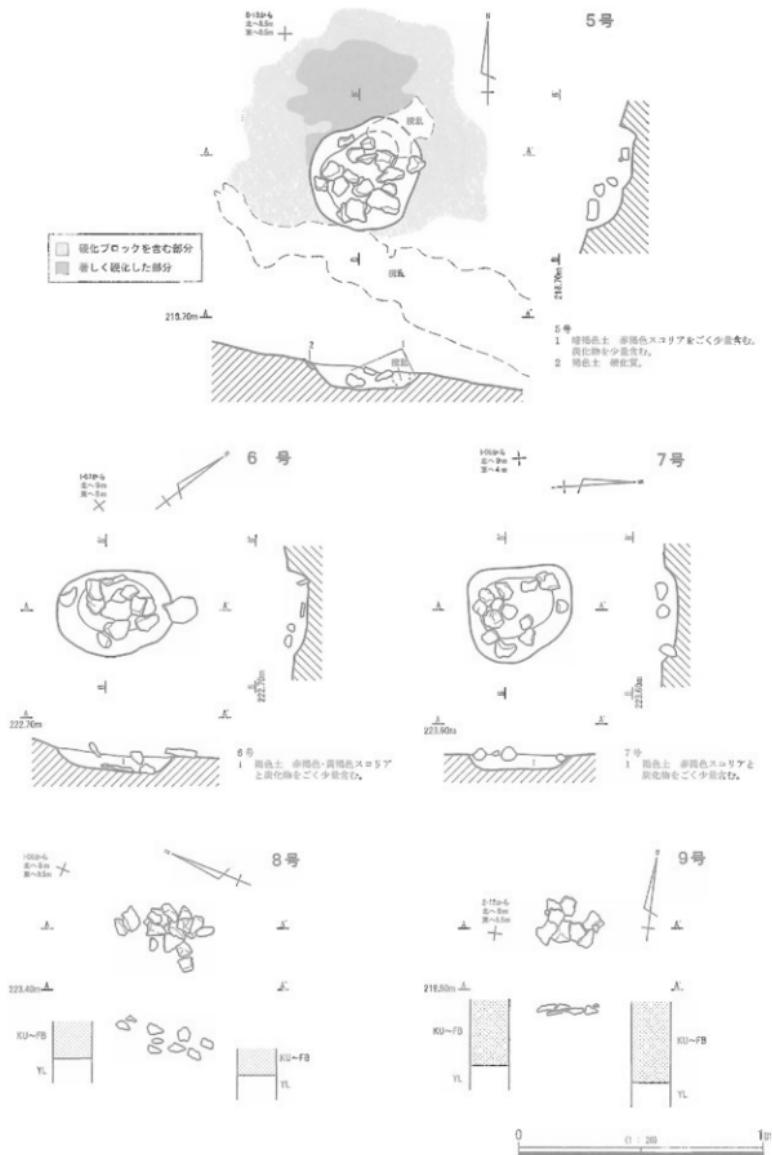
9号集石は調査区東側、尾根上平坦面の標高219.40mに占地する。K U～F Bの混合層の上位で検出された。礫6点が2個体として接合した。遺物は出土していない。



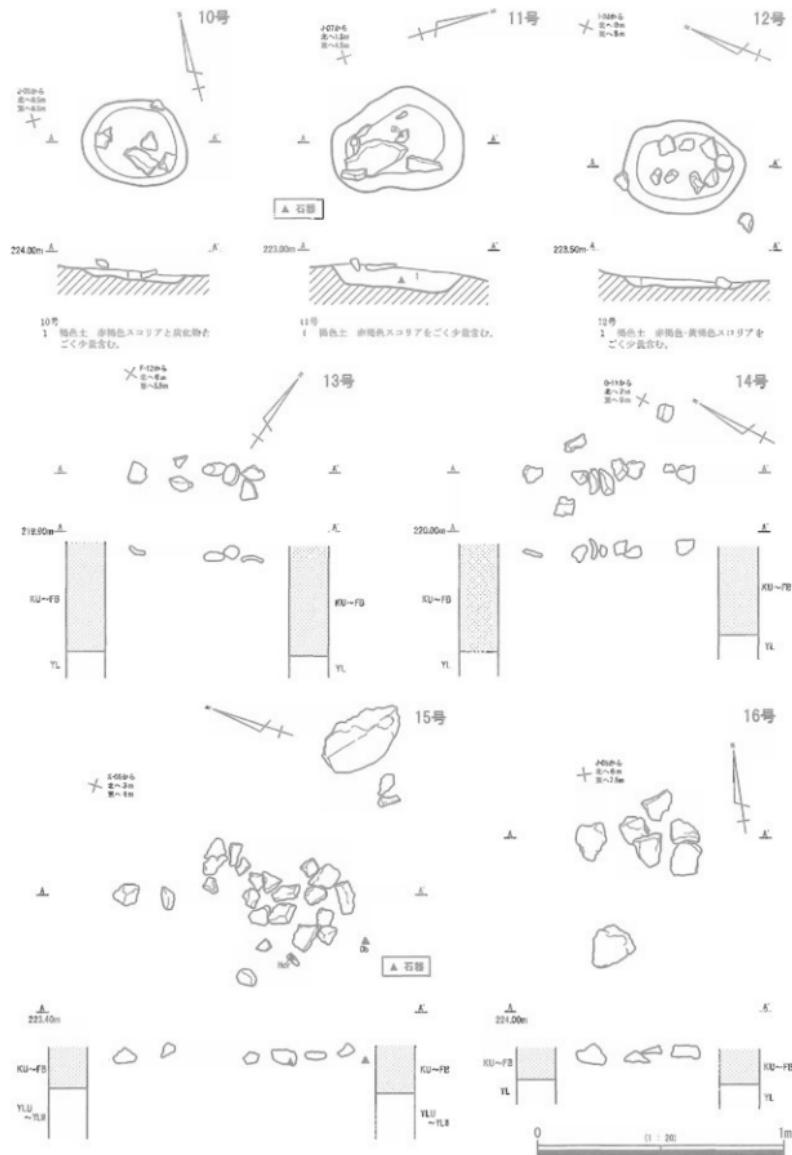
第240図 1号～4号集石

第69表 4号集石出土 石器計測表

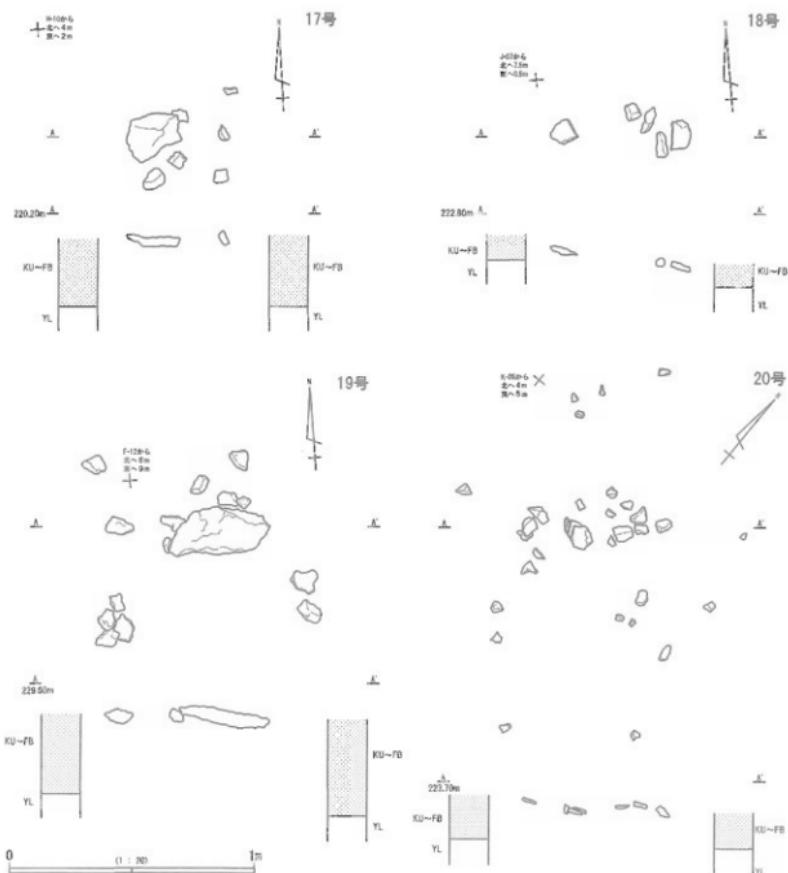
測定番号	遺物番号	出土層位	石材	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
第240号	1	4476	褐土	閃綠岩	【103.8】	68.6	50.8	【610】	1/2次掘



第241図 5号～9号集石



第242図 10号～16号集石



第243図 17号～20号集石

10号集石

10号集石は調査区西側、尾根上平坦面の標高223.90mに占地する。K U～F Bの混合層で検出され土坑を伴う。遺物は出土していない。

11号集石

11号集石は調査区中央よりやや西側、尾根上平坦面の標高223.00mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。土坑を伴い、礫6点が1個体として接合した。また、覆土より諏訪星ヶ台産の黒曜石の二次加工剝片が出土した。

12号集石

12号集石は調査区西側、尾根上平坦面の標高223.50mに占地する。北側に7号集石が隣接する。K U～F Bの混合層で検出され土坑を伴う。遺物は出土していない。

13号集石

13号集石は調査区東側、尾根上平坦面の標高219.80mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。遺物は出土していない。

14号集石

14号集石は調査区東側、やせ尾根上平坦面の標高219.90mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。遺物は出土していない。

15号集石

15号集石は調査区西側、尾根上平坦面の標高223.20mに占地する。K U～F Bの混合層の下位で検出され、東側に人頭大以上の礫が含まれていた。礫2点が1個体として接合した。遺物はホルンフェルス1点、黒曜石の剥片2点が出土した。

16号集石

16号集石は調査区西側、尾根上平坦面の標高223.80mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。遺物は出土していない。

17号集石

17号集石は調査区中央よりやや東側、やせ尾根上の平坦面の標高220.10mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。遺物は出土していない。

18号集石

18号集石は調査区中央よりやや西側、尾根から北東への斜面地標高222.70mに占地する。K U～F Bの混合層の下位で検出された。比較的密度は低い。遺物は出土していない。

19号集石

19号集石は調査区東側、尾根上平坦面の標高229.50mに占地する。K U～F Bの混合層の上位で検出された。中央に人頭大以上の礫が含まれていた。遺物は出土していない。

第70表 集石計測表

分類	集石番号	長径(㎜) × 短径(㎜)	深さ(㎜)	平面形態	個数	備考
密集型	1	1.49×1.22	0.31	不整円形	86	土器2点、石器9点
	2	0.41×0.37	0.15	不整円形	24	
	3	(0.53×0.37)	(0.25)	椭円形	23	
	4	0.75×0.46	0.18	椭円形	23	石器1点
	5	1.07×0.94	0.13	不整楕円形	18	
	6	0.57×0.35	0.14	不整楕円形	13	
	7	0.48×0.42	0.09	不整形	13	
	8	0.41×0.27	-	-	16	
	9	0.26×0.25	-	-	11	
集中型	10	0.44×0.36	0.10	椭円形	6	
	11	0.54×0.43	0.11	不整椭円形	7	石器1点
	12	0.54×0.38	0.06	不整椭円形	10	
	13	0.56×0.18	-	-	7	
	14	0.71×0.46	-	-	11	
	15	1.40×0.80	-	-	25	石器3点
分散型	16	0.78×0.52	-	-	8	
	17	0.56×0.46	-	-	7	
	18	0.57×0.22	-	-	5	
	19	1.16×1.01	-	-	15	
	20	3.26×2.33	-	-	33	

20号集石

20号集石は調査区西側、尾根上平坦面の標高223.50mに占地する。K U～F Bの混合層で検出された。樹木が周辺に根をおろしており、礫が原位置から動いている可能性がある。その内、礫10点が4個体として接合した。遺物は出土していない。

(7) 土坑 (第244図)

土坑は調査区西側で2基、東側で3基、計5基確認された。

1号土坑

1号土坑は調査区中央部よりやや西側、尾根上平坦面の標高222.90mに占地する。南西2mに炉跡が隣接する。K U～F Bの混合層で検出された。土坑の断面はU字形でほぼ垂直に立ち上がる。覆土は4層からなり自然堆積を示す。遺物は出土していない。

2号土坑

2号土坑は調査区東側、尾根上平坦面の標高219.00mに占地する。Y LMで検出された。土坑の断面は鍋底状を呈し、なだらかに立ち上がる。覆土は2層からなり自然堆積を示す。遺物は出土していない。

3号土坑

3号土坑は調査区東側、尾根上平坦面の標高219.20mに占地する。Y LMで検出された。土坑の断面は皿状で浅い。覆土は2層からなり自然堆積を示す。遺物は出土していない。

4号土坑

4号土坑は調査区西側、尾根上平坦面の標高223.50mに占地する。K U～F Bの混合層の中位で検出された。土坑の断面は鍋底状を呈し、なだらかに立ち上がる。当初、割れた石皿が検出され、石皿を中心にベルトを設定し調査した結果、土坑を伴うことが判明した。よって平面形態は推定である。覆土は1層で人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は石皿の他、土坑底部より炭化物が出土した。この炭化物は種実同定検査によりクリ子葉が割れたものであること、放射線炭素年代測定で縄文時代早期前葉から中葉にかけての年代であることが確認された。土坑の用途は、覆土と割れた石皿が意図的に配置されたと考えるなら、墓坑に関わるものと思われる。土坑の周辺からは比較的大きめの礫が35点、黒曜石が1点出土した。その内で20cm～30cmの礫の周辺を精査したが、下には土坑を確認できなかった。

5号土坑

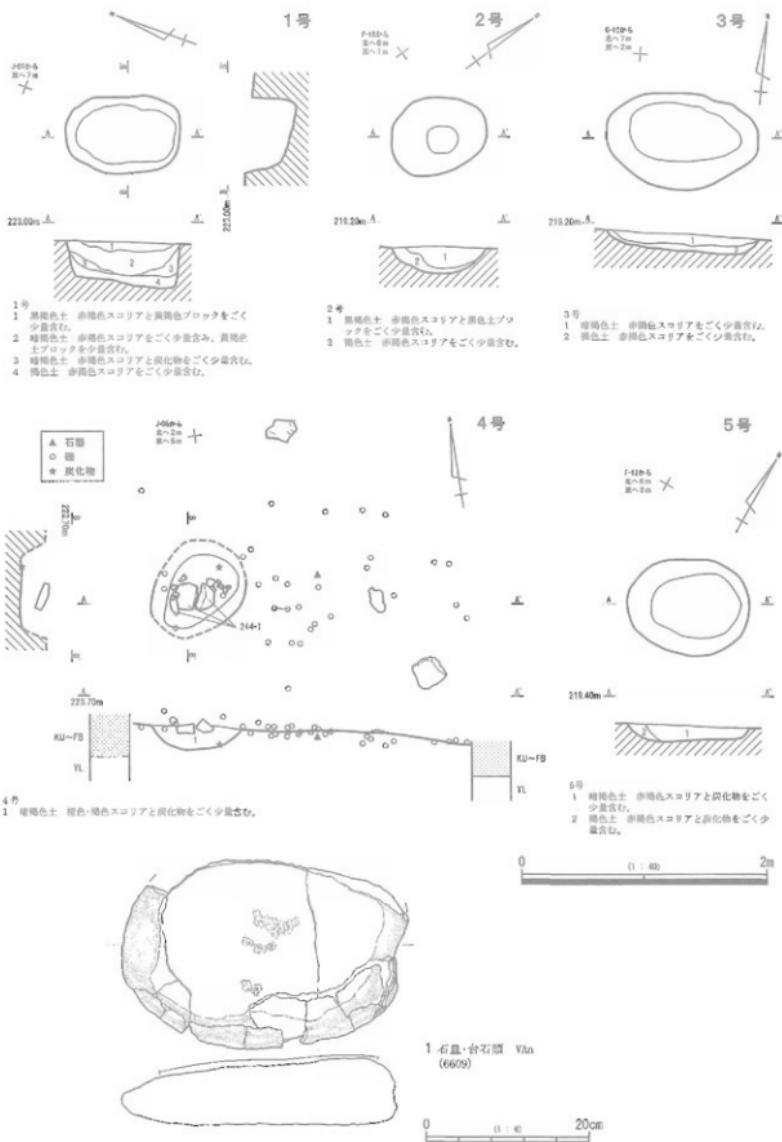
5号土坑は調査区東側、尾根上平坦面の標高219.20mに占地する。Y LMで検出された。土坑の断面は皿状で浅い。覆土は2層からなり自然堆積を示す。遺物は出土していない。

第71表 4号土坑出土 石器計測表

標図番号	遺物番号	出土層位	石 材	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考
第244図	1	6609	覆土	安山岩(多孔質)	石皿・台石皿	[235.0]	358.0	84.0	[9330] 一部欠損

第72表 土坑計測表

土坑番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	平面形態	遺 物
1号	0.93	0.63	0.45	不整橢円形	
2号	0.81	0.64	0.23	不整橢円形	
3号	1.25	0.80	0.19	不整橢円形	
4号	(0.84)	(0.69)	(0.27)	橢円形	石皿・炭化物
5号	0.99	0.78	0.15	橢円形	



第244図 編文1号～5号土坑

2 遺構外出土の土器

遺構外出土の土器は縄文時代早期を中心に現地調査時に612点出土した。その中で接合したものを含めて106点を図示した。時期および型式を以下のように分類して報告する。

群			類	
第I群	早期	撚糸文土器	A	縦方向に施文
第II群	早期	押型文土器	B	帶状に施文
			C	異方向に施文
			D	横方向に施文
第III群	早期	縄文土器		
第IV群	早期	絡条体压痕文土器		
第V群	早期	条痕文土器	A	入海I式土器
			B	入海式並行土器
			C	条痕文系型式不明土器
第VI群	中期	撚糸文土器		

分布状況（第245図～第251図）

本遺跡の土器は尾根上の平坦部から出土し、調査区中央部に少なく、東西に集中しており、東と西で接合する個体はわずかであった。

第I群 早期 撥糸文土器（第252図1～22）

いずれも破片で、接合したものは少なかった。原体の撚りは19がR L、20がR L R、22がLの他は全てRである。5・19・22を除いて胎土には纖維と白色粒子が含まれる。

1～6は撚糸文を外面に縦方向に施し、口唇部または口縁部内面にも同じ原体で横あるいは斜め方向に文様を施すものである。1は口縁部が外反する。2・4は口縁部をわずかに外反させ、口縁端部をナデて尖らせている。

7～22は外面にのみ施文があるものである。7～15は比較的太めの撚糸で縦方向に施文している。16～18は比較的細めの撚糸で施文している。5・16は軽少な胎土で、20はR L Rの撚糸を施した後、表面をナデている。21は細めのRの縄を疊に巻いた原体と、太めのRの縄を密に巻いた原体の、2つの原体で貫方向に施文していると思われる。1号集石からも同一個体と思われる土器が2点出土している。22はLの撚糸を異方向に施す。胎土に纖維と白色粒子を含まない。

第II群 早期 押型文土器（第252図23～第254図79）

押型文は施文方向によって分類した。施文方向は口縁部の施文を基準とし、口縁部以外の破片では施文方向が明らかなものはそれにより分類した。施文方向に意図的な規則性が見いだせない場合は「D類 横方向に施文」に分類した。胎土に纖維が含まれるものは、実測図断面に●を印した。

〈A類 縦方向に施文〉

23・24は山形文を縦方向に施すものである。25・26は楕円文を縦方向に施すものである。

〈B類 帯状に施文〉

27は山形文を口縁部は横方向に施し、その下は縦方向に帯状施文している。28は山形文を上下に無文部分を残し横方向に施しており、帯状施文と思われる。29は山形文を横方向に帯状施文している。30は破片上部に山形文が横方向に施され、その下に楕円文が横方向に施されており、破片下部は帯状施文の無文部分と思われる。31は楕円文を横方向に帯状施文している。29～31は胎土に多量の石英・長石・雲母・黒色粒子が含まれ、胎土と施文方法が類似する。32は楕円文を横方向に帯状施文している。

〈C類 異方向に施文〉

33・34は山形文を異方向に施すもので、35～45は楕円文を異方向に施すものである。

39は楕円文を全面に横方向に施した後、縦方向に帯状に施していると思われるが、縦方向の規則性ははつきりしない。最後に口縁部に1条、横方向に巡らせている。

〈D類 横方向に施文〉

46～52は山形文を横方向に施すものである。

46は口径約15.4cmで、口唇部は平坦に整えられている。底部は不明であるが、比較的小型の深鉢形土器と思われる。山形が深く密で大きめの山形文を横密接に施しており、施文の痕が段状に残っている部分が見られる。胎土には多量の雲母と白色粒子を含む。48は47よりも幅広の山形文を施している。52は山形文を胴部は横方向に、底部は異方向に施している。

53～57は格子目文を横方向に施すものである。53は口縁部上端に短い沈線を斜方向に施しており、一部に施文の痕と思われる段部が確認できる。54にも同様の段部が見られる。56は大きめの格子目文で施文している。57は細かい格子目文が施されており、施文方向に規則性は見られない。

58～65は変形文や異なる種類の組み合わせによる文様が施されたものである。

58は口唇部に刻みを施し、胴部は5本の平行線による変形の山形文を横方向に施している。59は山形文と矢羽根状文の組み合わせで、60は斜め平行線の下に矢羽根状文の間を横平行線で充填した押型文である。61は横平行線と縦の平行沈線が交互に施され、帯状の文様を構成している。その下は格子目文が底部まで横方向に施される。62は楕円文の下に、逆ハの字形で囲った中に横長の楕円粒を縦に並べた押型文を施す。63は木の葉形の間を平行線で充填した押型文の下に、楕円文を横方向に施す。64は破片上部に楕円文を施し、その下部にはLの繩文が施されている。65は破片左側には撚糸のようなものを斜方向に施した後、口縁部に横方向に1条巡らせていると思われる。破片右側は長楕円文を斜方向に施していると思われる。

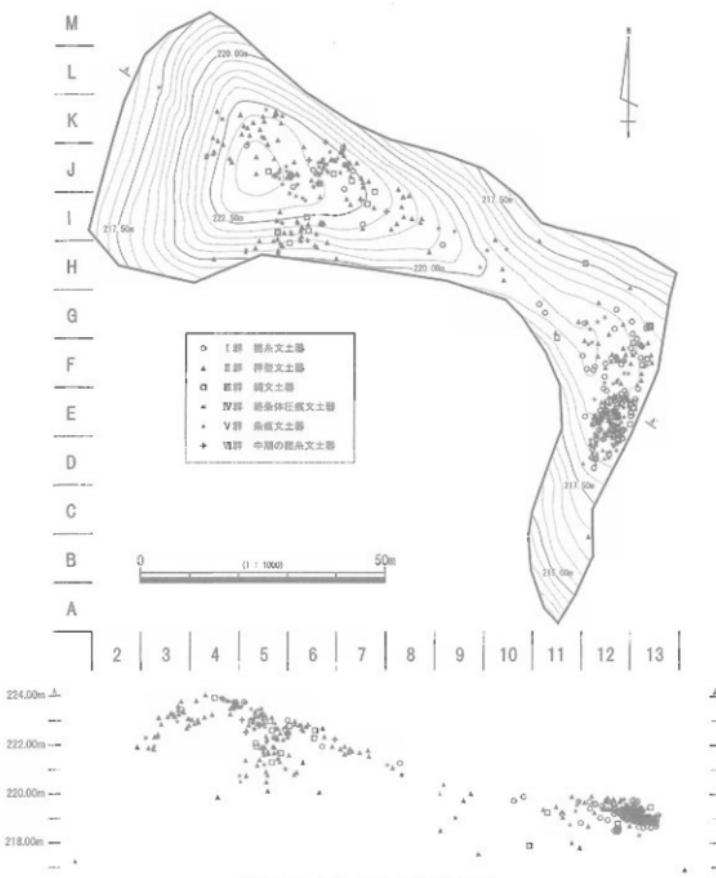
66～75は楕円文を横方向に施すものである。66・67は比較的粒の小さな楕円文が施されている。68は口唇部に細い撚糸が施されている。71～79は比較的大粒の楕円文が施されている。75は胎土に石英の岩片を含む。76～79も楕円文が施されているが、施文方向に規則性はみられない。

第三群 繩文土器（第254図80～85）

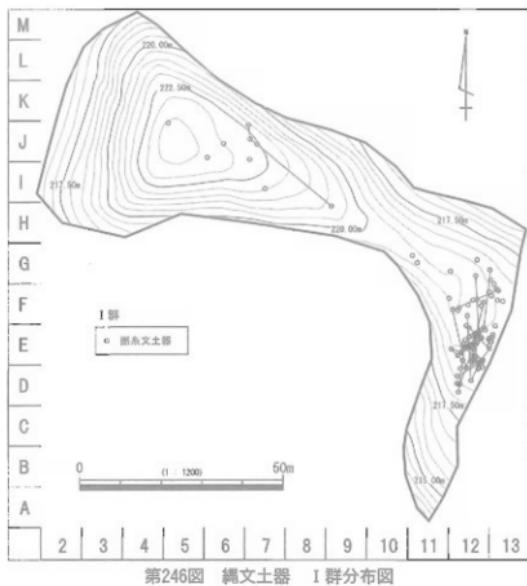
80～82はL Rの繩文を異方向に施すものである。83はRの繩文を異方向に施している。84は尖底の底部でR Lの繩文を異方向に施している。85も尖底の底部だが摩耗が著しく、繩文が施されていると思われるがはつきりしない。

第四群 絡条体压痕文土器（第254図86）

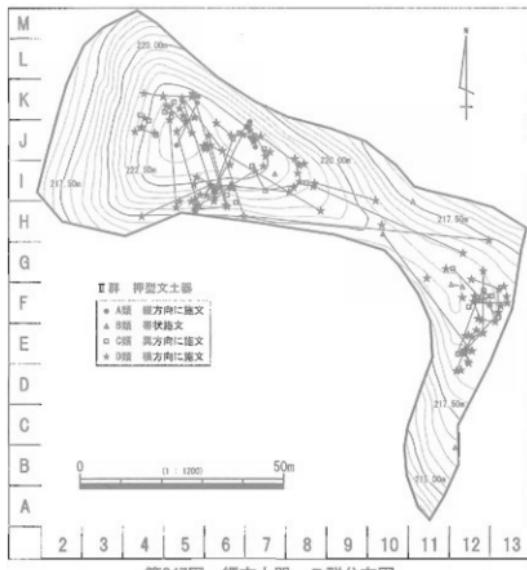
86は器厚が約6mmと薄めで、絡条体压痕文を斜方向に施している。胎土には纖維が含まれる。



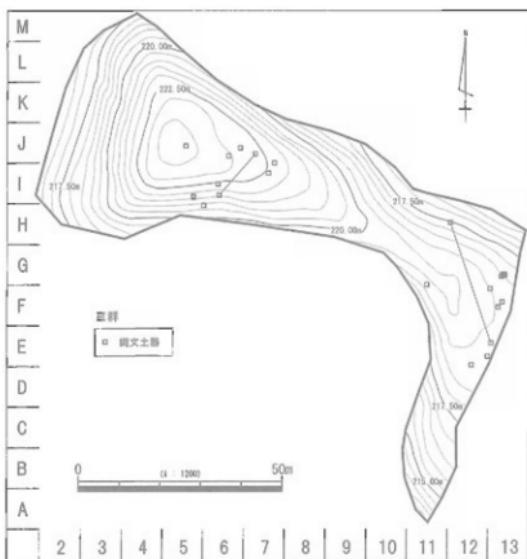
第245図 繩文土器 群別分布図



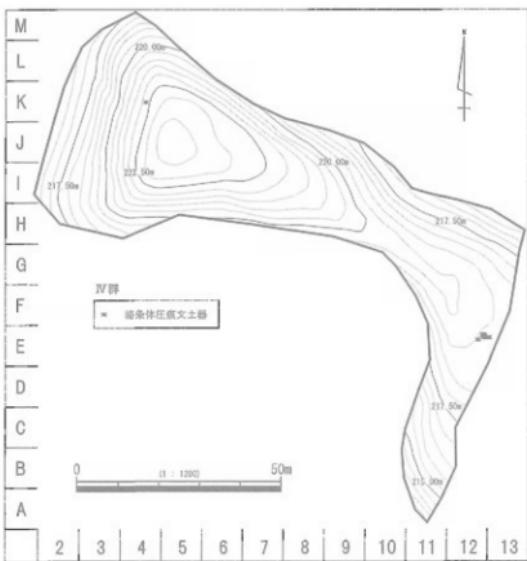
第246図 縄文土器 I群分布図



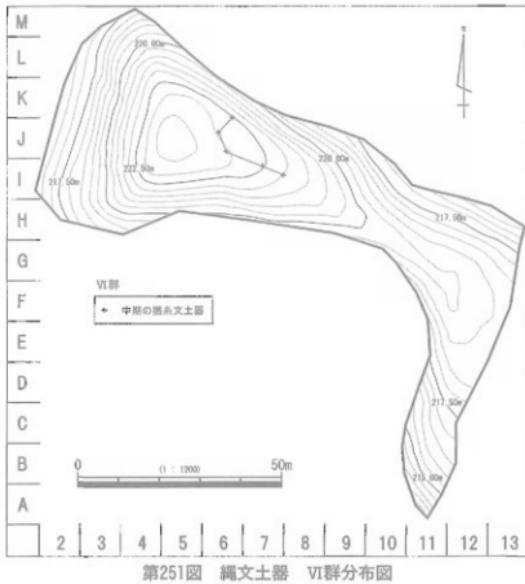
第247図 縄文土器 II群分布図

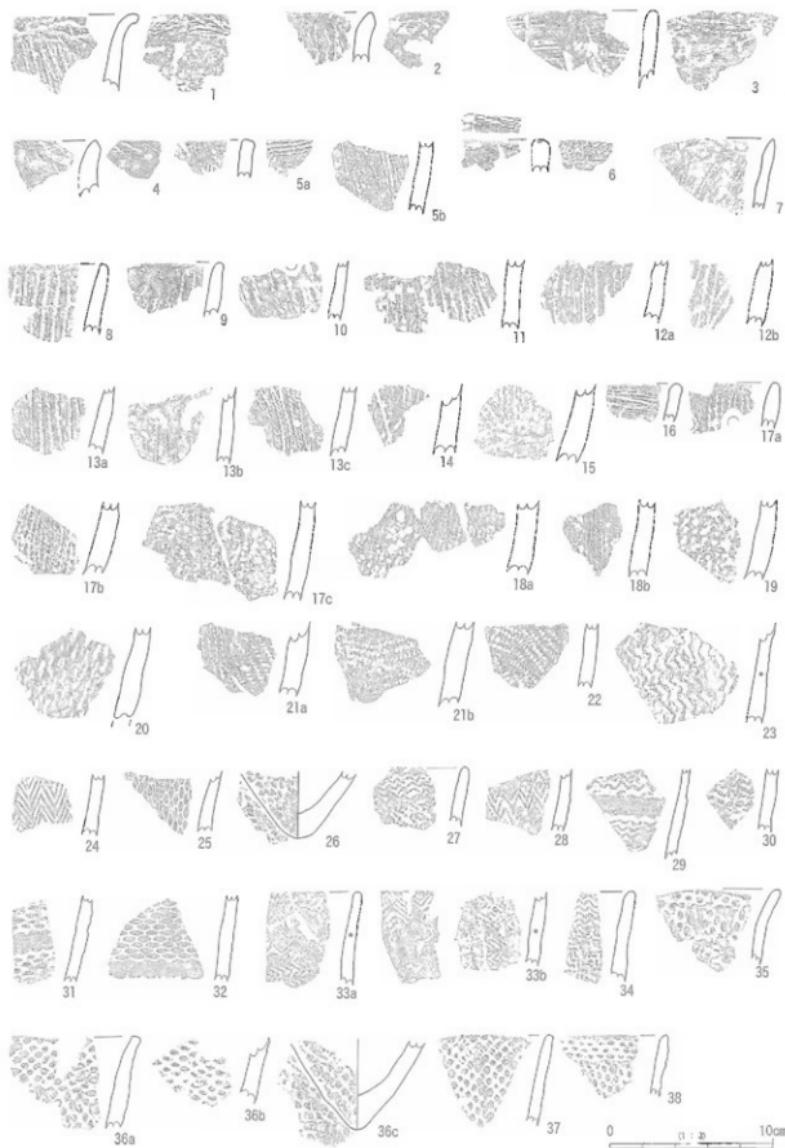


第248図 縄文土器 III群分布図



第249図 縄文土器 IV群分布図

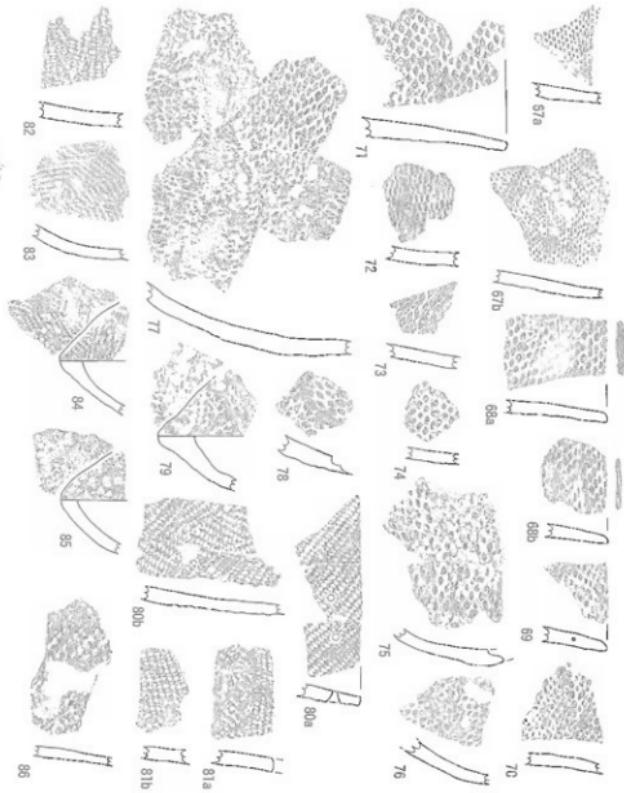




第252図 I 群土器・II群土器(1)



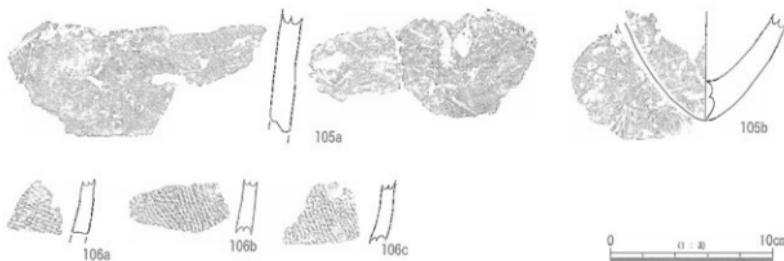
第253図 II群土器(2)



第254圖 II群土器(3)・III～IV群土器・V群土器(1)



第255圖 V群土器(2)



第256図 V群土器(3)・VI群土器

第V群 条痕文土器 (第254図87～第256図105)

〈A類 入海I式土器〉

87は口縁が若干広がる深鉢形の土器で、4単位の波状口縁を持ち、口唇部に箇状工具で刻みを施している。口縁部文様帶は同様に刻みが施された隆帯を、1条目は波状口縁に沿って蛇行させ、2・3条目は逆向きに蛇行させており、波頭部の下の部分の1条目と2条目の間に、短い隆帯が貼付されている。その下は同じ箇状工具による連続刺突文が矢羽根状に1条施されている。器厚は約6mmで、内外面に指頭圧痕と擦痕が確認できる。胎土には多量の繊維が含まれる。

88～90も口縁部文様帶に箇状工具で刻みを施した隆帯が數条確認できる。88は胎土に微量の繊維を含み、砂質である。

〈B類 入海式並行土器〉

91は内外面に指頭圧痕が確認でき、胎土には繊維が含まれる。

〈C類 条痕文系型式不明土器〉

92～96は貝殻条痕が施されるものである。96は内外面に擦痕を施した後、外面に貝殻条痕を施す。口唇部外側に刻みを施している。

97は口縁部にRの撚糸を斜方向に施している。その下には条痕が横方向に施されている。98は細い竹管状工具で刺突が施されており、内外面に擦痕が確認できる。99～105は器面調整による擦痕が確認できる。102～105は器厚が約11～13mmと厚めで、赤褐色を呈し、胎土には繊維が含まれる。

第VI群 中期の撚糸文 (第256図106)

106は細めのRの糸を密に巻いた撚糸を異方向に施している。胎土には多量の石英・長石・雲母が含まれる。106bは同一個体と思われる土器で炉跡から出土している(第235図)。

第73表 土器観察表

神面番号	分類	残存部位	外面色調 内面色調	胎 土	織錆	文 様・調 整	既成	グリッド
1	第Ⅰ群	口縁部	T. SYRS/6 T. SYRS/6	白色粒子(径約3mm)、黒色粒子、少量の石英・長石・輝石・赤色粒子	有	口縫部は外反し、Rの織糸を縦方向に施設方に、口縫部内面は横方向に施文	やや良	D-12 E-12
2	第Ⅰ群	口縁部	T. SYRS/6 T. SYRS/4	白色粒子(径約3mm)、黒色粒子	有	口縫部をわずかに外反させ口縫部をナットで尖らせる。Rの織糸を縦方向に施文	良	C-12
3	第Ⅰ群	口縁部	T. SYRS/4 T. SYRS/6	白色粒子(径約4mm)、黒色粒子、少量の輝石	有	口縫部上部に幾次部分を施し、開闊のRの織糸を縦方向に施設方に、口縫部内面は横方向に施文	やや良	E-13
4	第Ⅰ群	口縁部	SYRS/6 SYRS/6	輝石、白色粒子(径約3mm)、黒色粒子、少量の石英・長石・赤色粒子	有	口縫部をわずかに外反させ口縫部をナットで尖らせる。Rの織糸を縦方向に施文	やや良	G-11
5	第Ⅰ群	口縁部 ・側部	10YRS/3 10YRS/3	白色粒子(径約3mm)、少量の赤色粒子	無	口縫部を平素に施せその上にRの織糸を施文、口縫部内面にも及ぶ	やや良	D-12
6	第Ⅰ群	口縫部	T. SYRS/3 T. CYRS/6	多量の白色粒子(径約3mm)、輝石、赤色粒子、黒色粒子	有	口縫部を平素に施せその上にRの織糸を施文、口縫部内面にも及ぶ	やや良	E-12
7	第Ⅰ群	口縫部	T. SYRS/4 T. SYRS/4	赤色粒子(径約4mm)、少量の赤色粒子	有	口縫部をナットで尖らせる。太めのRの織糸を縦方向に施文	やや良	D-12
8	第Ⅰ群	口縫部	SYRS/6 SYRS/6	少量の白色粒子(径約1mm)・赤色粒子・黑色粒子	有	太めのRの織糸を縦方向に施文	良	E-13
9	第Ⅰ群	口縫部	SYRS/6 SYRS/6	赤粒(径約4mm)、少量の白色粒子(径約1mm)・黒色粒子	微量 有	太めのRの織糸を縦方向に施文	良	F-13
10	第Ⅰ群	縫隙	T. SYRS/6 T. SYRS/6	多量の白色粒子(径約2mm)、黒色粒子、少量の輝石・赤色粒子	微量 有	太めのRの織糸を縦方向に施文	やや良	F-12
11	第Ⅰ群	縫隙	T. SYRS/3 T. SYRS/3	白色粒子(径約3mm)、少量の輝石・赤色粒子	有	太めのRの織糸を縦方向に施文	やや良	E-12 F-12
12	第Ⅰ群	縫隙	SYRS/6 SYRS/6	白色粒子(径約3mm)、少量の石英・長石・赤色粒子	有	太めのRの織糸を縦方向に施文	やや良	E-12, 13
13	第Ⅰ群	縫隙	T. SYRS/6 T. SYRS/6	白色粒子(径約4mm)、黒色粒子、少量の石英・長石・輝石	青	太めのRの織糸を縦方向に施文	やや良	F-12
14	第Ⅰ群	縫隙	T. SYRS/6 T. SYRS/6	白色粒子(径約3mm)、少量の赤色粒子・黑色粒子	有	太めのRの織糸を縦方向に施文	やや良	E-12
15	第Ⅰ群	縫隙	T. SYRS/6 T. SYRS/4	輝石、白色粒子(径約2mm)、黒色粒子、少量の石英・長石・赤色粒子	有	太めのRの織糸を縦方向に施文	良	G-11
16	第Ⅰ群	口縫部	10YRS/3 10YRS/3	多量の石英・長石・白色粒子(径約1mm)・少量の輝石	有 微量 少	Rの織糸を縦方向に施文	やや良	E-12
17	第Ⅰ群	口縫部 ・側部	T. SYRS/6 T. SYRS/6	白色粒子(径約2mm)、黒色粒子、少量の石英・長石・輝石	有	Rの織糸を縦方向に施文	やや良	E-12
18	第Ⅰ群	縫隙	SYRS/6 SYRS/6	輝石、白色粒子(径約3mm)、黒色粒子、少量の石英・長石	微量 有	Rの織糸を縦方向に施文	やや良	E-13
19	第Ⅰ群	縫隙	10YRS/7 10YRS/7	多量の白色粒子(径約2mm)、石英・長石、黑色粒子	無	R Lの織糸を縦方向に施文	やや良	G-13
20	第Ⅰ群	縫隙	T. SYRS/6 T. SYRS/4	多量の白色粒子(径約1mm)、黒色粒子	微量 有	R L Rの織糸を縦方向に施文した後、表面をナットで	やや良	J-7
21	第Ⅰ群	脇部	10YRS/4 10YRS/3	多量の石英・長石・輝石、輝石、黒色粒子	微量 有	締めたRの織糸を横に巻いた固体と、太めのRの織糸を横に巻いた固体と、2つの固体で施文。厚さ約12mm	やや良	R-12
22	第Ⅰ群	縫隙	10YRS/4 10YRS/4	多量の石英・長石・輝石、黒色粒子	無	Lの織糸を縦方向に施文	良	E-12
23	第Ⅱ群A類	多孔	T. SYRS/6 T. SYRS/5	少量の石英・長石・輝石、白色粒子、赤色粒子	有	山形文を外反に縦方向に施文、内面に施文による調整あり	良	J-7
24	第Ⅱ群A類	縫隙	10YRS/4 10YRS/3	石英・長石、白色粒子、黒色粒子、少量の雲母	無	山形文が深く開闊が狭い山形文を縦方向に施文	良	K-5
25	第Ⅱ群A類	縫隙	T. SYRS/3 T. SYRS/4	少量の石英・長石・輝石、白色粒子	無	縫が継長でむし棒文を縦方向に施文	良	J-7
26	第Ⅱ群A類	底部	T. SYRS/6 T. SYRS/6	多量の石英・長石・輝石、白色粒子、少量の輝石	無	底面、横棒文を縦方向に施文	良	K-6
27	第Ⅱ群B類	口縫部	10YRS/4 10YRS/4	石英・長石、白色粒子、黒色粒子	無	山形文を口縫部は縦方向に、その下は縦方向に帯状施文	良	I-7

第252回

擇因番号	分類	残存部位	外側色調 内側色調	鉢	縁	文様・調整	洗成	グリッド
28	第Ⅱ群B類	胴部	T. SYRS/6 T. SYRS/2	多量の黒母・黒色粒子、石英・長石 多量の石英・長石・黒母・黒色粒子、白色 粒子	無	山形文を横方向に帯状施文	良	H-11
29	第Ⅱ群B類	胴部	10YRS/4 10YRS/4	多量の石英・長石・黒母・黒色粒子、白色 粒子	無	山形文を横方向に帯状施文	良	H-10
30	第Ⅱ群B類	胴部	10YRS/6 10YRS/3	多量の石英・長石・黒母・黒色粒子、白色 粒子、少量の輝石	無	縦片上端に山形文、中段に横円文を 横方向に帯状施文、下部は帯状施文 の無文部分と思われる	良	E-12
31	第Ⅱ群B類	胴部	10YRS/4 10YRS/4	多量の石英・長石・黒母・黒色粒子、白色 粒子	無	横円文を横方向に帯状施文	良	F-12
32	第Ⅱ群B類	胴部	SYRS/6 SYRS/4	多量の石英・長石、白色粒子、黒色粒子	無	粒が大きいたる横円文を横方向に帯 状施文	良	B-12
33	第Ⅱ群C類	コルク部 ・剥離部	SYRS/6 SYRS/6	白色粒子、黒色粒子	多量 有	縦部はゆるやかに外反し、比較的 大きな山形文を縦部内外面は横 方向、その下の内面は縱方向に施文	やや良	K-5
34	第Ⅱ群C類	口縁部	7. 8YS/5 7. 8YS/3	石英・長石、白色粒子、黑色粒子	無	山形文を縦方向に施文方向に、その下 は斜方向に施文	良	J-4
35	第Ⅱ群C類	口縁部	7. 8YS/3 7. 8YS/3	白色粒子、少量の石英・長石・黑色粒子	無	口縁部は外反し、横円文を口縁部は 横方向、中段は斜方向、下部は再び 横方向に施文	良	F-12
36	第Ⅱ群C類	底盤部 ・剥離部 ・底部	10YRS/4 10YRS/4	多量の白色粒子、黒色粒子、少量の石英・ 長石・黒母	有	底底、横円文を口縫部破片では斜方 向に施した後、上端部に横方向に施 す、剥離部は横方向に、底部は 縦方向に施文	良	E-12 F-12
37	第Ⅱ群C類	口縁部	SYRS/6 SYRS/6	青母、白色粒子、少量の石英・長石・黑色 粒子	無	横円文を斜方向に施文した後、G群 上端は横方向に施文	良	I-6
38	第Ⅱ群C類	口縁部	7. 8YS/5 7. 8YS/5	多量の黒母、少量の石英・長石	無	横円文を斜方向に施文した後、D群 は横方向に1箇遺失させている。 補修も見られ	良	F-12
39	第Ⅱ群C類	口縁部 ・底部	7. 8YS/6 7. 8YS/6	多量の黒母、黑色粒子、少量の石英・長石・ 白色粒子・赤色粒子	無	口縫部はゆるやかに外反し、口縁部は平 坦の小さな長方形文を横方向に施す。 施文に施した後、縦部に帯状施文し、 最後に口縫部に横方向に1箇遺失さ せていると思われる	良	J-7 I-6
40	第Ⅱ群C類	口縁部 ・底部	7. 8YS/5 7. 8YS/5	多量の黒母、石英・長石、黒色粒子、少量 の鉄鉱石	無	口縫部は平坦に作り、横円文を横方 向に施す。補修もあり	良	J-7
41	第Ⅱ群C類	胴部	7. 8YS/6 7. 8YS/4	白色粒子、青母、少量の石英・長石・黑色 粒子	無	横円文を横方向に施した後、その上 部は横方向に施文	良	K-4
42	第Ⅱ群C類	胴部	7. 8YS/6 7. 8YS/4	黒色粒子、少量の石英・長石・白色粒子	無	粒が長石内に近い横円文を横方向に 施文	良	H-6
43	第Ⅱ群C類	胴部	7. 8YS/4 7. 8YS/2	石英・長石、白色粒子、少量の青母・ 赤色粒子	無	粒が小さめな横円文を横方向に施文	やや良	F-13
44	第Ⅱ群C類	胴部	SYRS/4	白色粒子、黑色粒子、少量の石英・長石	無	粒が横円文・横円文を横方向に施文	良	J-4
45	第Ⅱ群C類	剥離部 ・底部	SYRS/6 SYRS/6	多量の黒母、石英・長石、赤色粒子、黑色 粒子	無	やや細めの底底、横円文を横方向に 施文	良	I-7, 8
46	第Ⅱ群D類	DII縫部 ～胴部	SYRS/4 SYRS/6	多量の石英・長石・黒母・白色粒子、少量の 赤色粒子	無	口縫約15.4cm、口縫部は粗朶見え られ、比較的小型の圓錐形土器と思 われる。山形部にくぼんで大きめの山 形文を施す後に施文、施文の痕が痕 状に見える。	良	J-5, 6 H-2
47	第Ⅱ群D類	口縫部	7. 8YS/6 7. 8YS/4	石英・長石、碧粉、白色粒子、黑色粒子、 少量の赤色・赤色粒子	無	口縫部は平坦に見え、山形文を横方 向に施文	良	J-7
48	第Ⅱ群D類	口縫部	10YRS/4 10YRS/4	石英・長石、白色粒子	無	大きい? 肩底の山形文を横方向に施文	良	H-10
49	第Ⅱ群D類	胴部	SYRS/6 SYRS/3	多量の石英・長石・黒母、白色粒子	無	大きめの山形文を横方向に施文	良	D-12
50	第Ⅱ群D類	胴部	SYRS/6 SYRS/2	少量の石英・長石・白色粒子・黑色粒子	無	山形文を横方向に施文。縫跡約13mm	良	J-7
51	第Ⅱ群D類	胴部	SYRS/4 SYRS/4	多量の石英・長石、白色粒子、少量の黒母・ 輝石	無	山形文を横方向に施文	良	K-4
52	第Ⅱ群D類	剥離部 ・底部	7. 8YS/2 7. 8YS/4	少量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子	無	山形文を剥離部は横方向、底底は萬 葉形に施す。底底	良	I-6 J-6
53	第Ⅱ群D類	G縫部 ・底部	10YRS/4 10YRS/4	多量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の 赤色粒子	無	口縫部は縫に底底を斜めに施す。母 子目文を横方向に施文、施文の痕 と思われる袋部あり	良	H-5 I-5
54	第Ⅱ群D類	胴部	7. 8YS/6 7. 8YS/6	石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の 赤色粒子	無	母子目文を横方向に施す。施文の痕 と思われる袋部あり	良	F-13

浮図番号		分類	残存部位	外面部 内面部	胎土	調査	文様・調整	焼成	グリッド
	55	第Ⅱ群D類	病部	7. SYR6/4 7. SYR6/8	白色粒子、少量の石英・長石・黑色粒子	有	曲子目文を横方向に施文	良	H-6 K-8
	56	第Ⅱ群D類	底部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	石英・長石、白色粒子、黑色粒子	無	大きめの曲子口文を横方向に施文。	良	H-5
	57	第Ⅱ群D類	病部	10YR5/4 10YR6/4	石英・長石、輝石、雲母、黑色粒子	無	細かな斜下文を施文。施文方向に規則性なし	良	H-5
	58	第Ⅱ群D類	口縁部	10YR6/4 10YR6/4	多量の石英・長石、少量の雲母・白色粒子・黑色粒子	微塵有	口縁部は傾状?工具で斜め手割り引くように切るを放す。外底に茶色の平行線による変形の山形文と横方向に施文、内面に削痕による痕跡あり、縁厚約6mm	良	J-6, 7
	59	第Ⅱ群D類	病部	10YR7/3 10YR6/4	多量の石英・長石、白色粒子、少量の雲母	無	山形文を横方向に施文、その下に横方向の矢羽根状文を横方向に施文	良	I-5
	60	第Ⅱ群D類	剥離部	7. SYR6/3 7. SYR6/6	多量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の雲母	無	詰めの平行線の押出文を横方向に施文、その下に縱筋の矢羽根状文を横方向に施文を組む平行線で施文した押出文を横方向に施文	良	C-11
第253図	61	第Ⅱ群D類	剥離部 ・底部	10YR6/4 10YR5/5	石英・長石、白色粒子、少量の赤色粒子・黑色粒子、長石の痕跡(厚約4mm)	微塵有	横平行線の押出文と、擦力せり工具による平行線跡を交叉に等間隔に施文。その下に曲子目文と底部または横方向に施文。などらかなく底と重ねられる	良	H-6 K-4, 5
	62	第Ⅱ群D類	病部	7. SYR6/4	多量の石英・長石、白色粒子、輝石、少量の雲母	無	曲内文を横方向に施文、その下に短い平行線跡を交叉に等間隔に施文。その下に曲子目文と底部または横方向に施文。などらかなく底と重ねられる	良	I-4 I-6
	63	第Ⅱ群D類	病部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	多量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子、黑色粒子、少量の輝石・雲母	微塵有	複数の水の藍形の輪を横平文で施文した押出文を横方向に施文。その下に小字の横内文を横方向に施文	良	F-13
	64	第Ⅱ群D類	底部	7. SYR6/6 7. SYR6/3	白色粒子、少量の石英・長石・黑色粒子・黒色粒子	無	表面文、側面上面に横内文を施文、その下にJの模範を横方向に施文	良	I-6
	65	第Ⅱ群D類	口縁部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	多量の雲母、石英・長石、白色粒子、黑色粒子	無	横片左側に斜面の、の横を丸に曳いた鉛錆有り斜方向に施文した後、口縁部に横方向に1条筋からしていると思われる。横片右側に横内文を横方向に施文	良	K-5
	66	第Ⅱ群D類	口縁部 ・剥離部	7. SYR6/4 7. SYR6/2	多量の石英・長石、白色粒子、少量の雲母、黑色粒子	無	口縁部は斜面外反する。鉛錆の小さな鉛錆内文を横方向に施文	良	I-5 K-5
	67	第Ⅱ群D類	病部	7. SYR6/4 7. SYR6/4	多量の雲母、石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の輝石	無	鉛錆が小さく開闊が善い横内文を横方向に施文	良	H-5 K-5
	68	第Ⅱ群D類	口縁部	7. SYR6/5 7. SYR6/3	多量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の輝石	無	口縁部に深い横溝を施す。横内文を横方向に施文	良	E-12 F-13
	69	第Ⅱ群D類	口縁部	SYR6/6 SYR6/4	少量の石英・長石・輝石・白色粒子・黑色粒子	有	横内文を横方向に施文	良	F-12
	70	第Ⅱ群D類	病部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の輝石	無	横内文を横方向に施文	やや不良	K-5
	71	第Ⅱ群D類	口縁部 ・剥離部	7. SYR6/6	多量の石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の雲母	無	口縁部を平面に削え、粒が大きく疊り重なる附近に近い横内文を横方向に施文	良	E-12
	72	第Ⅱ群D類	病部	SYR6/6 SYR6/4	多量の雲母・黑色粒子、石英・長石、輝石、白色粒子	無	鉛錆が大きめで開闊が善い横内文を横方向に施文	良	J-5
	73	第Ⅱ群D類	病部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	多量の白色粒子、石英・長石、黑色粒子	無	表面に近く、粒が大きめで他の横内文と並んで開闊がある	良	G-11
	74	第Ⅱ群D類	剥離部	7. SYR6/6	多量の白色粒子、石英・長石、少量の雲母	無	鉛錆が大きめで開闊が広い横内文を横方向に施文	良	F-2
	75	第Ⅱ群D類	剥離部	SYR6/6 SYR6/4	石英・長石、白色粒子、少量の黑色粒子・雲母	無	鉛錆が大きめで開闊が広い横内文を横方向に施文	やや良	I-8
	76	第Ⅱ群D類	剥離部	10YR7/4 10YR6/4	石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量の雲母	無	横内文を施文	やや良	J-10
	77	第Ⅱ群D類	剥離部	10YR6/4 10YR5/3	多量の石英・長石・黑色粒子、輝石、白色粒子	無	横内文を施文	やや良	I-6
	78	第Ⅱ群D類	剥離部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	多量の石英・長石、白色粒子、少量の雲母	無	横内文を施文。器厚約10mm	やや良	K-5
	79	第Ⅱ群D類	底部	7. SYR6/6 7. SYR6/5	多量の雲母、石英・長石、黑色粒子、少量の黑色粒子	無	手揉み状の尖底。横内文を施文	やや不良	J-4
	80	新田群	口縁部 ・剥離部	10YR5/6 10YR6/4	多量の雲母、石英・長石、黑色粒子、少量の輝石	無	口縁部は平坦に削えられ、L.R.の横内文を口縁部は横方向に削れ、剥離孔あり	良	G-13

揮発番号	分類	残存部位	外見色調 内面色調	粘 土	織錆	文様・調整	焼成	グリッド
第254回	81	第Ⅲ群	胴部	T.SYB5/4 T.SYB5/6 T.SYB5/3	多量の雲母・墨色粒子、輝石、少量の石英、 浮石・赤色粒子	無	L.Rの調文を真方向に施文	やや 良 1-5
	82	第Ⅲ群	胴部	T.SYB5/4 T.SYB5/6 T.SYB5/3	石英・長石、白色粒子、少量の墨色粒子	無	L.Rの調文を真方向に施文	やや 良 H-12
	83	第Ⅳ群	胴部	T.SYB5/4 T.SYB5/6	多量の石英・長石・白色粒子、少量の輝石、 黑色粒子	微量 有	Rの調文を真方向に施文	やや 良 G-11
	84	第Ⅳ群	底部	T.SYB5/4 T.SYB5/6	多量の雲母、石英・長石、白色粒子、少量 の白色粒子	無	尖底、R.Lの調文を真方向に施文	やや 良 E-2
	85	第Ⅴ群	底部	T.SYB5/4 T.SYB5/6	多量の石英・長石、白色粒子、少量の輝石、 黑色粒子	無	尖底、調文を施さり(原体不詳)	良 I-7
	86	第Ⅳ群	胴部	10SYB7/6 10SYB7/2	石英・長石、白色粒子、少量の輝石、黑色粒 子	有	路条体正直文を斜方向に施文(原体 不明)	やや 良 K-4
	87	第Ⅴ群A類	口詰部 ～胴部	10SYB5/4 10SYB5/2	石英・長石、白色粒子、少量の雲母・漂石 粒子	微量 有	口徑約20mm、4稜柱の皮目器皿。口 詰部に梳状工具で刮みを施す。胴部 は3条の筋入り平行隆縫。1条と 2条の筋間に短い溝窓を施す。端部の 下に矢張り状の滑詰痕突起を1条延 びらす。外外面に指壓压痕・擦痕による 調整あり	やや 良 D-12, 13 E-12, 13
	88	第Ⅴ群A類	口詰部	10SYB5/4 10SYB5/6	石英・長石、輝石、少量の白色粒子	微量 有	口詰部に梳状工具で刮みを施す。口 詰部に梳状工具で刮みを施した跡留 を2条配す。器厚約10mm。口質であら り	良 E-12
第255回	89	第Ⅴ群A類	口詰部	SYB5/6 SYB5/3	石英・長石、白色粒子、黑色粒子	無	口詰部に梳状工具で刮みを施した跡 留を2条配す。外外面に条痕・内面に 擦痕による調整あり	やや 不良 E-12
	90	第Ⅴ群A類	口詰部	10SYB5/4 10SYB5/2	輝石、白色粒子、黑色粒子、少量の石英・ 長石・赤色粒子	無	口詰部に梳状工具で刮みを施した跡 留を2条配す。外外面に条痕・内面に 擦痕による調整あり	やや 良 D-12
	91	第Ⅴ群B類	口詰部	10SYB5/4 10SYB5/2	白色粒子、少量の雲母	有	外外面に指壓压痕による調整あり	良 X-5
	92	第Ⅴ群C類	胴部	SYB5/6 SYB5/4	石英・長石、白色粒子、赤色粒子、少量的 黑色粒子	微量 有	外外面に貝殻条痕による調整あり	やや 良 D-12 E-12
	93	第Ⅴ群C類	中央部	T.SYB5/6 T.SYB5/3	白色粒子、赤色粒子、黑色粒子、少量的 石英・長石	有	外外面に貝殻条痕による調整あり	やや 良 D-12
	94	第Ⅴ群C類	胴部	T.SYB5/6 T.SYB5/4	石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量的 白色粒子	有	外外面に貝殻条痕・内面に擦痕による 調整あり	やや 良 F-2
	95	第Ⅴ群C類	胴部	T.SYB5/6 T.SYB5/7	石英・長石、白色粒子、赤色粒子、黑色粒子、 少量的輝石	微量 有	外外面に貝殻条痕・内面に擦痕による 調整あり	やや 良 H-5
	96	第Ⅴ群C類	口詰部	10SYB5/4 10SYB5/6	石英・長石、白色粒子、赤色粒子、黑色粒子、 少量的輝石	無	口詰部は平坦。口詰部にRの調文を 施す。外外面に擦痕による調整をし た後、外外面に貝殻条痕を真方向に調 整する。	良 H-6
第256回	97	第Ⅴ群C類	口詰部	SYB5/4 SYB5/6	石英・長石、雲母、黑色粒子	無	口詰部は平坦。口詰部にRの調文を 施す。外外面に竹管状工具による刻突 を施す。外外面に擦痕による調整あり り。器厚約12mm	良 J-3
	98	第Ⅴ群C類	口詰部 ～胴部	T.SYB5/4 T.SYB5/6	白色粒子、赤色粒子、黑色粒子、少量的石 英・長石・輝石	有	外外面に竹管状工具による刻突を 施す。外外面に擦痕による調整あり り。器厚約12mm	やや 良 J-6
	99	第Ⅴ群C類	口詰部	T.SYB5/4 T.SYB5/6	白色粒子、赤色粒子、少量的石英・長石	微量 有	口詰部はねじれ心外板する。外外面 に擦痕が確認できる	やや 良 E-12
	100	第Ⅴ群C類	口詰部	T.SYB5/6 T.SYB5/4	石英・長石、赤色粒子、黑色粒子、少量的 白色粒子	微量 有	外外面に擦痕が確認できる	良 I-6
	101	第Ⅴ群C類	胴部	SYB5/6 SYB5/4	石英・長石、白色粒子、黑色粒子、少量的 輝石・赤色粒子	微量 有	外外面に擦痕が確認できる	やや 良 D-12
	102	第Ⅴ群C類	口詰部 ～胴部	SYB5/6 SYB5/4	白色粒子、赤色粒子、黑色粒子、少量的石 英・長石	有	外外面に擦痕が確認できる	良 I-6
	103	第Ⅴ群C類	口詰部 ～胴部	SYB5/6 SYB5/4	白色粒子、赤色粒子、少量的石英・長石	有	外外面に擦痕が確認できる。器厚約 12mm	良 H-12
	104	第Ⅴ群C類	胴部	SYB5/6 SYB5/4	白色粒子、少量的石英・長石・赤色粒子	有	外外面に擦痕が確認できる。器厚約 11mm	良 J-5
第256回	105	第Ⅴ群C類	胴部 ～底部	SYB5/6 SYB5/4	白色粒子、少量的石英・長石・赤色粒子	微量 有	外外面に擦痕が確認できる。器厚約 12mm	良 I-5 J-6
	106	第Ⅴ群	胴部	T.SYB5/4 T.SYB5/6	多量の石英・長石・雲母、少量的輝石	無	頭のRの糸を帶に引いた調文を真 方向に施文	良 I-7 J-6

3 遺構外出土の石器

縄文時代の石器は総数で611点が出土した。そのうち遺構内出土のものを除いて器種別に分類し、60点を図示する。

本遺跡では、石器も遺構及び土器と同様に、尾根上の平坦部に位置し、調査区中央付近に少なく、東西の平坦部に2つの分布域を形成している。土器の分布とほぼ重なることから縄文時代早期の可能性がある。

第74表 縄文時代 石器組成表

	石礫	削器	揮器	石器片	石製品	加工痕剥片	使用痕剥片	楔形石器	石核	剥片・砂片	磨製石斧	打製石斧	礫器	砥石	磨石・敲石類	石皿・台石類	計	
ホルンフェルス	Hor			3			3		22	92			11				131	
ホルンフェルス(凝灰質)	Hor(Tu)									1							1	
ガラス質黒色安山岩	GAn	1					3	1		9							13	
黒曜石	Ob	6	1	1		3	10	1	4	225							251	
凝灰岩(細粒)	FT									1							1	
緑色凝灰岩	GT									1							1	
珪質頁岩	SSh	2					2			3							7	
チャート	Ch	1	2				1	2		1							7	
玉髓	Cha				1												1	
流紋岩	Rhy	2				3	2			2						1	10	
砂岩(細粒)	FSS											1	2				3	
砂岩(中粒)	MSS											2	4				6	
砂岩(粗粒)	CSS												1				1	
デイサイト	Da													5			5	
閃綠岩	Di												7				7	
カンラン岩	Pe									1							1	
アフライト	Ap												1				1	
細粒斑レイ岩	FG		1											3			4	
緑色片岩	GS			1							1						1	
ひん岩	Po												1				1	
輝石安山岩	An(Py)													77	22		99	
角閃石安山岩	An(Ho)									2				3			5	
細粒安山岩	FAn									4			1				5	
多孔質安山岩	VAn														3		3	
多孔質玄武岩	VBa												6	3		9		
玄武岩	Ba													24	13		37	
計		7	8	4	1	1	7	22	1	26	341	1	1	12	3	135	41	611

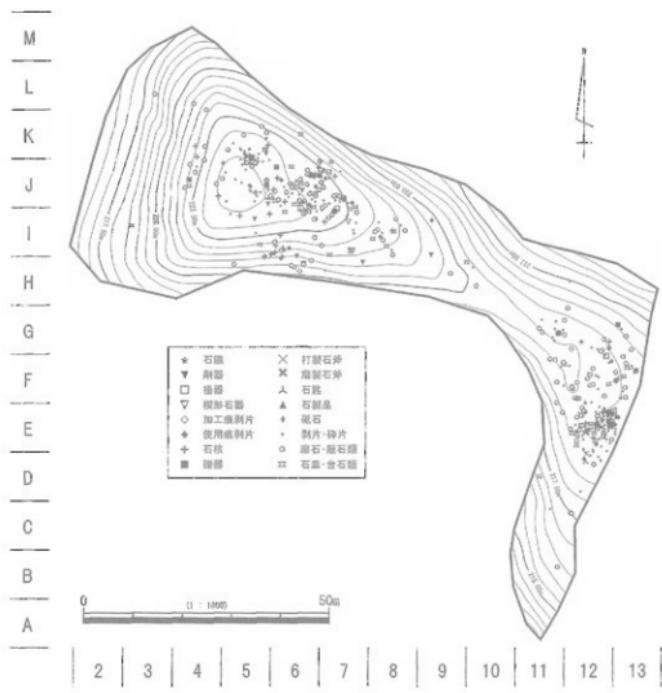
(1) 石器 (第258図1~4)

4点出土している。全てが基部に抉人のある凹基無茎石器である。1、2は基部の抉りが比較的深いもの、3は基部の抉りが比較的浅いもの、4は左片欠損品であるが残存部より3に近い基部と思われる。1はチャート製で全体に細かく丁寧な調整が施されている。2~4は黒曜石を用いており、3は左側縁には精緻な調整が施されるが、右側縁は比較的雑で厚みを残しており未製品の可能性も考えられる。

(2) スクレイバー類〈削器・搔器〉 (第258図5~第259図14)

剥片の縁辺に連続的な調整を施すものをスクレイバーとして分類し、便宜的に刃部の角度が 60° 以下のものを削器、刃部の角度が 45° を越え 90° に近いものを搔器とした。13点出土し10点図示した。

5~11は削器である。5・6は側縁の一方が片面調整となり、もう一方は両面調整となっている。5の刃部は粗い調整で作り出されている。6は作出された鋭利な刃部にさらに微細な剥離が認められる。7・8は一方の側縁に精緻な両面調整が施されている。9は薄い剥片を素材とし、打面を除く縁辺全体が鋭利である。側縁は両面調整となっている。10は片面調整の刃部である。11は側縁全体に抉り状の剥離が見られ、微細な剥離が観察でき、鋭利な縁辺全体を使用していると思われる。



第257図 繩文石器 器種別分布図

本遺跡ではホルンフェルスの縁に粗い剥離を加えたものが比較的多く出土している。機能的には、石核・スクレイバー類・礫器として利用または転用されていたものと考えられるが、ここでは加工部位の形状により分類し、各項目で報告する。なかでも12～14は縁辺に連続的な調整が見られ、刃部の角度から搔器として分類する。

12～14は亜角礫の表皮付き剥片を用い、下端部に数回の調整を施し刃部としている。12・13は急角度の刃部となっている。14は細粒班レイ岩を用い、下端部の鋭利な形状を活かして刃部としている。

(3) 加工痕剥片 (第260図15)

剥片に二次的な調整を施しているが、前述の(1)・(2)に分類不可能なものである。5点出土し1点図示した。15は横長剥片を用い、上下端部に細かい調整が施されている。両端は折損する。

(4) 使用痕剥片 (第260図16・17)

剥片の鋭利な縁辺に使用痕と考えられる細かい剥離が観察されるものである。20点出土し2点図示した。16・17は打面を除く側縁のはば全体に微細な剥離が観察できる。

(5) 楔形石器 (第260図18)

厚みのある剥片の端部、あるいは上下、左右の対称位置に打撃の衝撃痕があるものを分類した。1点のみ出土している。18は台形から三角錐に近い形状で上下端部からの剥離が観察できる。下端部に顕著な衝撃痕が残る。

(6) 石核 (第260図19～21)

24点出土し3点図示した。19・20は黒曜石を用い、21はホルンフェルスを用いている。19は作業面と打面を転移しながら幅広の剥片を削出している。下端部には微細な剥離が観察できる。20は單剥離打面で、作業面調整を行い、上設打面からほぼ同一方向に剥片剥離を行う。剥片剥離作業は正面のみで行われており、裏面には旧剥離面を残す。21は接合資料である。小型の円礫より原礫面を打面として剥片剥離を行う、打面調整は行わない。

本遺跡には21と同様のホルンフェルスの石核が20点残されていた。ほとんどのものに礫面が残り、礫の1/3～1/4を残すものが多い。

(7) 磨製石斧 (第261図22)

1点出土した。22は基部以外の両側縁が研磨され石斧主面との間に稜が形成されている。所謂定角式磨製石斧である。基部の縁辺には着柄の為に稜を落とす顕著な敲打痕が残り、刃部には刃こぼれも見られる。基部の調整部分に研磨痕が見られないことから、再調整されている可能性が高い。石材はカンラン岩である。

(8) 打製石斧 (第261図23)

1点出土している。23は扁平な緑色片岩を使用し、素材礫の形状を活かして縁辺より調整を行っている。両側縁は着柄の為に稜を敲打し、刃部は刃こぼれしている。

(9) 磕器 (第261図24～26)

自然縁に簡単な調整を施し、刃部を作出したものである。11点出土し3点図示した。24～26はホルン

フェルスの自然礫を素材としている。24は節理によって割れた縦長の礫を用い、側縁に表面への粗大な剥離を施し片刃の刃部を作出している。25・26は急角度の刃部を作出している。

(10) 砥石 (第262図27)

1点出土している。砂岩(中粒)を素材とした砥石で、非常に扁平で全面が平滑になっている。中心に四状の窪みが垂直に残されており、有溝砥石の一類であると推察される。また右側縁は両面からの磨痕によって稜が形成されている。

(11) 磨石・敲石類 (第262図28～第264図54)

打痕・磨痕が観察できるもので、持ち上げて使用したと推測される2kg未満の石器を分類した。125点出土し27点を図示した。打痕・磨痕の観察できる部位やその組み合わせを中心に分類し報告する。

〈I群 磨痕と打痕が残るもの〉 (28～45)

A類 棒状の礫に側縁にまで及ぶ磨痕と打痕が残るもの(28～36)

礫の断面が側縁にまで及ぶ磨痕によって多角形になっており、いずれも長軸の端部に打痕が観察できる。30・31は断面が三角形で所謂特殊磨石と呼ばれるものである。31は2kgを超える大型の石器であるが、断面形や磨痕・打痕の状況によりここに分類した。

B類 磨の平坦面に磨痕が、周縁部に打痕が残るもの(37～39)

37は平坦面の中央部分にのみ磨痕が残る。38は磨面が稜を持ち明瞭で、周縁部の形状が打痕により変形している。39は棒状の小型礫で、端部に打痕が見られる。

C類 楕円礫の側縁にのみ磨痕・打痕が残るもの(40・41)

40・41は礫の側縁に磨痕が残り磨面は稜線を持ち平坦で明瞭である。打痕は磨面の周囲に観察される。

D類 打痕の周辺に磨痕が見られるもの(42～45)

磨痕と打痕が重なって観察され、一連の動作の中で複合的に使用されていたと思われる。

42・43は磨痕が稜線を持ち平坦で明瞭である。45は平坦面の中央部に凹状の打痕が残る。所謂凹石。

〈II群 打痕のみが観察できるもの〉 (46～54)

A類 扁平礫の中央部分に打痕が残るもの(46～51)

46～50は主に平坦面の中央に打痕が残る。46・47は凹状の打痕となっており、凹石と言われるものである。51は正面全体に連続的な打痕が残る。

B類 棒状または小型の円礫に打痕が残るもの(52～54)

52は右側面が連続的な打痕により平坦になっており、端部にも打痕が観察される。54は小型の円礫の周縁部に打痕が残る。

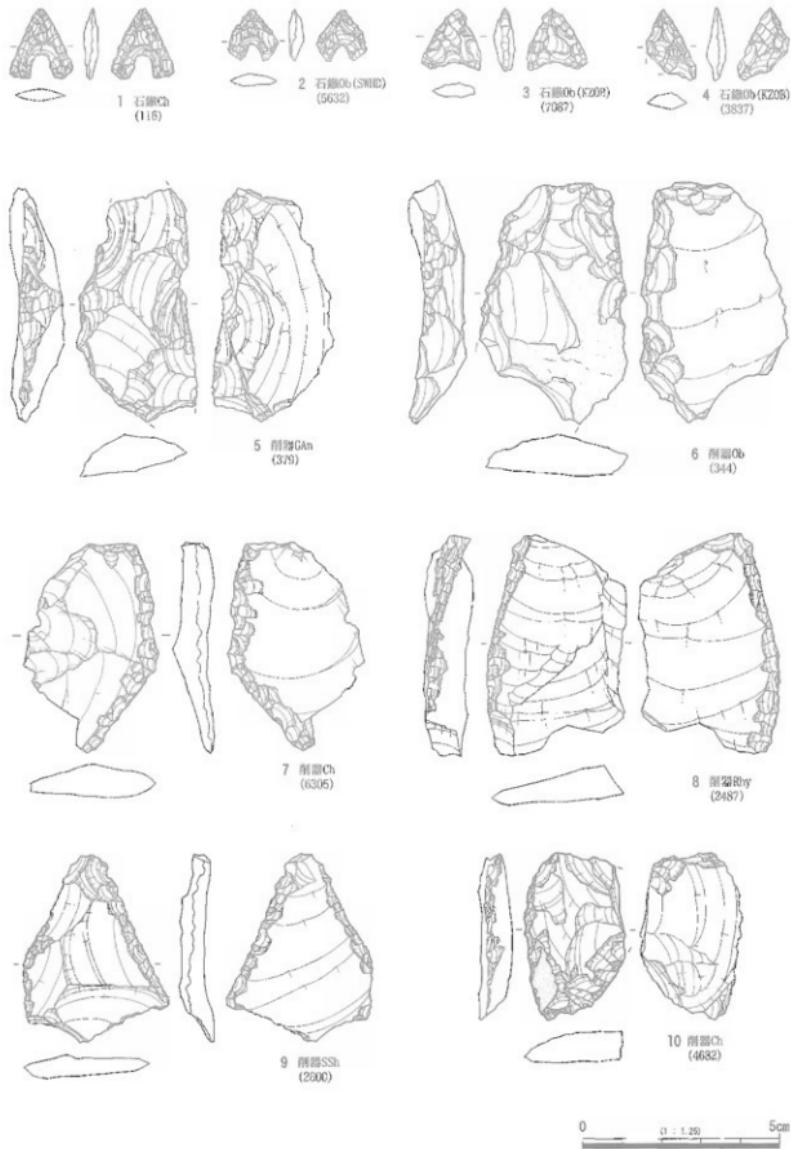
なお磨石・敲石類の石材は安山岩が60%、玄武岩が23%を占めている。

(12) 石皿・台石類 (第264図55～60)

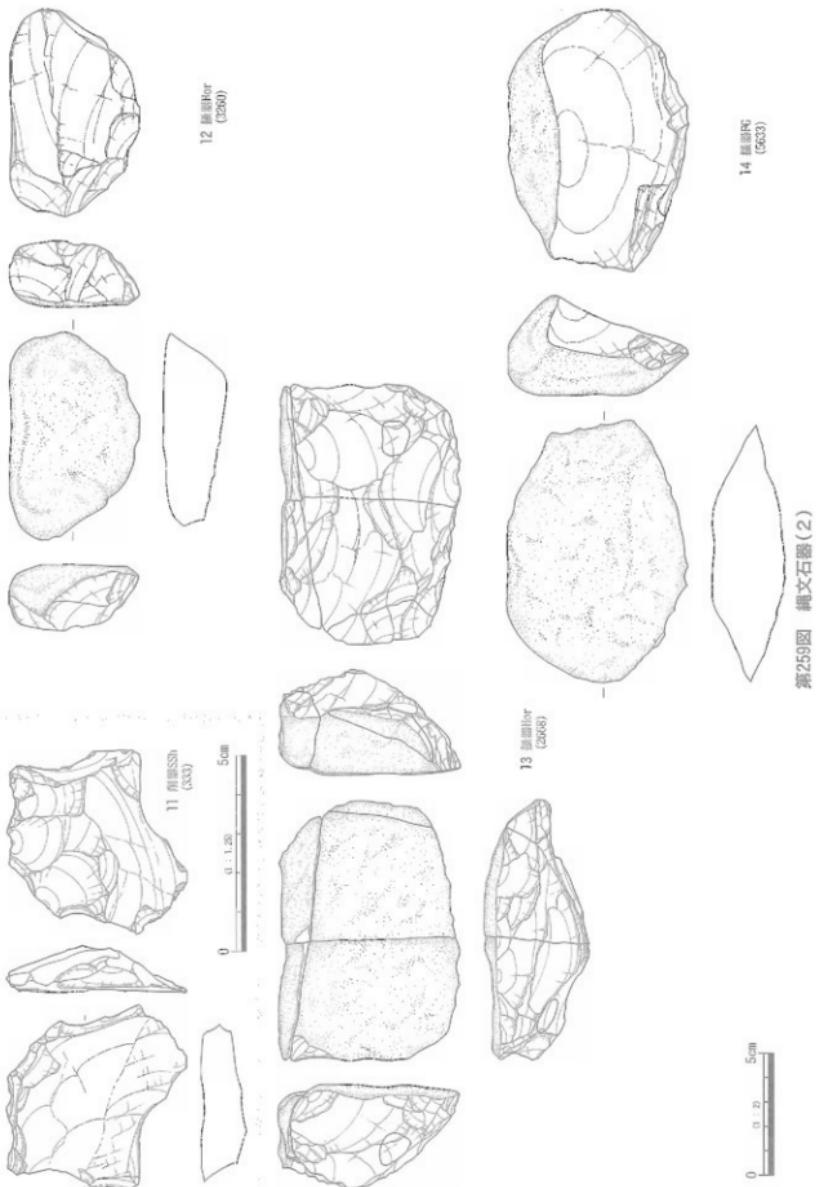
扁平な自然石を素材とし、磨痕や敲痕が観察できるもので、日常的に据えられた状態で使用されるものと考えられ、使用時の形態で2kg以上のものとした。破片を含め、40点出土し6点図示した。

55～57は打痕と磨痕が観察できるものである。平坦面の中央部分を使用している。58～60は磨痕のみが観察できるものである。磨面は弧状に窪んでおり、比較的長く使用されたものと推察される。

石皿・台石類の石材は安山岩60%、玄武岩40%であった。



第258図 繩文石器(1)

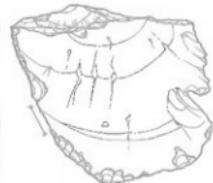




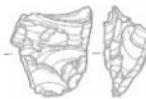
15 加工概測片Ihy
(1302)



16 使用概測片Ch
(5656)



17 使用概測片Gha
(2486)



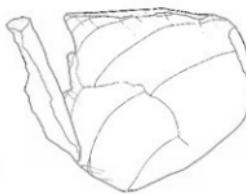
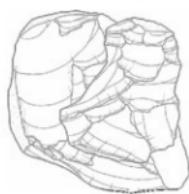
18 橢形石削Ob
(5636)



19 石核Ob
(383)



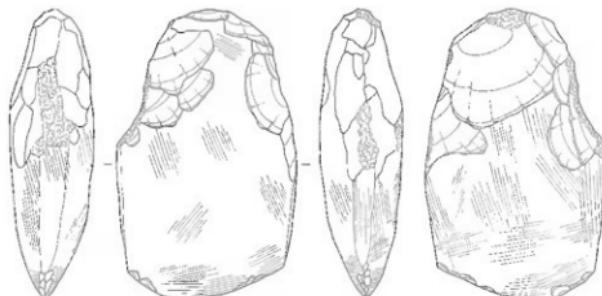
20 石核Bor
(7236)



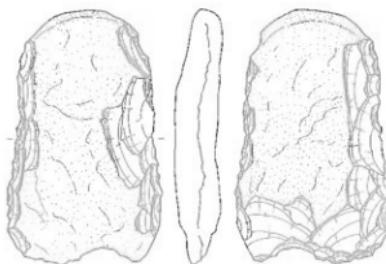
21 石核Bor
(733+6509-2)



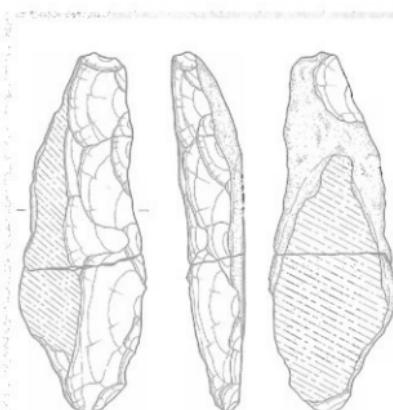
第260図 繩文石器(3)



22 磨製石斧Pe
(728)



23 打削石斧CS
(429)



24 磨製Hor
(4456+6577)



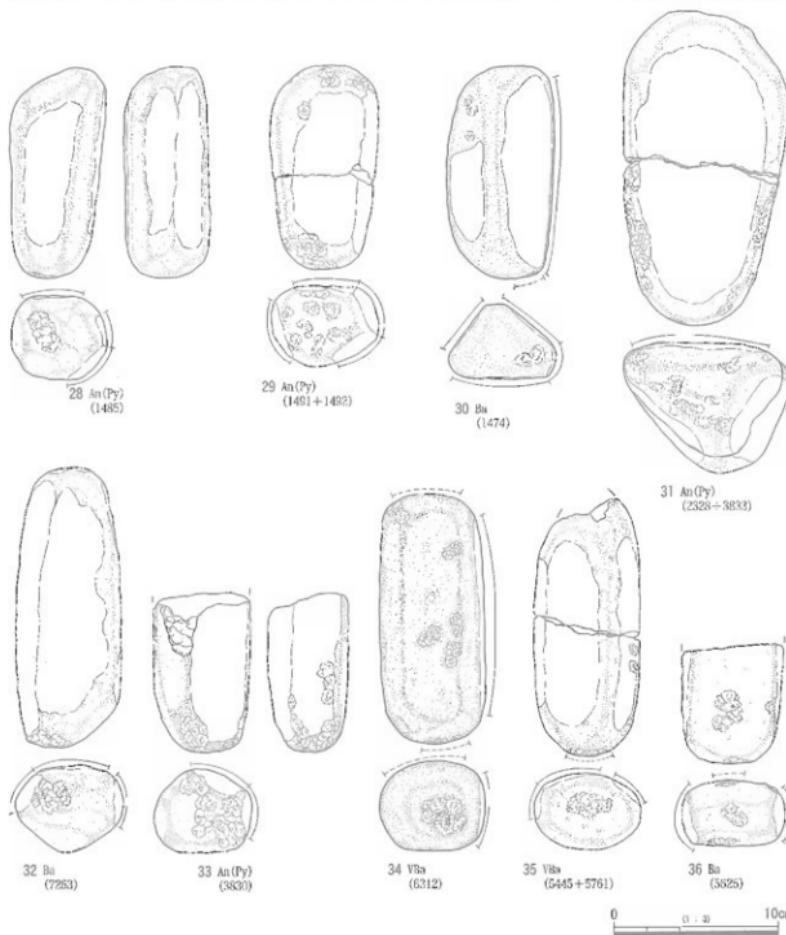
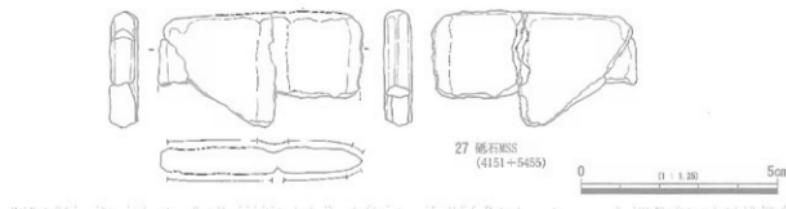
25 磨製Hor
(5702)



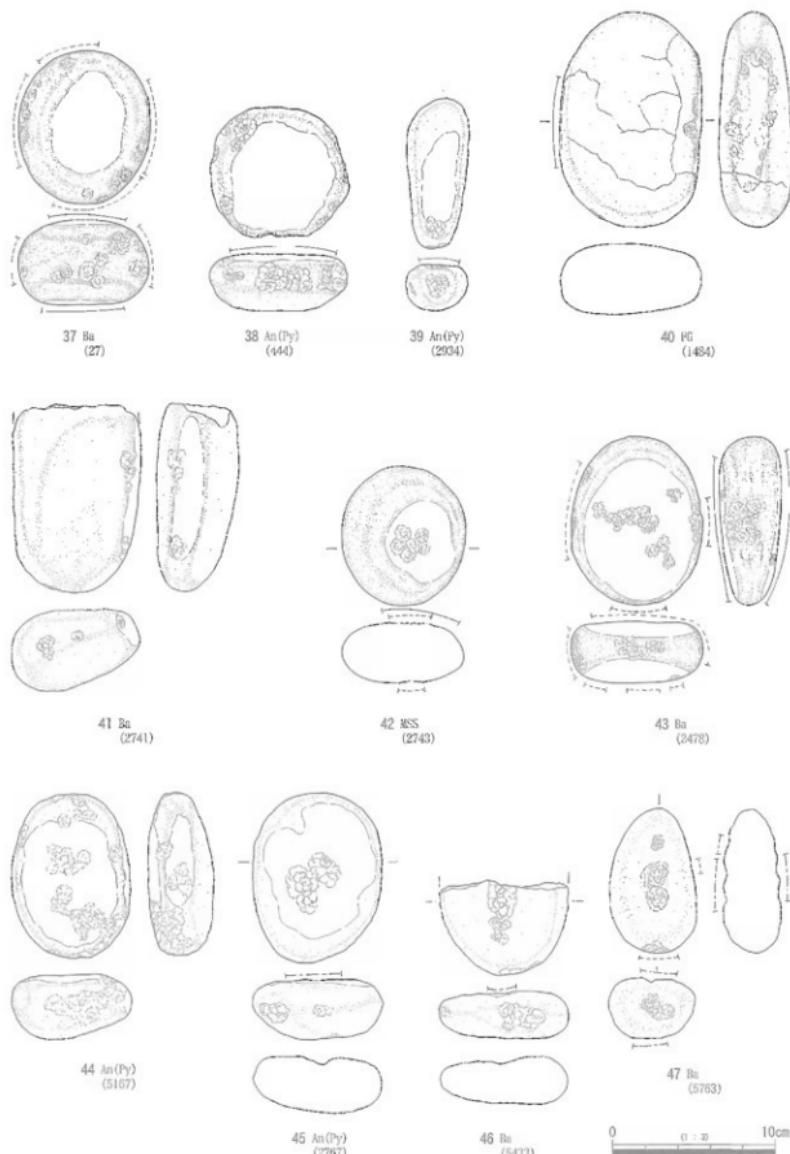
26 磨製Hor
(6307)



第261図 繩文石器(4)

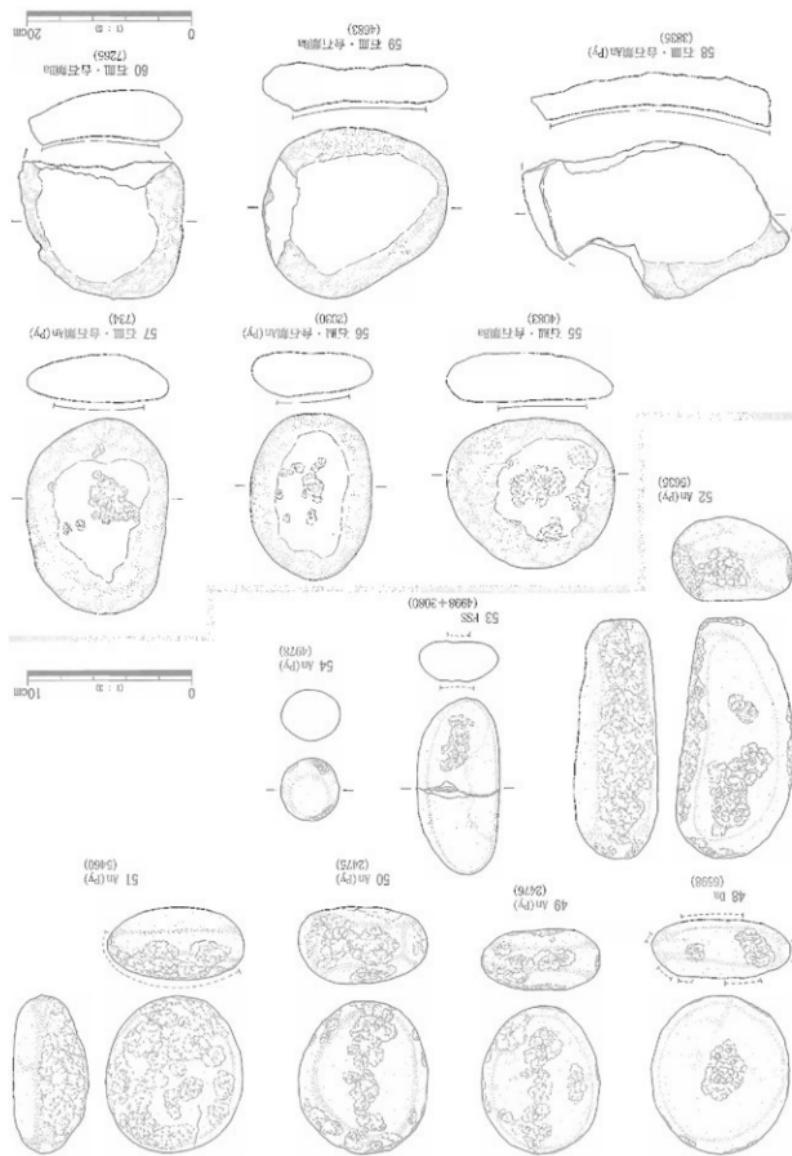


第262図 縄文石器(5)(砥石と磨石・敲石類)



第263図 繩文石器(6)(磨石・敲石類)

第264図 漢文古器(7) (馬石・鐵石頭・石頭・合石頭)



第6章 総 括

これまでの各章では塚松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡について、各々調査の経過と遺構・遺物に関する事実を詳述した。本章では3遺跡の調査成果のまとめと考察を行い、報告の結びとする。

第1節 塚松遺跡のまとめと考察

1 旧石器時代

〈土坑群について〉

第二東名建設に伴う調査では、塚松遺跡周辺でも旧石器時代の土坑検出が続いている。これまでのところ、塚松遺跡の土坑群は箱根・愛鷹山麓では最北に位置し、しかも標高が最も高い地点での検出となつた。同時期の遺構では三島市の初音ヶ原A・B遺跡の60基の配列された土坑群が有名であるが、塚松遺跡の26基も特筆すべき規模である。本遺跡の土坑群は標高210m前後の緩斜面上に造られたが、それは初音ヶ原遺跡よりも100m以上高地ということになり、後期旧石器時代前半の狩猟生活や行動範囲を考える上でも重要である。本項では初音ヶ原遺跡の検出例と比較し、両者の共通点を挙げながら塚松遺跡の土坑群の特徴を述べる。

塚松遺跡と初音ヶ原遺跡の土坑群との第1の共通点は検出層位と形状である。本遺跡の土坑群の大半は第IIIスコリア帯上面での検出だが、いずれも埋土に第III黒色帶主体の土を含むため、土坑群は約2万7千年前の第III黒色帶の時期の掘り込みと判断した。底部は中部ローム層まで達し、全ての土坑で自然堆積が確認された。深さは約1.3～1.6m、概して1.5m以上あり、平坦で円形の底部から、径の大小はあるもののほぼ円形の開口部に向けてラッパ状に広がる土坑が大部分であった。以上の点は初音ヶ原遺跡の土坑群を始めとして、箱根・愛鷹山麓でこれまで検出された陥穴の機能をもつ土坑の特徴ともほぼ一致しており、塚松遺跡の土坑群も狩猟用の陥穴として造られたものであると考える。

第2の共通点は、配列とその位置である。初音ヶ原遺跡では、4列ある土坑列のうち3列が南北の谷頭を直線や弧線で結ぶように配置されていた。一方、塚松遺跡では、土坑の形状の類似性に基づくと第265図に示したA列（1号～18号・18



第265図 塚松遺跡 旧石器時代 土坑配列図

号・19号土坑の8基)とB列(7号～10号の4基)の2列に配列が認められる。同図から分かるように、塚松遺跡にも遺跡の周間に谷が存在するが、とりわけA列は北東と南西の各々の谷頭を繋ぐように尾根を斜めに横切って並んでおり、初音ヶ原遺跡の検出例と似通っている。また、それらは深さが若干異なるものの底部の形状や立ち上がり方が似ているため、ほぼ同時期に掘られたものと推測される。A列の北西に位置するB列はA列に比べると土坑の数が少なく列も短いが、列を構成する4基の形状は類似しており、やはり谷と谷を結ぶ方向にA列とほぼ平行して並んでいる。土坑間の距離については、間隔が比較的短いA列では、2号～6号・18号土坑までの6基の各間隔は約6.17～11.28m(平均約9.16m)であったが、1号土坑と19号土坑のように列の末端で谷部に近い位置のものは、隣の穴まで15m以上の隔たりがあった。ところで、形状が若干異なることから配列された土坑とは見なさなかったが、20号・21号土坑、11号・12号土坑はそれぞれA・B列を補完するような位置に造られていた。なお、25号・26号土坑はA列に連続する位置に掘られてはいるが、それらは底面の平面形が橢円であり、A・B列とは異なる時期のものではないかと思われる(第3章第2節p.66参照)。いずれにしても、当地域で土坑を造る際に掘り進むことになる第IIIスコリア帯には特に硬い層が存在しており、一度に穴を多く掘るにはある程度の規模の集団作業が必要になると思われる。それに見合った成果を挙げるためにも、獲物を確実に仕留めるために配列等の工夫を施す必要があったことは十分考えられる。

そして、第3の共通点は両遺跡ともに第III黒色帯において、土坑群に比較的近い地点で石器ブロック等の遺構が検出されている点である。本遺跡の場合は土坑群から南へ20～40m下った緩斜面を中心に礫群や配石、炭化物を伴って検出された。一方、初音ヶ原A遺跡では石器ブロックが2か所検出されており、1つは谷頭を結ぶ配列された土坑群のすぐ北側で接合資料が出土し、もう1つは土坑群から80～100m北の斜面地であった。なお、同遺跡の報告書では前者については土坑との関連はないとしている。狩り場と生活の場は近接しないと考えるのが自然であるが、塚松遺跡では土坑群よりも下方で石器ブロック等が検出されている。検出層が同じでも最大で千年程の年代幅が考えられるため土坑と石器ブロックの関係は不明であるが、同時期の土坑が複数見つかった向田A遺跡や三島市の加茂ノ洞B遺跡でも第III黒色帯で石器ブロックが検出されていることもあり、類例として報告しておく。

なお、前述のように塚松遺跡では底部が橢円形の土坑が幾つか見られた。初音ヶ原遺跡では同形のものはなかったが愛鷹山麓では調査中の第二東名関連の遺跡で検出されており、今後の報告を待ちたい。

2 縄文時代

(1) 土器について

本遺跡で出土した縄文時代の土器は早期から中期のものまで幅広いが、その中心は早期後半から前期にかけてのもので様々な型式が認められた。中でも早期後半では、野島式→鶴ヶ島台式→茅山上層式→打越式と条痕文系土器のほぼ連続的な変遷が見られた。また、同じ早期末葉の型式である関東系の打越式や東海系の入海II式も出土している。周辺遺跡の例と同様に当地が東西各地域の文化の影響を受ける地域であり、当時の人々の広域にわたる移動や交流の様子が示されている。

早期と同様に、前期も東海系や関東系の土器型式が確認されている。本遺跡では住居跡が3軒検出されたが、調査区中央の2軒から出土した土器はともに池谷信之氏の編年による木島III式土器であった(池谷1985, 2006)ことから、早期末～前期初頭に小規模集落が存在したことがわかった。周辺では、本遺跡の1.5km程南にある駿東郡長泉町の鉄平遺跡で木島式土器を伴う住居跡が複数検出されている。

調査区北端の竪穴状遺構は柱穴や炉跡が見られず住居と判断できなかったが、遺構内外から同一個体

の土器が出土した。それらの型式は不明だが、胎土や形状から前期後半のものであると推定された。なお、中期の土器は早期・前期のものに比べて少なく、住居跡など居住を示す遺構も検出されなかつた。

注目される遺物としては、内面全体に煤が黒く付着した土器がある。欠損品で型式も不明であるが、形状から中期の釣手土器であると判断した。釣手土器はこれまで県内では東部を中心に数例の報告があり、内1点が塚松遺跡の尾根筋を約1.0km下った裾野市の細山遺跡近辺で採取されており、本遺跡のものが同市で2例目となる。釣手土器は明かりを灯す道具とする見方が有力で、内面の煤の付着はそれを裏付けている。なお、釣手土器にはランプの役割を越えて重用されたとする説もある。

(2) 石器について

縄文時代の石器では、狩猟・採集に関わるもののが出土している。有茎尖頭器も多く、土器は伴っていないが当地が草創期から盛んに利用されていたことを示している。石器は種類が多様で、形態で分類すると基部が抉れた凹基無茎石器の割合が高かった。縄文時代の石器に用いられた黒曜石の産地の組成としては、当地域の一般的な傾向と同じく神津島恩馳島産のものが多かつた。

注目されるのは、1点出土したロディン岩製の磨製石斧である。緑色の透輝石を含むロディン岩は軟玉に分類されるもので、石材の主産地は翡翠と同じく遠方で、当地周辺では稀有な出土例である。他の場所から当地へと持ち込まれたものと思われる。その艶やかさから本来の用途を越えて重用されたかどうかは不明であるが、刃こぼれ等から実際に使用した痕跡は認められる。

また、本遺跡では石錐が6点出土した。それらはいずれも扁平な礫の両端を打ち欠いて窪みを作った礫石錐で、地元で入手可能な安山岩製であった。点数は多くないが、漁労に用いられていた可能性は高い。なお、本遺跡より標高が高い裾野市の上川遺跡でも石錐が21点出土しており、注目される。ところで、愛鷹山麓では石錐と東海系の木島式土器との関連が指摘されている（池谷・増島2006）。両氏によれば沼津市の平沼吹上遺跡を初め、木島式土器が出土した愛鷹山南麓の幾つかの遺跡で石錐の減少と礫石錐の増加が見られ、当該期の愛鷹山麓で生業が狩猟から漁労へと変容した可能性があるとしている。前期初頭の鬼界カルデラの爆発でアカホヤ火山灰が列島に降り注ぎ、それは三河湾でも厚く堆積した。同湾内で貝類の生育環境が悪化した結果、その地で漁労を営み木島式土器を編み出した人々が火山灰の影響が少ない静岡県東部の駿河湾沿岸に土器と漁労文化を携えて流入したのではないかと推測している。愛鷹山南東麓でも鉄平遺跡や上川遺跡で石錐と木島式土器が共に出土しており、木島式土器を搬入した集団が塚松遺跡の尾根にも集落を築いて漁労を行った可能性がある。

(3) 土坑群について

塚松遺跡では縄文時代の土坑が74基検出され、その全てで自然堆積が認められた。検出面と覆土でそれらを大きく2分類したところ、早期以降に造られたと思われる第Ⅰ群土坑が8割を占めた。深さは0.24~1.55m、平均で約0.65mであった。また、底部が長方形の土坑が半数で、横円形のものも含めると6割を占めた。一部の土坑で、底部から逆茂木痕の可能性がある小ビットを検出した。

一方、縄文時代後半以降のものと思われる第Ⅱ群土坑は全体の2割弱だが、平均約1.46mと第Ⅰ群のものよりも深く、約2/3の土坑底部で小ビットを検出した。小ビットは底部・開口部が長方形・円形の土坑の双方で検出されたが、逆茂木痕にしては径が小さく、数が多過ぎるように思えるものもあり、小ビットの全てを底部施設の跡と見なせるかどうかは慎重な検討が必要である。

土坑長軸が示す方向について見ると、底部が長方形と横円形の土坑の7割が等高線に対して直交して

いた。早期後半を中心に、陥穴としての土坑が多く造られたことで知られる横浜市の霧ヶ丘遺跡でも大部分の土坑が等高線に直交しており、そこでは谷頭付近のものは谷に引かれるように向きを変え、等高線に対して傾いて配置されている。一般に動物は尾根や丘陵の斜面を上下し、水場を求めて谷へ降りて行くとされる。本遺跡では等高線に対して傾く土坑もあるが、谷頭に近接するものや谷を向いたものは少なかった。しかし、等高線に直交する土坑の多さは、動物の行動を意識してそれらが掘られた可能性を示唆している。

以上の点から、本遺跡の縄文土坑群には狩猟用の陥穴として造られたものが幾つもあると思われる。特に第II群土坑の大部分は、その形状や大きさから陥穴としての機能を有していると考えられる。加えて、第II群では緩斜面上に北東～南西方向に4列の配列も認められており、水場へ移動する動物を想定してそれらが仕掛けられた可能性がある。土坑の形状から想像をたくましくするならば、対象とした動物は、開口部・底部が長方形で箱状の土坑は落ちた後の飛び出しが困難なことから概ねシカの捕獲を意図したもので、開口部が円形のものはイノシシ等を狙ったものと考えることもできる。第I群でも配列は見られるが、土坑数の多さに比べて明瞭な列状配置は少なくランダムに設置された印象を受ける。一方、第II群は検出数が少ないが配列された土坑がほとんどであった。縄文時代の遅い時期の土坑に配列が多く認められる点は、同時代の土坑群が大量に検出された多摩丘陵の様相とも似通っている。

第2節 入ノ洞B遺跡のまとめと考察

1 旧石器時代

入ノ洞B遺跡の旧石器時代を代表する遺物は、本遺跡の最古層となる約2万8千年前相当の第IV黒色帶から出土した局部磨製石斧である。それは短冊形で刃部の両面に磨きが施され、主な用途は不明だが頻繁に使用された跡が認められる石斧であった。後期旧石器時代前半に登場する局部磨製石斧の出土例は全国的にも多数報告されているが、本遺跡のものは他の遺構・遺物を伴わず1点のみの出土であった。本遺跡周辺では、未報告ではあるが、入野洞B遺跡から1km余り南の愛鷹山麓南東麓に所在する梅ノ木沢遺跡（第二東名Na143-2地点）で何点かまとまって出土しているが、それらは本遺跡から出土した石斧とは形態が異なる。

本遺跡の旧石器時代の遺物は、概して出土量が少ない。前述の局部磨製石斧が検出された第IV黒色帶よりも上の層では、第I黒色帶で剥片が出土するまで火山性の礫以外は遺構も遺物も検出されておらず、1万年間近く本遺跡の尾根が使用された形跡がほとんどない。第I黒色帶出土の剥片も1点のみであり、本遺跡の尾根で本格的に生活が開始されるのは旧石器時代末からとなる。約1万4千年前に相当する休場層の下位～中位で検出された剥片と碎片から成る石器ブロックには礫群と分布が重なるものもあり、石器製作跡であると思われる。

2 縄文時代

縄文時代の遺構は、大部分が調査区中央の平坦部に集中していた。1軒のみ検出された竪穴住居跡は前期後半のものと推定され、すぐ近くからは集石や磨石・敲石・石皿等の礫石器が見つかっており、生活痕跡が認められた。縄文前期の小規模集落の一部か、一時的な居住地であったと考えられる。

土器は早期及び前期後半のものが出土しているが、出土量は多くなかった。型式が判明した土器はいずれも関東系のものである。早期後半では条痕文系の野鳥式や鶴ヶ島台式が、また前期後半では半截竹管による沈線が特徴の諸磯b・c式が確認された。とりわけ諸磯式の出土比率が高いのが本遺跡の縄文時代の特徴であり、波状口縁をもつ深鉢や円形の貼付文が施された土器片が多く見られた。

なお、注目される遺物として、関東系の野鳥式土器の文様帶が施された口縁部と、在地の清水柳E類土器の特徴である絡条体圧痕文のような文様が施された胴部から成り立つ早期後半の深鉢が出土した。口縁部と胴部は接合しなかったが、出土地点と層位が一致しており位置と胎土の詳細な観察からそれは同一個体であると見なされた。

第3節 内野山V遺跡のまとめと考察

1 旧石器時代

内野山V遺跡の最も古い文化層は第III黒色帯であるが、ガラス質黒色安山岩製の欠損した剥片が1点出土したのみであった。遺構では、第I黒色帯からは石器ブロックと砾群が、また休場層から砾群が検出された。本遺跡は旧石器時代の遺物の出土量がとても少ない遺跡であった。

2 縄文時代

内野山V遺跡は平坦地が少ないこともあり、縄文時代の遺構と遺物の大部分が遺跡東端の緩斜面上か西端の小高い丘陵上を選ぶように分布していた。遺物では早期及び中期のものが出土したが、その大半は早期の土器が占めている。とりわけ押型文土器の出土状況は多様性に富んでおり、施文の方向では縱・横・異方向のものや帶状のものが、施文の種類では山形文や精円文、格子文等が確認された。また条痕文土器では早期後半の東海系の入海I式土器やそれに並行する土器が主体であった。

早期の土器がバラエティ豊かに出土した一方、同時期の住居跡は検出されていない。しかし、20基検出された集石の幾つかは撚糸文土器や磨石、剥片石器等を伴っていた。また、大部分の集石は早期の土器の出土地点とほぼ重なっており、一時的かもしれないが縄文早期の人々が生活の本場として本遺跡を利用していたことは十分考えられる。加えて、5基の土坑のうち1基で出土した炭化物が種実同定と年代測定により、クリの子葉で早期前葉～中葉のものと判明した（附録 分析参照）。検出状況等から土坑が造られた時期も炭化物の年代に近いと思われる。炭化物の分析結果は周辺の包含層から出土した土器の編年ともほぼ一致していた。なお、クリが出土した土坑は覆土が1層で上面から石皿が、周辺から大型の砾が多数出土したことでも特徴であり、人為的な埋め戻しや石皿等の意図的な配置が為された可能性もあるが、墓坑と見なすには浅いように思われた。

遺構では石圓炉も検出され、覆土や炉石からはある程度頻繁に使われた形跡が発見された。それは共伴した土器から中期後半の炉跡と推定されたが、住居プランや柱穴は検出されなかった。中期の可能性がある遺構はそれのみで、本遺跡も塚松遺跡と同様、早期に比べて中期の遺構・遺物が少なかった。

縄文時代の石器については、本遺跡では狩猟具の出土量が概して少ない反面、磨石・敲石等の砾石器類の出土が目立った。

引用・参考文献

- 愛鷹ローム研グループ 1969 「愛鷹山麓のローム層－東名高速道路工事現場を中心として－」
『第四紀研究 第8巻第1号』 日本第四紀学会
- 池谷信之 1995 「愛鷹・箱根山麓の層序と出土石器」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』
静岡県考古学会・シンポジウム実行委員会
- 池谷信之 1985 「縦位密接施文から異方向帶状施文へ～駿豆地方押型文土器の変遷と立野式～」『利根川24・25』
利根川団人
- 池谷信之 1985 「平沼吹上遺跡 遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財発掘調査報告書36 沼津市教育委員会
- 池谷信之・増島淳 2006 「アカホヤ火山灰下の共生と相克」『伊勢湾考古第20号』 知多古文化研究会
- 石田真 2004 「群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって」『研究紀要22』
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 船田孝司 2001 「遊動する旧石器人」 岩波書店
- 井鍋晋之 2001 「富士川S.A関連遺跡群(遺物編) 埋蔵文化財発掘調査報告書」
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 今村啓爾 1999 「縄文の実像を求めて」 吉川弘文館
- 今村啓爾 2006 「縄文の豊かさと限界」 山川出版社
- 岩宿博物館編 2007 「イノシシの文化史」『第43回企画展』 岩宿博物館
- 岩名建太郎 2000 「押出シ遺跡(遺物編) 埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 恩田勇・鈴木次郎 1996 「窓ヶ瀬遺跡群VI」『かながわ考古学財団調査報告8』 (財) かながわ考古学財団
- 笠懸野岩宿文化資料館(編) 2001 「岩宿時代の動物たち」 笠懸野岩宿文化資料館
- 勝山百合・小崎晋・笛原芳郎 2006 「西山遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」
(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 菊池実 1987 「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題」『研究紀要4』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 考古教材研究会編 1994 「先生のための考古資料集」 山梨県埋蔵文化財センター
- 小林達雄 1996 「縄文人の世界」 朝日新聞社
- 小林達雄 1999 「縄文人の文化力」 新書館
- 笛原千賀子 2004 「上松沢平遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 笛原千賀子 2003 「鉄平遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 笛原芳郎 1996 「下原遺跡II 埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐藤恵之 2000 「北方狩獵民の民族考古学」 北海道出版企画センター
- 鈴木敏之・伊藤恒彦・前嶋秀張 1999 「初音ケ原遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 三島市教育委員会
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所編 2004 「愛鷹山をかけめぐった旧石器人」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 白石浩之 2006 「旧石器時代の社会と文化」 山川出版社
- 鈴木道之助 1991 「図録・石器入門辞典(縄文)」 柏書房
- 裾野市教育委員会編 2002 「裾野の文化財」 裾野市教育委員会
- 裾野市史編纂室編 1992 「裾野市史 第一巻／資料編・考古」 裾野市教育委員会
- 関根慎二 1999 「群馬県における諸磯b式土器の細分」『第12回縄文セミナー前期後半の再検討』
- 武居幸重 1992 「縄文心象」 エディシオンアルシーヴ
- 動使河原彰 1998 「縄文文化」 新日本出版社
- 富樫孝志 2007 「向田A遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書」 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 長泉町郷土誌増補版編纂委員会編 1992 「長泉町史 上巻」 長泉町教育委員会
- 廣瀬高文 2006 「追平B遺跡 調査報告書」 長泉町教育委員会
- 保坂康夫 1997 「柏ヶ谷長ヲサ遺跡における礎群と配石について」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 松浦宥一郎 2005 「日本の先史文化 その特質と源流」 雄山閣

附編 分析

塚松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡

黒曜石産地分析

独立行政法人沼津工業高等専門学校 望月明彦

産地推定法 得られた蛍光X線スペクトル強度を元素記号で表す。2つの方法とも次の指標を用いる。

指標 $S_{\text{um}} = R_{\text{b}} + S_{\text{r}} + Y + Z_{\text{r}}$ とする。

$$R_{\text{b}} \text{ 分率} = R_{\text{b}} / S_{\text{um}} \quad S_{\text{r}} \text{ 分率} = S_{\text{r}} / S_{\text{um}}$$

$$Z_{\text{r}} \text{ 分率} = Z_{\text{r}} / S_{\text{um}} \quad Mn * 100 / Fe \quad \log (Fe / K)$$

1. 産地のシートに挙げた黒曜石産地から原石を採集し、測定する。

2. 測定結果から上記の指標を算出する。

3. 以上から、産地原石に関するデータベースを作成する。

下記の2つの方法で産地推定を行いう。

① 判別図法

用いる指標： 横軸： $R_{\text{b}}/\text{分率}$ 、縦軸： Mn/Fe 横軸： $S_{\text{r}}/\text{分率}$ 、縦軸： $\log(Fe/K)$

特長： 簡単な計算であり、誰にでも作成可能。また、視覚的に確認でき、分かりやすい。

測定方法： 遺跡出土試料を蛍光X線分析し、指標を計算する。次いで、指標を図にプロットする。重なった原石産地を推定結果とする。

② 判別分析（推定結果表参照※）

※推定結果表は、付属CDに収録

用いる指標： 算出された指標全て

特長： 既知の産地のどれに類似しているかを判別する方法である。各産地との類似度を距離で算出する。しかし、未知の産地の判別はできない。

推定方法： 判別図法では遺跡出土試料と重なっている産地を推定結果とする。この産地は試料と2次元的に最も距離が近い。判別分析ではこの距離を数学的にn次元で計算する。試料と最も距離（マハラノビス距離）が近い産地を推定結果とする。この距離から、各産地に属する確率を計算する。

【推定結果表（付属CD収録）の見方】

判別図判別群： 判別図法によって推定された産地。判別分析と結果が異なるときは、“*”を付けて示す。

判別分析： 第1候補産地……判別分析により推定された産地の第1候補

第2候補産地……判別分析により推定された産地の第2候補

判別群： 候補産地記号 → 判別図法による産地と通常は一致する。

距離： 試料から候補産地までのマハラノビス距離 → 値が小さいほど候補産地と類似性が高い。

確率： 試料が候補産地に属する確率 → 1に近いほど類似性が高い。

産地原石判別群 (SEIKO SEA-2110L螢光X線分析装置による)

部道府県	地図No.	エリア	新羽別群	彭羽別群	新記号	旧記号	原石採取地(分類数)
北海道	1	白 滝	八幡沢群		STHG		滝岩山山頂(19)、八号沢源頭(31)、八号沢(79)、黒瀬の沢(6)。
	2	土上川	黒瀬の沢群		STKY		黒瀬林床(4)
	3	置 戸	三股群		KSMW		十三ノ沢(5)
	4	旭 川	安住群		OBAZ		安住(25)、清水ノ沢(5)
	5	名 寒	砂谷台群		ARTS		西野台(6)、隣野台(5)、春古台(5)
	6	名 寒	春古台群		ASRK		
	7	新十津川	瀬田群		STS0		瀬田(6)
	8	赤井川	曲川群		AJMK		曲川(25)、土木沢(15)
青森	9	木 造	豊景群		TOTTI		豊景(16)
	10	城 浦	出栗島群		KHOR		出栗島海岸(34)
			八曲川群		HEDW		八曲山山頂(8)、六角沢(5)、岡崎浜(40)
秋田	11	男 鹿	金ヶ崎群		OOGS		金ヶ崎温泉(37)、駒車湖岸(98)
			駒本群		ODOM		駒本海岸(16)
山形	12	羽 黑	月山群		HUGS		月山花前(30)、朝日町代沢(18)、福引町中沢(18)
			今野川群		HGIN		今野川(9)、大鶴川(5)
新潟	13	新 泽	津井群		NTNT		金津(26)
	14	新潟田	飯山群		SHTY		飯山沢(50)、飯沢(20)
福井	15	高 原	高原山群		THSY		甘露沢(50)、根沢(20)
			七尋沢群		TSZY		七尋沢(5)、自然の家(9)
兵 野	和 田 (W)	龍山群	和田神子群		WTY1		
		小砂沢群	和田神子群		WTY2		
		土屋橋北群	和田神子群		WTY3		
		土屋橋西群	和田神子群		WTY4		
		土屋橋南群	和田神子群		WTY5		
		天谷ノ沢群			WTY6		
		古峰群			WTY7		
		ブドウ沢群	男女食1群		WED1		
	和 田 (W)	牧ヶ沢群	男女食1群		WED2		ブドウ沢(30)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢ト(33)、牧ヶ沢下(36)、高志沢(40)
		高志沢群	男女食2群		WED3		
	17	瀬 許	星ヶ台群	西ヶ端系	SWHD		
					KHW		
					KEW		
静 岐	蓼科系	冷山群			TSTY		
		双子山群			TSBG		
		穠跡山群			TSBB		
		芦ノ瀬群			TMAY		
神奈川	19	第 一	芦ノ瀬群		AST		芦ノ瀬(34)
	20	第 一	堀宿群		BHJU		堀宿(71)
静 岐	21	第 一	黒羽橋群	駒形系入群	HKIK		黒羽橋(4)
			駒形系		HKNA		
			御治群		HJY		御治(30)
東 京	22	天 城	上多賀群		HMT		上多賀(16)
			柏崎群		AKAT		柏崎(80)
			恩賜鳥島群		KZD		恩賜鳥島(100)、長浜(43)、沢尻湖(8)
			神津島群		KZDN		神津島(22)
			砂利崎群		KZDZ		砂利崎(4)、長浜(5)
島 根	24	越 岩	久見群		QDM		久見バーライト申(30)、久見経羅隈地(18)
			気浦群		QDMU		気浦海岸(30)、加茂(19)、岸浦(35)
			岬群		QDMT		岬地区(16)
その他の			NS群		NK		中ツ原IG、5G(遺跡試料)、原石庵地は未見見

佐々木繁喜氏提供試料 (まだ地図には入れていない)

部道府県	エリア	新羽別群	記 号	原 石 採 取 地 (分 析 数)
青森	小 田	西脇内群	SDOK	小泊市野内(8)
岩 手	北上川	北上野原1群	EX01	水沢市折波(36)、花巻市田所ノ沢(36)、零石小沢沢(22)
		北上野原2群	EX02	水沢市折波(23)、花巻市日所沢(30)、零石小沢沢(2)
		北上野原3群	EX03	水沢市折波(5)
宮 城	宮 城	瀬ノ食村	MEYK	宮城町瀬ノ食(54)
山形	色 施	船岡群	SMNG	色施町根岸(48)
	仙 台	秋保1群	SDA1	仙台市秋保上戸藏(17)
		秋保2群	SDA2	仙台市秋保下戸藏(35)
	塙	塙越群	SGSG	塙越群



塙松遺跡・入ノ洞B遺跡・内野山V遺跡出土
黒曜石 産地推定結果 集計

エリア	利別群	遺跡名	塙松遺跡		入ノ洞B遺跡		内野山V遺跡		
			記号	試料数	%	試料数	%	試料数	%
衝田 (W)	ブドウ沢群	WDGD	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	牧ヶ沢群	WGMG	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	高松沢群	WOTW	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
和田 (W)	芙蓉ライト群	WDLY	1	0.1	0	0.0	0	0.0	
	黒山群	WDY	20	3.0	2	1.1	1	2.2	
	小深沢群	WDKB	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	土屋橋北群	WDTK	2	0.3	0	0.0	0	0.0	
	土屋橋西群	WDTN	2	0.3	0	0.0	0	0.0	
	土屋橋南群	WDTM	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	古崎群	WDHT	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
栗 貽	星ヶ台群	SWHD	83	12.4	11	5.9	16	34.8	
蓼 科	冷山群	TSYY	28	4.2	1	0.5	0	0.0	
	双子山群	TSHG	1	0.1	0	0.0	0	0.0	
	攝除山群	TSSB	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
天 城	柏崎群	AGKT	19	1.5	0	0.0	14	30.4	
箱 根	烟宿群	HSHJ	288	43.1	117	62.9	2	4.3	
	鎌治屋群	HNKJ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	黒岩橋群	HNKI	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	上多賀群	HNKT	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
神 津 島	芦ノ湯群	HNAT	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	恩島島群	KZOB	98	14.7	2	1.1	12	26.1	
高 原 山	砂離崎群	KZSN	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	甘湯沢群	THAY	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	七尋沢群	THNH	0	0.0	0	0.0	9	0.0	
新 津	金津群	NTKT	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	新晃田	SBY	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	深浦	HUHN	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
木 造	出来島群	KDDK	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	金ヶ崎群	OGKS	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	駒本群	OGWM	3	0.5	9	0.0	0	0.0	
羽 黒	月山群	HGGM	9	6.0	0	3.0	0	0.0	
	今野川群	HEGIN	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
脇 航	久見群	OKHM	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	岬群	OKMT	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	箕浦群	OKMU	5	0.0	0	0.0	0	0.0	
白 滝	八号沢群	STHG	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	黒龍の沢群	STKY	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
赤 井 川	曲川群	AIMK	5	0.0	0	0.0	6	0.0	
	豐浦	TUTI	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
置 戸	安住群	ODAZ	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	三股群	TKMM	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
名 寄	布川群	NYHA	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	高砂台群	AKTS	0	0.0	6	0.0	0	0.0	
旭 川	春光台群	AKSK	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
	不明產地1	NK	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
			合計	533	79.8	133	71.5	45	97.8
測定・推定不可等				135	20.2	53	28.5	1	2.2
			総計	668	100.0	186	100.0	46	100.0

入ノ洞B遺跡 テフラ検出分析

株式会社パレオ・ラボ
黒澤 一男

1 試料と分析方法

第二東名建設事業に伴い発掘調査された裾野市桃園の入ノ洞B遺跡（第二東名No.144-2地点）から採取された16試料（図1）を用いて、以下の分析を行った。

- (1) 各試料について自然含水状態で約30g程度秤量し、テフラ分析試料とした。また、含水比を求めため別途試料を10g程度秤量し、乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。
- (2) 1φ(0.5mm:30メッシュ)、2φ(0.25mm:60メッシュ)、3φ(0.125mm:120メッシュ)、4φ(0.063mm:250メッシュ)の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式フルイ振とう機を用いて温式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成として表し、試料の乾燥重量における粒径4φ以上の砂粒分の重量%を含砂率とした。
- (3) 4φの残渣（粒径0.125～0.063mm）については、重液（テトラブロモエタン：比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離した。
- (4) 分離した軽鉱物について封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それを偏光顕微鏡下で軽鉱物粒子を火山ガラスと長石に分類し、同定、計数し、その組成を求めた。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄の仕方によって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、火山ガラスの形態については、町田・新井（1992）の分類基準に従い形態分類を行った（図2）。
- (5) 火山ガラス含有量の高い試料を用いて火山ガラスの屈折率測定を行った。測定方法は横山ほか（1986）の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）で表した。

2 火山ガラス比分析結果

本地域において堆積物の鉱物分析を行った結果を表1、及び図3・4に示し、以下にそれぞれについて述べる。

堆積物中の砂粒分の割合（含砂率）は、1.8～44.7%の値となる。下位で比較的高い含砂率となり、試料15で最大値を示す。

重・軽鉱物比については、上位と下位で軽鉱物の割合が高くなる。試料1（最上位）と試料16（最下位）において、それぞれ78.1%、81.6%と高い値を示す。

軽鉱物組成は火山ガラスの含有量が上位と下位で高く、試料1～6と試料13～16で30%以上の値となり、特に試料16では99%以上と大変高い値となる。逆に、試料7～10では長石が80%以上の高い値となる。

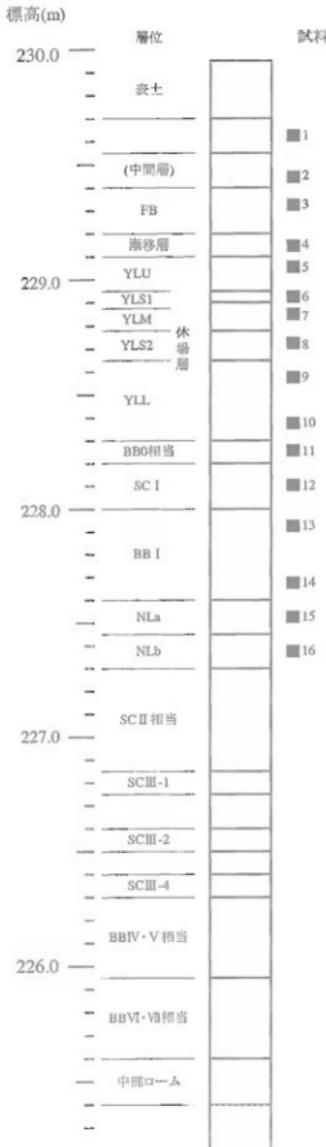


図2 火山ガラスの形態分類(町田・新井, 1992)

図1 No144-2地点TP04西壁基本土層柱状図と分析試料

表1 堆積物の鉱物分析結果一覧

試料番号	含水率 (重量%)	含砂率 (重量%)	砂粒分の粒度組成 (重量%)				重・軽鉱物組成 (重量%)		軽鉱物組成(粒数)		火山ガラス形態分類(粒数)					
			1φ	2φ	3φ	4φ	重鉱物	軽鉱物	長石 Pt	火山ガラス Vg	平板状 b1	Y字状 b2	繊維状 p1	スポンジ 状 p2	破碎型 c0	
1	122.0	11.8	47.6	13.5	18.2	20.7	21.9	78.1	105	225	23	2	18	171	11	
2	138.3	15.9	49.9	6.1	36.4	7.7	38.7	61.3	150	135	44	18	9	50	14	
3	147.4	6.6	66.1	13.0	11.2	9.6	45.0	55.0	152	105	47	14	-	32	12	
4	133.9	3.2	49.3	19.5	20.9	10.3	47.2	52.8	161	116	30	6	-	27	53	
5	125.2	4.9	71.6	7.8	9.6	10.9	44.7	55.3	188	82	9	8	2	24	39	
6	136.9	4.4	65.8	10.2	11.2	12.8	44.7	55.3	176	79	17	-	3	29	30	
7	146.6	6.1	73.8	10.4	8.2	7.6	56.9	43.1	228	42	12	-	3	17	10	
8	136.6	9.8	87.5	3.8	5.6	3.1	56.5	43.5	236	18	-	2	1	3	12	
9	152.1	3.1	67.6	9.9	11.5	11.0	65.6	34.4	222	39	5	2	-	11	21	
10	161.3	1.8	24.0	15.9	27.3	32.7	63.9	36.1	225	43	13	2	-	3	25	
11	163.8	4.2	56.8	9.3	17.8	16.0	80.4	19.6	195	57	17	8	2	9	21	
12	108.8	27.7	89.4	2.3	3.9	4.4	70.6	29.4	201	68	38	8	6	8	8	
13	132.6	15.5	79.1	6.1	6.3	8.5	67.1	32.9	107	164	113	21	2	8	20	
14	149.5	9.3	62.4	8.6	12.0	17.1	60.8	39.2	53	270	188	60	3	8	11	
15	99.4	44.7	88.2	1.3	3.6	6.9	33.5	66.5	17	281	209	38	6	14	14	
16	128.1	24.3	68.7	2.8	6.4	22.0	18.4	81.6	2	248	210	35	-	3	-	

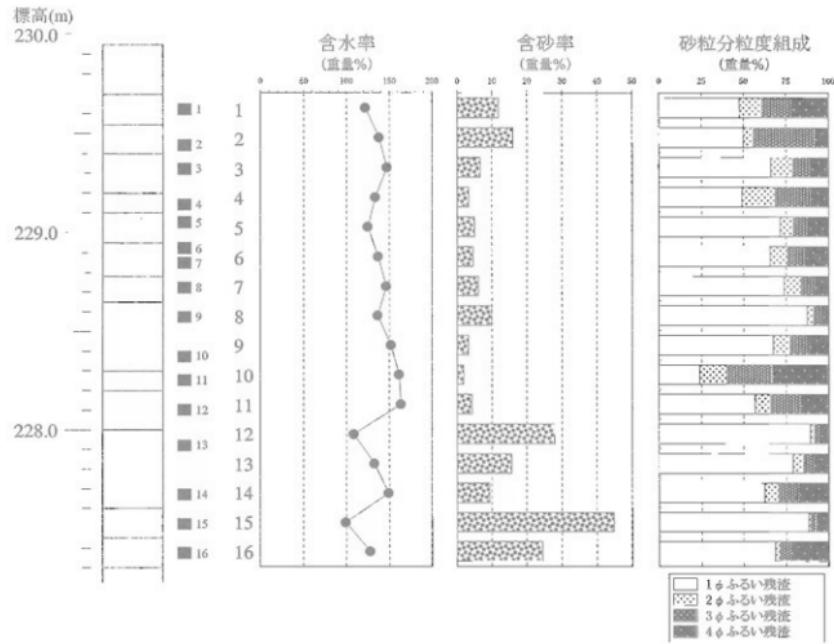
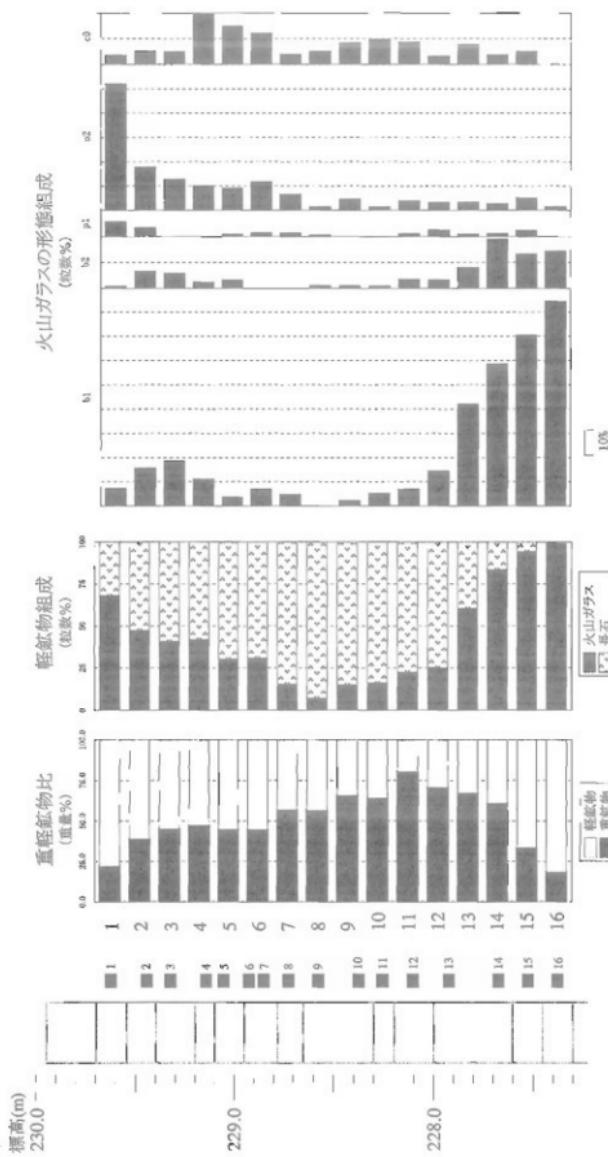


図3 堆積物の特徴



火山ガラスの形態は上位ではスponジ状 (p2) が高い値を示し、下位では平板状 (b1) が高い値を示す。スponジ状は試料1で52.1%と高い値となり、平板状は試料15・16で70%以上となる。また、破碎型 (c0) が試料4で19.0%と比較的高い値を示す。

3 火山ガラス屈折率測定結果

測定試料の選定は鉱物分析により、火山ガラスの含有量の高い試料1・4・16を選び出した。測定結果を表2及び図5に示す。

試料名	測定対象	範囲(range)	平均(mean)
No. 1	軽石型火山ガラス	1.4996 - 1.5032	1.5016
No. 4	破碎型、軽石型火山ガラス	1.5007 - 1.5038	1.5022
No. 16	バブル型火山ガラス	1.4994 - 1.5007	1.5002

表2 火山ガラスの屈折率測定結果

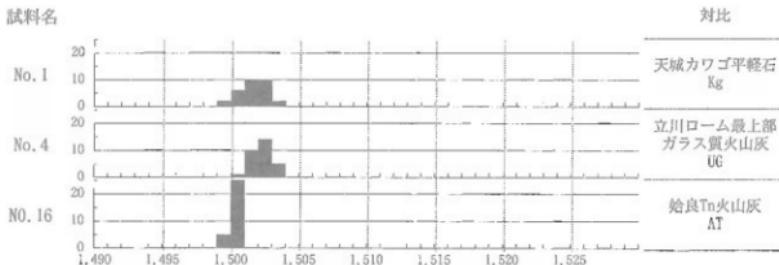


図5 火山ガラスの屈折率とそのタイプ
(縦軸: 測定粒数、横軸: 屈折率)

4 堆積物中の指標テフラ

今回の分析から、本地域において見られた堆積物から検出されたテフラについて、その特徴と噴出起源及び年代について述べる。

【K g : 天城カワゴ平輕石】

試料1の付近に認められる軽石型を中心とした火山ガラスは、その形態的特長から天城カワゴ平テフラ (Kawagodaira Pumice : K g) を起源とするものと考えられる。K g の火山ガラスの形態は軽石型スponジ状のものから成り、ガラス片には長石や輝石を伴うことが多いという特徴をもつ。ここで見られる火山ガラスにスponジ状のものが多く検出されることと、火山ガラスの含有量が高い値を示すこ

と、さらに、試料1における火山ガラスの屈折率の測定結果は範囲1.499~1.504、集中度の良い範囲1.500~1.503、平均1.5016となり、従来の値（範囲1.495~1.502；町田・新井1992）と近似することから、試料2に含まれる火山ガラスはKgに同定、対比される。

Kgは伊豆の天城山カワゴ平火口を噴出源とし、給源から北方へ60km以上、西方へ120km以上と特異な分布をし、その噴出年代は2,800~2,900年前とされている（町田ほか1984）。

【UG：立川ローム最上部ガラス質火山灰】

試料4付近に認められる急冷破碎型（フレーク状・塊状）及び軽石型の火山ガラスは、その形態的特徴から山崎（1978）の立川ローム最上部ガラス質火山灰（Tachikawa Upper Glassy Ash: UG）を起源とするものと考えられる。山崎（1978）によると、UGの火山ガラスの形態は小気泡を含むガラス塊状のものと繊維束状のものがあり、ガラス片には長石や輝石を伴うことが多いという特徴をもつ。ここで見られる火山ガラスに塊状の急冷破碎型のものが検出されることと、火山ガラスの含有量が比較的高い値を示すこと、さらに、試料4における火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.500~1.504、平均1.5016となり、従来の値（範囲1.500~1.503；町田・新井1992）と近似することからZn層付近に認められる急冷破碎型及び軽石型火山ガラスはUG起源である可能性が高い。

UGの噴出源については洩間火山の南東に分布する洩間一板鼻黄色軽石（As-YP；新井, 1962）及びその直上の火山灰互層に連続すると考えられている（鈴木1991, 町田・新井1992）。

UGの噴出時代は約1.3~1.4万年前と推定されている（町田ほか1984）。また、近年、埼玉県狭山丘陵のお伊勢山遺跡（早稲田大学所沢校地）において更新世末期に形成された谷を埋積する堆積物からUGが検出され、挿在する堆積物の¹⁴C年代測定からUGの上位で12,250±190 yBP、下位で12,830±290 yBPという値が得られている（辻ほか1989）。

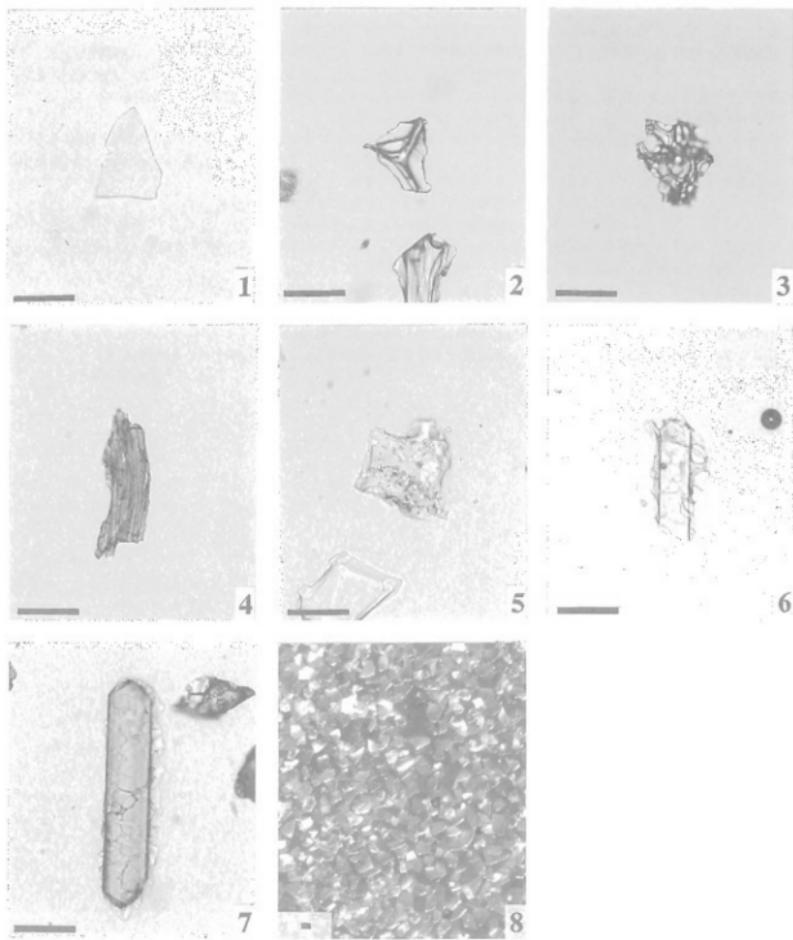
【AT：姶良Tn火山灰】

試料13~16に認められるバブル型（平板状・Y字状）を中心とした火山ガラスは、その形態的特徴と産出状況から町田・新井（1976）の“姶良Tn火山灰（Aira-Tn Ash: AT）”とみなされる。町田・新井（1976）の記載によると、ATの特徴は細粒で細砂鉱物のうち火山ガラスが90%以上を占め、その形態は鋭い端を持つ無色透明な平板状のガラスで、気泡の側壁あるいは泡と泡との縫目部分のかけら（バブル型火山ガラス）から成る特徴をもつ。NLb層付近にはこのバブル型火山ガラスが多く含まれ、火山ガラスの含有量はNo.16においてピークを示す。さらに、No.16における火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.499~1.501、平均1.5002となり、従来の値（範囲1.498~1.501；町田・新井1992）と重なることから、NLb層周辺に見られるテフラはATに同定・対比される。

ATは南九州の鹿児島湾北部の姶良カルデラを噴出源とし、九州地方から東北地方に至るまで広く分布している。また、噴出年代はその上下の堆積物の¹⁴C年代測定から2.1~2.2万年前と推定されており（町田・新井1976）、近年ではタンデトロン加速器質量分析法（AMS法）により2.4~2.5万年前のまとまった値が得られている（村山ほか1993、池田ほか1995）。

5 まとめ

第二東名建設事業に伴い調査された裾野市桃園の入ノ洞B遺跡（第二東名Na144-2地点）における堆積物のガラス比分析、及び火山ガラス屈折率測定を行った結果、Kg（天城カワゴ平軽石）、UG（立川ローム最上部ガラス質火山灰）、AT（姶良Tn火山灰）の3つの指標テフラを検出することができた。



図版 入ノ洞B遺跡における堆積物中の鉱物類 (スケール : 0.1 mm)

- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| 1 : バブル型平板状火山ガラス (試料 16) | 2 : バブル型Y字状火山ガラス (試料 16) |
| 3 : 軽石型スponジ状火山ガラス (試料 1) | 4 : 軽石型繊維状火山ガラス (試料 1) |
| 5 : 急冷破碎型火山ガラス (試料 4) | 6 : 長石 (試料 1) |
| 7 : 斜方輝石 (試料 1) | 8 : 4 φ試料 (試料 16 : A.T.) |

引用文献

- 新井房夫 1962 「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要 自然科学編10』
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 1995 「南九州・姶良カルデラ起源の大隈降下経石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代」『第四紀研究34』
- 町田 洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—姶良Th火山灰発見とその意義—」『科学46』
- 町田 洋・新井房夫 1992 「火山灰アトラス」 東京大学出版会
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログー」『古文化財の自然科学的研究』 同朋舎出版
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 1993
「四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討
—タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の¹⁴C年代—」『地質学雑誌99』
- 鈴木正章 1991 「立川ローム層最上部UG火山灰の層序と岩石化学的特性」『道都大学短期大学部紀要25』
- 辻誠一郎・柄内正久・木越邦彦・小杉正人・南木賀彦・能城修一・小倉順子・
坂上寛一・杉山信二・鈴木正章・鈴木三男 1989
「縄文時代の古地理と古環境」『お伊勢山遺跡の調査 第3部 縄文時代』 早稲田大学
- 山崎晴雄 1978 「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究16』
- 横山卓雄・擅原 徹・山下 透 1986 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」
『第四紀研究25』

内野山V遺跡 出土炭化物 放射性炭素年代測定（AMS測定）

株式会社 加速器分析研究所

- 1 測定の意義 遺構の年代を明らかにする。
- 2 測定対象試料 7号土坑から出土した炭化物（6610 : IAAA-71087）である。
- 3 化学処理工程
 - (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
 - (2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～0.01Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には遠心分離機を使用する。
 - (3) 試料を酸化銅1gとともに石英管に詰め、真空下で封じ切って500°Cで30分、850°Cで2時間熱する。
 - (4) 液体窒素とエタノール、ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。
 - (5) 精製したCO₂から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
 - (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着して測定する。
- 4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

- 5 算出方法
 - (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
 - (2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る¹⁴C年代である。
 - (3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

(4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度: $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

${}^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度: $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_R$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には、表中に [加速器] と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 (${}^{14}\text{A}_S$) に換算した上で計算した値である。(1)式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\%)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当する BP 年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいは pMC により、放射性炭素年代 (Conventional Radio-carbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

(5) ${}^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

(6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCal v3.10較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 検定結果

SF（土坑）07から出土した炭化物（6610：IAAA-71087）の¹⁴C年代は8580±50yrBPである。暦年較正年代（ $1\sigma=68.2\%$ ）は、7610～7545BCであり、縄文時代早期前葉から中葉にかけての年代である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

7 参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
 Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA

IAA Code No.	試 料	BP年代及び炭素の同位体比
IAAA-71087	試料採取場所：第二東名No.144-3地点 内野山V遺跡 試料形態：炭化物 試料名(番号)：6610 (参考)	Libby Age(yrBP) : 8,580±50 $\delta^{13}\text{C}(\text{\textperthousand})$ 、 (加速器) = -25.55±0.76 $\Delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -656.1±2.1 $\text{pMC}(\%)$ = 34.39±0.21 $\delta^{14}\text{C}(\text{\textperthousand})$ = -656.5±2.0 $\text{pMC}(\%)$ = 34.35±0.20 Age(yrBP) : 8,580±50
#1901	$\delta^{13}\text{C}$ の補正なし	

参考資料：暦年較正用年代

IAA

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71087	6610	8,575 ± 49

ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下1桁を丸めない値です。

内野山V遺跡 出土炭化物 種実同定

株式会社 加速器分析研究所

試料は肉眼及び双眼実体顕微鏡により観察・同定を行った。以下に、同定された分類群と部位、形態記載を示す。

試料番号 I (No. 6610) クリ(炭化子葉)

炭化種実の形態記載

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) : 炭化物はクリ子葉が割れた状態である。子葉は三角形で、表面には縦方向にやや深い溝が全面に分布する。双子葉のため、子葉は中央から割れやすい構造になっている。本試料は大変緻密で堅く炭化しているため、低温少酸素状態で加熱を受けたと推定される。

* 本測定は、当社協力会社・古代の森研究舎にて実施した。



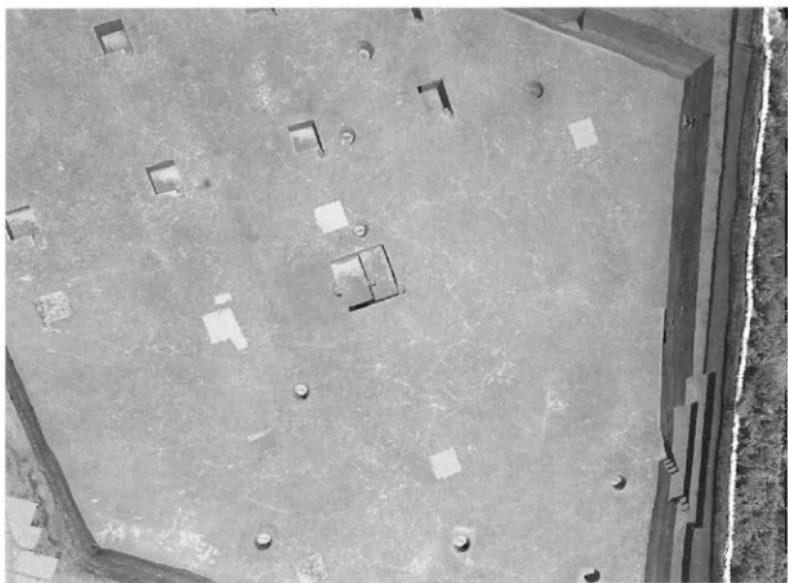
図版1 内野山V遺跡より出土した炭化種実
1. クリ、炭化子葉 No.6610 (スケールは10mm)

写真図版



第 I 文化層 土坑全景(空撮・合成)

図版2 塚松遺跡



第I文化層 土坑検出状況



第Ⅰ文化層 5号土坑半裁状況



第Ⅰ文化層 5号土坑完掘状況



第Ⅰ文化層 6号土坑完掘状況



第Ⅰ文化層 20号土坑完掘状況



第Ⅰ文化層 22号土坑完掘状況



第Ⅰ文化層 23号土坑完掘状況



第Ⅰ文化層 9号土坑完掘状況

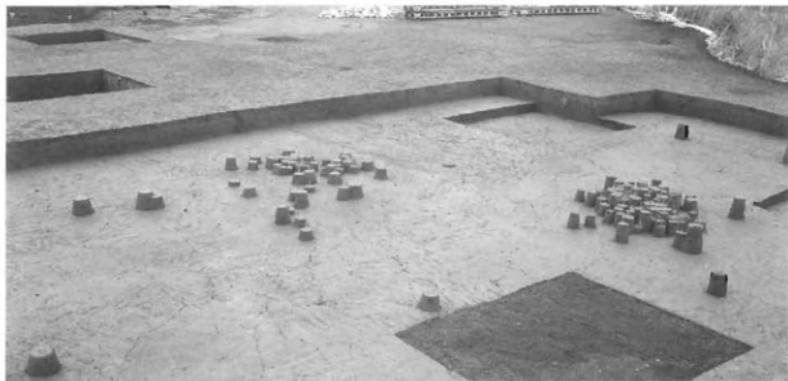


第Ⅰ文化層 10号土坑完掘状況

図版4 塚松遺跡



第Ⅰ文化層 3号石器群 検出状況



第Ⅰ文化層 15号・16号石器ブロック検出状況



第Ⅰ文化層 15号石器ブロック検出状況



第Ⅰ文化層 16号石器ブロック検出状況



第Ⅰ文化層 11号石器ブロック・9号配石検出状況



第Ⅱ文化層 6号礫群検出状況



第Ⅰ文化層 20号石器ブロック検出状況



第Ⅲ文化層 18号石器ブロック検出状況



第Ⅲ文化層 22号石器ブロック検出状況



第Ⅲ文化層 17号石器ブロック検出状況

図版6 塚松遺跡



縄文時代 土坑全景(空撮・合成)



縄文時代 6号土坑検出状況



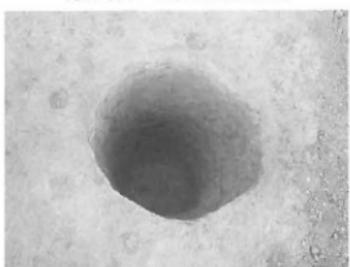
縄文時代 7号土坑検出状況



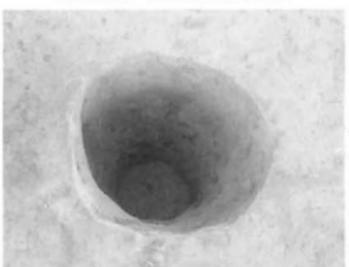
縄文時代 2号土坑検出状況



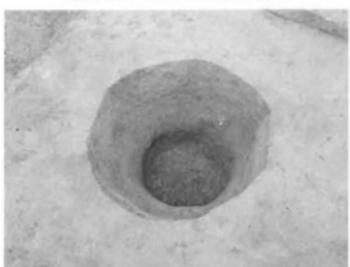
縄文時代 29号土坑検出状況



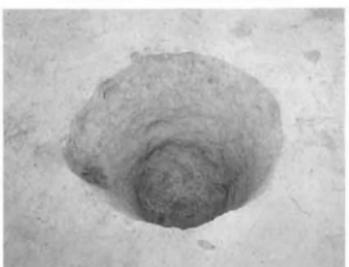
縄文時代 39号土坑検出状況



縄文時代 40号土坑検出状況



縄文時代 46号土坑検出状況

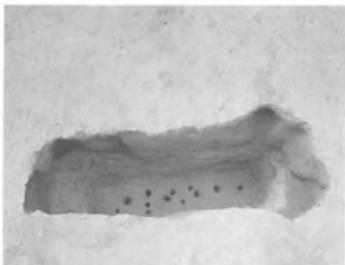


縄文時代 48号土坑検出状況

図版8 塚松遺跡



縄文時代 64号土坑検出状況



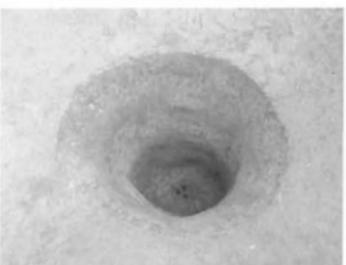
縄文時代 65号土坑検出状況



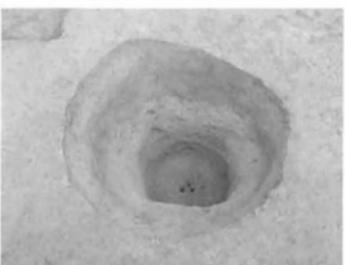
縄文時代 66号土坑検出状況



縄文時代 67号土坑検出状況



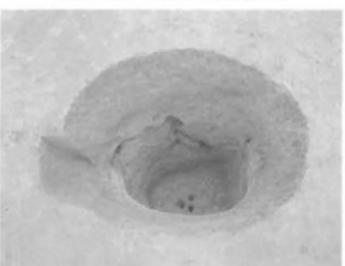
縄文時代 68号土坑検出状況



縄文時代 69号土坑検出状況



縄文時代 70号土坑検出状況



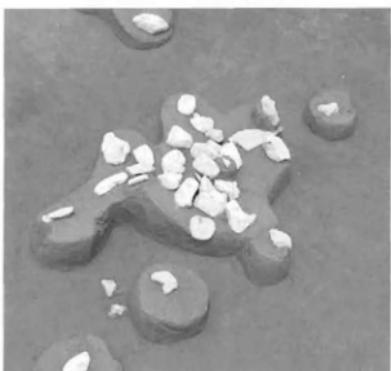
縄文時代 71号土坑検出状況



縄文時代 3号集石検出状況



縄文時代 3号集石完掘状況



縄文時代 1号集石検出状況



縄文時代 5号集石検出状況



縄文時代 13号・14号集石検出状況

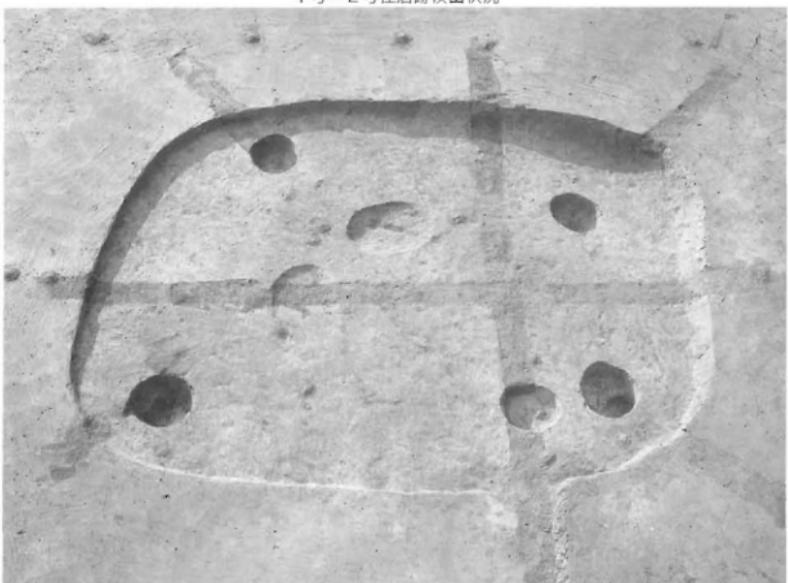


縄文時代 21号集石検出状況

図版10 塚松遺跡



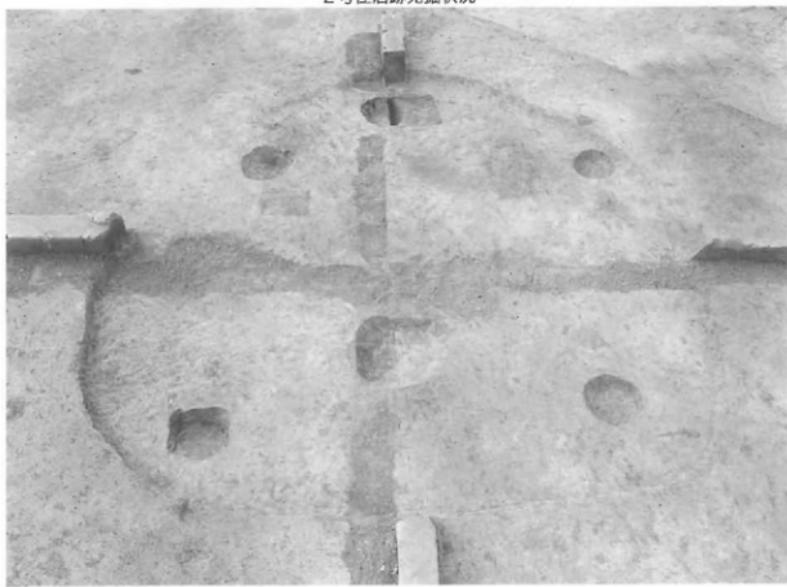
1号・2号住居跡検出状況



1号住居跡完掘状況



2号住居跡完掘状況



3号住居跡完掘状況

図版12 塚松遺跡



1号竪穴状遺構検出状況



1号竪穴状遺構完掘状況



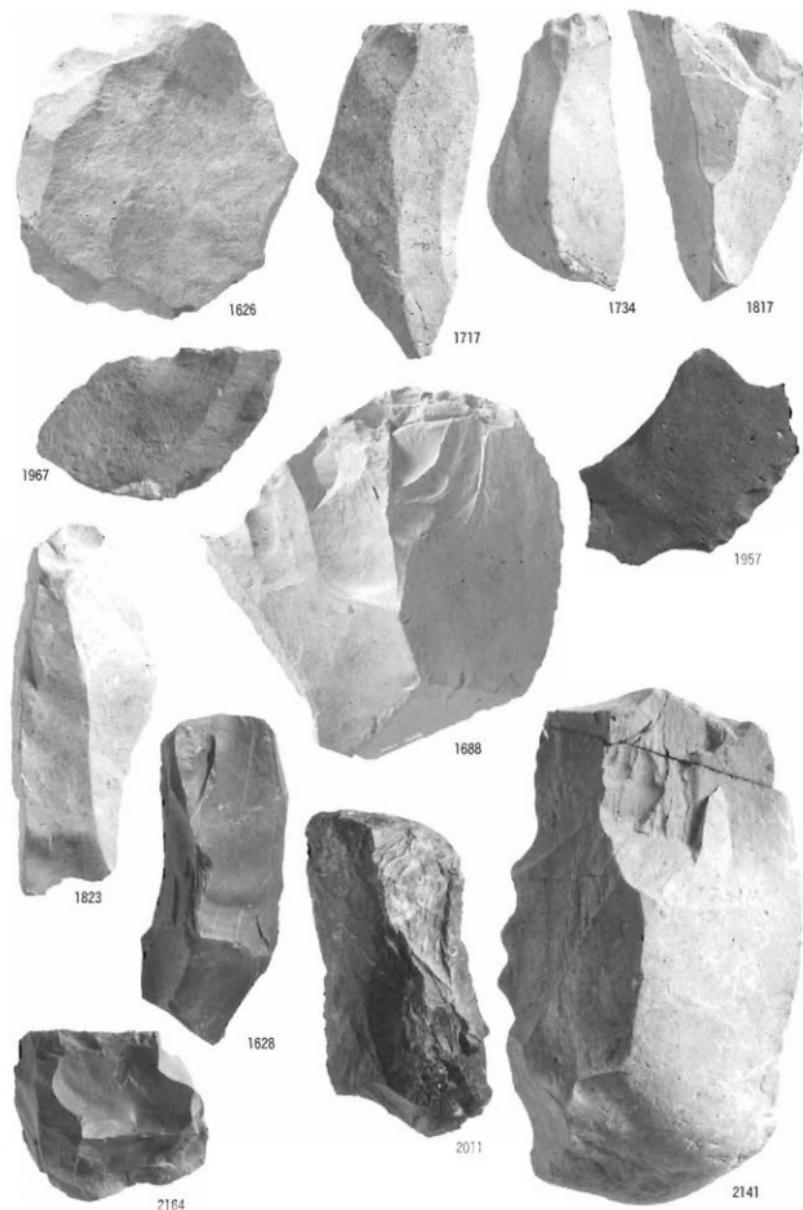
1号住居跡出土遺物



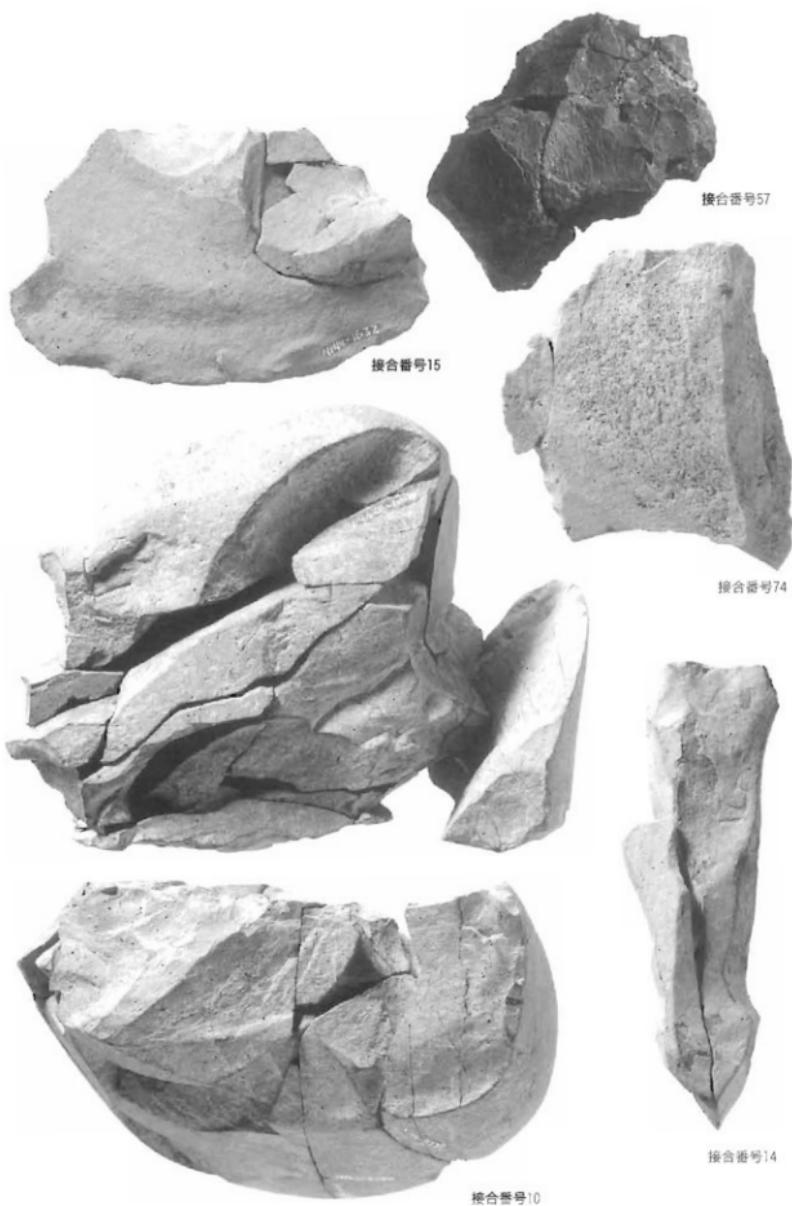
2号住居跡出土遺物

1号竪穴状遺構出土遺物

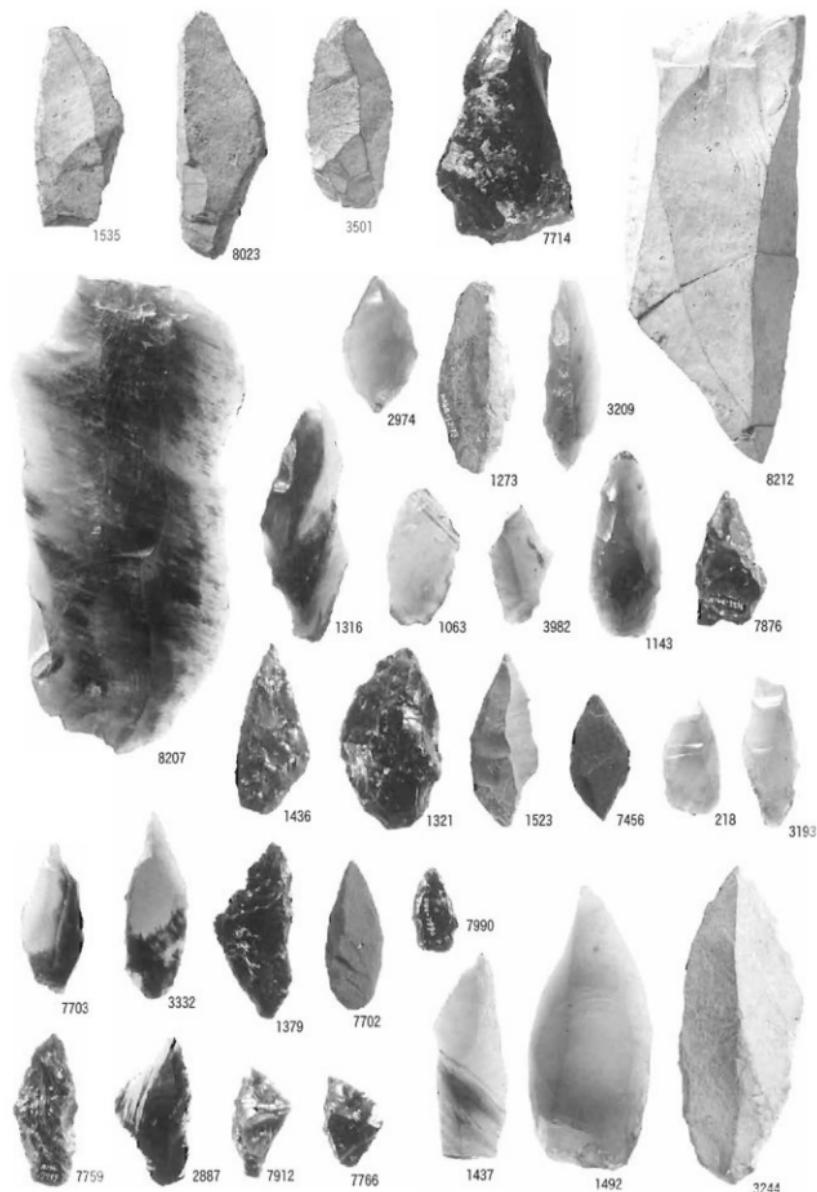
図版14 塚松遺跡



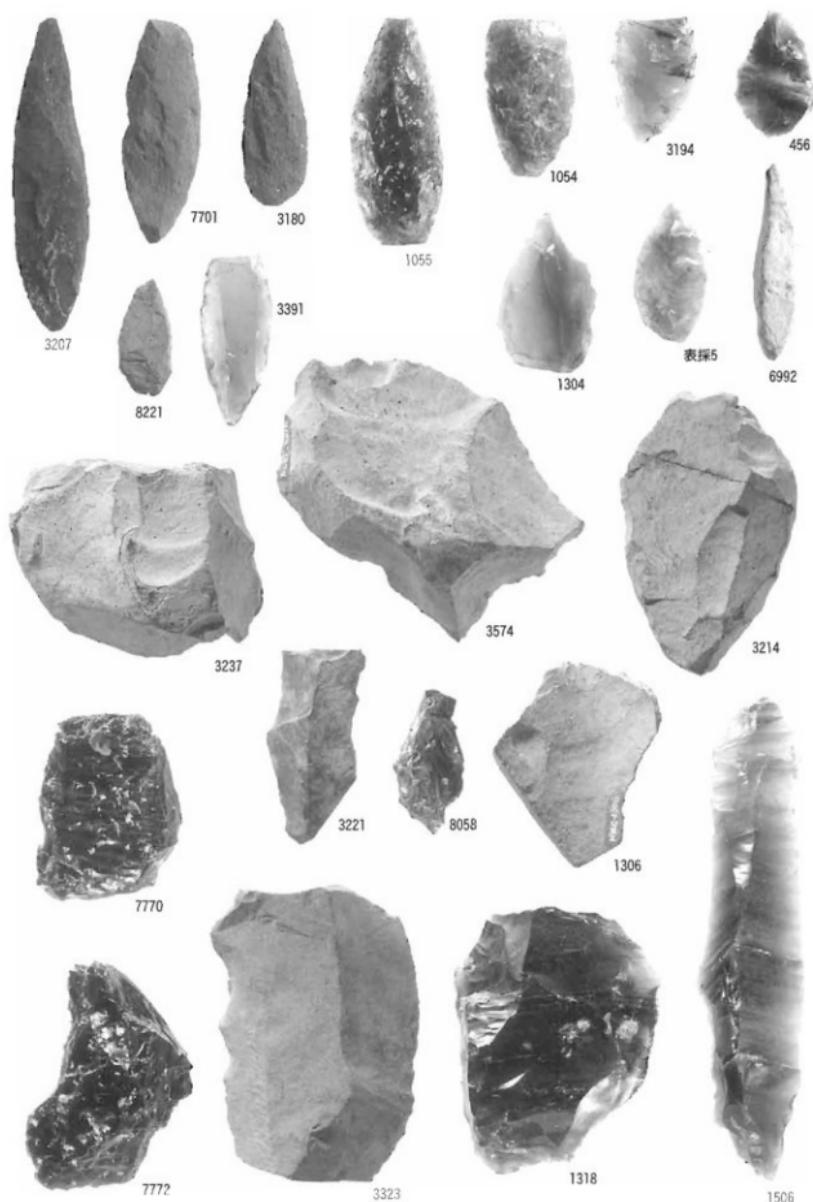
第1文化層出土石器(1)



図版16 塚松遺跡

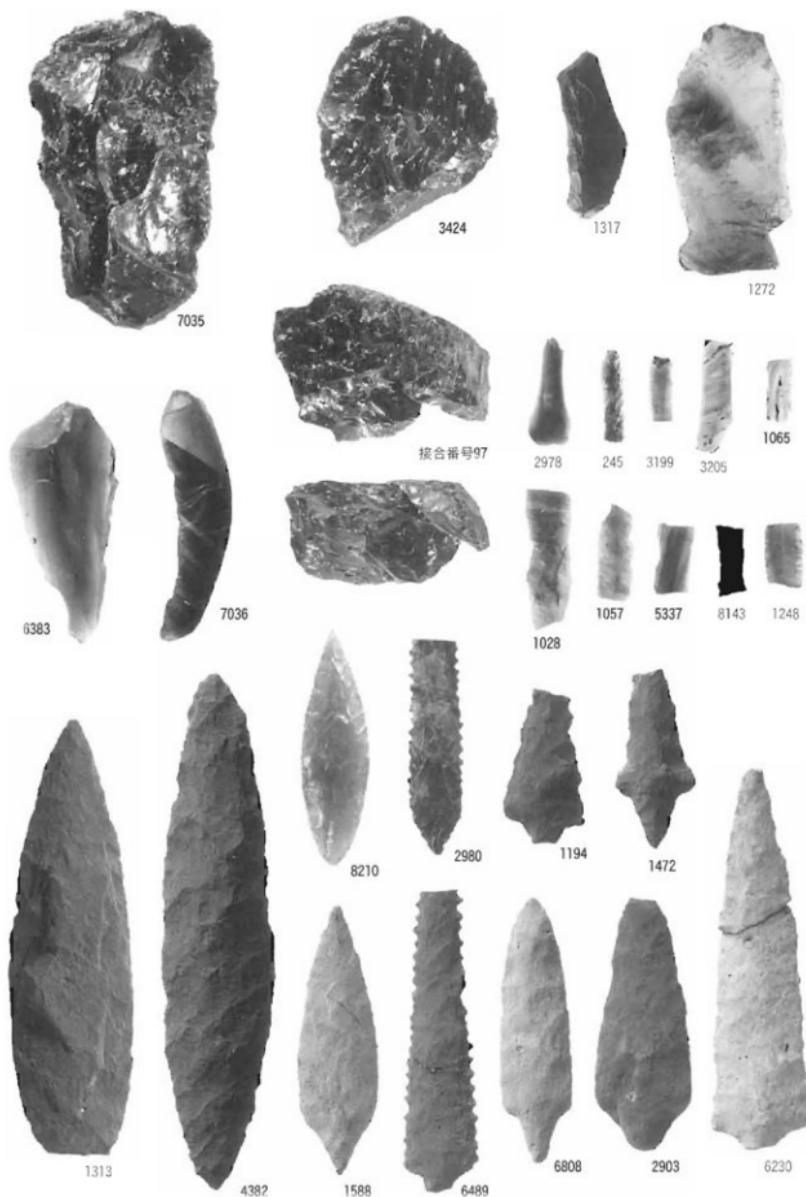


第Ⅱ文化層・第Ⅲ文化層出土石器(1)

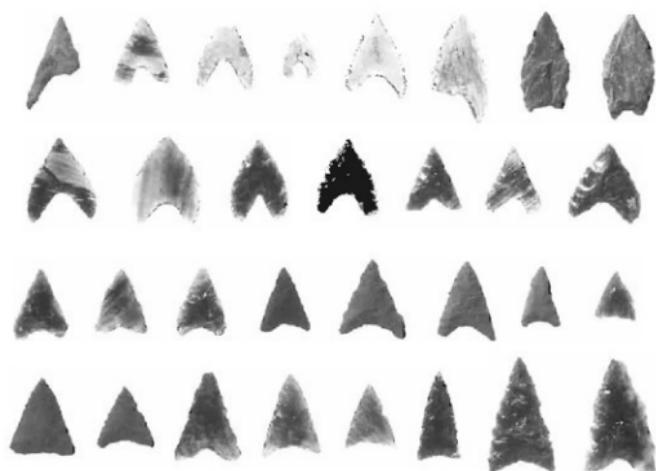


第Ⅲ文化層出土石器(2)

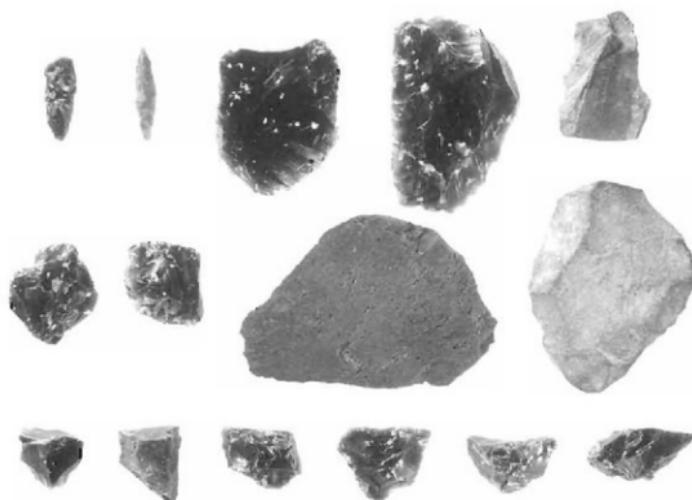
図版18 塚松遺跡



第三文化層出土石器(3) 第IV・第V文化層出土石器



縄文石器(1)石簇



縄文石器(2)石錐・削器類・楔形石器

図版20 塚松遺跡



縄文石器(3)石匙



縄文石器(4)打製石斧



縄文石器(5)大型石器

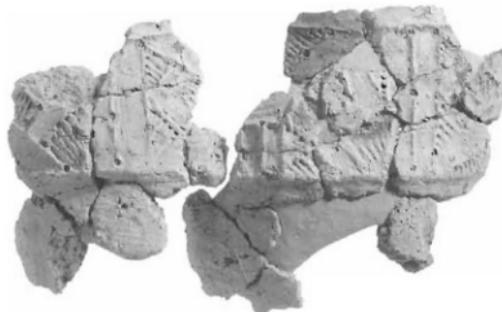
図版22 塚松遺跡



第Ⅰ群土器 撥糸文・押型文



第Ⅱ群土器 茅山上層式・打越式



第Ⅱ群土器 鵜ヶ島台式



第Ⅱ群土器 入海Ⅱ式 復元1



第Ⅱ群土器 入海Ⅱ式 復元2



第Ⅱ群土器 石山式



第Ⅱ群土器 尖底繩文土器

図版24 塚松遺跡



第Ⅲ群土器(1)



第Ⅲ群土器(2)

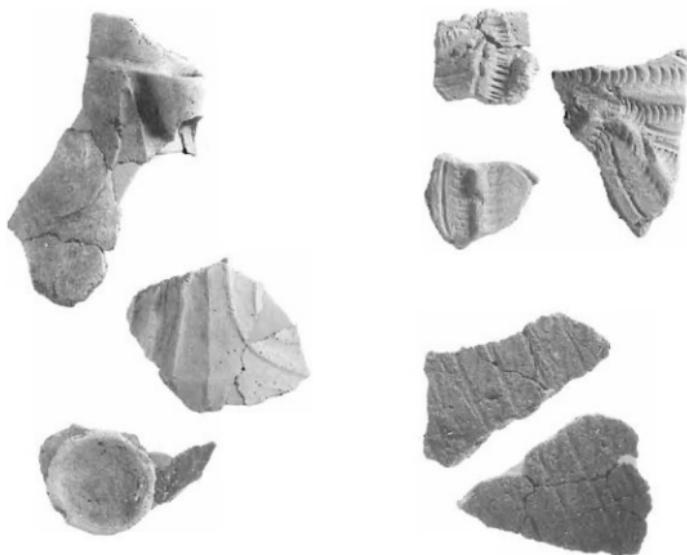
図版26 塚松遺跡



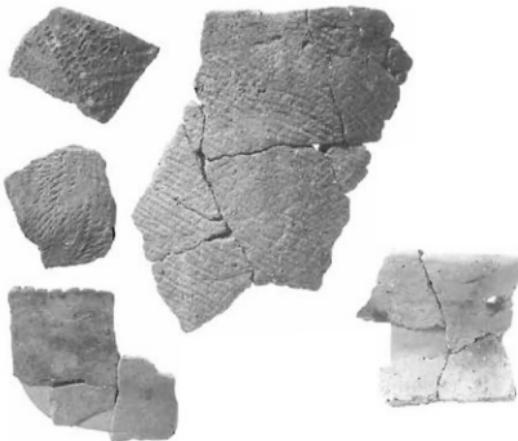
第Ⅲ群土器(3)



第Ⅳ群土器(1)

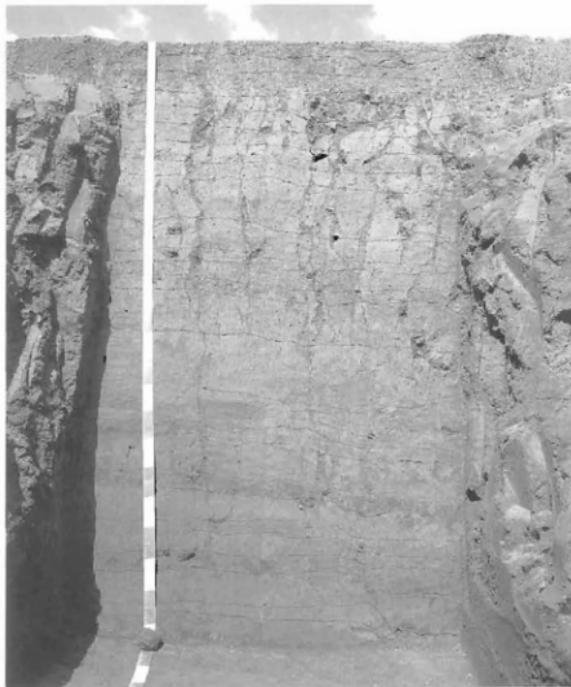


第IV群土器(2)



第IV群土器(3)・第V群土器

図版28 入ノ洞B遺跡



土層堆積状況



テストピット・トレンチ完掘状況



第Ⅱ文化層 遺物出土状況



1号石器ブロック検出状況



2号石器ブロック・1号砾群検出状況



3号石器ブロック検出状況



第Ⅲ文化層 1号土坑内遺物出土状況

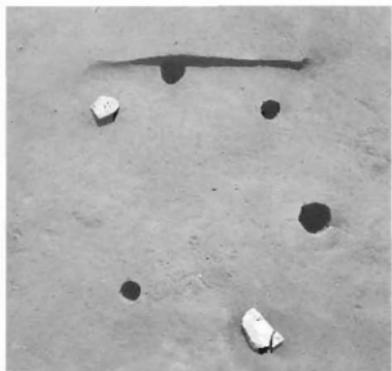
図版30 入ノ洞B遺跡



縄文時代 遺物出土状況



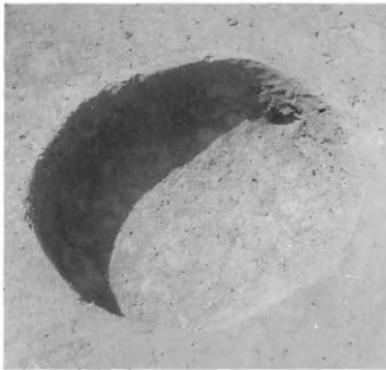
1号住居跡検出状況



1号住居跡完掘状況



縄文時代 1号土坑完掘状況



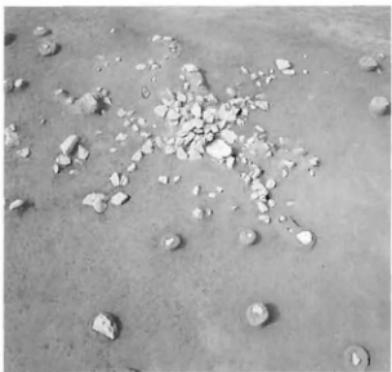
縄文時代 2号土坑完掘状況



縄文時代 1号集石検出状況



縄文時代 5号集石検出状況



縄文時代 7号集石検出状況

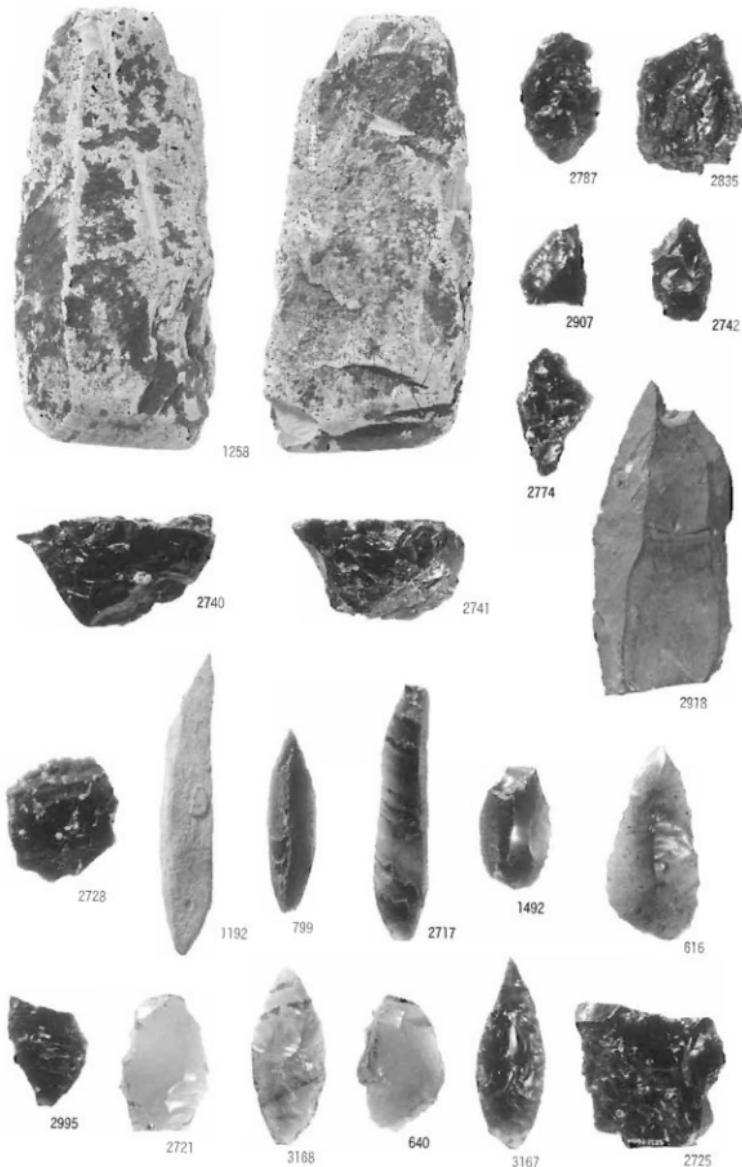


縄文時代 7号集石半裁状況

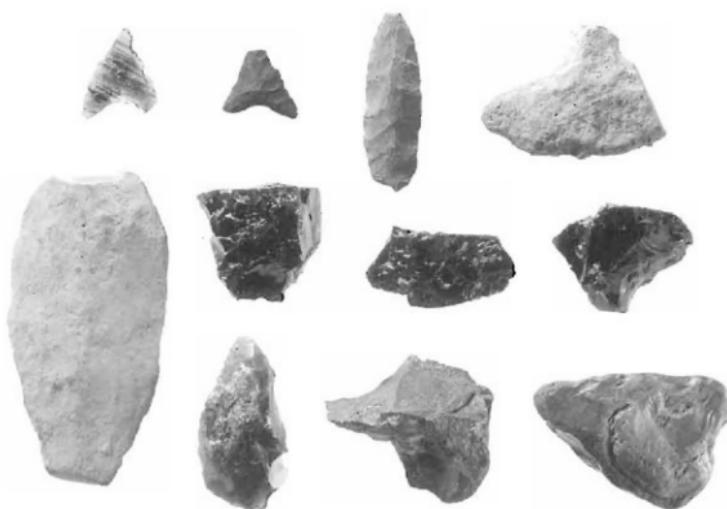
図版32 入ノ洞B遺跡



1号住居跡出土遺物



図版34 入ノ洞B遺跡



縄文石器



第Ⅰ群土器



第Ⅱ群土器(1)

図版36 入ノ洞B遺跡



第Ⅱ群土器(2)



第Ⅲ群土器



遺跡全景

図版38 内野山V遺跡



テストピット完掘状況



5号砾群検出状況



7号砾群検出状況



1号石器ブロック検出状況



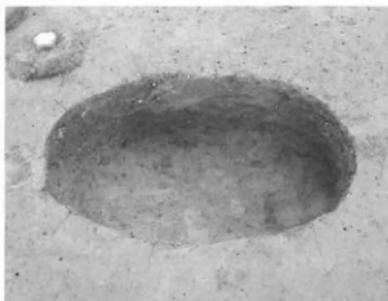
4号砾群検出状況



縄文時代遺物出土状況



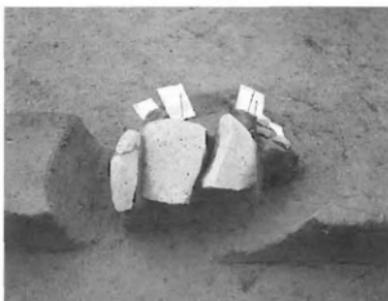
1号焼土完掘状況



1号土坑完掘状況

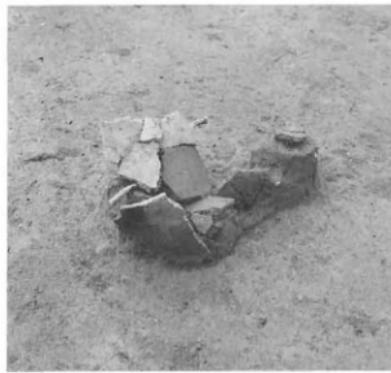


4号土坑周辺遺物出土状況



4号土坑内遺物出土状況

図版40 内野山V遺跡



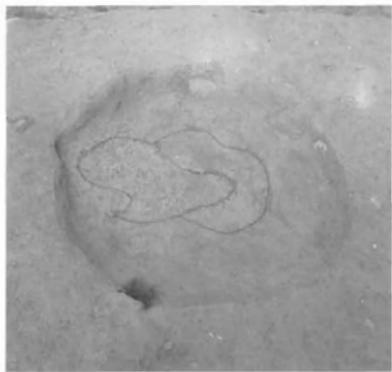
縄文時代 土器出土状況



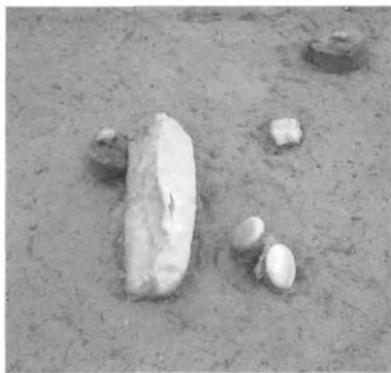
縄文時代 5号集石検出状況



縄文時代 1号集石検出状況



縄文時代 1号集石完掘状況



縄文時代 配石検出状況



縄文時代 炉跡検出状況



縄文石器集中出土土器



縄文石器集中出土石器



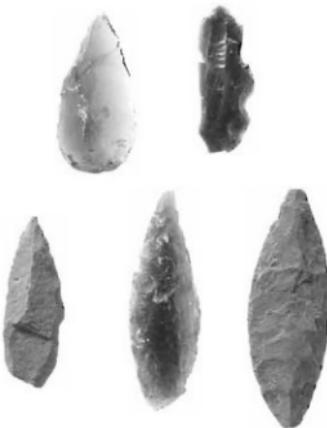
炉跡出土土器



4号土坑出土石器

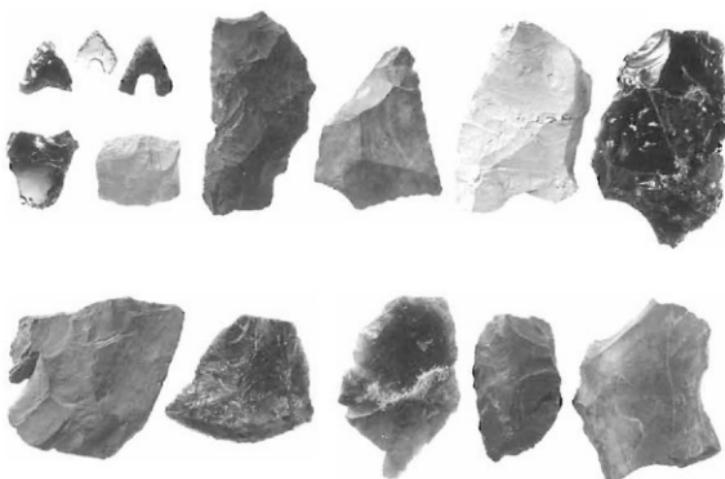


旧石器時代出土石器(削器)



旧石器時代出土石器(尖頭器)

図版42 内野山V遺跡



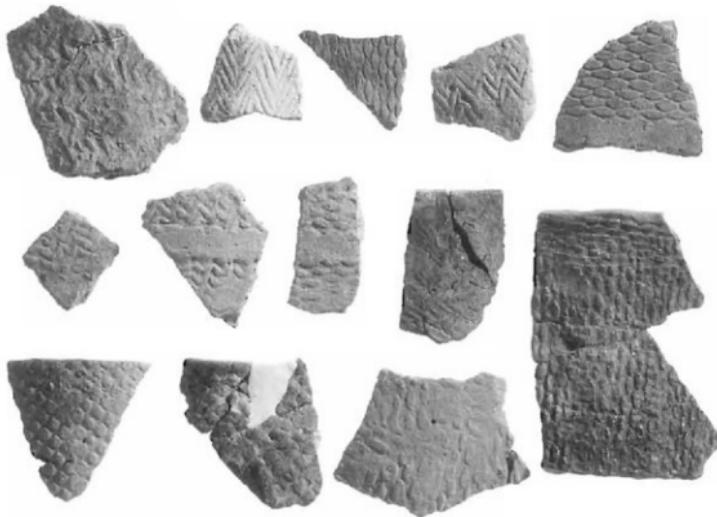
縄文石器(1)



縄文石器(2)

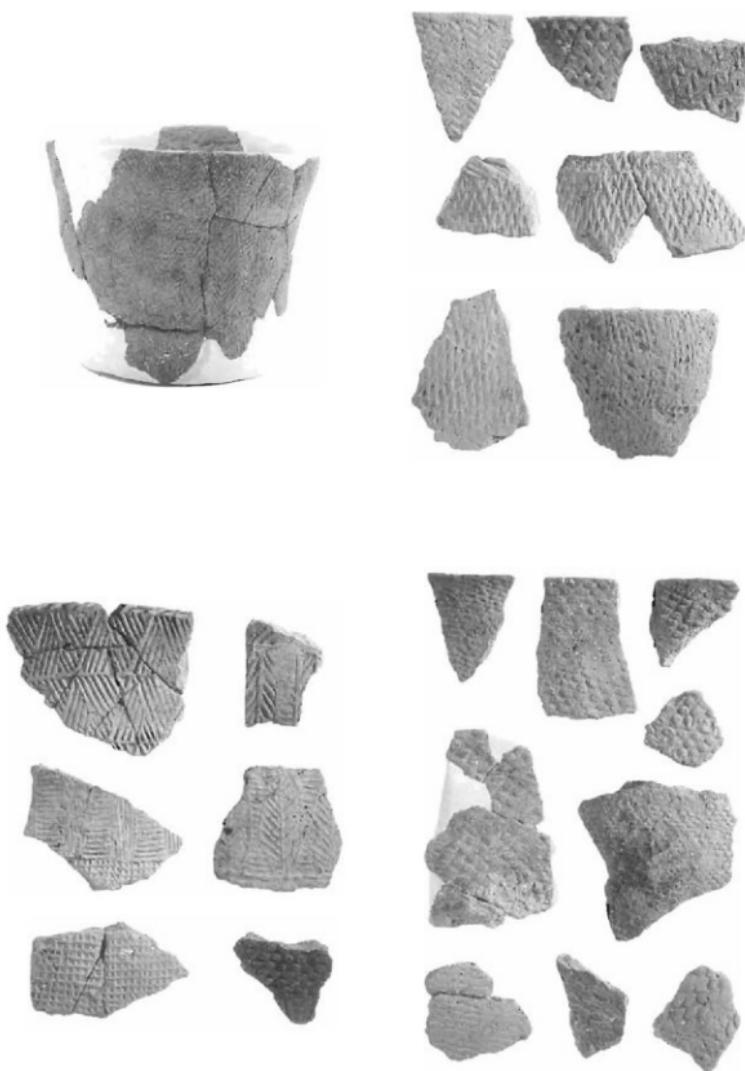


第Ⅰ群土器



第Ⅱ群土器(1)

図版44 内野山V遺跡



第Ⅱ群土器(2)



第III・IV・V・VI群土器

報 告 書 抄 錄

ふりがな	すそのしとみざわ・ももぞののいせきぐん
書名	裾野市富沢・桃園の遺跡群
調査名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	裾野市-5
シリーズ	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第193集
編著者名	糸田泰裕 三好元樹 山下忠男 萩野正裕 小林奈緒子 佐藤里夏
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20 TEL054-262-4261(代表) FAX054-262-4256

発行年月日：2008年9月30日

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第193集

裾野市富沢・桃園の遺跡群

第二東名 No144地点 壇松遺跡

No144-2地点 入ノ洞B遺跡

No144-3地点 内野山V遺跡

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年9月30日発行

編集・発行 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261㈹

FAX 054-262-4266

印 刷 所 松本印刷株式会社

〒410-0311 静岡県沼津市原町中1丁目7-11

TEL 055-967-6155㈹

